

黄表紙集

全


山東京傳作
大極上請合賣
心學早染艸
御手料理御知而已
大悲千禄本
芝全交戯作


喜三二
天明板百人一首
古今狂歌袋
以山東京傳圖寫


戀川春町
天明板五十人一首
吾妻曲狂歌文庫
以山東京傳圖寫

近代日本文學大系　第十二卷目次

目次終

解題

文學博士　笹　川　種　郎

草雙紙のうつりかはり

上方では浮世草紙が製作せられ、八文字屋本が盛行してゐたのに、江戸は猶文學の搖籃期で、稿を刊行せられるものも、極めて幼稚な、子供だましのものに過ぎなかつた。浮世草紙は其の書の性質に依つて唱へられた名稱で、八文字屋本は出版書肆の名を負うたものであるが、江戸に於ける著作は多く表紙の模樣や色や形やに依つて名づけられてゐる。行成本は表紙が紗綾形、或は卍字龜甲形等の所謂行成表紙であるから、しか呼ばれたもので、『酒顛童子』『桃太郎昔話』『夏年中行事』『頼光大合戰』『たからねすみ』『鼠の嫁入』等の御伽噺や、若しくは古淨瑠璃の正本を版行したものである。其の系統を承けたものに赤本があるが、赤本は半紙半截のものよりなり、なほ一層小形の赤い本、若しくは赤豆本のながふるい。『面白本』『山名人ぞろへ』『日本うまそろへ』『新

くしに『ひいな文章草紙』『四天王の始』の類である。半紙半截の赤本は『舌きれ雀』『桃太郎昔噺』『義經島めぐり』『文福茶釜』『金平武者修行』の類で、これ等赤本は繪が主で、文章は極簡單に繪の說明をなしたに過ぎない。畫家としては、近藤清春、鳥居清滿、羽川珍重、奧村政信、西村重長、鳥居清信、山本重春の名が見えてゐるが、繪の說明も恐らく、畫家自身であらう。元祿頃から享保、延享、寛延、寶曆頃までに及んでゐて、一冊の紙數は五帖にて、一冊本が多いが、間々二冊三冊本もある。延享、寛延、寶曆頃には、表紙の色を黑とした、いはゆる黑本又は黑表紙なるものが行はれた。赤本と異なつたところは、文と繪と相待つて一篇を構成した所にある。黑本と相並んで青本即ち黃表紙が行はれたが、黑と青と唯に其の表紙の色を異にするのみで、其の內容は一つにして、黑本にて出したものを更に青本に出し、若しくは青本にて出したものを黑本に出したのもある。黃表紙を又の名、青本と稱するのは、其の初め萌黃表紙であつたからで、次第に青の色が減じて、黃が勝つて來たものと思はれる。

黑本及び青本には御伽噺を取扱つた物もあるが、怪談、傳說、由來、緣起物、軍記物、敵討物類を繪解きする事となつた。畫家には山本義信、鳥居清信、鳥居清滿、鳥居清重、鳥居清經、一筆齋文調、富川房信、富川吟雪、北尾重政、西村重長などがあるが、作者としては丈阿、觀竹、

睦酒亭老人、米山鼎我、圓珍齋、柳川桂子、甚四、琴鶴、畫家の富川吟雪、鳥居清滿などの名が見えてゐるに過ぎない。『近世物之本江戸作者部類』に依ると、此等の値段は、青本、二冊物で十二文、三冊物十八文、黒本で一冊五文、其の後、黄表紙新板一冊八文、二冊物十六文、三冊物二十四文、古板（黒本）一冊七文、二冊物十四文、三冊物二十一文とある。赤本、黒本、青本より合巻物になるまでを總べて草雙紙と稱する。

草雙紙の名稱に就いては諸說がある。『江戸作者部類』に、「この冊子は表紙に至るまで、薄様の漉返紙にて、悪墨のにほひある故に臭草紙の名を負したり。」とあるより、草雙紙は臭雙紙であるとの說も行はれてゐるが、ほんの輕少な草紙と云ふ意味で、此の名稱が用ゐられたと思はれる。

安永四年、戀川春町が『金々先生榮華夢』を著はして、黄表紙は其の面目を一新した。從來のものとは異なりて、輕妙の筆に滑稽を寓し、江戸風の洒脫に頗る垢の拔けたところを見せてから、是れより此の風に倣ふもの續々起り、黄表紙は江戸文學史上に一地位を占めることとなつた。

式亭三馬は其の『稗史億說年代記』に、『金々先生榮華夢』を筆頭にして、名作二十三部の名を擧げてゐる。即ち次の如し。

金々先生榮華夢　　春町作　　安永四年板

高慢齋行脚日記　　同　上　　同五年

桃太郎後日噺	喜三二	同六年	鼻峯高慢男	同上	同上
親敵討腹鼓	同上	同上	二升增鱗組	春町	同上
三幅對紫曾我	同上	同七年	情無盆委記	同上	同八年
虚八百萬八傳	本太郎	同九年	鐘入七人化粧	喜三二	同上
大違寶船	全交	天明元年	長生見度記	喜三二	同三年
啌多雁取帳	馬平人	同上	大従以來記	爲輕	同四年
大悲千禄本	全交	同五年	莫切自根金生木	三和	同上
悦贔屓蝦夷押領	春町	同八年	文武二道萬石通	喜三二	同上
鸚鵡返文武二道	春町	寛政元年	拜壽仁王參	全交	同上
遊妓寔卵角文字	同上	同二年	鼻下長物語	同上	同四年
十四傾城腹の内	同上	同五年			

此等の作は必ずしも盡く他の諸作に傑れたものとは云へない、山東京傳の諸作中には決して此等に對して遜色のない名作もあつて、二十三部の稱は、三馬の一家言に過ぎないが、黄表紙全盛時代と、其の傑れた作家は殆んど此に網羅してゐる。春町、喜三二、全交はいづれも黄表紙作家

としての優秀なものであつた。

滑稽輕妙の黄表紙流行してより、黒本は次第に凋落し、黄表紙は或は諷刺に、或は穿ちに大いに其の本領を發揮することとなつた。安永六年板の喜三二作『新板桃太郎』は袋入の初めと稱せられ、これよりして袋入の出るのも數多くなり、天明元年に四方山人は『菊壽草』を、同二年に『岡目八目』を出して、草雙紙の評判を試みた。『江戸作者部類』に、「かくて明和の季より草雙紙の作、滑稽を旨とせしかば、大人君子も是れをもてあそぶものあるにより、いよ／＼世に行はれて、黄外題を四遍の色摺にしたり、その中に殊にあたり作の新板は、大半紙を二つ切に摺りて薄柿色の一重表紙をかけ、色ずりの袋入にして、三冊を一冊に合卷にして、價或は五十文六十四文にも賣りけりこは天明中の事なりし、かくて寛政の初めより、草ざうしの價又登りて、黄表紙は一卷十文（一冊物二十文、三冊物三十文）、黒表紙は一卷（一冊物十六文、三冊物二十四文）になりぬ」とあるやうに、赤本黒本の幼稚時代は既に過ぎて、黄表紙は江戸の文藝となつた。

黄表紙は江戸人らしい戲作である。深みもなく、辛辣もなく、あつさりした、后の殘らないところ、輕口滑稽なところに其の長所があつた。通人横行の時代には通や穿ちを主とし、一轉しては時事の諷刺となり、再轉しては敎訓を寓するを專らとして、或は市井坊間の流行を當込み、或

は作物斷に滑稽の趣向を凝らした。其の全盛期は戀川春町、喜三二、芝全交、市場通笑、山東京傳、四方山人、伊庭可笑、南陀伽紫蘭（窪俊滿）、唐來三和等が活躍して、盛んに洒落のめしたのである。全交の『通人いろは短歌』『通一聲女暫』、可笑の『外にはないぞ極通人由來』『通人寶袋』の類は通人の穿ちで、喜三二の『文武二道萬石通』、春町の『鸚鵡返文武二道』、京傳の『孔子縞于時藍染』『將門秀郷時代世話二挺鼓』、三和の『天下一面鏡梅鉢』等は時事を諷刺したものであつた。喜三二は主家の咎むる所となりて、筆を戲作に絶ち、春町は累を受けんとした間に沒し、『天下一面鏡梅鉢』は絶版を命ぜられ、琴好の『世直大明神金藏之由來黑白水鏡』は絶版の擧句に、作者琴好及び畫工北尾政演は罰せられた。京傳の『大極上請合賣心學早染草』出でて、善玉惡玉を以て教訓を寓し、大當りを取つてから、此の種の黄表紙が行はれて、やゝ理窟に陷つた弊があつた。寛政元年に、三河島不動尊の靈驗あらたなりとて參詣者群をなすと、京傳は『三河島御不動記』（『三河後風土記』をもぢつたもの）を作り、同二年、深川永代寺境内に壬生狂言の興行ありて、市中に流行すると、大榮山人（曲亭馬琴）に『廿日餘四十兩盡用而二分狂言』の著あり、寛政五年に、谷中七福神の參詣はじまると、京傳は『花之笑七福參詣』を述作するなど、市井の流行を當込んだのである。寛政の初めは京傳の獨舞臺の觀があつたが、其の後もつぱら教訓物に筆を染めて振はず、三馬、一九

これについて多くの著作があつた。然し黄表紙も理窟めいたもの、化物噺となりては、又安永天明の奇觀なく、寛政七年、楚滿人が「敵討義女英」を著はし、廢絶せる敵討物を中興してから、敵討物の全盛となり、文化年間に入りては、京傳、馬琴さへも敵討物に筆を執るに至り、遂に三馬をして、「親讐胯膏藥」に、

前の世で作りたる罪すれ、此世で償はせ、是非一度は巡ふ、十二因縁因果は廻る車の如く、親を討たれ子を失ひ、仇を報ふと思ひ、亦た後の世に生れ来て、討てば復た討たれ、討たれば報ふ、廻る故に毎年毎歳草雙紙の趣向に敵討の種へきると云ふ事なし、此敵討草の蔓へる迄は、生れ替りゝゝて主となり家来となり、親子となり夫婦となりて苦しむ、又敵討の趣向も、種の尽きる迄は、善板となり古板となり、焼直しとなり、ないかぶせとなりて、末々に苦しむは、是も作者と生れたる因果なるべし。

と云はしむるに至つた。

黄表紙の外形も時代に依りて次第に移り變つて來た。天明の初めには袋入漸く多く、一部五十文乃至六十四文づゝとなり、其の後袋入本の表紙の普請なるものは茶色となり、享和二年には、京傳其の著作中の、「通氣智之錢光記」「吞込多靈寶記」「賢愚湊錢湯新話」「稲荷花九悲利倉」の四部を春夏秋冬の四季に準へて、上紙摺にて厚表紙を附し合卷したるものを發行した。享和三年、黄

表紙の佳作中數種を選び、半紙に摺りて無地の厚表紙を附し袋入となして、京坂地方へ賣出し、之を上紙摺と稱した。其の價は一部一匁より一匁五分であつた。又袋入の上本も出來た。綴入に摺りて其の形も大きく、表紙も厚くあつた。合卷の初めは文化三年に三馬が作りたる「雷太郎強惡物語」で、十冊物を合卷したのである。之より合卷多く行はるゝこととなり、草雙紙の體裁は一變したのである。（作者部類）に云ふ。

かくて文化の年よりこれらのよみ本ものを半紙に摺り、無地の厚表紙をかけて袋入にしたるを上紙摺と唱へて、京坂の書賈へ遣して、彼所の貸本屋へ賣らせ、こゝにても二三百部は在徉に賣りたれども、價の貴ければにや、草雙紙の一部前子賣れたるには似ざりき。（上紙摺は、三冊を合本二冊三冊にして、一匁より一匁五分の價なり。）扨又文化の中年より二代目西村屋與八（鱗形屋孫兵衛の二男にして、西村屋の壻養子になりしものなり）が初めて思ひ起して、草雙紙を小半紙に摺りて、三冊物六冊物を、二冊三冊の合卷にして、ことに錦はしき摺りつけ表紙をかけて賣出せしが、婦幼の徒に愛玩せられて、いたく行はれしかば、是よりの後、地本問屋等、皆合卷摺付の表紙にせざるはなし。そが中に上紙摺と唱ふるは、購入のみよき紙に摺出すもあれ、價は一匁より一匁五分に至る。これを合卷と唱へて今に至れり。是よりの後、古表紙の草雙紙、本だけ大抵なりはすなれて、皆々田舍の書賈へ遣すのみなり。初め行はれし表紙より遂に圖文其の趣を易へて美を盡したり。

三馬は、一富が草雙紙の作者だから傑は知れてるやす。あんまり白眞おどしに、おんぶんかんはやめなせへ。それだから畝時に世を奪はれた。喜三二、春町、全交、月池、三和と此五大家を調合して書いて見れば間違なし、大きにお世話だと云ふだらう。」（「親讐胯膏薬」）と曲亭馬琴を嘲して、黄表紙の本領を説いてゐるが、黄表紙の妙は輕妙洒脱にして滑稽と穿ちとを持つた戯作と云ふ點にある。時事を諷刺するにしても、教訓を説くにしても、市井の雜事を取扱ふにしても、此の特色がなくてはならぬ。北尾政演畫作と銘打つた京傳の「手前勝手御存商賣物」に、

青本は貴賤の別なく人の目を喜ばせ、世間に賢く、穿を専らとして當世の穴を捜し、世俗とかくあつて、己……

と云へるは、黄表紙の性質を善く説明してゐる。蓋し江戸人ならでは出來ぬ作物である。

末歡娘妓茶目傘（ちやのめのからかさ）

作名を芝全交、又司馬全交、或は月池と稱した。作者部類に「和漢ともに學問はなけれども、當世の上手にて當り作拔なからず、安永中より寛政に至るまで春毎に著作あり、通油町なる鶴屋喜右衛門が得意の作者にて多く刊行したり。」とある中に寛政壬子癸丑年の新板、十四傾城腹の内「鼻下長物語」「國從寄自見明君御渡申」（並に北尾重政畫）、「三曲物」、「鶴屋喜右衛門板也」。時好に適ひて多く賣れたりと云ふ、寛政七八年のころ歿しぬ。」とあるが、寛政六年板の「宵へ首鼓尾」は遺稿であるから、其の前年あたりに歿したものであらう。黄表紙作家として、時には名を得てゐた。「大違寶船」「通一騎夜討」「□□七癖人」「□□□□大悲千禄本」「通言武者揃」「□□拜寺仁王□」等の著作あり、殊に「大悲千禄本」は黄表紙中の優れた名作と稱せらる。

此の書は助六の狂言を裏にもぢつたもので、其の意休を千の利休と見立てゝの茶番沙汰。紫帛紗がすぐに助六が鉢巻、頭ばかり伊休が髭の噂に差出したはよいが、身體見えては切ないと、鉢巻が袴で隠したは、案じた様だがやつはり切なし、開男を押したやうな手前、皆々感心する」と云ふやうな趣向に落を取つてゐる。

文武二道万石通（どほし）

喜三二作、行麿畫。名作二十三部の一。天明八年板。

喜三二は平澤平格（又平角）と云ひ、後に平荷と改む。名は常富、亀山人、又韓山人と號す。狂歌にては淺黄裏成、其の後手柄岡持と改め、俳諧にては月成、狂歌にては韓長齢と云ふ。又號、道陀樓麻阿、虎耳宦、朋誠堂等の別號もある。享保二十年に生れ、秋田藩主佐竹侯の留守居を勤む。戯作を好んで、喜三二を作名とする。鼻峯

吉備男」「桃太郎後日噺」「親敵討腹鞁」「案内手本通人蔵」「鸚鵡人心化草」「長生見度記」等の名作がある。文化十年五月二十日、享年七十九歳にて歿した。其の著「亀山人家妖」に云ふ。

喜三二が心の友に亀山人を始め、狂歌連の手柄岡持、細見の序を書く明誠堂など集合(よりあひ)、化物の相談する、

岡持が明誠堂か喜三二が亀山人かと聞くもきまぐれさ。

本書は「古今未曾の大流行にて、早春より買人にして市中を賑りあるきたり。赤本の作ありてより以来、かくあり行はれし者は、前代未聞の事なりと云ふ」と作者部類にも云はれたほどに売行きよかつたもので、松平定信の文武奨励を諷刺したものである。

其れが花鳥風月抔は文道へ引込う、巣将棋、風月、同様は無理に武へ奉公させるはずもない。同じ浄瑠璃でも義太夫節の方へ引込み、豊後と河東は文へ入れずばなるまい、楊弓小弓あぐりの三つは何と形をつけた物だ。

「楊弓は弓の字故、さしづめ武に記し、小鼓は不覚浄なれど文に致しませう。あぐりは行司の預りだ。」

「医者坊主の方には、易者、書画、同…、俳諧武士の方へ記しませう。」

以下当時の一班を窺ふに足りる。

喜三二は此の作の為に主家より圧迫を受け、遂に創作界から退くに至つたので、世の才筆は此の為に又見る由もなくなつた。

将門秀郷 時代世話二挺鼓

京傳作、石居畫。二冊。天明八年版。

二挺鼓は安永の頃から流行したので、作者は題名を之に取つたのである。神明前のなごやで賣る早業八人前と云ふ看おろし、八人藝、八角眼鏡などの名が見えてある。

石上三之助辛抱

山下石上堂作。三冊。寛政二年版。

作者山下石上、通稱は鶴屋吉郎兵衛、市中山人と號す。山形藩士で江戸在府であつた。鳥山石燕風の畫を描いた。著はす所の黄表紙に、「世中貴軍談」、「萬徳入教三清引」、「軍略深雪武田菱」、「市上竹於多福神」、「萬福長者傳」、『旨趣向調牡丹鉾』、「大福長者藏」、「百福壽老人」、「多来福萬兩分限」、「長生富貴 福々世界」、「悴人寶由吹」、「天運富貴 生金花木植」、『金春徳和歌隆居』、「黄金長者 白銀長者」、「二幅對榮花春袋」、「孝行因子息金指」、「安化富貴 富貴」、「富貴自在金年玉」等あり、いづれも富貴福徳のお目出たづくしである。

心學もどきの青本で、

「胸算（こま）ざん、心持が大事なれば、人にはそのことだが、どの胸算を割つて見ても、心持に違つたことはない。ただ正直なばかりだ。是につけても人は正直に眞直ながよい」

と云へる類である。

内辨慶堪忍帳

櫻川慈悲成作。歌川豊國畫。三冊。寛政九年板。

慈悲成は八尾氏、通稱大五郎、芝全交、或は晋亭と號す。金工彦浦知泉の門に入り、名を則久と云ひ、芝宇田川町に住す。「作者部類」によると、伊萬利燒などの陶器をひさぐ小店の主人なりとある。狂歌をよみて、親の慈悲成と稱し、櫻川杜芳の門人となりて櫻川とあらたむ。落語に長じ、可樂、夢羅久、馬馬と頡頏し、落語界の中興と稱せらる。「辨慶天窓百房丈」を初めに、「御異見他之三升」「持丸鐘者鐘居」（二日替）「是色青御存知」「吉原居傳」（廓芝居）「大馬鹿撥目」「化物夜更非見世」（作）「道行太郎香物語」「手遊良子虎之巻」「戀女房染分手綱」「夏祭夜團七」「御存之化物」（朝比奈先登）「七人上戸」「熊見全平午房」「化物年始迷」「第一御徳用物」「敵討伊吹上下巻」「鎌倉頭多意氣」「鈴木五房爰」「洙守物語」「古手要品玉手箱」「桃太郎大江山入」「大黒に物はなし」「達人相良捿」等多々あるが、御趣向もの物語が多く、大した當り作もなかつた。

助六のおれが喧嘩を出來れ、からも堪忍袋の堪忍がいろ〳〵ありて、助六の友切丸取返しに移る。

夫南木（それはくすのき これはうそのき）侠（きやん）太平記向鉢卷

式亭三馬作、歌川豊國畫。三冊。寛政十一年板。

前篇「内辨慶堪忍袋」後篇「侠太平記向鉢卷」

前年蔦人足の間に爭鬪の起りたる事實を題材として、嘘氣茶右衞門の數々の軍界に滑稽を盡した佳作である。其の作中によ組の鳶を誹謗した點があつたとて、正月五日、三馬及び書肆西宮新六の家はよ組鳶人足の爲に破壞せられ、人足數名は之に依りて入牢し、新六は過料、三馬は手鎖五十日に處せられた。然し此のことありたるため、三馬は大いに名を高めたと云ふ因縁つきの著作である。標題の割註は「俗名茶漬記」のよみを借用したのだ。

着色貫帳　呑込多寶縁記

京傳作、豐國畫。三冊。享和二年板。

寺々の開帳多く、寶物の展觀ありたるに因み、作者一流の趣向を凝らした珍品である。

「通氣智之錢光記」を春、此の書を夏、「賢愚湊錢湯新話」を秋、「桔梗花大悲利益」を冬に準へ、同時に出板したことは前に云つた通りである。此の四部を上紙に摺り、厚表紙をつけて合卷とし、表紙に此の年の干支に因みて大を摺り出してゐる。

久帖直錦冠堂　稗史億說年代記

三馬畫作。享和二年板。

天明三年板三冊、櫻川杜芳作、北尾政演畫の「草雙紙年代記」(二冊)に依りて、さらに一段と工夫をもちゐた力作である。文と畫とは、すべて、諸家の特色を發揮するをつとめ、地本問屋の目印、諸作者名寄、倭畫巧名盡、

名作青本略記等を挙げ、草双紙変遷の跡として極めて重要なものである。名作二十三篇中、作者の名に誤りあるは、すべて、前に訂正して置いた。

丹緑本のことは御伽草子に、「鉢かづき」二巻あり、江戸時代にも重版されてゐるし、赤本にも「はちかづきひめ」二巻がある。三馬は此の古くから普く知られた題材を取りて、各時代に於ける文章の調子を巧みに摸倣し、新たに一編を成したのであるから、「又焼直」と冠したのである。柱書に小野小町と四位少将、大伴黒主との間に起つた情事の紛糾を主題として、草双紙のうつりかはりを説明してゐるが、三馬は周知の御伽草紙に依つて之を試みたのである。

式亭作 重政画 世帯評判記

式亭三馬作、北尾重政画、三冊、享和二年板。

序文に、

つらつら古今を考ふるに、人間一生は一つの芝居なり。一年四季の替を狂言、元日の三番叟より大三十日の今日はこれぎりまで、修羅場あれば、愁歎場あり、濡場あれば、道行あり。九尺二間の本舞台、紫衣夜の埒もとより、背景の押入れ、土間桟敷き、人間僅かな役積き、何ぞ作者の五本を求めん。こゝをもて一日替狂言をひいて、[illegible]の[illegible]替多道具を取出し、假に芝居の評判記になぞらへ、即ち式亭往三冊の草双紙を著る。むかし自笑、今の琴、道化と云ふも不束な工夫の趣向斯くの如し。

とあるが如く、[illegible]道具を役者に見立てたものであるが、構想の少ない駄作の事であるから、筋書も下手だし、

文句もしつつこい。

紅血欠血往古噺

史岡作、鳥居清滿畫、二冊、出板年代不明。

作者史岡は觀水堂と號す。明和二年板の「護遑濶一代武傳」に、八十翁史岡、同四年板の「□度一代記」に、八十二翁史岡、同五年板の「□度道加」に、八十三翁史岡とあれば、其の在世の年代は知るに足りる。同年板の「□夢頓鍋塔八人」及び「大鳥毛庭雀」に八十六翁とあるは、徒らに齢を高くして、吹聽したのに過ぎない。同七年にも五部の黒本がある。此の作家には多くの黒本の他に青本の著作も相當にある。

紅血欠血の青本には、寛延元年板、山本重春畫の「紅血岡血昔物語」、安永三年板の「紅皿缺皿」がある。宮子と雪子とを取扱つた御伽噺一流のものである。

金々先生榮花夢

戀川春町畫作、二冊、安永四年板。

春町は倉橋氏、名は格、通稱壽平、別に壽山人、春町坊と號す。狂歌には酒上不埒と稱した。松平安房守の家臣で、小石川春日町に住したので、畧して戀川春町と號した。鳥山石燕に從ひて書を學び、後、勝川春章の門に入つたが其の作は多く自畫である。此の書は彼作の趣向を一變し、黄表紙に一新紀元を劃したものである。此

の作者には、此の作の他に「高慢斎行脚日記」「三升増鱗祖」「三幅対紫曽我」「無益委記」「金々先生再寝夢」「悦贔屓蝦夷押領」「鸚鵡返文武二道」等幾多の作がある。「鸚鵡返文武二道」は、前年喜三二の述作した「文武二道万石通」の後編に擬し、時勢を諷刺した名作にて、前編に増れる賓行であつたが、主家の譴責を受けたのみならず、一身上にも累を及ぼさんとしたが、偶々寛政元年七月七日歿した、享年四十六、四谷新宿浄光寺に葬り、法諡を寂静院廓誉湛水居士と云ふ。「生涯苦楽、四十六年、即今乾坤、借然帰天」とは其の辞世である。一説に自殺したとも噂されてゐるが明らかでない。

此の書が盧生邯鄲の夢に擬したことは論ないが、金兵衛の頂栄に當時の流行語を以て、箇分の夜ごと[illegible]を代ふるに金真を以てしたのは、紀文などの豪奢を此に利かせたのであらう。奈早女の挟み言葉は「一両百両さん」来なさいと云ふ義で、當時流行したものと見える。此等の點に於て此の書は初めて實際の描寫をしたのである。寛政六年蔦屋重三郎は之を再板してゐるが、春町の序に道笑の名を記したのに、どう云ふわけであらう。

高慢斎行脚日記

春町の自作にて自画、安永五年板。名作二十三部の一。

きん〳〵。先生あれば、此にはきん〳〵天狗、きん〳〵といふ身にもある、お洒落の通語である。

「おてう坊、此後は已様がわつさりと河東にして、十寸見といふ所をきかつし。」

「□」は今の義太夫の[illegible]の大汗さ。

[illegible] 高慢斎行脚日記

の吉原に通をすれば、

「一言も内藤新宿馬糞のやうなことだ。」

などの酒落もある。増上慢への諷刺を旨とした著である。

鼻峯高慢男

喜三二作、春町畫、二冊、安永六年板、名作二十三部の一。當時のうちに増上慢を戒めた作である。

「河東を語つてお聞かせよ。」

「河東はいやならありますを、おひきなんし、拜みんす。」

以て時代の好尚を知るに足りる。

敵討女鉢木

喜三二作、畫は鳥居清經、三冊、安永六年板。喜三二は蓬萊山人と稱す。其の傳記は明らかでない。此の書一に「お竹大日利生記」と稱す。此の年芝愛宕山境内にて、出羽國湯殿山黄金堂女良坊佐久間お竹大日如來の開帳があつたので、これを當込んだ敵討物である。お竹大日如來の傳記と鉢木とをつき交ぜた戯作である。

桃太郎後日噺

喜三二作、春町畫、二冊、安永六年板、名作二十三部の一。

本段白譚の中から存じの外なるものが出て、口上を云ふところが此の書の身上であらう。そこに黄表紙の黄表紙たるところがある。

観敵討腹鼓（おへのかたきうつやはらつゞみ）

喜三二作、春町畫、三冊、安永六年板、名作二十三部の一。

兎と狸と狐との間にこんがらかつた敵討話や因縁話を織り交ぜて、當時洒落を極めてある。高島の中田屋島西の爲めに宣傳した作とおぼしい。

辭闘戰新根（ことばたゝかひあたらしいのね）

恋川春町作、二冊、安永七年板。

當世流行の口上、流行言葉をならべましたるを、正本の趣向、萬事、當時、公平、理屈なども言葉と人物とにして取りとする。兼ねだ家をおまけに、勝負を致すを以て終りとする。

當世流行の口上申述、流行言葉いろいろ取りを家の趣向として書き出したり。其趣意は明和から安永の頃の流行

平題　流行言葉目録　新版大當　流行言葉新根

假にも賤しき音曲をなさず、淨雪物語、猿源氏のたぐひ昔古歌を用ゐかきたり。然れば汝等如き者、此の節草紙に書き乘せらるゝを有難しと思ひ、以後をきつとつゝしみ居らうぞ。憎さもにくい奴等なれども、これをなくしては草雙紙の趣向はたゝぬわやい。

とあるにて、大體の趣意が知られる。

三幅對紫曾我

春町畫作、三冊、安永七年板。名作二十三部の一。

さる大名の奥方を諷刺したもので、富本節の流行をも當込んでゐる。末に金々先生、高慢齋、腹鼓等が此の作者の著作のことを述べ立てて本書の好評を希望してゐる。

夫は楠木 是は嘘氣 楠無益委記（くすのきむだるき）

春町畫作。袋入三冊、安永八年板。名作二十三部の一。「長生見度記」「大從以來記」とともに三未來記の一と稱せられ、此の書其の先驅をなしてゐる。「四つ手車出來る、急ぐ時は油代をはずむ。」「坊主天下はれて女郎を買ひ、俗はかへつて陰馬を買ふ。」「猫も杓子も儒者となる。」「杓子さんは一本足で、さぞちよつ〳〵ところびなさらう。」「江戸節もまだ〳〵低しと高くとまつて、催馬樂を謠ふ。」「イヨ〳〵賤いと申します。」など思はず破顔微笑させられる。

怪談豆人形

文渓堂作、鳥居清經畫。二冊、安永八年板。

文渓堂は米山氏、又田蔵とも稱す、質屋を業とした。著はすところ、「浮世風俗女敵討」「後三年松島八景」「其ノ奥州古實物語」「嘉々三寶荊之鳩竹」「大中黒名香勝負」「通道御本尼」「窮路蟲之巻」「鎌倉山紅葉落名」「十二支具足太平記」などがある。

小人島の化物噺なるが、洒落も描く、穿ちもなく、一向にたわいもない。

金銀先生再寢夢（またねのゆめ）

春町畫作、二冊、安永八年板。

前篇はなかなかに凝ったものだが、何となく附焼刃のところがあって、「金々先生栄花夢」のすらりとしたのに比べると劣るところはある。二人の息子は奴となり、小判・北斗は集めて先生となるなど、随分苦しい洒落だ。

通鬼髪子の美女

喜三二作、北尾重政畫、二冊、安永九年板。

青山堂とは富士屋雁金屋伊兵衛の事である。俗説、名は安兵衛、又は易兵衛と作る。當作では青山堂の他に鶴屋

附録　安永八年　金々先生再寢夢　通一髪子の美女

尚左堂と稱した。畫は北尾重政に從ひ、後に勝川春章に學んだ。初め本所に住し、後に通油町に移つた。狂歌では一節千杖と稱し、狂歌の判者となつた。文政三年九月二十日、六十四歳にて歿した。戯作の作には「[illegible]」（[illegible]）る。著は寛政の頃に、「吉原[illegible]之[illegible]多」「[illegible]」「[illegible]記」「[illegible]目[illegible]」「吉野の山[illegible]の左衛兵衛商[illegible]」「他名[illegible]達下谷」等がある。畫工北川豊章は、歌麿の前名である。

本書は本所一ツ目にありたる[illegible]のことを書いたもので、今も同所回向院に[illegible]光寺如來の[illegible]があつたが、これを書込んだのであるが、[illegible]二枚のところは[illegible]を五ツに切りしてあるは、其の時の[illegible]の[illegible]であつたのである。

扨（さても）化（ばけたり）狐通（きつねのつう）人（じん）

伊庭可笑作、[illegible]畫、二冊、安永九年板。

伊庭可笑、名は猪與八、喜亭と號す。天明三年六月二日歿した、享年三十七、四谷大木戸理性寺に葬る。著には「化物世[illegible]の[illegible]本」（化物[illegible]）十所、「今昔宿我面影」「猿間違矢口尊」「[illegible]吉呂利山[illegible]味噌」「身[illegible]大通[illegible]界[illegible]記」「古實家七部[illegible]」「初夢寶船の白拍子」「[illegible]毛生[illegible]郎月」「[illegible]料はなし」「[illegible]通人由來」「朝比奈[illegible]子[illegible]」「[illegible]」「[illegible]菊壽杯」（上[illegible]）山吹色」「[illegible]想大[illegible]」「東[illegible]大津名物」「紙腎身上[illegible]」「化物[illegible]人娘」「敵討[illegible]河花」「交[illegible]」「[illegible]田石千[illegible]」「[illegible]名[illegible]江戸紫」「通鉄砂法金大第」「[illegible]多[illegible]奇紗」「[illegible]通[illegible]労物語」「吉[illegible]郎」「敵討[illegible]分手綱」「[illegible]者五人娘」「珍説[illegible]」「祝[illegible]壽[illegible]」等がある。

「伊勢屋、稲荷に犬の糞」と云はれた如く、江戸には稲荷が多かつた、その稲荷の流行したのを當込んだ作である。

近頃島巡り

通笑作、鳥居清長畫、三冊、安永九年板。

通笑は市場氏、名は寧一、字は子彦、通稱小平[illegible]と云ひ、俳名を橘雫と稱し、教訓亭と號す、通油町に住し、一生獨身を以て終つた。文化九年八月二十七日歿した、享年七十四、淺草松山町[illegible]吉寺にはうむる。夫具屋をなし[illegible]、著はす所の戲作に、『嘘言彌三郎傾城買』、『[illegible]なし正直者』、『[illegible]日々々[illegible]中島』、『日[illegible]の[illegible]人』、『[illegible]明[illegible]人[illegible]仙人』、『[illegible]を前の[illegible]』、『捨木[illegible]郎元服姿』、『一生徳兵[illegible]三ヶ[illegible]』、『[illegible]度目の龍宮』、『[illegible]以[illegible]世六』、『三世左右大[illegible]』、『[illegible]に有[illegible]』、『本の能見世物』、『傾城買三界[illegible]』、『[illegible]来の[illegible]』、『[illegible]天狗』、『[illegible]之六[illegible]』、『[illegible]仲命の洗濯』、『女[illegible]汁』、[illegible]年房、其多[illegible]、[illegible]世之[illegible]、[illegible]、『[illegible]の[illegible]人』、『[illegible]之[illegible]』、[illegible]、『[illegible]行[illegible]』、[illegible]、『[illegible]紋所』、『花の春上下[illegible]』、[illegible]、『[illegible]江戸見物』、『[illegible]人』、『[illegible]生虎之巻』、『[illegible]草[illegible]』、[illegible]等である。

小[illegible]云ひ[illegible]の本[illegible]みた者が島々を廻ると云ふ洒落で、[illegible]子の[illegible]にて[illegible]名[illegible]を[illegible]なし」などの洒落を連發して、「夢[illegible]見れば大[illegible]、[illegible]もなし子[illegible]もなし、[illegible]の風な

ら男なら一つとして言分なし。」と云ふに終つてゐる。

惜口返答返し

通笑作、清長画、袋入二冊、安永九年板。

昔自慢の老人に対する、若いものゝ返答返しを趣向にしたものだから、古今の比較を見るに[illegible]い、俳優、遊女、花見、衣装、音信、方士より器具、祭禮、活花にまで及んで居る。

本の能見世物

通笑作、清長画、三冊、安永九年板。

鬼の子や大蛇の見世物に失敗した男が小人島に渡り、相撲取となつて、見世物扱ひにされると云ふ、飛んだ気のよい作、平凡なものである。

瀧返柳黒髪

喜三二作、北尾重政畫、三冊、天明元年板。安永九年板の「鐘入七人化粧」（袋入三冊）の外題替で、名作二十三部の一。

長唄の所作事ありて、七人の鐘入りと云ふ奇抜な趣向、違ひし材料でいづれも長唄物たるところに、作者の苦

心がある。可笑、通笑、文溪堂の凡作などとは、自ら選を異にしてゐる。

當世大通佛(ぶつ)買帳

芝全交作、重政畫。三冊、天明元年板。

信州刈萱山西光寺親子地藏が目黒不動にて開帳の折に、坊主どもが品川に浮れた狂態を諷刺したもので、松若なる遊女を連れ出した一條などは、多分實際の事柄であつたのであらう。とにかく頗る通なもので、夫よ女ゆゑには石となつたる地藏もあり、博多の帶は赤くなる、天秤棒は上へ反る、飛んだ茶釜は藥罐と化ける、目黒の餅は花となる。と云ふ無間の羽根を撞くところなど息もつかせぬ面白味がある。全交は春町、喜三二と共に青本作家の名人である。

通(つうの)一(ひと)聲(こゑ)女(をんな)暫(しばらく)

全交作、重政畫。三冊、天明元年板。

西行、江口、茨木などを題材にして、暫(しばらく)のつらねまでを捩ねて、お客と遊女とのいきさつを洒落のめしたものである。

息子一粒(りふ)萬金談

喜三二作、北尾政演畫。二冊、天明元年板。

骨董道樂を目刺したものと思はれる。

四天王通仕立

是和斎作、春朗畫。二冊、天明元年板。

是和斎、春町ともに畫工高嵩谷北窓の事である。北窓は中島氏、名は嵩之、勝川春章、狩野友川、司馬江漢等の門に入り、畫名頗る高く、筆力雄健であつた。嘉永元年四月十八日、九十歳にて歿した。淺草の誓願寺に葬る。これわいせい」と云ふ唄の囃子詞が流行したのを、取りて戯號としたと云ふことである。此の作のほかに『當世有難通一字』がある。

美濃市と云ふ座頭が、當世通人の色里通ひを四天王に見立てて語ると云ふ筋、袋綴には相變らず炭木を當て込んでゐる。

通増安宅關

作者不詳、清長畫。二冊、天明元年板。

富樫の組下塚見古之丞に通辭を賄りて義經主從は安々と安宅の關を越える。藤原秀衡は梶原景時を抱き込んで義經と景時との仲直りをさせ、靜御前が娘道成寺を踊り、辨慶と海尊とが聞いたか坊主をつとめて、末はめでた

しるまでに終ると云ふ、至極あつさりしたもの。

（初昔男）通風伊勢物語

可笑作、清長畫、三冊、天明三年板。

丁稚二人の心がけの善いのと、悪いのとを對照して書いたもので、一向に面白味がない。

夫來以來記

市場通笑作、喜多川歌麿畫、三冊、天明四年板。名作二十三部の一。

作者竹杖爲輕は森羅亭萬象の事にして、中原氏、名を中良、字を虎臣と云ふ。晩年は森島中良と稱して、蘭醫桂川甫周の弟で、蘭學者である。桂林と號し、狂名を竹杖爲輕と云ふ。平賀源内の門に入りて、作名を森羅萬象と稱し、淨瑠璃の作もある。源内の作と云はれる所千代傳も此の人の代作である。後に二世風來山人、二世天竺老人の號を襲ひ、又[illegible]の門に入り月池老人、森羅亭萬象と云ひ、其の後萬象亭の號を門人七珍萬寶に讓りて、萬象亭と稱した。文化七年歿した、享年五十五、芝二本榎上行寺に葬る。名は寸所、[illegible]い。門人に感和亭鬼武、[illegible]等がある。[illegible]「河房者宗待」[illegible]「無束話」[illegible]

此の書は、[illegible]の「長生見度記」の後出について作つたもので、[illegible]

[illegible]四方山人を添へ、南畝に、杜芳を[illegible]

ゐる。

葛西へ肥取の迎へに舟で行く、冬大根何百本、其外取賃何程と運上を出して頼まねば、むさい物をいやで御座るとこ、中々に取らず、所々の大屋は肥取にとられる運上に大き儀なり。

の一條の如きは、今日を道破してゐる。

夫は小倉山 是は鎌倉山 景清百人一首

喜三二作、重政畫、二冊、天明二年板。

惡七兵衛景清の牢繋を、當世風に面白く書いたもので、十八大通の隨一大和屋文魚の名や、本田頭のことなども見えてゐる。

手前勝手 御存商賣物

北尾政演（京傳）畫作。三冊、天明二年板。

八文字屋の讀本、行成表紙の下り繪本、赤本、黑本抔をこき下して、青本其の他の地本の爲に氣を吐いてゐる佳作である。柱かくし、一枚繪、浮繪、大津繪などの事も其の間に挾んで、中々に面白い趣向を凝らした物だ。

思ひ付たり 鬱つたり 五郎兵衛商賣

南陀伽紫蘭（窪俊滿）作、政演畫。二冊、天明二年板。

五郎兵衛がいろ〳〵案じついた變な商賣は、どれをやつても損ばかりであつたが、萬人屋で末は繁昌したと云ふ思ひつきを書いたもの。

有道鷹商 噓多鷹取帳

奈蒔野馬乎人作、忍岡歌麿畫。三冊、天明三年板。名作二十三部の一。

作者馬乎人は志水燕十と稱して、鳥山石燕の門人で、歌麿と同門の畫工である。本名は鈴木庄之助、根津に住してゐた。黄表紙の他に洒落本の作もある。黄表紙は、これより先き、天明元年に「化物二世物語」袋入三冊があるが、此の書の序文には「一書作共に初舞臺さ」とあるは、燕十でなく見せかけたものであらう。

たがやさんの三味線から思ひついて鷹屋となり、赤本仕込の鷹取帳の道内、金十鷹國の道行から、大人國への落下、道成寺の替歌「鷹にうらみは數々ござる」と洒落れて、末は鷹にはじかれて舊宅へ戻ると云ふ奇抜な立案は、どことなく垢抜けてゐる。

長生見度記

喜三二作、春町畫。三冊、天明三年板。名作二十三部の一。

春町の「金々先生榮花夢」に倣つた、可笑みのある、穿ちのある未來記である。三月出替りに女の奉公人の調女男

より高しと申す説があると、とかく雨の降る日は南の湖に[illegible]を受て雨天三十日興行する。「蹴年の[illegible]を
直へ節る」「高輪の海手へ土地が出来て、高輪の茶屋前に成り、向うがつかへて塞がる。」などの戯言は、其
の當時には全力のない計畫であつたが、今では實現されてゐるから、なかなか天狗の長杖以上である。「女の石頭[illegible]
日勢のありしも、今は金山集の盛んな今日に的中してゐる。また三座の芭蕉[illegible]、[illegible]する向人の[illegible]句、
江見で切きての[illegible]など、中々に穿ちが多い。

鼻々花似　当年咲菊　八代目桃太郎

喜三二作、三冊、天明四年版、

作者は小網町に住した為め、此の作者があると云ふ。また[illegible]「是常道南大俵[illegible]王」「生[illegible]御夢[illegible]」
「天光通[illegible]」「夜中[illegible]」「古文[illegible]」「[illegible]印[illegible]」等の作がある。

通人流行の世として、此の戯作も其の世界を書込んだもので、一六通大王の御作に文角公、なども、大[illegible]文六まで
でも引合ひに出してゐる。

漢國無體　此奴和日本

四方山人作、北尾政美畫、三冊、天明四年版、

四方山人は寝惚山人事ち大田南畝である。戯作の數は少ないが、「虚言八百萬八傳」「[illegible]」等有力[illegible]

證』『源平總勘定』『手練偶なし』等がある。

作人の世界を支配あやしくしたところに此の書の働きがある。二十四孝の見立前、宮木[illegible]太夫に弟子[illegible]子、豊松[illegible]子、豊竹[illegible]なる女弟子といへる弟子を呼んで[illegible]の人[illegible]河東節の三味線を山彦源四郎と云へる唐人を呼んで河東の一曲を學べ、「[illegible]」日に[illegible]、青樓に上る、此所を五十歩道五十軒[illegible]。[illegible]の枝元を[illegible]、名[illegible]書で[illegible]王[illegible]の花鳥来倫大人（東山）の類である。

[illegible] **大悲千錄本**

芝全交作、北尾政演畫、三冊、天明五年板。名作二十三部中での最も勝れた作。出板當時に於ける此の書の評判は大したもので、忽ちのうちに板木を摩滅した。其の後寛政中、[illegible]書家なる下谷上野町の[illegible]の主人が、[illegible]人の蜻蛉につけた珊瑚珠と交換して、當時[illegible]の商人より之を[illegible]受けたと云ふ話を傳へてゐる。待賈堂は其の書に依りて之を再板したといふことであるが、其の再板本も今は存するもの稀である。僅々五枚の小冊子に巧く手の功能を書き分けて些の無理がない。眞に名作である。

[illegible] 名代家（なだいのいへ） **莫切自根金生木**

唐來三和作、千代女畫、三冊、天明五年板。名作二十三部の一。

年譜　大悲千錄本　莫切自根金生木

三和は加藤氏、通稱和泉屋源藏、伊豆亭と號し、又唐來山人と號し、狂名は質草少々、作名は三和である。作者部類に依ると「はじめ高家衆何某殿の家臣なりしが、天明中、故ありて町人となりて、本所松井町なる私窩子茶屋和泉屋が婿養子になりて其の家を相續し」とある。文化十二年六十七歳にて歿した、深川淨心寺に葬る。著はすところに、『大千世界牆之外』『一粒から萬へ手を入れてじつこ引〆二十二人』『書集芥川々註』『双紙五牒夢』『東名返報通町御江戸鼻筋』『三善物語』『去程扱其後』『日覚請合附八文字』『正札附息子容氣』『一撲交書今怪談』『天下一面鏡梅鉢』『僊長源氏物草帋』『善悪邪正大勘定』等々あり、又洒落本の著作もある。畫工千代女は喜多川歌麿の門人である。

此の書は其の外題**きるなのれからかれのなるき**の廻文に依りて特に名高い。金持の金が殖えるに苦しむところに自づと滑稽な趣向を凝らしてある。同じ苦しむにしても、貧に困るのと違つて、のんびりしたところに太平の春を樂しむ時代相が窺はれる。

元利安賣鋸商賣（ぐわんりやすうりのこぎりあきなひ）

戀川好町作、千代女畫。二冊、天明五年板。

好町は狂歌師鹿津部眞顏の戲號である。北川氏、通稱は嘉兵衞、萬葉亭と號し、鹿杖山人、狂歌堂、好屋翁、四方歌垣等の別號がある。狂歌にては蜀山人を師とし、戲作では戀川春町の門に入り、數寄屋河岸の家主であつたから戀川好町と號した。始めは汁粉屋を業としたと云ふことである。はやく戲作をやめて、狂歌を專らとし、宿屋飯盛と相並んで狂歌の宗匠であつた。批點百首の料を金壹兩と定めたと云ふことである。文政十二年六月五

目、七十五歳で歿した。戯作には『あの子長者の飯食』『四疊半蕪分茶人』『鳩八幡豆飯徳利』『持來樽長目』等がある。

笑、くさめ、欠伸、涙、おくび、屁、癇癖の商賣を列記した物である。「全體草双紙といふやつは、起きてゐて寐言をいふやうな物」との評もあれば、終に「折々はしかつべの眞顔などもよしさ」と、自家吹聴もやつてゐる。

江戸生艶氣樺燒（うまれうはきのかはやき）

京傳畫作。三冊、天明五年板。

自惚の醜男（ぶをとこ）艶二郎が賣名沙汰を面白く仕組んだもので、名作三十三部に比して遜色のない佳作である。之よりして自惚ものを艶二郎と稱し、書中の主人公が低い鼻を京傳鼻と呼ぶこととなつた。此の艶二郎の手本は必ずしも誰某と定まつたものでもあるまい。神社佛閣への奉納提灯、手水手拭に比翼紋つけての宣傳や、心中狂言を舞臺に載せようとするのは、太中あたりが粉本であらうか、半可通の自惚男はあの時代に隨分轉がつてゐた事と思はれる。小便無用の標に花山書とあるは「此處小便無用花の山」からの洒落である。「道行興鮫鞘」は淨瑠璃・長唄端唄をつきまぜて、滑稽味たつぷりに凝つたもの、流石に京傳の才筆である。

鳩八幡豆と徳利

戀川好町畫作。二冊、天明六年板。

此の頃上野の山下に品玉とりの芸古なるものが出て、評判が高かつたので、此の作があつたのだ。神谷半屋の名酒屋の歩と土橋の舞子とでおちを取つてゐる。

色男十人三文

櫻川杜芳作、北尾政美畫、三冊、天明七年板。

杜芳、本姓は岸田氏、通稱豐治郎、表具師を業とし、芝櫻川町に住してゐた。狂名を言葉の綾知と云ふ。天明八年五月歿した。著はすところに、「故事開千本花王」「総討桑上野」「市川三升圓」「裝々日本多在門」「命の書」「書夢見草」「年中故事附鐘」「通春夜目開」「菅倚矢口渡」「跡目合戦實傳」「今盛大道記」「假名手本不通人」等の書があある。

古今の名だたる色男を出して、いづれも失敗を演じさせるところが、此の書の趣向である。

面向不背御年玉

萬象作、北尾柳郁畫、三冊、天明七年板。

畫工柳郁は徳岡庸と號し、式上亭、柳郁山人等の別號がある。北尾重政の門人である。謠曲「海人」から思ひついて、河太郎が面向不背の玉を取り返さんと、苦心のさまを可笑しく作つたもの。但し末段は紙數の少ないためか、端折つてしまつたのは惜しい。

亀山人家妖

喜三二作、北尾重政畫、三冊、天明七年板。
心の迷ひを化物に擬へ[illegible]、[illegible]した青本作家の気分が見える。これは[illegible]から、見ずてんの語は此の頃からあつたものだ。

悦贔屓蝦夷押領

春町作、北尾政美畫、三冊、天明八年板。[illegible]
春町が久振りでの作で、序文に草双紙の作に六義あるを説いてゐるほどに得意のもので[illegible]たもので[illegible]、差し[illegible]しての作だと稱せられてゐる。

復讐後祭祀

東作作、三冊、天明八年板。
[illegible]
[illegible]
[illegible]亀山人家妖[illegible]悦贔屓蝦夷押領　復讐後祭祀

仁田(にたんの)四郎 富士之人穴見物

京傳畫作、三冊、天明八年板。

通人學の案内記とも云ふべきもの。野暮漢仁田四郎が畠山重忠の導きにて、駿河町の越後と云ふ大通に通道を教へてもらふ趣向である。

江戸子の風の穴をのぞき見れば、生上田(きうへだ)の袷を質に入れて、一本で二分の初松魚を買ふ。また千両の角屋敷を賣拂つて、呼出し、晝三を身受けする體(てい)ありノ\と見える。と、江戸子氣質を道破する類である。

是からにチト荻江のありやすでも習ふがいい。我が君の門太郎が名残などは吉原の荻江節が恐れてゐるよ、

是に至れば大通道の卒業となる。

天下一面鏡梅鉢

唐来三和作、長喜畫、袋入一冊、寛政元年板。

白川侯松平定信が幕閣に入りて寛政改革をした時代相を當込んだもので、時事問題に觸れてゐるので、絶板を命ぜられた。

孔子縞于時藍染

京傳畫作、三冊、寛政元年板。

同じく寛政改革を諷刺した作で、大あたりであつた。そこで京傳は翌二年に「孔子縞後篇 藍返行義霧」三冊、「孔子縞三篇 [illegible]の春先生中魂」三冊を著はした、いづれも高評を博した。

[illegible]照子淨頗梨

京傳畫作、三冊、寛政元年板。

小野篁が冥府に往來したと云ふ傳説に依りて、篁の地獄廻りに擬へ、通や穿ちを竝べること例の如しである。

願解而下紐拝壽仁王參

全交作、政演畫、二冊、寛政元年板。名作二十三篇の一。

此の頃禪文谷法華寺の仁王尊が流行したので、京傳に「[illegible]禪文谷利生四竹節」、琴好に「北文谷[illegible]」などがある。此の作も其の一で「或時禪文谷に參じにて、ちと雑さうな佛を刻んで見ようと、不圖仁王を一體刻む。今禪文谷に立ち給ふ仁王即ち此尊像なり」とある。仁王の圖様を京傳得意の筆法にて書いたもの。

書題　孔子縞于時藍染　照子淨頗梨　拝壽仁王參

大極上請合賣　心學早染草

京傳作、政美畫、三冊、寛政二年板。

心學の流行につれて、京傳は教訓的の冊子を著はして、黄表紙の作風を一變した。青草紙の理窟臭きを厭ふといふことも、今度の理窟臭きを以て一趣向となしたと、其の序文に斷つてゐる。善玉惡玉の趣向が大評判となつて、京傳の名は殊に高くなつた。翌三年には、「(後編)人間一生胸算用」三冊を出して、これもまた大當りであつた。書中にある「博識秀才とて、仁徳の世にいちじるしき道理先生と聞えたる京の人」とあるは、茅場町に講筵を開いた中澤道二翁のことで、翁の心學道話は、道二翁道話として、「松翁道話」「鳩翁道話」とともに名高い。

京傳憂世之醉醒（うきよのゑひざめ）

京傳作、重政畫。三冊、寛政二年板。

喜三二の「龜山人家之妖物」、春町の「其返報怪談」、芝全交の「芝全交智恵の程」「全交法師當々草」、萬象亭戯作濫觴に、三馬の「腹の内」、一九の「戯作種本」等と同じく、作者自身を題材として書いたものである。江戸の菓子いろ〳〵、當世風俗など、江戸史料の參考となるものが多い。

壬生狂言出來穢言　直讀見臺萩（なほしてよむやけんだいはぎ）

全交作、柳郊畫。三冊、寛政三年板。

深川永代寺の境内に壬生狂言の興行ありて、市中に流行したので、青本に壬生狂言を題材としたものが少なからずあつた。馬琴の「四十八手、盡用而二分狂言」、慈悲成の「壬生野暮作面目」等はこれで、此の書もまた其の一種である。先代萩をもぢつて、壬生狂言を説いてゐるところに頗る面白味がある。

世上洒落見繪圖（せじやうしやれけんゑづ）

京傳作、菊亭京傳畫、三冊、寛政三年板。

洒落のめした作で、天窓を出たり、洒落の高じたあげく、石にもあらず、木にもあらず、朽ち果てた一塊となつたり、本段に彌勒佛がつらねを云つたりして、昔の通り少しも洒落もなき世の中となつたに終つてある。四十八手見繪圖をもぢつての洒落見繪圖だ。

京鹿子娘泥鰌汁（きやうかのこむすめどぢやうじる）

全交作、歌川豊國畫、三冊、寛政三年板。

娘道成寺をもぢつた作たることは云ふまでもない。千人の男子が鐘供養の場に割込んで、お定りの如く、鐘供に手をかけて引きかつぎて鐘の中に入る。鐘は忽ち釜となつて流れる。千人の男子は泥鰌と變る。千人の山伏も釜にいれたかつたにもかのが何處へか消えてなくなる。其の間で樽屋へ泥鰌汁の店を出す。これは柳樂といふの始まれ、山伏の祈りになつたので、泥鰌の汁屋、山伏屋茶漬と云ふ茶店を出したので、世上では山伏茶漬と名付つた。茶漬

第　圖　世上洒落見繪圖　京鹿子娘泥鰌汁

、膳十二文は山伏に十二銅のお初穂を上げる心だと、洒落れたのが、此の作の落である。

廿日餘 四十雨 盡用而二分狂言（つかひはたしてにぶきやうげん）

大栄山人　曲亭馬琴作、歌川豊国畫、二冊、寛政三年板。

京傳門人大栄山人と明記してある。壬生狂言に因んだ作で、當り作ではあつたが、固より黄表紙獨得の警妙な洒落は馬琴の得意でない。然し馬琴にしては寧ろ出來過ぎたと思はるれど、之を他の黄表紙名作家のものに比べては、物の數にも足らぬ。

盧世夢魂其前日（ろせいのゆめそのぜんじつ）

京傳作、重政畫、三冊、寛政三年板。

夢魂道人がいろ／＼さま／＼の夢を案じ、夢の道具や人形を作るところから、盧生に榮華の夢を見せようと、歌舞伎仕立の夢の場を現ずる趣向、總凌ひも出來たから、いよ／＼明晩見せようと云ふ、榮華の夢を思ひきつてしやれてふざけたものである。

浮世操九面十面（うきよあやつりくめんじふめん）

全交作、豊国畫、三冊、寛政四年板。

これも壬生狂言に因んだ作である。恵比寿の面、大黒の面、すねかじりの面、おろまの面、閻魔の面、ふくれづらの面、汐吹の面、座頭の面、山の神の面、高砂の面、三途川の婆様の面、観音の面、狐の面、色男の面など狂言の面に趣向を盡して、人情、世相を説いたもの。

長物語 後編 白髭大明神御渡申（おわたしまうす）

全交作、豊国画、三冊、寛政五年板。

前年出板した鼻下長物語の後編で、髭の無い髭の内臣毛内臣が白髭大明神へ髭の祈請をして「白髭大明神の髭を御渡申す」と云ふ可笑しげな所作を、何れも笑ひこけて受取れず、遂に金にて神主を笑はせて、手に入れたと云ふ内容の可笑ひである。

煮花夢 後日譚 金々先生造化夢

京伝作、重政画、三冊、寛政六年板。

「盧生は粟飯炊ぐうちに五十年の夢を見、我は煮花の出来るうち千萬人の辛苦を知れり、われ浮世を夢と思ひなして、只うかうかと暮したるが、今日より心を改め天地へ恩を報ずるため一つの濁世を醒めん。」とある如く、一睡の夢の間に人々の千辛萬苦を述べた、一種の教訓ものである。

天道浮世出星操（てんだうきよでつかひ）

式亭三馬作、豊國畫、三冊、寛政六年板。

三馬二十歳の處女作である。

善星悪星の争ひに、とゞ悪星の敗北に畢ると云ふ筋、なほ稚拙のものではあるが、處々に作者の才が閃いてゐる。

怪談筆始

十返舎一九著作、二冊、寛政八年板。

寛政七年には黄[illegible]の「怪物つれ〳〵叢談」、慈悲成の「大昔化物はなし」、此の年には馬笑の「[illegible]怪化競[illegible]相撲戯場」秋輔の「御子様方御好に付怪席料理献立」、草樹の「怪談家内奇狐狸」、一九の「当世化年中行状記」「化物小遣帳」など、青本にも怪談物が流行して来た。此の書も其の一で、公平が化物の芝居や、遊郭に出かけ、見世物するつもりで面白さうな化物を懇望し、見越入道の子の三ツ目と一ツ目とを貰ひ受けたが、途中で葛籠から消えて失くなると云ふたわいもない筋である。

作者根元江戸錦

樂慈齋作、豊國畫、二冊、寛政十一年板。
狩野元信の下繪を左甚五郎が彫り上げた龍に、魂が入つて飛び出して浮かれ廻ると云ふ筋、其の形を繕つたのが銀杏鍋、そこで作者根元江戸鍋と洒落れたものである。

竈將軍勘畧之卷

時太郎可候畫作、三冊、寛政十二年板。
時太郎可候は葛飾北齋のことである。
一種の臺所合戰記で、類書は他に多い。

貧福蜻蛉返

一九畫作、二冊、寛政十二年板。
天の雷鬼に反對の願ひを云つて家が富み榮えると云ふ筋、一寸面白い趣向である。

昔男生得這奇的見勢物語

京傳作、重政畫、三冊、享和元年板。
世態の裏面を寫し、作者の三枚目に「此の作者の看板付は沈金彫の唐花にもたれ、花色木綿の衣に這入つた未

漢籍の本をひねくつて、文人くさく見ゆれども、心の内へ這入つて見れば、そろ盤はお／＼にて大の俗物なり。一と滑稽な警句を浴せかけてゐる。

敵討蚤取眼

馬琴作、重政畫、三冊、享和元年板。

敵討の趣向を蚤に應用したもの。各回毎に俳句を題としたなど、中々凝つたものであるが、凝つてゐるほどに面白くはない。

茶歌舞伎茶目傘



山東先生著
忠臣水滸傳(ちうしんすいこでん)前編(ぜんぺん)　五巻出来
同後編(こうへん)　五冊當年出来

〇馬鹿夢珍物圖會(ばかむちんぶつづゑ)　山東京傳戯作　袋入一冊出来
一ぴきの虫からとらへて珍らしき戯作也

繪本智迦良見布(ゑほんちからこぶ)　勝川春亭画　五冊出来

花鶴百人一首千代縁(はなづるひやくにんいつしゆちよのえん)　出来

讀書丸(どくしよぐわん)

清覺世道人傳方(しんかくせいだうじんでんはう)〇丸薬也
賣弘所　江戸山東京傳店

一心腎をおぎなひきこんをつよくしものおぼへをよくしむ
一生れつきてものおぼへわるき人ゝ年若でものわすれする人用て奇妙也
一眠りをさまし耳あり薬なれば口からさぐさいづれすがれし
此薬もちゆるの学問そのほかおぼへおしき書生にふくさせむる妙薬
あまりものをよむ人はかならずそのほかとても人ゝくらうおもはざる人用て
さうし見物はさくらへて益あることかみあうちんのうたひうる人用てよし
をまくべてきこんの人用ゆべきことなきくらく能書はあるもの男女ともに
用ひて不賢なし

〇一包代一匁五分

序

茶道は千の利休有而後髭の伊休になり髭は則
髯家流となり古事附来歴をこのむ人乃千家流より
頭痛に持し助六が鉢巻は紫の無し服紗より
変じし奴朝白は千平は馬の口取を止めて茶の口取より
作そ平は喜三二が秀作を茶立服して欲の深さは
麹町乃井戸茶碗大きは大木の切口に目を吹春の
植込を唯青々と青季の世々の菓子の湯菓歌舞伎より
黙して一服献をても手前勝手を記己構より事
御免を願ふ而己

福茶乃せちやる月

題 芝全交








三浦屋


















山川白酒

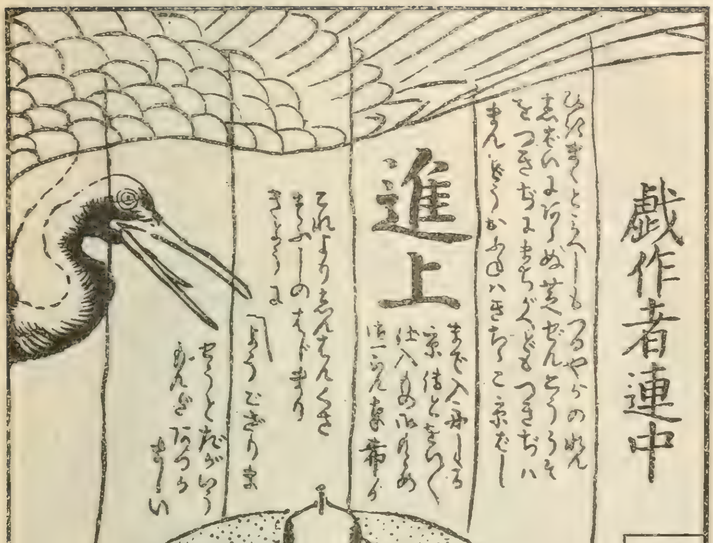



茶入
茶杓
茶碗






まんぢうや
おこし


戯作者連中
進上
芝全交戯作


文武二道万石通　中
通油町
つたや

享和二年壬戌新板

京傳作

㊮ 通氣智之錢光記　上中下

㊎ 賢愚湊錢湯新話　上中下

㊍ 諸色買帳吞込多靈宝縁記　上中下

㊌ 枯樹花大悲利益　上中下

馬琴作

初老了簡年代記　上中下

野夫鶯児歌曲訛　上中下

筆耕稿植著 種蒔三世相　上中下

養得筎名鳥圖會　上中下

傀儡作

太平記忠臣講釈　六冊

諺百首談　全一冊　出来

よまいひあれうることわざの出所どをたづねてちりくかれとりくるまよみかなあり

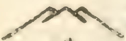
田樂作

提燈庫暗夜七扮　上中下

通笑作

食後合戦 和睦香之物　上中下

板元　江戸通油町　鶴屋喜右衛門

序
質勝文野暮也。文勝質高慢也。文質元結
人品にして月額青き君子国五穀のおかげ
挽ぬきのおそばきりの言葉智恵の升はかり小
謀をし大小名の不知の山三國一斗一生の耻を
晒しせ温泉の垢をけして流きてこ　いつぞ
大礒の化粧坂みて着けず墨し文武二道万石通と
名づけしをの裾野十が需に應て　作










長生不老門

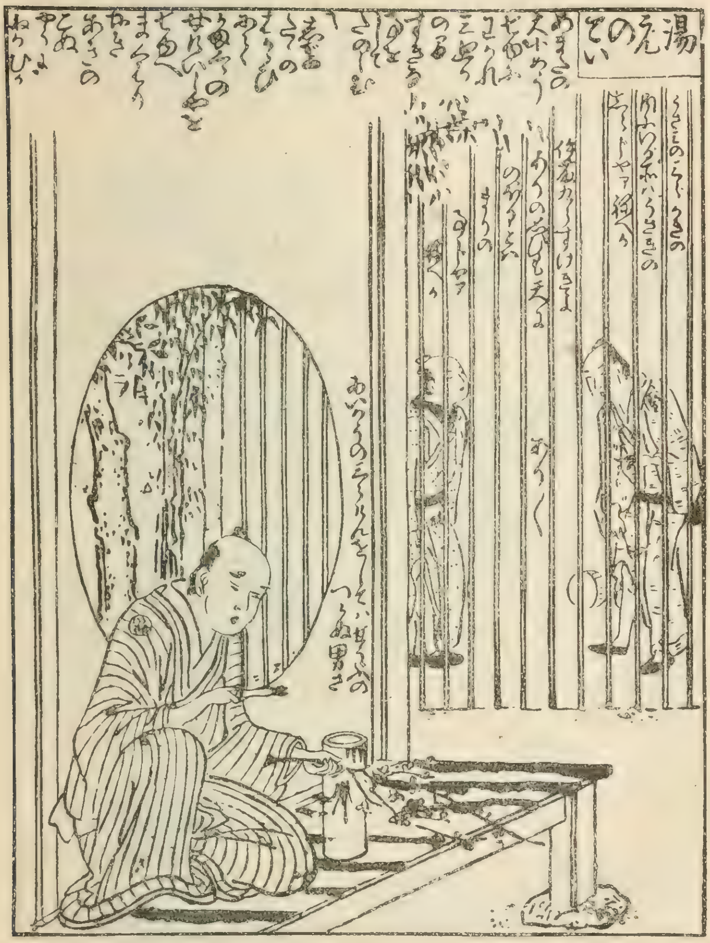

妖怪
車不可入


文雅後洞
長生不老門


妖怪窟裏口














堂ヶ嶋のてい






李賀の觧









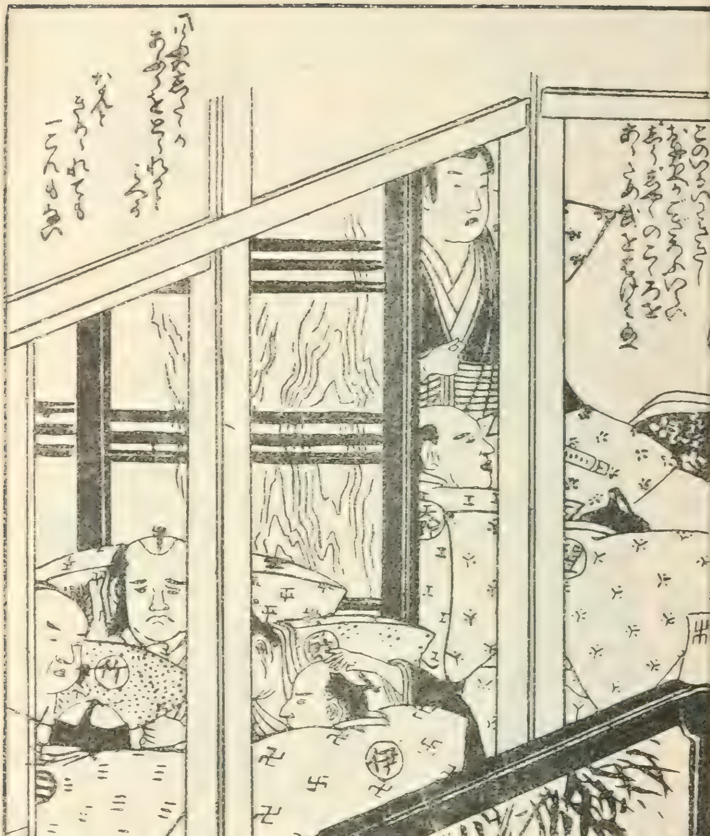

大いそのてい












喜三二戯作
哥麿門人
行麿画


将門秀郷
時代世話二挺鼓　上
俵
通油町
つたや


時代世話二挺鼓
下
通油町

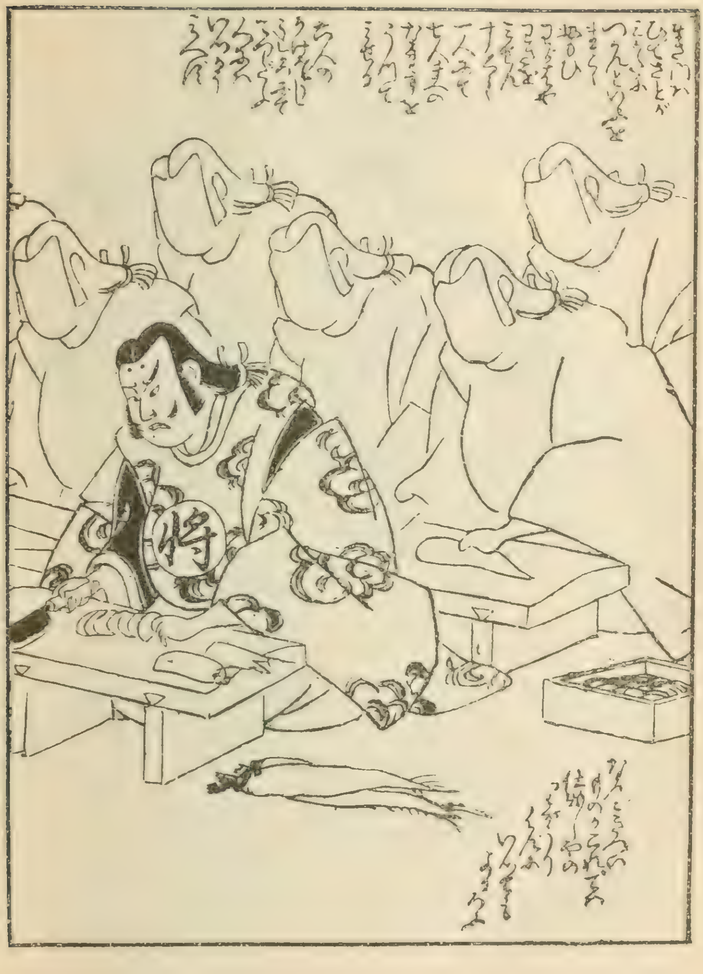

大平記


人皇六十一代
















ちんつん
チヤン〳〵
トン〳〵




将
将








将
将
将




心
将




法眼元信筆
京傳作
哥麿門人
行麿画


亥
春
石上三之助辛抱
上
西宮


亥
春
石上三之助辛抱
中
西
宮


亥
春
石上三之助辛抱
下
西
宮

両がらいつと辛抱に直ぶちや
ら勝ぐ高うしぬ高し作し
すあしぬきんぼう陽くし
輪寶つまるむさし坊が七つ道具の
指れ一つくれもちり口合むるいっ百
ならしぬ事が有りとも見する人も又
辛抱しまするへし

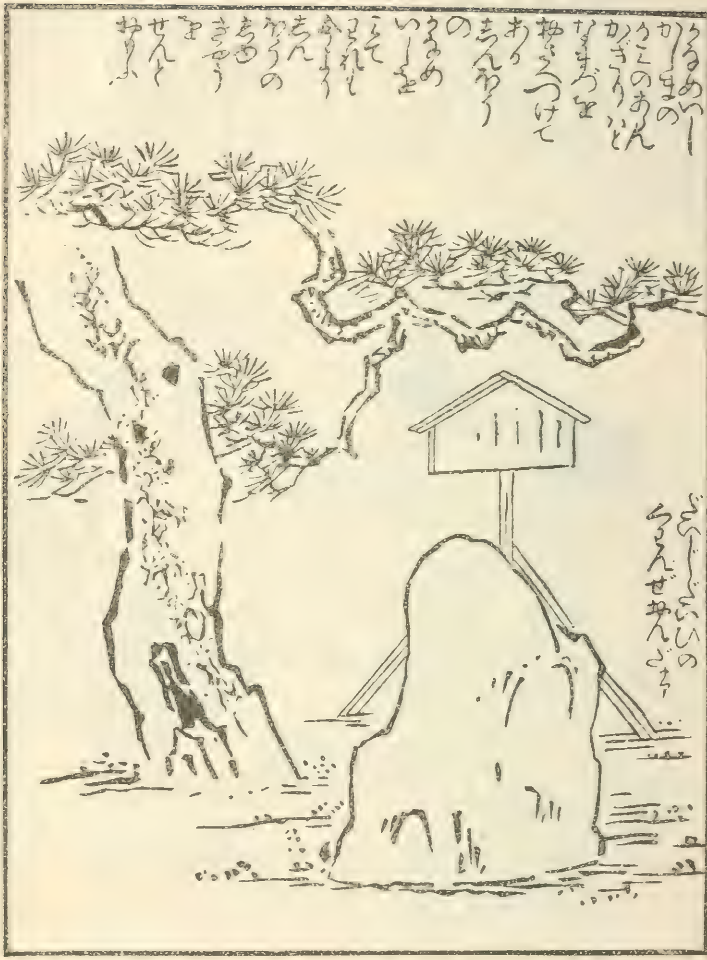
寅の初春

石上



















石上三之助辛抱





















石上三之助辛抱
















樹下石上作
羽州神山
増戸巌書

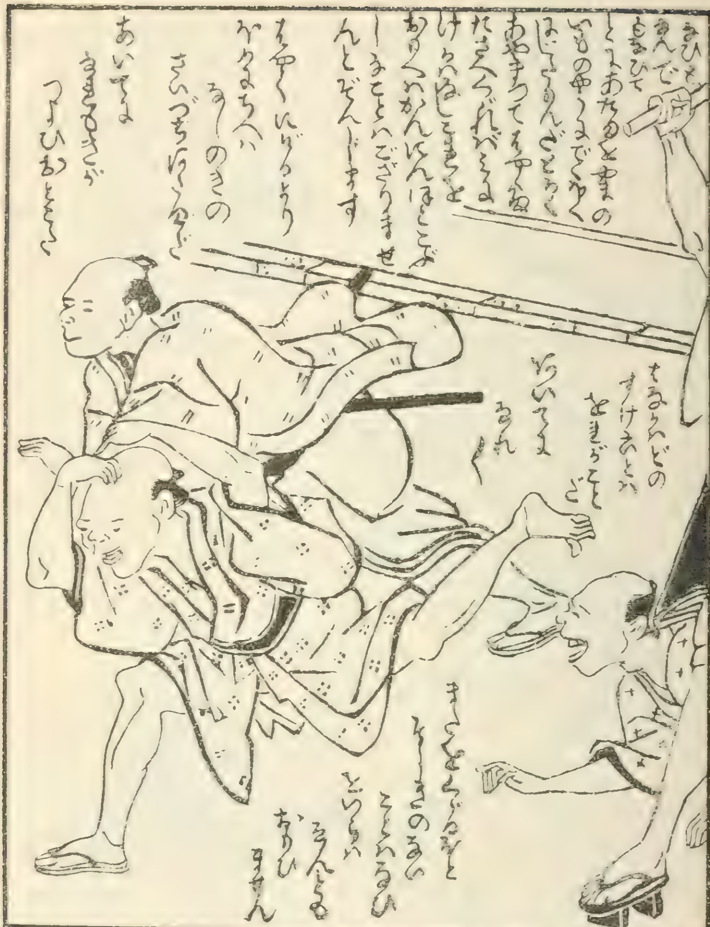

内辨慶堪忍帳 上


内辨慶堪忍帳
中


内辨慶堪忍帳
下







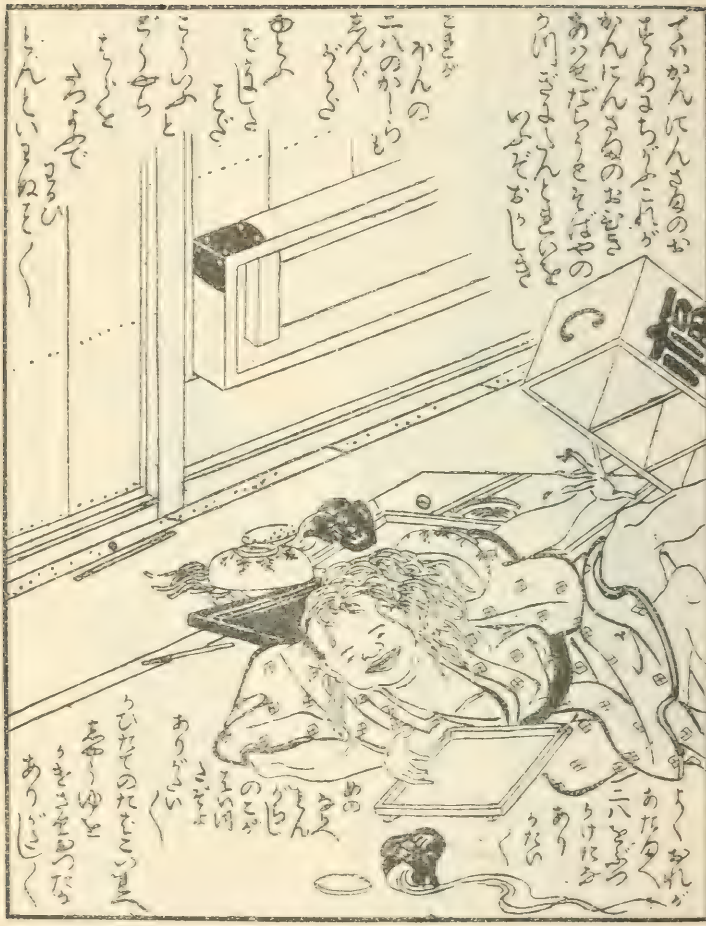









福山


ふかんにんさまのお
まちあまちがこれが
かんにんさまのおむき
ありそだらうとそばやの
う川ござよふんともいゝを
いふぞおかしき
こまどが
かんの
二八のかゝらも
まんぐ
ぶるゝ
あよふ
そばさ
とぶ
こうふと
ぶらぶら
ちらくと
うつまで
つるび
とんといまねそく
よくおれが
あたゝかく
二八そばつ
うけたな
あり
がたい
く
めの
まへ
まん
がらし
のこが
まい川
さぞよ
ありがたい
く
うひたてのたむこいまへ
まちかゆを
うきさかつたら
ありがたし
く






水








このごろハ






ごめん
なさりまし













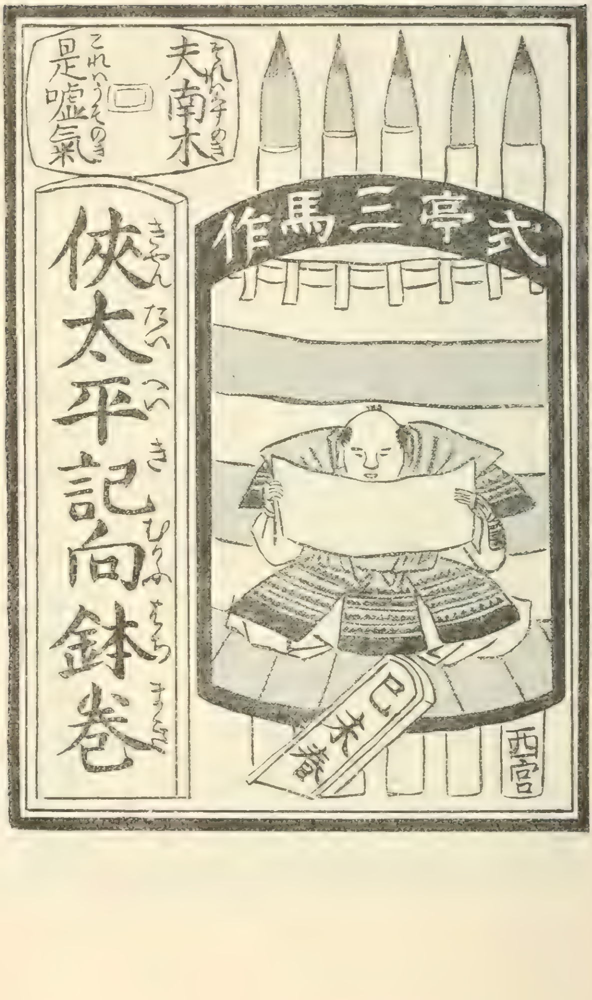









豊國画
芝櫻川慈悲成作


夫南木
是嘘氣
侠太平記向鉢巻
式亭三馬作
西宮

狂歌新五十人一首　千秋菴大人撰　北齋画さいしき摺　全一冊

江都勝景遊覧　浅草菴大人撰　画狂人北齋画　江戸名所さいしき摺　全二冊

繪本潮来絶句集　富士唐麻呂著　北齋画さいしき摺　全二冊

狂歌左巳　尚左堂大人撰　高点画入　全一冊

三戯場俳優三十二相　本町の桃客著　哥川豊國画　[illegible]之丸のおかさまおかう楽屋よね活付あやしきところ狂言八百の出入をはぶきてにをはのやくしやそう[illegible]手也　全一冊

醴新書　曲亭主人戯文集　門人木茅田樂著　来貞春出板　全一冊

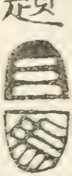
小説半俠雑記　曲亭主人著　同　小本一冊

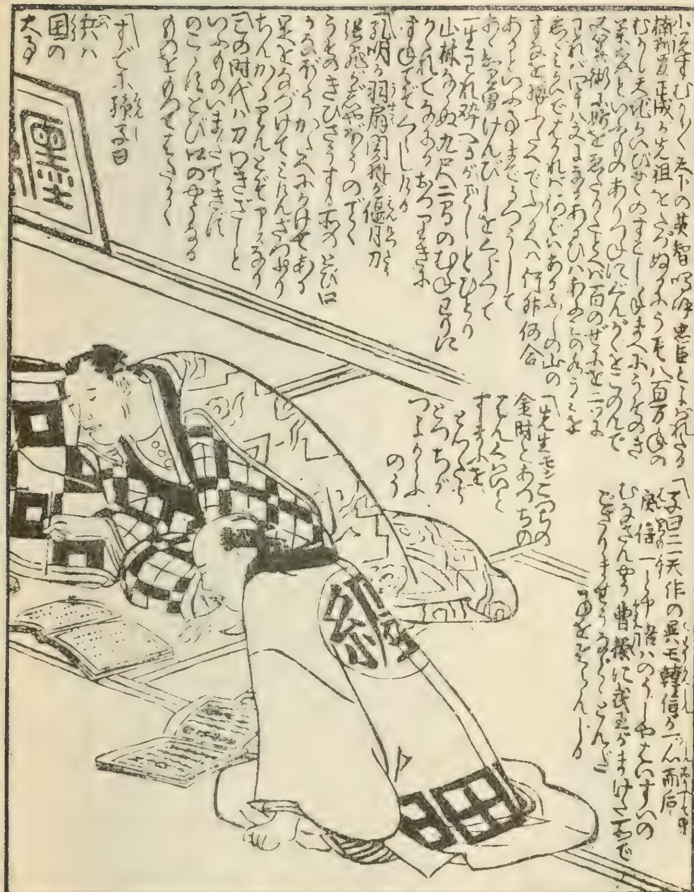
青樓再撰美人合　富士山人撰　来貞春出板　全一冊

序

干戈に及んで家を失ふてハ兵家の大意喧嘩に及んで己と
笑ふてハ競の魂だ人誤て煙草の内に巡りし勝手と出刃庖丁に
握って三尺の挑灯猪熊乃彫物ちょに親分の片腕となる
か先陣の障泥馬乗って眉間三寸ぎつてうるを勇とぞ
抹ぐも動かね君の代々太平楽の三巻物依怙地に何ゝ好
柾り是謀叛勝負の扯撰軍配俠太平記向鉢巻と題
せる支そうらハ若者たんのひそと角髷の服引を
まんく中腹の紙並べる老ハ
題も江戸っ子

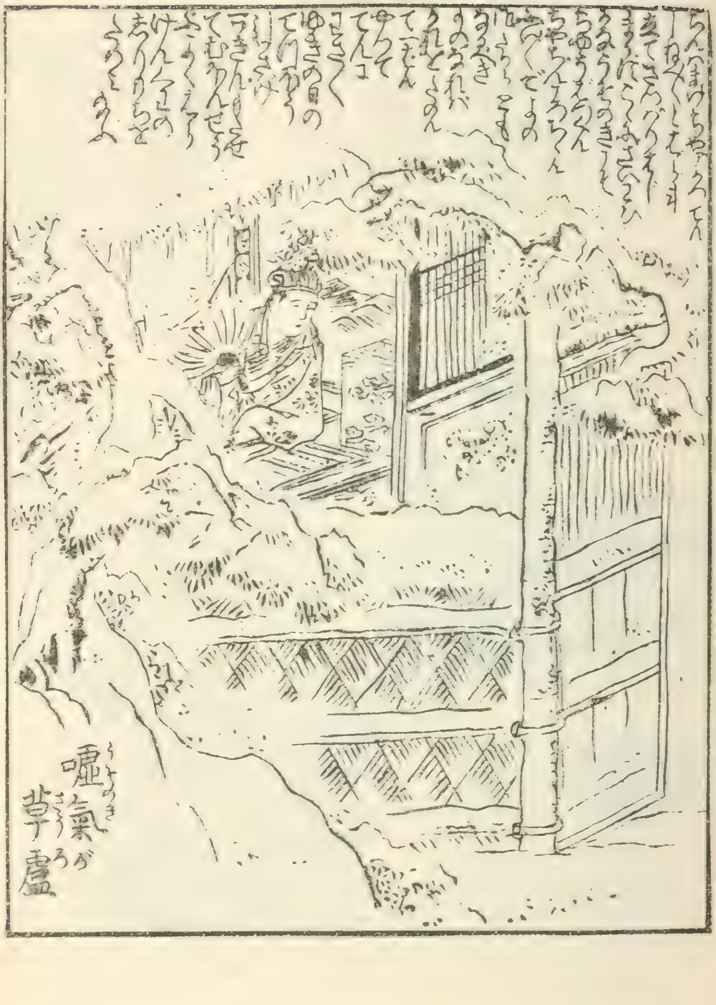
干時寛政己未孟陬　式亭三馬戯題



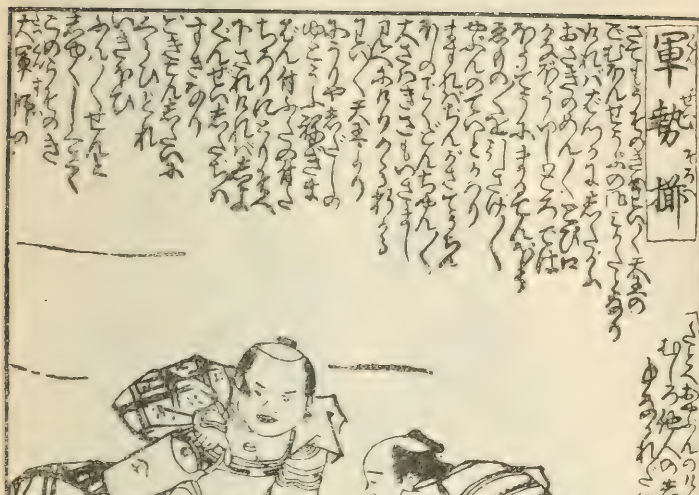



早學問





噯氣が草盧


軍勢揃




火之用心


先手鐵炮謀




戲場の陣

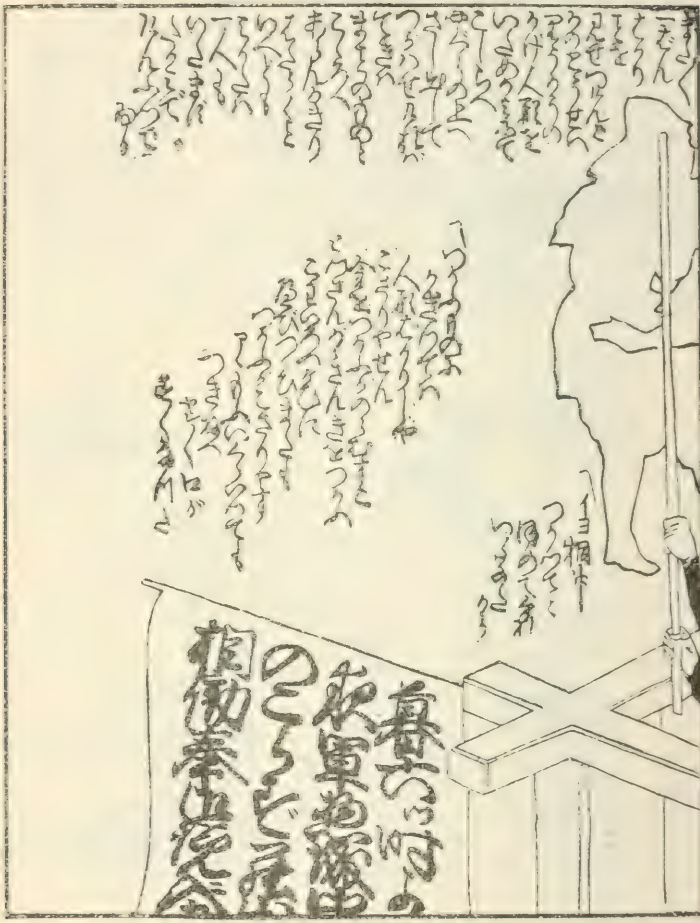

閒者の謀

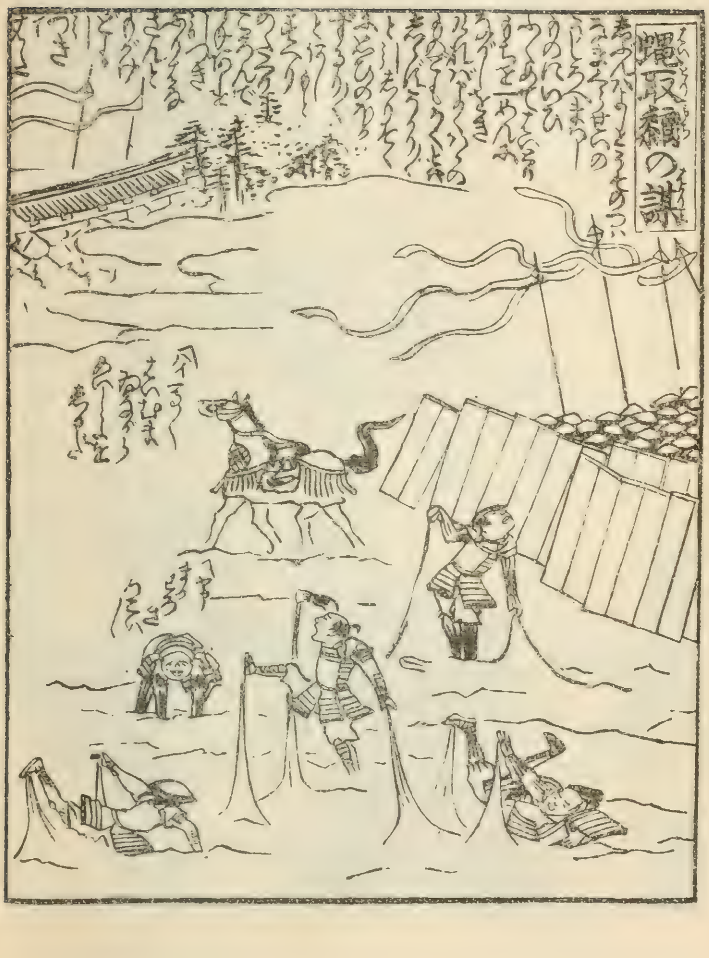


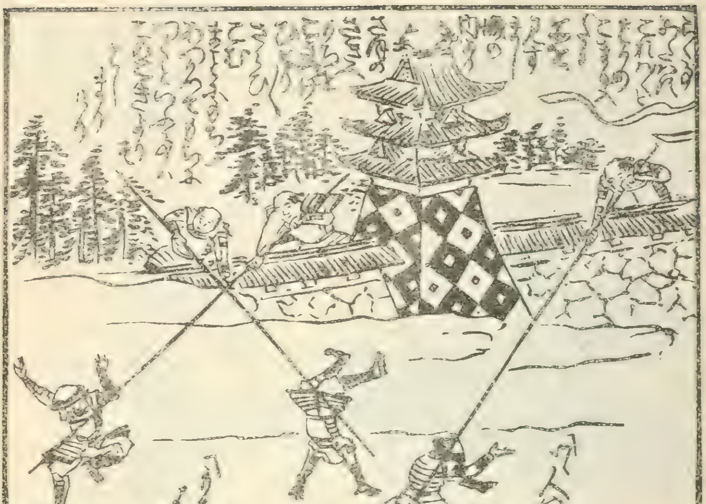

開道の謀




影絵乃謀




蠅取黐の謀

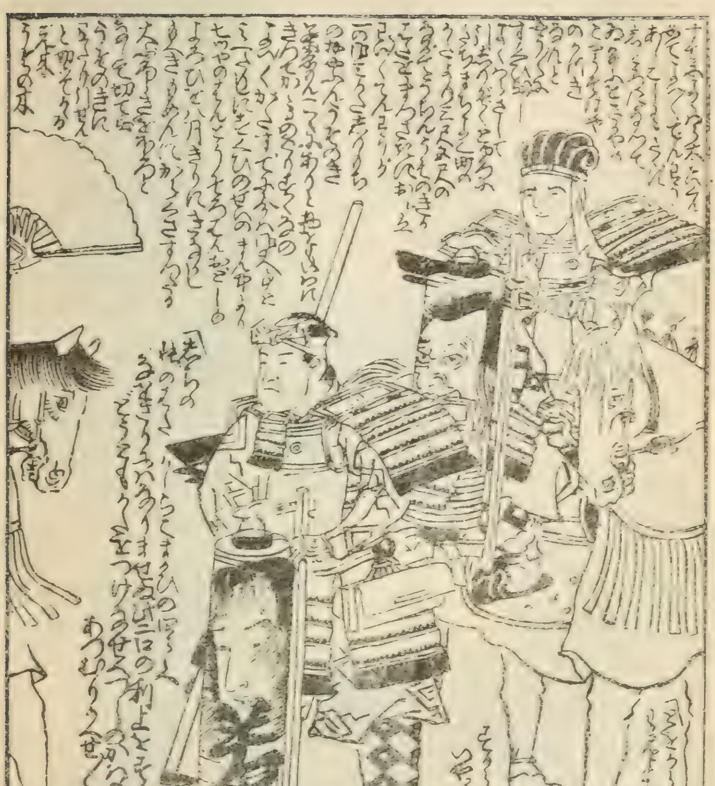




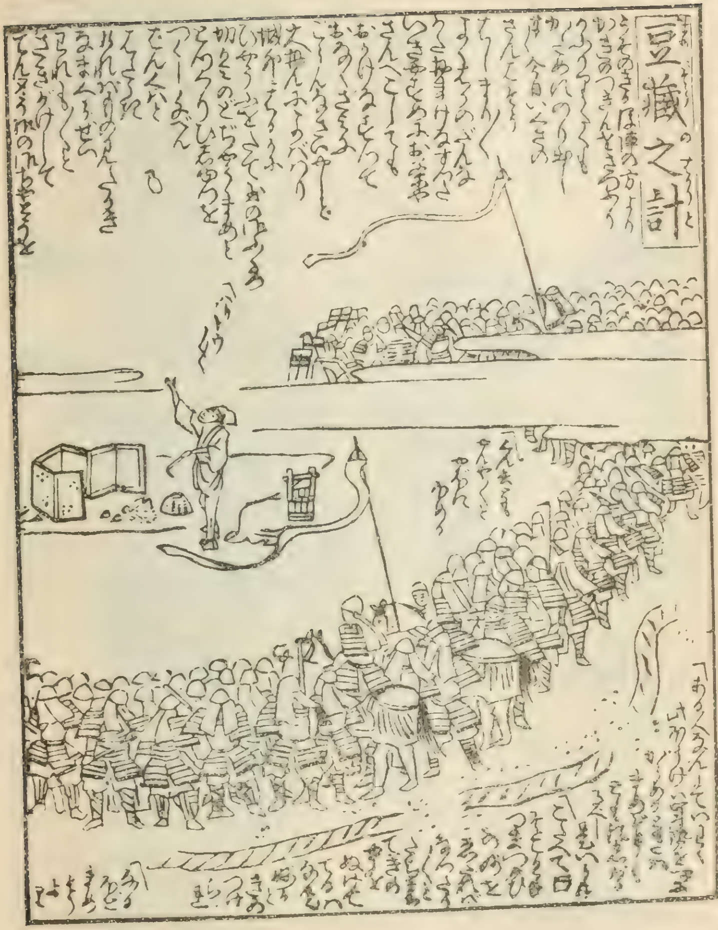

落穴の謀

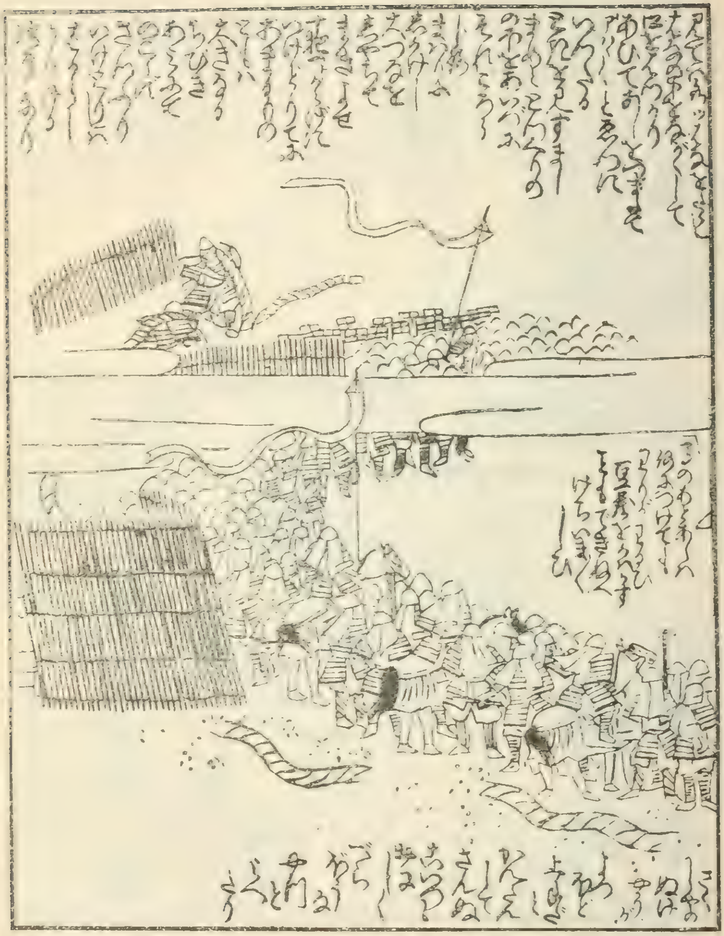

大道具大仕掛の訣








豆蔵之計




鯨御吸物




侠太平記向鉢巻
舌耕
三馬
三馬戯作


上
諸色買帳
呑込多寶貨縁記
京傳作
板元 通油町 鶴喜


小さつ便用


中
諸色
買帳
呑込多靈寶縁記
京傳作
板元
通油町
鶴喜
夏

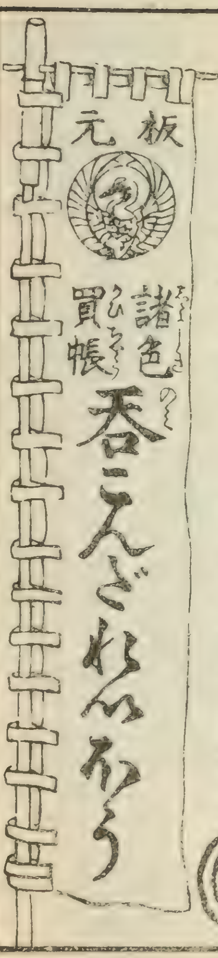
工夫編出如来畧縁記

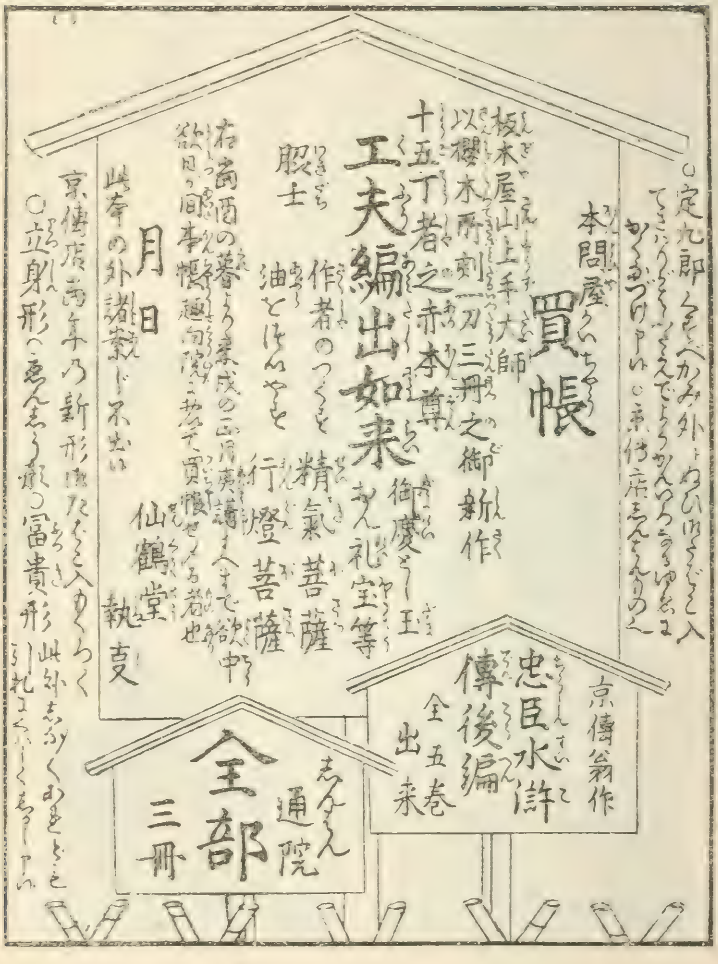
十五丁着赤本尊

當年に案じ出し奉れバ天竺十五丁着乃赤本尊三冊
編出しやまとをくるハ。およそけさくしや手習ざうしのむかしより人形操中
稀なるの鴻筆。まあてんぢく乃御宇赤本年中いる作者むかしの
こうむかしくあり。土佐の国ちんハ山へくさり郡どらあ八川(せんとく村。
にみんく坂田の金平化物たいぢれそりりうしとゆゑそのほどいろある。
見越入道鯛乃み僧都と云二人の知識おまをゐて四方にあり改んけし。
大木のきりハふといの根つことどりかうぬし小刀と見つくてうるおく〳〵
まるおの尊像なり。あそらふそちらんずえ、むかしはちのうち乃宝を寄附し。
桃太郎鬼が島の宝を寄進しまゐらせてより後ハ木をとこし狸を
ちをそらひそほひよめちく山に一宇を建立したてまつる。そのゝち猿蟹
くわせんのさぶさく合火乃たゝめにまつこを伽藍とかれうしかしが。
ふしぎなるかな尊像みんでまつりし紫の火気せさとひかりそびえるひとく。
乾文の乙ひろがさまひ屋やまかさ画でもふとよりそ花咲ぢいへしまと

ふくかなしく一切とんかんでハ、ござとしやしまへ。尊像ハありがたきあらたなる
名跡じま也。此赤本尊のおんとく、世に知れ渡る霊験をあらはし、星霜を経て
後、のち金々先生と申すゆめのつげをうけたる時、万歳あんぎや日記して
むかし金像と吉例の黄表紙草ざうしの御利益と世にあらはれ給ふ
年々あらたなる本尊なり。世の中かてうじ、こたびの尊像ハ五十日、開帳いたし
ゆるひませんで、ちやうふくをまねき、一たび拝む
ひとしく心ハあくびもなんをまねく、桃抜き、絵草紙出版
板元ハ蔦屋重三郎のみせつゞく

享和二年壬戌春　山東京傳戯述

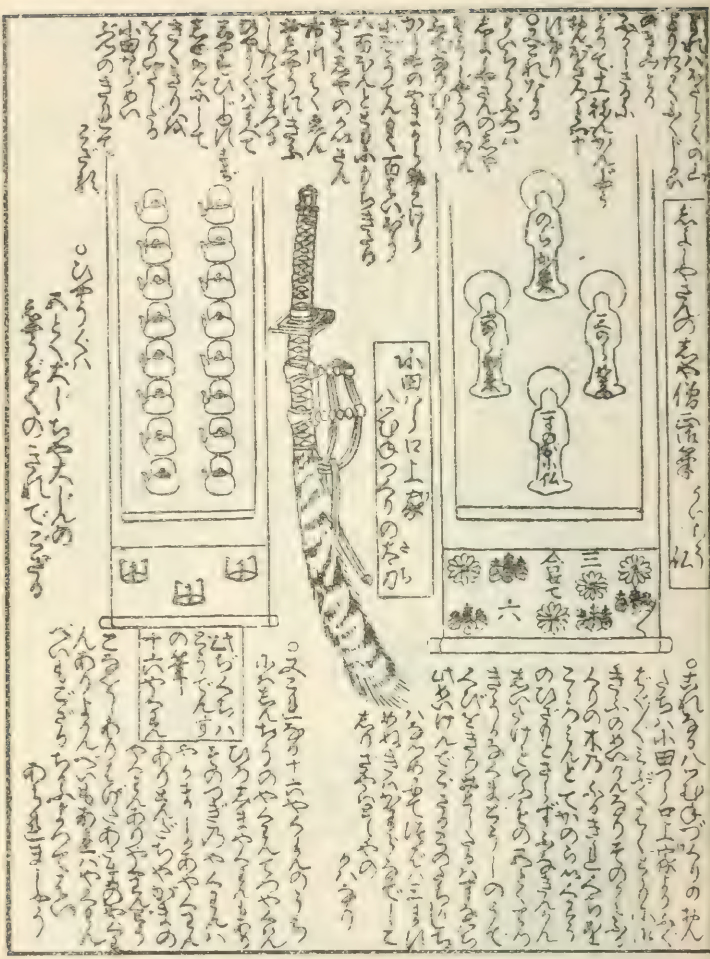



本問屋
買帳
板木屋山上手大師
以櫻木所剣一刀三冊之御新作
十五丁者之赤本尊
工夫編出如来
脇士
作者のつくと精氣菩薩
油とけんやと行燈菩薩
月
日
仙鶴堂
執事
京傳翁作
忠臣水滸傳後編
全五巻
出来
全部
三冊
通院


赤本尊
三冊
傳藏編出
如來開帳
大てから



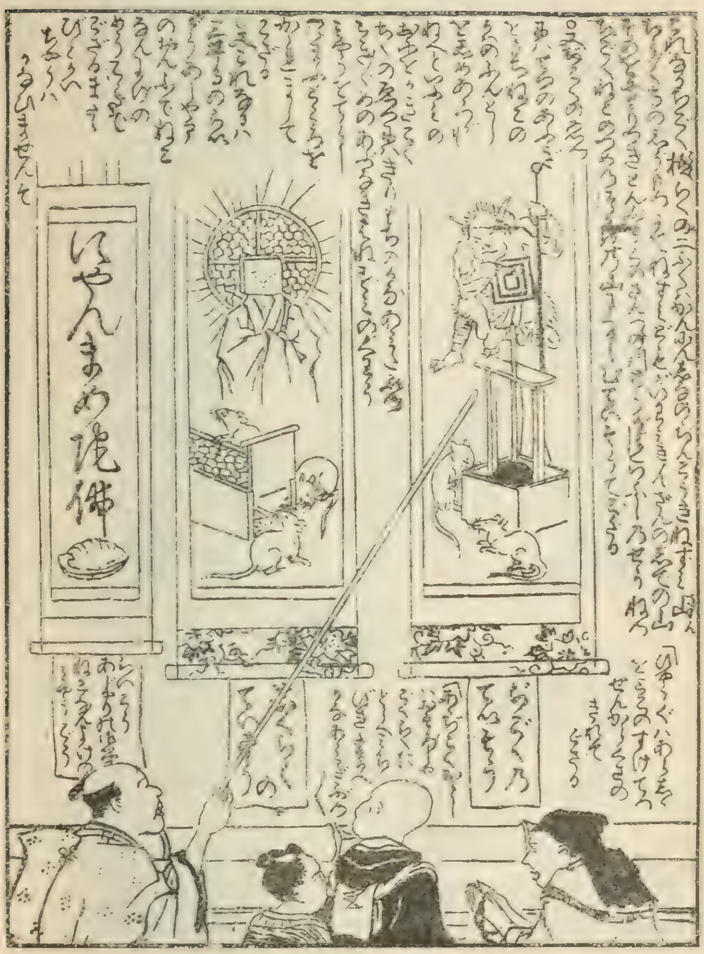

角行法師のうぶりかんぜん飛車りん天
龍王



小田原一口上家 八つむねづくりのたから
三
合て六
一寸の小仏

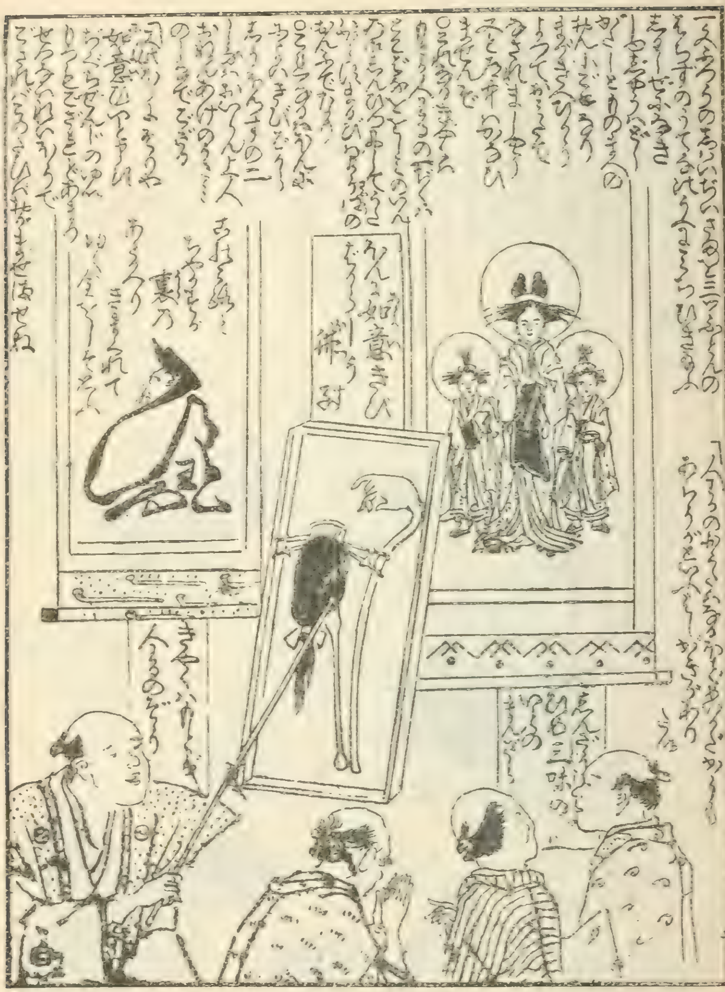

用心



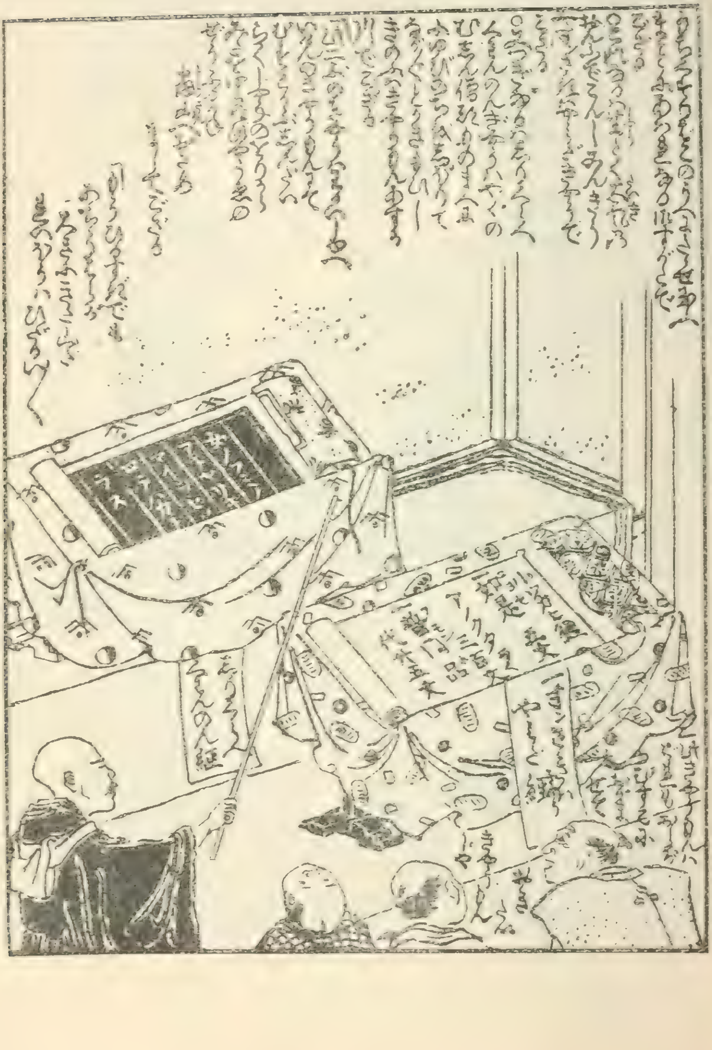



成田やさん



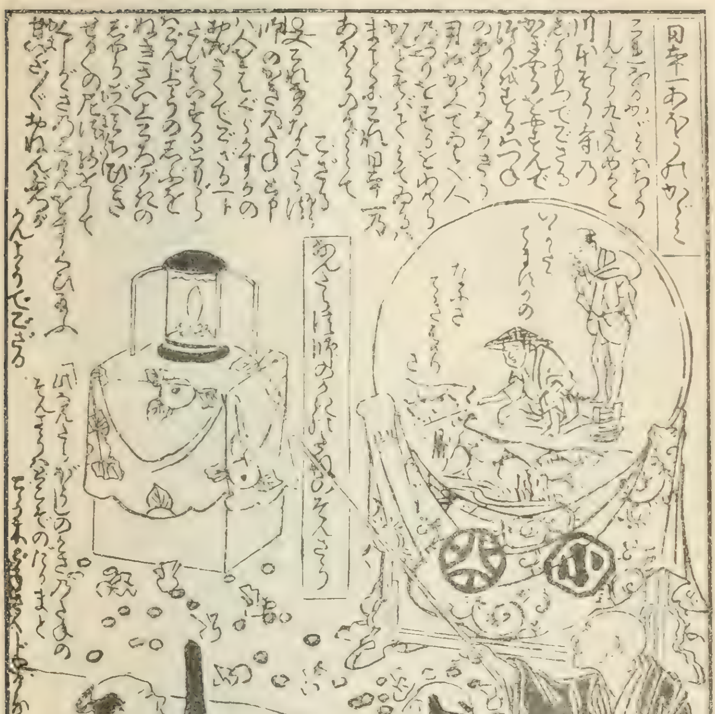



返魂丹
六味地黄



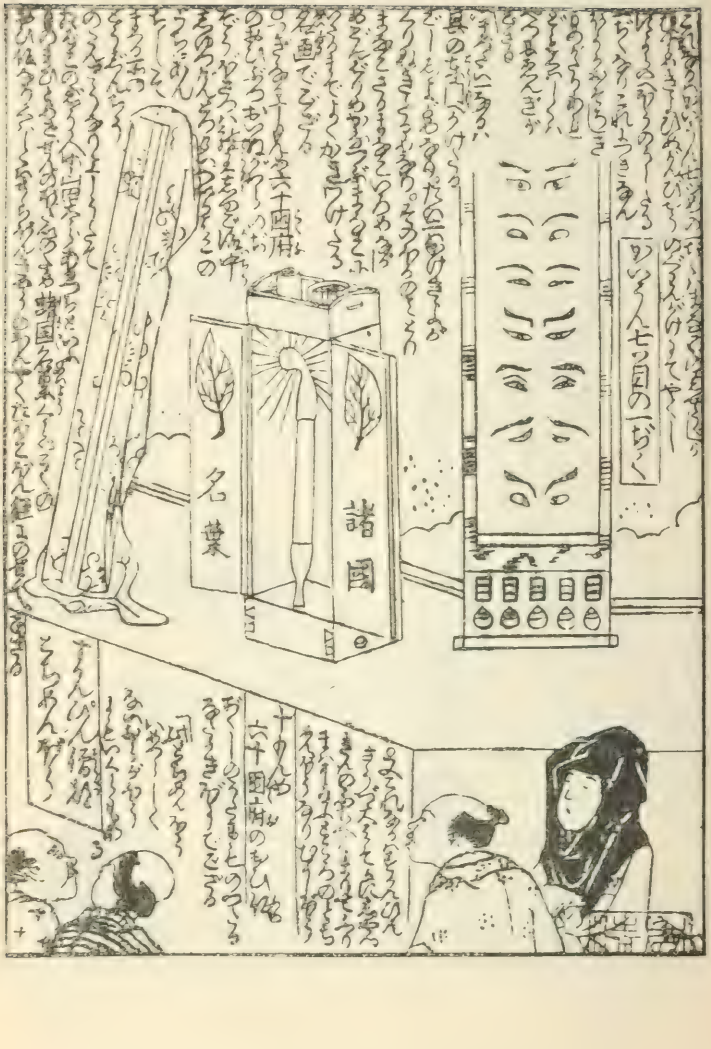

帳箱


紋日ぼさつ
苦患ぼさつ


日本一あやつりからくり






名葉
諸國


傳
吉
おやぢの目玉

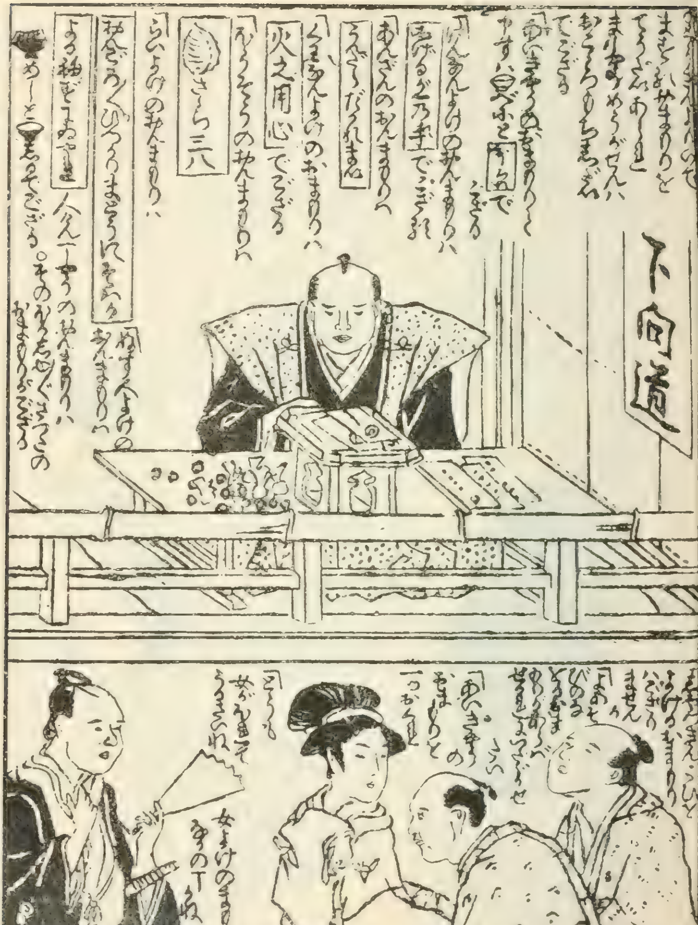


酒盛如来






作者のあんどせん内霊宝
上戸
別傳
腹立
文盲
酒の大徳利一斤和尚筆
樽磨大酒
からまんの異剣


下向道
火之用心
さら三八


諸色買帳奉納
金千両
金三百両
金五十両
狸百疋
金三分





呑込多霊宝縁記
開帳箱入頭作
済覧世道人傳方
讀書丸
賣所 京傳店
京傳戯作


又焼直鉢冠姫
稗史億説年代記
上
式亭三馬作
本材木町
西宮新版


又焼直鉢冠姫
稗史億説年代記
中
三馬作
材木町西宮新版


又焼直鉢冠姫
稗史億説年代記
下
三馬作
本材木町西宮新版

稗史家不重宝記

此そうし八代作者ハくさぞうしの初りより当世まで[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
年々[illegible]の画工ハ又[illegible]
[illegible]大全と[illegible]べし

江戸地本問屋惣印 ○当時出板の 大かたこれなり
◆艸さうし絵本[illegible]べし

◆通はたご町 うろこかたや 孫兵衛	○通油町 村田や 治郎兵衛	◆[illegible]や町 岩戸や 源八
◆大でんま町 山本 九左衛門	○通油町 つたや 重三郎	○よこ山町 岩戸や 喜三郎
◆通油町 丸や 小兵衛	○通油町 つるや 喜右衛門	○通はたご町 榎本 吉兵衛
◆通油町 丸や 甚八	◆山下町 いせや 治助	○[illegible]町 山口や 忠助
◆通油町 松むら 弥兵衛	◆[illegible]町 [illegible]や [illegible]	○[illegible]町 西村 与八

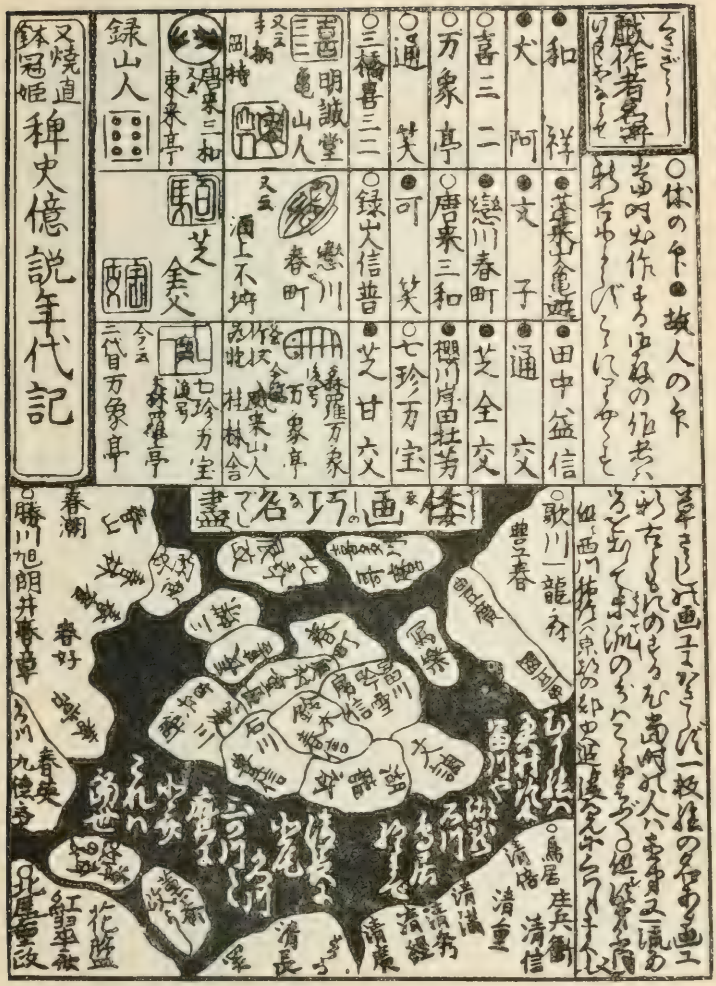
武亭三馬編纂

こゝしもちやう〳〵

○さうし表紙の[illegible]
◆[illegible]や 白本[illegible]
[illegible]の[illegible]西ハ村[illegible]

○赤本時代の作者[illegible]
◆[illegible]
[illegible]
◆[illegible]
[illegible]

○[illegible] いづみや 市兵衛
◆大でんま町 大和田出店
◆通塩町 奥村 源八
○[illegible]町 西宮 新六


くさぞうし
戯作者名寄
けさくしやなよせ
○作の下●故人の下
●和祥
●犬阿
○喜三二
○万象亭
○通笑
○三橋喜三二
●蓬莱山人亀遊
●文子
●恋川春町
○唐来三和
●可笑
○録山人信普
●田中益信
●通交
●芝全交
●櫻川杜芳
○七珍万宝
●芝甘交
喜三二 明誠堂 亀山人
又云 手柄岡持
恋川春町
又云 酒上不埒
森羅万象 後号 万象亭
風来山人
唐来三和
又云 東来亭
芝全交
七珍万宝
今云 森羅亭
三代目万象亭
録山人
又焼直
鉢冠姫
稗史億說年代記
浮世画名人巧の画盡
歌川一龍斎
豊春
○鳥居庄兵衛
清信
清倍
清重
清満
清秀
清経
清長
清廣
○勝川旭朗井春章
春潮
春好
春英
九徳斎
○北尾重政
紅翠斎
花藍

【大昔】むかし〳〵 おさなご くさの 風へ 赤本一冊 すがれる

【仝】ももたろう 鬼が島へ わたる 猿犬きじと 宝ものをとる

【仝】かちかち山の 兎にて 狸おやぢの こわいをきゝ 悪びをさばくる

【仝】うきれ つらねて うつろふ ちんちうおやる 猫 さんで

【仝】鼠のよめいりとて 鳴き夫人 あかるか らけ猫よぶ騒 むかん

【仝】あさひなが 見えて入なを かねを 金もうち つまゆかう

【同】けんどんでも そぎ鳥の舌を きって 狸おやぢの 縁をこむしぬる

【其後】花さかぢゝ もいさつを おれ木に 花さく

【仝】くものきだりよ ふる猫、をつけた ぜにがう ちくしうし よむ

【同】おかしおかし 日本へ ひのへ ものを いつもかく でまかせて 唐もく

【仝】いろごとの出入 けんじの ちびまけより お宝うの まくれから 神する

【仝】ぶんけいは まんまうろう 世帯の王 ごんけいと くびり 小人 ちん大きゝある 虎むくる

【仝】徒然百首の うちわある だけお やしきき 文 年をそきさ 風おなどの そう

【仝】庚申むさし六 十六むさし くしまう 目附絵と ますみれ

【仝】ちやせんがく なれてあう のへ人 つくりひげ そいがる

【仝】さんや かしひ うしし 馬にのる あとござれて でかく

【中古】やがとおけもの と そがもて きつねのさかへ おくられ

【仝】まちの山 より わをそぶきを いかれ

【仝】あらゆる山の かんがへす はじまろ よっぽど あくらしく

【仝】土佐ぶし 外記ぶし と ござる 通りものの ある

【仝】通りもの いきみを つうじんを そやし もてまう

【仝】あまいちの きらぐ たのしく 本やうける

【仝】こどつけの あくむやうい ハ はよれ ようぞ こじ傾う けうとらふ

【仝】口合ご愛る とかしもち 愛句を 地口を おもしろう


本
全
画
全
松會開板






菱川吉兵衛筆

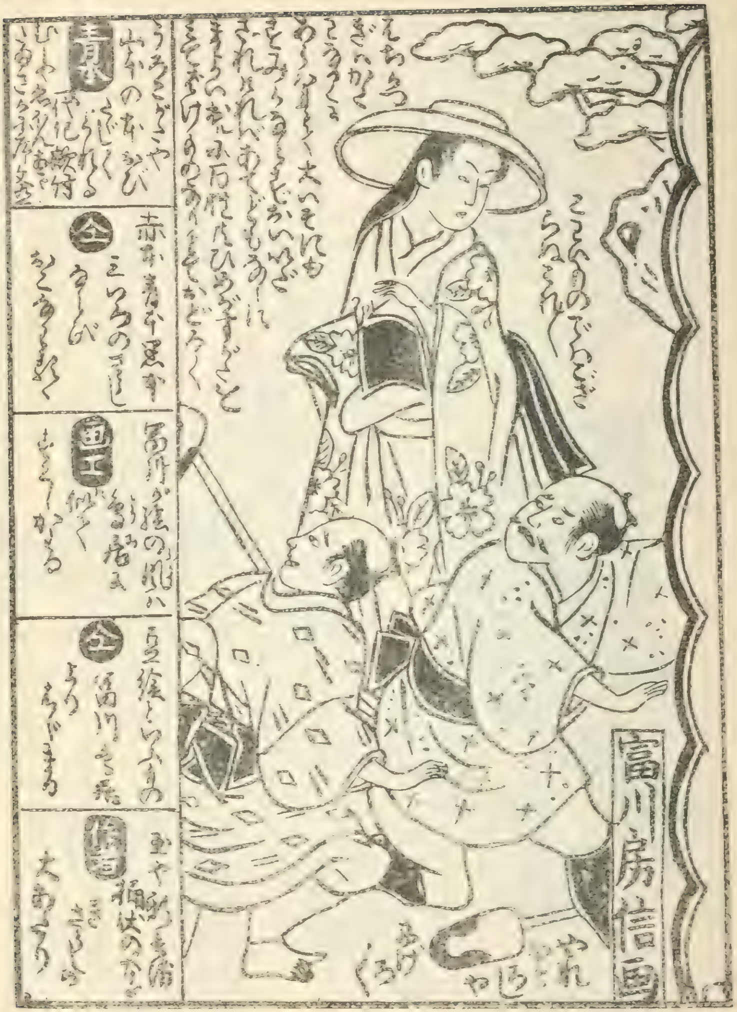

赤本
公
画工
墨本
作者
繪師鳥居清信筆


大和絵師 鳥居清倍画


鳥居清満画


鳥居清重筆


繪師 富川吟雪


富川房信画



青本
画工
作者
古風の恋川春町画
清経画


古風の北尾重政画
古風の清長画


古風の北尾政演画
見物の人ハ古風の春朗画


書本
校合
作者
画工
全
表のうらハ
北尾三治郎画
新
下り


瀬戸物焼継
中古の清長画
中古の勝川春章画
中古の北尾重政画


青本
大人の
画工
俗ニ
北尾勝川の
一流の画工
作者
恋川春町画


三馬
古風の春英画
古風のうた麿画


青本
画工
作者
通笑


青本
画工
作者
北尾政美画
中古の役




青本
画工
仝
仝
作者




當時部
豊廣画
長喜画


豐國画





右全部十五葉画工諸名家図
式亭三馬戯模写
中古
のち
北尾紅翠斎畫

作者名寄拾遺

恋川好町

唐来三和門人 亀遊女

万象門人 藪[illegible]門

畑芋[illegible]

千差万別

壁前亭九年坊

竹塚翁東子

南陀伽紫蘭

劣脇 体の 同屋追加 かや町 宝屋[illegible]

▲中古まで自画作とする人々

田中益信

恋川春町

▲中古まで自筆自作の人

観水堂丈阿

画工名寄 これハ家々まぎらし 板下も体の部

鳥居清長 勝川春英

喜多川歌麿 北尾政美

北尾政演 北斎辰政 蕙斎政美

唐来三和 画文の外 [illegible]

青本の画をかく [illegible]

奥村 鈴木春信 石川豊信 文調

湖龍斎 勝川春章 春好 春潮

春林 春山 春雀 春常 勝川門人

哥川豊春 [illegible] 選て加之

▲名人戯作者六家撰

喜三二 恋川春町

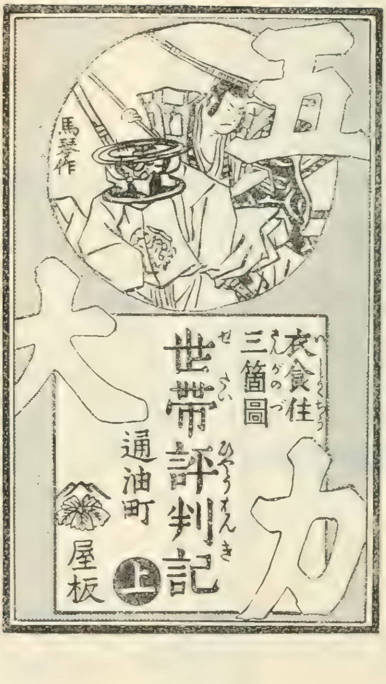
万象亭 通笑

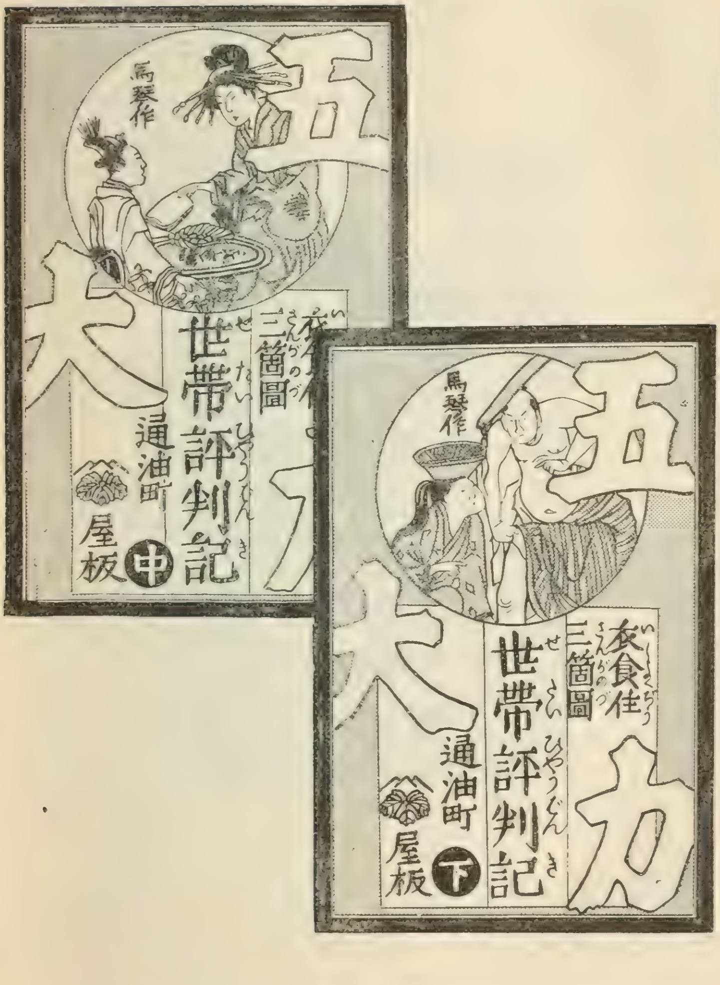
芝全交 唐来三和

三馬自画作 [illegible]

名作青本略記

[illegible]


五大力
衣食住三箇圖
世帯評判記
上
通油町
屋板
馬琴作


五大力
馬琴作
衣食住三箇圖
世帯評判記
通油町
屋板
中
五大力
馬琴作
衣食住三箇圖
世帯評判記
通油町
屋板
下

賀入て一ツ書。机の上の道具市、
筆の鞘と睨る。当年の一番鎗
撰して書集め。趣向の古衣市ハ
帋の皺を伸し。新物の十番袴
五欲に迷ふ猿ハをかくの口元て
三冊に拵へ戊春稗史ハ。板元が
いましめさん学の手附金
うけとる。作者の紙屑篭

享和壬戌春正月

敎二八文字舎之筆一

曲亭馬琴識





立役之部

極上上吉 筋門金平郎

上上吉 飛田茶が原

上上吉 米挽弁之助

上上吉 唐見世火八

上上 唐紙障次郎

上上 片対比じやる蔵

上 三条勇兵衛

上 五嶋門勝八

上下 加賀滑彼良

上 紙屋色蔵

実悪之部

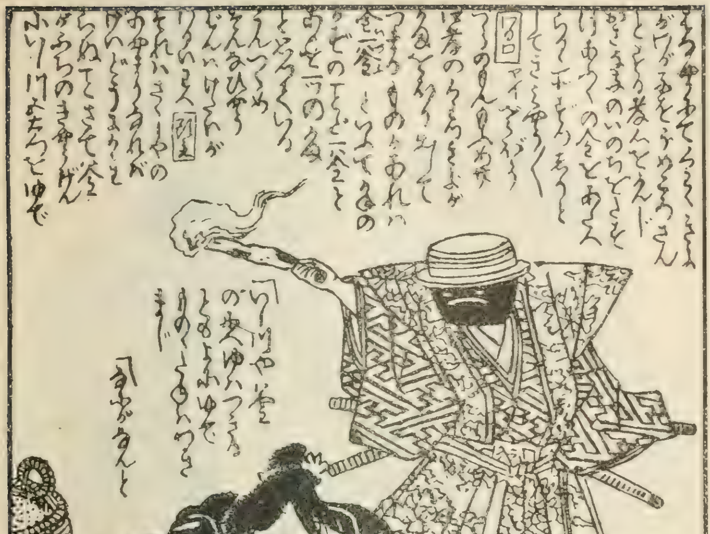



大上上吉
上上吉
座外形之部
上上吉
上上
若女形之部
極上上吉
上上吉 白地すり八
上上吉
上上
至極上上吉



大極上上吉








上上吉
東 茂林寺


上上吉米櫃外之助


上上吉 鹿見野火八
上上 唐紙障治




上上





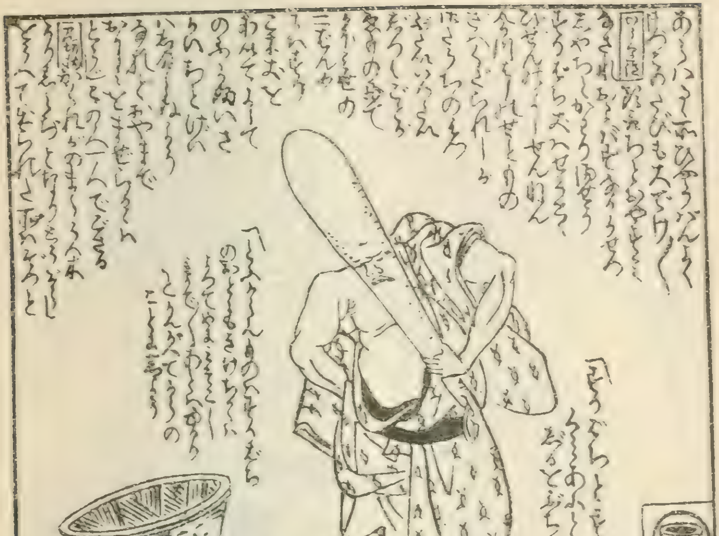



大上上吉
極上上吉




上上吉 書生辰五郎
上上吉




上上吉
白地すり八




上上吉
上上






南京寺
瀬戸物院唐草錦手青土


至極上上吉
錆川太刀藏





世帯評判記跋
豊国画
曲亭馬琴作
著作堂主人著
△俳諧節用鈔 全部二冊
△戯子名所六家集摺色紙
馬琴作 豊国画
△手業調法記
同作 両面摺
○いづれも出来

紅皿欠皿往古噺

觀水堂丈阿作
鳥居清滿畫

將軍源義教公の管領細川左衛門尉家來菊岡多宮は、笛の名人たるに依つて、來る永享八年正月三日、御松ばやしの役義を仰せ付けられ、天曆の帝の御寶物雨龍といへる名笛を將軍より貸したまはるの旨、左衛門申し渡さるゝ。此の御笛は教筆を以て雨龍の二字を蒔繪にしたる名管なり。

「精進潔齋して役義を相勤めば、早々義教公へ返し奉るべし。今まで相勤めたる者有りと雖も、其方が藝堪能なる故なり。手柄おや〳〵」

「拙者如きの未熟者へ大役仰せ付けられ、殊さら玉笛を預り奉る事、冥加にかなひ、有り難き仕合に存じ奉ります」

爰に荒浪金藤太は、去年まで松囃の笛の役儀相勤めける所に、當年は多宮へ仰せ付けられ無念に思ひ、多宮をなき者にせんと窺ふ。かくて多宮正月三日になりしかば、我が身を清淨にして、かの玉

笛をとりもち、御館へ夜をこめて行きけるに、未だ御門開かざりければ、挾箱に腰打ちかけ、刻限を待ち居たり。

『まだ夜が深いさうな、鶏の聲が聞ゆるが、もう七ツ半でもあらうか。』

多宮御門の開くを待ち居る所を、金藤太一文字に來り、提灯を切り落す。多宮すは曲者と、拔き合はせ、家來を殘し、くらがりまぎれに金藤太を追つてゆく。

『此奴手におへぬ奴だ。』

『逃げるは得手者、馬鹿なつらな。』

金藤太取つて返し、多宮が奴を大袈裟に打ち放し、挾箱を探り明けて雨龍の笛を盗み、行方知れず逃げ行きけり。

『此の笛さへ取れば豐年だ。』

多宮笛を盗まれ、仰せ付けられし松囃の役儀勤めざる事、將軍の御聞きに入りければ、大いに怒り給ひ、刑罪に行ふべきよし、主人左衛門へ仰せつけらるゝ。

『己はにくい奴ぢや、念に念を入れ、この左衛門が申し渡した御笛を盗まるゝとは、我が目眼に違うた男ぢや。しかし其の盗賊の首切つて、御笛をそへて持ち來れ、汝が命は此の左衛門が申し預る。

それまでは武士の交はりはかなはぬ。」と大小をもいで追放し給ふ。
「あゝ笑止な事かな。」
「はて扨運のかひない男だ。」
「サア早く出たく〳〵。」
「早く出て行きやれ。」
「主人の御心入れ有り難い。金輪奈落御笛を尋ね出し、持参仕りませう。」
爰に浪華堀江に名高き香具屋あり、父はみまかり、娘二人有りけり。姉は先腹の子にて十七歳になりぬ。妹は當腹にて十六歳になりしが、此の母かたましく姉を憎みて、總領なれども我が産みたる娘に壻を取りて、父の跡を讓りけり。姉を憎みて欠皿のお捨と名づけ、妹を愛して紅皿のお花とぞ呼びける。
嘉「かゝ様おまへは、今日頭痛がなさるとおつしやつたから、玉臺寺様からまゐりましたお茶を入れましたから上りませ。」
主「何といやるぞ、玉臺寺から来た茶を入れた。そりや誰にことわつて我儘な事しやる。こりやこなたの家ぢやない、お花の家で御座るぞ。其方は壻十平が脛をかじる、かゝりうどの貧乏神ぢやないか

かや。」

花「ア、氣の毒な事をかゝ様はおしやる。」

上「おすて様よう氣がついた。慮外ながら私にも五郎七茶椀で一ぱい下されし。」

惡事千里を走る世のならひ、御笛の詮議きびしく、金藤太何とやらん氣味惡く、所詮あらはれぬ内と思ひ、病氣と云ひ立て暇を願ひ、知行を捨てて浪人の身となり、主人の道具を盗み船に積み、行方知らず立ち退きけり。

小間物屋多兵衛香具を受けに來る。お花多兵衛と姉お捨の戀を取持つ。

多「兎角お前をたのみます。」

花「これ多兵衛さん、御頼みの事を姉様へ云うたれば、ぬしもたんと御前を思うておや、うれしう思はんせ。」

母「むゝ欠皿めがちゝくるのか、是れを幸ひたゝき出してくれう。南無阿彌陀佛々々々々々。」

細川勝元の御臺は歌道に心を傾けられけるが、鹿の妻戀ふ聲を御聞きなされたく、十平かたへ鹿をよせる笛を差上げよと、仰せ付けらるゝ。

花「どこぞに奇妙な笛はない事かな。」

上「さりとは味い商ひぢやが、どうもさう云ふ笛がない。女のはける足駄を笛にすると云ふ事、大うそ。」

金藤太お捨に戀慕して、ひそかに忍び様子を聞く。

金「いや笛ならこつちに手がゝりがあるぞ。」

金藤太金六と名を改へて、此の家に入り込み、お捨を口説く。

金「度々ふみを進ぜたに、よう一度も返事をなされぬ。我ちらと聞けば、鹿のよる笛が入るげな。我が方に奇妙な笛がある。女房にならしやれば笛をやりませう。」

捨「何といはしやんす。鹿をよせる笛があるとや。どうぞちつと貸して下さんせ。アレ呼ぶわいな。爰放さんせ。女房になる事はいや〳〵。」

紅皿仲人して多兵衛を忍ばせる。

花「姉さんはどこにぢや。用がある。ごさんせいな。姉さん、お捨さん〳〵。」

多兵衛忍び来る。

多「お花殿はどうする。大分夜が更けるが。」

上「コリャ欠皿よ、金六殿の女房になるとな、百両己が貰ふ約束、それに其方はいやぢや〳〵とい

ふ。親のよいめに遇ふを、きらふ不孝者奴、一日も置く事はならぬ。丸裸でうせう、出て行け出て行け。」

拾「私や命取らるゝとも、金六殿と添ふ事は否で御座んす。料簡して下さんせかゝ樣。」

十「コレ〳〵陪者人、御前の世話やかずともすむ事を。ようごんす、是でも非でも此の十平が金六の所へやつて見せう。氣づかひさんすな。」

金六十平方へ來りお捨を貰ひにかゝる。

金「御袋へも申し入れた通り、お捨を女房に下さらば、支度金百兩進上致さう。」

十「お捨事は承知致いたが、我が爲にも姉分、金を出さうと云はしやればどうも進ぜられぬ。三文も入りませぬ。聞けばそこもとに奇妙な笛を持つて御座るげな。それを夫婦のしるべに貰ひましよ。明日の晩其の笛を持つて、お捨がねやへ忍んで夫婦の契約なされ。」

お花立ち聞きする。

花「十平どのは何と合點して、金六殿へ約束する事ぢや。どうも麻布ぢや〳〵。」

お花うらみ云ふ。

花「こなさんは相談もなく、金六殿とお捨樣を添はさうとは、どう云ふ事で御座んす。かゝ樣と一ツ

になつて、欲に目がくれたのか。多兵衛殿へ私がたたぬ。どう思つてゐさんす。」

十「やかましい。くど〳〵と立つの立たぬのといらざる差出た事を。われが多兵衛手前へたたねば、己もお捨殿と金六と夫婦にせにや、御袋と金六へたたぬ。何でも親の合點せぬ多兵衛にやらるゝ者か。それが氣に入らずば入聟のこつちやに依つて、己が出て行きや濟む。己が胸の内も知らず、つべこべ聞きたくもない。」

捨「賴みに思つた十平殿がさうならんしては、もう私もこれまでおや。本の母さんが居さんしたら、かう云ふ事もあるまい。」

お捨多兵衛云ひあはせ、十平がやかたを立ち退かんと夜の更くるを待ち、逃げんとする所を十平に見付けられ、引きもどさるゝ。

捨「アヽ、かなしや。」

多「南無さん仕損つた。」

十「こりや姉御、こなたを逃してすむものか。宵からのそぶり、かう云ふ趣向と云ふ事は、己が睨んで置いた。そこで十平が寐ずに居た。人の知らぬ内にそつと這入らしやれ。も一人の人も早く内へ歸んだがよい。どうせ逃しもせぬが殺しもせぬ。」

十平金六を誑り、お捨がねやへおびきよせ、十平は夜著の内より飛んで出で金六を踏みつける、

十「此の笛を奪はん爲の計畧。天暦の帝の寶物雨龍と云ふ御笛。よう汝盗んだな。其の時汝に殺された磯平が弟十平なるぞ。兄の仇、繩ぶつて柴殿へ引き出し、其の上汝を拜領して一寸刻みにする。覺悟ひろげやい。」

金「エ、口惜しいなあ。」

十平笛をうばひ取り、多兵衛に云ひけるは、

十「此の御笛故に、金藤太に殺されし磯平が弟は、拙者で御座ります。おまへの御追放に御なりなされ候も、兄が最期につき承りました。金藤太をたばかり、一管をうばひ取り候。早々左衛門さまへ御訴へ、御勘氣御赦免を御願ひ給ふべし。金藤太は縛め置き候間、召連れ參るべし。」とご申しける。

多「さては磯平が弟にて有りけるよな。此方の働きを以て再び武運の花さき申さんこと、大慶に存ずる。」

捨「扨は十平殿は多兵衛樣の御家來筋であつたか。」

十「卽ちお捨樣と御夫婦の御契約なされ、末々御繁昌願ひまする。」

花「彌御前の妹ぢやと思召して下さんせ。」

既に菊岡多宮は雨龍の御笛に、盗賊金藤太に繩打つて、柴殿の館へ行き段々を訴へければ、早速對面あつて御笛を受取り給ひ、約束の如く大小を下されし。先知の通り所領を下さる由、申し渡さるゝ。さて金藤太事は、召連れ候十平が爲には兄の仇にて御座候間、下し置かれ候やうにと願ひ申さるゝ。

柴「科人の儀は、願ひの通り十平にくれる。存分に計らひませい」

十「サア是れから己ずたくにさいなむぞ。」

かくて多宮は武運の花開け、先知を賜はり歸參の目見得、夫婦ともに御禮申し上げる。十平も陰徳陽報にて、御褒美を下され、御笛の御用仰せつけらるゝ。欠皿お捨末廣をさし上げる。菊岡多宮太刀折紙にて御禮申し上げる。千秋萬歳目出たしく。

紅皿欠皿往古噺　終

金銀先生
皆運先生
夢中の印噺

勝川春章畫作

夫れ陰は重く濁れるが故に、續きかたまつて國となる、是れ下界なり。陽は輕く淸めるが故に、たなびき登る、是も天の始めなり。欲界の六欲天、四十九院、三十六星、二十八宿、其の中にも當世大通り、生煙草の煙にじようじ、たなびき登つて星となる、これ近年の出來星とや云はん。其の星を數ふるに、野良のあけ星、夜這星、皆有頂天と闇雲の間に至る。それ素一分は、漸く南鐐一片にたなびき、其の樣色々あると雖も、畧して茲に酒色の二星をあらはし、通眼にさらさん事を願ふ。

野良のあけ星「いま／＼しいあのあまめは、最うゝやァがればいいに。そうてえ愛の家は、つきの悪い家だァ。」

ちんぷん神田の八丁堀、三ツ星屋が合店に、安長屋黑兵衛と云ふものあり。この内の居候に子の年屋秋助とて、同じぶんざいの忘者。兩人共に金なき事を思ひ寝の、一すゐの夢をむすぶ。

「ぜんざい／＼我こそは、ありすて天の大通星、よしなん星と云ふ星なり。汝等兩人をこのまゝに捨

て置く事不便に思ふ故、今此の二ツのほしを與ふる間、お釜を起し、これをかんがみて世の人に、あいつはほしをつき當てたと、云はるゝやうにせよ。」と、高らかに告げたまふ。

かくて兩人は、いつか茫然と夢さめて、あたりを見れば、何か紙につゝんである。取つて見れば、二ツの印、其のかたち一ツは金。一ツはト是れなり。兩人は大いに悦び、黒兵衞は金此の印かたちを考へて金銀をまうけんと云ふ。又秋助はトこの印かたちを見て運を開かんと願ひ、互に立ち分れ、是れより黒兵衞は金銀先生となる。又秋助は皆運先生と改名する。

『何でも己がのは、書三の印によく似て居るから、是れから女郎買となつて金銀をこしらへるつもりだ。えんがあるなら又あひませう。おさらば〳〵。」

「私のは酒の印によく似てるから、私も是れから酒屋へ近くよつて、御互によき身の上になつてから對面しませう。先づ夫れまでは行け、さらばア。とんちゝちん〳〵ちんてん〳〵〳〵。」

是れより兩人通道の奥義をきはめる。よしなん星へ神酒供へを上げて、出立を祝ふ。

かくて黒兵衞は宿を立ち出でしに、幸よく、道にて金子百兩拾ひければ、大きに悦び、元來色男なれば、まづ本田頭に五分さかやきと出かけ、其の外色々見得を拵へ、授かりし星のかたちを慕ひ北國へ行き、中さんを買ふならば金銀のふゑるは定と思ひ、是れより大通の女郎買となる。

愛結「ちつと慾が深いの。」
黒「これ二郎ばう、もちつとひたひを大きくしよう。」
又秋助は、印のかたちを見れば酒の印に似たる故、何でも酒屋へよらんと思ふ折節、幸ひ國者が新川の酒屋に、れつきとした番頭株で居る故、これを尋ね行き、段々と話の内、手前物の酒を出しければ、秋助悦びて飲む内、持ちたる印のゐとくにや、酒をのむ事に妙を得て、時の間に四五升飲みほしければ、番頭膽をつぶす。番頭餘り奇妙に思ひ、旦那へこのよしを云ひければ、これは珍らしい飲手だ。酒商賣の冥利だによつて、劍菱一樽出して飲ませければ、秋助は何の苦もなく樽のかゞみをぶちぬいて、口をつけて、がぶ〳〵と飲みければ、家内の者膽を潰す。
「扨々きめうな飲手だ。きつい者〳〵。」
「オヤけしからねえ、どうせうなう。」
「此の新川でさへ、あのやうに飲む者は無い。もう一樽ふるまひませうか。イヤ早つがも無い事だ。ぐいのみとはあの事だらう。」
秋助思ふやう、是れは誠に印のゐとくならん。幸ひ是れまでおぼえし聲色物眞似をたてにして、酒を飲んで金を取る工夫をして、是れよりたいこもちとなり、皆運と云ふ表徳をつける。

黒兵衛は、晝夜吉原に入りびたしになり、金銀先生と侍かれ、三十六通の親分とぞなりにける。

『これきん公、今夜もしまつて居る筈かの。』

「よしさ〳〵何でも私が承知杯、先づ吾妻やで一ぱいのみやせう。」

さて皆運は帮間となり、吉原は云ふに及ばず、品川、深川、根津、音羽と諸方をめぐりあるき、一ぱい飲んでは一分とり、二はいのんでは二分貰ひ、いつの頃よりか酒を見ると目色がかはり、飲んでは取り取つては飲み、のみとりまなこと綽名をつけられ、色々つとめて段々と金をもらひける。

『何と皆運、さつといたむはどうだ〳〵。』

「是れは〳〵、有り難いの濱焼で、一ぱい飲みかけ山にまつち山〳〵。」

かくて金銀先生は、久しぶりにて皆運に對面し、悦びの餘り多くの幕下を集め、女郎買と酒飲の祕密を話す。

『先づどなたでも、酒を飲まうと思ふならば、いやな所を無理のみに飲んで、度々小間物店を出した跡で、袖の梅で据風呂をたてて、這入つたがいい。ゑひのさめるは妙でごぜえますよ。」

「そして小間物屋だの、せり呉服だのと云ふ奴は、女郎が二階へ呼んで、燗ざましの酒に客が食ひ残しの硯蓋を出したなら、めつたに油断はねえ所だぜえ。いつでもしまひはかりごろもだよ。」

「なるほどきつい所だ。」
金銀、皆運の二人は、二朱一分づゝ客を切つても埒があかず、女郎をひいて遊んだ所が高の知れた事なり。我々顔の賣れたを幸ひ、花會を催しなばよからんと相談して、先づ方々と頼みちらかし、高いすり物を賣りつける。

「亀卜が歸りましたなら、見せますで御座りませう。」

「左樣なら、宜しう御賴み申します。」

「何だ金銀と皆運が花會だの、又痛えゝ蔵前のひゝら者はどうしたやら、一分やつてそれから行きねえ、畫は大方長谷川町の親父であらう。御玉が池の和尚も、いつ見てもえた手だの。」

「此の中の業平堀の附書はどうしたやら。又二ツ目の大工さんが、杜若の聲色つかつたであらう。」

夫れ東武に一ツの物あり、其のかたち無盡に似てむじんにあらず。世の人是れをいやがるなれば、又遊興とも見えず、そも是れは何だ〳〵、これ大通たる者の商賣ならん。先づ一ひらのすり物をまはして人を集め、琴をしらべ妙音をまじへ、是れを聞かしめて後禮物を取ると云へり。先づ會樂伺候の人種は蘭路、露友、浪崎、鳥羽や、加賀とし、馬いつき、きねや、山彦、しんとゑ、おいほ、これ等なり。

かくて兩人、首尾よく會もすみければ諸禮に廻り、さて諸勘定して見た所が大のきまり。兩人は大いに悦び、日に增し交際ひろく、段々金がふえければ、尚も名をあらはさんと、青樓の俄、二丁町の積物、色々世話なして、一生酒色にほこり安樂に暮しけるも、偏に印のゐとくなり。

「イヤモ大のきまりのたらふぐ汁、一はい互に飲みかけ山屋のあわゆき〳〵。」

「何と心持の惡くないものだの。」

兩人不思議の靈夢に依つて、日出たく榮えし事、誠に天下太平のしるしならんとて、皆人樽肴をつみ重ね、國家あんをんとこそ祝ひける。

金銀先生 皆運先生 夢中の印斷　終

金々先生榮華夢

戀川春町畫作

文に曰く、浮世は夢の如し、歡びをなす事いくばくぞやと、誠に爾り。金々先生の一生の榮華も邯鄲の枕の夢も、共に粟粒一炊の如し。金々先生は何人といふ事を知らず。思ふに古今三鳥の傳授の如し。金ある者は金々先生と成り、金なきものはゆふでゝとんちきと成る。さすれば金々先生は一人の名にして、一人の名にあらず。神錢論に謂はゆる、是れを得るものは前に立ち、是れを失ふものは後にたつと、夫れ是れこれを言ふこと云々。

畫工　戀川春町戲作

今は昔片田舍に金村屋金兵衞といふ者ありけり。生質心優にして浮世の樂しみを盡さんと思へども、至つて貧しく心に任せず、依つてつくづく考へ、繁華の都へ出て奉口を稼ぎ、世に出でて思ふ儘に浮世の樂しみを極めんと思ひ立ち、先づ江戸の方へと志しけるが、名に高き目黑不動尊は運の神

なれば、是れへ參詣して運のほどを祈らんと詣でけるに、はや日も夕暮近くなり、いと空腹なりければ、名代の粟餅を喰はんとて立ち寄りける。

抑、目黑不動尊は靈驗著しく、普く諸人の知る所なり。本尊は慈覺大師の作にして、寺號を瀧泉寺といふ。此の所の名産粟餅並に餅花といふものあり。竹を割りて華鬘のごとく結び、是れに又白黄の餅を花のやうに付ける。是れを餅花といふ。

金兵衞空腹のあまり、粟餅屋の奥座敷へ通りけるに、折しも粟餅は出來合はせず、少時待ち居る其の内に、旅の勞れにや少し眠氣を催しけるゆゑ、側にありあふ枕引き寄せ、すや／＼思はずまどろみけるが、夢に何處ともなく法泉寺の御免駕を釣らせ、黑がも仕立の舁取、十一二歳の小僧、其の外作頭手代夥しく召連れ、前に進みたる年嵩の男、上下の襞を正し威儀をつくろひ申しけるは、「抑吾々は神田八町堀に年久しく住居致す和泉屋清三と申す者の家來なり。然るに主人清三漸う老衰致し候處未だ一子なし。殊に今年剃髮致し名を文粹と更め候、依つて跡式を誰にか讓らんと探せども、讓るべき人もなく候處に、幸ひ此の度君出世を望み給ひ、是れまで來り給ふ由、主人年來信心致す萬八まん大菩薩の告げにまかせ、是れまで吾々お迎へに來りたり。願はくは主人の望みに任せ給へ。」と無理に駕にうち乘せて、何處ともなく連れ行かるゝこそ不思議なり。

「嬉しやノ＼、やうやく若旦那を探し出したぞ。」

「うつちやつて置け、煤掃には出ようと言つたは此の事だらう。」

　頓て駕より出され、伴頭手代前に立ち伴はれ行くに、其の住居の結構さ、實に珠の階段瑠璃の幌ともいふべき有樣、屛風紙戸には金銀の砂子を散らし、衝立には金銀の日輪月輪を現はしたり。程なく主人文隨立ち出で歡びの眉を開き、則ち金兵衛を泉屋清三と改名させ、七珍萬寶悉く讓り、天の祭ともいふべき程の酒を出し、親子主從祝儀の酒宴を開きける。

　金兵衛家督を繼いでよりは、爲す事もなければ、漸々と驕奢に長じ、日夜酒宴のみ事とし、昔の姿に引替へて、今は頭も中剃を鬢のあたりまで剃込み、髷を鼠の尻尾ぐらゐにして、本田に結ひ、衣類は黒羽二重づくめ、帶は天鵞絨又は博多織、風通、回々織などと出かけ、あらゆる當世の粹風を盡せば、類は友を以て集まるの慣ひにて、手代の源四郎、幇間の萬八、座頭の五一など心を合はせ、愛をせんどと教唆しけり。

「四谷新宿馬糞の中に、女郎衆ありとはつゆ知らず、きたノ＼ノ＼くさぬきの金比羅」

「ナント旦那、お宅ではかりの騷ぎはトント冴えませぬ。明日は吉原へ行山と出かけてはどうでござりやす」

其の昔金村屋金兵衛といひけれど、其の名をとりて諸人金々先生ともてはやしける。金々先生此の者共が煽りに乗り、不圖吉原へ行きけるが、其の時影野といふ女郎に馴染み、親の意見も何のその、一寸先は闇の夜と、彼の手代源四郎萬八を連れて、ひたと歩みを運びける。金々先生の服装は、八丈八端織の羽織に縞縮緬の小袖、俳優染の下着、龜屋頭巾に目ばかり出したといふ拵へなり。をりふし年越の夜にてありけるが、彼の源四郎が勸めに、豆は古しとて、金銀を升に入れ、節分の祝儀を祝ひけり。

其の後吉原の遊びも爲盡し、それより辰巳の郭へ出かけ、おまづといふ女郎にはまり、多くの金銀を遣ひけれども、おまづは勤めのならひとて、金々先生に嵌まりたる氣色に見せかけ、内實は源四郎と出來て居て、茶屋女と挾み言で、「ゲコンカシコロロサコンケガコキコナカサカイコト。」などと話をするが、金々は一向心付かず、今までは一筋に眞實と思ひけるが、今夜のおまづが仕打、どうも合點ゆかずと大きにいざを起し、おまづとも切れてしまひけり。

それより諸所にて大きく嵌められ、最早光も失せ果て、日頃這ひ屈みしものも知らぬ振にて寄付かず、無念至極に思ひけれども詮方なし。今は輕駕で押させる力もなく、漸く裾端折に桐の柾の下駄と出かけ、心細くも只獨り品川さして通ひける。

「きのふまでは金々先生ともてはやされ、猪牙や四手に乘りし身が、今はぽつちに日和下駄、かはれば變る世の中ぢやナア。」

金々は日々驕奢に長じ、今は身代も斷うたと見えければ、父文藏大きに怒り、手代源四郎が勸めに任せ、金々が衣類を剝ぎ取り、昔の姿にして追ひ出しけり。手代源四郎は金々先生をそゝのかし、多く金銀を遣はせ、其の餘りは皆我が手へくすねける。依つて物を盜むことを源四郎とは申すなり。

金々も今は立ち寄るべき方もなく、如何はせんと呆れはて、途方にくれて歎きけるが、不圖粟餅の杵の音が耳に入り、驚いて起き上れば、一炊の夢にして、蒸籠の粟餅はまだ出來上らず、金兵衛はハッと横手を拍ち、我文藏の子と爲りて榮華を極めしも、既に三十年、さすれば人間一生の樂しみも纔か粟餅一臼の内の如しと初めて悟り、其の儘在所へ引き込みけり。

金々先生榮華夢

高慢齋行脚日記

戀川春町畫作

鎌倉最明寺殿の三代にあたつて、扇ヶ谷に一人の隱士あり。萬の遊藝に達しけるによつて名を萬屋と呼び、庵を高慢齋と號し、手に掬ぶ岩の生清水すみ侘びて、多くの弟子を扱ひ、俳諧の師範をして暮しけるが、なほ諸國を巡りて、諸藝の奧義を辨へんと思ひ立ちける。

然るに唐土漢の揚雄が云ひし如く、高明の家鬼神これを憎むの譬へにて、諸々の天狗、萬屋が慢心きざさば、しけこまんと伺ひける。

「彼奴はたゞ〳〵しきをきらつて、斯の通りの高慢、我等が仲間に引き込みませう」

扨も扇ヶ谷の高慢齋萬屋は、俳諧修行のためにと、庵室をば高弟の法外と云へるに預け、始めて旅を信濃路へと心ざし、とある山路を辿り行くに、俄に日の暮れもたりければ、是非なく木陰に頭陀を卸し、袖をかたしき睡眠けるに、不思議や俄に空かき曇り、闇雲立ち重なり、雲のうちに異類異形のもの見はれければ、餘りのおそろしさに、日頃信ずる處の觀世音を念じ、並に延命を乞ひ觀音經を

讀みて、此の難を遁れける。

雲中に現はれたる其の姿、鼻高々として林興生じ、其の外の有樣は東鑑繪の如し。いかに面々、唐土の般若提婆いざ知らず、京都、大坂、奈良、堺、少しにても慢心ある輩あれば、吾が道に引き入れずと云ふ事なし。鎌倉の萬屋を吾がいきちよんの魔道に引き入れたと思へども、少し〳〵信心の心ある故かなはず、依つて彼が弟子法外が皮肉に分け入り、吾々が道に誘はん。各もそれの弟子の皮肉へしけ込み給へ。」

おの〳〵相談終つて一銚子出すと、其の儘茶碗にてぐい飲み、熱鬧の煙と共に消え失せける。

高慢齋萬屋が高弟法外は、萬屋が留守中大勢の門人を集め、折々月並の定會を催しけるに、彼ももはや彼のきん〳〵天狗の乘りうつりけるにや、俳諧の風儀も惡しくなり、定會に弟子出でざれば書付にて句を取寄せ、執筆任せにして、善句にもかまはず書き入れさせ、或は惡しき句にも、點料さへ多ければ高點などをかけ、其の上門人をも俳諧の後にては、何處やら知れぬ北の南の巽のと得知れぬ方へ誘ひける。是れ全く天魔の所爲とぞ知られける。

萬屋が高弟法外に「なんと皆樣、兎角俳諧は流行が重で御座ります。それに順じて、土佐の又平と云ふ身裝では俳諧も冴えませぬ。とんと私が胸に任せて、各々御姿を改め給へ。」「我等御覽の通りの

鎌倉武士、どうぞきん／＼といふ身に御取立て下され。」

法外俗が思ふまゝに人々に勧め込み、執筆言門に吩咐けて鎌倉當世風に仕立てける。

法外が勧めを合點せざるもの中にありけるが、折節一陣の風吹き來り、忽ち一叢の黒雲下ると見えしが、それより各合點し、法外が云ふ通りに髪容を改めて、きん／＼いき／＼といふ身になりにける。

「何と先生、片田舍に住む身程ふつゝかな事は御座りません。先生のお陰でかういふすいた風をも見ます。」

「僕此の鎌倉へ参らぬは、頭は棕櫚箒の如く、衣類は錢金をかけても、矢張淺葱裏でくすぶりましたらう。」

「どうも皆様いへませぬ。さりとはお氣どりがよいこと。たちまちお身が出來ると云ふも、まつたく俳諧の力で御座る。是れから段々僕が、及ばずながらお仕込み申し上げませう。とんと暮左衞門様の本田は天幸が藥鑵と來て居ます。おそれ／＼。」

爰にまた其の頃小袋坂に、村田自休と云ふ者あり、茶の湯に自ら千利休をも欺く氣にて、野郎頭にて和尚と仰がれ、無上にくすぶつた身装をすれども、新たに門人を引き付けては、例の一物を取込み

ける。是れにもはや、彼の天魔の先立つて乘りうつりしなるべし。とんと是れから茶と花は、自休先生をお頼みなされい。」「松さん御覽なされい。私などはもうよしの如くの巧者。ちとした稽古は我等に御まかしなされい。」

人のもて囃すに從ひし、村田自休、法外と心を合はせ山吹の色をせしめんと、自休は古茶碗を接ぎ合はせては南京と曰き、茶杓を削りては相應に名付け、法外は文徵明の手跡も習ひし故、唐人あかしでなぐりつけ、是れに據りを付けて、趙子昂やら米元章などと詐り、人に賣付ける。

村田自休新弟子を拵へと、法外と心を協せ小道具を賣付ける。

『是れ法外見給へ、我等細工のよい事を。我が細工などと云つても折紙が物はある。」

「又味噌ではないか、斷う言いた所は道風は其方へ御座れだ。是れをば祝允明と僞りませう。」

「此の茶碗は紛れもない南京でござる。お求めなされ。私が申し込めば、一枚ぐらゐでお手に入りませう、下直なものでござりますぞ。」

「是れは近ごろ有難山。それぐらゐの價なら、親方の目を一ぬき拔くと千僧供養ものさ。」

「扨も見事なやつ。先生がさう仰せらるゝからは、正筆にいつはりはあるべからずだ。」

村田自休鶴ヶ岡の茶屋蔦屋に於て、生花會を催し、門人を集むる。是れも畢竟は法外が底心は、其

の日の廊下の金銀を食らんとのたくみなり。

「是れは白衣様お早い。今日は天氣もよく、見物もうつゝな者も大分お出でなさうとか、此奴が居らねばよく花もさえませぬ。」

「法外子是れはお早い。今日もしぼしお頼み〳〵。今日は何でも落ちを取る氣で、早咲きの水仙、よつほど大痛事サ。」

「武士にあるまじき一輪の鑑賞でたのは、天晴の息子様と見えますぞ。」

我も六人の者どもは、何れも高慢齋の門人となり、生計を學びけるが、法外が頻りに勸めて姿も故あ、いろ〳〵の遊藝にとりかゝりけるに、其の面白さにたへられず、茶を習へばわびつきになりて、人の得難き道具を高金を出して買ひたくなり、花を習へば花はその次にて、銀の花活宣德の廣口なとで、生時ならぬ花を早咲きと持て囃し、花一本に三分にて求め、數々の工夫も一通りにては跡にもどらず、猩々緋又は天鵞絨と、段々高慢増長して、既に留度はなかりけり。

「何と思召す、此の廣口の花器はわくの銀、さて結構なる物。あちらのは大方、赤栴檀の釣瓶でも御座らう。」

「なるほど濁蓮寺様の御言葉だが、あちらの花活の結構なは、花が次になりさうなものと私は存じま

すて。花をば誰も褒めませぬて。」

「もう山川は見えさうなもの、たゞし切にしけたか知らぬ。」

「何と松さんよい年増、我等大ぶ氣がありますさ。」

「もういゝ位に見て、是れから鎌倉の山下で、おかなお豐後でも聞きませう。」

各々花も少しく秋の風吹く夕暮に、鞠と思ひ付きしより、是れ別して雲の上の御弄物、蹴るに從ひ面白く、まだ踏み潰すと云ふ位のうちより、裝束の好みに散々と費し、是れも親がゝりの内證の損とはなりにける。

『ヨウ／＼、成程感心股をくゞつた。茶の湯では己も大分上手だが、是れにはきつと閉口々々。』

各いろ／＼の道藝に高慢をつくし、今は三筋の絲のとりなりに、義太夫、豐後、河東に唐衣の別ちなく、今夜は日待、晩は月待と、飲んだり食つたり、類は友を待つて集まるの習ひにて、扇ヶ谷要町のお仙、中啓谷の廣市のと、藝者交際廣くなりて、今は我が身も藝者身になり、日夜の遊びにそれぞれのしよし分、白と鍊かにこそなりにける。

『おてふ坊、此の後は己樣がわつさりと河東にして、十寸見と云ふ所を聞かつし。』

「己は今の義太の道行で斯くの如くの大汗さ。」

鎌倉の御代には、大磯に郭ありて、其の繁昌云ふばかりなし。彼の者ども、法外が讃めにて不断行きけるが、其の面白さ云ふばかりなかりければ、雨の降る夜も風の夜も、一寸さきは闇雲と、各歩みを運びけり。

實にや梅ヶ枝が云ひし如く、郭の金には詰るならひ、山川白左衛門、相生松之助、妻手古庵はいろいろ遊藝、郭通ひに金銀を使ひ捨て、今は武具馬具も、使ひなくせし金のために賣り拂ひ、詮方なきまゝに三人云ひ合はせ、日向勾當の弟子景都、清都が處へ来り、三百両の借り受けを

「しからば三百両御借り受け申します。返済はきつと月末には致します。先づ忝い仕合々々。」

「何と清都、證文の文言はあれでよからうか。」

「おほきに／＼。もし間違へば御喧嘩へつきかけるばかりさ。」

御影堂が番頭、旨左衛門、手代□右衛門、要介三人は、日夜の遊興に本金は纔かになるのみならず、親方の金銀多く使ひ込み、勘定立たざりしかば、親方大いに立腹し、三人ながら追ひ出されたといふ

「おのれ不屈千萬。町人に似合はぬ遊藝女郎買ひをして、其の顔は何だぞ。わざと髪の毛を少なくして、とんと□□でも結んだやうだ。殊に旨左衛門は最早よい年をし居つて、白髪まじりの未闇とりふけ、さりとは闕く、そがわるい。とつとと出て失せ居れ。」

「一言もない藤新宿馬糞の樣な事だ。」

「いまノヽしい尻が破れた。こちとらの面白い身の上は知らいで、くゝり頭巾で野暮奴が叱る奴さ。」

二人の座頭は、度々三人の者へ金の催促をすれども、返さざる故、其の由を青砥左衛門の役所へ訴へ出でける。

藤綱訴へを聞き、三人を呼び出す、

「たれ武士は治まりたる御代に居ても亂を忘れず、隨分油斷なく武藝を勵み、今日衣服は見苦しくても、具足の一領も持ちたるをこそ武士とは云へ。然るにたれに引きかへ、武具馬具をば遊興のために賣りなくし、太刀長刀を取る手には朱檀の細棹を握り、馬にこそ達者に乘るべきに、さはなくして猪牙船、四手駕籠を乘りこなし、髪は兜下地に結び置くべきを、中剃を頭一はい剃り廣げ、大小は火箸の如く細くし、いでと云ふ時なんとすれば人が斬らるゝか。まつた古庵義は醫者に似合はぬ不身持言語道斷。醫は仁の術なりと云ふではないか、かりそめながら鎌倉殿の武士が其の有樣不埒至極。それ侍共、大小衣類を取上げ、追つ拂へ。」

「委細かしこまりました。早く立てやい。」

山川白左衛門、相生松之助、變手古庵は衣類腰の物を取り上げられ、鎌倉を追つ拂はれる。

『うぬ等はよい戒めだ。餘り日頃さん／＼が過ぎたからだぞ。』

「心柄とは云ひながら、さて／＼殘念閔子騫、全體是れも法外の仕業だから、あそこへ往つてかゝりませう。」

扨も古庵鎌倉を追ひ拂はれ、今は詮方なく、昔の好みに法外が處へ尋ね行きけるが、是れも其の後は世間の評判あしく、俳諧にて渡世も出來かねければ、古庵諸共に山伏となりて漸く其の日を送りけるが、戸塚の宿にて萬屋が行脚よりの歸りに出合ひ、段々の物語をする。「先生さんとは面目次第も御座りませぬ。何とぞ昔の人にお取立て下さりませ。」萬屋大きに驚く。「それは不埒千萬。しかしそれは少し料簡があるから、先づ吾と連立つて、拙宅まで御座れさ。」

さてこそ萬屋、法外と古庵を伴ひ歸るさ、幕方駕籠に乘りけるに、扇右衛門、要助は籠舁となり居たるゆゑ大いに驚き、且は喜んで歸る折柄、戸塚の松原にて追剝に出會ひ、顏を見れば白左衛門、松之助なる故、だん／＼意見して連れ歸りけり。

『あいた／＼、扨ひどい目に合はせ居るは、御免々々。』

「南無三寶、これは訝けなか一の手、彼奴が體は中村秀鶴が定九郎といふ身だ。」

「是れは／＼先生にて有りけるか。誠にはや一旦の若氣にまかせ、放埒のまゝ鎌倉を追ひ出され、詮

方々さの此の有樣。さりとは前目次第も御座りませぬ。

「各のかうなられたには段々譯あり、其にもおかせられい。」

萬屋行脚よりもどりて見れば、彼の天狗の相談せしに違はず、一弟子の法外を始め以ての外の不埒で、皆々浪々の身。是れ全く彼の天狗業なり。彼の天狗といッパ彼等は元人界にありし時、諸事洒落を好み、高慢の鼻高くなりし故天狗道に墮ちしもの。彼等が嫌ひしものは、假にも賢人臭きをいやがれば、と思案して、四書五經の類、總て聖人の書物を集めて是れを煎じ、立て付け〳〵飲ませければ、不思議や俄に目くるめき、各何やらくすんだる色の物を吐きければ、其の中より影の如くに、其の以前萬屋が見し天狗の形立ち去りける。

『ア、苦しい〳〵、腹が唐辛をする樣だぞ。』

「皆が苦しむのを見ては、少し飲む氣がないわい。」

「扨々せつなや〳〵。子曰くと云ふ字が、頭へ當つてやけどをしました。」

「苦しいはず〳〵、もし藥瞑眩せずんば、其の病癒えずとあるワサ。」

高慢齋が門人、各不埒より浪々の身となると雖も、萬屋が才覺にて忽ち本心に立ち歸りける。此の事最明寺殿の御耳に達し、寔に萬屋が才智頓策と云ひ、志正しき處あればこそ、妖怪祟りをなす

ことならずと思召し、萬屋を鎌倉花の本の宗匠に仰せ付けられ、めでたく榮え暮しける。

高慢齋行脚日記 終

鼻峯高慢男

明誠堂喜三二作

戀川春町畫

むかし鎌倉前に、上野や萬右衛門とて富限者あり。二十歳になりける春のころ、玉の様なる男子を設け、萬吉と名付け秘藏しけり。此の子優れて綺麗なる性質なれども、一ツの疵は、鼻の低きこと碁石を一目付けたる如し。夫婦氣の毒に思ひ、大山不動石尊大權現へ、大天狗小天狗へ祈誓を懸け、鼻の高くなるやうにと願ひけり。

又一つの工夫をめぐらし、人は高慢なれば鼻高くなる事なれば、此の子をば隨分高慢に育てんと、われに優るものはあらじと思はするやうに仕付けよと、乳母を始め番頭手代に言ひ渡しける。萬吉は段々生長するに從ひ高慢になり、我より發明な器用な者はあるまいと思ひけり。不思議や高慢の募るに從つて、鼻少し高くなりければ、萬右衛門は育て様の工夫の外れぬ事を悦び、いよいよ高慢に仕込みけり。萬吉五歳になりける時、釋迦嶽、達が關、出雲川など來りしに、萬吉相撲を取りて

勝ちければ、日本にわれに優る力はあるまいと思ひけり。此の時萬吉が鼻餘程高くなりけり。

王羲之「扨々殘念な、無念骨髓に徹して屁が出さうな。」

萬吉「嬉しや、又餘程鼻が高くなつた。」

見物人「若旦那には叶はぬ。とんだ事だ。」

[illegible]「取ると負ける奴だ。」

萬吉八九歳にて手習を始め、繪をも稽古しけるに、至極無器用なりしが、家内は言ふに及ばず、近處の人へも付届けして褒めさせければ、何れも萬吉が手跡續くせいは無いとて、褒めそやしける。

萬吉父「此の年頃で倅ほど書くものは御座るまい。中々書き居ります。」

萬吉を褒めるものには、馳走して金など與れければ、物の入らぬ事ゆゑ、口に任せて矢鱈むしやうに褒めて〳〵、褒め拔きける。

客「異國の王羲之、趙子昂、我が朝の佐理、行成も及ばぬ手だ。すごいと申さうか。さりとはかうじた事さ。」

萬吉「これは不出來さ。」

「お不出來の分でそれなれば、お出來なされた時は、生きて働きませう。」

此の時萬吉十歳にて、父鼻よほど高くなりける。

十四歳より素讀をはじめ、十五歳になりてよりは、江戸中に萬吉ほどの儒者はあるまいと、伴頭手代にいひはやさせけり。師匠は近所の至極文盲なる人に金を與へ、大儒なりとて萬吉を師匠として習はせけるゆゑ、かの先生こそ孔子の再來なりと、噂をたてけり。

此の時萬吉は人並の鼻となりけり。

子曰吾十有五而志于學と申すは、孔子十五歳の年から、學問をなされたと御座る。拙者などの様に、十五歳で講釋なぞをなさるゝ様な事では無かつたと見ました。

萬吉學問高慢にて、むしやうに高く留りけるが、十七歳にして、心の欲するところに從つてのりをこえずといふ氣取にて、學問もやめ、そろ／＼色事を稼ぎけり。二十歳に成りたれば、至極よき男になりたれども、たゞ難には、鼻が高過ぎるといふ男になりけり。さながらに持ち立てる幇間末社、むしやうに乘せかけて、高慢を一ぱいにさせ、女郎も金を攫み取りにする事なれば、吉原一番の大盡さまと、大評判にて、もてること限りなし。

「わしらが丁内は、ゐねの間、萬吉さまのお出でゆゑに、あきの方のものは惠方、果報でござります。」

末社「これはお早い御來臨。」

側人「あれがかうまん大盡か、さて高い鼻の。」

上野屋の萬吉なれば、みな高慢大盡とぞ仰ぎける。

此の時萬吉は光源氏、業平といふとも、わが色には及ぶまじと、高慢滿ち〳〵ければ、鼻以ての外に高く成りける時、何處ともなく天狗來り、雲居へ連れ行く。

萬吉ゆき方知れずなりければ、萬右衛門大いに歎き、出入の祈禱者てんめう院をよび、卜はせる。

萬吉母「あまり高慢に育てあげたが、今では大きな害となりました。どうぞ早く歸るやうに御祈禱たのみます。」

祈禱者「これは餘り、日頃の御高慢が過ぎました故、天狗が誘ひ出し連れてゆきしものと見えます。さりながら、三十日の内にはお歸りなさると、卜の表に見えます。」

大山の大天狗、萬吉をさらひ來り、「汝が自慢の相撲の手並を見ん。」と、木の葉天狗の子供、五歳になりける豆天狗と角力をとらせけるに、萬吉手もなく投げられ、此の時鼻を土へ打ちつければ、鼻少し低くなりけり。

豆天狗「やつとな。」

萬吉「はて斯うではない筈だがや、木の根がまさしく何處ぞにあつたか、鼻が甚だ痛い。」

見越入道「小僧出來た〳〵。」

萬吉角力には負けたれども、書畫には及ぶものあるまじと、高慢しけるゆゑ、彼の豆天狗と書き比べさせけるに、さら〳〵足許へも寄り付かぬ事なれば、小天狗萬吉が鼻の先を、爪にて少しはじきければ、また鼻ちと低くなりける。

萬吉よほど鼻低くなりけれども、未だ高慢の心すこし見えければ、小天狗立ち出で、神道、儒道、佛道のこと、みな口元のところを問ひけるに、一つとして明らかなる答へなく、詰らぬことのみ言ひて、大いに行き詰りければ、大天狗羽團扇にて鼻の先を撫でけるに、此の時鼻もつてのほか低くなりけり。

大天狗「其方がやうに人を侮ると人に侮らるゝものぢや。人必ず自ら侮つて、而も後人これを侮るといふ事は、汝此の理を知れりや。」

萬吉「それは新造買の事さ。神儒佛の論には負けても、女郎かひの意氣地は、吾らに續くものなし。若し口惜しくば、我と一座して、女郎を買ひ給へ。さえ比べを仕らん。」

と、まだ高慢を申しける。

大天狗きんとした男に變じ、萬吉と二人吉原へ行きけるに、もてること限りなし。店ひけければ、家内の女郎みな來り、五月蠅いほどに取り卷きけり。

女郎「主の連衆の樣ないけすかぬ、いやみな人はない。鼻も無い顏で、あの高慢さといふ物は、染々好かんよ。」

女郎「河東を語つてお聞かせなんし」

女郎「河東がいやならめりやすを、お彈きなんし、拜みんす。」

萬吉が相方の女郎、牀をしたゝか干し、最はや起きてされば時分、漸う來りけれども牀へも這入らず。夜明まへまで干されけり。萬吉したゝか牀を干されて、鄰の大さえを聞けば、みな我を惡く云ふのゆゑ、いま／＼しく思へども、是非なく、おろされる度ごとに、鼻いよ／＼低くなりて、遂には生まれた時の通りの鼻となりけり。

「如何に萬右衞門、汝生まれ付きたる萬吉が鼻を高くせんとて、惡しく育て上げしゆゑ、伜を一人なくし、役に立たぬものにして除けたり。伜には少しも咎なし、これみな親が育てやうの惡しきゆゑなり。謹むべし／＼。あまりに歎き深ければ、伜を返し與ふるなり。」

嘗百「有りがたう御座りやす。」

かくて萬吉高慢をやめ、誠の人となり、家とみ榮えけり。

鼻峯高慢男 終

敵討女鉢木

蓬萊山人龜遊作

鎌倉六代將軍北條時宗公の御時に、最明寺殿下し置かれし御墨附あらため有つて、源左衛門が子孫佐野源藏經春、三ヶの莊の御墨附をもち、鎌倉へ上る。

源藏が女房お竹、年若にて二ツ子をまうけ、二人の子供成人する。

「左樣なら隨分おまめで。」

「隨分おとを大切に頼む。梅やさくは寐かして置きやれ。」

それより源藏は、栗橋の堤にて日暮れければ、折節よき月にて、栗橋の宿へと急ぎゆく。

其の頃此の堤に、羽黒山の山伏にて月山坊と云ふ者、往來の旅人をはぎとる。

月山坊闇黒まぎれ源藏を手にかけて、荷物を盜み取らんとて、堤の藪の内より飛んで出で、源藏が乘りし馬の前足をなぐりし故、落馬する。

「何者なれば卑怯の擧動、意趣のある者ならば、名のり合つて勝負しろ。」

「もし／＼旦那、さつても迷惑、栗橋までの駄賃で急いで折角来たものを、こんなさゝお手があるかいな、道理で何だかさう〴〵しい。錫杖の人を切つたやうとは此の事だ。」

「残念な、折悪しく此の鳥目、さなくばかゝる難儀には遇ふまいもの。馬士奴もこりや馴合ひだな。」

「イヤ此奴、此のやうすでは籠のとり目だ。」

かくて源蔵妻お竹は、常々佛神を念じ、子孫繁昌の為とて我が食事の米を分けて出家に供養する。

お竹はながしを大切にして、五穀の棄たらぬ様に布の袋をあて置き、たまりたるを吾が食にする。

中娘お梅、

「父様はもう何處までお出でなんしたらう。」

末子娘おさく、水くんで手傳ふ。

月山坊、源蔵を手にかけて、三ヶの莊の墨附を奪ひ取り、其の上留守を見込み、姿をやつし此の所へ来る。

「これ／＼すのこの端でも柳ばしでも、只一夜お頼み申す。」

總領お松、

「お安い事ながら主人の留守で御座んす。殊に女子ばかり、外をお頼みなさんせ。」

「とめて進ぜや。」

それよりお竹、朝夕五穀を大切にせしながしより光明を放す故、夜光の流しと云ひふらして、佐野栃木の三郷より拜みに來る。

「是れは不思議なおながし樣だ。」

「扨も／＼有り難い、是れからながし殿と年寄衆をよこしませう。」

「鰯の頭も信心からさ。」

「斯樣な事には釘齊尺魔とやら故、今宵ぎりで拜ませ申しませぬ。」

月山坊いろ／＼馳走になる。粟飯を出す、お松給仕をする。おさく肩を揉む。お時馳走をする

「これさあの子、くりばしの膳は禁物だぞ。」

先祖源左衞門殿が鐙、床の間に飾りある。

「最明寺殿は、梅櫻松の三ケの莊をやつたに、己はきつい御違ひだ。」

月山坊は又もや、此のながしを盜まんと、心をかける。

それよりお竹は、夜も更ければ客僧を寢かさんと、納戶の內へ夜具を出しに行く所へ、月山坊あとより付け込み、お竹をいろ／＼と口說く。

『これさかみさん、旅は道連世はなさけ、坊主一疋助かります。大勢おやア御座りませぬ。』
「そんな不埒な事は存じませぬ。御出家にも似合はぬ。」
月山坊我が手に口走る。
『そしてまア、源藏殿は栗橋の堤にて死んだと云ふ話だぞ。』
「やアそれは何としたとえ。」
お竹はすべてに貞女なれば、先祖經世がさび長刀をはづして、月山坊を座敷の内を追ひめぐり、た
うどう外へ出す。
『にんに、坊主が憎けりや今朝から馳走したが腹がたつ。』
「是れは、月山けん一無刀ではかなはぬ。」
お梅あかりを持ちあるく。
總領お松は家内を氣を付け、裏口の雨戸へかきがねをかけんとて、一人見廻る折、松が持ちし手燭
へ雪を投げ付けて火を消しければ、大きにうろたへ騷ぐ。
月山坊雪を投げて火を消す。
月山坊は、此の家を追ひ出されしを殘念に思ひ、裏の壁を切り抜き内へ忍び、夜光のたからを詮議

する。
「サァ女あ、ながしの在處をぬかせ、どうだ。」
月山坊はながしの在處を詮議せんと、お松を馬屋の柱へ縛り付け、方々家さがしをする。
「何でも、光のさす所がながしのある所だ、それ／＼飲み込んだ。」
それより月山坊はながしを盗み、お松を直に源藏が馬にのせて、江戸へ逃げる。
古河の松並木。
「女あ、ねむると馬の上から落ちるぞ、金にするまでは大事の玉だ。此の馬も百ばかりの下馬にはならう。」
「母樣が常々拜まんす、神樣や佛樣が此の難儀を、救つて下さりさうな物だ。」
時に子供、後より追つかけて笑ふ。
ゆききの旅人合點行かぬと氣を付ける。
「何だか氣の知れぬ者だ。」
「天王寺屋かお七のやうな態だ。己が齋宮太夫だと、淨瑠璃を語つてやりたい。」
佐野に殘りしお梅おさくは、父源藏のたよりも知れず、又は姉お松が行方も尋ねたく、順禮姿に

て國を出づる。

「これ戻馬がある。乘つて行かつしやれ。」

「いゝえ、私等は馬にきらひで御座んす。早く誰ぞ來て下んせばよい、恐らしい。」

江戸芝邊の男達神明の四郎兵衛親分、佐野の次郎左衛門方へ行きし戻掛けに、此の體を見て居る。

「はていやらしい馬かめらだ。」

神明の四郎兵衛は、樣子を伺ひ飛んで出で、馬方共を取つて投げ、さん〳〵に蹈みのめし、兩人の物語を聞いて、江戸へ連れて歸る。

「サア己が相手だ、二人の子供に指でも付けて見ろ、汝等に似合はぬ色事とは、役廻りが違つた太い奴等だ。つがもねえ誰だと思ふ、四郎兵衛樣だぞ。」

「南無三二十、さん〳〵な目に遇つた、先づ一番で貝を吹いた。イヨ〳〵丸屋、ありがたい。」

お梅おさく難儀を救はれ、嬉しがる。

それより四郎兵衛は、兩人の子供を我が家にかくまひ、親の敵と姉お松が行方を尋ねてやる。

お梅おさくは此の所にかくまはれ、月山坊と云ふ山伏お松を連れて逃げしと、四郎兵衛に話す。

「そんなら、いつぞや佐野の歸りに、栗橋の堤にて拾ひし血汐の附きたる錫杖の頭に、月山坊と切

り付けてあるからは、それがたしかな證據だ。シテ又夜光のなかし、それも知れぬか。』
姉お松は、お梅おさくが此の所に有りし事を聞いて、我が身の上のこと時鳥に傳へて知らせる。
二人の子供たちがれになりければ、父の事、又は佐野に殘りし母のことを思ひ出し歎きければ、不思議や四郎兵衛が庭のほとり行きつ歸りつ、ほんぞん〱と鳴いて知らせる。
『ハテ心得ぬ啼きごゑぢやなァ。』
「そんなら姉さんは、三田とやらに居さんすかえ。」
地紙うり白銀の定吉、去年六月、佐野の天明天神の祭禮に日雇商賣に行きし時、お梅が門にて暑さを凌ぎ、其の時互に見染めしが、思ひがけなく茲にて邂ひ逢ふ。
『ハテどうか、お梅に似たやうだ。』
「あの若衆さんはたしかに。」
三田の切見世木實、四郎兵衛がたゝへの子供、
『あれ〱町人さん、よつて行きなよ。』
「逢つて貰はうぞ、邂ひやせう〱。」
「そゝらずと寄つて行きなよ。」

「名代のお松はどれだ。ちよつと遊びてえものだ。」

それより二人の子供は、姉お松が行方を尋ねんと、おさくはおせんと名をかへて茶店を出し、父の仇の手がゝりを詮議する。

神明の四郎兵衛は、両人の女の力となりて、仇を詮議する。

「どうか見まうしたやうなお顔つき。」

「其の筈だ、三田の九郎兵衛だ。」

「何貴様があの、本尊の九郎兵衛殿とやらか、初めて遇ひました。私や四郎兵衛でござんす。見知つて貰ひますべい。」

「私も人の知つた九郎兵衛だ。こなさんとも近付きになりませう。どりや先づ一ぷく飲まうか。」

剱術の師伊皿子大之進、両人の争ひを立ち聞きして、すでに喧嘩になりし所、中へ入り料簡を付けて、両人をなだめる。

「是れは實に白黒の争ひだ。」

扨お梅も、四郎兵衛が世話にて、茅屋天神の茶店へ出でて、九郎兵衛を付けねらふ。

両人の娘は伊皿子大之進を頼み、剱術の稽古をする。

三「四郎兵衛さんと談合を遊ばし、宜しくお頼み上げます。」
大「そんならしかと三ヶの荘は、九郎兵衛が持つて居るか。それがたしかな証拠さ。」
庫「お松さんの内通にて、夜光のなかしも御座ります。」
大「いよ／＼お松は、九郎兵衛が方には置かれぬ／＼。」
四郎兵衛は菊川にて、九郎兵衛と兄弟分になり、佐野の星の宮の祭礼に行くとて、いとまごひに門より立ち寄る。
お松、四郎兵衛が浴衣のほころびを縫ふ。
四「どうだお松さん、美しい物だの。」
九郎兵衛、のれんの内より様子を伺ひ、こらへかねて飛んで出る
九「憎い野郎、四ツにしてくれん。」
大之進、四郎兵衛と云ひ合はせて、お松を九郎兵衛方に置かぬ工みにて、四郎兵衛に不義なしかけさせ、無理に暇を取る。
四郎兵衛はわざとお松に恋慕して、九郎兵衛にお松をくれろといふ
四「サア九郎兵衛、お松をくれるか、いやと云へば是れ、いつぞや栗橋の堤に、死骸の側にあつた書

杖を見たか。」

九「エ、しよう事はねえ。そんなら、お松は汝にやるぞ。」

大之進此の所へ来合はせ、飛び込んで、ながしにて脇差を押へる。

夜光のながし光を出す。

大「ハテ合點の行かぬ。此の光は紛ふ所もない夜光のながし。」

九郎兵衛三ヶの莊を、守りのやうに首にかけて居る。

四「是れが出るからは、もうのがれぬ所だ、眞直にしやくぢやうしろ。」

お梅天神の茶店にて、いつぞや見染めし定吉に遇ひて、佐野にて取りかはせし扇を見せる。

「それはしかも、天明の天神祭の頃で御座んした、其の歌は、香をとめて袖うち拂ふかけもなし。」

定吉だん〳〵の様子を聞き、とも〴〵力を付ける。

いよ〳〵敵九郎兵衛と名のらせて、夜光のながし、三ヶの莊を取り返して、大之進が大小を、お松お梅に貸してやる。

四郎兵衛は、覺えのある腰の物、おさくにかしして勝負させる。

四「さいはひ所も切通、きれ〳〵〳〵。」

梅「サア月山坊覺えたか。」

主「わたしらの顏を、よもや見忘れはしまいがの。」

松「父源藏が敵、今が最期、觀念しろ。」

月「汝等は後持があると思つて力みやァがる、惡く切ると、切つた方へつんのめるぞ。おゝ痛い、いたいた。」

佐野に殘りし母親お竹は、佛神の加護に依りて、生きながら湯殿山大日如來となり、江戸にて姉妹の子供敵討ありし故、愛宕山へ出開帳をなし、姉妹の子供を守りたまふ 三人の娘は彌〻行末さかえけり。

敵討女鉢木 終

桃太郎後日咄

明誠堂喜三二作
戀川春町畫

桃太郎鬼が島へわたり、寶物を取り得て故郷へ歸る。猿、雉子、犬、ともをする外に、鬼を生捕りきたる。

桃太郎が父山左衛門、

「桃太郎が歸つたか、此の杯さすぞ。」

下女お福しやくする。

捕り鬼「私はうひ〳〵しう御座ります。犬殿猿殿同樣に、隅から隅まで、ついと御贔屓を御頼み申し上げます。」

桃「なか〳〵心のやさしい奴で御座ります。」

「景色よくは谷を撫で、ゑんざいらく〳〵には犬ちんを延ぶ。相生の猿風、きやつ〳〵の聲で樂しむ。桃太

郎打出の槌を以て金を振り出す。」

樵「七千両うち出したら煙草にせう。腰が痛くなつた。」

犬「これで四百両出来ました、今六包で一箱出来ます。」

鬼「金の見おさめ致します。」

雉は地震ぎらひなるゆゑ、鹿島のお札をもらひ悦ぶ。

山左衛門は小海老を澤山とり、子供の方へ土産にやりける。

鬼「是れを蒲焼にして食はせよ、[illegible]の薬だぞ。」

[illegible]「私はいつまでも、召使はれて下さりませ。」

雉は焼野時分に故郷を出て、久しく子供に逢はねばとて、暇をもらひ故郷へ帰る。

桃太郎十六歳になりければ、元服して、きん／＼たる男となりけり。

此のついでに、彼の鬼にも元服させけり。

桃「己が大通といふ男にしてやらう。黒油が出来たら、月代へ塗る青黛をこしらへて貰はう。角の痕は厚鬢にして隠さすばなるまい。名をば鬼の字を用ゐて、鬼七と付けてやるぞ。」

鬼七そり落されたる角を、立花町の大坂屋へ拂ひければ、珍らしき物なりとて、一本を十両づゝに

買ひける故、大きに悦びけり。

母「角のあとが痛みはせぬか、むごたらしい。」

猿は鬼の元服姿を見て、うらやみ私も元服致したきと願ひける。

猿「おついでに願ひ上げます。」

下女「おまへは人眞似ではない、鬼眞似だの。鬼七様のやうな、意氣な男にはなられますまい。お前の名は猿六とお付けなされたかえ。嫌な名だの。」

主「己とおがつて、毛がほき／＼物だやから、いれこを入れても、髪が結ひにくからう。」

猿「それでも、手前がやうな強い毛ではないのさ、人ではおかまひなさい。」

「これ／＼、口をきく＼と切るよ。」

猿六嫉んで、鬼七お福の不義を告げる。

猿「鬼七奴とお福奴、不義を働きましたを、きつと見屆けました。兩人ともにお暇下されずば、御制道が立ちますまい。此の女の文體の嫌味な事を御覧じませ。

思へども猶うき鬼ぞ忘られぬ心の人の身をせがなとは

とふ歌が御座りますこ」

「其の訴へは、己が猿利口と云ふ者なれど、證據があれば打捨てゝも置かれまい。ハテ氣の毒な。」
打出の小槌は、汝等を打ち出す小槌なりと、兩人を十ぺん打ち、金子二十兩うち出して、暇を取らせけり。
扨猿が傍輩の悪事を云ひ立てしも、我が戀の叶はぬ意趣ばらしなる事見届けたる事あれば、同罪とも云ふべけれど、少しは罪輕き所あれば、只一打うちて錢一百文うち出し、同じく暇を取らせけり。
「三人とも暇をくれたぞ。」
此の時猿六申しけるは、
「同罪とお思召さば、せめて十兩分もお打ちくだされよかし。打出の小槌の御打擲は、百兩でも二百兩でも厭ひませぬ。一打にて一百文とは、餘り罪が輕過ぎてそら恐ろしく候。」
と慾心をぞ申しける。
鬼七夫婦は、二十兩の金に角の代が二十兩、都合四十兩にて煙草店を出し、家名を案じけるが、最初の鬼が島屋とも付けられまいと、たゞ島屋とぞ云ひける。
犬も傍輩の事なれば、忍びて見舞に來る。
「何とあきないがあるかの。」

旦那のおかげ、有り難う御座ります。」

白鬼の言號鬼女姫、良人の行方を尋ね來る。

「桃太郎樣のお供致して參つた。白鬼殿の行方は御存じないか。私は言號の妻で御座んす。御存じなら教へて下さんせ。」

猿六飛脚となり、鬼女姫にたきかける。

「其の白鬼は島屋鬼七と云うて、煙草屋をして居ます。女房は色事で取つた女房さ。しかも夫婦中のよさと云ふ物は、それは〳〵いやらしい事さ。」

鬼女姫煙草屋へ尋ね來り、さま〴〵恨みければ、お福は言號と聞き大きに腹を立つ。

「角の生えた女が、日本の地に住まれようか。」

と惡口しければ、鬼女姫角を切り落し、鬼七に添はんといふ。

此の時お福大きにせき上げ、瞋恚のほむらを燃しければ、忽ち二ツの角生えけり。

「其方こそ、其の樣な角が生えては添はれまい、大事の男こちへ渡さんせ。」

鬼七は鬼女姫が角を切りたるを見て、又二十兩の儲け口と悦びしが、だん〳〵爭ひつのり恐ろしくなりて、あたり近き田舍寺へ逃げゆく。

福「いひなづけなら切つた／＼、夫にかはつて、今の女房が切つた／＼。」

兩人鬼七が後を慕ひ追ひ來りしが、お福は蛇身となり、見越の松へ上り、塀をのり越え、夫を引きさき殺さんと怒る。

鬼「後より追手かゝる者、おかくまひ下されませ。」

僧「釣鐘を下し、かくまひ申さん。」

鬼女姫夫を殺させじと、お福が蛇形の尻尾をおさへて、飛び越えんとする所を引きとゞむ。

姫「夫を殺すとあつては、放さぬ。」

此の時猿六來かゝり此の體を見て、鬼七をお福に殺させんと、松の木へ走り上りて、お福の尻尾を切つて落す。

猿「鬼七は鐘の中に居る。殺せ／＼。」

姫「云ふに及ぶ、あくしやう者、いで／＼思ひ知らせん。」

お福松の木より飛び下り、釣鐘を目がけ驅けよる所へ桃太郎來り、お福を殺す。

姫「エ、殘念ぢやなァ。」

犬主人の供にて此の所へ來り、猿六を蹈み殺す。

犬「悪念をひるがへし、切腹せよ。」

猿「アヽ、痛い〳〵、痛いも道理か、此の世をさるのぢやもの。これがほんのさるほどに昔の身がましであつた。」

鬼女姫は、よしなき悋氣より、大切の夫をお福に殺さする事よと、はやまりて、お福が尻尾の劍にて自害する。

「南無阿彌陀佛々々々々々々。」

鷲娘所謂蛇の頭刀先者是也。

かくて桃太郎鐘を引き上げし所、鬼七にあらで存じの外なる者罷り出でて、口上をいふ。是れ作者も毛頭不知事に御座候。

「東西々々、高うは御座りますれども、是れより申し上げます。年々差出しまする繪雙紙御評判宜しく、御子様方御贔屓にあづかり、有り難う存じ奉ります。當年は分けて珍らしき事を取組み、御覧に入れまする。御求め遊ばされ、御覧の程を希ひ奉ります。」

桃太郎後日噺 終

親敵討腹鼓

明誠堂喜三二作
戀川春町畫

むかし／＼、日陰山の兎、婆々の敵狸を殺せし事、兎の大手柄とて世に隠れなし。此の狸の子成人して、親の敵を討たんと思ひ立ちけれども、敵を討ちに出で獵人に討たれん事を恐れ、種が島村の宇津兵衛と云ふ獵人を抱き込み、我が身を全くして、敵を討つ力にもせばやと、此の所に來り頼む。

こ「明日は化成殿の會合なれば、狐狸むじな猫、此の山陰に集まる筈なり。此所へ伴ひ金まうけさせ申さん。其のかはりに敵討の力と成り下されよ」

宇「隨分力になり申さん。兎角氣長に尋ね給へ。たぬきは損氣なやつ」

兎様子を聞き驚く。

かねて此山の奥に年經たる白狐あり、手下の狐を始め、狸むじな猫又など、月に一度づゝ會合して、化けの云ひ合はせあり。

「のみかけ〳〵、白狐のこの〳〵玄關まへ。」

「さァ〳〵皆もうた〳〵〳〵。」

「此のお神酒は四方のあかと飲めよ。」

「鯛の味噌ズとは、あぶら鼠のことさ。」

所の獵人も此れを知らず、宇津兵衛は今日、狸の子お引きにて此所へ來り、すきを見すまし、老いたる狐三匹打ち取りけるが、白狐をば打ちもらしけり、

狸「己が仲間をば助けて、狐等ばかりを打つて下され。」

兎「白狐を打てば、きつと儲けの筋、ゐかなる事では無い。」

かくて兎は狸にねらはるゝと聞き、日陰山をのがれ出で江戸へ來り、先づ淺草の觀音へ參詣して、身の安全を祈りける。始め階段を上る時は、「願なぞ觀音なゝ」とて上りける故、觀世音も信心の程を感じ給ひ、何處までも命を救はんと思召しけるが、下向の時、「尻喰らへ觀音なゝ」とて階段を下りける故、觀音も腹を立て給ひ、兎が願望をば茶になされける。

彼のおゝばゝが中に、一人の男子ありしが、大どらの者の爲勘當受け、江戸へ出でぶらつき、近年人柄を改め、さるお屋敷の足輕となり、則ち盧野刈右衛門と名號りけり。

此の屋敷の若君、御疱瘡前にてありけるが、頭の黒き兎の生膽をかねて用ゐ給へば、御疱瘡極めて輕からんと申す者ありし故、頭の黒き兎を御詮議ありける。

直「私の在所に、頭の黒き兎がござりますゆゑ、生膽を取りて差上げ申さん。」

役「汝この御用を務めおほせば、侍に召し立てらるゝやうに、取りなして得させん。」

刈右衛門、兎の御用承り在所へ歸り、勘當の詫事かなひて、親園子兵衛に對面し、母の最期の様子、兎のおかげにて敵を取りし事を聞きければ、彼の兎は我がために大恩ある者なれば、生膽の事大きに心あてが違ひ、當惑して又江戸へたち歸り、神力を頼まんと思ひ定めけり。

兎は已に川橋の向うへ渡りしに、兩國の土堤にて雉と獵人に出合ひ此難を遁れる。

「後より追手のかゝる者、お慈悲にかくまつて下され。」

中田屋の亭主、葛西太郎、頼もしき男にて、兎を屋根舟の内へ隠す。

雉「さて足の早い奴だ。」

雉獵人中田屋へ付け込み、屋根舟の中を怪しみて検めんといふ。葛西太郎大きに怒りて、獵人の胸元へ刃をさし付ける。

女房お花、臺所にて鰻を焼きければ、雉と獵人この匂ひに氣を奪はれて、眠りを催しける時、「獵人の

袂もひかばなどか切れざらん、八疊のきんたまも飛ばばなどか越えざらん」と歌ひければ、亭主悟りて飛び退く。

狸蒲燒の香ひを始めて聞きければ、燒鼠も及ばぬ匂ひなるゆゑ、心亂れ狂ふ。

宇津兵衛は山家の賤の女ばかり見し者故、お花が顔の白きと、歌の聲と、蒲燒の匂ひと、狸の狂ふとに見とれ同じやうにうかれる。

お内儀の蒲燒に性根をうばはれ、兎の敵討は脇になりける。

花「かりうど浮かそ根元蒲燒、こんちきちん。」

刈右衛門は、外に頭の黒き兎を授け給へと、秋葉へ祈誓をこめんと此の所へ来りしに、狸親の敵の兎を出せと爭ふを聞けば、我が大恩ある兎ゆゑ、命を助けんとさま〴〵云ひつめる。

刈「其方に打たせて良ければ、主人のため生膽ほしき兎なれども、それさへせぬは、よく〳〵義理ある事と思へ。」

狸「入らぬ其方のかばひ立て、そこ退いて通されよ。」

刈右衛門狸と爭ふを聞きて、兎うなぎ舟より飛び出で、鰻さきの庖丁にて切腹する。

兎「刈右衛門樣の我をかばひ給ふも、狸殿の我を打たんとあるも、皆忠孝の道の義理づく。とてもの

がれぬ此の場の仕儀、早々生膽を取り給へ。其の上は狸殿の存分に親の敵を討ち給へ。」

兎「其の深手にては助かるまじ。不便ながら生膽を取つて、忠義をたてん。」

狸「さり／＼生膽を取つて、體を此方へお渡しあれ。」

平家は舟にて讃岐に亡び、狸は土舟にて兎のために亡び、兎は鰻舟にて、くさぎの蟲同然に疱瘡の藥となれり。皆これ前世の約束なるべし。

宇津兵衛は淸士のうたひを唱ひ、狸お家の腹鼓をうつ。

「南無阿彌陀佛々々々々々々。」

兎膽を拔かれ、氣もたえ／＼となる所を、狸引き出して「親の敵思ひ知れ。」と胴切にしければ、上の方は黑き鳥と變じ、下の方は白き鳥となり、飛び行きけり。

兎を二ツに切りて出來たる鳥なれば、黑きを鵜と名付け、白きを鷺となづけしも、此の時よりの事なりけり。

「さて討ちばえのせぬ敵ぢや。」

「毛を吹いて、きずをいやした。」

一ツの命を、生膽と敵討と、二役に遣ふのみならず、二ツの命まで生をかへては、割りの合はぬも

のぢや。

此の程白狐會合の節、狸の導きにて、宇津兵衛に老狐三匹を打たせし事、こんくわい先にたたず。彼等が敵の獵人、殊に道引きしたる狸を打たんと、僞りの計略をもつて、先づ彼の狸を抱き込み、ねんごろに頼む。

狐「汝が恩ある宇津兵衛なれども、たばかりて此の子狐どもに打たせなば、汝を狸の金比羅に祭りて得させん。其の金は當座の褒美なるぞ。」

狸「委細かしこまりました。」

獵人に打たれし狐の子供、敵を討ちたき由を願ふ。

狸「敵を討ちし祝儀に事よせ、宇津兵衛を我が穴の内に招きよせ申さん。方々は兼て我が穴の中に忍び居給へ。例のきん玉を打ちかくるを合圖に、何れも仇を報い給へ。」

としめし合はせたり。

狸は木の葉を小判なりと思ひ悦ぶ、同じ化仲間にても、油斷のならぬ世の中なり。

狸宇津兵衛を穴のなかへ招き、彼の木の葉を金と心得、引出物にいだしければ、獵人大きに腹を立て「ひとにこそよれ、われを化さんとは不屆なり」と云ひけれども、狸はかへつて木の葉とは知らず

争ひしが、其の金子がいやなら此の金子を與へんと、金丸を擴げ打ちかける時、三匹の子狐とび出で、きんたまの上より獵人を突きとほす。

五「親の敵おぼえたか。」

守「たばかられたか、無念な。」

五「何日ぞは討たう〱と、思ひまうけしこん〱今日。」

守「これ〱きんたまで突かれては、おたまりは無い、けないま〱しい。」

三「此が親が白狐殿の計畧を見たか。よく〱おのれ、獵人を道引きして、おれが親父を討たせたな。今其の體を見るからに、面白狸のあなうれしや。今こそ思ひ知れ。」

されども夏の頃大いに日照りして、鰻どぢやう大切物なれば、中田屋も客がなさに商賣とまり、大きに難儀し、妻のおなる、三兩の金につまり、手水鉢に向ひはまた無間を撞きしに、不思議や鵜と鷺と來り、三兩程の鰻どぢやうを、ばら〱とはき出す。

五「我に三升かしこにどぢやう、是れは夢かやうさぎかや。」

「是れを賣りて命をつなぎ給へ。さりとはどぢやうし千萬。」

兎前生の恩を報ずる。

鵜のはき出せし鰻、格別の風味なりければ、其の後、「反吐前大蒲燒。」と看板を出しけれども、餘りむさそうに聞えければ、又「江戸まへ。」と改め、日ましに繁昌したりけり。

かくて刈右衛門生膽を差上げければ、侍に取り立てられ蘆野重右衛門と改め、重く用ゐられ、在所の親父をも引取り樂々とはごくみ、其の身も立身して富み榮えけり。

亀「長生をすればこそ、此の樣な目出たい春にも遇ひ申す。」

鶴「千代萬代も、お榮えを願ひ奉ります。」

親敵討腹鼓　終

辭闘戰新根

戀川春町畫作

頃は長閑けき春の世に、より集まる化物を數ふるに、見越入道にあらず、又一ツ眼にあらず、お子樣乳母樣御存じある草雙紙に、其の名の高き先づ一番に、大木の切口、ふといの根、どらやき薩摩芋鯛の味噌ず、四方のあか、一ぱい飲みかけ山のかん鳥、放下師の小刀のみこみ印、たらすの森の尾長鳥、天上見たか、とんだ茶釜を初めとして、各初春の祝儀を述べ、お定まりの屠蘇に、數の子、ごまめのいゝつけ、酢牛蒡にて、各數杯をかたむけける。

「お互に息災で、淺草紙くさい重年、かほど日出度いの味噌な義は御座らぬ。」

「小刀の地口はいつもをかしうて、とんと我等おへそが茶を沸します。」

大木の切口思ひ立ちし惡心を、手下の化物に話しけるに、とんだ茶釜諫言する。

大木の切口曰、「そも／＼我を始めとして、手下の者共、かりそめに草雙紙に押し寄り、諸人普く其の名を知り、ねぼけ先生の詩集にも出で、芝居でも引きごとに云はれ、誰あつて知らぬ物なし。然れ

ば我々は草雙紙の氏神、中興の開山なれば、畫工はもとより、草紙屋、板木屋我々を崇むべきを、ぬるい茶一杯飲ませたる事なし。依つて此の春は珍らしき化けやうして、職人共を見しらせん。』

と大きに怒つて申しける。

とこれ茶釜、大木へ諫言しけるに、忠言耳にさかひ、しもつま茶口にしぶく、大木大きに怒り、切腹を云ひつける。

大木曰く『うぬたゝき碎いて、おはぐろ壺へ入れようと思へども、情を以て切腹させるぞ。」

小刀曰く「サア〳〵切腹〳〵。己が頭で切腹を進めるとは、河岸の魚で、なんと新しからう。」

茶釜曰く「私、近頃評判衰へし故に申すでは無けれども、大木の切口たかが薪割臺、それが草雙紙に載るとは、此のうへも無きお仕合。是非思ひとゞまり、お心を改められませ。さもなくば我料簡朽ちざる内に、職人の爲にはづかしめを御覧あるべし。ア、是非に及ばぬ、イザ御茶柄杓たのみ存ずる。」

四方いたり水「のみかけ山の後で、喉のかわく由縁もあれば、ひといきにぶつた切つてやるべい。」

とんだ茶釜、すでに切腹にきはまりしが、寒烏が詫言にて門前より追ひ拂はるゝ。

天井曰く『天井みたとは汝が事だ。いいざまの。出て失せう。」

尾長鳥曰「己が旦那を茶にしようとは、イヤなら寺の森の尾長鳥だてえ、キヽ。」

茶釜曰「あんまり叩くな、ひゞれが入るワイ。とんとかうした所は青柳硯の頼風ときて居る。切腹をやめられたから、是れから一ぷく一せんでも仕らう。」

「たてはに迷ふぬれ茶釜の、いづくを當にたくぞとも、問はぬ義理は茶碗と茶碗、チヽ、ツヽ、チッチツチッ。」

とんだ茶釜は、何とぞ一味の者を集めて、大木がくはだてお妨げ、畫工、草紙屋、板木屋の難儀を救はんと思ひたち、其の荷擔人なし。爰に享保年中の頃まで出來たる、江戸草雙紙の始まり正本と云ふもの、俗にからかみ表紙と云ひ、この手下に、鉢冠、薄雪、烏帽子折、公平、兜論、其の外名高き者おびたゞしく、されども今どら燒薩摩芋世に行はれて、正本はあれどもなきが如く、土藏の中に打ち込みあれば、これにたよるかたなし。依つて茶釜一ぷく一せんと思ひつき、毎日々此の藏の窓まで來り、委細の事を文にてつけ知らせる。

茶釜曰「正本のお仲間で仰せ合はされ、よい計略を願ひ上げます。力彌ではないが、委細は文にてとの御口上。」

正本の薄雪姫、鉢冠その外、茶釜が文を見て氣をもむ。

『とびたつ樣に思うても、藏の戸前はおかさ、籠の鳥かや恨めしや。』

ゆききの人、膽を消して逃げる。

『一頃山下へ、茶釜女と云ふは出たが、これは眞の茶釜男だ。錢でもちやがまされぬ内に、逃げませう。』

茶釜曰く『ハテこまつた、己はまつきりこはくないに。』

大木の切口太いの根は、茶釜をば追ひ出し、今は心にかゝるものなければ、憎しと思ふ者どもを見せつけんと、先づ親玉やくに序開きを御覽に入れんと、畫工の所へ飛び込み、一趣向こじつける。

大木曰く『何とかうした所は何と見たぞ、先づ龍卜流の投入畫、かきつばたに筆立のとめ根じめの所へ御氣を付けられませう。』どつとほめたり。

畫工曰く『萬歲らく〳〵。ヤレ目がまふは、爰でおとされて、牀柱へでもぶつつけられると、はなあやめを木にぶつかきつばただちや。』

きつき芋曰く『私は琉球軒薩摩芋と申しまして、一升庵卜史門人でござります。少しは花も存じ居りまする。扨このひろ口に畫かきつばたは、どうも〳〵云へんと云ふ。踊子に虚はないと云ふやつサ。』

さて第二番目には、鯛の味噌ずに四方のあかの化物。ちよびとした所が、龍門の瀧と云ふ所さ。味

噌ズの中へ打ち込まれた上から四方の瀧水は、ほんのたとへにいふ板木。

潤日く「味噌吸では無いが、かう出かけて投げた所は、丸屋が相撲場と見えようがや。」

座敷の内を二三べん持つて廻つて、板木屋を三間ばかり投げたりける。

四方日く「何とひや〳〵とよからうがや。鯉のはん木のぼりはなんよヱ、。何と云うてのめるえ。」

「此の仕打は切幕と云ふ所だ。やんや〳〵〳〵。」

板木師「蛇の足を見ると長者になると皆が云ふから、己は鯛の足を見たから、彫物が巧者にでもなるか知らぬ。」

第三番目のみかけ山の寒鳥、どら燒、鹿島をどりのこじつけ、いよかんがら先生と、ほめてもらひたい。

寒鳥日く「うたひ本の味噌ズによみ本のあか一枚、よみかけ山のはんがらす、ちよぼやれ〳〵。チヨンチヨン〳〵。」

「ヤレ〳〵悲しや助けて下さりませ。」

さつま芋日く「それがし始め宗匠の一やくさしたる仕打なく殘念故、何がな思ひ付きをと存ずれども、こゝて思ひ付きもない物、さつまいもの守たゞのり、左の御手にて、彼の板摺を取つて投げのけと云

ふ身。あんまり思ひ付きでもないのサ。」

「さてひやつこい手だ。もう一足早く逃げればよかつたに。」

畫工、草紙屋、版木屋二人、彼奴の新板仕込みと氣は急けども、此の頃家々の怪しき事目にましければ、何様わけある事ならんと、うちより詮議したりける。

「今夜はよもや化物も出もしますまい。氣晴らしに杯を出しませう。」

「是れは大杯。是れで飲んでは忽ちいきつき山の鳶烏。この間私などは、化物奴に、味噌へさい川中へはめられました。それが未だ頭痛が致します。」

「然しながら、古人も妖は德に勝たずと申せば、こちらの心持かも知れませぬ。」

「何だか知らぬが、身柱元からぞく〳〵とする。麻疹では無いか知らん。」

茶釜は化物のわけを、人々につけ知らせんとは思へども、我が姿のあやしければ、なかなか出でがたく、案じわづらひ、様子を立聞きする。

「はて氣の毒な、化物のわけを知らせたいものだ。」

「古めかしけれども、我等が工夫の見越入道、ちつとこらへて一目見なさい。」

「なんと天井見たか。かう白眼んだ所はすさまじからうがや。」

「ヤレ御免々々、これは板木ばん生の目にあふぞ。夢になれ／＼。」

畫工、草紙屋、板木屋種々の化物になやまされ、今はせんかたなく藏の戸前を押し開き、藏の内へ逃げ入らんとしたりけるに、不思議や藏より稻妻つなぎの雲氣發し、正本の親玉坂田の公平、渡邊の武綱、卜若丸、鉢冠姫あらはれ出で、化物どもを睨めからす。

化物本にお定まりの坂田の公平、「いで物見せん。」とのたまふに、

「南無三寶、化物に禁物な奴が出た。早く逃げたがましだのせうしやう。」

「戸前の開くを、今や／＼と待つて居たぞ。」

「ごめん／＼、斯うふみつけられては、頭が大木の切口、いたいのねた。」

「ア、切ない、どうやらさつま芋は死ぬにも一所と見えた。因果なくされ縁だぞ。」

公平化物共を皆ごろしにせんとしける所へ、茶釜が駆けつけ、昔のよしみに一命をこひける故、命を助け意見する。

茶釜「當世洒落の世の中なるに、汝ら如き賤しき奴等を、草雙紙にも書きのせたり。我等が出はじめた昔の草雙紙には、假にもいやしき言葉をつかはず、浮世物語、さる源氏のたぐひ、皆古歌を用ゐ書きたり。然れば汝等ごとき者、此の節雙紙に書きのせらるゝを有り難しと思ひ、以後をきつと愼

ゐ居らうぞ。憎さもにくい奴等なれども、これなくしては、草雙紙の趣向は上つたりおやま。」

茶釜曰く「此の者ども不屆にござりますれども、又無くては雙紙屋の難儀と申すもの、此の度は私に御免じ下され、命はお助け下さりませう。」

大木曰く「茶釜殿のいふ事を用ゐず、今では後悔千萬、茶釜殿の手前、近頃面目次第もござらぬ。」

こま曰く「しまひはこんな事であらうと思つた。一言も中橋京橋おまんがべに。」

放下師の小刀、ならずの森の尾長鳥、天井みたか、四方のあか、薩摩芋、どら燒、おの／＼茶釜が詫言で命助かり、あやまり入る。

大木の切口その外の化物ども、金平が叱りに遇ひ、道理にや服しけん。多くの化物ども、一度にハツと消えると見えしが、二冊の雙紙を殘し、虚空に一行の外題をあらはせり。一人のもの不思議に思ひ開き見れば、大木の切口が始めよりの工み、殘らず書きあらはしたる雙紙なり。依つて此のまゝ置かんも本意なしと、早速今年の新板に用ゐる、春雨のおなぐさみに供へるのみ。

辭闘戰新根　終

三幅對紫曾我

戀川春町畫作

爰に禰津の三郎が末子喜司坊は、兄弟の爲に敵祐經が館へ入り込まんと、久上寺を忍び出で鬼王が働きにて、鎌倉扇が谷の横山町に煙草店を出し、鬼本屋と名を改めける。

然るに近頃敵工藤ならびに畠山重忠が豐後ぶしを好み、鎌倉中の太夫を呼び集めらるゝに依り、是れ幸ひと、鬼王は頭上瑠璃をすきける故、太夫と身をやつし入り込まんと、鬼王は師匠の癖によく似たる故に、鬼本間付太夫と名を改め、喜司坊は久上の久の字と喜司の喜の字を取つて、鬼木久喜太夫と名を改めける。

「こんなお喜司坊さま、煙草店はおやめなされて、爰な稽古所になされませ。三味線は由井が濱に居ります浪瀧引次がよう御座ります。」

「重忠殿のお頭角力を好まれますから、幸ひ弟團三郎は大兵で御座りますゆゑ、角力取に仕立てて重忠殿へ住込ませませう。工藤殿と存じますが、こうも傳手が御座りませぬ。工藤殿と重忠殿とは

至つて谷口で、平常重忠殿へ來られますから、あれへ先づ入り込ませませう」

「何から何までいかい心遣ひ。それなら大株となつて、入り込みませう」

「善司坊さま、隨分御せいをお出しなされませ。おまへの節は味い所があると云ひ、世間でおまへの名をば、鬼本屋りうまでまと申します」

重忠角力を好み、角力取の目見えありければ、鬼王、新左衛門弟團三郎を角力取にこしらへ、重忠の館へ目見得に連れ行く。

其の頃秩父の重忠は赤澤山の麓に屋敷をかまへ、其の身文武兩道に達するのみならず、當世のみにも至つてくはしく、洒落人にてありし故、鎌倉中の人重忠の事を、赤澤門の先生とぞいひける。

されば鎌倉には、大名のすると云はるゝ三幅對に、

大名のする三幅對｛秩父の重忠／曾我の祐成／工藤祐經

と云はるゝ

かくの如くに唱へしなり。

「兄者人、爰が赤澤御門かえ。何卒首尾よく抱へられて、敵の手づるになるやうに致したう御座りま

す。然し獨活の大木で角力の手は知らず、あやふやなもので御座ります。」
「何でも住みさへすれば此方の物さ。たしかに鶴ヶ岡の八幡で勸進角力があらうが、マア其の時は見せ男さ。そして名は、おのしがしやがんだ所が、凸かせいより高く首が出て居るから、しやがむ丈首右衛門とでもこじ付けておかうさ。」
團三郎角力取蹲丈首右衛門と名のり、重忠に目見得する。鬼王は鬼本欠嚔太夫と名のり、しやがむ丈が披露する。
秩父の重忠、角力取しやがむ丈に、目見得をさせる。
「なに鬼付太夫大儀々々、さて聞き及んだそれは大きな男ぢや。」某も抱へう。そしてそちがはなしの鬼本欠嚔太夫をも、此の頃に同道しませい。」
「さて此の若衆が、お聞き及ばれましたしやがむ丈で御座ります。其の昔人武天皇の御代に、丸山權太左衛門と申すが御座りましたが、それより一割大きう御座ります。早速御意に叶ひ召しかゝへられ、有り難う存じ奉ります。また鬼本欠嚔太夫儀は、明日御目見得仕りませう。」
「さて〳〵大きな男ぢや。たしか紅縮の柱隱で、見たやうな男ぢや。」
「かうすゝませられては、きつと晩には、たはらや一ぷく〳〵の痛事だ。」

善司坊は久善太夫と名を改め、鬼王が働きにて、重忠が館へ來り目見得の上、得手ものの味い所を語りければ、重忠悦に入り、平常呼び寄せて酒宴の相手とはなしける。

二人の者も、工藤に便る計略なければ、大磯小磯の堺丁の芝居を勤むる其の間は、重忠の赤澤の館へ入りびたりけり。

「鬼王、兼て申し上げました是れが久善太夫で御座ります。まだ一人鬼本宗太夫とまうすが御座ります、是れは鎌倉の由井が濱邊に居ります。すんどさえました者、ちと召しましては、御酒のお合手になさりませ。」

「アノ宗太夫と申しますは、元もぐさやで御座りやしたが、それはよい聲さ。去年の春も、わたしが天人の狂言の所作の時、語つて大きに落ちが來やした。」

重忠兩人の太夫を呼び寄せ、酒宴をなし樂しむ。

「成程その宗太夫が事も、少將瀬川が話で聞き及んだ。此のごろに工藤左衛門を招きて饗應すれば、其の節必ず同道したがよい。」

「お杯を頂戴仰せ付けられ、有り難う存じまする。」

鬼王時宗がかたへ來り、敵工藤に近よる計略を話す。

「近日重忠殿館にて、和田酒盛のおつかぶせが御座りまして、彼の工藤殿も参られます。其の節浄瑠璃太夫も大勢入りますから、おまへも豊後節を精を出しなされまして、其の節本望を御遂げなされませ。おまへのお名は時宗の一字を取つて、宗太夫と披露致し置きました。おまへと私は語りまして、善司坊様を太夫様に取り立てませう。そして敵を切りもゞさになるがよう御座ります。」

五郎時宗は、親の敵を討たん爲姿をやつし、艾屋となり居たりしが、[illegible]出が進めに任せ、太夫と姿を改める。

「そんならば此の艾屋の株は、京の次郎へ譲つて、太夫になり浄瑠璃を語らうか、悪くしたなら、聞人が、イヨもゞさと誉めさうな事だ。」

十郎祐成も敵の手がゝりに身をやつし、木薬屋介十郎と名を改め、大磯の町へ通ひけるが、大磯屋の虎に馴染み深き中となる。然るに虎、かの重忠が宅の大酒盛に招かれるにつき、其の晴れの衣裳を無心云はれ、三文も宛は無けれども、無本勝負に受け合ひける。

「介さん、何卒一生の晴れでありんすから、必ず間違なしにえ。」

「ミット、放下師の小刀で、飲み込みじやるし、少しも案じ給ふべからず。」

十郎祐成は時に無心をいはれ、のつぴきならず、鎌倉の雪の下町大松屋へ行き虎が衣裳を誂へる

『そんなら手付金二十兩渡します、出來次第、大礒の大岸屋まで持たせて下され。』

「仕立て上げまして百兩で御座ります、必ず跡金をすかたんになされますな。」

鎌倉雪の下町大松屋は、約束の如く虎が衣裳殘らずこしらへ、長持にて大岸屋へ持ち來り、殘りの代金を受取らんと云ふに、もとより祐成すかんぴんなれば、一文の宛はなし。依つて虎とつうつくをして、ちよく／＼らをもつて云ひ紛らかさせ、すかたんを食はせける。

『祐樣のお約束の、御衣裳を持參致しました。殘りの代金八十兩、御渡し下さりませ。』

「主が大松屋さんかえ、介樣は今まで待つては居なんしたが、餘り遲いとて、金を持つて主の所へ行きなんすとつて、たつた今歸りなんした。大方奥山でけしの助かどぢやう太夫を見て居なんして、間違ひんしたのであらう、笑止。」

大松屋は、虎が衣裳代の殘り八十兩を、色々催促すれどもすまさぬ故、地廻を頼み、十郎が歸りを待ち伏せして、打擲せんとするところへ、それと知りつゝ虎は右の衣裳を著飾り、祐成が難儀を救ひ、地廻との達引の仕方、さすがは此の里の名取なりけり。

『モシ此の祐さんは、私が大事の客業でありんす。指でもさしなんすと、アイ虎がお合手になりんせう。』

十郎祐成打擲にあひ無念がる。

『木薬屋と成つて居ればこそ。昔の十郎祐成ならば、汝手は見せぬが。」

「是れふさ〳〵しい釵で目があぶない、揚巻がおつかぶせと落ち付きかけても、八十兩と云ふ金をこちへ出せ。なぜ大松屋をかたりやァがつた。眞にひろ目のなげ入れ太いの根だ。」

此の時深編笠を冠りたる浪人者出て、地廻に金を渡す。

『オット有難山の椎の木山椒、これさへあればとんと云分なしの皮。」

重忠大磯の里大磯屋へ來りて、虎を見たて遊ばれけるが、虎は曾我の祐成が馴染と聞いて、座敷のさわぎ許りにて歸らんとしたまひけるを、虎合點せずいざこざになりけるを、以前の深編笠立ち出で、いりわりをつけて其の場をすましける。

此の譯にて、其の頃世間にて赤澤の先生は、女郎ぎらひのやうにも沙汰しける。

『たとひお大名さんでも、此の里で遊びなんすからは、たとひ賤しいお心に染まぬ客でも、枕をおかはしなんす筈でありんす。何と主の料簡はえ。」

工藤左衛門祐經は、其の頃秩父の重忠とは同席の大名なりけるが、年來の勤功によりて、是れまで家格になき、一臈別當に仰せ付けられければ、祐經大きに悦び、退出よりお禮廻りを勤め、重忠の屋

敷へも右の御禮、ならびに大酒盛の相談ながら、立ち寄らんと急ぐ。
祐經のおそば去らず、近江の小藤太、八幡の三郎供する。
「お禮廻りも濟みましたらば、直に重忠樣のお屋敷へいらせられませ、お供仕りませう。」
「それがし事も、家格にない別當職に仰せ付けられ、誠に有り難う存じます。」
「御同席の儀、如何ばかりよろこび入りまする。」
扨も約束の日になりしかば、諸大名重忠の赤澤の屋敷へ來りければ、有無を云はさず大勢かけより、駕籠又は叺に押し入れて、山を越え谷を越して、何處ともなく連れ行きしは、怪しきとも云ふばかりなし。
叺、駕籠に入れたる人々を、山奥に捨て行きければ、人々ふしぎの思ひをなし這ひ出て見れば、各一ツの茅屋なり。いとゞ不審はれやらぬ處に、其の丈八尺餘りの大小僧、茶を持ち來りければ、各きもを消し逃げんとしけるに、又向うより幽靈現はれ出でければ、皆々わつと倒れける時、重忠、工藤一間より立ち出て大きに笑ひ、「是れ今日の趣向なり。只少將が美しきと、抱への角力しやがむ丈をお目にかけるまでの事」と。それより一間へ誘ひて、酒宴にこそはなりにけり。
化粧坂の少將幽靈の役を勤む。

團三郎化物になり、茶をはこぶ。

『もしお茶〳〵。』

「ヤレ夢になれ〳〵、今日は如何なる惡日ぞ。助け給へ〳〵。」

其の頃是れを、重忠の化物ぶるまひと云ひふらしける。

重忠は、諸大名への馳走に宗太夫、久善太夫、似付太夫を呼ばはる約束なりしに、宗太夫來らざれば大きに立腹ありて、似付太夫難儀する。

『成程お腹立御尤も至極に存じ奉ります。然しかの宗太夫は、昨夜の座敷の酒で倒れ、旅籠町でがな御座りませう。』

重忠立腹する。

『かなふ〳〵大名衆へ約束、それに今夜になり不參とは、不屆千萬。』

工藤祐經なだむる。

『まア〳〵お急きなさるな。是れにはだん〳〵曰くがありま山の、火の見やぐらで御座らう。』

諸大名見物する。

『成程世間で久善が事を、午々と云ふは、此の樣にむまく語る故であらう。』

宗太夫は、艾切の庖丁をとぎて居たりけるが、ねむ氣さざしければ、そばなる艾箱を引き寄せ枕とし、少しまどろむ夢の内に、鬼王が難儀の有樣見えければ、大いに驚き目をさます。

宗太夫は夢さめて、鬼王が難儀と云ひ、又敵工藤祐經重忠の館に居れば、一散にかけ付けて年來の本意を達せんと、そばに有りあふ四文錢おつとり、四ッ手に打ちのり、一散に赤澤さして急ぎ行く。

「こりやさ、よいさ、さつさ、ヨイ／＼。」

五郎時宗は重忠が館へ驅けつけ、暇を伺ひかけ入らんとしける所へ、柴垣の陰よりも深編笠の一侍立ち出で引きとゞむる。

「コリア兄い、朝比奈もどきにつん出た編笠、己も誰だか知らないが、今祐經を打たせては、兄十郎は誰を敵。そして今年の新板に大切の工藤を討たせては、來年からの草雙紙の、曾我の趣向の根だやしだ。そこで今夜の敵討は、さつぱり思ひ切りもぐさ、五月下旬か端午の夜、くすりの露の命を惜します、千ちやう入りにふみ込んで、かばねは假令湯さらしになすとも、譽は天すうまで上らうと思つて、此の場をば一番とまつてくんさいなら、あたゝじけ茄子の皮切だモサア。」

「サア／＼だれだか當てゝ見た。」

「親の敵を討たうとするに、やゝともすれば深編笠で罷り出で、しかつめらしくしやべるのは、そも

「ヤイ汝は何奴だ」惡く騒ぐと、五冊ものの矢の懐から赤本の縁の下へ、はつて／＼はり飛ばすか、返答はどうだヱ、」

五郎は、畫餅が謂めに依つて今夜の敵討をやめ、曾我中村の故里へ、また立ち歸る初春の、空も晴れ／＼宗太夫、家と云本に來たける、昔語ぞ目出たけれ。

何畫餅を說けば、例の作者の口上「東西々々さて、年々御目にかゝりまする不調法なる草雙紙、春の一刻價千金先生と、もてはやしにあつかるまゝに、彼の萬吉が鼻高々と、高慢齋に聞たらさえぬこじつけを、滿多むしやうに例のたね、ことしも皆樣の御意にかなひ、テモ珍らしい藝者曾我ちやと、隅から隅まで御贔屓を、まつや鯉の腹鼓、つゞみくさみ浦津三方の津に、其の名も聞き三幅對、紫曾我の御評判を、偏に願ひ奉ります。」

三幅對紫曾我　終

楠無益委記

戀川春町畫作

叙

楠多門兵衛督頼政、わい／＼天皇に、よしなき御むほんをすゝめ申し、宇治の正燈寺に、九年が間たてこもつて、つら／＼世間のありさまを見るに、其の變ることきはまりなく、阿蘭陀細工の影繪の如く、きれ／＼然たる博多の帯、むねにするかとすれば、忽然として尻ッこけになる息子のしまつ、親父のだうらく猶更休期あるべからずと、見徳太子の書き置きたまへる行末はやりの無益委記をひらけば、其の文に曰く、

人王三萬三千三百三十三代に當つて、初鰹極月二十日頃より出でて、價尊きこと八百八十兩ぐらゐ、五百兩に付けては返事もせず、而して後天びん棒上へ反る。

「かつた／＼と、よぶ所ばかりも百兩がものは有るのみこ」

六月大寒入つて、汗つるゝとなる冷にうめんを喰ふ。

『かゝァどんや、今年は寒くあつい夏だの、此のさうめんも大分しもけた。』

「のびはしないで縮みました。」

大通の羽織長さこと三尺八寸五六分、紐は踵へとゞき、裏襟白く、刷毛先は釣竿の如く、帯は風呂の箍の如し。

『とてもの事に、茶屋から宿引を出しておけばよい。』

四ッ手車出来る。急ぐ時は油代をはずむ。

『尻のをどるのはちよびとこまるテ。』

「はれ〴〵としてよいノ。」

「棒組ナント棍が長えぢやァねえか。」

「今夜はでえぶ車が出る晩だ。」

細見繪圖高札になる。

坊主天下はれて女郎を買ひ、俗はかへつて陰馬を買ふ。

『醫者にばけるなどとは昔の事さ。』

「オヤ／＼大きな一杯です。とうでも達磨大酒のお宗旨程ありんす。」
盆と正月一度に来て、三河より齋萬歳いづる。
「徳若に御南無さいとは、お家も榮えてましにます。」
寶線香賣りいづる。
「新板かはりました五種香々々々。」
蛸も杓子も藝者となる。
「杓子さんは一本足で、さぞちよつ／＼と轉びなさらう。」
「悪洒落をいひなはるな。」
新悪はらを開いて男郎を出す。やりてばゝアはもらひておいらんとなり、禿をふゝろれと呼ぶ。
「あれが大木屋のの鼻大きかの。」
放蕩娘悪はらへ通ひ、母親の勘當を受ける。
地廻工面悪く、不廻となる。
江戸節もまだ／＼ひくしと、高くとまつて神樂、催馬樂を習ふ。
「何だか御法事に逢ふやうでありますこ。」

「イヨ〱眠いと申します。』

諸事萬葉の時代を慕ひ、屋根の破損雨漏、或は猿田彦と長德を付ける。陰馬の切見世出來る、年の寄つたをはげまと呼ぶ。

『コレよつていきなはれ。」

「よつても大師なけれど、まだ弘法へ行く所がある。」

遊藝悉くかじりちらして、武藝となる。遣手後生心出でて、新造夜眠ることなし。

『しけれや、それを仕舞うたら、重ね簞笥の引出にある竹具足を出して來や。」

「あみだぶ〱、ア、あの子もくたびれよう。」

地震空で搖つて、雷地の底で鳴る。よつてばら桑歳萬樂といふ。

七夕の這ふせはしばしよどむともゆられてつらき契りなりけり

『さて鳴るわ〱、其處等へお上りなされねばよいが。」

親父けつく〱に遊樂を盡し、おゝイ婆アの藝者はやる。若い者行儀正しく、臺の物目錄にて披露し、紙花二季の通ひとなる。

座敷持の床の間、湯殿、雪隱の無いばかり、古道具屋の見世の如し

『チヨビ〳〵もらつては爲になるまい。ためて遣つたらちつとはきおひにならう。』

一臺の物も御覽じたばかりで、御祝儀をおはずみなさるは、きついおむだで御座ります。』

息子決して夜あるきをせず、佛いじりに朝起して、朝茶飲んで御座るはおとなしけれど、又茶に醉はぬ御用心をと、見德太子謹んで白す、穴賢

『ナ、ギヤ子曰く、儒學の身でも、迷ひやすきは色の道かこ』

楠無益委記　終

怪談豆人形

文溪堂作

鳥居清經畫

昔を今にうつし繪や、時はいつの頃やら知れねども、日本よりどちらにか當つて小人島あり、茲に化物ども集まりて語る。

「皆の衆何とおもやる。此の土地に居ても色々化けても面白くもない。これから日本へ渡つて化け樣の修行をせんと思ふが、貴樣たちは何と思やるぞ。」

「それはよからう〳〵。」

と、それより化物ども大勢旅立の用意をする。

かくて小人島の化物どもは旅用意して、海ばたへ出て見るに、海まん〳〵と空も一ツに雲の波、如何せんと思ひし所に、中にも年老の化物云ふやうは、

「己は大船の帆柱の車の穴へかくれて、日本へ渡らん。」

と」それより木の葉にて拵へたやうなる舟にて、やう／＼と波にゆられながら大船へうつり、帆柱の穴の車の中へかくれて、日本へご渡りける。

「扨やかましくてならぬぞ。向うに見ゆるが硫黄が島、此方に霞かゝると見えけるは釜山浦、さて又あなたに見ゆるはあれこそ日本なるらめ。」

晝は車の穴の中にかくれ、夜は綱に傳はりて、荷物の上に出でて遊びける。

「船中のうさはらしに輕業と出かけよう。はゝ面白い。大和、河内も見えるわ／＼。」

廻船大坂表へ著きしかば、化物ども荷物にからまり陸地へ上り、先づ珍らしき日本の大坂と云ふ所だと、其處此處を見物するに、扨人の大きなるに膽をつぶす。それより京から奈良のあたりへ行かんと相談する。

「此の荷物ではふられる時につぶされさうで、どうやら氣味がわるい。そつと下に置いてくれればよいに。」

「先づ吉野山は花の名所と聞いた。さだめて日本の化物が居るであらう。行つて見ようではあるまいか。日本の化物なら定めて大きからう。大きいにはこまつた物だよ。」

小化物ども吉野山へ來り、「さて玆が日本の吉野といふ所、花の名所だ。成程きつい櫻だ。」と打ちな

がめ、だん〳〵夜も更けぬれば、吉野の化物出でてうそ〳〵歩く。

『是れは何だ、さて〳〵小かな者かな。見ればみんな己がおつかぶせだ。是れマア手前達は何だ。』

「イヤわたくし共は小人島の化物でござります。日本へ化け様の修行に來たので御座ります。」

『修行も何も、先づ小さくて目にも見えぬ。これ〳〵己が耳の中へ這入つて垢をさらつてくれぬか。是れはをかしい〳〵。』

姨山の化物芋掘坊と、背山の化物背蟲坊出でて、小化物をおよく〳〵らものにする。

『兎角大きくてどうもならぬ。』

小化物吉野山にて大きになぶられ、それより京都に來りて、嵯峨の里へ行く。

こゝこそ物さびしき所と、其の夜しばらく居るうち、嵯峨の化物出でけるを見るに、これ先づ大きうてすさまじき入道なれば、小人島そばへ行き、

「さて其所許樣は此の地の化物にてあるや。」

「ハヽァ是れは小さなものだ。われやァ何だ。」

「わたくしは小人島の者で御座りますが、化物修行に參りました。何卒面白き化け樣の御傳授を受けたう御座ります。」

「何傳授どころか、けし人形を見る樣な體をして、是れはをかしい〳〵。」

と色々なぶりまはす。

『己がにらみとばすぞ、この化物奴等。』

「己がなめ殺すぞ。」

思入になぶられ、こゝにも居られず、それより箱根山へ行かんと志す。

『扨も大きなものだ。』

「どうもおらがには相手に成られぬ。」

それよりそろ〳〵出かけ、箱根山へと志し、やう〳〵駿河なる富士の裾野にぞ著きける。

「扨こそ、日本の名山富士の山とは是れなるらん。」

とながめけれども、中々目にも及ばず。

『これはどうだ。此の山に住む化物なら、どのやうに大きからうも知れぬ。早く先へ行くがよい。』

化物の親玉大陀法師居て、富士の山にほゝづゑつき、見下して化物をあざける。

『この山の化物、此のやうに大きいは話の種だ。見て置け。』

と云ふ聲のおそろしさ、雷の落ちかゝる樣なれば、皆々耳を塞ぎ、「扨こそ大きいわ。」と、いち足出

して逃げてゆく。
『富士の山とせいくらべするは己ばかりだ。きついか／＼。』
「扠こそ／＼。」
「あのやうにも大きな者があるものか。」
「にげろ／＼。」
「白眼み殺されてはならぬ。」
「扠こそ大きいわ。』
と、皆々大陀法師を見て、ふるひわなゝき逃げゆく。
それより、三保の松原へ行きながめければ、大きなる松茸の化物出でける。
『汝はなんだ。小さい物だな。』
「わたくしは小人島の化物なり。』
とくはしく話しける。
『松茸の化物なら、此方の島へも渡らしやんせなう。』
松茸の化物世話して暫く逗留させ、それより箱根山の道すがらをとく教へ、「随分さい出して修行し

給へ。」と、送りてつかはしける。

『貴様たちは先づ、なりが少さいから人がこはがらぬ。』

「左様で御座ります。」

さて箱根山へ來り見るに、なる程物すごき、さも化物も住むべきと見えければ、夜の更けるをぞ待ち居たり。

夜更けて、山深く入りぬれば、箱根山の化物出でける。

「まうし／＼、其許は此の山の化物にてあるや、我々はかやう／＼。」

と語りければ、

『其のけし人形のやうなざまで、修行は出來ぬ／＼。』

色々なぶられ、腹は立てども仕方なく、あやまり入りて居たりける。

『兎角此方には居られぬ程に、國へ歸りやれ。貴様達も小さくても己が仲間だぞ。かう云ふ日本には居られぬ。早く歸んな、居る程どんな目に遇ふも知れぬぞ。』

と威しける。

箱根山にて大きになぶり者になり、口惜しく思へども形の小さき故、詮方なく、夜は化物出づるも

いなれば、昼逃にして、箱根山より東は、野暮と化物が無いと云ふから東へ下る

『サア〳〵早く行きやせう。此の儘は急でどうもならぬ。すべるまいぞ〳〵。』

かくて化物江戸へ來て見るに、成程化物もなし、是れこそ何處ぞよき所へ這入り化けて見んと、大きなる町家へ這入り緣の下に隱れ居て、其の夜何でも一化ばけて、人を取らんと待ち居たる。

見越入道日本の女を始めて見て、

『さて〳〵美しいものかな。雪の肌には己も氣があるが、どうやら氣味が惡いぞ。』

「扨も〳〵美麗な物だ。」

「是れはたまらぬ〳〵。」

「あれは江戸の化物か知らぬ。餘り美しい、飛んだ事だ。」

四五人集まり、酒吸物などにて當世の洒落噺して居る所へ、かの化物ども通に、客の印籠の中、又は煙草の下、吸物椀の蓋の下などより現はれ出る。

『何だかこまかな蟲が出た。』

とつまんで、手のひらに乘せて見たり、煙草の煙にていぶしたりする。

『まゝんでいやす。』

「動くな。」
「アイ〳〵。」
「是れはよいなぐさみだ。」
「此奴を干しかためて、根付にしませう。」
この化物どもゝ困り、惡くしたら煙管でぶち殺されさうにて、氣味惡くなりける。
「わたくし共は、かやう〳〵のものなれば、命は何卒お助けなされて下さりませ。」と願ふ。
「願ひの通り命は助けて遣るべし。色々に化けて見せよ。それを肴に一ッ飲まん。」
とてなぐさみ、仕舞にはめづらしき物なりとて、古き雛箱の明きへしまひ置きけるに、化物ども困りける。
かくて、小化物を箱に入れて置きけるを、御大家よりお聞き及びなされ、見たき由仰せに依つて、早速持參して御覽に入れける。殿樣御座敷へ御出で、箱の蓋を取りて化物共を出しけるに、床の間にかけし掛物を見てにげる。
「これはどうした物だ。鶴ときてはかなはぬ〳〵。」
「たゞうおそろしや。足一本では逃けるに間に合はぬ。」

「餘りの事に歩かれぬ、夢では無いか、夢になれ／＼」

「ヤレこはいかに。早々にげろ／＼」

殺生の甚しき朝日に鶴のかけ物、床の間に有りしを見るより、化物共「ヤレおそろしや、鶴にさらはれてはならぬ。」と恐れわなゝきて、何處ともなく失せけるは、誠につるのあるとくかや。

「さて／＼鶴がきついきらひ物だそうな。逃げるわ／＼」

誠に我が國は神と君との道直に、千歳を祝ふ鶴の徳にて、小人島の化物共恐れて立ち去りけるも、鶴は千年、龜は萬年もかはらぬ神の御恵み、つきせぬ春こそ目出度き。

怪談豆人形 終

金銀先生再寢夢

戀川春町畫作

爰に金銀先生と云ふ人あり。金銀は勿論七珍萬寶藏に滿ち、金の腰元、銀の妾、小判の番頭、南鐐の手代、其の外浪錢鐚錢の家來夥しく使ひ、何不足無く暮しける。

手代南鐐、主人を無きものにして、我が一類世にはびこらんと、手醫者小玉銀と計る。

南鐐「全體番頭の小判が居ては己の位が負ける。彼奴をさつぱり仕舞ひたいものだ。」

小玉「私が狂言をやると、彼方から身を引きます。」

金銀先生夫婦、煮花に浮され、寐入られる工夫をする。

金銀「前句に、「寢そびれた夜は千兩を遣つて見ろ」とあれども、己は千兩ぐらゐ、平常遣ふから珍らしく無い。アンマリ寐られぬから、金を有りつきり捨てて見ようと思ふが、どうだらう。」

女房「是れは新しい思ひつき、ともかく捨てて見やせう。」

「金を有りッきり、西の海へ、さらりつと捨てろ。」と云ひ渡す。

番頭小判意見する。

小判「是れはお氣が違はれましたか。古人も是れを得るものは前にたち、是れを失ふ者は後に立つと申しました。金の無いのは首の無いには劣ります。平に此の儀は御無用になされませ。」

南鐐「はて貴樣一人さういふ事はない、是れも旦那の御慰みだ。」

南鐐「はて笑止な、眞に捨てなさるのでは無い。旦那が寐そびれて、なぐさみに捨てて見なさるものだもの、心配せずともよいわね。」

番頭小判諫め兼ねて引く。

小判「忠臣は奴となり、小判は諫めて死すとは云へど、死ぬ氣が無いから、三度諫めて用ゐざれば身退きませう。おしつけ思召しあてられませ。」

番頭小判身しりぞきしより、誰あつて諫むる者もあらざれば、金銀先生心のまゝに、金を西の海へ捨てさせる。

手代南鐐、うまく主人を誑り、勇み進んで、西の海へさらり〳〵と捨てる。

南鐐「捨てるのは惜しいやうだが、是れが有つては己が肩身がすばる樣だ。是れからは己が世になら

う。」
世間の拗そびれた者の夢ども此の所へ來かゝりて、思ひがけなく金を拾つて悦ぶ。
「是れは嬉しい、何でも丁のきがりを拂つて、餘りで粹な衣裳を拵へませう。」
「一兩薪屋、二兩が米屋、餘りをば廻して利を延ばしませう。」
金銀先生心のまゝに金を捨ててしまひければ、家來を遣ふ事もならず、今は夫婦かけ向ひの身代となる。
女房「斯う働くと格別お腹が數寄屋橋、然し鍋釜のゐしきの炭煤には困りやす。」
亭主「面白い／＼。この頃は働く故か、飯が格別旨く食はれる。飯を炊くには法があつた。始めどんどん中ちよろ／＼、ぐつ／＼煮えに火を引いて、三尺去つて猿眠り、親が死ぬとも蓋取るな。とはよか斯う云ふ事だつけ。」
夫婦かけ向ひにて手鍋も面白けれども、一日ましに米櫃さみしく、今はさつぱり無くなりければ、せん方無く、嗜んで置いたる細身の脇差を曲げて米を買ふ。
女房「ヲヤ／＼、脇差を曲げなすつたら米になつたの。不思議なことだ、竹田の細工では無いか知らん。」

金々「なんと細工は流々、しらけでも仕米でも、お望み次第だ。」

脇差を曲げて来は出でけれども、薪が無くなり味噌が無くなり、如何はせんと心を痛めしが、女房が嗜んで置いたる蔵の夜具を見出し、ぶち殺して味噌と薪にする。

金々「不便ながらも主人の為だ。死んでくれろ。」

亭主「ア、苦しい／＼、私が死んだら何卒水葬になされて、流れ次第にして下さりませ。」

女房「己が今まで、命にかへて隠して置いたものを、不便や／＼、その代りには、八月々々の通利銭供養はしてやらうによ。」

脇差を曲げ夜着を殺して後は、外に才覚の仕方なく、是非なく女房の生皮をはぐ。

女房「如何に夫婦の中ぢやとて、皮をはぐとは餘り胴慾ぢや、ア、痛い／＼。」

金々「痛からうがこらへや／＼、小さい時赤蛙の皮を剥いだよりも、餘ッ程はぎにくい。」

剥ぎ取つた女房の生皮を、古着買に賣つてやる。

金々「よく其の皮を見たがよい。未だ昼前で尻垢も付かない。」

「彼のお女房さんの皮かえ。なんともう一皮、とてもの事にお剥きなさりやせんか。」

女房生皮をはかれて、餘りの苦しさに、暇を貰ひ出て行く。

女房「ア、悲しや、風が赤身にしみてひり／＼する」
女房出て行き一人暮しになりければ、それでも濟むまいと、鄰の八兵衛の仲人にて、身の皮のたんとある女房を呼びける。
女房「鼻筋は通つてよいが、餘り通り過ぎて氣味が悪い」
仲人「兎角これから睦まじくさつしやりませ、目出度い／＼」
此亭主もあひすゑ味人になつて見れば、女房の鼻の高さこそ道理、持参せし身の皮を残らず取りいだし、かけ竿のやうに鼻へかけ、大きな尻にて、亭主の寝た上へどつさりとすわり、ぐうとも云はせねば、氣味よかりける有様なり。
金銀先生夜中、女房の尻に敷かれて、苦しさのまゝ、身の皮は欲しけれども是非なく、翌日去りこくりける。
身の皮のある女房を去つて後は、夏が來ても蚊帳を釣る事もならず、女房の残して行つた身の皮箱の覆ひを、紙帳のやうに頭へばかり釣り、身體をば蚊遣にていぶし、漸く蚊をば凌ぎけれども、其の替りに夜明までまんじりとも寐ずに仕舞ひける。
蚊にいぢられてまんじりとも寐ぬ故、いつそ堺町へ行つて二番叟から見ようと、馴染の茶屋へ出

かした所が、昔の金のあつた時と違ひ、熱い茶も飲ませず、鼻であしらはれて大てれなり。

「たしかお馴染の樣でも御座りました。然しさしあたつては、棧敷はおろか切落も御座りやせん。大晦日頃には御座りやす。」

所詮芝居は見られず、錢の入るたのしみはならぬから、野邊の景色を見て樂しまうと、三圍の方へ志しけるに、道すがら、夢に金を拾つた奴等、屋根舟にての大騒ぎ、聞くに付けてもむかし小判が意見を聞き入れずに、金を捨てた事を後悔する。

三圍の土手に狐の寢て居たを見付けて賴む。

[illegible]「モシ、馬糞を喰つても大事ないから、何卒アノ屋根舟の樂しみの樣な事に化して下さりませ。」

[illegible]「さう四面づくに、賴みかけられてはどうも化し惡い。そして馬糞を食ひなさるだけが無益と云ふ物だから、是れから町へ行つて奢りませう。此の木の葉を見せると金だと思ひます。お前の狹俵は菅笠と見え、私が菰は長羽織と見えます。」

[illegible]「馬糞を食はずに、町へまで同道とは有り難い。この御恩いつの世にかは忘れんや。」

三圍の狐に連れられ、中の町の茶屋へ上り、虛空にさえる。

茶屋「もし貴方がたは、大方松葉屋で御座りませう。」

狐「ちよつと待ちな、松葉は燻す縁があつて嫌だ。玉屋にしやせう。」
金銀「そんなにやつてもよいかえ。知つて居ても惜しい様だ。」

これより兩人玉屋へ上り遊びけるが、野狐の悲しさ、飲み付けぬ酒にぐつとまはされ、正體をあらはし、命から〴〵逃げる。

『うぬ古狐め、ぶち殺して藥食ひにしてくれう。』

狐の逃げた後にては、金銀先生の長羽織も忽ち古席となりければ、「此奴も定めて狐なるべし。正體を現はさずば松葉いぶしにしろ。」と松の木へしばり付ける。

『眞の金さへ出したならば、赦してやらう。勤めと花で〆て一兩。それを出さぬと松葉燻しだぞよ。」

金銀「御尤々々、私しは狐では御座りません。勤めや花はきつと金にして濟ましませう。ゆるして下され。」

おかし意見を云つて用ゐられず、身しりぞきたる小判、折節この里へ来かゝり、古主の難儀を餘所ながら救ひたく思ひ、南鐐に幸ひ出合うて、八片借りる。

南鐐『よんどころ無いとあるから用立てます、きつと明日お返しなされい。」

小判「是れは忝い。すなはち證文お渡しまうします。たしかにあゝいふ難儀の後では、乾度無間の

鐘といふ所だ。何でも降らして進ぜませう。」

公葉いぶしの難儀をのがれんと、心をつくす折節、二階座敷の唄を聞き、小判が昔の意見を思ひ出し、意見の鐘と觀念して、手水鉢をたゝく。

主「なんだかやら／＼落ちる。是れは夢かや、うつゝなら早くさめよ。」

南鐐小粒銀、なほ／＼惡事を密談する。

南「よんまと煮花で浮かして、金は捨てさせましたが、モシ此の上夢がさめればもとの木阿彌。どうした物であらう。」

「それには屈竟の毒藥、この海鹿の黒燒を飲ませますと、幾年たつても目がさめませぬ。早速これをお飲ませなされ。」

小判立ち聞きして惡事を知る。

小判「サテハ彼奴等が工んで、旦那を難儀させ居るな。何でも思ひ知らせてくれん。」

小判現はれ出で、南鐐を手込にせんとしけれども、八片借りたる義理あひにて手向ひならず、また主人への忠義立たずと腹を切る。

南「小判小粒の根をたつて、おれが此の世の中にはびこらうと云ふ謀叛だ。残念ならば八片を今返

せ。サ、、、、どうだ。」

小二「小判を切つたりや八片となつた。是れを返すからは恩も平も無いぞ。覺悟ひろげ。」

小判腹は切つたれども、少しの纔の不通用のさはりにもならず、八片を返して、南鐐一切を殘らずたばね、引き立て來る。

金銀先生は、意見の金にて南鐐八片を授かり、郭の難儀をのがれ、内へ久しぶりで歸つた所が大晦日、借金どには山の如く、申譯これでは叶はぬと、首を括らんとする所へ、小判、南鐐一束を引き立て來り、悪事の譯を一々白状させる。

小二『皆々、みんな此奴等が悪事で御座る。お死になさるには及びませぬ。金銀これはお夢で御座れば、少しも早く目をさまされませ。」

金銀「サテハ南鐐が悪心であつたよな。」

南一「アヽ、かねはねぇ。斯うなつては百兩だ。」

「かけを取られぬうちに、夢を覺されては氣がない。」

金銀先生夢さめたる所、不思議や先生の夢にはあらず、作者と畫工これまでの金を、戀川春町が春待つ噺田のやりくりに、心を痛めるうたゝ寐の、暫しの内の夢なりけり。それは其の儘書き記して、

先づ初春のおなぐさみに、目出たく恥をさらす而已。

金銀先生再寢夢　終

善光寺御利生
通鳧寝子の美女

黄山堂　南陀伽紫蘭　作
豊章　喜多川哥麿　畫

序

猫は昔一切經を渡されし時、經典の衛に添ひ來りし、それによりて相州金澤てふ所を始めとして、日本にあまねし。去るにても其の心奢からず、妻なる者の猫好きは世話するのみ、夫なる者の寝子好きは金銀の費ひ、手代たる者の一切は、手引の茶屋にうつゝをぬかし、註文の間違ひ受取まへをしくじるも、是れ寝子好きなるべし。首様の邪氣なる事即ち深く悲しみ給ひ、此の地にて開帳有り難く、誠に諸行無常の兩國は、是生滅法の日參にうるほひ、生滅々已の寺は、寂滅爲樂の參詣を喜びぬるも、是れ即ち善光寺如來の功力なることをかんじ、晉子が一句にすがり、通鳧寝子の美女と題し、黄山堂の主人作りしを、切にもとめて、當篇に泊おくれば衆をと りぬ。

昔々の事なりし、こゝに猫又やしきありて、其の後は人も住まず、家もこはれたるまゝにてありけるを、戸手川高右衛門といふ關取、信州より來りて、晴天十日があひだ、一日も負けずにしまひければ、ひいきおびたゞしく付いて、金銀はうび數しれず、おびたゞしくもらひければ、忽ち大金持となり、居宅を建てん事を望みけり。幸ひの地めんとて、此の所に家をたてんと云ふ」友達きたりて、此所はむかし猫又やしきにて、いまに其の妖怪のこり、人民をなやますこと、くはしく話しとゞめければ、元來大丈夫のものなれば、なかなか聞き入れずして、棟梁に繪圖を引かせて、早速ふしんに取りかゝる。

『こゝは猫又やしきといふところで御座る。』

「明日から材木をいれませう。」

かくて關取家をたてんと、いよいよ材木を仕入れ、大工を大勢入れて普請を急ぎければ、早速出來上る。全體風雅の男にて、二階座敷下座敷、色々に間を仕切り廊下を付けて、優にこしらへる

『今年は鎌倉も、八分通りの御普請で、材木も直が上り、職人も大ぶん立つて行きました。』

「棟梁さん、立前には人の十人も入りやせうか。」

普請も早速出來けるに、藤澤のかたより、うぶすなの祭にて呼びにきたりければ、弟子どもをつれて行く。留守居に、下女と男を殘し置きしに、以前の猫又の妖怪出でて兩人をくひころし、其の姿と化けて、いろ／＼人民をなやませんと、たくむ程ぞ恐ろしけれ。

甲「私は直にこの男に化けませう。女郎やには丁度よい普請の拵へやうだ。」

「今までは人もすまず、明屋敷にてさみしかつたが、關取めが住んで大ぶ人がくるから、己が出て、はらの奉公をせねばならぬ。明日から女郎に化けて、金まうけといふ腹だ。」

關取まつりに行きたる留守に友達見舞に來りければ、かの猫又ども集まり、女郎、お針、下女、わかい者、おもひ／＼に化けて相手をいたし、金銀をむさぼり、さま／＼の無心をいふ。

「わつちには鰯頭がいいよ。その雉子大夫がみやげときりあげなんし。」

「こひは曲者ごさんなれと、申しましたは下町で御座ります。」

與「きゞすなく、野邊の若草つみ捨てられて、チ、ツテツツトン。」

「きついもの／＼。」

惡事千里にて、此の事關取の耳に入りければ、藤澤を立つて家へかへらず、弟子の家にて色々相談する。

『どうも思案におちぬ。』

「とかくよく手證を見定めての上がよう御座らう」

それより闇取、様子を見んと隠れ見れば、おりはうす遊びに来て、さかなをくひ、女郎と狂ふあり

さまを見て、おどろく。

『耳のあかをとつてあげましよ』

「おゝよいきみだ」

闇取はつくづく思ひけるに、あの妖怪を打ち殺すは易けれども、左様の者なれば又もや靈魂殘り、如何なる祟をなさんも心元なしと、案じ居る。弟子共集まり、「とかく今年は信州善光寺如來の御開帳なれば、これへ祈誓をかけるにしくはないことと申しける。

如來の御利益にて、妖怪を退治するは安けれど、まづまづ御江戸へ著く日に、幟をこしらへ、御むかひに出づべしと、相談きはむる。

『まづ其の方がようごんしよ。』

かくて闇取は、祈誓をかくるに若くはなしと思ひ、いよいよ唐木綿にて幟をこしらへ、深川の先生に文字をかきに頼みにくる。

『親方こゝが先生の所であらうぞえ。』

「わるく云ふ人もあるけれど、まづ此の人が親玉さ。」

職もできて、開帳も御着きになりければ、むかひに出で段々の宿願かけし所に、不思議や善光寺如来、夢まくらに立たせ給ふぞ有り難き。

『ぜんさい／＼、われはこれ、汝斯願をかけし所の善光寺如来なり。其方が願ひの所、尤もにおぼゆれども、助くるこそ是れ弘道の教へなれば、多くの猫又ども、さまざまの姿に化けて、人民をたぶらかすも、これ畜生のあさましき故なり。わが利益を以て、猫又どもを化けたる形の人間となすべし。これよりなんぢ、其の人となりたる猫どもを、かゝへ、南鐐二枚づゝにて昼夜を五つに切り、多くの人に随ふ物ならば、後生の障もなく、金銀山の如く湧き出で、人民道のたねともなるべし。ゆめ／＼疑ふ事なかれ、どろ／＼／＼。』

如来の御教への通りにして見せる積り、のれんをかけ、女を表口へおき、人を招きければ、いよいよ繁昌にて誠にありがたく思ひ、開帳のとりもちに出でて、こうれきの御影は是れより出ます、霊宝は左へ／＼、ことというて勧める。

日にまし繁昌いたし、ことさら開帳の人にて、昼夜ともに客たえず、金銀財宝わくが如くに出来け

れば、どこ不足なく、花の御江戸の賑ひつきせぬ家ぞ目出たけれ。

善光寺御利生 通鬼寢子の美女 終

扨化狐通人

伊庭可笑 作
鳥居清長 畫

爰に松川村といふ所に、年古る白狐あり。娘を三崎とて、今年二八の花盛り、田舎には惜しき程の器量なりしが、近き頃谷中より養子をとして、衣笠森之丞といへり是れも古今の色狐にてありけり。未だ三崎と婚禮はせざりしが、互に思ひ思ふ事なれば、中睦まじく暮しけり。

『森之丞めが通人とやらの風になつて、毎晩々々出あるくが、碌な所へは行くまい、ちと此方意見を言ひめされ。』

手代九郎介氣の毒がり、

『ちと私が御意見申しませうが、兎角早く御婚禮を濟ませたうござります。』

扨も手代九郎介は、外見は忠義に見ゆれども、何卒森之丞を追ひ失ひ、此の跡式を押領して、娘三崎を心に隨へんと、色々謀めぐらし、森之丞を、當世の通人とは仕立てけり。

『何と若旦那極樂とは此處のことさ、外には中橋で、斯う化けた所は、何と男振といふ身で御座りませう。』

森之丞は九郎介が勸めにより、色男と化けて、髮はいきちよんの長羽織、ちと古けれども、緋博多たばこと出掛け、何時の頃よりか、此の野原といふ郭へ通ひて、眞崎といふ全盛の女郎に馴染み、此の頃は金に少し行きつまり、九郎介と言ひ合はせ、色々工夫する。此の野原といふ郭は、狐どもの人をたぶらかさんと、色よき傾城と化けて、晝夜賑しきこと北郭に異ならず。中にも眞崎は森之丞にあこがれ、外客なば袖になし、明けくれ心を通はしける。

その夜九郎介は、森之丞を郭へ連れ行き、我獨りかへり、留守を見こみに善き折なりと、眞崎を捕へ口說く。

『是れさ彼の馬鹿旦那は、眞崎といふ美しい女に惚れて、御前の事は疾つから思ひ出しもせぬ。また眞崎が方からも飛んだ惚れやう。其の筈でもあり、御前の前では、七文の張拔面を見る樣な顏をして居て、眞崎には大の色男と化けて見せる事だもの、惚れるも道理さ、あんな不心中な人は思ひ切り、私に靡きなさい。御前さへ合點なら、直に飛んだ色男に化けやんす。』

「これ／＼九郎介、主人の娘、殊に森之丞といふ男のあるに、嫌らしい、其處放しや。父樣や母樣に

言ふぞえ。」

「それを言つて堪る物か、左樣腹を立つた所が又堪らぬ。ちよつと〳〵。」

森之丞は舘崎に打ち込み、日夜通ひ詰め、今は揚代に詰り、案じ思ひ居る處、九郎介が智慧を出して、此の家に傳はる寶の寶珠と鍵を盗み出し、三百兩の質に入れる。

『まんまとして遣りました若旦那、靜かに〳〵。何の、親の物は子のもの、尻尾が出たら其の時のことさ。』

其の後、白狐夫婦に九郎介を近く呼び、段々と森之丞が身持惡しければ、勘當せんと相談するに、して遣つたりと九郎介言ふやう、

『なるほど御尤もに存じます。御詫も申す筈の私なれども、未だ御存じはある間敷く候へども、御家の寶寶珠鍵までとうに質物に入れ、御寶藏は空間でござります。』

夫婦肝を潰す。

『[illegible]の憎き奴、傾城狂ひのあまり、寶物まで失ひ、先祖へ言譯が無い。七代までの勘當なり。出て失せ居れ。』

與三崎歎く。

「母様どうぞ仕様は御座んせぬか。」

「どうも主の彼の腹立ちでは、詫びても合點はなされまい。これ／＼森之丞、どうぞ寶の品を取り戻し來らば、其の節は妾が取りなして、勘當も赦りるやうにしませう。是れから心を入れ替へて辛抱し、兎角寶物を取り戻すが肝要ぢやぞ。可愛や／＼聟殿、さらば／＼。」

「どうも氣の毒な事、然し身から出た錆とやら、仕方が無い。ノヽ見すぼらしいなりの。親御の恥、思ひ當りましたか。」

ふ「おやまありあるの何にも言はぬ、九郎介覺えて居れ。御二人さま、三崎もさらば／＼。」

それより九郎介は、又三崎を口說けども聞き入れず、剩へ父親に告げける故、此の家にも居られず、或夜土藏へ忍び入り、金子を盜み出し驅落ちする。

「あの女郎奴めは大分苦勞をしたに、あはびの貝の片思ひ。憎さも憎し、此の金と此中質に入れた寶物の價値と、合はせて五六百兩。うまい／＼。是れから己が好きな色里の河岸へでもひき込んで暮しませう。ハヽアそれよ。」

かくて森之丞は父の勘當を受け、寶は在所知れても取り返すべき金子も無く、たゞ憎きは九郎介と思へども、是れも行方知れず。今は頼るべき方も無く、馴染重ねし眞崎がかたへ、また色男となつて

來り、金の才覺を頼む。

眞「必ず苦勞にしなんすな、どうぞ仕樣がありんしよ、此の御苦勞も皆私故、堪忍してくんなんし。」

眞崎は森之丞に頼まれ、身に替へて才覺しても、今の世の中、狐の仲間でも金は滅多に出さず。不圖思ひ付き、奥庭の手水鉢にて無間の鐘を撞く、

「たとひ此の身は無間地獄へ落ちるとも、だんない／＼大事無い、最愛し男のためなれば、南無日本の國々の神樣、金たつた三百兩、何卒お授け下さんせ。」[illegible]いた柄杓の頭が拔けた。」

なか／＼近年の無間の鐘に柄杓の當る音に、何にも出ず。眞崎も一圖にどうせうね。」と呆れる。

森之丞は、眞崎がなにても才覺出來ず。それより杉の森に居る[illegible]が許へ行きて頼みしに、彼が倅富介、安太郎といふ者、仲間なる者にて、森之丞に隠匿ひ、段々の譯を聞き、色々と工夫して金の才覺に懸りけり。

富介兄弟の者、金子才覺の手段に不圖思ひ付き、人間に化けて賣藥となり、葛籠のおひさきを擔ぎ、江戸中賣り歩きて利分を取り、森之丞をはごくみ、小ながら、殘りし商ひの始め置けしに、三百兩といふ金、急には思ひも寄らぬ事なりけり。其の頭白狐と此の兩人を狐膏藥と言ひ觸らしけり。

「信濃稻荷樣の御夢想ぢや、とこせやこん〳〵。」

扠も森之丞は、兩人の兄弟が世話にて金調へんと思へども、中々調はず、其の上我はかく遊びて二人に骨を折らせんことも氣の毒に思ひて、色々案じけるに、折しも夏のことなれば、人の大勢あつまる新地に芝居を出し、役者に化けて錢まうけせんと思ひ付き、三人言ひ合はせ看板を出し、我が故鄕松川村を苗字に爲し、森之丞は松川鶴七と名を替へ、兄弟は丹藏、米松と記し、身振聲色を始めければ、物見高い江戸のこと、初日より見物大勢這入り、多くの金を儲けける。

さても鶴七出でて身振聲色の口上をいふ。「此の處山下金作、大谷廣次、中村仲藏、右三人掛合ひ身振聲色御覽に入れまする。先づ始まり〳〵。」と、太鼓につれ樂屋に入り、三人とも思ひ〳〵に化けて出る。

金作「新左衞門夫婦の者が斯樣に申しますに、たつた一口祐安は、此の祐經が打つたりと、御名乘りなされて下さんせ。」

仲藏「其方夫婦が忠義に面じ、なるほど兄弟が敵は、此の左衞門祐經と名乘つて遣りたいものなれども、河津を打つたは、股野の五郎が相撲の遺恨で、遠矢を以て打つたわやい。」

廣次「股野の範景が相撲の意趣とは詐言り、誠は所領の仇なりと、家來近江八幡に吩咐け、赤澤山の

歸途に、打取つたりと潔く、名乘つて下され祐經殿。詐り給ふはそりや御卑怯で御座るぞ。」
二人の者は、此のほど毎夜の大入にて、金子四五百兩出來たれば、最早正體を現はしても善しと、それより三百兩に利分を致し、寳の二品とり戻し、兩人が詫びにて勘當許され、三崎と祝言して末長く榮え、其の後官位を得て、衣笠森之丞は、笠森稻荷、女房三崎は三崎稻荷大明神と崇められ、諸人歩みを運びける。

母「今では彼の子も通人とやらの風俗も廢め、正體を現はしたれば、もう氣遣ひは御座らぬ。娘よろこべ。」

娘「あい／＼此の樣な、嬉しいことは無いわいな。」

杉の森兄弟は首尾よく詫びも叶ひ、白狐夫婦の者の機嫌よきを見て、此の度寳物取り戻せし御褒美に、何卒玉と鍵とを、我等兄弟が家名に申し受けたしと願ふ。

「此の樣な喜びは御座らぬ。お易いこと、名乘りめされ。」

森「イヤもう兩人の者の蔭で御座ります。此の金子は此の度の使ひ殘り、兩人へ進上申す。資本になりともなされい。」

兩「是れは有り難い仕合で御座ります。」

扠も杉の森富介は、未だ暑さも去り兼ねたる時節なれば、不図思ひ付き、白狐より貰ひし玉を暖簾に染めさせ、武蔵下總の間に店を出し、花火を仕込み、其の後年々繁昌し、分限の身となりて思ふやう、以前森之永の契り給ふ眞崎を忘れしに、その後旦那と會はざるを苦に病み、遂に空しくなりたるとの噂ゆゑ、富介大金を出して、眞崎稲荷大明神と安置なし、今も通人達の参詣夥しきことなり。

また弟突次郎はおなじく化けて、その近所に同商賣を出し、暖簾に白狐より讓り受けし鍵を染め抜き店繁昌せし故、その後兄弟のもの願意を得て、杉の森稲荷大明神と崇められ、毎月富の興行ありて、人の羣集は御子様方も御存じの通り、孰れも尊き稲荷様、通力自在の通の字から思ひ付きて、狐の通人とは題しぬ。祈り給へ〳〵。

扠化狐通人　終

近頭島めぐり

市場通笑作

鳥居清長畫

こゝに小林三郎平といふものあり。一體氣さくにして野暮ならず、通に近し。酒はお腹で二つ三つといふ者は眼下に見下し、些との所が一斤ばゝらる。俳諧なども少し遣り、本が無性に好きにて、固い物はいき兼ねれども、淨瑠璃本やら何やら彼やら、軍書本を讀み掛けて、とろ／＼と眠れば其の儘、大鼾は德利の所爲なり。

三郎平何處とも知らず、うかり／＼と歩き、漸う茶屋店ありしゆゑ、此處は何といふ所と尋ねても、挨拶もせず、「團子を一本」と言うても返事もせず、馬子がおつらへし團子をして遣れども叱りもせぬ。扨は如何なる通力か、是れは餘程面白いと、色々の事をして見る。

三郎「己も此の街道では口も聞くものゝ、食ひもせぬ物を食つたと云はれては、男が立たぬ。」

茶屋「それで此の中には人は來ませぬ。」

女共「やれうつちやつておかしやれ、彼の衆の口には叶はぬわいの。」

三郎平團子にて腹を繕ひ、文無性矢鱈に歩きければ、漫々たる海の端へ出で、聞く人は無し、如何はせんと思ふ處へ、切幕も無し大薩摩も無く、鬼か人かとおもひしに、和田が三男小林朝夷現はれ出で「さて／＼其方も小林名字、定めて己が末葉なるべし。いかゞしたる事か、其方がかたちは常の者には見えず。それを幸ひに先年己が廻つた通り、島巡りをしやれ。己は力で張り込んで歩いたが、お主がのにはそれでは行かぬ。形の見えぬを幸ひに、食物食らひは勝手次第、食無しに巡つて來やれ。」

と教へけり。

「爰は何と申す所で御座ります。」

「爰は日本の島ざかひ、千座が沖と云ふ所だ。これから島々の新道裏町、まへ方己が廻つた時の道中記をやりませう。」

と云へば、三郎平、赤茄子のしぎ焼と悦ぶ。

朝夷が教へにまかせ、一つの島へ上り、ノサ／＼と歩きけるが、此の島は甚だ形善く、ずんと輕き住居の内、開き窓ある故、覗いて見れば、主人と見えて、何か物書いて居るを見るに青貝の机、筆立も軸も堆朱、文鎮、硯の結構さ。息子と見えて飯を食ふを見れば、古染附の茶椀、八仙人の香物鉢、

盗人に見せても銀一枚が物はあり。火燵蒲團は淺葱手の更紗、鼻紙入でも遂に見た事の無い地合。目の廻る程欲しくなり、涎を垂らして見て居れども、それを取れば我が形が現はれる故歯嚙を爲し、曾我兄弟では無いが、寶の山に入りながら、手を空しうして歸るが殘念なり。

父「大分退屈した。大きなコップで一ツやりかけよう」

母「飯を食つたら遊びやれ、團十郎の繪をやりませう」

三郎平は島の名は知らねども、爰は聞かずと知れた手長島。無性物に至極善い國、然し日本などでかう手が長くては、人の癈物、一人者などは小便さへすれば、一日立つ事は無し。羨ましいやら氣がないやらで、飯時などの面白さ、互に手を棒のやうに出し、見附の内を祭が通るやうなり。此の國には傘といふ物は無し。柄が長くて我が爲にならず、長柄といふが常の傘なり。遊女町は向うがはを歩いてもつらまり、物を落した時屈まぬが一徳なり。

三「此の國にもう氣がなか橋だ。」

「何所へいきなんす。馬鹿らしい」

鎌倉の武將源頼朝公の御代に、小林朝夷島巡り、また其の後義經御兄弟のなか、讒者の讒言によつて不和となり、一まづ都の御開きあり、武藏坊辨慶御供にして島巡り。さあそれから日本の風を見習

ひ、兎角悴ぶ事を好み、足長島ではぱつちが流行り、着物は一反が切が出れども、ぱつちは三丈物で無くてはいかず、おかし無い物なり。したが女房が緒が切れぬを喜ぶ。三郎平足長島へ渡る。其の處の地頭と見えて、夥しき同勢にて、「太夫御目見え。」といふ。上下にて後より大太鼓を擔がせる、轉びし時の用心と見えたり。下々は腰に太鼓を著けて歩く。大風の時は往來する者も無し。兎角轉ぶ國にて、無名異を絶やす者は無し。

三郎平も呆れ果て、供廻が大道を鰌を踏む足付、先の路考が田舎娘を思ひ出し、涙をこぼし、見る物事にまだるくなり、それでも何ぞ利方の善いことがあるかと思へば、豆藏を見れば先も背長が高し、大海の徒渉するばかり、一日も嫌ぢやと、次の島へ行きけり。

朝夷が教への通り島々を巡り、小人島へ渡り見れば、是れは至極しをらしく、三郎平が目には蟻の行く樣に見え、是れまで色々の島を巡れど、通力に形は見えず、山椒が小粒でも辛し。三郎平が立ちはだかりし故、「何か暗くなつたが、夕立でもあるか。」と氣を著ける位のこと。是れから見れば手長島や足長島は、うつかりひよん。道理で、彼の樣に手足が伸びる。牛馬は大きくても人間に使はれ、丸藥は小さくても人を助くる道理なり。

三「目まぐるしい程あるくわ。」

「どうか雲つたやうだ。」

「日和のよいに駒下駄はいて、ころばねばよいが。」

三郎平は小人島は至極面白けれども、先づ第一泊る家はなし、露宿にこまり、食物は何も無し、鰯は日本の鮪の如く、なまあみは花鰕にして、大平へ一つ盛り、幾許食つても腹には溜らず。漸うと酒二三駄働き、皆飲んでも二升に足らず。蒸籠も二荷許り一度に食つても、直蒲團子の樣で腹にも溜らず。十日も居る上、酒も五兩口は確然あがる、野宿も嫌なり、晴の際に追内外の島へ、樽代無しに引越す氣になり、物が自由になる物ならば、若殿樣方、御姫樣、御子樣方へも、小人島は土産にしたいと氣の着きしは、餘程子煩惱と見えたり。

此の島は男女共に腹に穴の開きし國、何も利方の善いことも見えず。女は棒に乘るを嫌ふ。金を懷中する者は、此の中へ押込み置く、飛んだ重寶なり。三郎平は草臥れても腹に穴は無し、籠で揉んでも、釣られず、船が嫌ひでは遊びに往くに困る。何う見ても氣味が惡く、膏藥屋の店に居さうなり。見世物に連れて來ても、どつと落ちも來さうも無い。八つ島の内での無意氣なり。

「これはやつさ。」

「旦那一ぱいお願ひ申します。」

「棒やらう／＼、棒はえ。」

三郎平此の島は愛想が盡き、餘の島へ行かんと松並木に掛り、何れの國にも同じこと、旅人の通るを、御定まりの酒手。此の男流石は棒の手練と見えて、二人共に取つて投げ、腹へ棒を突き通す。三郎平後の穴より覗き見る。ふてぶてしき奴等なり。

「是れは面白い。」

二人さすを鴫焼ざし、五人を團子ざしといふ。

一つの島へ上れば、濱端に女の草履夥しく並べある。茲は聞き傳へたる女護の島。草履を穿いて見たいには、姿を隠して居るゆゑならず。二つ善い事はならぬもの、先づ此の草履はどうであらう、中抜草履は御邸と、淺葱天鵞の三枚裏つけ、何うやら是れは寛し相だ。やはた黒は通かな。ふすべ鼻緒は大どしよ、下り雪駄は世帯持、緋縮緬の鼻緒も當にはならず、五枚裏つけは嫌がるもあり。何だか知らぬが氣が揉める。夢に夢見る如くなり。

女護の島は、亭主といふも無ければ、女房といふもなし。南風にて身籠る事は、人の知る所なり。男が無ければ、何も彼も女がせねばならず、麥を搗く女は日本にもあれど、米をつく女は無し。女の髪結も昔は無かつたが、今は日本にもあり。商人も皆算盤取つて算用する。所の風なら憎くも無し。日

本などでは御免といふ代物。どんな美しい女が商賣しても、涎を垂らすものも無く、廉くなれば賣れず、女でいけねば六ヶしい事もあるなり。女許りの島ゆゑ遊女町といふは無し。樂しみは少なく、琴三味線は子供の内、年が寄ると碁、將棋、雙六、謡曲が行きし時分はとんゑといふ物が流行り、近年は又あくりとやらいふ事が流行り、一種勘定の事は得手物、大の巧者山の如くなり。三郎平は、島中に無い珍らしい所へ面白い事ばかり、此處には暫く逗留して、ゆるりと見物せんと、何やら二階に女の聲、女郎屋かと思ひ上つて見れば、日本などではつひぞ見ぬ事。何にもせよ夥しい食物。手長島や足長島、腹に穴の有る國などでは碌な物も食はず、久しぶりでの甘い物、食傷する程食らひけり。

三郎平諸處を見物するに、女相撲あり、女芝居もあり、一切の事皆女が頭引のいきごさ。駒下駄で歩き合ひ、それ相應に羽織を着た大黒樣の女が出て講釋し、喧嘩といふと第一口が八釜しく、日本の女湯でも是れ程では無し。八釜しいも尤も、女といふ字を三つ書けば姦しといふ字。それが羅張女ばかり。三郎平も血の道が起りさうになり、鎌倉の御屋敷の長局で、籤引の男子本を取りしも、是れには叶はぬ、早く外の島へ往き、男の聲が聞きたいといふは、よく〳〵の事なり。

女「何の事たい、いけすかねえ。」

「わつちが飲み込んで居るわな、不景氣なさ。」

ヨくはばら〳〵。』

三郎平女護の島に戀ひ果て、氣を替へて、つと離れたる所へ行き、其處此處とやらかすを見れば、至つて上品なる所。小袖を見れば大方八丈、扨は八丈の島かと思へば、縞縮緬もあり、上田縞、郡内縞、まがひ八丈、風通縞、一圓合點行かず、何といふ所か様子が知れず「此處は何處で御座ります」と尋ねければ、江戸湯島といひしゆゑ肝を潰し、さて〳〵諸處を見物したが、是れ程の上國は無し、米の飯と同じこと、何時まで居ても飽きることは無し。

『楊弓に致さうか。』

さる程にチンツンチン、小林三郎平、朝夷が教へに任せ、思ひのまゝに島めぐり。夢醒め見れば大日本、足長も無し手長も無し、女の風なら男なら、一つとして言分無し。島の様子を改め、二日の夢の寶船、とうの眠りの御目覺し、御覽成されて御笑ひと、ホ、敬つて申す。

近頃島めぐり　終

憎口返答返

市場通笑作
鳥居清長畫

序

東丹前と言ふ長歌に曰く、一たび口ばかり者人ごんの[illegible]とあり、是は口[illegible]、云々
一遍百まで、萬事のいづこぞ口よりおこる。舌は禍の根とは一通り。ぶんと云ふ故は口から
憎まれ、うんともすんとも云はぬ[illegible]もかはゆくも無し。[illegible]、世の身
として思ふこと、口にも出すべからぬ本意無うて、我がまゝいつぱい、昔の自慢、口にまかせて[illegible]しきこ
とを知り、老いたる人の貴しとするは常なり。口は剣の如くなりとも、其の一句なき事あり。な
かる當世の者にて返答すれば、何の功にも及ばん。知らぬ古の事も残らず、今の事[illegible]
まにて返答うる、老人の一人なること[illegible]、[illegible]、自慢[illegible]に仕へ[illegible]憎まれ口
返答返と題す。

安永のとし春

十年は一昔、二十年は二昔、年寄と若い者は馬があはぬと云ふは合點の行かぬ事。聖人の云ひ置かれし事ども今の世にかなひ、兼好のつれ〴〵草は昨日今日のやうに思ふ。六十や七十の年寄が、今の氣には合はぬと無理にさみしく世を送り、さりとはきつい損なり。一口の事には、己が若い時分とはきつい違ひだと、兎角古へをほめて今をそしる。それ故若い者に怒られる。今日はさいはひ、心安き友集り合ひ昔自慢の折節、若き者一人二人來かゝりて、返答がへしを始めけり。

「どうして、昔にかなふ物か。」

「何でもお出しなされ。」

隠「さて〳〵、今の役者に見るのはない。私共が若い時分は、三條勘太郎、山中平九郎、小川善五郎、親菊之丞、大谷廣次、海老藏、長十郎、何れにしても面白かつた。えび藏が當ると、同じ狂言を一年もする。己はよい時分に見て置いた。今の役者は名も知らぬ。ねつから見る氣は無い。どうしてあのやうに名人があつたやら。」

若「先づ役者の名も知らぬがつまらぬ。よいか惡いか見ずに知れるものか。皆樣の數へる役者は、芝

居と云ふ物が始まつてからの上手が其の〳〵ふるの者、近年は、木場の親玉と云ふ者が、おやだまと云ふ名をはじめ、慶子がいつの名残もにあるをはづす。葺屋町の太夫元音羽屋に杉暁、其の外若手の上手、いづれもてつぺんからつまさきまで藝があり。昔はそばの者がいけぬ故、其の役がはえたと見えた。今は皆々手取なり。斯ういうては合點が行くまいが、年々にする忠臣藏も、だん〳〵に趣向がつき、面白くなる所は、なんとどうで御座りやす。」

四「さて其の次を聞きませう。今は女郎のふると云ふのがなく、遣引もなければ、つかれたがいがない。昔はすさまじき口舌があつて、一節出して大門をうつて總仕舞、其のなかに二三人合點せぬ者があつて、總仕舞にはならぬと云ふ事、何とかういふ張が外の國にあらうか。それにまア、ぜんたい客でもふらぬと云ふはきつい衰へやうだ。」

笑「ふらぬ〳〵と、なぜ其の樣にふられたがるのだらや、昔はどうでも女郎の買ひやうが下手だ。一分遣ふと客だと思つて、むしやうに我がまゝを云ふ。節句を仕舞ふと恩にかけ、汝がすきで遣つて兎や角云ふからふられる。今はそんな野暮な者はなし。風俗は時々にかはれども、氣性といふものが變るものか。」

四「さて其の次は、花見と云うても、上野、飛鳥山に趣やうな、三味線引いて樂しりをも[illegible]を云ふ者

もなし。兎角人がよいと見えて、こんな、思ひいれにさわぎ、辨當は蒔繪のさい重、輕い者でも何でも、吸筒持たずに出る者はなし。今は花見に懐手で行くはどうしたものだ、花より團子と云ふから、腹で見るのか。」

答「筵の上に三味線彈いて大勢見て居るなら、時々猿をまはしさうでをかしく、幕を張つたら質屋の土用乾のやうなり。昔は何處へ行つても團子ばかり、今はとんだ所に鱗の吸物があれば、何も不自由な事はなし、辨當を持つて行くは、談義參りと手習子ばかりさ。」

問「さて其の次は女中の小袖、紅絹裏が少なく、娘の子も花色の裏、紫裏、兎角赤い物が少なし。どうも憎くてならぬ。棧留や青梅縞さへ振袖にしたに、縮緬なとお袖にして着せる、一年も餘計に振袖を着せる筈。只さへ女は直に年増になる物を、悪い物好き、藤色うぐひす茶はひとはやり、兎角黒の事。」

答「紅絹裏がよいとは、是れは感心致した。男は小袖の事は知らぬが、紅絹と外の裏には理窟のある事ぢやげな。先づ是れはうつちやつて置きな、黒がよいとて娘には映えず、若い者には當世の色がよし。皆樣の黒のよいと云ふは、一ぺん外の色ではれをしてからの後が、黒お好きでも羊羹色は御免。」

問「さて其の次は、佛餉袋でも施餓鬼でも、坊主の事には錢金は惜します、日本に生まれて神道を粗略にする故、高天原のはかまに夏冬がなし。神國の者、神道を大切にせぬはどうぢやの。」

答「それはおぼしめしが違ひました。神道を粗末にしてつまる物か、何處の家でも、佛壇より大神宮樣の棚に低いはなし。正月の目出度も神道、三日のお神酒も神道、しばしも神道の離るゝことはなし。

答「さて其の次は、釋迦如來は、三界無安と宿もさだめず、墨の衣と衣服もかまひ給はぬ。今は金襴の袈裟にて、屋形舟を借りて川施餓鬼とやら、古は聞いた事もない。平家の一門西海の海に沈めど、後に殘つた景清が、川施餓鬼した噺もなし。あれはどうしたものだ。」

答「三界無安も墨の衣も、衆生濟度の爲なり。罪業深き罪と云の者も、寐ても起きても、往生極樂南無阿彌陀佛。暑い時分にも怠らぬやうに、屋形でなりと南無阿彌陀佛、どうなりとして濟度の道は釋迦の敎へ、何と有り難い事か。」

問「さて其の次は、冬の角力に外れたを覺えず、其のはずの事、一體角力取がすさまじい者、阿蘇ケ嶽、硯山、岡ノ串、八甲山、濱、丸山權太左衛門、此の時分の樣にかく揃つた事は無い。大木戸と丸山は大きな男だつた。」

「近頃の伊達ヶ關はどうだの。あのやうな關取が出ても、昔の角力を悪くいふ者は、今の人にはなし。明見山は見せ物だ、揚見山で度々見た者だと悪く云へば、此頃のしやれ出る。近頃では大聖門、雪見山、鳳凰の相が現れず、小野川、□の□は庭をとることなし。和泉川、伊達ヶ關、關脇の番附でも見物の者は大關、稲川、千賀川は酒席の度にほめられ、中から島から来て勧進元の仕合せ。角力はなんは昔も今も、日本中のよい男を見るのぢや。」

「扨さて其の次は、道具も今は吸物椀の縁臺が大きくなり、むしやうに平が大きく、時代蒔絵の品から見れば下卑でならぬ。唐物でも指濃は面白くなし。ほつれがあつても染付の位が違ふ。なんと是れには返答があるまいが。」

「七八の蓄妾を、輪茶碗で上つたなお忘れなすつたか。今の道具に御膳と云ふと、錦出の鉢に錫の汁つぎ、昔などのふるまひに、いつでもありふれた道具には見たこともあるまい。それでわづか五十文か三十二文、杯臺も今は化物になる奴はなし。煙草盆でも何でもかでも、意氣な事を御覧じろ、それでも昔がお望みなら、日光膳でお飯を上げ。あみのての茶椀でお茶を一つ上げませう。」

「扨さて其の次は、祭禮などは古風のかはらぬこそ目出度し。何處の町の祭禮は何と様になり、出る者も子供、見物も子供が重なもの、こしつけ馬の頼光出入り、乳母がついて出る中に、少しの事に

いざこざが出來ては大喧嘩、なにかのしまひんたの理窟、あげくは拍子木を打つと、頭はたつた三足ほど、殘らずしまうんをまた見たと云ふもんだから、夏の祭禮に聞えたが、冬の祭禮も大はたおぎ、なんぞ緋縮緬の襦袢でも、舅を引きさうなものか。

三祭禮の事は默つておいて、富士の前にて神樂を奏しければ、ある晴れやと宣へば、また常闇の雲晴れて明るき世の中。祭禮に神をいさめるもの、笑顔あつてのと元氣な事でなくてはいけぬ。色は思案の外、いくつになつても赤い襦袢、氏子が揃へば神は賑ふ事に結ふて、しかたなんは冬の祭禮でも、頭巾かぶつて、懐中手では出られまいこと」

「さて其の次は、生花、いけ花は又た面倒な物で、挿入でもする者はまれなり。近年は祭禮の夜宮に花のない事はなし。花は二の次にして器を好み、枝を痛めてたのしむがあつ、活花ではなくて死花なり。投入と云ふは、ちよつと輕く活けるを賞翫す。今のは細工すぎて面白くなし。一體風流を重とする趣を、高樓を重にして、きれいな遊びに」

「一投入と云ふは茶席の事、花は茶の餘興、輕く活けるも道理。いけ花と云へば花が重なり、盛り替へ活けては閑靜にて樂しみがうすし。水仙、杜若は投入では同じかたち。活花に百瓶でもかたち變り、至極面白いもの。然し花は床へ活けるものと思はず、幾瓶もならべるもののやうに思ふ者もあ

れども、私共は手前の氣を養ふつもりさ。」

昔も今もよい事はよし、悪い物は悪し。酒好きあれば餅好きあり、好きな事には金銀も惜はず、すかな物は貰つてもくらひ、光陰鐵砲の如し、春かと思へば夏になり、嫁かと思へば姑となり、移りかはれどもよい物はすたらず、古風の殘りてある物もよいと思ふがよし。近年は細工物も手輕にして、何でも悪いと云ふは作い事、昔より故紙へは錦と云へども、今の紙雛は上産にしたやうにはいかず。昔に勝りし物は今の錦繪と御評判。畫師一遍で、重き風向の草雙紙も、畫師がよいから面白い。江戸繪はきつい物、浮世繪は今がよい。繪でばかりおなぐさみに御覽遊ばされべく候以上。

此のくらゐ輕い野暮な作はなし。

本の能見世物

市場通笑作
鳥居清長畫

鎌倉扇ヶ谷といふ處に山右衛門といふものあり。錢がねたまるといふ山と儲ける工夫、珍らしき見世物などしてまうけけるが、近頃は何も面白きこともなく、八たんの種り、あいそう、とんだおいほうといふ趣向もなく、閑にて毎日をかぼちゃに出で、座の楽しみ居る處へ、年の頃七ツ八ツの小童、頭に角一本あり。頭髪は眞赤にて、眼は皿の如く、にこ／＼と笑ひしは、誠にいきとも言はれぬなし。山右衛門は小鬼を見て膽を潰せしが、化物ならば歩いてゆく筈はなし、儲けさうなものと心得、ましまた人ならば細工の見世ものと、後から附いて行けば、こゝと進みたる百姓の宅へ這入りし故、山事の手懸り、煙草の火を借りにはいり、「此の子供ある由、聞ましたか、それ、あいたとあやまり一人下されぬか」と云へば、「大勢の子供、一人でも二人でも進ぜませう」と云ひしゆゑ、約束する。當「あの小僧が丈夫さうな。どうぞ私に下され。旦那どのお留守なら、此の頃に貰ひに來ませう。」

とあやなしかけた。

鳥「今日でも連れてござります。未だ野郎が一人ござります。」

鬼「ハア先刻のおぢいだわ。」

山右衛門は釣より歸り、心安き仲間の者を呼びて「今日は大當り。」と言ひければ「それはこれから貰はずはなるまい。」といふ。「そんな事ではない。鳥の子を見付けて來た。」と云へば「夫から、狐にでも化されはせぬか。」といふに「おれもそう思つたが、取れた肴だ。この親に相談して貰つて來た。とんと近年の大仕事だらう。」と話す。

山「何でも工面して金の一兩もやり、貰ひ切りにしよう。」

仲間「是れは面黑いわえ。」

仲間「前祝ひに一斤云つてやらう。」

面白きものを見付け出し、親分と相談して、十の字を曲げて消うと金一兩を拵へ、酒肴をもち、貰ひに行きしに、親父も家にゐて膽をつぶして喜び「やれ／＼あれは仕合、どうでもお前の好きにして育てなさりませ。あまり是れは痛み入ります。」といへば「ほんのしるし許り。私一人でも悪いから、親分を同道しました。」と謙女して貰ひ歸る。

亭主「かゝお賤、家へ莚を敷きなさろ。割飯でも進ぜよう。」

閑全「あれなら飛んだ代物だ。」

山「かみさん、此中は世話でござりました。小猫を貰ひに来ました。」

賤「やれ〳〵私はお前だまさつしやるかと思ひました。」

とたまげる。

それより猫の子を貰ひ、連れて来りしに、仲間の者皆を語ひ尊し、近年の大當り、何でも實に取りしたが此の猫出しては六文、少し藝があれば十六文がものではある。如何にも面白き小しならばきと出さんと、囃子方をたのみ、所詮けんるほしといふ顔でもなし、猿の類ではあるに仕込み、讃でも致は極め取りの目論にて、無性におごりかけて喜ぶ。

猫は伸々よいぞ。

師匠「此方の足を上げて。さうぢや〳〵。」

中「とはうもないものだ。四五日の内に出したら宜からう。」

「さればから能よく覺えたものだ。さぞ見物があらう。」

山谷の猫は最早近き内に見世物に出さんと楽しみ、小猫が騒がるやうに、好きなき□金□□□□

しに、或夜八ツ時分と思ふころ、「痛い／＼」と云うて泣き出せしゆゑ、夫婦とも起き、火を點して見れば、此の頃内種々と食ひ付けぬものを、毒でも何でも機嫌まかせに食はせたる故、彼の角と覺しきものふつきり、手燭にて見ればなくぶしなり。はじめの化物と思ひし時より肝を潰し、

當「むしでもかぶるか。」

「いゝえ、大事が出來ました。」

山右衛門は大間違にて、なんでもしたゝかに儲ける積りにて、前祝ひにおごりかけ、何處も彼處も借りだらけ、處に居る事もならず、女房まで捨て置き、懸落ちと出懸け、行く先の當もなく、乘合ひ船にて伊豆國へ行きけり。

すべて物の間違、しくじりをよい見世物だといふは、この山右衛門よりいひ始めしなり。

はつちの米ときて、諸國の寄り合ひ、種々の顏、色々の望みにて伊豆國へ付く。

伊豆の濱にて大きさ十五間、中七間半の鯱を引き上げ、漁子殘らずにて引き上げ、前代未聞話の種なり。山右衛門は例の儲け好きにて、處の名主に逢ひ、「これは江戸へ出したら錢金の摑み取り、ふき屋町は場所が狹し、兩國か中洲で見せなされませ。何でもお前が元締、割合は私が如才はござりませぬ。」といへば甘事ゆゑ、ぐつと呑み込む。

名主「さて／＼凄まじい。話の樣な。」

貝師「ひと引き引けば船頭のえんや／＼。はんやかん／＼。しやれにも動かぬ。」

貝師「此の貝でかひ燒きをしたら、五千人や六千人は澤山であらう。」

それより色々と工夫して、十五間のあはび貝の穴を塞いで水を張り、屋根船に三艘に猪牙の四五艘も入れ、少々は小屋形でもよし、是れはきついものと思ひしに、肝腎の事に氣が付かず、橋があつて出しやうがなし。これはいかぬ相談、せめて身ばかりでもと思へども、それも大きし。如何せんと案じを付け、二間四方ほどに切り、穴から程の大きさ、是れでも見せんと思ひしが、あはびやら豆腐やら造作へものかと人が受取るまい。惜しいものだが何にもならぬ積合、誠く／＼由右衛門が運が惡いと見えたり。

貝師「あはびの切片で伊豆一國酢貝の食ひ絶えたこと。」

貝師「さて／＼これこそ思案が欲しい。」

名主「この貝をたかせにしても宜からうな。」

それ／＼の道に依りて賢し、切り細ざきしあはび、長熨斗にして賣りければ、幾許金になりしか知れず、吉祥にはのしながのしも珍らしいものなり。

山右衛門は蛇の山も外れ、うかり〳〵と遊んで居ても兎角釣が好きにて、濱にもやひし船に乗り、一人樂しみ居けるが、すこし戰々と風出でしと思ふうち、大風になり、船のもやひ切れて棹はなし、櫓かいはなし、天道樣しだい何處ともなく流れゆきけり。

微かに島見ゆるゆゑ嬉ぶ。

國々島々多き中に、爰は小人島とて、すぐれて人物小さく、なれども發明にて、馬鹿らしき人は無し。これを思ふに、日本にて小さき人は賢く、大きなる人は愚なり。

人物が小さい故か、草木まで小振なり。

山椒は小粒でも辛し、針は小さくても呑まれず。此の國古昔は唐人の形なりしが、朝比奈島めぐりの折より日本の形となり、今は日本よりしやれたると云ふ事なり。

小人「山か何か流れて來ます。」

小人「事によつたら、先生へ承知させうぢやァ無えか。」

山右衛門は小人島へつきしが、大勢にて引き留め置き、唯それ程のものを見世物にするも惜しいものと、相撲の年寄の處へゆき、「何と此度の相撲の大關、店男にしても入りませう。札は三百はぢやうぶ。日本なら四文錢とやら、いつぽんが物はござります。」と相談する。

相撲「日本のものなら相手はあるまい。」

「いやもう途方もないもので御座ります。」

見物二「らしい、話をお聞きなされませ。」

山右衛門は小人島の相撲大關となり、名を富士山山右衛門と付け、相撲の表附出でしより町中の大評判。始めのうちから様が賣れ切れ、ちよつと其邊を歩くにも、女、男の見物が、奈良の大佛の出現かと怪しまれる。

「關取さん、今日脇差が出來ますから、二三人許りで取りに參ります。」

烟草は小人島の量器で、一服が五十匁づゝなり。

相撲初日より古今の大入、所詮相手になるものは無けれども、男が見てもよい見物なり、これを思ふて、日本の相撲などが有りされば、どんなものであらう。

見物「今度の勧進元はきつい仕合だ。」

同二「まあ日本はどんな大きな處だらう。」

さては日本わたりの大關富士山山右衛門此の島始まりしよりこのかたの大入り、諸人肝を潰し、相撲に於ては日の下開山であらうといふ評判。小人島でも相撲取は大兵なり。

山右衛門餘程大きなる生まれなれども、なかなか相撲とはいかぬ男、日本の關取なぞを見せたいものなり。何と思ふか。

富士山嶽しく褒美がつき、金子で貰ひしは好けれども、羽織を貰ひしは何にもならず。脇差を貰ひては小刀にするばかり。これより日本の風に、羽織も腰の物も返して金子で貰ひけり。是れはよい趣向と見物も仲間もいひしとなり。

『とうざい〳〵。皆かぶりものをお取りなされませ。」

見物「人の化けものかの。」

富士山諸侯がたへ召され、お話のお相手になり、日本に珍らしき事を話します。大きいと申して私が名の富士山、河では大井河、佛では大佛、橋は兩國橋、長いは三十三間堂、まだ〳〵大きなものは數へられませぬ。女中の尻なぞにけしからぬ大きなが御座ります。是れらはお目に懸けたい。」

牛馬は形大きくして子供にも遣はれ、山右衛門此の國のものと比ぶれば、たとへん方なし。なれども心柔かにして、人のいふまゝになり、其の身も慰み心にて居るゆゑ、みな〳〵慰み置きけり。素破といへば人の百人や二百人は事とも思ふまじき者なれども、一人にて先は大勢、譬へば蚤虱にても多くてはならず。殊にいづれも一騎當千の面々。溫和しくして居るが利巧なり。

大守喜び給ふ。馳走を申し付ける。

坊主『三荷でなければ杯に一杯にならぬ。

女中「おや／＼／＼何うしようの。』

山右衛門逗留のうち、くひ物の大層さ、米が一度に三俵づゝ、一日に十俵も食ひ、水もなにかに一日には三十荷も飲み、肴はひしこが大魚にて、断ち賣りにするもの五十疋も食ふゆゑ大騒ぎ。よくよく小さいところにて、まぐろ一本とると七里富貴する位の事、相撲十日も、雨が降ると米百俵も食はれ大事なり。酒は下戸にて一日に一樽位のみ、餅が好きにて雑煮を五俵にいもを三俵、菜を五十把食ひしゆゑ、皆々肝を潰し、よもや人間では有るまいと言ひしも尤もなり。

『飯の湯も大釜にて一釜づゝ。つがもない事。』

「麦飯といふところはならぬ。』

膳椀が無きゆゑ、しつぽこの蓋を膳にして、大貝を椀にして遣ひけり。

給事のもの車にて引く。

山右衛門を珍らしいとて留め置きしが、食ひものに困り、此の頃は少し米相場も上るくらゐ、近き内日本へ歸さんといふ相談。もと流れ付きし船もあり、南風を待ち歸すつもりなり。其の内諸所を見

物させる。

何處の國も遊女は同じことにて、江戸から吉原といふやうな處見物に行きけれども、誠に江戸見物の道者が吉原へ行つたと同前にて、そのまゝに歸るより外趣向もなし。

『あの人さんの羽織は太夫さんの夜着より大きう有りんすよふう。』

「あれでも氣はいつそ和かだと申しんす。』

浦島太郎は龍宮より玉手箱を貰ひ、桃太郎は鬼ヶ島より財寶を取りて歸り、由右衛門も小人島より寶を遣らんといへども、いかにしても小さく、兎角見世物が好きなれば、それより此の小人を見せたふつかへれども、三年過ぎたら歸さんと約束して、芝居と思ひ付きしが、餘り手重ければ、踊子十人連れて歸り、最早大坂へ船が着いたといふ沙汰、吹や町か兩國で見せるが、お子様方のお慰みになされませ。これは見ずばなりますまい。

今までのはたきを取り返し、此度はしつかり極りであらう。めでたい〳〵。

本の能見世物　終

鐘入七人化粧 瀧返柳黒髪

明誠堂喜三二戯作
北尾重政畫

昔時、近江國瀬田のほとりに、田原藤太左衛門と云ふ長者ありたり。藤原秀郷の末葉にて、龍宮より先祖秀郷へ、内々にて贈りし玉を所持しけるが、此の玉は一日に一百兩づゝ産み出す玉にて、二十五兩一分に貸し置けば、一ケ月に一萬兩づゝ利息の殖える玉なる故、利倍の玉とぞ申しける。こゝに白川の安珍と云ふ山伏、頗る稀なる美男にて有りしが、毎年熊野へ參詣し、今歳も亦熊野へ詣でんと白川を下り、今宵は田原長者が宿に泊りける。長者の娘お秀、安珍を見初め、密かに夜更けて安珍が寝屋に來り、契りを籠め二世の語らひを成しける。

茲に武藏國淺草觀音の境内、西の宮稻荷につかへし狐、三井寺の觀世音へ參詣し、大津が原に宿く逗留し居けるに、堅田に住みける五位鷺見舞ひに來り、化け樣の慢を云ふ。

「先づ一つ化けて見せたまへまし。御身などは靈將よく化けても高が王子稻荷の手下で、田舎では拔

道の稲荷で、山の社には叶はぬ。また見越入道の稽古の仕たくば、吾が弟子に成りやれ。化け様を教へて遣らう。何うか不器用さうな顔だ。』

狐松の木のうへに上り『なんと玆まで首が伸ばされるか。』と云へば、五位鷺『そこぐらゐ御茶の子なり。』と、伸ばす所を繩にて絞め殺す。

『おのれ云はせて置けば、胸糞の悪い高慢、何ほこんな面でも江戸者の智慧を見ろ。』

『ア、苦しい／＼。是れ／＼拜む／＼。久しい者だが、五位鷺まし鷺とはお情ない。』

猟人この體を見て、個の狐を一撃にせんと、鐵砲にて狙ひ寄る所へ、安珍通りかゝり、猟人に金五兩あたへ、狐の命を助くる。

『ちと不足なれども堪忍して遣らうぞ。』

紀州日高川の邊に、眞奈子の莊司と云ふ者あり。安珍毎年莊司が許を定宿に泊りしが、莊司娘を寵愛の餘り、「彼のお山伏は汝が夫なり。」と戯れしが、娘お清や二八の春とも成りければ、安珍に思ひ込み、忌らしき身振をする。

『お草臥で御座りませう。先づ蒲團でも柏餅、お腰の邊をおさすりと出懸けませう。』

「是れはお孃樣へお土産に上げます。祇園の香煎、みすや針も久しいものなれど。」

「これはしや、毎度大きに御世話、お茶でもあがれだ。是非に此の度は伴れて上つて下さんせ。熊野樣へも願を掛けて置いたれば、お禮參りながら、一所に參りませう。是非とも今度は一人はお歸し申しませぬ。」

「お志は辱いが、それはきつい不料簡。私が内は大の貧乏、此方樣が御座つても、喰はせる物も無い仕合、所謂金なら千兩も持つて御座らねば、夫婦には成られぬと思はしやれ。」

「そんなら、金を盜み出して來ませう。」

お清金を盜み出し來らんと云ふ故、安珍この上は萬八の云ひやうも無ければ、裏口より逃げ出で、足に任せて逃げ行く。娘は斯くとも知らず金を尋ねけれども、素より金の有所知れざれば、眞奈子の家の寶物の獅子の香爐の内、雄獅子の香爐を盜み出し來りしに、安珍立ち退きければ、謀られしか無念やと、虛空に追つ驅け行く。

安珍日高川の邊にて追つ詰められ、既に捉へられんとする時、粟津の原にて命を助けられし狐、恩報じに安珍に化け、お清をなだめ伴ひ行く。

『その心中を見る上は、二世までも夫婦ぢや。』

「安珍さん、怨めしいわいなう。」

五位鷺の幽霊これを見て「いまいましい、狐の中を裂けてくれよう」といふ。

「やれやれ嬉しやうれし、ひよんなお膳を据ゑられて大難儀した。彼奴を連れて歩かう事ならば、好い見世物だ。」

長者の娘お秀、安珍が事忘れ難く、熊野権現の有り難き御告げあれば、急に参詣し度き由親に願ひければ、長者まことと思ひ、下女二人に、譜代の侍百足山唯右門を附けて、熊野へ参詣させる。

「是れから何里ほど有るの。」

「最早お山までは、三里の少しに御座ります。」

「ア、草臥れた。お嬢様ちとお拾ひなされませ。」

安珍は熊野清浄殿に籠りけるに、長者の娘来りて是れも通夜しけるを、宵の内は互に見交して日暮れけり。

お秀は安珍に廻り合ひ、直に立ち退かんとの志あれば、利剣の宝を密かに盗み出して、懐中して居ける。

斯くて夜更け、下女も唯右門も能く寝ねたるを見済まし、ひそかに示し合はせ、社を抜け出でて裏口より落ち行き、細き土橋を通りしに、五位鷺の怨念、狐の安珍と思ひ二人が中を隔てる。

「これは熊野の御誓か。哀しや〳〵。」

「なう恐ろしや〳〵。」

それより又、二人は別れ〳〵になる。

龍宮城にて、八大龍王、數多の眷屬をあつめ評議ありけるは、「むかし田原藤太に遣はせし利劍の玉、今は藤太が家門の子孫の寶と成りしことを、奇怪に思ひ、誠に龍宮も近年衰微したれば、此の玉を取り返さんと思ふ。誰にても日本へ渡り、玉を取り返したらん者には、一竜の寶珠をやらん」となり。なんと龍王の御評定なるぞや。龍女、「一度取りは女の役、妾が參つて玉を取り返しませう」といへば、「其の御用は此のなんだ」龍王、早速御對面のたまひ、「然らば其方に申し付けた」

と、妾は上使の上に安珍に別れ、是非なくも供人を連れて歸へさす、柴の庵に立ち寄りし、安珍が住家にて、女房と思しき者晝寢して居ければ、今は人目も恥ぢず怨みいこりけるに、この安珍は狐これ又、古狐が懷中せし利劍の玉に畏れて、本の姿を顯はす。

「新刊の安珍〳〵に化けて、而して騙いたのに」

「なう畏ろしや〳〵。舊の住家へ立ち歸ります。」

暫くして安珍通力さり、誠の姿を顯はしければ、最早この所の住居なり難く、障子に歌を書いて去り

退く。

日は暮れて野には臥すとも宿かるな信田の森のうらみ葛の葉

たとへ狐にもせよ一旦連れ添うた夫、何處までも遁すべきか、安珍樣いなう〳〵。この前も追つ懸けて來たが、さて〳〵此の親子の香爐も、人が追ひ懸けるには邪魔になるものだ。

なんだ龍王如何なる料簡にや、大日坊と化けてお秀に出會ひ、玉を取り返す。

『嬉しや玉を取り返した、早く龍宮へ歸らう。』

お秀供人に後れしうち、何の手も無く玉を取らるゝ。

『なう悲しや〳〵。』

狐の安珍お清に追ひ詰められ、道成寺の門の稻村の陰に隱れる。

斯かる所へ百足山睡右門來り、忽ち大日坊を刺し殺す。大日坊殺されながら玉を稻村の中へ隱す。

血汐の汚れにて、名玉より水氣を發す。

お清が一念蛇身となり、大日坊は龍神の姿を現はし、道にて出會ひ、互に挑み爭ふ。龍と蛇の大立て、一切面白く無い事なり。

龍は深手のゆゑ終に空しく成り、蛇體は狐の隱れたる稻村を見出し、七纏ひ纏ふ。

五位鷺の怨念火を降らしければ、稲村に移つて、蛇も狐も獅子の香爐も皆々灰塵となる。
稲村に火移りければ、利剛の玉は忽ち己と飛び去りて、又田原長者が家に入りけりとなん。
道成寺の住僧門前へ出で、獅子の香爐の熔け固まりたるを見て拾ひ取り、一幸ひ此の度釣鐘を大きく鑄直さんと思へば、此の金を吹き入れん。」と同宿に相談ありける。
『この度は大佛の鐘などよりも、一際大きく仰せ付けられませい。』
「一成る丈け大きく言ひ附け申さうよ。この度の鐘供養、女人は堅く禁制とは云ふものの、好い女ばかりは其方達が料簡で入れてやれさ。參詣の人に好い女の無いは、此方も張合の無いものだ。」
「これは結構な御料簡で御座ります。如何様いけぬ女ばかりを禁制になされませ。」
「イヤいつその事婆々禁制の事だ。」
淺草の女狐、男狐の死したるを聞き、女と化け此の所に來る。鷺の怨念は娘と化し、女獅子の香爐も女の姿となり、なんだ龍王の女房なんぢやや龍女も夫を慕ひ來る。さて仲藏が大日坊は、娘の怨念と混じて女の形を現はせし故、何うやら尤もらしけれども、この大日坊は何故か、忍草賣の裝となりて來りしや、不思議千萬なり。此の他用舍娘一人、これは何の譯も無し。お清を娘の親玉として、都合七人鐘の供養を拜みに來る。

『婆々で無くば御這入り〱。』

長唄にて所作事。

花嫁御蝶驚けども人知らず、われは化けたと面影を、それぞと悟る人ないこそ、聞かでんかり進るにえ、つんでるこんだにえ、睨かしや忍ぶ草とは、ほんにそりとは可愛らし、戀に心も彼れひし、花の吹雪の散りかゝり、拂ふ白手、且つは紛ひ、容色も映る海原や、龍頭に手を懸け飛ぶよと見えしが、引き擔いでぞ失せにける。じやん〱〱〱

さる程に寺々の鐘と云ふ文句も済み、御寶殿の前にて寺の湯へ入る如く、七人一度に釣鐘の内へ飛ぶよと見えしが、引き擔いでぞ失せにける。稀有な始め同宿數多、先例の通り祈り祈られ、抱かれど此の鐘響き出で、引かねど此の鐘落ちるぞと見えしが、程なく鐘樓に引き上げたり。

『あれ見よ、化物は現はれたり。さんぜいとうはう、とうりうせうん〱、〱〱〱。』

其の中にも田舍娘は、前後も知らぬことに同意して、ひよんな蛇體の苦惱みに逢ひ、後悔先に紅の裳。

七人の化物一塊りになりければ、其所等あたりを跳ね廻らんかと思ひの外、寄合世帯にててん〲向き〱の料簡ゆゑ、身の振廻し思ひの儘ならず、我が身ながら不自由なること限りなし。もとより

幽靈の事なれば、消えて仕舞ふ筈なれども、田舎娘ばかり生物のことなれば、此の者の躰一つになりける故、邪魔になりて今更消えることもならず、これを南國橋にて見世物に仕たれば、流行ること限りなし。この御蔭にて夥しく金儲けをしける故、冥加のため堂を建て、七面大明神と祝ひける。安珍は還俗して、田原藤太左衛門の聟となり、尚更あらためてお秀と夫婦となり、芽出たく榮えける。利劔の玉のやうなる顔より事起りたれば、兎角人は容貌の好いが肝腎々々

鐘入七人化粧 瀧返柳黒髪 終

當世大通佛買帳

芝全交作
北尾重政畫

信州刈萱山西光寺親子地藏は、江戸目黒不動へ開帳に出で給ふが、世話役どもを呼び給ひて、色道をなし給ふ。

『いかに講中何と思ふ、拙者つく〴〵世上を惟みるに、今の世の中は佛道は薄くなり、普く衆生色道専一、みな色事の浮世なり。是れでは吾も堅くして佛道ではいかぬから、色道修業して、夥多の人を色事の道へ引き入れ、色道のみけ地藏菩薩とならうと思ふが、いかに〳〵。』

『其の粋な風でお出でなさると、飛んだ粋地藏樣で御座ります。』

『是れから醫者と云ふ身に化け、黒縮緬の羽織、細身のお刀、品川などはどうだらう、併し醫者に化けて行つては、人が化地藏だと云はうかな。』

地藏菩薩は六道の道に立ち給ふが、兎角今はあつさりと粋にして、物事倹約にするが流行ると思召

し、六道の道を四筋減らして、目黒と品川とへ別るゝ二筋の道に立ち給ひ、夥多の人を色事の道に引き入れ、品川へやり給ふ。

「コレ〳〵息子、家へ歸るとは奇體なだ〳〵。此の道を眞直に品川へ行き給ふべし。俺も後からつけにでも行かう」と。

「左樣なら、家の首尾をよいやうにお願ひ申しまする。是れから爰に待つ乘りと致しませう」と。

此の時地藏經文に曰く、「早々目黒左右廻れ、粟の餅毛伊也以屋、米の餅花不好不好、蕎麥喰品川行度奈」ととなへ給ふ。

地藏菩薩は、一日品川道の田圃に立ち給ひ、日も暮れて寂しくなり給ひ、さらば品川へ出たく思召し給へども、連れもなく、何とし給はんと思案たら〳〵の處へ、目黒不動の犬、雉子の宮の雉子、猿來つて、「地藏菩薩の腰なる物はなんで御座る」と聞くゆゑ、「江戸一番の目黒の粟餅」と仰せられければ、「一つ下さい品川へお供いたさう」と、猿雉子犬お供する。

地藏菩薩、粋な醫者と云ふ身になり給ひ、猿犬雉子、駕を三まいで品川へ持ち込む。

地藏菩薩は松若屋のうちへあがり給ひて、松若と云ふ女郎を揚げ、遊んで居給ふ所へ、章魚藥師、寢釋迦迎ひつかけて遊びに來り給ふ。

「是れは和尚どうだ。吾を誘つてくれしはよいに。」
「吾がよく寐て居たものを、薬師が起して無理に引きずられた。」
「さアノ＼、手前達は衣をとりやれノ＼。吾がやうに洒落れた身になりやれ。吾は死んでも洒落にな
る氣だ。」
「薬師坊その壺はよしやれ。覆輪塔を見るやうだ。」
佛たちの惣持にもて給ふぞ、ありがたき。
章魚薬師見舞に來たまふ。
「どうだもう寝釋迦にならう。よう寝たがる奴だ。」
「もし薬師さん、一服おあがりなんし。其の様に廊下をお歩きなんしたら、足へ章魚が出來ませうに
え。主は明日も置いておくんなんしよ。」
「いつぽくでも食はうが。併し此間の章魚は良さう。いぼが出來よう。」
「もしえ、お前は何處でありなんすえ。」
「わしは今度信濃から開帳へ來た。斯うやつたら飯もたんと食ふだらうと思へなさらうが、俺ら飯は
食椀に一杯づゝ、盛りきりを食つて居るよ。其の代り酒が好きで、毎晩も一升位はきまりのやうだ」

「主はいつそ氣がいいよ。佛のやうだ。もし固くるしい其の御光を取りなんし。」

刈萱石童丸息子地藏は、雉子の宮の大師の店を借りて居給ふ。弘法大師は家主の事なれば、本家さん弘法大師と崇め奉る。眞言秘密で口を利き、出入引は燒飯煮染にて、濟まさうとの御誓願なり。親地藏が長々の流連の迎ひに、弘法大師を頼み給ふ。

『親爺が流連に困ります。おやどうせうのと女郎がふうすは、此の事で御座ります。』

「店賃等をやる所なれども、吾が迎ひに行きませう。」

あはれなるかな石童は、父を尋ねて家主さん、弘法大師諸共に、流連の迎ひに行きたまふ。

『もし歸しやせんよ、一つおあがりなんし。』

「そんなら先づ烏渡行つて來よう。」

「きついもてね父さんは、表部屋持は凄い、たゞぶい〳〵よ。」

「初會からもてるとは珍らしい。流連せずと歸りやれ〳〵。」

地藏菩薩松若にくらひ込み給ひ、終に三回目にぞ及びけり。此の菩薩地藏の顏も三回目には纏頭が出ると、一分はずみ給ふ。

『是れから折々來るから頼みます。吾もしじう此の子を女房にせうとおもふよ。嗅がないと、何時で

も賽の河原だ。」

「もし地藏さんえ、お氣の毒でありんすが、今夜は據ない客人が來やしたから、おく〳〵なんし。」

「何くれろ。ちと氣がないの。」

「烏渡お目にかゝりやせうが、度々だから斷うであらうと思つた。」

「代りでもよこしやせうか。」

地藏敵娼を貰はれて氣が揉めるが、藝者をあげるも痛事と、章魚藥師の三味線、寢釋迦の長歌で枕地藏を踊り給ふ。菊の花の代りに餅花をしたまふ。是れを見て皆人「いよ地藏樣ありがたい」と云うて、蝶々のかはりに、おひねりの賽錢を投げける。

ちよ〳〵、〳〵「高いも低いも色の道――吾も久しく寐聲になつて歌はれぬよ。」

地藏菩薩は、松茸屋の松茸と深くなり給ひ、今ははや色事となり、連れて逝げんと思召し、章魚藥師へ相談に來たまふ。其の時藥師曰く「昔もさるためしあり、吉田の家の松若は天狗が攫つて逝けたり。品こそかはれ是れも松若、幸ひ目黑金比羅は仲間のことなれば、天狗の面と羽根を借り、天狗になつて連れて逝げ給へ。」と仰せらる。

「何だ、たこの知れた出入だ。なんと地口が上つたらう。あがつたら燒いて食へ。」

「何でも王を連れて來れば、此方のものだ。地藏に目は付きものだ。早くやッつきやれ〳〵。」

「是れは先生よい案じだ。そんなら金比羅のところへ行つて、天狗の面と羽根を借りよう。」

地藏菩薩、金比羅權現へしか〴〵の事を話し、面と羽根を借りに來給ふ。「面は貸してやらうが、併し寶物だからよしやれ、鼻が落ちてはならぬ。羽根はどうも貸しにくい。身體に付いて居るものだから取りにくい。兎角何處でもないものは羽根だよ。吾が方でも、チト此の頃は羽根が不手廻りだ。」「それでは羽根の工面は此方でせう。」と、面ばかり借りて歸り給ふ。

地藏菩薩羽根の工面に困り給ひ、石の手水鉢に向ひ、無間の羽根を撞き給ふ。「羽根ならたつた三百枚、可愛女に添はれぬか。夫れよ、女故には石となつたる地藏もあり。博多の帶は赤くなる。天秤棒は上へ反る。飛んだ茶釜は藥罐と化ける。目黒の餅は花となる。一念は誰に劣らん。此の世は愚か無間地獄は吾が株。假令是れにて腹が減り、晝飯夜食を一度に食ふとも、だんない〳〵大事ない。」と、既に撞かんとし給ふ所に、二階の障子のうちよりも「其の羽根こゝに。」と三百枚。雉子の宮の雉子、さら〳〵と撒き散らす。此の時雉子は何時もの鳴聲に、無陀の無の字を足して、「むけん〳〵。」と鳴きにける。

「是れは夢かや現かや、此所に三枚彼所に五枚。」拾ひ集めて持つて行き給ふ。

斯かる處へ目黒の犬は驅けきたり、「今夜松若樣を連れてお遁げなさるなら、先づ私が先へ犬に參り、樣子をお知らせ申しませう。」と云ふ。今の世までも、人を犬に入れるとは、此の謂れなり。

『そんなら樣子を見て來てくれろ。』

「何さ、恐くもわんとも御座りませぬ。きやんと云ふ身になつて參ります。」

猿町の猿は品川の馬場に蛙を借り、柏餅屋をして、地藏菩薩の品川通ひの中宿をする。名物猿が馬場の柏餅とは、此の事を云ふなり。

『何と猿坊、今夜天狗になつて、松若を奪はうと思ふがどうだ。』

「是れはよう御座ります。たとひ骨がさゝになりましても、私がおかくまひまうしませう。」

地藏菩薩天狗の姿となり、松若を奪つて遁げ給ふ。

『いやら追つ掛けても最う此方のものだ。なんぼ女郎の親方樣でも、玉を取られてはかなひやんすまい。さア取つて見やれ。天狗一つ、足元に猫の糞が一つ。もう此方へしめかけ山の寒鳥は古いによつて、寒鳶が油揚をさらふやうに、遁げよう〳〵。』

「私を油揚にしなんしたら、屋根が離れんせう。」と、あぶらげ〳〵。必ず負傷して下さんすなえと、聲をかけたは誰さんかと、豆腐の道行で洒落れやせう。併しお前と遁げてはあぶらげはないの。」

「やれ〳〵出合〳〵、泥棒々々、しかも月夜に釜を取られた。今時の佛には油斷がならぬ。己わいわい天王と云ふ身で、わい〳〵と笑つてもくれ、天王樣がお正直見通しの座敷だわ、松若樣を連れて行つたは地藏に極まつた。是れ〳〵杖と錫杖を忘れて行つた。南無三替玉をくらつたわ。」

地藏天狗女郎をさらつて、二本榎でげんけをむしり給ふ。佛のやうなことが本になつたの。是れから吾が還俗して、おれは本田黒仕立で手前をすがたはどうだ。嬉しいか〳〵。吾も十九の年から年增にはまつて地藏になつた　如才はないよ。」

「是れから私を負つて、お前の國の信濃の善光寺さんを、吉さんが負ひなんしたやうにして、連れて行きなんし。」

「信濃へ江戸から、冬峯公にでも行つて稼ぎやせう。」

松若を地藏連れて逝け給ふよし、女郎屋より本家さん弘法大師へ届けに來る　其のとき弘法出入引をすまし、證文を書き給ふ。是れ弘法にも筆の誤りとは云ふなり。

地藏菩薩松若と夫婦になり、眼醫者をして、願解きには鹽を取り給ふ。

「貴樣の目は餘程よう御座る。是れで吾が一首よみました。かうもあらうか「つぶるともよもや見えじなかなめ醫者年增の噂のあらん限りは。」「なんと、歌人は、居ながら目醫者をしませうが。」

「お陰でよう御座ります。お禮に鹽をあげます。」

「兎角目のあかぬうちは、食物は白雪糕、沙米餻などを貝殼へ入れ、水で溶いて食ひ、綿にくるまつて居るがようござるぞ。」

章魚藥師は地藏菩薩の鹽を取り寄せ、たこあん漬と云ふ香の物を拵へ賣り給ふ。殊の外繁昌して賣れる。また石童丸息子地藏は石となり、たこあん漬の重石になり給ひ、稼ぎ給ふ

「息子もう晝飯にさつせえ。今日は五貫からけが三把出來た。手を出して足をからげる章魚藥師だ。兎角精を出すことぢやなう。」

「オ、サそだ／＼。其の氣でなければ世帶が持たれぬ。鹽の掛引を知らいでどうせう。元が信濃の地藏の子ぢやもの。さうだ／＼／＼。」

寢釋迦品川通ひが盛んになり、つまり／＼し揚代三百兩の借金、どうもつまらず。流石佛のことなれば驅落もならず、借金を横に寢釋迦となされし、無殘や。二月十五日しやくせん檀の木の間に蒲團の上にて御入滅をなさる。是れを聞いてより、茶屋、女郎屋、藝者屋若い者、幇間、臺の物屋、遣手婆に至るまで、貸しのある者ども皆々打寄り「お拂ひが出ませぬ。」とて、涙を流すも道理なり。その時紫雲たなびきて、御母摩耶夫人「その金こゝに。」と三百兩、財布に入れて投げ出し、借金

殘らず拂ひ給ふ。「まだ後に少しのかはせ貸しがあらば、四月八日まで待ちやれ、四月八日は、あの子が勘定日だから拂つてやらう。お主ももう是れに懲りて放蕩をやめやれ。重ねては構はぬ。」と云ひ給ふゆゑ、是れをいけんの金と云ふとかや。

斯かる處へ拍子木の音、カッチ〳〵と鳴るぞと見えしが、忽ちお涅槃は引道具となり、ヒウドロドロ〳〵と、不動尊現はれ給ひ、親子地藏の兩人を伴ひ出で給ひ、仰せけるは、「みな〳〵今度の放蕩狂言やめにして、是れから隨分精を出して開帳をしやれ、即ち兩人の名を、これからせいだせと云ふ道士にする。」と、仰せあるぞありがたき。

是れより開帳の始まり、どん〳〵〳〵。

釋迦如來放蕩をやめ、身代滿々として、寢て居て暮し給ふ。

章魚藥師も開帳し、共に繁昌したまふ。何れもありがたきことどもなり。

當世大通佛買帳　終

通一聲女暫

芝全交作
北尾重政畫

昔々の事なりしが、爰に江の島と鎌倉のさかひ町に、うつのゑやといふ有徳なる酒屋あり。其のむすこの里次郎といふは、大磯ふじゑやの江口といふ女郎にうちこみ通へども、大のやぼむすこゆゑ、江口にきらはれ、出入の醫者津辻源好といふ者と、江口を手に入れんとの相談する。これよりやぼをうつをすと云ふも、此のうつのゑや里次郎が頭字の因縁なり

「なんと源好いい思案はなかり町か」

「そこは我等すいのゑこれ。先づ今では藝者の源四郎が江の島の通だ。あれと相談しよう。又みんなもあそこへきてるよう。今から源四郎がとこへいき山〳〵。」

これより里次郎は津辻源好と、藝者の源四郎がところへ相談にくる折節、近所の友達宮崎屋の八、坂東屋の三光などと相談する。この源四郎は通人ゆゑ、「あのや源四郎殿は江の島の通だよ」と皆唄に

うたふ。爰に又なゐしに左十といふ通人あり、大の色男のいきな男ゆゑ、女郎ども左十にほれて、みな文をつける。かむろ返事を取りにくるとき、文の返事といひにくきゆゑ、「左十さん便宜をくれな。」と歌にうたふも、このなぞこの左十が事なり。をりふし居合せければ、「とかく江口に指を切らせて心中を見るがいい。」といふ。みな〳〵相談して、あすの晩仲の町へ出ようといふ。

「これ〳〵コリヤ、左十さんがいふ通り、指を切らせて、其の指を仲の町のまんなかで、おまへが受取る日にやア、ソレとんだ顔がたち出だ。」

「これはとかく、指を切れといふてやるがいい。それでソレ、仕打が分らうといふやつさ。」

「なるほど左十さんは案じるもんだ。」

「そんなら、さういふて文をやらう。指を仲の町で受取り、仕打を見るとしよう。諸事極りは此の事だらう。きん〳〵〳〵。」

それより大立引となり、あくる晩方仲の町へ行かんと、みな〳〵源四郎が二階にて髪月代をする。

『きつい二階と来たな。イヨつゝじ有り難い。これ〳〵己が番太郎に、六つの拍子木を合圖に、大門にはひらうと頼んでおいた。」

「のみこみ山の寒鳥、二階からとんび〳〵。」

「青蕉を食つて行かう、兼好がつれ〴〵にも、下戸ならぬこそをのこはよけれだ、一ぱい飲んでゆかうか。」

「己は田町の同役が所へ用があるから、其の歸りによつて見よう　己が相方も仲の町へ出てゐるであらう。和尙はなまゞ坊主か、きつい物〳〵。蒲燒にして飲みたい〳〵。」

傾城江口は甲次郎がふみを見て、指を切れと有る故「おや〳〵どうしんせうの」と案じ入り、おいらの西行と相談する。裏茶屋にて江口、西行と相談の所へ、初葉やの雛の助と云ふ心安き女郎きたり、「難儀を救はん」と云つて、二人の事を受合ひ、雛の介はしん粉の指を買ひ、甲次郎方へやらんと思ふ。雛の介の新造に美しき者あり、皆人この新造にほれぬ者なし。皆見て「なんとほれたか」と云ひしゆゑ、其の名を直にほれたかと呼ぶ。

「もしえ、江口さんも西行さんも、其の樣にお案じなんすな。はゞかりながら、妾がいい思案をしておきんした。マア私にまかせておきなんしよ。」

「何卒よい思案がありさうなものだ。おいつも金びらを切るがらしにくいよ。」

「それは嬉しうおざんす。なんぶん姬さん宜しく〳〵。」

「もし小間物やさん、しんこで拵へた指があるかえ。」

「これ／＼愛に幸ひ、錫の香箱へ入れて置きやした。一分でござりやすよ。」

「ほれたかや、此の指を江口さんのつかひにして、仲の町へ持つていきやれ。」

それよりふだみや、初菊や、一軒の女郎、仲の町へ指をやつた狂言の仕打に行かんと、支度をする。

客と女郎と魂膽を云ふことあり、狂言なか／＼といふ事、この時より始まりたり。

『これはきつい芝居の樣でありんすよ。』

、六つの拍子木が鳴ると、揃ふといひやんすよ。』

番太郎は甲次郎が一座、又太郎どもにたのまれ、六つの拍子木をあひづに揃ふと云ふ事ゆゑ、拍子木を打ち觸れあるく。

『お支度がよくばお出でなさい。かち／＼／＼。』

皆々拍子木をあひづに揃ひければ、茶や中村屋の座敷の内より亭主出でて、江口が甲次郎方へよこせし返事を、皆々に讀んで聞かせる。

『東西々々、たつてお斷りまするが是れより申し上げまする。さて江口樣から甲次郎樣へお文の次第は、指切髮切起請も書きませうとの事、なんとうまい中では御座りませぬか。それ故みな／＼樣暮六ツ時より永當々々との御來入、有り難う存じまする。まづ御上りなされ、御酒一ツあがりませ。

其の鶏卵断りた樣にて此の所すがかきのおと「おやんらノ＼＼ノ＼＼ノ＼、かちノ＼＼ノ＼く」みな／＼捕び指實檢の所、瀬好は「指實檢の役は己だ」と鶏の香箱の蓋を取れば、しん粉の僞指ゆゑ、皆々實を潰す。

『なに僞指だ。したり一杯食はせをつたか。きついしやれのしやんぶくりんだ。』

「何がとれゝにはなるまいが、もち米が指になるとは、いやはや途方もねえ。」

「いいわな。しんこでも指だと思つて居るがいい。是れで野暮ならしよう事がない。」

「先生、この指はしんこで拵へた物だとさ。いまくしい。」

「ナニとんだ事だ。指の切りやうが餘り早いから、斯うだと思つたよ。」

左十がおひらの中村屋の出汁「おや／＼氣の毒だね」と言つた許り。

『德西、さて僞指を持つて來た。何者に頼まれた。ソレほれたか新造をひつたてゝやい。』

と皆々いふところへ、すぐ向うの茶やの二階のうちから、「しばらく／＼」と云ふ。

『ほれたか新造を引つ立てる所へ、しばらく／＼と、聲をかけたのは何奴だえ。いやさ何奴だえ引』

「しばらく／＼しばらくウ引。』

かゝる所へ、茶屋の暖簾の内よりも、初葉や姫の助張吉はア引でん／＼／＼。

遠イ南國北國深川、合はせて四ッ谷四里四方、これ江戸川のすゑ〴〵も、皆川竹の流れの身、自らとても三茶舟、新艘、引舟引連れて、ずつと出船の其の顔は、少しはどなたも水馴棹、艪かい苦界をおしたてて、田舍育ちの鶯の、ほを帆掛舟しばらくと、親舟の親玉や小舟に、小玉市川が眞似を似たりや。御茶舟を濁して其の儘ひき返し、川一丸や高尾丸。是れ此の里の傾城の、名も吉野丸にこ〳〵と、夷丸にお笑ひも、兎角まるかれ丸顏を、四角にとりし角前髪、口先の猪牙舟に、掛り舟とはなりんせん。せんと刎ねたるせんの字も、船といふ字かしら濱の、嘸お傳馬な女とも、思召しもいかだ舟。こんなことは間場所へ、さらりとやつて捨小舟。先づ中直り元舟の、通りに丸く千歳丸。千歳萬舟萬々歳。その帆柱の數々は、一本日本堤から、日の出を待合ひ衣紋坂、えもん揃へて大門へ、御入舟を松葉やと、ホヽうやまつてまうす。

それより姫の介に荒事をされ、先づ陣を土手へ、引道具と出かけて相談する。

『なんと源四郎先生。とんだ番狂はせではないか。彼奴けちをつける工面はないか。どうだ〳〵。』

「そこは親方氣つかひし給ふな。爰に一ッの工夫ありさ。」

撥袋の中より調子笛を出し、ひい〳〵と吹き、

『これ屈強の友達の、智慧のあるやつが出ます。』

此のふえを聞くやいな、ぱつちしり端折り、目ばかり頭巾細身の御太刀、黒仕立の忍びの息子、大樋の口より出る。

『おやかた――。』

「こりや聲が高い。シイ／＼。』

目ばかり頭巾ずつと取れば、大谷屋の友吉といふ、前さがり奴の息子なり。これ屈強の相談あひてと、田町の茶やにて相談する。其の時友吉「とんだ良い手がゝりあり。己が江口の地色の所へやる、起請と文を拾つた。コレ見たまへ。」と差し出す。

『これはきついてがら。ありがたい／＼。」

「あいつ、江口もわるい女だなぞと云ふやつさ。そして手に文身をしてゐるとよ。」

「女に手にほり物をした。畜類め、ア、氣がもめるぞ／＼。」

「なんでも、是れから毎晩のやうに出て、地色を見つけ出し、一かばちかに片付けるがいいぢやアねえか。其の上で色男を切れさせ、ほり物も消してやらう。そして砂利場にゐる事の祈禱をする法印があるから、あいつに祈つて貰はう。」

「それならば頼む。それまでのつとめ金二十兩。かまはずと早く行け。おち／＼／＼。』

骰利場にあらし法印来光阿闍梨とて、いかな事の前知する者あり。友吉心安き故祈禱を頼みにける。

「友吉先生、皆までいふまい。聞いた／＼。江口と里が事か。よし／＼、がてんだ／＼。」

此の時法印、ひとつのびん／＼の札を出す。びんはこれ一つなり、一は萬物の始なり。此の札を以て心に思ふ物がよつてくる。是れをびん札といふ。この時来光にびんさつをたまはる。

「これは奇妙、誠に盲目千人目明千人で御ざる。」

友吉は来光にぴん札をたまはり、ばらつき雨の降る夜なりしが、黒の駒下駄に打ちのり、大門さして急ぎ行く。

「なんでも江口が地色を、見つけだしたいものだ。」

友吉はなんの氣なしにそゝりゆく所に、つい取り外し江口が起請と文をおとしけるを、折から江口は仲の町へ出て居て拾ひ見れば、わが起請と文なる故、「あの客人をとらまへてくりや。」と、禿に吩咐けとらまへる。友吉は顔を見られて叶はじと逃げんとすれば、江口後よりも目ばかり頭巾の錣を摑み掛らんとする。是非なく護身のお太刀を引き抜き、終に右の腕を切り落し、飛ぶが如くにげ歸る。

「コレ顏を見せなんし。アレ／＼逃げんした。憎い人さんだよ。」

「何でも顏を見てやりんせう。」

友吉は江口が鞭を切り、鞭も見れば西行と文楽あり。これは面白い。[illegible]文楽を[illegible]ていやれば
甲次郎が懐は立つと、[illegible]懐に灸をすゑる。と[illegible]た物が手に入つて、是れもひと/\礼のお蔭たらう。
『うぬ、今にあつゝをすゑるぞ。』
宝[illegible]河岸の甲次郎に、[illegible]西[illegible]主あり。江口に[illegible]まれ、鞭を取り[illegible]しにくる。友吉は[illegible]
ふ[illegible]買[illegible]、おさんにその[illegible]を聞き、深川の[illegible]でござる、と友[illegible]
『たわたし[illegible]
『深川のおばさでござんす。[illegible]』と、
友吉は、ふか川のおばさに聞いて家へ入れば、[illegible]
は[illegible]友[illegible]おとなで[illegible]
[illegible]友吉は[illegible]江口[illegible]腕[illegible]江口[illegible]
[illegible]
絵に引窓[illegible]の家へ[illegible]
『くやしくばこゝまできやれ。しかし甘酒はそつちでせい。』
「あゝら合點の行かぬ、ぼつ中りごうぼうは、引窓[illegible]下[illegible]腕[illegible]は、ト[illegible]

ら入つて引窓から逃げるとは、不思議々々々。今にうちだつかへせ〳〵。ヤ、つがもない。」

それより巣次郎が一生の着共残らず、腕を取り返さんとおつかけ來りければ、不思議や虚空に五色の雲たなびき、音樂きこえ、はらり〳〵と紙花降り下り、江口が姿いう〳〵然とあらはれ「さんざいせんざい。我はこれ普賢菩薩の化身なり。假に江口の君と姿を變へしは、普く衆生の女郎かひを濟度せんが爲なり。なほ女郎かひをすゝめ〳〵守らん。ゆめ〳〵疑ふ事なかれ。」とろ〳〵〳〵ひい〳〵」またおばァは忽ち白象とあらはる。此の白象のくひ残しの饅頭は、皆ふなまんぢうと云ふ。おいろの西行は、すぐに俳名を法名とし、發心して西行法師となる。

『ありがたや、紙花が降るわ。一分ヅヽでは大きい〳〵。」

「はお富士太郎の切りとしやれたな。イヨ慶子ありがたい。」

「あら有り難や」と音樂を、耳をすましてよく〳〵聞けば、祇園囃子なり。人々みな「面白い〳〵」と此の囃子を稽古して、仲の町へ俄に出でるぞめでたけれ。ひい〳〵てん〳〵。

通一聲女暫　終

息女妙薬 一粒萬金談

明誠堂喜三二作
北尾政演畫

神田の岩井町に、福屋徳兵衛とて大分限あり。子供數多ある中に、四番目の六十四郎はおろかなる生まれつきにて、百の口が三十二文に足らぬ男ゆゑ、六十四郎と云ふなるべし。物事しまりなく、鈍な思ひつきばかりして金を使ふ故、徳兵衛行末の事を恐れ、屋敷を一ヶ所預け、金子一萬兩をあたへて、六十四郎が一生をしきり、「此の上は如何樣の事ありても構はぬ。」と、きびしく云ひ渡しけり。

「それは其方が一生のつかひ道ぢや。必ず澤山さうに思うて使ふと、一生の事は扨置き、一合五勺にも足り申さぬぞ。」

「有り難う御座ります。此の上は私が心にある事、必ず世話には及びませぬ。」

「かならず／＼、不料簡をお出しなされまするな。」

六十四郎は一生を一萬兩に仕切られ、大きに悦び思案しけるは、今年三十一になるゆゑ、百まで生

さる算用なれば、一年が百四十一兩二分六匁四分一厘余なり、さりとては使ひ難く、また明日死ぬ者なれば、今の内に萬兩遣つてしまふが徳なり。人の命は知れぬ物なれども、同じくは長生をして、細く長くと、かふ所に分別して、おもひよりし心出來、急に出入の醫者殿を呼びにやりて、長生の相談をしける、「百までも生きるならば、二百までも生きるが金次第、百までなら一萬兩かゝります、一年が千兩づゝおやし、お望みなら前金で致しませうか、一子相傳の藥方ゆゑ、書き付けねばかりも千兩道具なれど、此方で買ひ合は「一度調法されば後の商賣ながら、何とその藥方をお書き付けなされて下さりませぬか」せに致しませう」六十四郎百までも生きたい心になり、千兩出して一藥方を傳へたまへと申しければ、長庵申しけるは、「是れは一子相傳の方ゆゑ、他人に傳へては、醫者をやめて他國へ行くがこの方の掟なり。御志にめでて傳へませう」と、ついたてへ藥方を書き付け、千兩しめ子の兎にして、すつと駈落とはうまいもの／＼。

長壽之囊

天極上鮫之霰粒　三ツ
正眞の正宗切先のやすり粉　拾五匁

古法眼筆福祿壽の眉毛　兩方とかた〳〵切りおきて
古近江の三味線の棹捲屑　一匁
大極上朝鮮人參の灰　三匁五分
王羲之眞蹟壽の字　五字切りおきて
井戸茶碗のかけ　細末にして二匁
後藤十二代の金の獅子の目玉　二十四
尚尼の足袋の紐の黒焼　一分
[illegible]江[illegible]の黒焼　一匁
大天竺流沙川の水一杯半を一杯に煎じ用ゐる、但し魯國の生姜一片入る。

「[illegible]の[illegible]障子へ歌を書いたとは違つて、千兩たゞとり山は、身があつて面白い。」

六十四郎大きに悦び、此の藥を買ひ合はせて飲む氣になり、先づ[illegible]りうさ川の水と、魯國の生姜[illegible]に[illegible]しい所から、兼て心安くする慾心坊と云ふ僧來りければ、此の事を相談する。

「それは幸ひ、拙僧このたび入唐致す志あれば、天竺へ渡つて、流沙川の水をえう〳〵渡しませう。[illegible]行きがけに、魯國に生姜を求めませう。」

「それなら御頼み申したい。何卒天竺の十七屋へ云付けて、早くたのみます。」
「唐までなれば千兩、天竺まで參ればまた千兩、都合二千兩お出しなされませ。是れは前金で御座るぞ。」
「これは安い物だ。さりとは御出家樣だけ慾心がない。」
六十四郎は、兼て出入の道具屋の道六と具兵衛を呼び、書付を出して、長壽の藥種を云付ける。
『是れはどれ〳〵も金高な物で御座ります、隨分下直に上りますやうに働きませう。』
「どうぞ掘出しと云ふ品で頼むぞ。」
「獅子ばかり十二代續ひましたは外には御座りませぬ。ひけのない所が五千兩。もし目玉をお取りなされて、あとの殻を此方へまるで御渡しなされますなら、二千兩引いて上げます。其のかはり目玉は此方でぬいて上げます。手間賃はおまけ。ア、安い物だが、おなじみだけに、外樣へは御沙汰なしに願ひます。」
「これは井戸の正眞、利休の七千貫の極めが付いて居ります。しかも麹町の井戸から出た茶椀のゐ、珍らしいものぢや。」
「義之も隨分御座れども、詩の字ばかりの御用にはきつとした掘出し、二百兩に上げてはあひませ

ぬが旦那だけさ。」
「此奴は三徳の引つときと云ふ恰好だ。當世ではない裁だ。なんと角兵衛殿、その蜀江の錦千兩に高い。此方では花の所ばかり入用、そちらで花の所ばかりぬいて持つて御座れ。五百兩で手を打つ積さ。」
「それは同じ蜀江でも、劉玄徳のつかみ込みになされた裁。その頃の新裁高うつきます。五百兩なれば直でも何でもない、お徳なもの。」
「是れは人がたの人參、ひとかたならぬ名物。三百兩で灰になされましたら、大概三匁五分ぐらゐは御座りませう。是も此方で白焼にして差し上げます。」
「古法眼と書きましたは、別して珍らしい正筆で御座ります。」
「かんじんの親粒をぬきましては、あとはさつぱり行かぬ事。此の鐵なれば、親粒はおのれ、三百兩より一せんも引けませぬ。」
「てんぐに高慢を云はつしやるが、己が旦那の開緘はきつい物さ。一粒が千兩萬金だ。」
「そのねじめを御覧じませ。挽屑ばかりも五十兩が物は御座ります。」
「何と己も餘程ひくであらうが、源四郎が所へ三年通つたものだ。」

「傾城の足袋をはかぬは合點だが、貴方の歳暮で高尾に一寸足袋をはかせて下されと、さうと此方へ貰ひたい。一包ぐらゐははずみませう。」

「これはしたり、お前に無心し違ひ、高尾に足袋をおはかせなされたくば、身受けなされた上の事、まだ四年ほど年が御座りますから、五千兩でなければ御相談は出來ませぬと云ふ所を、ぐつとまけまして、蘭の内おうけ出しなされて、晩方は此方へおもどしなされますなら、一箱五ツ包で手を打ちませう。」

「四郎兵衞さん、さりとは通だぞ。」

「六十さんすゝ、足袋をお上げ申しませう。これで御用がなくば、もう參りませう。」

「先づそれで用はさつと隅田川。しかし餘り高い足袋にあたるから、何とおまけに一寸皺くれる氣はありやなしや。」

「この足袋さへはいてしまへば、私が用は隅田川、主と寢る事はいやでござりんす。」

「さつきのやすり粉十五匁と來ては、一服ではたりませぬ。二服お召しなされませ。此藥でも、さつきの燒がはづれては、天狗の鼻の缺けた樣なもの。あとを此方へお渡しなされても、二腰で百疋ぐらゐに外は取れませぬ。」

「それなら一分引いた所が、二匁で千九百九十九兩三分で。」

「りうさ川の水と親國の生姜、只今著致しました。扨々かうして見れば、千兩には高い物だ。此のサヤコはかわるが兩一倍好の物だ。生姜は日本の一文がものも無い。それから見ては、正宗二匁で二千兩が一分ぬけとは、お値開して御座ります。」

「旦那樣、そのやすり粉さへ出來ますれば、藥種一さんまい揃ひます。善は急げぢや。はやく藥を煎じて上りませ。人の命は雨のはれ間も待たぬ世の中。もし明日にもお死になされては、大枚の金がむやくなふうになりますぞ。」

六十四郎は藥種ことごとく集めて、ほどなくの數になりしに、先づ正宗が二千兩、古法眼が五十兩、獅之が二百兩、井戸の茶碗が百兩、十二代の獅子が三千兩、錦のきれが五百兩、古近江が五十兩、蒔繪が三百兩、人參の代が二百兩、〆て六千五百兩の所、醫者殿の千兩と慾心坊の二千兩、高尾が千五百兩は、滴金。此の度の擬ひに丁度千兩たらず、六十四郎いろいろ工夫しても萬人一人も聞きいれざれば、是非なく千兩のかはりに、家屋敷家財一世帯是に渡し、やうやう承知しける。

「千兩のかはりに此の家では、どこのはなしも埋らねど、ただ此の等は料簡しませう。皆樣ものりかかつた舟と、ふしようしてやらしやりませ。」

「早く見倒しを呼んで踏ませませう。」

「塵つ葉一本でもやる事はならぬ、其の着て居る物だけはやりませう。」

「何でも早く明渡して、何處へでも御座れ〳〵。」

「百まで生きるからは、此のくらゐな難儀はなされう。マァおあきらめなされませ。」

六十四郎、彼の百まで生きる藥は飲みたれども、家屋敷家財に放れ、漸う木屋竹衛門が方より返りし二千兩のつりの百疋を懐中して、江戸でかぶつた者は銚子へさへ行けばよいと思ひ、銚子をさして下りしが、十日もたたぬうち乞食となる。

むざんや六十四郎生きたるかひもなければ、毒を食つて死なんと、河豚の油腸蝶ぐるみ煮て用ゐる煤など入れて食はんと思ひ付きたるは、あはれとも云ふばかりなし。

萬八銚子に趣き此の體を見て、鯒を料理て河豚と引きかへる。

『是れほど毒を食つても何のけもないは、長生の藥が利きすぎたか。悲しや〳〵。死ぬるにも死なれぬは因果ぢや。」

「あの體を見ては最早堪忍がならぬ。本心をあらはさうか。」

「おまへ様があまり、取りしまりなきお生まれつき故、大日那様おはからひで、おまへ様に難儀を見

せました。しまりの出来るやうにと、親御様のお慈悲、必ず悪う思召しますな。」
「蜀江の錦は、お目ききの通り、古い三徳の裏。」
「正宗のやすり粉と申したは、鐵の粉で御座りました。」
「人參の白やきは炭團の灰。」
「私のは蘇方の煎じがら。」
「鮫の親粒はたうもろこし。」
「壽の字は判取の手跡。」
「福祿壽は大津繪。」
「井戸の茶椀は貧乏徳利の缺け。」
「獅子の目玉は、鼠糞粒に金の衣をかけました、其の細工人は則ち此の長庵。」
「フラソコは私のいふた事、生姜は麥冬の煮出の殘り。」
「高尾と申したは、私のかゝあで御座ります。」
「扨は家屋敷家財道具も元の儘にて、再び故郷へ歸れとか。うれしや／＼、餘り有り難き親のおこゝろざし、是れは誠に夢ではないか。」

「兎角我がまゝをすればいつもあの通り、人に氣兼をせねばたち申さぬ。」

「段々のおこゝろざし、有り難う存じます。」

「お目出たう御座ります。」

息子妙藥 一粒萬金談 終

四天王大通仕立

是和齋戲作
勝川春朗畫

爰に神田の邊に通具衛といへる者ありて、常々子の無き事を悲しみ居たりしが、或時中の町に捨子あると聞き、早速行きて拾ひ上げ育てたり。かくて名は通助、生まれ付いて意氣な事が好きで、六七歳から煙草を飲み、いきでよんだなる話を聞きたがりける故、近所の息子などと呼んで色々の話をさせける。

或日按摩の何とかいふ座頭が來て、色々の話を語す。

「盲蛇物に恐ぢずとやらでござえす。」

「何でも俗を離れた、ずつと高慢な話が聞きていよ。」

「わつちが頼光の山入を話しやせう。」

さる程に源頼光は、大江山の鬼神退治してければ、四海いきやうよんと治まり、禁廷の御覺え目出たく、一日一日に頼光が御威なりしと、金銀衣服に下され、時の武將と仰がれ、何不足無くありけるが、

斯くても都にての洒落は思ふ様には出來ぬ故、四天王の大通を集め色々評議をする。中にも坂田公時進み出で言ふ樣「何でも此奴は所詮都を退き、江戸へスイ行きの北國洒落がよう御座えやせう。」と申し上ぐれば、賴光ぐつと飮込み給ひ「ム、然らば「先年大江山の鬼神退治の折柄、逃げ遲れて居た鬼の居候めらが殘つて居て、嚊や娘を引張つてならねえ。」と奏聞さするがいゝ、すると又己を討手といふ腹だ。所で一杯に魂膽が出來るぜ。」といふ相談。斯くて町人ども賴光に賴まれの幕で奏聞す。

「ハイ〳〵私奴は、當年十七歳になります一人娘をさる御邸へ、仕度金五十兩で御奉公に差し上げます筈に致しました。其の晩から娘がかいくれ見えませぬ。心當りを色々尋ねますれど在所も知れず、先づ近所の息子でも御座りますまい、大方大江山の部屋子めらで御座りませうが、今以て付屆にも來ず、どうで始終は切店へでも賣りのめされるで御座りませう。何卒娘が歸りますやうになされて下さりませ。」

「私も娘が滿期で下つて居りましたを、アノ鬼奴は素早い奴等で、もう引つ拂つて行かれました。」

「いかにも〳〵飮込み〳〵。散々に退治して遣らう。」

先樣にも大通の面々附き隨へば、賴光が腹合なぐい飮みの、こゝは一番野暮になつて算段させるがいいと、つう納言いき人をして「先年滅ぼせし大江山の鬼神、今に居候奴がのこつて、彼處此處に徘

廻する由、是れを滅ぼすべし。併し定めて出立の支度痛事ならん、是れを以て算段致すべし」と、黄なる物をとんと下されける。

つう納言いき人、今度の役は、表むきばかりの、内々洒落なるべしと悟り、ひどい錢で利上して、冠装束して行くはきつい無縫なりと、いきちよん羽織に黒頭巾にて入らせられ、拍子でとはきついものきついもの。

「随分と深入をしねえやうに戦つたがいい。公公などは此とふざけの方だから、随分鬼奴等に悪くされねえ様にしてよからう。」

先づ一門出古禮に任すべし」と、祇園牛頭天王へ武運長久のため祝詞を捧げん。」とか何とか言ひ觸らして、神事は神主へおよびと握らせの、宜いやうに頼み、其の身は祇園の梅本で前祝ひに洒落のめしける。

公時もさる者にて、何でも江戸へ行くなら一風變へて行かんと、當世本田の先をひらかせ、子供の時より手慣れたる「斧」の如くに結はせける。是れより「斧」本田と名付けける。

神主も野暮にあらず「今度の御神託は、ぐいながしでよし」と、皆てんでんに足のつきさうな神子めらを呼んで、おひらどろんは此方にして、面白をかしく遊びけり。

「是れ主やア此中言つた事、工面してくれたか。」「も此の頃はめくり散らして、意氣地やア無エよ。」「ソリやア御前のこつたもの、どうでも工面するけれどの、わつちが思ふやうにも無え。此中も新地へ行きなさつたさうだ、」

「標印さ、ありやア付合だ。」

斯くて頼光は江戸へ着し給ひ、先づ北郭の一番乘は、誰彼と言はんより、吾妻の三田で生まれたれば、渡邊綱を遣るべしにと、金札ならぬ金銀拵へ、目ざましの頭巾を賜はり、其の上御家の重寶鬼切丸を貸して遣られける。頼光この太刀を遣られしは、若し明朝雨でも降るなら、定めて女郎が今日は續けて打たなんしといふた時、此の頃綱も些と自の筋で、懐ろ心元なしと思はれ、鬼切丸は身より拵へが好い故、少なくも三十兩位は通用する名劍なり。若しいかぬ時は、是れで算段すべしと言はぬ許りの計略で、兎角質屋では身より拵への事だよ。

綱は通言あり難しとは言へ、内から駕籠とは憚りあれば、無意氣ながらも長なる駒にうち乘つて、供をも連れず唯一人、北郭指して打たせしが、田町の邊に至りければ、不思議に馬は高嘶き、是れ幸ひと馬の乘り放し、四つ手駕籠に打乘つて、やつさコリヤサの聲潔く、衣紋坂へと急ぎ行く。扨また馬は大通の内に飼はれし馬なれば、畜生ながらわたり善く、綱を土手まで乘せて行くは、人の見る目

も不意氣なふんと、嗚かずともよき嘶きして、綱をば駕籠に乗せ、おのれ重荷を下し、道より引返して、ぶら／＼歸る馬は馬なれど、觀音の馬小屋にぐい消りして歸りける。實に通なる馬の通りし道ゆゑ、今に此の所を馬道と名付けけり。

綱は少々容様にて、茶屋へも行かずぶら／＼と、素見に紛れ歩きしが、羅生門河岸へ差し懸れば、誰かは知らず後より、綱が頭巾を抱い攫み「もしえ。」と引けば心得たりと身を捻り、透し見れば、鬼にはあらぬ女郎の袂、頭巾を内へ投げ込んで、お部屋へんなんしといううたる顔の美しさ、流石の綱もぐつとのぼせ、其のまゝ内へぐい入り／＼。

綱も其の夜、ぐい消りの安い所と、手を盡してぶら觀したれば、すつぽのかはと見えし傾城、根が善造の事なれば、這入つてはすんと言ぜ氣なく、綱がちよく／＼らに乗せられ「わつちやァ心中を立てえ。」と、初會の客に指を切りけるに、綱の甲斐は道にないやうだ。

斯くて此の由を賴光へ申せしかば「何だとんだ事、初會の指切は有り難く」と、御褒美の劍を下されける。今の世に通達者が、羅生門にて茨城の腕を取つて歸りしとは、羅生門河岸で、女郎の茨城が指を切つて歸りし事なり。指を腕と言ひ觸らしたは、針程の事を棒程に言ふ世の中で御座えす。

「己ア今分小手前にして置つてやれ。」己も深川を仕舞つたら、是で一座で行くべい。彼奴等は昨晩行つて來

だ歸らねえ。」

茨城、綱に一杯食らひ込み、二个夜も御前の名前で待つて居るから、必ず來てくんなんし」と、文綱と書きて、代診の叔母を頼んで遣りければ、綱は叔母と聞いては大の禁物、内へ入れたら又破風を蹴破りの幕であらう。時には、跡の造作痛事なりと、一向内へ入れざれば、叔母は術方なく文に石を結び付け、破風の格子より投げ込みける。綱この文を見て、此のやうに度々沙汰なしに仕舞つて居られては何うも續かねエ、兎角文を手に取らぬ事だと思へども、亦破風から投げ込まれんと思ひ、破風を皆板羽目にしられける。是れより渡邊家の破風は皆板にて張りけるとなり。

頼光は言ふに及ばず、跡に殘りし三人も、深川は張りが強過ぎて中々手に乘り兼ね、又吉原での綱が働き羨ましく、いで北郭へ行かん物と、主從五人の大一座、其の年の暮まで、夜晝拔かず通ひければ、初春には皆銘々に、女郎から年玉をよこしける。皆々不圖思ふやう、所詮何時まで買つても、是れといふさえもなし、是れを都への土産にせんと、皆々年玉をとりのきりめでたく凱陣召されける。

座頭は骨折りて戯話せども、息子が氣には些ともいらず。

「何のこんな話は附會で無趣い。此中水道尻の伯父さんに聞いた話は飛んだよかつた。おれが此の頃に通の御拾ひといふ話をして聞かさう」

「イヤ斯うこなされては閉口々々」

四天王大通仕立　終

通增安宅關

作者未詳
鳥居清長畫

「かやうに候ものは、加賀の國の富樫の何某にて候。扨も頼朝、義經御仲不和にならせ給ふにより、判官殿主從、作り山伏となつて奥へ下りの由、頼朝聞召し及ばれ、國々に新關を立て、山伏をかたく選び申せとの御事にて候。此の所をば某承り山伏を止め申し候。如何に誰かある。今日も山伏の御通りあらば、此方へ申し候へ。」

旅の衣は篠懸の〳〵、露けき袖や絞るらん。

義「如何に辨慶、唯今人の申して通るを聞けば、安宅の湊に新關を立てて、山伏を固く選ぶとこそ申しつれ。」

辨「其は御下向を存じて立てたる關と存じ候。是れは由々しき御大事にて候。是れには唯だ智恵のいろこうた事、奥州何んと、わしの國は何うだ。」

「智惠もひやうたくれもいらぬ。ぶんのめして通るまでの事。」

「暫く候。仰せの如く、此の關一つ打ち破るは易き事にて候へども、それでは跡が悪い。此處が通の入る所でありさうな者だ。」

「海尊師の仰せの如く。此奴は富樫奴を抱き込む算段がよからう。」

富樫が組下、塚見占之丞といふ。

「これ辨州、貴様と我輩がやうに打砕けて御頼み申す上は、腹藏無く御指圖いたさう。先づ我輩明日關所で、一つ掛りを飛んだ六ケしく言ふわ。所で、貴僧が勸進帳だと名付けて何でも書いた物を廣ちやくして、善い加減にこじ付けると、勸進帳だか安針町だか、目を縫つた鷺同然の者共だから、それでざつと表向は濟むのさ。然し判官殿をひよつと見知つた者があつた時は面倒だから、供の強力に身を窶しなどが、面白からうよ。」

「いやはや、兎角塚見先生の御引廻しでなければ、我等主従大の難儀。是れは輕少の至りなれど、旅中の事ゆゑ寸志ばかり。御蔭で心が隅田川一樽、金賣吉次が賣殘りの品一包、不躾ながら正の物を正といふ所がいいね。」

辨慶勸進帳と名付け、道中の小遣帳を高慢に讀み上げる。

「夫れ熟〻惟みれば、大恩教主の秋の月は、涅槃の雲に隠れ、生死長夜の長き夢驚かすべき人もなし。」

「辨慶奴は大の藝達者だぞ。」

冨樫、山伏を一々吟味する。

「勸進帳がある上は疑ひ晴れました。通して遣りませう。」

冨樫の左衛門、由之丞が吟味を聞き居る人々の心配を察し、諸事呑込んで關所を通す。勸進帳の文句は合の山といふ物だ。

「あの山伏は大きな男だ。後の剛力は人柄の善い色男だ。」

義經主從は、由之丞と辨慶が頷き合ひにて、何の變てつも無く安宅の關を越え、悦びの餘りに皆なく酒盛を始め、辨慶御機嫌になり舞を舞ふ。

「鳴るは瀧の水、日は照るとも、絶えず滔たり〳〵。絶えずに醉ふのが誠にこれよ。其方も如才は無けれども、此方の懐に一物があるさうで、ちよい〳〵といふだけ野暮らしい。疾く〳〵立てや立つか弓の、こゝろ許すな人々。」と、笈を押取り肩に打懸け、虎の尾を踏み毒蛇の口を遁れたる心地して、陸奥國へぞ下りける。

靜御前は義經の舊跡を慕ひ、安宅の關所へ來かゝり、大きに手古摺り給ひけるが、是れも由之丞へ

少なにぎ／＼の理窟を用ゐ、安々と關を越え、奥州へと急ぐ筈でござる

「やれ／＼嬉しや／＼、供の者が見えさうな者おやが。」

それぞれ義經主從のあの声ので心得し、互に顔を見合はせ、音を出して笑ひながら奥州へくだり、秀衡が館へ案内し給ふ。

山上「山伏が大勢やつて來たは、大江山と同道へ下は無いか、ヽいヽ人臭い風が吹く。」と、鬼ならば言ひさうな所だ。」

奥へ通り秀衡にあへば、

「思ひ込んだ上は少しも氣遣ひ無い。山道から東海道の街中は、倅どもが一杯につきあひますから、何うでも仕様がありさうな物さ。兎角長い物には巻かれろだから、げぢ／＼共をあやなして置くが智慧さ。其れで近日梶原父子が除目見物に見えるによつて、ふん／＼呑込ませて、貴郎と逆寄の時の仲直りをさせて仕舞ひ、跡で靜樣の娘道成寺で、親爺をグットうはにして、抱き込むはどうで御座ります。」

「兎角宜い達御父子の御指図次第さ。」

「何と駿州、錦戸兄弟も餘程通な者だの。」

其の後梶原の來りし時、

「先年逆櫓の爭ひ致した時分は、飛んだ無益を申して、御氣に障つた事も御座らうが、此の義は幾重にもお流しなされて、兩今は前々の通り御顯み申す。」

「是れは御互の事さ。今更思へば不通の至り。此の上は力味なしに、辨慶さんの力でも、微塵も動かぬ石山の、秋の月程で、圓な、御交際致しませう。」

其の前に靜御前も愛に來て居たれば、梶原のもてなしとして靜道成寺を踊る。聞いた坊主は辨慶と海尊が勤める。

梶原父子は秀衡が待遇にて、陸奥の名所殘り無く一見して、最早日數も重なりければ、人々に暇を乞ひ鎌倉へ歸る。

「時に辨州、鎌倉の御前向は、我等宜いやうに申すなれど、義經公の事内にあつて、貴公は生頭株の事だから、それなりけりにも仕難いによつて、御しうぎは『先年貴公は衣川へ入水あつて、故人になられ』と萬八をいうて、商據の爲に七つ道具を我等持參いたす算段。然して『衣川に樒流れけり』と申す古歌もあれば、さいつわは殘し置き、殘りの道具を借りて行き、御前は宜しくはからひませう。」

さる程に義經主從、秀衡親子が取持ちにて、梶原と和睦も濟み、鎌倉の御前向は、梶原がちよ〳〵らを以て、さつはりと治まりければ、人々安堵の思ひをなし、蝦夷が島へ出店を出し、末繁昌に榮え給ひけるこそ、誠に〳〵目出たく存じ上げ參らせ候、かしく。

通増安宅關　終

昔男を寫して

通風伊勢物語

伊庭可笑 作
鳥居清長 畫

爰に酒商賣をせし伊勢屋德右衛門と云ふものあり。近き頃より段々財產しだし、國元より年期子供二人呼び寄せ、得意を廻らせ、日々繁昌せしなり。

『これ德吉目を覺せ。汝も幸助といつしよに湯にでも浴つて來い。アノ帶の仕樣を見さつしやれ』

「あれ御覽じませ。幸助も德吉も同じ年恰好なれども、幸助めは毎晩湯にでも行き、髮も此方から云はぬ先に催促して結びますに、德吉は襟も耳も眞黑にして、たゞ居眠りが得手ものさ』

扨も德右衛門方の二人の御用は、日々得意を歩き、昔と違ひ今時は「御用はよう御座りますか。」とは云はず、誰が前へでも懐手をして、のそり〳〵と覗くばかり、それでも用は足りるなり。幸助は近所の神樣や璽むけた娘などに、「ええ子だから、いい酒を早く持つて來てくりや」と云はれ、いい酒は忘れても、ええ子と云はれたが何より嬉しく、忽ち持つて來るやうな氣質なれば、平常からして尻

をはしより、内を出ても近所を離れると尻を卸して、たゞ彼所の髪結床、此所の自身番の縁端へ横倒しになつて、彼所の女房は何だの、此所の娘は誰だのと、云ふやうな話が面白く、忽ち此の頃は、鹽辛でも食つたやうな聲になりぬ。

それに引かへ、徳吉は朝から晩まで、内へ百度参して用を足し、髪も平常煤掃のやうにして、耳も襟も眞黒になつて歩き、近所の子供が五六人むくろんじを持ち、ふきむくをしたり、或はけておつたを取りて遊ぶをつくゞゝ見て、面白くなり、何うでも俺もして見たいと思へども、むくろんじもなく、二三日も心がけ、通りの店下にてむくろんけしやうろんけを始め、仕合と一個のむくが六ッ七ッになり、夜は大切に細腰上げの中へ押し込み、寐るにも抑へて寐る程に大事にして、又二ッ殖え三ッ殖え、後には二三十にもなりけり。是れより悪く賭事に身の入るものなり。徳吉は只元手一個でも、精出して一個を大切にして稼げば利倍することに心がけ、あけくれ親方の帳面算用する傍にて、幾何も利ありと云ふこと面白く、後には徳右衛門が白鼠は此の徳吉なるべし。

其ののち光陰矢の如しと云つては、何うか敵討めいて堅くるしいから平つたく、子供の伸びるは竹の子のごとく、幸助徳吉は早十五六歳になり、鬼若衆では昔めいて悪いと、徳右衛門夫婦は世話を焼き、二人とも元服させ、幸助は願ひにて、「矢張幸助がよろしい。」と云ふゆゑ其のまゝ置き、さて徳吉

は徳兵衛と名を改め、幸助とは年一ツ劣りしが、商の事も能く呑込み萬事見所ありとて、まづ番頭下地にして、徳右衛門が口眞似もさせける。

徳兵衛は若い者になりしゆゑ、もう子供ではなく、すこしの仕落も今までとは違つて重くなる道理と、いよ／＼心を付けて勤めしに、幸助はのらくら者の癖に、年下な徳兵衛に帳面をされ、少し口惜しくは思へども、徳兵衛が身持の眞似はならぬと諦め、いよ／＼男振りをみがきければ、一體生まれつき横肥満にて姿が平ッたく、徳兵衛とは男振りもおとりしが、手前の氣にては、彼の徳兵衛は飛んだ野暮な體だと、矢張奴が方から男がえゝと心得、頭も百介が枸杞と云ふ所で、鬢は螽蟖籠のやうにして、惜しい眉毛を云譯のために少し殘して剃りつけ、諸事きん／＼めかし大きにかぶる。

幸右「幸助こゝへ出ろ。汝が髪の風は何だ、さうして此の頃見れば途方もない、三升の手拭を持つて湯に行き二時程の長湯だ、しれ其の煙管は何だ、雁首も吸口の穴も同じやうだ」

幸「ハイ／＼、此の煙管の名は大粒蝶と申して、近頃大ぶん流行ります」

徳「向後、髪の風も直させますから御免なされて遣はされませ」

幸助は何でも一つとして我が氣に入らねば、ならうなら親方も徳兵衛も叩き出してしまひたけれども、その株はなし。所詮零落して腹一杯にきん／＼と色男にこしらへ、世間の女に氣を揉ませて樂し

みようと、[illegible]出し、首に見とれ、頭巾[illegible]と出掛ける。

與今までに人の髪や着物の身幅まで、ぢつたの聞うたのと大きにお世話、といつもう一生でよ、こゝで朽ち果てるのであらう、氣の毒な奴だ、」と、大上で罵せた、氣を引いてねえ、早道に出まれシッ

三

徳右衞門内にては、何時の通り朝起をたる卑、自前の植木へ寄りたる首尾を見ます、鏡は何の心し捨ててあり。然れども幸助が勸善にて、唯一つ間でもなく、家内で演す

幸助は主人の金を盗み取り、少しの知己にて谷中邊へ住居をなり、だがおれはいいれに支度をこしらへ、何分まで横暴い男で、引をさせるやうな黒七子の枯羽織に小紋縮緬、かはり八丈と云ふ所をふきぬね、鮫鞘一本落差し、帯に黒繻子に緋縮で菊壽を織り込み、裏付はふんだり瀧すなの足袋、平常淺草、山下、両國、其の他、向島は勿論江戸中を歩くに、何うも本當好に嘆ったい樣の男と、人の目に付き、彼所の娘此所の女房、茶屋女までがちらちらと、秋波をかけるをええと嘲り付け一番の業平はお公卿であつたそうだが、多くの女の心をかけられた色男さうだ、吾も男かえゝからそれで業平と云ふと臣えて、是れは暫く綽名を付けたか、偉し江戸中の女に惚れられるには弱つたす。」と、自惚はます／＼増長する。其ののち幸助は、何處へ出ても通りのもの、まして女と名の付いた程の者は

目引き袖引きを笑ふを、背中に隠れた二本の角、此の廣い江戸中の女に惚れられて、ひよつと二人の女に
二人迄悪事をした報ひを喰はなければ、四方八方から恨み倒さうし、それもまあ少しつゝ叶へてやつて
は、まだ身體が續かぬから、それとは言ふだが、此處を辛抱して、まだ責食ひの一として、丈夫と云ふ
つて、世間の女が百分一もかなへてやらうと思ひ、夜ふけに一晩かゝつて耐へ好い
それからの辛抱は、とんだ氣の毒、いつの間に素の下の長いのが、五六年にもなりまし、目を細くして、
新、との外家に入れまれいる細長い羽で、それでも内に居る事になります、己の目で見れば、此の
四五日程が見えなんだか、この間ちを通るの、下夜守のが、行つたが、昨日は此處へ這入つたのと、
評判なれば、いよいよ事を大事にして、まうけ者も書生もと、それから後一は吃驚しましたことよ
二つ、町の辻を通る女が笑ふも道理なり、さる人の世話になつて居りますが、押へ込んで、
女房も言ふて居たけれど、何時何時下りて待つて居た自ほ、五十人持つてるが、好き
なことをさめて居る。

今は天下に勢ひで居て、吾もこの色男と思ふ間にや三年になり、もう少しつゝ色事を語りとこ
とは、それも、初めたと言ふたなら、世間で知れ、嫉妬のくそ言ひ出したやうに、と書
いるのが、浅草の因果相應の

かける。

幸「私は女に多く惚れられて困ります。どうぞ五人か十人ぐらゐで止まりますやうに、お守り下さりませ、南無地藏菩薩。」

幸助に願はかける、最うよしと思ひ、馬道邊を通りしに、ある格子造りの内より、下女と見えて小綺麗なる女、渋團扇に唐茄子のへたやら種がらを載せて、捨てに出でしを、是れも直に惚れて態と捨てに出たと心得、矢庭に後より抱き付きしを、女は膽を潰し振り切つて逃げる。光源氏ならば、團扇へ載せた唐茄子で夕顔といふ所だが、此の業平は歌を詠む風でなければ、鼻歌で此の場を歸る。

幸「ハテナ斯ういふ筈ではないが、きのふ地藏樣へお願ひ申したので惚れると見える。」

それより幸助は、彼所此所の女にかまつて見ても、所々にてふられ、吾が長家の大家の神樣にどうか來て居る樣子、是れは大丈夫出來ると、いやみをいひかけしに、當の通り神樣も半分なぶる氣にて少し綾なした處が、實のことになりさうな鹽梅ゆゑ、外して近所へ出る。

女「幸助さんええ所へ來なすつた。チットの内留守を頼みますよ。」

幸「こいつもいけねえ。地藏樣が餘り利き過ぎて一人も出來ねえ。」

幸助つく〴〵考へて見るに、兎角吾が男がよすぎるゆゑ、女どもも力味があつて、一ツも相談が出来ぬと見えた。いつそ地色は思ひ切ッて、女郎買ひと出ようと思ひ付き、吉原にて名ある女郎を彼所此所にて買へども、兎角思ふやうに先から惚れた様子は見えず、数年耐へた程の面白味はなく、いろいろ気を揉む。

幸助は其の後も諸所にて遊びしが、何処でも面白可笑しくされる許りで、根ッから逢えぬ故、ちと場所を変へて遊ばんと品川と出かけ、或内にてお森といふ起の女郎を揚げしに、能く〳〵の不粋者と見えて、飛んだふられせし故、始めて女は斯うしたものといふことを知り、さても行く程に、滅多無性に通ひしゆゑ、親方徳右衛門方にて盗み出し金も、養生喰ひその外店賃に失くなりた上へ、少しの残りを北国にて遣ひちらし、肝心面白く遊ぶ段に成つた所で貧乏に成り、少しはあつた衣類もぶちこみし、此の頃は人のものを借着しての女郎買ひとなりしは、にがにがし。

人の身の成行きはあやなものにて、主人の目をくらまし、おもいれ女色の道を修行する心にて養生喰ひをし、さらばと思つた時は先の思はくが違ひ、やう〳〵品川の果てにて女に思ひ付かれ、面白いと思ふと落ちぶれるが一時にて、今は身の置所さへなく、菰一枚を八丈とも縞縮緬ともおもひ、身にまとひながらも矢張己惚はやまず、昔の藤屋伊左衛門は、夕霧といふ女に金銀を遣ひ捨て、紙衣一

取と突き其の名を殘したとやら、我は其の上を行つて、恋を研くといふ、伊左衛門よりは色男なりけり。是ればかりは本當とおもはれ、出來の人に、實に義を貫ひ世を送りける。又徳右衛門が方にては、徳兵衛を養子として家を譲り、夫婦は隱居して、今は徳兵衛の身代と成り、或時淺草觀世音へ参りし歸りに、以前の朋輩幸助に巡りあひ、先づ世話をしてやらんとて連れ歸りけり。

徳右衛門は幸助を連れ歸り、いろ／＼と意見して、隱居へも相談ひて少し資本を遣はし、世話致したきと願ひければ、隱居夫婦も徳兵衛が仁心に感じ、どうなりともせよと許しければ、金を與へ同町へ店を出させ、鹽屋をさせしに、幸助も今になつて昔が身の白癡を悔み稼ぎしかば、僅かの間に利益ありして、だん／＼と繁昌しける。誠に二人ながら連立ちて、鼻の垂らしの時分伊勢より江戸へ來ても、人の心は色々違ふものにて、悪事をなし主人の恩を捨て墮落したると、主人の子となり家を繼ぐとは、下駄と燒味噌ほどの違ひなれども、共に繁昌せしが不思議、是れも慈心でせず唯好色のみのみ、神の惠みと見えたり。

其の後徳兵衛も親類内より女房を呼び、其の序に又隱居へ願ひ、幸助にも世話してお菊を添はせ、兩家ともに繁昌日に増し、徳兵衛夫婦は隱居徳右衛門夫婦へ孝行を盡し、目出たき春を迎へ家業榮えける。此の目出たい序に、つまらぬ二人の伊勢物語の御評判も、唯よい／＼と御贔屓を願ひまゐらせ

候。かしく

昔男を写して　通風伊勢物語　巻

夫從以來記

竹杖爲輕作

喜多川歌麿畫

序

戀川はる町先生の、無題記、續いて喜三二先生の、長生して見度記の紙屑なりとも拾はばやと、誰も月並の太子堂に、通夜せし驗はあるべいもの、夢中に授かる夫從以來記、悪い所はおさ〳〵なされし、太子様のせゐにするでも無いかな。

萬象亭

竹杖すかる述

わいく天王一萬八千年に當つて、草雙紙は大人の讀むものとなり、正月二日會初めありて、そ

れより月々會讀あり。四書五經は子供のよむ本となり、朱熹は講釋、莊子賣りあるく。

「丈阿が黄紙に、大木の切口で太いの根ときて合點がゆく〳〵、なんと申すは、至つての古文辭で、一通りでは解せませぬ。たとへて申さば喜三二は徂徠、春町、四方は春臺、南郭、唐來は東涯、通笑は朱子學で、一體が堅う御座る。」

「此の高漫齋がすみましたら、源平總勘定に仕りませう。」

「先生の書とは違つた物だ。」

子「唐本の左傳と論語を下さい。」

「さうさ本屋、己には總記を下さい。假名の付いたのはいやだよ。」

「それより新板の史記になさりまし。」

芝居にて見物が狂言をし、役者がかへつて見物をする。

「昔我の十郎の役、馬のあと足は氣のある役廻りだ。兎角己は己が贔屓だ」なぞと、口々に囃をいふ。

年號口上

そのかみ歌舞伎にて春狂言の役割を御町中様へ相觸れ申し候事御座候由所謂末世に至り末熟なる者共の仕り候儀御目まだるく可有御座候條、則ち春狂言役割の通り御氣に入り候御方様方に御聞き召され此方舞臺へ入らせられ御自身に狂言遊ばされ候が第一御なぐさみと存じ、扨てその儀御任せ被下候はゞ費用等は諸入用迄に私共見物代にまうし受け候、依之此月十五日より御賑々しく御光儀被下御狂言御勤め被下候様奉希候

月　日　　　　舞臺かし元

右役割

一箱根の別當　　一大磯のとら　　一役
一化粧坂の少將　　一工藤内　　一曾我五郎　　三役
一曾我の十郎　　一馬のおとわ　　二役
一朝比奈三郎　　一梶原源次　　二役

傾城中の町へ御所車で出る。勿論衣裳は十二單衣、悉も緋の袴。若い者はしら張。仲見世に[illegible]

ががきのかはりに、琵琶琴和琴などを調ぶる。

仲の町のさくら紅葉となる。

松王梅王櫻丸衛士の又五郎、童子丸などと云ふ地廻り徘徊する。

『向うより見ゆるは、棟上の高見がもとの提灯にてはべる」

「是れより京町のかぼちやの元成がまがきをそゝりさふらはん。今宵は例の木綿法師も、とまりておはさん。」

べりはま額にだほんと云ふ髪はやる。羽織の短きこと一尺二三寸なり。坊主の通は、えり羽織に輪無地縮緬にやる。多くは緋縮緬、むらさき縮緬なり。通の事をなになにと云ひ、意氣な事をプリと云ひ、女郎の事をペケンケといふ。

此の頃は夜女郎買ひに行くものなし、依つて女郎屋も朝店を張る。

『兎角遊びは朝の事だ。」

「ぬしのペケンケはフウだよ。」

「己がのよりおめへのは飛んだピイで有りがてえ。」

駕「先の立場で鉢巻にしよう。ほゝぶりかはうるさい。」

「薩摩の守さかのりとは我が事なり。」

大人甘きものを食らひ、子供からき物を好む。

『かゝさんや、とん／＼唐がらしを買つてくんねえ、お母さん』

「そんなに、やかましくねだる事をすると、柱へ縛り付けて饅頭を食はせるぞ」

乞食小屋へ雪踏直しを頼みに行く。でい／＼のせわ賣り、一切あるかす。

『今日旦那こと途中で、うら付の鼻緒をふみ切られました。何卒御覧の上御直し下されまし。おいそがしくば御弟子中でもよふ御座ります。一寸お頼みに伺候致しました』

「押付弟子共を遣せませう。此の頃は別して急がしい上に、昨日富が落ちて大取込みで御座るてや。」

二十五日目に鼻緒がすがつた。

「小屋に御座ればよいが。」

古物屋は諸色高賣りの引札を出す。唐の若い者「これ／＼お上のイノ／＼、こなたとは云はさ、買手來れば、一通らつせえ」とにらみ付けた。

『何だ、褌が買ひたい。イヤハヤ不作法千萬な、そち一言云つて見やれ』

「何卒さやう御申さられずにお賣り下されい。丁稚樂おとりなし頼みます。」

「茶番には、茶釜の下を消してしまへ。」

神も佛も一ツになり、神明地藏大菩薩、本社佐牌堂の建立も此時にありけり。

中臣の和讃に曰く、「□□妙頂禮神明は、たちばなのかどのかきが原に、鎮まりましくて、衆生の濟度をみちびけり。願以此功徳ほらひ給へ、清めて給ふ。」

『只今の御志、一切の諸精靈、小男鹿の八ツの御耳をふりたてゝ、聞召せと申す。』

据風呂のせり賣りあるく、引きずり風呂といふ。淨るりを語れば三味せん、念佛を云へばたゝきがね、諸曲なればつゞみ、何でもかでも、お好み次第。

『なくの中でこなアさんの。』

「おら念佛が云ひたい。雙盤をはつて下さい。」

「モシ旦那、すゝはきには貫切にして下さりまし。」

「湯がすんだら、己が所へ引いて來てつせえ。」

「一ぱい這入つてあゆばう。」

男仇討と云ふ事始まり、間女房と打果しあり、よりこ木にてたゝき合ふ、矢張打首で腹を切るかくなり。

「[illegible]に下からで御座る、[illegible]出來ました」
此方へこゝに來てたゝかれたら、後がひりゝと山椒の木」
「とつこいさうは[illegible]」
[illegible]日明に金を借り、詫言[illegible]に來り、騒ぐこと[illegible]
「[illegible]二[illegible]料理[illegible]官金を借りましたが、[illegible]といふやつだわ。エイカ、それだから詫言に來ますわ、エイカ。」
「是れさ靜かに云はつしやい。金を貸して騒がれたは、外聞が惡いやうでいかやうな[illegible]
[illegible]やうな[illegible]だ」
[illegible]
[illegible]
「會席だの何だのと云ふ物が、[illegible]口も[illegible]はれぬ物で[illegible]昔は[illegible]に萩が[illegible]だが、[illegible]角花
[illegible]
「通[illegible]大福[illegible]本の事で[illegible]己これで[illegible]八[illegible]大通だ、
[illegible]

傾城高利の金を貸付ける。三會目に客に床花をやり、客より禮の初文を出す。金持の子供、見習ひの新禿になる。

「尾張屋のうちへ、附金が來たかしらん。」

「ヲヤ花魁おふみが出ましたの。送りものは煙草入さ。」

「段々御尤もでは御座りますが、ならうなら、もう少々お待ち下されまし。」

「馬鹿らしうおざんす。いつでも同じ事ばつかし云ひなんす。工面が惡かァ利上をして、證文を書きかへなんし。みどりや、手形の箱をもつて來や。」

「しげのいさん、向うの人に證文の紙を一枚と、印判の墨を十文がの、持つてこいと云ひつせえ。」

末世に至り、大通の一式兩國にて開帳。

「そもそも是れにかゝらせられたるは、吉原山のまてつぺんに、本田のよしみつの安置し給ふぎらが如來の尊前へ、龍女は燈籠鬢をさゝげ、三味線の音樂ひゞき渡り、空に紙花のふりかゝる體さうで御座る。」

○脂下りの煙管　○通人の體相　○丼の紙入　○きんきん御太刀

「むかしの大通は違つたものだ。」

「南無大通々々」

参詣の人々、とりどり評判する。

「アノ岸とやらいふ大きな袋を、鼻紙袋だとさ。ほんに坊主といふ者は譃をつくものだ。」

葛西へ肥取の迎へに舟で行く。冬大根何百本。その外取賃何程と、運上を出して頼まねば、「むさい物をいやで御座る」とて中々取らず。所々の大屋は肥取にとらるる運上に大難儀なり。されば迚て取らずに置けば、店子がやかましくいふ。「是れに付けても、昔はどうした理窟で肥取から運上を出した事やら、ほんに面倒くさい目にあふ」と大屋の述懐たえまなし。

「屋根舟でお迎へに参つた。」

「舟をつて退ほすだらけで御座つたぞや。肥取を粗末にさつしやると罰が当ります。去ははは私らは雪隠の神主も同然で御座る。」

下戸衆に酔ひのたまくとなた。酒に酔つたのと違ひ、殊の外腰がつよくなる。

「上「なまふひの菓子くらひやく。」

「上隅田川で水着敷おやすない。汁粉餅が喰ひてえ。」

「ト、サ、つれ、渡世餅々々々」

大三十日に掛取来らず、借手は貯金持をつれて拂ひにあるくのだ、いかなる代でも有難き。

昔は代物を貸した上に、代をはやつたり、貸した方から取りに廻つたさうだが、そんな事が有る様か、どうやら嘘らしい事だぞ。

一そ左様掛ひに廻らねばならぬ。掛取があちらから来てくれれば甘いものだ。

夫従以来記　終

それは小倉山／是れは鎌倉山　景清百人一首

明誠堂喜三二作
北尾重政畫

序

大通にして不通なき者をしれ景清と稱する事、惡七兵衛は惡の字によるなり。又人が引例ゝ事少ければ、鉢つきのいたことにあらし人かくよふにや、元より東都にも見當り侍らず、近き頃世に行はるゝ詞のやうに覺へし、文正甦の頃ゝより此の事あり、此の本を見て考へ給ふべし　六樹

壬寅の春のはじめ　喜　三　二　述

藍水樂山卒業ことくへ出でし事、惡七兵衛景清が行方知れざる故、頼朝公大に驚き、景清が人相を書て日本國中にふれ渡し、見當り次第からめ取り出すべしとありけるも、ついに其の行方なし

れす。

「此の詮議は重忠と岩永左衛門に申し付ける。かはり〴〵詮議あるべし。」

「二ヶ月がほどに詮議致しませう。」

「今この泰平大通の御代に、此の様な野暮な身で居るやつは、只の一人もない筈。しよせん此の繪圖は無駄で御座れば、繪圖を書き直すがよう御座りませう。」

「北尾がよからう。」

「是れは良い掛物だ。」

「景清が詮議は此の梶原にはない株だ。」

「此の義盛が承るには、大磯小磯化粧坂等を徘徊する大通のやからの内に景清ありと承る。兎角大通ども、御詮議あつて然るべう存じます。」

本田次郎、仕人重忠の命をうけ、大磯化粧坂の遊所の役人を呼び出し「景清が人形を以て、見かけ次第うつたへよ」と申し渡す。

岩永が家來宇曾田三郎、立會ひて人形をわたす。

「まづ〳〵一枚づゝ渡すぞ。」

一寸一寸申しました所が、其の様な人は毎日々々をいくたりとなく郭へ見えます。仕打を見ませぬ内には、どれが景清とも分りませぬ。」

爰に大磯に住む恵比寿屋太六と云ふ者、訴へて申しけるには、

「景清が女房阿古屋が、鎌倉に白拍子と成り居る由うけたまはる。数多の白拍子の内なれば、分り兼ね申すべし。何でも夫がないと云ふ者は曲者、たがあるかないか御詮議なされませ。」

岩永左衛門、恵比寿屋太六が申し條にまかせ、鎌倉中の白拍子百人召捕り、夫のあるなしを詮議する。白拍子、夫の有るは皆許さるゝと聞き、百人ながら皆々「夫あり」と答へける故、其の夫の名を問はれて、われ／＼、余であの人に意気な男だと思ふ男を、出まかせに申しけり。

宇曽田の三郎、いろ／＼夫の名を書きとめる。

「私が夫は誰にさうな、皆様の業でえたかね。」

「御前にしなり／＼。」

白拍子にも、亭主に持ちたいと思ふ男なれば、皆大通り者にて、しかも人のよいはてれなる中にも名だたる大通に、皆の内云うてしまひける故、末へ廻りし白拍子は、半通ぐらゐの者を申し上げし。

その頃大坂が谷に大和屋次郎太、俗名を文魚と云ふ者、此者は大通なれば、百人の通人だと見せらわけるに、此たび／＼次郎太が覺えたる者にて、金を借りて期限に返さず、又太鼓持ちながら其の殿の合方と色事をしたり、書物を借して開かずに置いたり、又は評物に出て向た評判の札をさげて、評も持たずに居つたり、其の外いろ／＼と悪い事する者共なれば、いづれも／＼景清に出造御座りませぬ」と、申し上げる

岩永左衞門は、百人の目録をいちいち見てあれば、其の内に景清もあるによつて、百人呼び出し吟味するに、大通の本田頭、いろ／＼結構面の人相書に當りければ、あきれる

「本田頭の見あきるような、此の時だ。是れがほんの百本田だ。」

景清乞食と身をやつし、杖の中に刀を仕込み居ると、沙汰有りける故、其の通りの乞食を吟味ありしに、其の頃鶴が岡の八幡の社地に出でし身ぶりの上手、徳市と云ふ乞食を捕へ來る。

「乞食になつた景清は見えませぬ故、景清となつた乞食をとらへて參りました。是れでも道理は同じやうな物で御座ります。刀の中には、杖のやうな物が仕込んで御座りました」

「それは大きな料簡ちがひだ。早くゆるしてやれ。」

景清はならびなき、大力なれば牢へ入れても破るべし。破り出るのが實の景清ならんとて、百人の

大通を牢へ入れて見る。
本田二郎、榛澤六郎、牢の番人となり、わざとゐねむりても一人も破る者なし
「己がやうな者に、正直に番をするは野暮さ。」
景清餘り澤山にて、實の景清知れ難ければ、重忠工夫して三保谷四郎國俊に兜を着せ、一人々々呼び出し引かせ見るに、皆引きちぎられる手合ばかりにて、引き切りさうな奴は見えず、漸く立ち合つた、是れを引き切つて景清になる奴は無い筈、是れは秩父殿の案じごと、中田、やりの諭ではなかろう
「けこゝをすびいた事はあつたが、錣を引くは初だ。」
「今度は己がでかけやせう。めくりなれば引きいいけれど。」
「両手をかけた所がそれか。ナアかはれ〳〵。さるにても、汝さて〳〵よわい奴だ。」
「國俊殿の下りは高慢だが、腕が弱いから首の強い所がこたへぬ。」
景清は、觀音を信心すれば、五百羅漢の榮螺堂を廻らせ、中にも清水の觀音の所にて、眞實に禮拝する者あらば、是れ實の景清ならんと、よはらせて見しても知れず。
「ナヽ、頭のお額が見えやす。」
「此邊は(榮螺)のいたのある所さ。」ア、皆さうだ。

「關通百福と大通百人の出合ひは面白い〳〵。」

「何れも拜む體は見えぬな。」

「むだばかり申してよわります。」

百人の大通を由井が濱へ引き出し、首の座へ直し刀を振り上げる時、眞の景清ならば、觀音の妙智力にて太刀が折れる筈なりとて、いざ〳〵敷皮の上へ直し、太刀ふり上げても其のしるしなければ、これもやめになりけり。

「己はちやうど百人目だ、手がまはると百年目だ。」

「これ〳〵、切られる時は默つて〳〵。」

「きられはせぬと思ひつゝ氣味が惡いの。」

「せん方はおかはり〳〵。」

「覺悟した身がきつい事だ。」

「己は百物語の燈心と云ふところだ。」

重忠は清盛、重盛、宗盛の名を書き百人に蹈ませ見んと、先づ兩人を呼び出しける時、重忠の足輕逆衞兵七飛んで出で、兩人をさし出す所の足くびを取り、もんどりうたせ、

「今は何をか包むべき、逆衛兵七とはかりの名、實は惡七兵衛景清と、サアよつて縄かけ、頼朝の前へ引け〳〵。」

「さてこそな。」

「ふまず逃げたりの目にあつた。」

「逆衛兵七とは、七兵衛をさかさに讀みと惡樣の雑名に、ハヽ、いさぎよし〳〵。」

「己にいさぎわるし〳〵。」

此の時、景清頼朝の衣服を襲ひ、晴に欺しこ得たれば、われを害するに及ばす、眞の豪傑とやらん謂の四

畳半とやらの故事なり、

此れ日から、頼朝公なる事しける故、目出たき御代とご申しけり

夫れは小倉山
是れは鎌倉山 景清百人一首 終

手前勝手御存商賣物

北尾政演（山東京傳）畫作

序

画の開でたる者は、春ごとに、たはれさうしの書をたゝみけるなにがしにて候。いまだ御子さまがたの御なじみ薄く候程に、何がな御意にかなひきわらふことを御覧にいれんと存じつき候ところに、今年の一つ趣こそやつぱり存ぜぬことを見解ほどに、これは後の規定何がしかたへ参り相申しはいたし黒の趣、急ぎ後日に、見たは早速なかなかとに書きて候。御らんあろう〳〵

八文字屋の舊本、[illegible]の黒本の赤本は、[illegible]れ間で、一旦のほしが中になる百成表紙の下の繪本かたへ寄りつきて、[illegible]ながら[illegible]下り、御商賣に[illegible]身の上か、近年商賣流行り、ことに[illegible]繪合いたしけれども[illegible]の繁昌に[illegible]られ、何にも目情しき事なり。[illegible]の趣本に[illegible]付けたる。上[illegible]

[illegible]京傳作

かゝせい表紙の下り繪本、打笑ひて挨を拂ひながら、「これにはとかく、僕に任せ候へ」といふ。

八文字屋「額に八の字を寄せて語す」

下り「かう棚晒しになつてはいけぬ。」

下り本は或時、赤本、黒本を招き、鯛の味噌酢に四方のあかを振舞ひ、赤本はぐつと飲むとあかくなるゆゑ、ひさのやりとてら印を出し、四方山の話の上にて、去年の春出でたる青本の評判記を出し、「各〻方の不繁昌は青本が發行ゆゑなれば、けちを付け給へ」と手前は手を濡らさぬ工夫、上方ものゝ油斷はならず。

兩人これを見るより、むつとして青本を猜む。

赤本のはしとも言はれた身が、赤本黒本といへる、地獄の鬼だと思ふか殘念な。

青本は貴賤の別ちなく、人の目を喜ばす世辭に賢く、粹を專らとして、當世の穴を捜し、俳氣も少しあつて毛筋程も拔目はなく、雨中の徒然には豆煎と肩を比べ、女中樣方御子樣方の御贔屓つよく、新板の工夫に新規を凝らし、然れども其の身驕る心なく、矢張すき返しの紙にて月並會を催し、洒落本袋さし一枚摺、その外の當世本を集め、趣向の相談する。

青「去年の大違ひ、寶船は大分おちなさました。」

「金交丈もよく作られたし、喜三二が一枚の夢も出來ました。此方どもに別に能い趣向もござらぬ。」

『戀川氏の無益委記もをかしく出來ました。宗園先生のあぶらつうへも面白かつた。通笑や可笑子の作にもすごいのがあるて。』

柱かくし、青本が妹なれども、金平が娘ではなし。

『此の舊祖父の時分、既に郎が島へ渡り、浦島も郎が若い時分にて、うるし繪と云ふが流行つて人がうるしがつたげな。』

青本が妹柱隱しは、一枚繪が姿に惚れて、拙眼の番頭をつかまへた樣に口說く。

一枚『これは短氣な。』

『この通りでござんす。』

「こんな繪にしが紙にもあろうか。」

野逹に脊ちし紙の私、辛い此の美の細きを付けて、目に心を見すかれと、顏合はしたる卷紙の、又の御見をまつは嬉、腐れた繪の雛物かすとて、思ふまゝにきれて上を、嗜れた一枚繪も、

連石出來にまはるか本書の四つ切の程、謂ひてあるへ上まる程に立つて、色事二人の、互に繪の

其の纏めぬやうにと、行末を案じる。

一枚繪が學者取三人揃、皆に三十一枚の男共待して眠り居る。

青本は下の目まらずして、普間の着く時で、お定まりの獻立を振舞ひ、黒本は後に殘り、樣々の古ゐの遊日を言つて、赤本の後を去らせた。話があらば、日待の晩とは此の事なり。

仲間の中、黒本赤本來らぬ故、どうかした譯と思ふ。

青本は、本来かくしと一枚繪が理窟を知り、どうぞ末は一つにしてやらんと、日頃近しき洒落本噺本に語らんと出懸け、道にて石摺にあひ、「連れだちて觀音へ參詣せん」といふ。打出の北國と見えたり。

浮繪からくりを見せる。

『京四條川原のゆふ納涼の體、これも夜分の景とかはり、つらりつと火が燈ります。首尾ようをはりますれば、お名殘惜しうはござりまするが、そうよう樣へのお暇乞。なんと好い細工で御座りませう』

黒本は草紙、大木の明日位では、青本にけちを付けることは思ひも寄らずと、すこし當世をやる氣になり、生黒い仕立で赤本を連れだち、青本が居らぬを素知らぬ顔で通る。むかうから親分の唐紙表

紙末たる頃、てこ摺る。ことに又東屋錦絵とて美しきものあり。江戸の名物程あつて紅を[illegible]しませ、
一際目立ちし色里の衣裳にて、[illegible]に諸國で江戸繪と[illegible]らるも尤もなり。美しき女を繪に書いた[illegible]
は、其の錦絵より[illegible]なり。
[illegible]「あれは東屋の、錦絵さんでござります。」
青本、錦絵に見惚れる、「さて美しきものぢや。」
新造繪半[illegible]、禿道中雙六、同じく十六むさし、新造禿[illegible]連れて觀音へ參詣する[illegible]
る。
「因果地藏さまはあそこ[illegible]」
青本は錦絵の美しきに打込み、[illegible]
錦絵は、青本に惚れたといふても無けれど、為[illegible]なりさうな[illegible]相應に[illegible]いうて置きける故、
[illegible]
[illegible]
[illegible]
表題「おてうしを早く。」

黒本赤本は如何にもして、青本にけちを付けんと、塵劫記、年代記、だうけ百人首などを語らひ、柱かくしを盗み、一枚絵と青本が中を裂かんと謀る。

大津絵は近年不繁昌になり、大津を夜逃にして、黒本が方へ到りしが、黒本が子息の小本、夜泣きをしてならぬゆゑだますに、

大津「これその様にだゝを云ふと、おれがいつも紋に付けて居る鬼の念仏が出るよ。おゝ恐い事だ、奉加帳へ付けた、これがたまると灸をすゑるから、鐘と撞木のやうにおやかれと騙れた。これ自然といふ噺を気長にだます。これ小本噺といふ事の始まり、夜泣きもしまいたいといふも此の事

塵「これ塵公や、勘定の道はおやうに頼むよ。」

道化百人首は何の訳も知らねど、此の狂言が当つたらよきに取つて得させん」といふ故、一ぞうしたら、我が子供等を楽に過させんと、この相談に乗る。

大「塵介この身は、煙草庖丁でかは口を離たれても、色の道のある気遣ひはないのさ。」

黒「見さんも呑込んで居るからは、大将でござんす。」

年「塵公あのいふやつきを見やれ。けたいの悪い染繁だ。」

黒「それは末の事お辞。」

黒木は二人を頼み、まんまと柱かくしを盗み出し、家へ連れて歸りしに、女房いろは[illegible]の事も知らず、夫の焼餅焼に一夫婦喧嘩を始め、お定まりの擂木で打ち合ふ。

「小雀なんぞに鶚の心を知らぬ、深き料簡の有る事も知らいで、こゝな夜明のぴんぞろめが。」

道化は大首[illegible]る。「それは餘りたんかちや。」

黒木は眞顔になつて腹を立つ。

「ム、邪魔た、[illegible]。」

青木は妹の目も[illegible]一枚繪へ[illegible]と、黒木赤本が仕業とは夢にも知らず、柱かくし[illegible]一[illegible]

八卦を[illegible]占はせる。

青「四ツ市、兩國邊も尋ねました。八卦なことを[illegible]にかけ、[illegible]師樣のお[illegible]」

青「[illegible]いかぬ易の[illegible]や、是れは兎角、湯島の天神前の[illegible]」

赤木、一枚繪の[illegible]

「[illegible]、黒木は[illegible]

や[illegible]、色は黒くても、同じ仲間の黒木へ[illegible]

と向うづらへぶつけ、貴樣を突き出す相談さ。必ず己が咄したと云はしやんなへ」

と眞赤な僞をついて焚き付ける。一枚繪これを聞き大きに怒く

吉原細見は黒本赤本が惡巧みを聞いて、青本に告げければ、始めて聞き大きに驚き、

細見「それに付ては危いものゝ、先づ私が方へ御座れ」

黒本が子息小ほん、疱瘡をすると聞き、紅繪見舞にゆく

疱瘡の見舞に紅摺の繪をやる事、この謂れなり。一枚繪は若氣のはやまり、まんまと黒ほん赤本が謀略にのり、一たんの約諾を變更へたる事と無念骨髓に徹し、おのれにつくき淺き返し野郎め、引き裂きて紙屑籠へ打ち込まんと、よく譯も聞かず、青本が吉原に居るを知り、果し合はんと氣色を變へて走り行く。折ふし向うより唐詩選、源氏物語、江戸ノ扇屋より返りがけ、この體を見て譯の在りさうなことと始終を聞き、色々意見をして止むる。

唐詩選、源氏物語は、一枚繪と青本が謂れを聞きしに、黒本赤本が仕業と云ふこと知れ、雙方へ教訓する。繪雙紙、草雙紙はこの方の仲間違ひなれども、何れ本と名が付けば同じ類なり。まづ我々が床の間や、唐机の上を見て居るに、赤本黒本の仕業以ての外なり。その繁昌不繁昌は己々が心にある事なり。山崎派の有り難きに、徂徠派の風雅に衰へ、八ッはし流のおやうひんは、生田の當世にすたり、

紫色の美しさは萌黄の古風に歸る、紫は藁となる世の中、青本も世に時めきしに委せ、萬事おもひも變
度はいらぬものなり。
「さう頭巾に身を窶輝では須磨明石、薄い墨ひの脊負とふつつか数を繪盡て、赤本の心を休め、この
世は夢の浮橋と心得、御子様方の御意に叶ふやうに趣向に精出し、黑本、赤本、一枚繪も仲よくし
たまへ」と、曲やはらかに述べければ、青本連も五言絶句と意見する。
「また一枚繪は祿に譯もきかず、二人嶋に及ばんとせし事、似顏繪といへども顏に似合はぬ短氣ものに」
と、大きにきめられけるゆゑ、これよりきめだしと申すなり。
「必ずしかる源氏だと、思ふまいぞ。」
「其の見事へ上る薬はまた格別だ。」
やまと繪は人の心を和げると、宜なるかな。源氏物語、當世選の教訓に、皆々、しようちしくあは、
をする。頭てんてんされぬうち、早く歸るがよからう。
さて柱かくしは、一枚繪と祝言して目出たく納まりしが、赤本黑本が此の度の惡巧みは、一體さつ
ぱりのゆゑ、木の仕立が惡いから、根性に沈みがあると、性木に掛けて叩き直し、千枚とほしで打ち
拔いて、こんなやうな損を直される拙なし、森の仕込みの如くなり。扨又この度の騷動の趣意は、

八文字のよみ本、かうぜい表紙の下り繪本が陰謀といふ事あらはれ、これは古風なるものはかうがい[illegible]と、ひつ鮮いて腰張にされ、下り繪本はみんな顔へ無駄書をされ、繪目は鼠に食ひあらされ、屏風の下張になる。

黒本あか本は根性を綴ぢ直されてより、元の如く繁昌する。

用文「用文章が筆先見ておけ。」

往來「刷毛ついでに、かうぜい表紙もやらかさう。」

赤にはかくといふことで、此の赤本が始まりなり。

赤本「もうひもじさはなほつた〳〵。」

徒然草は唐詩選、源氏物語の媒を受け、地本共に下知する。

是れより草紙問屋の商賣物仲睦まじく、行末萬々年も繁昌に榮え、切つたりはつたりの草雙紙のすたりしも、實に太平の御代の有り難さと思ふ中、表を商人が「一枚繪。」「草雙紙。」「寶船。」「道中雙六。」と呼んで通る聲に驚き起き上らんとする所へ、「鶴屋喜右衛門御慶申し入れます。」

手前勝手　御存商賣物　終

思ひ付いたり
替つたり　五郎兵衛商賣

南陀伽紫蘭作
北尾政演画

ここに福屋五郎兵衛と云ふ者ありけり。代々金持にて何と云ふ商賣もせず、貸金の利分にて暮しけるが、五郎兵衛が世になりて遊びを初め、段々に遣ひ無くしければ、漸う目が覺め、遣ひ果てし上も商ひをせんと思ひ付き、何ぞ商賣を始めんと思へども、當世通りの世の中なれば、何とぞ珍らしい商ひをせんと、女房と色々相談する。

それより五郎兵衛は漸うと、世間に無き商賣を案じ、思ひ付きし時に、障子に「萬喧嘩の扱ひ致します」と書き付ければ、諸人不思議に思ひ買ひに行きて見るに、紙袋のはやり物を出して賣りける。

「何かわからぬ書附だ。」

「つまらぬ商賣もあるものだ。恠しからねえ。」

「是れは至極見た事もない物だ。」

五郎兵衞は喧嘩の種も思ふやうには賣れず、匆々店を仕舞ひ、又工夫したるが、豊成が百花鳥から思ひ付き、植木店を始めけり。内を意氣開に造り、表に評判木を植ゑ、其の外種變し木、浮木、背し木、籠か木、上輪書木、何と云ふ事なく、下に木の字の附きたる物を集め、色々と賣りけり。

「是れはきついとんだ靈寶だなう。」

「江の島の貝殻屛風に、斯う云ふ所もある。」

五郎兵衞は内で賣るばかりではいかぬと、方々の緣日に持つて歩き、塩谷に精出す。中で木の接穂さんや、三味線ひ木、草にも愛嬌、言草など、取り合はせ商賣する

「どうでも珍らしい植木だやの。」

植木店も篠に買手が無ければ、是れも仕舞つて鳥店を始めけり。唐頭鳥、座敷鳥、鹿島鳥、庖鳥、小紋鳥、小田原鳥、江戸鳥、握鳥、是れも何と云ふ事なく、とりと云ふ字とてうと云ふ字の附くものを、何でも籠へ入れて賣りけり。

「新店さうで御座ります。好い鳥が有るか知らぬ。」

「彼所の鳥屋で雀を買つて放しませう。」

「ふるいてうが有らば買ひたい。」

「取上げ婆々でござれるかの。」

鳥店もいけず、早速仕舞つて工夫しけるが、是れは何でも好からうと表を格子造りにして、「賣買詞」と看板を出して、買手が來れば、通な洒落た言を覺え次第に賣り、また當世流行る言葉などの方から賣りに行けば、相應に値段をして買ひけり。恐らく流行詞は何でもあります。

『子僧や、賣りたい言葉が有るが、買はつしやるか、聞きや。』

「あい〳〵。」

兎角浮世は通で暮さねば、諸事賣手にたんと有れど、買ひに行くものは十日に一人、二十日に一人。勤番の衆が、馬喰町から下ら買ひに來るばかりにて、商賣に成り兼ねければ是れも仕舞ひ、直に言質を取りけり。是れも剛れぬ事のみ、置く人ばかり有つて受手は更になし。

『とかく言葉質を取られては、十分有る理窟も言ひ込まれる。』

言葉の頭も買手が無ければ、賣藥屋となりて金看板に、「他人の飯は藥」と書き付け、壁には何だかわからぬ、蛙の繪を書いて、前にて賣り出でける。藥には色々な意見を粉にして賣りけり。

『今日は多分人が出て來た。』

「お前も女郎買ひの直る藥があるぞ、お飲みなさい。」

「今時その位の事で徒けるものか。渋いも甘いも知つて居ると、生中な意見を飲むと腹が下る。われもちつと飲め。」

此時また、馬鹿な意見を買ふ者とては一人も無く、藥も止めて浮世商賣が好からうと、煎じ茶店を出して、内へは藝者を抱へ、仲間入をして踊子屋になる。是れもほんの茶を飲ませ、ほんの踊子を出せば、隨分金がうん／＼と出来るなれど、例の變な案じにて、店へ寄る者には湯を飲ませる。客が膽を潰して聞きければ、「是れは當世流行りの人を茶にしたと云ふ事さ。」と、われは一ぱし思ひ付きの氣なれど、又藝者の仲間から嫌ひの日を言つて來れば、娘は出さず男に闘持を持たせて出しけり。中を見れば鰌がうや／＼と居る故、誰も側は寄らず肝を潰す。

「茶店の寄人も無ければ、藝者の雇手もなし。さういふ藝者が雇ひたければ、下屋敷へ言つて遣る。」

と、とんだ茶かいがある。「其様なしやつから爰い踊子舗つて何にするものだ。」と、是れも商賣にならず、漬物店を案じ付いて、出しけれど、久しい物奈良漬や守口は賣らず、只漬物には五文字附、紋づけ、大師の釋法附け、道中名所附け、そんなつけ物は本屋で賣る故、是れもやつはり不繁昌なり。

「百韻の附合があるか聞いて來い。」

何を仕て見ても行かず、まだしも始めの種子商賣が少し賣れければ、又種子店と思ひ付きて、今度

癪の種には、紋日の變替、寝道具、間違、御留守居の切れ文、放蕩の種には、芝居等の紅葉、御殿山の櫻、八幡の開帳等なり。

「癪の種かと思つたら、そんな物は入りやせん。私等が旦那も先刻、女からの文を持つて來て、私が癪の種を出させやす。」

今度の種子は前代未聞とも言はれず、近年に又富が流行つて萬人講と札を出し、人數三千五百人限り、御初穗一百疋と札を出して當日つきけるに、第一に七十兩百九十番を出しければ、人々大いに噂を致し、打ち寄ると此噂をなしける。

「これは案じては無くて、肩の筋だ。」

五郎兵衛は何に付けても損を取る故、今度も好き案じありしが、どううかとはかゝらず、大師様の御開帳を取めて見しには大きな札は、色々と相談の上にて始めけり。

それより五郎兵衛は方々へ札を掛け、其へ矢立を差して、「嫁やく〳〵聟やく〳〵。養子息子養子娘、養子お世話、御嫁入り、御聟入り、付け付き、馬鹿付き、何なりと望み次第」と呼んで歩きければ、人が皆を賴りけり。それにて見れば、「嫁の世話ならば好い案じ」と、江戸中大評判になりにけり。

「是は聞きなれぬ商賣です。」

「昨日帳面へ附けたが、お前樣の所へは至極で御座ります。歳は十七、至極素直な性質。家督は兄が有る故、弟を養子に遣りたいと望んで御座りました。日本橋の屋敷を一軒持參で御座ります。」
「お前の所のは男無しな御望みかい。どこでも男無しを望みます。」
「先づ先方へ相談して見て下され。」
「ハイ／＼畏まりました。」
五郎兵衛は飛んだ忙がしく、今度の商賣は至極勝手なり。毎日々々歩行きけるに、益繁昌しける。折ふし表を通りかゝりたる人呼んで相談する。「おらが若旦那樣だが、好い嫁があらば頼みます。」
「何も望みは無い、器量さへ佳ければ能う御座る。此方は屋敷が五十六軒あり、金が七萬兩、其の外詳しい事は話しますから、内へ御座れ。」
五郎兵衛はとんだ好き媒灼にかゝりて、今度は仕合なり。
「御嫁樣はさぞお嬉しからう。」
「おらも二百は丈夫だが。」
「殿樣もよい御容貌さうだ。」
「お孫さまも今の間ぢや。」

「何が出ようも知れぬ丸綿、といふはありさうな何ぢや。」
「丸綿取つた顔に日が降るとは、今夜の事ぢやなう。」
「やれ〳〵嬉しや〳〵。」
「千秋萬歳、御日出たう御座ります。」
五郎兵衛商賣何でも故式に變りしが、此の案じは日本一。今に大金が出來て、手代數多抱へ、呼んで歩かせ、其の身は隱居して、倅五郎兵衛に世を讓り、日出たき春を迎へける。

思ひ付いたり替つたり 五郎兵衛商賣 終

有通禮而 啌多鳫取帳

奈蒔野馬鹿人作
忍岡歌麿画

敍

此の草紙の大意は、鳫が飛べば石亀のたたたと云ふ類く、つひに神様の作はなけれども、鳫十が露苗を出すに倒て、鳫へしなみをころやうにと、ならば書作とに細事、まう御守神に、很の雲を思へ行かば本質ひこらしよ、嘻々のこ、嘲なしに、鳫首を下げて申し上げます。

奈蒔野馬乎人

昔に、爰は御蔵前町引出し所丁に、菊釜屋と云へる質屋あり。旦那殿は、忝いにも一割の利息をかけてあそばしけるへと庭る返さ、生身をなさしと辛苦へ主とし、手習を書かせて暮しけるゆゑ、又質下代なりけり、旦那殿にこれをまかせけるに、目利をせて道具質を取るの

ふ、正宗、利休の茶杓り、古近江三味線など、色々な物を持つて來りしが、元來こゝの家は、旦那が留守と云へば、番頭の金十郎は、目利と云ふ事はたゞ刀より外に知つた類のなき故、折角持つて來りし質物を持ち返すこと、おそふるに違なし。

「今日はたがやさんの三味線を持つて來たが、二十兩貸して下されこ」と口說く。

「どうやら、かみごまのあたりに疵があるやうだ。堅い絲卷だぞ。チヽンツ、チ、ミヽ、あら面白の春景色」「口で云ふ程には手がまはらず、そして魚と水とも久しいもんだ。小箱はさゝへ將棊もええ加減にしまうて、御茶持つてこい」「是れは私が所からで、藝者の三味線で御座りやす。何卒二十兩貸してくんなせえ」

「なんぼ鐵刀木だと云ひなすつても、旦那殿は留守なり、私はちつと許り米櫃をかじるぐらゐはすりやすが、道具の方はおさき眞闇、旦那の歸るまで一分持つて行きなさい。二日ばかりに二十兩、つかひ果して一分殘ると云ふもんだ。先度の檜狩繪も返しなせえ。たゝしつけかへかの」

「とはうもねえ、二十兩の質を一分とはあんまりつれない番頭さん、丈八は古いから、才三さんとでも云つたら二十兩貸さうか」と、上げたり下したりしてくどく。

金十郎はちよいと蒟蒻のつまみ食ひ、又は二挺の遊びの面白味より、土橋中丁は錢だけ悲しく、二

軒茶屋に何もかもせんにうち、銀杏やますやは江戸前の根元と覚えてより、ふと北の遊びへ誘はれ、掛屋町の伊勢屋と云ふ茶屋にて楽しみ、竹屋の歌菊と云へる突出しに馴染み、初會、うらの御定よりあり、「いつ来なんす。」が数重なり、互に末の事まで語し合ひしが、此の伊勢屋の喜八と云ふ者頼もしき奴にて、たとひ主がおいでなすつても、其の時は絲屋の娘ではねえが、店受は私で、御新造様は默様さ。」といふ。

「これ〳〵喜印、此の歳を断ち取つて、廿八文字のくりだし歩み、初會の客にしこなしは、ぶみかが先へはこたほん、朴と出いの賃くらべ、起請誓紙を背中にかき、どうだ鶴市もはだしでにげまきの助六、あんけら門平はどうだらう。」

「もし旦那え、二番で歌の助さんの云ひなんすには、いつそむら様は酔ひ潰れて寝て居なんすが、今背歸し申してはお心元なうありんす、留め申さうと云ひなんすが、さうしてもよおらうかね。金様ええかげんに騒ぎなんし。」

「二階の客人は引け時分に歸し申さにはいいに、何の酒でも買つて来て上げたがいいよ。金さんの道中は巻れが池の大蛇、一瓶や麥斗が昔を思ひ出します。」

「まア〳〵馬鹿らしいよ、道中の真似かえ。富士太郎があとさきになりいしたよ。二階に外の客人も

ありいす。ちつと靜かにしなんし、歌野や、久ねむおやねえか。」

「喜八さんよしなんし。重たくてなりいせん。」

「花魁も歌之助さんも、爰へ度々おちなんすから、松葉や言葉がうつりなんしたよ。」

金十は旦那の金で奢りちらし、中の町は人目多しと揚屋町で洒落しが、歌菊に登りつめ、鶏をむしやうに憎がり、鐘つき坊主を親の敵のやうに云ひしが、朝の歸りのすいがへりには、大門で「必ずまつ」の一聲が耳に殘り、聞かしてある井戸のきはの、道の惡い所へ來た時分、ころびしを、なんぞ忘れやァせんかと云はれ、かぶりを振りて人目を恥ぢれども、心の内では家のくめんを十面造つて案じ、十一面觀音へ願ひかけられず、七面だうなと投げやりの三寶になりけるも、皆女郎買ひのひやゐしなり。

「もし歌の助さまは、飛んだ御志もよく達引きも御座ります。手はよし歌はなさる、ほんに六藝とやらやつかいとやらが、揃ひやした。」

「向うの人々。早く來さつせえよ。」

「爰の家にも赤いべゝがいけえ事ある。こん夜はなぜか引ケが見えねえの。」

「あすの朝は、茶漬を食ひのすい歸りだぜ。今夜は大方、菊園の菊の井と云ふ名代らしい晩だ。」

「わるさする許りおつせんす。行燈にねだがきも、最う歸るも、古いやつねヽ」

「是またはあそこの格子先、面白さうに話してるさしやんしたと聞く時は、しみ〴〵腹もたつた由。」

金十は居續なとが度重なり、親方の衣のもうせんとなり、親なの親父甚だ腹をたち、古わんぼうに寝蓙一枚にて御拂箱の身となりしが、いつぞや喜八が、まさかの時はどうともして云ひし言葉にまかせ、料理番でもして見る氣になりしが、世にありしときに賞にとり、鐵刀木と云ふ三味線は高い物ならんとし、是れからたが屋を始めけるが、細手の内は日頃の腕のぬけたのや、四斗樽をさゝつて水桶にする位の事で、裏店住居して居るうち、揚屋町の喜八たのもしき奴にて、淺草竹町に表店を借りて、手桶をおびたゞしく仕込みける。

「ナニ、毒い毒な事だ。今までこの膳で食つたかはりに、是れからは御冷飯のだんだ。きん〳〵が過ぎたからあの通り。大通のしまひは、鈍通には劣つた者だ。」

「久しい物だが、頼風と云ふ身だね。蓙一ツで紙帳の別れ、己をせめる己が家、出ても行くここそ悲しけれだ。」

それより喜八が店受になり、竹町邊に店をかして桶屋を始め、今日は長屋振舞を始めしが、一ツ長屋の人々の其御は一通にて、おらは盡を竭さず果てゞ御馳みなお、達有もない迷い圖で、頭を韓か對する連に

凍り付いて居るのを、首をねぢつては取り／＼、腰へ付けて出ます。これを通ひで取りに行く故に鴈取帳と云ふをこしらへ、寒國舘で其の帳面を改めます。」金十是れを聞いて膽を潰し「なんとそれは取つて來て、安針町へ賣つてやると云ふ所はどうだらう。」「それもいゝがてんさ。どうぞ路金をこしらへて、鐘まうけに行きたいものだ。」

「今時の傾城に誠なしとはうそさ。爰も少しは有馬山、又喜八が諸事世話をしてくれの鐘と、洒落るも、ねつから冴えやせん。」

毎日たかやせのは、昔の奢りに引きかへて、カタリピシリして浮世を送りしが、いつぞや鴈の凍りついて居る話を聞き、家へは市に賣りだす備をまんと拵へんと、手間取を多くいれて、其の身は鴈の國へと趣きしは、話の種とぞなりにけるは、どうやら萬八のおつかぶせらしいしうちを、一はだ抜けて參ります

「此のたがをかけてしまつたら、柳行李を買つて來て鴈をしよしめに行きませう。もし取れぬ時はがんと云ふ話だ。」

金十鴈國の道行

「がんと打つ、鐘に怨みは多けれど、かりがねと云ふ名にほれて、嘘を筑紫の雪國へ、鴈取帳を取り

に行く、心のうちの慾心の、むこうに口はしやくれども、いつたいがんがまやなれば、本読む事も
たらさらし、きびらは高くおもへども、諸方の借金、がんぎやすりとせつかれて、どうぞ今度は、
頭をいくらもとらまへて、らく隠居をせんことゝおもひし、家へは手間を入れ仕事、あてども無しに旅へ
出る、とは大だわけ、人の手前をうりたがに、つるべた銭をまうけため、世間の鼻をさるほうと、
ながめて見んともひつゝ、旅の衣裳をいそぎたが、空がたむけて出でて行く、途の程こそうたて
けれ。」

「何だか飛んだ所へ来た。中たれはと云ふ所だ。是れより先に道もなく、穏光いはれに眼打ちかけと
云ふ風景だ。」

晩闇へ行きついて見た所が、左次兵衛が話にかゞはず、懐に指湊めついて居る故、雪の中をおし分
けおし分け前をおさへては晩へ添ふば、其の値たき事には挑相を膝へ付けたやうなり。扇共は人を見て
も飛ぶ事もならず、皆がみと云ふ目に逢ひしは、此の國まいぞ詰まれけた。

「ハーイハイすさまじい事だ。指がつとして居るが、どうやら狐が性び化すと云ふ仕打ではないか。
家職なにゝイイハ、困くはせうとも云はうが、前ゝゝく小便やくにはせうかた」

野暮大な風を目につけてしまつてたれとする時、東方しらゝ、かみ鼠色赤く朝日かゝ昇りしかば、

腰にはさみし輪の氷次第々々にとけて、うき八百羽の鴨が羽ばたきをすれば、鐵砲玉に輪をかけたるが如く、今十郎も一時に鴨と一しよに飛び行くありさま、其の昔松若は天狗にさらはれ、今十郎は雁にさらはれ、見ぬ國々を見下しあるくこそ、をかしけれ。

「鶴に乘つた仙人は見たが、鴨に乘つたは是れが始めてだ。定めて内ではおちでもしたと思うであらう」

見下せば、いきなふん國のありさまは、家に錢少なく、きやんこくくわんはその昔、こゝやまたと云ふうんつくは、途方も無き頭ゑしとかや、大通國には大やうに錢金たんまと撒きちらし、似た山のうぬさくら、ふみの使はされぬぶらまの由、女子の島には男なく、向島の如くなる粹者きあらしき所にて、船から客の上なる時、横濱へ逆へに出るが茶屋のやく、仲居と云ふとも仲に居ず、たいこと云ふとも音もなし、金次第にて兩利生あり。國々を、鴨と一所に飛び行き、とまりも知らぬ雲の上、雲をつかむと云ふ事も、かかる事をや云ふなるべし。

「目がまふが美しい事だ。扇屋の五明か蔦やのつき出しと云ふ身だ。どうぞこんな所へ落ちて見たいものだが、自由にならぬものだ。アヽ、久米の仙人になりたいものだ。通を失ふ通なしらず。仙人にもなられぬ。」

「お[illegible]ん見てつかせえ。アレが久米平内とやらいふ仙人かの。」
「おまへ[illegible]んだ事をおつせえす。それや久米の天人さ。」
「あれ見なんし、馬と一所に道中をしいす。人間のやうだね。あれが比翼の鳥とやらでありいせう。
どうか助兵衛さうに見えいすよ。」
金十も物を仕は木に飛びあるきし故、むしうち走りしたひ、腹が背へ付く程ひだるくなりし故、帯
は我を[illegible]にしたがひ、腹は[illegible]おそやくで、いゝ事なんぞと云ふ[illegible]でもせず、
[illegible]付行く時、金十は[illegible]なる馬の如くにて、[illegible]が[illegible]衣を頭にくれたれ[illegible]して、天人の國へまつさかさまに、
電光ごろくの世話もなく、雲のやぶれから落ちかゝりしは、久米の仙人一代の後見ともいふべし。
「さても[illegible]の[illegible]だ。久米の仙人は娘の白い脛を見て通力を失ふが、己は頭を見て失ふとは、世が末に
なれば、[illegible]も頭[illegible]ともいふものだ。」
さて天人國の名主殿の引窓から、[illegible]の上にある蓮臺の蓋の上へ落ちなしたが、娘や[illegible]の合ひもて遊び
になる。
「よく御覽じまし、豆人形とは大かた此の事で御座りやせう。」
「あんま[illegible]つぶされたやうにしやれ。」と、[illegible]ひたる[illegible]付の如く取扱ひける

「扨も大きな女だ。仁王の嫁御だらう。たゞしは奈良の大佛の娘か、釋迦ヶ嶽の花魁と云ふやうな事か。」

「あれ何かいひやすよ。」

それより、大人ども皆々より合ひ、「汝は何人なり。」と云ふ故、「我は大日本江戸生まれの者なるが、」と、鴻國へ來りしわけ、ならびに懐より、歌菊が文など出して見せければ、「その方が商賣は、何なり。」と問ひし時、「私はたがやなり。」と挨拶する。「そんなら手盥のたがを、かけてくれろ。」と頼む故、まう飯のたねにありつきぬ。「珍らしき人なり。」とて、大杯に酒をふるまふ。金十は僅の杯を兩手に取り、からだ中の力を出して漸う持ちあげ、半盞殘ししが、其の酒凡そ三升ばかり、肴は何か知らねども挾んでさしたるを、兩手にて俵を持つやうに肩へ上げて腰をのし、横の方からちつとづゝ食ひける。時に大人共は、歌菊がふみを見れば、こまかな上に小さくして見えず。依つて蟲目鏡に入れてこれを讀む。

「何だ、「ようも／＼せんしは格子におすゞませなされ、さみしく夜を明したり。」いやな奴だがいい手だ。歌菊と云ふはどんな女だか見たいものだ。」

「サア己にも見せたがいい。てめへばかり見ずと、ちつと見せごふみ。」

しつかりと持て〳〵。」「あいこはこれ程ではねえ。潰れます〳〵花さんが書いた浮む瀬の杯が随分大きいが、是れから見てはおはゝでもねえ。」

「己が所の手だらひも、ちつと小さいから大きくして貰はう。さし渡し八尺位あればいい。」

手だらひのたがをかけて見る所に、江戸の井戸側より十層倍も大きし。依つて色々にして櫻の木につるしあげ、段々とたがをかけしが、ふちのくみたが一ツに色々と工夫すれどもかゝらず、其の上酒は廻つてくる、それ〳〵と泣きだす故、大人どもはどつと笑ふ。其の時金上そばにありける大人の上箸をしばし借りに寄て、すでに拍子を始めける。

と う せ う 時

『首にうらみはおすく〳〵。御座る、初手に首を取る時は、しよぎやうむしやうにつかむなり。のちに摘みあす時は、ぜじやうめつたに飛びあるき、天上の鼠は腹もじやくめつるらく〳〵となり、大人國へどつたり落ちるぞはかなけれ。」

「何の事はねえ、にはかの獅子を舞ふやうだ。」

「チヽチツヽン、チツトン。」

「ドレお獅子とでかけしに身ぶりかの、鯉が燈心を使ふやうだ。』

さうしてゐる中たなが掛らぬ故、名主殿へ持參して、旦那寺を頼み密事をして居る時、不思議なるかな、聞たがあり〳〵たふが最期、其のはねたる首は庄屋が住居の如くなりしが、其のはねる先に金十郎は居合はせて、例の古襖の勢ひに、何處ともなくはね飛ばされ、「又ぞんな所へとぞ、八丈島へでも行けばいいが」と、おだをあひながら天道樣次第におつこちる工面をする。

「とんだ事とは大方こんな事だらう。

「一文凧の尾の切れたやうだ。」

金十郎ははねられたる勢ひに、いづくともなく飛びゆるき、淺草藏前通へ飛んで來て、やう〳〵己が家のよこの手桶の積み上げたる上に落ちかゝりし故、家内の手間とりぼとも、何事やらんと見しあれば、旦那どのなり。「是ればく、丁度よい時お歸り、明日は淺草の市なれば、當年にこしらへたおし手桶を殘らず賣り出さんに」と云はれて、金十郎もくだんの樣子を話し、大笑ひをして、夜も明けたれば手桶を運び出し、奥山せましと積みならべしに、吉原より來りしとて、たゞ一口に十二萬三千四百五十六の手桶を買ひ上げしは、臍のつぶれしことどもなれども、金十は金まうけした。あとでよく聞けば、「歌菊が喜八と言ひ合はせ、ぬしに金も遣られまいしこと、やつてのけたる逢引狂言。そのうちに金十は先生より呼びおどされ、元のごとく番頭かぶとなられ、歌菊が「年が明いたら女房にならうは

どに、頭へおよつこたりとも御聞で伝願無明、御者のためいとゝ工上ぶふとある国なやつと、目出たく御ノノけれ。

右蓮而也 多嶋坂藤

日本□□集

長生見度記

明誠堂喜三二作
戀川春町畫

序

遊人戀川春町が作られし無益委記をよみて、とろ〳〵とまどろみし夢の中に、末の人皇二萬三千三百三十三代にあたりて、いやましに治まれる御代のさまを見侍りしが、無益委記の趣に違ふ所なし。然して彼の書に漏れたる事もひとつふたつ見えて、又小細工しつ、これは長生して、見たる事をここに記したしと思ふまゝ、とりあへず長生見度記と題して。

喜三二

正月の二日ある年にて、娘の子は、十ね、様のこゝろみない、縫うて下されやといへば、息子は「か
ねて、直に記し紙かゝなとさけて、[illegible]

と、忘れて言ひかへたるかもしれぬ、一度に催促される
「アヽ、最う氣逆上がすいてきた、正月の五ッある時を待らやに」
「それでも正月の三ッある時といふ約束だものを。」
「三年の内に彼岸にあたるといふのは定業、あたらぬは非業の死といへども、與兵衛も藤六も、其の年の彼岸にあたらなければ、是れも證にきはまりしが、今では大きに心得違ひで、三年の内にあたる人は上戸、あたらぬは下戸と覺えたるも、をかし。彼岸にはあたらずに氣ぜはしく、別けて中日なればとて大いに張がり、其の時米の相場狂ふ。
「あすが中日なれば、己が家もこうばかりでもせずはなるまい。」
「さうでも彼岸のしるしで、わるいお日和でござります。」
「此の降りではひがんとも致し方がござりませぬ。」
托鉢の僧「雨やめたいぶつ、南無雨たいくつ。」
「三月出替りに、女の奉公人の切米、男より高し。」
「去年から居た所には、子供衆でもあつたのか。」
「ハイ若旦那さまとお孃さまがござりました。おはりかへしものは御指南を得ませうか、切米は左樣

二分いたゞきたうございます。」

番頭「おらが五六本切花を取れば、とうに折助が止めてしまふわ。ナ、女中衆はうらやましいだ。」

ほとゝぎすを飼鳥にして、時鳥會あり。

「昔は時鳥といふ鳥は、山にばかり居たものと見えて、古歌には兎角、山ほとゝぎすと詠んでござります。山では喰ひものに困つた事でございませう。」

「先づ籠の思召し付きがきついものだ。」

「てつぺんへ、籠をかけたかほとゝぎす、ナントどうだらうね。」

田舎があると兎角雨が降るゆゑ、雨の漏らぬやうに品を建てゝ、晴天二十日興行する。

「廻りは人情のうちの事さ。」

「今度の雨露が降け、むだなれたが株は此奴さ。」

端午の幟を座敷へ飾る。

「昔は幟といふものをあつたけにございますが、幟を聞くと野暮なものさ。」

「柏餅一の黒砂でも上りませう、妹もいつのはりたがるには困ります。」

菖蒲をかうて、見事幟といて大川へ大船をつけてございますし、趣味をはたらかして出しては迫る。

「けんばんたる後朝、中流にとゞまる。」

「何か賢い事を言ひ出したな。」

「ナニサ、吉原とお直はないか。」

「なければお識にしろ／＼。お銀にお仲では、こそ／＼話があり過ぎてうるさい。」

「高輪の海手へ新地が出來て、高輪の茶屋兩側と成り、向うがつかへて暗がる。」

「たかなわ茶屋の歸るさにはどうだ。」

「椎の木三本を付けねば受取られぬ。」

「ことしは二十六夜さまを拜み、神奈川の臺へ行きませう。」

女の石尊まゐり、男よりも多し。石尊さまのお山も、だん／＼木を伐りすかし、道巾廣く家建て込み、天狗の棲む所もなき程にて、美なる參詣數多なれば、鼻の高きに通を失ひ、杉の梢より落ちて鼻を打ち折り、羽ぶしを打ち折り、是非なく只の山伏と成りて紛らかせば、山伏は我が株を天狗に渡して素人と成る。

「ア、納太刀は重い。女が此のやうなものを擔いで行くのは、全體大なり村のなりわら細工だ。」

「アレ／＼、對うから吉原同者が見える。」

「おいらん、いつそくたびれんした」

七夕の色紙短冊を、百枚十文づゝにて書いて渡す。こよりを添へて穴もあけてよこすのを、こよりを通して渡すのが、三百枚通して五文づゝ。色紙短冊へ歌を書いて青竹へ結び付け、竈まで添へて賣り歩行く。

「七夕さまと皆が書いたのが、いかい事見える。何だか高い。」

「私の上げますのは、手蹟がようござります。」

「三枚書いたのを交ぜておくれ。」

「とてもの事に、皆書かないのにしなさい。」

此の短ざくのたか値は、すきがへしの半切にされるより、白い紙ときが値になるので、白い紙をたくさん出して、[illegible]紙や白い紙や、

八月になれば、月見と云ふものをやめて、吉原へ客のくることなし。十一日頃より十二日過ぎまでは、[illegible]を引いて待つなり。

「月見と云ふものは、なぜ喰物のないものだね。」

「[illegible]、[illegible]やなかいつも出やうに有るなら、嬉しからうね。」

深川洲崎の堤に休らふ、蘆荻に茶店かけ、富士筑波を求め障子をあけて、其のうち風を聞いて楽しむ

「あの水にうかびたれ、それそれと云ふ所がどうだらうおいら。」

「此の間に鹿寺へ鹿を聞きに参りませう。」

江戸に芭蕉の塚、三十三所程にふえて、俳人参詣する、御発句と云ふものに節をつけ、唱へながら歩く

「一番に牛島の雪見塚、いざさらば雪見にころぶところまで、とこそおはすまでエ。」

「三十三所あるくは、ありがたやすい秩父の開帳のやうに、芭蕉塚を一ッ所へ入れたのかね。」

諸国には其角塚と云ふが出来て、あまり照りつゞきで作の為に悪い時は、百姓此の塚に雨を祈れば、忽ち雨ふるとて、枕四ツにて拍子を取りながら、二人にていのる。

のつこに曰く「夕立や、田をみめぐりの神ならば、ふらしやんせぬと恨みおやと、明暮に思うて暮すえ。」

「金通なきを立た所が、一昨日片瀬へ立つたとだらうて来やした。日蓮の御難へ行くといるなら、今日江戸を歩けばええ、さつとは偉なやつだ。」

顔見世前の紋番附出づる。

江戸 若女形 中島三甫右衛門

江戸 敵役 岩井半四郎

「天幸が揚巻に助六は、篠塚浦右衛門、意休は半四郎だと云ふ事だ、此奴はきつとよからう。」

「狂言近年、顔見世と云ふと助六をするの、若衆形の由良之助にさしても藤蔵であらう。もし音八にさせるか。」

「市川門之助と云ふ道外は下りか。」

「あれは江戸から行つた、大谷廣右衛門と云つた若衆形のことさ。」

恐ながら土産の大小、並に春興のすり物を、年玉として差上ます。

「春興入を上げますか、いくら拙い所が御望みで御座ります。」

「こゝへ大小を百枚下されい。黒ひ付きは悪くても安いのがよいぞ。」
「大小を兼ねて両節に、直段がむつかしからうの。」
「名開きの摺物は新板だの、人のかへ名内、己も名を替へようかしらぬ。」
顔見世切落しから、陳皮買ひあるく、尻尾をつけて投げるなどは、とんとない事
『おこし蜜柑。』
「これちんぴよ。爰にもあるぞ。」
「五文よこせ。」
「あて事もねえ。一文々々。」
「今此の皮も賣るぞ。」
「蒟蒻の残りも買手があるとええ。」
一とおりの入りときては途方もない事さ。とおりと此方とでは、陳皮ばかりでも十貫目から上もかふと云ふ。お半長右衛門この方の入りだと云ひやす。』
師走鏡餅、五寸六寸ないし一尺、それ／＼にかぎり物、鹽物破魔弓羽子板をへていくら、田作ばかり二ツ添へていくらと、註文次第に取りそろへてやる。但し十二月朔日より歳暮の使をいだし、一千

月頭は喰ひ積みまでこしらへ、二十一日頃より年忘れの女郎買ひ初日。

『今年から惣領にはま弓はやめて、こんど生まれたのへ許りやるとさ。』

「此の頃はとんともう、年忘れ〳〵で、ろくに寐られねえ。今夜は[illegible]遣ひ、あすあたりからにせう。貴公は例のであらう。」

長生見度記 終

八代目桃太郎

吉河三蝶　畫作

昔々の桃太郎より、としどしの趣向にて、今は八代目の孫に桃八と云ふ者あり　六代目までは、かの小槌と隠蓑とい外色々の寶もて、何くらからぬと云ふ身上なりしが、七代目の[illegible]七と云へる者、しはんばうに大の字のつく男にて、強慾なりしかば、打出の小槌はかたく蔵に納め、蓑笠を引きずり出し、雨降りにはしよつて置き、日よりにはよいと[illegible]てあるき、先づ第一見得がいらず、奈良茶の喰逃げ年[illegible]、なんでも買ふと云ふ事なく、[illegible]しける故、みのは[illegible]切りて役にたたず、小槌[illegible]持たぬ[illegible]故、目のよる所へ玉の道理、かね[illegible]になりて、大黒[illegible]の小槌へ[illegible]込み[illegible]、[illegible]品なが[illegible]代物に[illegible]、誰にも知らずくらしけり。

「寶[illegible]の趣向[illegible]はい人だつた[illegible]打出の小槌を[illegible]、使へ[illegible]だ」

桃八は[illegible]夢にも知らず、寶は用にたたずとて、小槌と云ふ金蔵があればこ

つもりの物と、先づ土用ぼしをして、このくれからは打ち出して使ふ積りにて、近所の者をも呼んで見せければ「こいつを持つて貸元をしてみろ」と云ふ者もあり「己は田地を買つてひつこむ」と云ふ人もあり「是れを見ては、あくせく稼ぐはとんだ損だ」と羨ましがれば、桃八も乗りが来て、先づこゝろみに三百兩打ち出して、川一ぱいで中洲を振舞ふ約束で、そろ／＼とやらかして見た所が何の沙汰もなし。少しじれが来て、やみくもに打てども何にも出ぬ故、桃八は氣抜けのやうになり、長屋の衆も呆れはて「すゞみに出ぬは元つひきだが、一色ながらチヤアフウにして仕舞ふとは、飛んだ親父殿だ。借金を讓らぬがめつけ物だ」と云ふ。

隠れみのかくれ笠は用にたたず、打出の小槌はこめくらさへ出ぬやうになりければ、せん方もなく色々工夫して見た所が、商賣のおもひ付きなければ、またぞろ寶物と思へども、鬼ケ島は先祖の桃太郎にしてやられ、龍宮は俵藤太さまに先を越されたれば、落ちのくる趣向もあるまいし、いつそのこと死んで地獄はよからうが、生きて居て行くには餘程路銀もなくては叶はずと、少し邪なれどもぬけがらをおつはめる氣にて、さる御屋敷へはらひ物に出した所が「質に置いても一箱位は貸しさうな物」と、殿様は一萬兩でも二萬兩でも高いとは思召さねど、御家老衆の料簡で「彌出るか出ぬかをとくと吟味の上で、直段を定めて然るべし」と云ふ相談になり、先づ手附を百兩下さるとは、安い

やうで高いものなり。

『金はともあれ日本の寶ぢや』

「お金藏一ト戸前でも安いもの、出さへすればこつちの物だ」

「何に致せ、いくらでも下直なものと存じられます」

桃八思ふまゝに百兩と云ふ金が出來、よつほど古いがしめこの兎と喜び、五十兩でもよかつた。乃至十兩でも丸儲けと思ひ、尻のわれぬ內にとそこ／＼仕度して見た所が、地獄の道がいつかう知れず、西方を淨土と云へば、地獄は北の方でもあらうかとは思へども、當てずッぽうにも行かれず。是れには一番困り果てどうしたらよからうと、考へながらほく／＼とまどろむ夢に、不圖おもひ付いた事がある。寺方からは便りのない事もあるまいと、旦那寺で聞いて見た所が、さすがは和尙樣、飛んだおそろしい案じが出來「便りはないが地獄へ行くには、かうお町の井戸から行くがよからう」と云ふ相談になり「こいつはきつい者だ」といよ／＼きめた。

『あたまの上を天竺と云ふから地獄は地の下と見える』

一百三十六地獄の親玉閻魔王、御年七旬に過ぎ給ひしかば、政事を御子閻羅王に讓り給ひ、隱居し給ふ。當時の大王、御年若ければ兎角意氣なる事を好み給ひ、十王始め獄卒に至るまで、專ら通の一

字を守るべし。」との事にて、かりそめにも鹽の辛き物などは召上らず、これ閻魔鹽をなめたと云ふ事あるにや、頭からしほに、水をまぜたやうな物にて、ひたすら通を以て政事を取りたき思召しなれども、兎角御心にかなはずして、日を送り給ひけるも尤もなりし。爰へは通人と云ふものは決して來らず、みな野暮にしてけちな者ばかりなれば、見やう見眞似で、しんの旨味がのみ込めず、明暮これに御心を煮し給ふ。通人は諸事ぬけめのなき者なれば、地獄へは落ちぬ筈なり

『何ぞ意氣な案じが有りさうなものだ』

「鬼に金棒もあまり過ぎてつまりませぬから、金棒をやめの六尺棒などはええ所でござる。」

かくて、桃八は教への如く難なく地獄へつきて、例の如く一番荒事で見知らせんと、昔々の桃太郎が八代目の孫、桃八と云ふ者なりと名のれば、鬼ケ島の鬼ども地獄へ陷り、日雇となりて居たりし故、桃太郎が末孫と聞いて膽をつぶし、右のあらまし大王へ注進しければ、大王甚だ御歡びにて、「先づ第一生きた代物はめづらしく、其の上羽織のたけは長いと云へば定めて、日本の通人なるべし。諸事細畧のないやうにと、氣の張つた馳走にて、燒籠の評判や、「松葉やの花魁は飛んだ美しいと申しますの」と、先から味に取扱ふ故、桃八も如才なく、大通の氣持にて、とんだわかるふうに、「ざうつご」「あやまつた。」「ござえす。」「めえりやした。」の類をうつとしい程云ふ。

『今では君を一夜つかふから、君をぬくなぞと云ふ奴がいけぬ筈だ。』
いよ／＼地獄にて受けがよく、當分のうち閻魔となりて「何卒地獄中を通にしてくれろ」との事なれども、「娑婆にて心安い者も有れば、馴染の家へけいどうに行つたやうでどうにも爲にくいこと」て先づうしろゐと云ふ氣取りにて、貴物を取る事は忘れはて、何か無性に面白くなり、一ばいにしやれのめし、「まづ此の目はおしの更でを計り、淨玻璃の鏡はおいらんだ鏡にして穴の穴まですぐり、見る目かぐ鼻に、うさんくさい奴をかぎ出したり、見出したりし給へ」と、口から出まかせにこじつける。
『罪人さへ口むさくんまと云ふ地口が有つたが、あなたは通人さまのお閻魔だ。』
『夜番をついものだ。』
それより鬼八は、閣下のうしろ見として、地獄中を呼び出し、皆々罪科に行ひける。罪人多き其の中に、是は狙た出にして、極惡人の上を行く大惡人なりとて、めぐりの鬼共あらはれ出で、修羅の太鼓に現なく、しかる樽ふりたて追ひめぐり、其の身をこがす焦熱の、ほのほの責めに蝋の如く、腰も二重にかゞみ、五體は脊の違だらけ、鐵火の炎は目鼻をつきぬき、其の苦しみもたが／＼に。
『アヽ、せつない／＼。』
『さる樣には受取りにくい奴らだ。』

「私は女太夫に二百つかはしましたから、裏店でもよう御座りますから、極樂へ遣はされて下さりまし。」

さて其の次の役者には、是れも吾妻の榮華にて、女郎の著物を借りては殺し、はいではころし、多くい物をぶちころせし罪により、親はそばにて血の涙を、こぼせばぬからずすが蓑や、かくれ所もあらざれば、身にふりかゝる節句の仕舞ひに、紅絹の襦袢もかさぬきか、娑婆にては、いかうわかりやすかたと見えしも、冥土にしての苦しみは、かけとりと云ふ化鳥來つて戸をたゝき、賣金のつめを口說きたてられ、御しんを煮して酒飲まんとすれども、冥火の熱燗むせびて、是れも飲み得ぬは、飼鳥をころせしむくいかや。やァはァはァくるしい。

『四苦八苦のくるしみより、節句まへのくるしみが切ない。」

「まだ／＼西瓜の食らひ逃げもある。小ぎくばかりではすまさぬ。」

「うとうのかさのだんより、貸さぬ段になると一分もかさぬ。よこせ／＼。」

惡ずれにすれたる者ども、所々の女郎を殺せし罪深しといへども、ころしたり生かしたるする故、さしてひどい事もなければども、飛んだ手のあるこはい地獄へでつくはせれば、手管もするどき劍の山を登りつめればつき出され、又は起請の血の池にかきのめされて首だけはまる。

『ものまへに逃げるより、よつ程逃げにくい。』
「どつこい、逃すことは奈落の底だ。」
「こいつは手の有りさうな事だ。外を流していく事だ。」
これは、それにひきかへて大の野暮てんにて、金を殺せし罪に依り、縁の下の力持をいたさせ、手のない者を打つとぶ、通言を引いてうしろ手にしばり上げ、鐵杖にてむしやうやたらに打つなり。
『ならうと申します。』
「手のない方へ、あの鬼やまだいいと地口どころではない。」ア痛／＼。」
「切なくば通になれ。」
是れは箱入の上々吉の息子達にして、親の目を忍び萬事心にかなはず、たま／＼行く故一向のみこめず、大の野暮ゆゑどこへ行つても、ねたふりな事をして、息をころした報いにて、だまり團子を三づゝ食はせて、甚だひもじし。親の目をぬいて行くゆゑ、時々意見地獄へおちいる。
『無間地獄は飯が晝になるさうだが、いけん地獄は口がひるだ。』
丁八は一か八かやつて見た所が、羽なき里の蝙蝠にて至極よい鹽梅になり、ばくつうは心を改め、似たやまは半通に至り、半可は大通に登り、野暮は飛んだ解る人になり、息子は意氣と變じ、地獄中

がすごい物になりければ、大王を始め皆々見まはして、「この御禮には御珍らしいは有るまいが、芝居でも女郎でも、お望み次第だ。」と申しまする。

『鬼も角づきあひとて恐ろしいやうなれども、馴染んで見ればすんとよい物なり。鬼の目に涙と云ふも嘘ではねえと思ふ。」

「いやもう先生、きつい者で御座ります。」

「それその先生だけうつだ。」

閻王樣への御馳走として、南殿の珍座敷にて利休が手前で會席の料理すみ、それより小町を始めとして、「百人一首のやうでは御退屈」と、六歌撰の人々を集め、歌合があるやら、李伯が詩に羲之の席書き、古法眼探幽、唐畫で牧溪南蘋が席畫、それより芭蕉を始め、其角の門弟が出て俳諧をはり、唐土にては關羽孔明が三國志の直話、本朝の強者どもが手柄ばなしに時うつり、「是れではちつと堅すぎる。」と、島の千歳和歌の前に踊らせて、下谷の三人の姉樣達に、靜御前をまぜて下方を勤めさせ、それから座敷がくつろぎ出して、貴妃清紫に酌とらせ、よい御機嫌なと思へばすががきが聞え、高尾、小主水、小紫、揚巻、薄雲、玉菊なんど、新造の樣につきそひ、「芝居が見たうありんす。」と云へば、ちよん〳〵幕にて座もとが竹之丞、白猿五粒を座頭にして、そのほか中古の立者ども、ならう事なら

左仲と專助に書かして見たいと慾になり、やきもちがはりに金子一包ひきければ、是れさへ取れば、内へ歸つて目出たく市が榮えるばかりだ。其の上このやうな面白い事は、譬へ名でもどなたでも、地獄でなければ出來ぬことだと思ふ。

「こいつが罪者の論をいふか。なる程すごい者だ。」

「地獄に置くは惜しいものだね。」

咒八郎、まゝに榮華を極め、其の上百兩の金を貰ひ、娑婆へ歸つて目出たく市が榮えるつもりで、聲こひみすると思へば、夜明烏が告げわたり、娑婆の諸聞ゐる故、あたりを見れば住みなれし我が家にして、夢かと思へば面目もなし。されども馬鹿は道樂を始め、萬葉高尾に至るまで、誰もあくろへ吉されば、百兩貰つた金も無し。せうぎへでも夢だらうと思つて居る所へ、打出の小槌を賣り付けし藤兵衛來り、化りを為にはれしと見えて取手の役人來り、一昨日差し上げし小槌は贋物にせもの、濫り同類の大かたりめと撲ればれ打つ縛、塊八つくへと思ふに、ゆめならば冷汗になつて目のさめる筈だが、是ですめの行かぬ夢の事かと、ぶるぶるしながら引かれゆく。

「夢だ々その夢。」

「違背なさば、十手々々。」

最前桃六が所持の小槌の金は持たざる故、大黒様の小槌へ入れしこと全く桃八が業にあらず。親桃七が呑きより起りし事なれば、大黒様も不便に思召し、かの小槌へ元の如くに返し給ひしを誰知る者もなき故、桃八を呼び寄せ、手附に遣はせし百両を差し上げくだしことの幸、先非を悔いても今更せんかたなければ、一打のかれに、今一應吟味下さりましと云ふ故、かの小槌を取り出し、打てば不思議や小判、小粒、南鐐まで出づる故みな〳〵膽を潰し、桃八も不審はれず、大黒様のなさつた事とは誰も知らねば、これは不思議だ〳〵と云ふ故、桃八はいさゝか生きた心地になり、此の様に出ると知つたら賣らずに置けばよかつたと思ふ。

それより打出の小槌より、金銀望みの如く出づる故、殿様始め大よろこび、御褒美と云つてみた所が打出の小槌の價が知れず、いく萬兩でも高くはないものなれども、其のやうにもやられず、むかし大通天王の御字に、太魚公のせんりうせ川へ下されし例を引き、桃八は百八とも書けば、百八兩なれども、餘り少ない故一を百兩あてにして、一萬八百兩下されける。是れが夢では何にもならぬと、よくよく思ひ廻せば、地獄へ行つたも夢、百兩貰つたもゆめなれども、取手の來た所で夢はさめて仕舞ひ、一萬八百兩の御褒美は、眞の事にて大分限となりける。大黒天は、かげの御骨折にて桃八も知らず、御屋敷でも大黒天の御かけとは知らぬゆゑ、桃八へ始終のわけあひを告げ給ふ。

桃八富貴になりし事も、ひとへに大黒天の御かげと、信心怠らず。いよ／＼家富み榮え、甲子には大ふるまひにて近所の者を呼び、ゆめに見た通り、地獄も通なれば、ごまを願ふは大のむだ、兎角通になり給へ。かくまで通り行はるゝも、いやまして治まれる御代の有難きことと、日用たく一期榮えける。

畫々花似當年積面　八代目桃太郎　終

漢國無體 此奴和日本

四方山人作
北尾政美畫

唐土揚子江の江の河岸に大きなる鹽屋あり、名を鹽治といふ。一人の子をもてり、鹽秀才と名付く。日本で鹽賣と云つちやア、けちな鍋々の商賣なれど、唐は海が遠いから、魚と鹽は不自由なり。故に鹽商と來ては大の分限なり、と、或學者の直話なり。よもやまんじやう嘘い議論ではあるまい。

若い鹽文瑞、お雛子の丁稚鏡童。

「ドリヤ、五月の菖蒲劔で切つてやらうか。」

「ハテ〳〵強いぞ〳〵。日本の公平、此方の關羽、張飛なんど」

鹽秀才は唐にて手習ひをしたがりしが、唐様の王羲之流や、文徴明の書様は面白からずと、鹽商思ひ付きにて、紀氏國の東涯先生の手様をならはせける。

物ずき前は高島甚兵衞、又は蓮池なき町の類、或は小法師早栄活壷軒にて、大奉

書小奉書、大高、小高の紙へ、いろはの草書を席書する、印は小兒山ほり、水牛の肉地なり。

書籍は、明州の地へ賴み置きて、日本紀、今川、萬葉集、源氏、平家の物語、新渡の繪草紙、顏見世評判記まで、封の切らぬを取りよせる。

天の浮橋の鶺鴒の羽を指し、瀨戸物布袋の水入を置いたる卓子、下に海酸漿とは、うがつた〱。

平常手紙の半切も、中々唐紙などは使はず、日向半切ねずみ半切などは、面白いとて使ふ。

「假面は壺屋が筆意、大津繪は土佐と見えます。」

「見事々々。」

「唐繪とちがつて、又和繪は格別なものだ。」

兎角唐人は夜が明けたら、詩を作らう／＼とて詩ばかり作つても、詩人は居ながら名所も知らず、何の役にたたぬもの、又連句の五十韻や百韻まいた所が、李白の杜子美のと云ふやうな宗匠は無く、于林の蘐徵のといふ點取宗匠にて幇間同然、唐詩選さへ絶句ばかり覺え、石摺の摺物ばかりして面くろからずと、ずつと氣を替へ、和歌を讀んで見んと、其の頃和學者と呼ばれたる、柿本の紀僧正といふ歌讀の弟子となる。

柿本人丸の、明石の浦の文臺、緣に打つたる竹は、人丸の筆の軸なり。

門が黒木の鳥居のうつし、垣根は宮城野の萩垣なり。

「今日が月次の會と見えて、今日といふ札などはきつい日本々々。」

豐秀は何も器用なりしが、物に厭きる性にて詩も歌も面白からず、和歌よりは長歌を習はんと、二十四橋の見附前、富本豐前太夫が弟子、豐光童子、豐松童子、豐菊童子といへる三人の童子を呼ぶ。三人の小女を呼びて、二三日がはりの道行をはじめて聞く。

時に日本の大通歸來つて曰く、「今日本で野暮な侍がうたをうたふ。兎角河東でなければさえぬ。」と云へば、いそぎ蘭洲の人マスミ、源四郎の人ヤッヒンコンと云へる唐人を呼びて、河東の一曲を學ぶ。

「上、河東に行幸して、しやんと小樓を取り、ゑんなゑに趣く、とん〱とんがらし。チンツン。」

來る寒食の日、洞庭湖の池の端、學養樓にて活花の會あり。晴雨とも御來駕下されべく候と摺物を廻し、我が國の袁宏道流ではさえぬと、日本ではやると聞き、千葉之介常胤流とやらを興行する。

「古渡の古き灰吹に中州煙草の葉などは、わびたものだ。」

「吉原揚屋町の湯屋の八ケ間燈に、燈心と紬の梅を一枝いける。」

「備前擂鉢に朝倉山椒の花、ねじめに雜司ヶ谷で買つた踏の臺。」

「又先生は格別にて、道成寺の釣鐘に飛鳥山の櫻を活けられたり。皆々龍頭に手をかけ、とんだかんしんかんしん。」

「あの便器の類に藤の花を書いたが御座るが、薄手でよい物で御座る。」

「活けたのは生姜で御座らうかの。」

「是れは今日本で專ら流行る盆石とて、砂で文字をかくさ。くちんないらうしやぐわんく。」

日本料理の茶屋、四人詰銅板一枚づゝにて、大きな寺の瓦の施主につくやうなこと、唐の料理と違ひ、吸物一椀菜丼茶碗菜などとて、氣がかはつて面白いとて、浮氣の唐人ども無性におごる。

又けんちん屋とて、なますのけんの魯國の生姜を、阿蘭陀のちやんで煉つたもの、何か味さうな物だが、日本人の腹と違つて、唐人の腹には合はず。

書狀さして柱かくしとおぼえてかけ置く。

島田金谷で、なますを盛りし皿に鰹のさし身。

「鰹のさし身はいゝ値の事だ。パアく。」

當世はやる唐詩選に曰く、元服娼門に遊ぶと云々。

此の娼門とは大門の事なり。

唐の色里は、長安の都の北にあたりて一の郭あり、土手を唐土堤と云ひ、坂を元服坂といふ。爰にて元服の衣紋をつくろふ所なり。

[illegible]秀才日々闕門に遊び、青樓に上る。此の所を五十歩道、孟子にいはゆる五十歩百歩の違ひとは、に慈恩寺前と觀音の方の事か知らん。

京都街第一條とは、江戸町一丁目と云ふ様な所なり。

[illegible]北の坂を平樂館といふ、一名耕書堂。

後の青樓の郭中にて、仲の丁とも云ふべき所を中丁といふ。茶屋のかはりに茶屋とて兩側に立てならべ、珠簾にたれば、玉のすだれをかゝげて宴會の酒盛あり。

[illegible]中庭の楽園にて、[illegible]の花[illegible]仙たる人を見[illegible]。

[illegible]日にて、此の節句であやかる葺く軒の菖蒲、二度の月とは、我が日本の郭の紋日、唐土にては、中秋とて十五夜の月見はあれども、八朔と十三夜の月見は昔から無い風俗なれば、客の[illegible]によろしと思へば、十三夜を[illegible]といふ大紋日をもて、[illegible]の頭痛鉢卷、よく〳〵聞けば馬鹿らしい世の、正月とやらでありんすとしかいふ。

艶大尽には、日夜のおごりに身代はすかんぴんとなりければ、兩親大きに怒りをなし[illegible]へ四角な

字で付けられ、暫く燕趙引かぬ氣の親分の家をあるじとせしが、爰にも長くは居られず、せん方なくて毛氈一枚かぶり、明州の津より後に乘りて、海上に浮びける。

日頃日本の事を慕ひて、諸事日本風なりしかば、直に千座が沖へ志してたゞよひし所、例の住吉大明神は、白樂天が來た時さへ筆談にてやり込めし神なれば、稻荷町の毛唐人には引つ立てに出るも勿體ないくらゐ。然れども此の唐人まちがひだらけにもせよ、假りにも日本の風を慕ふと聞けば、満更見ぬふりもなるまいと、和光同塵のやはらか味にて御意見ある。

爰に日本平戸の島に、和藤内がおとしだね、王藤内が再從弟にて、すんど心のやはらかな加藤内といふ男子あり、臺灣の軍破れしより、福王と云へる大明の若殿も韃靼へ降參して、芥子坊主になり給ひしかば、最早世に望みなく、故郷の平戸に亂をさけて、陶器を燒きて世を渡る。

鹽秀才は日本にて、住吉大明神のかた親仁に、したゝか意見をされしびれを切らし、是非なく元の舟にのり立ち歸らんとする時、俄に風が替つて此の島の加藤内がかたに居候となり、共々燒物の手傳ひなどして三年を爰に須磨の浦、行平ならぬ平戸の島の侘住居。されど加藤内頼もしき者にて、卜錦手の陶器にかこ付けて意見を加へ、折もあらば、親里へ勘當の詫びしてやらんと思ひける。

『これ此の茶椀を卜錦出といふ。卜錦とは卜の錦と書く、唐人どのに文字の講釋は釋迦に心經だが、

十でたうとう錦を著て、故郷へ歸る分別をおしやれ。」

「其方では分るかも知らぬが、こんなつまらぬ意見も無いものだ。」

「鶴吉が品玉のやうだが、左樣な卑劣な者ぢや御座らぬ。」

「諾、吾正に歸らんとす。」

鹽秀才はさすが唐子ほどありて、加藤内が意見を頭の上を通しもさせず、眞向に受けて身持堅氣となりしかば、親父鹽商よろこびなゝめならず。鹽秀才がなじみの來仙夫人を身受して、今日婚禮の御祝儀日出たいといふ所なり。

日本なれば、相に相生の松こそとうたふ場なれど、唐人なれば、ししきがんかうがかいれいにうきうといふ。

漢國無禮此奴和日本 終

御手料理
御知而已

大悲千録本

芝全交作

北尾政演畫

千手觀音ともいふべき佛も、不景氣と來てはミヅコトのないもので、アヽ傷はしや千本の御手を、安く損料にて貸し出さんとの御評願と聞くより、大寺代地に住居する面の皮屋干兵衛といふ山師、早速觀音さまの御堂へ出掛けて行く

「ここ、觀音菩薩、このたび千の御手を貸し出さるゝといふ事を承りましたが、どうぞ私一手に殘らずお貸し渡し下さい。其の替り一本を一兩づゝと定め、千本にて金子千兩で拜借いたします」

と様々にとり込み、たうとう千兩の手切金を出して、ことごとく切り拂ふ事とはなしぬ

「かはきの三本こたへたらさぞ痛くも有るまい。わるい手が有つても、たき直しはなしだよ」

「こちらの方は大そう手こずりました」

いよ／＼千手の御手を、面のかは屋で損料貸しをするといふと聞くより、先づ薩摩守忠度を先陣として、

茨木童子、人形芝居の捕手、てんほう正宗、手のたい女郎、無筆者、三味線の彈きならひ、その外手の入用のある者は、貴賤上下おしなべて皆、借りざるものこそなかりける。

『ますかけ筋のあるのは、一割がた高う御座る。』

「拙者の姓名をあらはに、帳面へお記しの儀は御容赦に預りたい。御存じの通りかり人知れずとおしるし下され。」

「しなびて落ちたは誰にやろ彼にやろ、いとしいもんのにやりまアしよ、との御誓言。』

大悲の御手は、澤庵漬の大根のやうに繩で吊してある。

面の皮屋の千兵衛も、中々二本の手では手廻り兼ねる所より、奉公人手々入所へ頼み、作頭手代小僧まで抱へて手の上げ下げをさせ、帳場にはてれめん貞兵衛といふ手代を置いて帳を付けさせるが、譬へに云ふ通り、手はあれば有りしたがひ、是れでも主人の千兵衛は、手ン手コ舞で騷いで居る。

一　鳥渡かし　代三十二文
一　一日一夜　代銀三匁
一　一ケ月　代金二兩
一　一年切　代金拾兩

一　佛の御手に御座候間、千手觀音御つぶしの儀は御容赦の事。

一　御祝儀御貰ひなされ候儀、貸方に於ては一切かまひ申さず候へども、其の儘御懷中にて御握りつめは、大悲の誓ひにも洩れ候儀に付、相當の御施行なさるべく候事。

一　御心中などに御用ゐ遊ばされ、指一本たりとも不足致し候節は、決して受取り申しまじく候事、

右の通り相定め申し候以上。

月　日　　　十七夜講中

茨木童子は觀音の手を借り込んでは來たが、毛が無くてはどうも鬼の腕のやうでないが、何としたものかと考へて、ヤッと思ひ出したは神田の臺に居る與吉がこと。渠は木偶に毛を植ゑるのが巧みだから、奴に賴んだら工夫が有らうと、彼の觀音の御手をそつと袂へ入れ、與吉の宅へ出かけて行き、植毛の事を賴むと、流石は男を磨く神田の與吉、「ようごぜえやす」と受け込み、僅か三日間で、テモ怖ろしい鬼の腕に仕上げたは、中々によい腕なり。

然し、どこやらに優しい所のあるは不審しと、よく／＼聞いて見れば、「それも道理、此の節は猫の毛が拂底ゆゑ鹿の毛を植ゑました。猫の毛ならば愛宕山、鹿の毛なれば春日さんまでお出でなさい。」

というた。

さて又薩摩守忠度も、彼の觀音の手を借り込んでは來たが、源平須磨の戰ひにて、六彌太に切り落されたは右の腕なり。それをどうあわてたか、左の腕を借りて來たから、サア偶のさゞなみやの歌を短冊へ書いて見るが、どうしても左文字にしか出來ず、「是れは飛んだ事をした。」と損料屋へ持つて行き、「右の手と取替へてくれろ。」と掛合つたが、最早右も左も殘らず貸し切つてないとの事。忠度今は叶はじと思召され、左の御手の續くだけ、無闇やたらにむだ書きをなし給ひ、書畫屋へお下渡しになれど、左文字のゆゑ書畫屋でも大きに手コズリ、後にはなんまみだぶつ〳〵で、何處でも是れをおそれけるとぞ。

「外聞がわるいから、是れも又よみ人知れずとやつて置かうか。それにつけても六彌太奴に切られた腕はモウしなびたか知らん。」

手のない女郎は千手の御手を借り込んでからといふものは、客を操す事は巧者になつたが、悲しい事に損料借りの手なれば、朝になるとフリの客の勘定でも取る樣に、眠さうな顏をした禿が來て、

『おいらん手を取りにきいしたよ。』

と、客の前も憚らずに持つて行くので、もし客が居つゞけをすると云つても、肝腎の手を用ゐる事が

出來ず、元の通りに面白くない女郎に成つて仕舞ふので困る」ト云つて一月切を借りても、お茶を引いて居ては引合つた話ではなし、是れには隨分當惑したが、遂に一割引の相談で一月切を借り込み、苦しい年季を増すものもあるとさ。ヲヤばからしうさんすねえ。

「此の子は客人の見てゐさつしやるに氣のつかねえ。禿と云ふものはお手がなつたら、銚子と悟るもんだよ。」

「それでもとりに來いしたものを。」

「お手が無いなら銚子とさとるかね」

「無骨な奴は、どうぞして書状の、請書の類をすら／＼と書いて、世間で笑つた奴を見返してやらうと、千手の御手を借り込んで來て、高慢な面を張り通し、友達の前で見れ見よがしに筆を取り手紙を書けど、元が觀音の御手なれば無筆には自由に遣へず、書いても／＼梵字ばかり出來て、一ツも通用の文字は出來ず、此奴は馬鹿げた事だと思つたが、「此のまゝ返すもつまらねえ」と、吝い奴の料簡は又格別なもので、其の手の爪の先へ火をともして蠟燭の代りにする」是れ手習の始めなりと云ふも久しいやつサ。

「梵字と書状と取違へ、今にも用事と云つたらば、梵字で書状が書かれうか、變的なへたいきよ」

「あついよう〳〵。」

「ハテやかましい、蠟燭だ。」

其の頃勢州鈴鹿山に鬼神住んで、國土の民をなやますとの取沙汰、都に聞えければ、田村丸に退治せよとの宣旨下りける故、御受けはなしたれども、大勢で退治ては手柄にならぬ、どうか一人占めにやらかしたいものだと、色々工夫をしてやつと考へ付いたは、千手の御手觀音へも暫く無沙汰をして居るから、少し舞臺も高いが、今度の一件にはどうしても千手の御手がなくては、一度放せば千の矢先といふ狂言が出來ねえから、何しろ往つて來ようと、賽錢つかんで出で行きけり。

田村丸は觀音の御堂を訪れ、鬼神退治の事を段々はなした所、觀音もなか〳〵男氣な佛にて、

「實は私も不如意で困つたから、面の皮屋の千兵衛といふ者に殘らず貸し出して、コレ此の通り人目には二本あると見せて、其の實はこしらへものさ。併しそこ許が困るといふのを默つて見ても居られないから、取り集めてお貸し申さう。」

と早速千兵衛の許へいうて遣つて、手を取り寄せ改めて見ると、女郎へ貸したのは指がなくなり、握拳で返つたのは、喧嘩でもしたか疵が出來て居る。鹽屋へ貸したのは鹽辛く、紺屋へ貸したは青くなり、下女へ貸したは糠味噌臭し。飴屋のはネバ〳〵する、飯焚きのは凍瘡だらけ、舂屋へ貸したは豆

だらけ。皆少しづゝ損所が出來たが、員は千本整うたり。

觀音は、千兵衛に貸したる御手をとりよせたまひ、田村丸に貸して又まうける。

田村丸は千本の手を借り込んで、いよ／＼鈴鹿山へ出立の事に極ると、その日は觀音も見送りに來て、驛の棒鼻で別れる時、觀音は言葉を改め、

「ナニ田村丸どの、御身鈴鹿の鬼神を首尾能く退治召されたなら、損料をつけ、千本の手を必ず此方へてお返しあれ。」

「いふにや及ぶ、大望成就した上では、兩に八本の損料を以て、御手を千本お返し申さん。」

「先づそれまでは田村どの。」

「觀音薩埵。」

「さらば――手手てん／＼／＼／＼ててててててん／＼手手手手手手手手手手手手手手手手手手手手手てててててててててててててててててててててててててん。」

「ハテ此の手の字があの字なら、藥師どのへ進ぜたいものぢやが。」

御手料理御知而已　大悲千錄本　終

顛廻能名代家 莫切自根金生木

唐来三和作

千代女畫

此業に貧の病あり、持つたが病あり、金が敵といふ側から、たつた三百兩とは、此奴有り難いと感心して餘りあれども、算用しては不足だらけ、そこの所は人我々に、おれが汝か、われが己か、どちらへ張つたら奥勘平、何が難波のあし早く、かせぐに追ひ付く貧乏ものに、足る事を教へんと、一寸一部の此の草紙は、友人唐来三和が、かはらぬ春の出放題なる事を、口から上にあやなすのみ。

和光同人

爰に御存じの金を先生の文箱に、萬々先生といふものあり。七珍萬寶藏に滿ちくて、代々榮耀にくらしけるが、ものごと自由に手の廻るが頻りにうるさく、一生に一日なりとも貧乏せば、今の思ひはある

まいと、家に傳はる名作の大黒を引きずり退けて、貧乏神の畫像を主として、暦の内の大の惡日を撰日として信心なしけるが、一向に其の奇特も見えざれば、なほ色々と工夫をめぐらし、何でもやたらに貸付けて、世上の人に無沙汰をさせたならば、金藏も寛がしたと、貸金接待の高札を門口に建てて、委細構はず來る人ごとに貸し出したれど、棚落時分の如く、借人の人々は濟まされども、金藏は百分の一も明かず。

『おんぼろ〳〵、びんばふなりたや、そわか。』

「御返濟のあてなきやつに、所詮お貸し申す事は出來ませぬ。」

「さやう申すからはお返し申すやうな人外な事は致しませぬ。」

「隨分申しふらして、横着な借人をよこしませう。」

是れではならぬと又々工夫を凝らして、昔よりの金持の紙衣姿になるは傾城買ひに如かずと、俄に青樓遊びと志し、外面は立派で内幕は苦しい、慾の深さうな花魁を見立てて、初會から山吹を降らし、三百六十日に閏月を添へての揚詰め、城の落つるを樂しみけるが、初會の入目から約束、三會目の床花、觀音の奉納もの、紋日の節句や菖蒲ふく軒の提灯、二度の月と詠めながら、是れでは餘程いきつきさうなものと思ひの外、益に外れ大金を遣ふ故、尻でも來ようかと内所から指圖して、蒔き散らした

金を取りあつめ、譯も無いことをグチ／＼いうて、殘らず萬々に返したわ。
「旦那は意氣な御方のやうでもないね。今夜の所はチャンと言つてお歸りなさいやし。」
「歸れなら歸りもしようが、金を返されては難儀だ。」
「私どもは頂きたいことは山々で御座りやすが、此樣にお貰ひ申しやすと、内所でやかましう御座りやす。」
女郎屋の仕打にグッと驚いて、夜の明くるを待ち兼ね、歸る途中より懷に手を入れば、前に來りし人の忘れしと見えて、四五百兩も財布に金のある樣子、のつたた目をさいても、是れも又後の付けられはせぬかと、定めの所より下りて揚錢を遣る。
「旦那、下されねえやうにお願へ申せ。」
「私どもは花錢を取りやすから、酒代などを頂きやしては實利が惡う御座りやす。」
「それでも手前來てる時に、酒代はやるとさわいだぢやねえか。」
江戸者を譯のわからぬ奴と、後から最前の屑錢の中に有りし金を持つて追つかけ來り、無理無體に押し付ける。
「それはさうと己は知らねえのだ。人に云ひかけをするとは細い奴だ。」

と云つたのが餓鬼の氣に障り、

「細いとは何の事だ。正直な事を云へば人がこはがるかと思やがるか。」

と二人がゝりで手込になし、財布を首へ巻き付けて、一恰悧野郎め」と惡口たらたら、元来し路へ急ぎ行きぬ。萬々も仕方なく、其の金を持つて我が家へ歸り、金の減らぬを苦にして居たが、今年は世の中も穀がこうなれば、澤山米の買置きをして、下りを見て賣り拂ひ損をせんと思ひ付き、手代どもへ云付けて、諸國の米を買はせけり。

「常陸や磐城の水ある交りを、兩に五升で買ひおきました。」

する程の事が間違ひ、萬々はホトホトと弱り、此の上は盗人に取らせるより外に手段は無いと、藏より金を取り出し、家を開放しにして、夫婦はもちろん手代下男下女に至るまで、何處とも無く出で行きけり。

「出這入りの不自由に無いやうに、扶壁をば大きく切りやれ。そして金は取りよいやうに纏めて置くがいい。」

「まんまと盗人が来ればいいが。」

「是れをしまつたら、盗賊除けの守をひつはなして置かうぞ。」

「間が有るなら、荷ごしらへをしてかつがへやうにするといゝ」
「金藏の道々へは、まき散らし置きました。」
「匂ひをかぎ〳〵、盜人が這入るで御座らう」
二三日たちて、最う盜人の入つた頃と歸つて見れば、案の如く盜人おほぜい入りはひりしが、餘りの大金の爲持ち出す工夫や荷拵へに手間どり、夜もほの〴〵と明ければ、取る事は置いて、餘所にて盜みし金銀衣類道具も持つて出にくく歳ゆると見えて、夫婦が歸りし聲を聞くより、身一つをやうやうに、こそ〳〵として逃げ行きけり。
どうしても、思ふ樣に金がへらねば、又々思案を廻らし、京大坂から大和巡りと出かけ、道々も費えを拵へ、一日に二三里位づゝ、ぶらり〳〵として八日目に藤澤へ著き、よき序なればこれより江の島へ參詣し、又もや使ふ趣向を思ひ付き、漁師共に捕ひの舟を頼みて著せ、地引をさせしに、案の外にて、海底にすてたる金銀、魚に變りて網に上りける故、心ならずも又金がふえて困りける。
『此の景色は日本だ、しかし何だかいやな光がさすぜ。又エテ物では無からうか。』
「もしあれが金なら、江の島金藏と名付けて藏を建てて、入れて置くがよう御座りませう」
夏に二日醉ひの、きき用をも止めければ、暫く箱根に逗留の內、いよ〳〵夫婦風車となりける

『此の樣子では、先頃買ひ置きし米が上りはせぬか。』
と心配の所へ、手代一人江戸より來り、
『旦那さま大變な事が出來ました。此の蓮陰で米の直が滅相上りました故、賣るまいと存じて居つた所へ、イヤモウ諸方より買人が參り、無法にも藏の米を持ち出し、多くの金銀をたゝき付けて參るので、私どもは手出しも出來ませず、たうとう又儲けさせられました。』
「ヤレ〳〵、とんでもねえ事だ。』
と、萬々は大ふさぎにふさぎけるこそ、氣の毒なれ。
是れでは所詮一通りや二通りの事では金も減るまいと、楠直傳といふ智慧を振ひ、三保の松原の松を掘らせ、江戸まで持ち込ませたら、其の運賃かれこれの入用では、少しやそつと金もなくなりさうなものと、大勢の請負人を集めて成るたけ高く積らせ、翌日早朝より金にあかして地を買ひ込み、人をかけて數多の松を掘らせければ、松の根方より石櫃一個を掘り出したり。
『此の中は何であらうか。所だけに若しや天人の羽衣ではあるまいか、羽衣ならばそれを著て天へ登り、少し樂をしたいものだ。』
と、蓋を明けて見ると殘らず金銀ゆゑに、アッと言ひつゝ腰がぬける。

「四百四病のやまひより、金ほどつらいものは無い。」

「ホンニ金のあるのは、首のあるに劣ります。」

「まだ〳〵こんな石櫃が、五六十も御座ります。」

さて萬々は腰がぬけたを幸ひ、金をかけて養生をせんと思ひしに、間のいい時は間のいいもので、一夜の内にケロ〳〵となりければ、もはや我が運も是れまでなりと觀念して我が家へ立ち歸り、チト古けれど金銀先生の先格の通り、藏の金銀殘らず取り出し海中へ捨てさせ、今は心にかゝる山の端もなしと喜ぶをりから、捨てたる金銀一塊と成りて空中へ飛びあがる。此の勢ひに引かれて世界中の金銀一所に集まり、萬々が金藏をさして飛び來るは、目も當てられぬ狀態にて、家内の者を一同家の棟へ上げて、飛び來る金玉を防がせたり。

捨てたる金銀は、世間の金と一つになつて戾りければ、今は内にも立ち切れず、夫婦もろ共出奔して、野山も分けず歩行きし所へ、先に萬々に金を借りたる人々今は金持となり、借りたる金に利をそへて持ち來り、「是非受取つてくれろ」と、たつて上りに成つて押し付けるので、女房は色々と斷りを云ひけれど一向に聞き入れず、「ホンニ金持の女房になる程つらいことは無い。」と、さめ〴〵と泣きけるは、實に道理とこそ思はれける。

其のゝち夫婦は心を改め、我が家へ歸りは歸つたれど、金で居所の無き程になりて、目出たく迎ふ初春の、古い趣向もお笑ひくさざうしと、御はつゟ。

順廻能名代家 莫切自根金生木 終

元利安賣鋸商内

戀川好町作

歌麿門人 千代女畫

昔々とはあんまり萬八、當時御子様がたも御存じの、戀川はる町の門人品川さる町とて、人並には三本足らぬ戲作者あり。人の笑ふもるさい構はず、伊皿子の草庵に引き籠り、初春の新版ものなんぞ珍らしい趣向をと案じて見るに、草雙紙は諸事ゆめの事だと思ひ付き、節季師走の忙がしいに、點燈前から寐て見れども、何うもおもしろい夢は見られず、宙を飛んだり追ひ懸けられたり、うなされる許りなれば、是れではいかぬと淺草の並木へかけ出し、喜三二の出店にて、二冊ものだけの夢を買つて來る。

主人「饐えねえうちに、はやく牡丹餅の夢を賣つて仕舞へ。兎角、草ざう紙と見得の夢がよくいくわえ。」

主「夢は五臓のわづらひといふが、達者さうに見える結句おれが衰へたさうで、夢にだも趣向を見

ぬさ。」

さる町は夢を買つて歸りしが、よく〳〵思ふに、夢を賣つてさへいつかどに暮す世の中に、高い米を飽くまでに食つて、草さう紙を書いてゐるも馬鹿〳〵しい詮議。何ぞ一ト商賣初めてと思へど、一文なしの事なれば、元手の入るあきなひは所詮お休みなり。兎角身の智を搾つて儲けると云ふ話もあれば、身の内にあるもので一商賣仕らんと思ひ立ち、持前に阿房のけら〳〵笑ひが萬とあれば、此奴をやつて見ようと春袋のうちへ、八文と十二文とおかまの前にて笑ひ込み、大盥の中へ入れて賣り歩く。所が人きのよい代物なれば、とんだ賣れるも大笑ひだと笑ふ人が有れば、その笑ひを財布の中へ貰つて置いて、明日の賣物にするとはとんだ機轉。諸事あきんどはかくありたいものなり。

老人「ほんに利く事なら、一袋孫娘にやりたい。彼奴は不人相で縁遠いには困る。押付、お笑ひをさめにと買ひに來るやつが出よう。」

子供「お菓子が來た。買つてくんな。」

酒屋丁稚「わたしも一つ買つて腹立ち上戸の肴にさせたいが、苦いと言はしやらねばいいが。」

さる「笑ふ門には福來る。ア、おくわしく。」

武士「コリヤ〳〵あの笑ひを二袋ほど調へたい。鹽谷殿や、賀古川氏に出あつた時、急に笑へねえで

困るよ、そしてお輕にもにつこりといふ所を見せて置きてえ。」

〔仲人〕こいつは大笑ひだ。かう笑つたら己が口へ財布を持つて來るだらう。滅多に笑はれもしねえと
は此のことだ。」

さる町めはとんだ商賣を始めて、とんだ儲かるの、へんな商人が流行るの、馬鹿々々しい賣物だの
と、諸方にて噂をされ、毎日々々夥多しい嚔。此奴も唯捨てるではないと、香煎箱へ詰めかけて、
「元日の嚔々々」と呼び懸けて出た所が、大晦日一晩に賣れた高が、ハックさめ七十二貫目ほど。
「元日に嚔をなされば、とんだお仕合がようございます。なされたい時分この口から振り出して、あ
とで直に、ご養を食らへ」と人に言はせなされば、なほようございます。」

さる町は欠伸を廣めて見たく思へど、入物の工夫に困りて、漸う蜃氣樓からの思ひ付きで、蛤貝
へ入れて、方々の湯屋を頼んだ處が、どうでも欠伸は感るものかして、其處ら中へ廣まりけり。

〔[illegible]〕番頭、どうも爺やお袋が目慧くつて内が出にくいから、ぐつと寐な氣の來さうなのを一貝ば
かり下せえ。」

〔[illegible]〕お婆さんが、お念佛のでる欠伸を買つて來てくれろと仰しやつたつけ。」

〔[illegible]〕一貝の、其序に、此のお子のおしいの知れる欠伸をも、お買ひなさりませ。」

長じゆだいの功能ぢやァねえが、太閤の物申、宗隱の答禮にも、咳拂ひほど入用な物はなしと思ひ付き、高慢な醫者さまや、淨瑠璃かたり講釋師をあてにして、咳拂ひを賣り出したれば、「とんだ重寶だ。」と怪しからず流行る。

ある家中にて、早野勘平といふ色男ありしが、奥女中のお輕といふいきものに、人知れず相惚れといふ處なれど、相圖の手だてなく逢はぬ月日を送りけるが、此の咳拂ひを買つてから、毎晩お庭へ忍びゆき、咳拂ひにて相圖を定めたり。

勘平「毎晩々々咳拂ひを取交へねえけりや人が怪しむから、色々に咳を分けるが、今夜は高麗やで咳くはずだ。」

お輕も勘平が方よりおくりたる咳をせいて、相圖を合はせる。

同家中の鷺坂伴内この色事を聞きいだし、「不義はお家の法度なれば、兩人を手打にせん。」といふ。伴内が兄き鷺坂左内は、たつた一字違つたばかりでとんだ大通なれば、此の事を氣の毒に思ひ、「兩人は不義ではあるまい、誠は兄妹にて、親の仇うちといふやうな事であらう。」と智慧を付ける。「いや左樣なものでは御座りませぬ。」といふを、エヘン／＼と咳拂ひにて紛らかす。左内も咳ばらひを買はれたと見えたり。

伴内は左内に邪魔を入れられ、ごふ腹まぎれ、あてこすりの咳を無性にする。

伴内「ハ、百がのをみんな咳いて仕舞つた。忌々しい。エヘン／＼。」

左内「こりや／＼勘平、復讎なればお邸にはかなはぬ。今日より丹波與作と名を代へ、馬士でもしやれ。お軽もお乳の人にする場だが、それでは其方の難儀と見たから、せきの小萬とでも名を代へ、一所に暮さつせえ。なんと野暮ではあるまいと、己惚な咳ばらひをするやつさ。これさ伴内おせきなさるな／＼。」

勘平「なるほど、親與一兵衛を定九郎に打たれまして、其の仇をねらひます。腹を切らずに馬追ひとは、馬腹をつて人ばらきらじだ。」

せきの商ひも百日ほどは流行りけれど、段々その加減なれば、又涙をうつて見ようと思ひ付き、こいつは女郎屋をあてにするの商賣なれば、見えが肝腎にて、中々先の賣りではいかぬと、本町の眞中へ大そうな涙店を出しければ、初日より吉原品川はいふに及ばず、芳町、堺町を切つて門前に市をなし、下村百介そこのけと繁昌おびたゞし。取りわけ三月出代りの時分は、邸がたの涙かひにて寄り付かれぬ位、今時あさつき鱠を食はぬ中と、ほんに涙の出るやつはない所なれば、涙やの多忙しいも尤もなり。

店の者「此の頃は大分涙をお使ひなされます。」

客人「札紙の違はぬやうにして下さい。出がはりの涙と芝居見物の涙でござる。」

主人「舞臺なみだ早く上げろよ。」

「アイ此の花魁も、袖とめばかり二人くゝされてだから、てえ〳〵おやねえのさ。」

「熱い涙は一升が二匁、血の涙は五匁で御座ります。安いのなら、水鼻をまぜたのが御座ります。涙も錢次第さ。」

「やれ〳〵江戸は何でも高い處だ、己が國では百に一升なき、二升なきと賣るのに。」

「官太夫さまへいつて泣かにやアならねえ。熱い涙でも血の涙でも、二十四文ばかり買つていかう。」

「己が太夫さんも、早く重の井の幕がぬければええ。毎日〳〵涙買ひも並大體ぢやアねえ。」

さる町もだん〳〵慾心が出て來て、もつと珍らしい商ひを始めたいと案じすごし、おくびの、しやくりのと云ふものも、まんと食つたやうで洒えのよいやつ。ちやうど通人が今かばやきを食つたといふ面で、大道を歩きながら楊枝を使ひの氣味なれば、乾度おくびも賣れようと、鰹節、このしろ、ねぎまに大根、おくびの出るやつをおもいれ買ひ込み、家中のものに食はせてしたゝかおくびを仕込んだ處が、さつぱり人も買手もなく、どつかりと損をする。

客「ヘイ一荷買ふが幾許にさつしやる。此のやうにおくびが出て、このしろは實にいやだが、商賣づくなら仕方がない。下駄ぬにさつせえ。」

魚屋「とんだ事をいひなさらア、新しいおくびの出ねえ魚でも、さうは賣りやせん。」

さても、さる町はおくびにて大きにはたき、此の損毛を埋めんとて、又色々に工夫を廻らし、身のうちから出るものでは屁といふやつは愛敬のある代物、月まち日まちの寄合ひでも、ひよつと取り外した所が、どつと落ちのくるものなれば、綺麗にして、賣り出したら流行りさうな物と思ひ付き、これを仕込むには、なか／＼一人では屁がまはらず、少し造作きたれど此のまへの花咲男、未だ上方にて評判あるよし、急に呼び下し、おなら一色の杜氏にかゝへる。

「不思議な御商賣で不調法ものを上げます。お目をかけて下されませ。」

「ヘイ此の事は素人後にすと申すから、黄色でいびつなものを三兩渡します。其の代り奉公を随分いき張つて、己が身上をひり廣げて下さい。」

「お客だ〳〵、出されませい。」「おなら一通りは屁におぼえがござります。」

花咲男を抱へてよりは、種目々々を甲高な屁と段々に舞ひ、さま〴〵の曲屁をひらせ、ふくべの煙草入へ入れるとて一曲一匁と賣りかける積り、とても此の事に當世へ向くがよからうと、假聲狂歌の類を

一字一點誤りなくひらせける。

花咲「お望み次第しやうね玉でも、何の玉でも出來ます。」

さる「イヨおや玉、へだま。」

花咲「無駄口をいふまい〳〵。」

なんでも一番占める積りのおならの仕込み、思ひのほか評判惡しく「こんな不仕付な品をなにするものだ。」と、唯の一人も買ひに來ねば、夥多しく仕入れた代物次第にねぐさくなりければ、往來の人の鼻へはひり「大分臭い〳〵。」と怪しむゆゑ家主聞き付け、への用心の惡き商賣なりと差止められ、唯さへ氣の揉める矢先、ぐつと癇癪をおこして、諸道具を打ち破すやら、おならの曲物を投り出すやら、臭氣紛々として眼鼻も開かれず、内中の者黄色になつて騷ぎける。

さる「大屋さんでも、孫左衛門さんでも、とんだやくはねえ。屁を賣るのに何ぜ用心が惡い。奴槍持は大道をひりながらさへ歩くわ。尻の穴の狹え大屋ぢやァねえか。へひらす大やめ。へとも思はねえ。」

大屋「ヤレ大へを言はつしやるな。屁を賣つて、しりをつぼめる樣なことが出來よう。さて〳〵。」

さる町は度々の損毛にて、少し思案に行きついた處、この頃癇癪の出來たこそ幸ひ、こいつを賣つ

て見ようと、三升へ廣目の口上を頼みける。

「とうざい／＼、當時世上に癇癪がおびたゞしく流行りますに付きまして、さる方にて市川流の癇癪を賣り出されまする間、私し店と思召しお購求め下されませう。それに付きまして、狂歌を一首つらねました。」

　春の夜の花にもさけのかんしやくを沸かす一刻あたひ千金

見物二「口上ばかりでも百五十がものはある。」

見物三「癇癪もいきなものよの。もつとも癇癪のねえ男は、交際つてもおもしろくねえよ。」

見物三「私もいつそ眼をはちつかせて見やすが、未だ移つて呉れやせん。松が枝さんの口を曲げたり、鼻をしかめたりは羨ましい。御前さまの御癇癪も、とんと三升さ。」

通も不通もおしなめて、なければならぬ智慧分別を拵へいだし、金まうけみせんと分別くさき男ども四五人かゝへ、奥庭へ後架を四五間こしらへ這入りて、食事も辨當にして運び、大小便より外には外へ出さず、顔を顰めて分別をこしらへさせる。

「何と銀の智慧しや、いい分別でも出ましたか。」

「いくら骨を折つても、ふんべつはねつから出ぬ。」

「お兆への箱の註文かれたる持參いたしました。箱入の智惠なら、さぞいゝ値に賣れませう」分別を拵へかゝつたところが、前鑑さる間のことなれば、ほんの猿利巧にて、金になる智惠は一つも出來ず、毎日々々の分別にはつと草臥れ、何日ぞや淺草から買つて來た枕を引き寄せ、とろ／＼と寐入る。こゝは差詰め夢といふところと、思ひのほかに耳を取つて鼻といふ、つまらぬ寐言を云ひ出しける。

「此の春には、とんだ新しい趣向を案じて置いた。桃太郎を強い若衆にして、日本一の黍團子で、猿犬雉子を味方に付け、鬼が島へ渡り、隠れ蓑、隠れ笠をひつたくるといふ草雙紙だが、ナント間違ひだらけで新しからう。」

「まだ好いのがあるよ。猿と蟹が燒飯を取換へ、澁柹で中良を打ち割られたのだが、此の位新しいナアあるめえと、喜三二の趣向を、みんな寐言に云つて仕舞つた。」

「宰予が晝寐だやアねえが、愚痴なる氣をば持つ可からず、本田の髪は頭脂だらけにすべからず。どうだ唐人の寐言はきついものか。ゴー／＼パァ／＼。」

「咳拂ひは泥坊の用心に賣れるものだが、鼾は不用心だから錢にもなるめえ。」

「寐言ついでに言譯をして置かう。ちよつと出て引込んだと、一番しめる氣な人もあらうが、其處が

やつはり寐言のやうなものだから、子供だましにまぜて置いて、わかる衆は何にも言はずに、それ
よしかこ」
「ウヽイヽノヽヽといふが通人の寐言だらう。洒落本にきめやせう。」
その寐言の聲の高き世間へ通り、油町を始め此處彼處の雙紙問屋、なにか評判になりさうな事と聞き付け、思ひ／＼に書き付けて、巳の年の新版にしたとは僞らしい樣だが、ぜんたい草雙紙といふやつは起きて居て寐言を云ふ樣なものなれば、萬八でもあるめえとは、やつはり寐言でやすねえか。
[illegible]桃太郎に三冊と見える。一冊の[illegible]を書き付けませうか。洪論の古訓なぞは、寐惚さんのつうしなんと云ふ仕立でせう。」なんでも寐言先生の事だこ」
さる程にさる町に、思ひ懸けなき春の始めの初寐言が、草雙紙の趣向となり、一つはしたい作者な氣で居る處を、戀川の春町先生もつての外な機嫌にて、「先づ第一に草雙紙が噺は茶なものだつて、おなじや、嘘が賣り買ひになる世でもなく、欠伸の[illegible]といふものを入れ物へ入れたことと、議法界な趣向は、風嘘比興頭といふ草雙紙の大義に外れ、甚しき杜撰にして、我が戀川の流れには汲まえ處だ」と、てつぺんから油を取られけるが、其のとき油を搾つたので懲りかつたと見え、矢張はじめの好きの道、草雙紙の作者の株を二三千兩にて買ひ高へ、續年々々相變らず出たきことを作りける。そ

れだに依つて芽出たけれ。

「草雙紙はちや許りでも參らぬ。折々はしかつべの眞顔などもよしさ。時に取つてはなまへらくこ」

「御傳授の段々、屹度他言兵衛は致しませぬ。」

元利安賣鋸商内 終

江戸生艶氣樺焼

山東京傳作
北尾政演畫

こゝに百萬兩分限と呼ばれたる、仇氣屋の獨り息子[redacted]次郎とて、年も十九や二十といふ頃なりしが、貧の病は苦にならず、外の病のなかれかしといふ身なれども、生得浮氣な事を好み、新内節の正本などを見て、玉木屋伊太八浮世猪之助が身の上を羨ましく思ひ、一生の思ひでに、こんな浮名のたつ仕打もあらば、ゆく〳〵は命も捨てようと、馬鹿らしき事を心がけたり。此の[redacted]次郎の近所に、北利屋喜の助といふ放蕩息子と、[redacted]留井思庵といふ太鼓醫者あり。折々話しに來る。

『先づありやすと云ふ奴が浮氣にする奴さ。此奴は知らねば成りやせん。およそ人の知つた口近いめりやすの分で、小口の所をまうしやせう。先づ、きぬぎぬ、むけん、さかづき、時雨、ゆかりの月、三ツのとり、みつぶとん、二ツ紋、四ツの袖、かぶろだち、沖の石、花の雲、あさがほ、六歌仙、

しらいと、獨り心中、ゆびきり、いれぼくろ、きしやう、昔ぐさ、萬年艸、十三鐘、水かゞみ、稽ぶね、待宵、わかれ、名殘の紅葉、假まくら、夏衣、春の夜、秋の夜、ますかゞみ、夜半の鐘、朧月、春がすみ、亂れ鳥、思ひ川、女參宮、元服、萬菊、九月幟、吉野草、夏の月、明烏、むら烏、あふぎ、花の香、花の宴、殘るあつさ、さしぐし、相の山、とけず、染絲、冥土の鳥、戀櫻、秋の七艸、二ッ文字、左文字、我がこゝろ、江戸ゆかた、疊算、ひとつみそ、戀ばなし、まだいくらもあれど一寸した所で此の位なものサ。ア、口がすくなつた。」

「ふみの文句にも大分傳授のある事サ、封じめをつけぬと縁が切れると申しやす。文の末へ幼名を書くやうになると、むづかしいね。引裂目に口紅の付いて居るのは、いつでも地ものの女ではねえのサ。どねえにおみでも、耳のわきに枕だこのあるので、泥水上りはソレ直に知れやす。」

艶次郎は二人の者より色事の指南を受け、先づ刺繡が浮氣の始まりだと心得、兩の腕指の股まで二三十ほど、當もなきほりものをして痛いのを堪へ、こゝが命だと喜んで居ると、中には少し消えたのもなくてはわるいと、所々へ灸をすゑて消されけるはチト痛事、「ア、色男になるも飛んだつらいものサ。」

扨また艶次郎は、俳優の内へ娘などの驅け込むを羨ましく思ひ、近所評判の藝者おえんといふ踊子

を五十兩にて買ひ、かけ込ませる積りにわるい思案に頼ませたれば、「かけ込むばかりなら承知した。」と、おまんは早速支度をして、仇氣屋の内へ泣きながらかけ込む。

『自らと申すは、抑よるべ定め遊藝が妻、此の道に住み馴れて、人の心を浮氣にする白拍子で御座んす。茅場町の女髪結で、これの艶次郎さんを植木の陰から見そめました。女房にもんことがならずば、おまんまと焚いても別れないのサ。それもならぬと仰しやれば死ぬ覺悟で御座ります。』

など、山女通りのせりふを並べたてるを、家内の下女ども是れを聞いて、

『内の若旦那に惚れるとは、何様か古流か遠州か知らぬが、とんだ茶人だ。』

「若旦那の御顔では、よもやかう云ふ事は有るまいと思つたに、コレ女中さん間違ひではないかの。」

「ハテ色男といふ者は、どんな事で離縁をしようか知れぬものだぞ。もう下閙やるからそつと大きな聲で、家まで聞えるやうに噂ひぞ。」

艶次郎の親仁右衛門は、聞えた事とも知らず、氣の毒に思ひ、いろ〳〵意見して歸す。

此の噂をさぞ世間でするだらうと思ひの外、誰さへ知らぬ故張合拔けがして、讀賣を頼み、此の話を賣に歩かせ、一人前一兩づゝで雇ひ、江戸中を無代で賣らせるが、一向に買手のないので大きに氣を揉み、此の上は女郎買ひをして浮名を立てんと思ひ、吉原へ行き、浮名屋の浮名といふ女郎を揚

方に、始めから聞えに成らうと思へど、相手が不承知故、輪留井思庵の名前にて浮名を揚詰めにし、
自分は新造買ひにて遊び、おもいれ金を遣つて、「此の不自由な所が日本だ。」と嬉しがりけり。
艶次郎は女郎買ひをして歸つても、やきもちを燒く者もなければ、一向に張合ひはなし。「どうかや
きもちをさへ燒けば容貌に望みはないから。」との註文で、二百兩出して妾を抱へ、内へ歸ればこづき廻
されるを、此の上もなき樂しみとして居たりける。
「はづかしい事だが、生まれてから初めて燒かれて見るが、どうもいへねえ心持だ。もちつと燒いて
くれたら、てめへがねだつた八丈と縞縮緬を買つてやらう。」
「ホンニ男といふものはなぜそんなに氣強いものだねえ。女郎も女郎だ。人の大事の男をとめて置き
くさつて、又おまへさんもおまへさんだ。此のあとは八丈と縞ちりが出來てからの事さ。」
ある時芝居を見て、兎角色男といふ者は打擲かれるものと思ひ、頻りにぶたれたくなり、地廻りの
勇みを一人前三兩づゝにて四五人頼み、仲の町の人通りの多い所でぶたれる積りで、茶屋の二階には
藤兵衛を雇ひ置きてめりやすを唄はせ、亂れた髮を浮名に梳かせる積りにて、月代へは青黛を塗り、
揚屋町の銀出にてサツト水髮に結ひ、髻をつかむと直にバラ／＼と解けるやうにして擲たれけるが、
ツイ擲ち所がわるく、片息に成つて髮梳どころではなく、氣付よ鍼よと騷ぎて、やう／＼に氣が付き

けり。

艶二郎は家懐を思ひいだし、二錦ふさ告げる大變、口舌の者はころびし、紬を禿が力艸、引かれて行くや後髪、心強くもきりが谷ことふ文句より、外の客人のつかまるを羨ましき事に思ひ、何の事も無いに新造や禿を頼み、此方から大門につけて居てつらまり二翁紋は引きさけても大事ないこと云ふ約束にて、引きずられて行く。

新造禿は人形をもらふ約束にて、無駄をいひ〳〵引きずつてゆく。

『コレサまア放してくれろ、かう引きずられて行く所は飛んだ外聞がいい。』

「うぬが様ないい男がちら付くと、女郎衆が色ついてならねえから、己もおつとやきもちの節だ。」といふとかふは、此方から法文で言はせるのなり。

「其の襟のつぶしが二分づゝに付いて居る、チト痛くてもよいから、随分見えのよいやうに頼む。切落しから諸が當るといひさうなものだ。」

此の時、餘程馬鹿な奴だといふ浮名が少しばかりたちけり。

艶次郎は世間の噂を聞くに、皆浦のろに皆々慾ですると聞き、急に金儲が嫌になり、「何とぞ勘當を受けたい。」と両親に願ひけれども、一人息子の事ゆゑ、決して成らぬ」と言ひけるを、誰う母親り取

成しにて、七十五日が間の勘當と極め、日限が切れると早々内へ引取る事に言ひ渡しける。

艶次郎は望み通り勘當は受けたれども、母の方より金は入用次第送るゆゑ何不足はなけれども、何ぞ浮氣な商賣をして見ようと種々考へたが、色男のする商賣は地紙賣だらうと、まだ夏も來ぬに地紙賣と出かけ、一日歩行いて足に肉刺を出かし、是れには少しこりこりする。

「外をあるくと日にやけるのであやまる」ヤア又惚れたさうだ、色男もうるさいぞ。」

「一寸鳥羽繪のやうな顔の人が通るよ」「みんな來てごらんヨす」

それよりいよいよ浮氣に乘りが來て、彼是とするうちに七十五日の日限が切れ、兩親よりは勘當を許さんと毎日の催促なれども、未だ浮氣を爲足りねば、親類中の取成しにて、二十日間の日延べを願ひ、やうやうに聞き濟みければ、今度はぐッと登り、情死をして一番命を捨てる氣なれど、對方の浮名が不承知故、噓情死の積りにて、先へ喜の助と思案をやつて置き、南無阿彌陀佛といふを相圖に留めさせる注文にて、先づ浮名を千五百兩に身受をなし、情死の道具類を買ひ集むる。

對の小袖の模樣には、肩に撫子、裾には碇、質に置いてもながれの身といふ、古歌の心を學ばれたり。是れも中宿山崎の儲けものなり。

浮名は「假令噓情死にしても、外聞が惡い。」と乘んだ不承知なりしが、「此の案じを首尾能く勤めた跡

では、好いた男と論はてでやらう」と、由良の助がいふやうなせりふにて漸う得心をさせ、此の狂言には艶次郎が無利足で金主をする約束にて座元を頼み、褒田に云付けて此の事を浄瑠璃に作らせ、相方は門之助路考といふ顔にて舞臺でさせる積り、はたきさうな芝居なり。

二人が辞世の発句は、すりものにして、仲の町へ配らせる。

「花魁が書いた蓮の書を、大奉書へカラ摺りとは、いい思しのしつきだ。」

もとより素人ではに身受しては色男でないと、廓落の方で格子を掛け、二階から身受をする。

「二階から目薬とは聞いたが、身受は是れが初めてだらう。」

「おあぶなう御座ります。おしづかにお逃げなされませ。」

「おいらん、御機嫌ようお駆落なされまし。」

大所では、「身受なされた女郎故、お心任せになさるはいいが、どうぞ連子の繕ひ代に二百両頂きたい」と、慾心をごかわきけ。「最期の場も粋なぱつとした所」との注文にて、闇の堤と極め、夜が更けては気味がわるいから、宵の内の積りにて、艶次郎に勤めたる家業、[illegible]、[illegible]、木村、喜春をまつ、太鼓持の輩のやうに、[illegible]にて[illegible]まで送り、爰にて各々に別れ、艶次郎は日頃の願ひ叶ひ

りと、心嬉しく道行をしてゆき、爰こそ好き最期場と、箱道の脇差をぬいて既に斯うよと見え、「南無阿彌陀佛。」といふを相圖に、稻村の陰より黒裝束の盜賊二人現はれ出で、艶次郎浮名の二人を眞ツ裸に剝ぎ取つた。

「うぬらはどうで死ぬものだから、己が介錯してやらう。」

「コレ／＼はやまりますまい。我々は死ぬ爲の心中ではない。爰へとめてが出る筈ぢやが、どう取違つたものか。着物はみんな上げませう、命ばかりはお助け／＼。」

「此の後こんな思ひ付きはせまいか／＼」

「どうでこんな事と思ひんした。」

浮氣屋艶次郎
浮名屋うきな　道行興鮫肌

「朝に色をして夕に死すとも可なりとは、さても浮氣な言の葉ぞ。それは論語の固い文字、是れは豐後のやはらかな、肌とはだかの二人連。結びし紐を一人して、解くにとかれぬ疑ひは、不審と土手の高みから、とんと落ちなば名や立たん。どこの女郎衆かしらぬ紐、結ぶの神もあちら向かさん。しよじやうゆの燒きするめ、ぴんとひぞるも今は早、昔となりし仲の町、外八文字もかうなれば、

うち七文字たどり行く、涙に交る水涕に、ぬらさん袖は持たぬゆゑ、下の帯をぞ絞りける。身にしみ渡る東風に、鳥肌たちし此の素肌、殿御の顔に薄墨に、かく玉章と見る鴈に、便り聞かんと書く文の、假名でかなでこ絹模様、ゆかりの色も七ツやの、名に流れたる隅田川、たがひに無理をいはぬ崎の、かねは四ツ日や長命寺、君には胸をおくる日の、まだ四ツ過ぎの緋縮緬、ふんどし長き春の日の、日高の寺にあらずして、裸のてやひ急ぎ行く。」三中引

「おれは、ほんするきやうでした事だから是非もないが、そちは嘸寒からう。世間の道行は着物を着て最期の場へ行くが、こつちのは、はだかで家へ道行とは大きな裏はらだ。緋縮緬のふんどしが、こゝで栄えたもをかしいく。」

「ホンのまきぞへで難儀さ。」

牛は願ひから鼻を通すと、艶次郎が悪案事の心中、この時浮名がパッとたち、澀團扇の繪にまで書いて出されたり。艶次郎は丁度勘當の日限も切れければ、こりくして宅へ帰り不圖傍を見れば、三囲にてはがれたる小袖の掛けてある故、不思議に思ふ折から、一間より親仁の彦右衛門伴頭候兵衛立ち出で意見する。

「若き時は血氣いまだ定まらず、戒むる事色々ありと云ふことを知らぬか。すべて家だの高じると皆

かうしたものだ。怖ろしき盗賊とまで身をやつせし我々が工夫の狂言、以後はきつと嗜みなされ」

「わたしは風を引きました。」

「爰でやきもちを焼かれては大難儀だから、姿もどこぞへ片付けませう。」

艶次郎は初めて世の中をあきらめ、實心の人となり、浮名は男のわるいと不承して、外へ行く氣もなく夫婦となり、元より身代に不足もなければ、いよ／＼繁昌に榮えけり。

併し、一生の浮名の立ちをさめに、今までの事を艸草紙にして世間へ弘めたしと京傳へ頼み、世上の浮氣人へ、教訓の爲に書かせけるとぞ。

江戸生艶氣樺燒　終

鳩八幡豆と德利

戀川好町 畫作

練馬大根の生際太印。風土記に曰く、「旅下師の小刀呑込山の麓を山下といふ。爰に鶴あり、豆を拾ひ錢を啄む。かたち甚德が畫ける陶の如し。むかし賴朝大將の切口伏木の虚に敵を避け、四海をせしめ漆として後、山吹色を札とし、以て天井を見たかと雲居に放つ。誠に一世の美なるかな、鯛の味噌すで四方の赤一杯、呑みかけ山の寒雅、不鳴の森の尾長鳥にまさり、千載の今此の鶴を愛す。豈たゞ銅鑼燒甘藷の子どもらを謎ずるのみならんや。老爺老婆も涎を流し、お寺をひらくに至る。それ濱村屋が舞臺顔にあらざれば、誰か眞ッ黒くの鶴吉が、舞臺顔に若かんや。」と則ち是れが傳を作る。子供衆かてんか／＼／＼。

萬葉亭好町 敍

佐殿未だ伊東が館に渡らせられし時、鎌倉八幡宮に祈誓をかけ、「源氏再興のため、一人の強の者を授

け給へ。」と祈られけるに、七日に満ずるの曉夢のうちに八幡宮枕邊に立ちたまひ「鎌倉の鎌と鶴が岡の鶴とを授くる。」とのたまひ、頓て七間四面の幣帛と化りて、宮居のうちに入りたまふ。

鶴は鶴が岡の縁で、鎌は鎌倉の縁どりだらう。但しつる／＼とおかまをおこす見徳かも知れず。

さる程に祐親は、君の浪々をなぐさめん其の爲に、奥野の花見を催しける。此の時股野五郎は大生醉ひとなり、邪魔にもならぬ大石を轉がし出し、一ぱいに鹽屋をいひ、目より高く差し上げて、投げ落さんとする所へ、御存じの鶴吉遙かの山下を通りけるが、山上より大石の落ちくるを見るより「得たりや應。」と弓手にしつかと受けとめしが、石ばかりでは兼合ひがわるいとて、得手ものの豆と徳利を空さまに投げかけたり。

『そこへ來たのは鶴吉と見受けたり。欲しくもあるめえが此の石を參らせん。足駄にて受取るか、又ははだしにて召されうや。鶴吉殿と、いんぎんに云ふ事もねえス。』

「豆をぶつきつて參るで御座い。」

股野も取りは取つたれど「何のつまらぬ豆と徳利、此奴は無益だ。」とそつくり投げ返したり。鶴吉は土肥が壻でも何でもない事は知れた事なれど、全體股野をカモと見て居るゆゑ「イザお對手に。」と裸になる。股野は「得たり。」と引つ組んで「ウン。」というて差上げたと思ひしは大間違ひにて、一本

當る過ぎ風なれば、兩者は例とも思はずなつかしく〳〵と手を伸ばせば、土俵の中へ落ちて出まき、
其の皇、高慢だけになれば、眼力は更に紅潮き、眞中へドッと倒れけるに、是れを見るより、大庭は又
嘆きもして大高見者の頭明吸ひと[illegible]出し、大湖を口に開き、次けな手鋼を剣けさんと、森
一ッ手に掴け出して、其の高い見者の拳業は、平常相撲に上に同じ色の地を書こし、肉在木の剣突を
ひらり〳〵と手玉に取り、大勢の中に割つてはいり、股野五郎と引つ組んで遂に敵を取つて伏せ、首を
かけども、ねつから切れず、怪しやつと月影にすかし見て、濡紙をすつぽりとつつて見たれば、切れぬも
道理、脇差しかと思ひの外[illegible]、膳に、長尾新六、後ろの首を打ち落す。

『眞田が代り與市では、どうも氣がないく よ。』

股野も今度はしめたものだと、いそ〳〵として起きあがり、落ちた首の兜を取つて見れば、いつの
間にやら土の塊と[illegible]。

『南無三あげつぼを喰つた。』

それより又頼朝は、鶴吉が働きに依つて主従ふしきに隠し、息をころして居たる所へ、大庭兄弟
追ひ掛け來り、こゝも木の洞を探し、
洞の前に立ち、其の洞を覗かんとする時、鳩にこしらへて二人を欺す。

「はと、がてんがゆかぬ。」

「ふし木せんばんな。」

是れにて頼朝も難を遁れ、眞鶴が崎まで落ちのびけるが、猶も寄手の追ひ來るを見るより、為方なしと見れなるもまた鶴吉に振向け、洲崎の濱へ出で漁船に飛び乘り、安房上總の方へ落ち行き給ふ。さりとはあてしまへ、勝手な仕打なり。

跡に殘つて鶴吉は一人踏み止まりて、寄せ來る敵の眞先へ笊を差し付け振り立てければ、さしもの大勢四方八ハッと逃げ散つて、鶴吉はかり殘りける。

さて頼朝公は、目出たく天下を治め給ひければ、鶴吉を召し出され、石橋山、眞鶴、洲崎の三ケ所にて、御難を救ひ奉りし御褒美として、三品の景物を下さるゝ。眞鶴洲崎といふ題にて、洲崎の升屋が名物、鶴の歩みを白帳の徳利ごと下され、石橋山といふ題にて、土橋の白拍子を大勢下しおかる。是れは餘程こじ付けなれども、御玉のなさる事ゆゑ何れも「妙々。」とおほめ申して置きける。

「石橋山なら高輪と來さうな所を、土橋だけに玉ぞろひで有り難い。」

などといつて居る。

鶴吉は拜領の名酒を獨りで飲むも本意なしと、仕方も辨治といふ講釋師を招待申し、頻に飲まんと

せしに、不思議や、側にありし徳利は俄に首を伸ばし、鶴の歩むが如く見えければ、流石の放下師も噺を廃し「扨もこれはこれは」と手を拍つてほめければ、座敷中に居並んだる誦子ども、残らず一緒にほめにける。是れは手拍子を間違へて、ちよいと行き過ぎた徒歩と見えたり。鶴吉も此の鶴に乗らんと見えしが、同じく鶴の形となり、ヒヨロヒヨロと鳴けばルーーと啼き、鶴が雲へと飛び行きけり。

「南無三、大事の玉手合をとんだ見舞にしてしまつた、うつかりと手も出されぬ。」

「と言ふやうなわけに、鶴と鶴がわからぬものになつた。」

新作師仕方が一番前に、眼前に見た事なれば、頼朝一代記の小芝居を由井が浜にて演じけるが、中にも鶴八を立者として、其の頃大きに評判よく、由井が浜の小芝居へ繰込む人数夥しく、毎日々々大入にて割れるやうな騒ぎ、春の御祝義あでたし／＼。

「是れから頼朝さまが山伏に出合ふ所だ。」

「ふしぎのものさ、猫の退治る所が面白いぞな。」

鳩八幡豆と徳利

色男十八三文

櫻川杜芳戯作
北尾政美畫

[illegible]た土佐繪の色をとこ、光源氏と申し奉るは、名にし負ふ江戸紫式部の筆に隠れなき色男にてありしが、近年通人にこりてより、たゞ色男はありがなしにて、[illegible]取株[illegible]、い[illegible]意[illegible]思召し、今一度色男をして、世に持て囃されんとの思ひ付き、[illegible]開[illegible]ども へ、[illegible]廻しある。

『[illegible]りたる[illegible]に廻状とはちと情ない。茶屋は兩國の龜屋としやう。[illegible]くゝんな[illegible]が[illegible][illegible]色[illegible]と玄關へ開さうか知らん。』

[illegible]めぐりくて三月八日色男の會日にて、土佐節と同[illegible]色男[illegible][illegible]屋[illegible]は、先[illegible]は、在原業平、中納言行平、武[illegible]成、小[illegible][illegible]、源九郎義經、園部左衛門、山伏に白川安珍、[illegible]中村七三郎、[illegible]

舟の如く、光源氏に言寄して、次第不同に居流れたり。時に源氏の君思召しの所お話あるに、みなみな望む所の由にて、今一度色男にて落ちを取りてお目に懸けんと、米の腰につけた時分の心にて、安請合に請合ふ。

「己が云ふ事を聞かぬと、きつとしかる源氏だよ。」

梶「無間の鐘のはやつた時は、己は貰れたものさ。」

團「そのべに味噌を上げべからず。」

色男の會にて約せし如く、先づ一番に源氏の君、夕顔の卷にて落ちを取らんと、五條わたりにはあらぬ木挽町の五丁目あたりを、ぶらり〳〵と通り給ふに、市中に心憎く富士太郎が住みさうな柴折戸ありける故、扨こそ此邊よと立ち止り給ひけるに、内より柴折戸を押し開いて、扇にあらぬ團扇の上に、何か乘せて持ち出でたり。光源氏も早飲込みにて、夕顔の前よと見給ひけるに、さにはあらず、澁團扇を塵取にして、芥を捨てるのなり。是れは如何にと行き過ぎ給ふ所、女また内へ入りて何やら持ち出で、光源氏を追ひかけ、今度こそと立ち歸り見給へば、女は錢一文を手に持つて出たり。是れ則ち高天ヶ原と謨見へしなり。女も粗相、源氏も粗相、女源氏が噂にもあるかと、客ばかり言つても根ッから甘からず、早々内へ歸り給ふとなん。

『團扇にのせたは夕顔、と思ひのほか芹を捨てたとは、ハテサテきつい千萬。』

「あの人は律義ぢやか知らん。鈴を落して來たのだらう。」

光源氏に先を越され、宇治川の先陣を、佐々木に遅れし心持の梶原源太景季は、鎌倉一の風流男、酒の泊りは神崎に假よりたる、川崎の旅籠屋に來りて、草枕結ばんとする此の處に千鳥といふ女の、め、鎌倉に連れて、その名は梅枝といふのがあらば、連れて下さるべし、明けなば拙者が重寳の品、産衣鎧の鎧をあづけ置き奉るべき間、質に置き下さるべし。金子が三百兩、領掌仕りたしと、手前勝手なる言ひ立てなれども、相手になる者も無ければ、源太も大きにてれてしまう。梶原へ入だといはれたといふ。

『鎧を質に置く位なら、中村座にでも行けばいゝに』

「こゝでも不自由な旗籠屋だ。是れから江戸へ又歸るのか、ア、重鎧々々。」

「なごやかなりし、日記圖とあひびごとに名しました」

さて此の次は、名にし負ふ伊勢物語の色男、在原業平朝臣、都に有らぬ色事せんと、其處こ此處とさまよふに、こゝに歳ふる女の事道連になり、何が面白いやら仕打にて、出來かゝりたる話相手を押さへて行く途すがら、追剝けるのを陸奥の若者ども、業平を押取りまきて、「間男」と盗人べ。」と聲々に

紛れ、引かされて嫁ひかんとするにぞ、業平も大きに困り果て、謝り證文にて漸う事を濟まし給ふ。

『開男やるなく〳〵。まをとこつちやアつんとこな。』

「おまへは豆男だと思つたら、開男もなさるかえ。」

変つたりや[illegible]は、九郎[illegible]、[illegible]の由來を忘れ來れ、要らぬ詮議なく、何に立てば、たゞ[illegible]に憐憫知らせ給ふて、窓障子を押し開いて、月をふとも言ひさうな[illegible]でもなく、此處こそと[illegible]に[illegible]を[illegible]給へば、[illegible]按摩よ〳〵[illegible]按摩で候[illegible]ヤオヤ。」

「このやうに笛吹く[illegible]と[illegible]九郎判官[illegible]大かいにして義經に[illegible]

是き京を、今を出めて熊野へ、年頃の御供、白川の夜[illegible]、京の[illegible]といひし[illegible]に存むて、行き暮れたる旅の宿、一夜の御宿御無心と、いふ聲も枯れ行く一ト間より、[illegible]も言ひさうな[illegible]で、一冊にあへず、通りてゆかい、何ときつい[illegible]ではないか。

[illegible]中にねるから中納言行平卿の色事は、[illegible]で無ければ始まらぬと、須磨が浦の[illegible]、名に[illegible]品川や、鈴ヶ森[illegible]に[illegible]を[illegible]へども、[illegible]なる事も無ければ、[illegible]へ上りて潜かと[illegible]給ふに、宿の娘[illegible]比目魚の[illegible]を持ち出でし手をとらへて、[illegible]比目魚[illegible]かけて[illegible]と、ぶす

上はあれあ公家衆にしやれ給ふに、腹はついと立ちて奥へ行き、再び出で來る、鐵漿をつけた齒を
むいて、矢倉はかりして行平卿は御歸り。
「己は行平ではない、いき平と見えると云ふも、きつい謎やら廣目魚だ。」
くれたるは關東に稚子でかくれなき、關部左衛門といへる人、其殿出をぶらつき歩きけるに、高貴の
こじよくとも見えし者の、櫻の下に判じ物を持ち居たるを、色好みの左衛門ふと見つけ、其の下に
心といふ字を書いたりけるが、其の下に心は忍ぶといふ字、色に忍ぶといふことか、とても分らぬ
某に送りしものぞ。若し薄雪といふ女郎の召使へる童か。」と問ふに、「イエイエ、是は判じ坊主が置
いて行つた今朝ほどの判じ物なりといふ。
「貰ひなんすなら、上げやせう。」
「それはお添け。お噂は金澤の評判だ。」
「あの人は判じ物で讀ふさうだ。此奴も判じ物だ。」
小栗判官兼氏殿はな。ヨーイ、馬主が名人で、鬼鹿毛といふ名馬に乘りて居り、照手姫の行方を探す
ふと、或る時に鞭を打つて、此處よ彼處よと尋ぬるうちに、藤澤の宿吉野屋といふに照といふ女ある
由、江戸より便りありて、一日に數十里走る馬に乘りて飛び來り給ふ時、藤澤を乘り越して、

島田、金谷に至りて聞き合はすに、照といふ飯盛品川にありしと聞き、又取つて返すに、又走り過ぎて、木曾街道熊谷の宿に着き、此處にて聞けば、「照といふ娘、神奈川にあり。」と聞き、又一[illegible]當てると等しく藤枝岡部に着いたりけり。此處にて聞けば、「照といふ女、深川仲町にあり。」とはいへども、もうこう／＼に歩かれず、ぶら／＼と江戸へ歸る。

「いや馬々なを、ナントきつい急用と見えようが。」

名にたてがみのたんぜん風、腰卷羽織の色男、其のむかし花を降らせた時の思ひにて、色事の口を聞き合はせながら、ぶら／＼と面郎、女中の多き所をうかゞひ、大方おれが噂をするであらうかといふ所で、モウちつとも出さうな者だと、思ひし由なり。

「豊さん、あの鏡屋の二升は何になりやすね。」

「お八十さん、照降町で半四郎が似顔繪をお取りなさりやし。」

「妾は門で紅葉を簪組へ付けて、紋着をお襟へ付けて、笹りんだうをおはしへ付けやせう」

「妾は今の役者は知らねえが、若い時分長が贔屓であつたよ。懐中笥に紋所が今に付いて居ます。」

「己の噂をしてくれるは有り難えが、お婆アさんでは恐れる。」

曾我十郎祐成は、大磯の旅籠屋お虎といふ女郎を買ひ、引き見んたんとおもへども、とつこいさう

はなしにゆゑ、大きに難儀致されましたなり

土「勤めの立引きがならずば、せめて旅籠錢でも出してくれ。それもならずは、晝旅籠ばかりでも出してたもれさ。大分大磯も人がわるく成つた」

土「見ず知らずの人に、たれが達引きをするものか。宿賃がなくば早々歸りなされ」

前方繁昌の時分は心持で居る色男ども、ふたゝび昔に引替へて、落ちぶれたるもの一人も無ければ、ぜひなく打寄り、此の上は、色の座で北國行きより外なしと、柳橋より拍子舞の如く、おしやれ男と乗り出す。

「船頭、いま言問はん、首尾の松はとうに過ぎたか」

程なく十八の人々、堤八丁を過ぎて大門口にさしかゝる所に、籠も小歌は馬より下りず、中の町へ來の出入とする處、花の世の落花狼藉者と、四郎兵衛顔をせず番所より出でて、ちん／＼打擲するに、喧嘩ずもうの助太刀に、客の迎ひに出て居る、知りもせぬ女郎の裲襠の下へ隠れんとして、縁なき使ひ落される

「ちと馬鹿らしい、何をしなんす」

「何とも言はせぬ、裲襠の裏に模様があるか、又酒のしみでも付いて居るかと思つて見たばかり、愛が

女郎すきだから。」

又白川の安珍、大門口を入るや否や、此處からも其處からも、「法印さん／＼、占つてくんなへ」と、大門口にて、連れの手前さへ面目なく、早々大門の外へ出で行く。

道明十人のうち五人家内へ歸りければ、差引き殘つて、光源氏、行平、業平、兼輔、中原、四郎、七座の七人一座、名にあふ茶屋へ上りけれども、主は見知らぬやうだ、ときどき顏を見、時々見て可笑しがる樣子。昨晩の客の噂のみ、樂屋落ちばかり話しける。

「是れはしたものだ。白酒の無い雛樣ぢやァねえか。」

「百人一首のやうな體が流行りんすかね。」

「何處ぞの神主でありいせう、すかねえ。」

「歌がるたといふ所もあるぢやァねえかい。」

床へ這入つてといふ名ばかりで、「御湯漬を食べて來なんすな」と、冠をつけて寝かせた事て、直ぐに立合はせの番ふらればかり、千早ふる神代もきかぬといふ事も、亦あるまいと、業平朝臣たゝけれ ば、中原源次も、「昔こそあれ今はふらるゝ」と難い洒落をいひ出し、おらァもう歸るだと女郎買ひを思ひ切る。

「なに言」をばれ、し男にしなされ。」

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

水引を附けて、背負つて行く。」との悪言なり。

[illegible]

[illegible]

居やれ、下の句が今でるから。」

[illegible]

[illegible]

「マア〳〵待ち給へ、ふられた事はお互〳〵。」

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夢覺めて〳〵、よく〳〵見れば、枕にせし本は則ち、源氏物語、薄雪物語、先陣問答、小栗實記、伊勢物語、義經記、曾我物語、日高川入相花王、絵本候男姿、丹前論、何は夢の淫書にして御座候に返す〳〵も、よく〳〵是れほど枕に致されしなり

色男十人三文　終

面向不背御年玉

森羅亭万象作
式上亭柳郊畫

自序

抑この面向不背の御年玉は、昔上手のミロコヨリ、比双に妙だ。日本堤。八十五年[illegible]道に出見世の、本店、蔦唐丸に與へたる無駄書なり。時の[illegible]御存じの萬象亭が戯作にして、[illegible]之畫工は北尾の換玉、文字の筆者は竹賀和尚、板木屋に汗水たらした二月三日の著作でござる。寝ころんで拜あられませう。重寶は有々と開けさつしやい。

近[illegible]高直なものを喰らふ未の歳　萬象

岡本[illegible]宮にましませる、皇極天皇の御宇にあたつて、唐土の帝より面向不背の玉を[illegible]るよし、龍宮城へ[illegible]れ聞へければ、八代龍王のその一人、しやかつらりう王を[illegible]召され、かの名玉をうばひ

取り、此の國の寶にせんと、水を離れて自在に働く、河太郎に仰せつけられた。

「其の謝禮として、一匹高千の小判の寶を遣はされ、背尾たくしてこれ直にて、合點かてく。

「さりとての事は、尾籠ながら、猿猴の尻腰に向くてござります。お手柄なは中からのお詫

が飴でございます。」

いては、罷出候さる事と一國分あるな合點で「お手柄が無い」と、尚人畏聞に手を鑿め、今や遅しと待つところへ、歸伝より白然、浪涌衣の家將幷標木郎各罷り添び、異所行寝の游へかゝるとき、待ち設けたる河太郎、油断を見濟まし、舟へ飛び乗り、かの珠を奪ひ取り、淵の深みへ飛び入れば、唐人どもは呆氣に取られ、たゞ「パ・・・」と計り言つて居るこそ不便なれ。

金輔「エ、桃栗さんねんやな。」

「大黒事に珠のし込んで來た、真のよふな珠か君往還な。」

龍宮の槍持さい、打鉤祭にも雇はれる男さ。い、ま、珠をかくす所だにあつたればと云ふ事、さこそが開けた。昔の人も、ないことを名には付けないわえ。くらげも筋骨を拔かれ、昔は達者な男で、お足輕を勤めて居る。

殿下御身に[illegible]のだんといふ魔性、代地の交魚に腹を[illegible]らせたい。
難なく珠を奪取し龍王へ捧げたれば、甚だ叡感ましまし、急ぎ臣の[illegible]に、三十丈の玉殿を造らせられける。

右謹じて、左謹じんを始め、河太郎が才覺、鰐鮫ものゝ[illegible]に感心しけるが、[illegible]の事なるは鰐鮫なり。今國を呑込たる時より、兎角腹がいぶる様にて心悪しかりけるが、唯今御前にて腹の中が引く[illegible]の[illegible]、[illegible]の陣世によりて[illegible]八道[illegible]、[illegible]の[illegible]頭へける

「[illegible]いて叡覧あられませう」

鰐「これまでいろいろ事人を呑みましたが、此の様におぶりおこる事はござりませぬ」と、腹中より[illegible]り出す様な事をいふ。

腹の中の[illegible]、[illegible]道理、[illegible]込まれたるは[illegible]、[illegible]も[illegible]、[illegible]て出でんと[illegible]、先々から呑まれし腹のうちに世帯を持つて居るやつ、[illegible]も亭主にきまりゐたつては腹子中の雌儀なれば、是非御料簡なさるべしこと、大家な人組が手足に取りつき、上を下へと[illegible]へす。折柄いづくともなく、七膳が浄瑠璃、佐吉が發音高々と、[illegible]

「さるほどに[illegible]は、[illegible]か[illegible]にて[illegible]中[illegible]動し、[illegible]れたる[illegible]を[illegible]しれたる[illegible]の

浦。左右の鰭を揺さ撫でゝ、わにかこいんにや、へどか。こうんえゝ凄まじかりける次第なり。イヤアてん〳〵。」

「たこ庵が薬が廻つて来たわ〳〵。これさそんなに急かずとも、外に思案はとさきのてんほらほしござんな。」

「大屋々々何うせう。強いんだ。」

「金輪五郎が死物狂ひだ。放せ〳〵。」

「鬼の腮でいらわはて、ものぢやないわいの。」

「とつて、滅相につよいおさんじさかい。」

「我聞く鰐鮫にしほふきの穴なしと、古老の人の物語。然るに潮をふき吹きの、あな珍らしく鼓車へ、難なく再度退り咲き、所は讃州志度の足、踏みかためたる金輪五郎がかなずね、直様都へ立ち帰り淡海公へ言上せん。何はともあれ面のあたり、奇態なことを見るものぢやあ。」と、反吐に交つて吐き出されながら、仔細らしいごたくを上げる。

「志度の浦ではない、〳〵どいうらだ」と、鰐鮫も手重い地口をいふ。

名臣は龍宮に奪ひあること、今国が注進によつて、藤原淡海公讃州へ下らせ給ひ、志度の浦の海士

あてまづけ、巨を取りかへす算段を遊ばしける。」

「名主だに手に入れば、其方が願ひの筋も承知々々。」

御主たとさへお手に入りましたら、其の代りにはありなく〳〵、ナ、恥かし」

「其此のあまりは、賤しな所置振をする奴だわえ。」

ある時、河太郎まかり出でて申しけるは「玉塔の高さ三十丈にては低く候へば、今これ龍宮に倍制せらいなだ小僧などと申します盗賊、盗み取らんも計り難し。」と申し上げければ、龍王もいかさまと思召し、即ち河童を奉行として、三百丈に玉塔の根継を仰せ付けられける。日あらず玉塔出来ければの見分相済み、御開帳あるべし、王との御事故、手偏の某魚ども、道普請をする、差しつめ、蛸の子御寄進という事なれど、此の程聞こし召にして、御開帳たこ老の古例にて、あなのけにさへ、頭でつかまる。これ今の世に用ゐる蛸どうづきの始まりなり。」とぞ。魚どもも蛸匿をはりなかりつく一て

アよいたこなく〳〵。」

蛸あたまでつきながら、音頭を取る。

「何方に如才はないけれども、随分静かにやれるのもんだ。」全体あたまの事なれば、蛸気にいいま

迷惑、ちやな、やれたこ」

河童はあふのくと、頭の水がこほれるゆゑ、岩眼つかひで検分する、

「能く出來たらうが、ねつから見えない。」

「すつと仰向いて御覧なされまし。三百丈といふものも高いもので、上は霞んで見えませぬ。」

龍宮の棟領、錨でめ案内する。

たんかい公ねらひの格をやりたまひ、あま人の腰へ繩を付け、卸しては引き上げ／＼し給へども、海角繩が短く海底まで屆かざるゆゑ、麹町の井戸綱を取り集め、今日は是非々々埒明けんと、急き込んで出かけ給ひければ、思ひ寄らずや龍宮にて玉塔のねつぎ成就し、そつと申せば、ぐわつと申すとやら、餘り高く海へ過ぎて、海の表へせり上げければ、乳の下を搔き切るまでもなく、一ツの利劍もいらばこそ。ちよいと摘んでおつとりける。

海士「是れでは、乳の下を切るには及びやせぬ、ねえ旦那。」

たん「落すまいぞ／＼。たまですくふがよからう。玉とりではない、玉すくひだ。」

龍王臨幸ありけれども、玉は日本へ取り戻されければ、大きに逆鱗まし／＼、「いらざる河童が勸めにて、玉塔を高く仕すごしたるよりこと起れば、その科代としてふたゝび玉を取り戻すべし。」と敕を蒙り、またまた日本人の形に出でたち、江戸は諸國の寄合なれば、此處にて玉の詮議をせんと、小傳馬

胸に箭を取て、心を静くぞやる書なき。

それ主君主獻さんは、天王さまの氏子でなくて、お仕合だ。

すみれんじは胡瓜の香の物ときては、飯より好物だ。今日は、玉の先議に打ち出て、吹屋町へ差し懸れば、お迎が玉とりおやこ絶までも六文ななこと呼で懸けられ、迎が玉とりとは耳よりと、柳の浅を通ひつ、見て居れば、世界は宇治浦が蒲にて、役者は常世にて、浅葱頭巾のやつし、濱村はしとやかな女房にて、これもきれいなつしの綺麗ごと、どうかいふきつかけにて、どれ／＼を打つと、蛇籠の前から吹き水の上がる、その内より玉が出うる可して、頭巾を脱ぐと、なごのいとたれ引抜きにて、龍王のなりとなると、濱村やも肌脱ぎ、乙姫となる。おきつすゞみ、合方兩人、まつと思ひ出るは、宇治の常世とは僞り、まことは我こそ八大龍王のその一人、はつた龍王なり。おことけ、そのつら龍王の息女乙姫とや、さては御身は女なから、ときに取つてのむじやなつらなにすゞ、あの玉取つて我に得させよ、にやがつら無いゝ、じやがつら／＼と面白い最中、河太郎が出て龍宮の兩不常の玉とふて、玉も打つての玉を、見物は龍宮の狂言に河童が出ては、皿いゝふうに、下合せたは、河童とは案じやした、こゝはどうも河童が出ねえおやゝ、狂言の見がつてが惡うごぜいす。」といふ。」

「いよ親玉しりこ玉、濱村屋に河童。此のやく者ではあたる筈だ。」

などと、飛んだ横そつ方をいふ。

此の體を見るより留場の手合かけ寄つて引き摺り出せど、吹き水が頭の鉢へ溜つて、百人力の河童が働き、大勢を相手にして、火水になれと揉み合ひしが、立廻りの中に、かの張子の面向不背の玉をこツぱひのたまに蹈み碎けば、芝居のものども大きに怒り、天秤棒とちめんぼうを始めとして、棒づくめにせんと取り圍めば、今は叶はじ是れまでと、足に任せて逃げ出す。

「かつぱはおり動くな。なんといい身だらう。」

「からかふものばつかり投げろ。おいらはからかはないぞ。念のため斷つたぞ。」

追手のかゝるにてこずり、へつつひ河岸から川へ飛び込み、矢鱈むしやうに水底をくゞり、やうやうとある棧橋へたどり付き、一ト息ホッと吐く處へ、中町の茶屋の娘出であはせ、座敷へ伴ふ。

娘「お前さんは、お馴染みでもあるのかえ。船主はえ。」

河童「何さ船も手重いから、水底をくゞりの、しつほりものは何うでござえす。」

それより河童は見通しへ上り、風雅でもなく洒落でもなく、せう事なしの女郎かひ、子どものくる内、藝者でも上げるといふ處なれど、勿論そんな目かりは利かず、行燈と眺め比べばかりしても始ま

られのゑ、小便に行く振で、うろ／＼とまご付きあるく、廊下へたびゝ子どもの落した玉帳を拾ひ、

これこそ詮議の手係りと喜ぶ。

女『雪のふる夜はさ、一しほゆかし、トツチチチン／＼。』

甚『いい物が手に入つたわえ。この玉帳のその内には摘み取られし名玉も記しあるに極まつた。何はともあれ詮議の手がゝり、ありがたい祝え」

さて玉取の詮議になり、此の玉お国といふ、ここぞけいしやとこむかひにて、きゝのひきをする處、一度ならず洗濯をした芸者なれば、どうして龍宮の河童しきが喰ぶ處にあらず、頭の皿の水もたまらず、やつてく遣り込められ、野暮もそんならいいわえも、久しいせりふづけなり。

『そうかいなだえ。お前もおつぱり分らねえ。燃つた事ばかり言ひなはるの。主はそれに玉帳といふもの、頼んだはじめたか。」

お玉さんとやらはお前さんの始めて近づきになつたといふ事を、言つて置きねえから分りやしねえ。お前はどういふ面相がゝるので、これほどに玉を池へ仕込んで居るのだよ。此の玉の中には、世界とも、面向不背の玉があるに極まつた。ことはのあるまいか、知つてるなら知つてると、はあるまいか、それに言ひ出した、替玉か、偽玉か、なんだかをかしくていけねえ玉だ」

船頭「とんだ氣まぐれな客が來たの。どうやら、めくりの札で見かけたつらだ」

お玉「どういふもんだらうの。かはつた事ばつかり」

味な縁からつい馴れ染めて、河童はお玉に深くなれ染め、通ふほどにけるほどに、來る夜も來る夜もまひどまりにて、ふかき縁となりけれど、其處は流石龍宮もの、味な處に義理がたく、つい牀へは這入らざりしが、お玉が情もだしがたく、夢ばかりなる手枕の、かひなく絶たん南無三方、枕にすればたごけなや、鶏の聲の力水、いは／＼と溢れければ、無慚なりける次第なり。

「お前わたしより、御苦道すなから見なさい、わたしから叶遣しなはる。ほんの髪の毛でも抜かうかね」

ア、つまらぬなき水遊びにて、頭の水が濁りければ、今は力も抜け果て、頭でめだかの河童が病でいつもん／＼思案をめぐらして、盥の中へ突つ立ち上り、子供に柄杓で頭の皿へ水を入れて貰ひ、おかげにの蘇生にでござんす。

河童は下夫の繁治にて、陽氣平穏の祝ひがてら、兩國橋の夕納涼、目を驚かす川の面に、高い提灯を押し立てたる、小舟一艘漕ぎ出したり。これぞ、玉蟲といふ官女の乘つたる船なんめり。さもあれ如何にと見るところに、日本に火繩でぶき／＼もの、ぽんと云つて飛び出したは、紛ふ方なき不昔の

臣上、讀ませてくんぶと申し、[illegible]の送[illegible]、[illegible]の頁[illegible]こゝろあまて、うろ〳〵[illegible]おとしたるまゝは[illegible]

い讀み、又しも[illegible]河[illegible]、[illegible]つして[illegible]る。

[illegible]「[illegible]へば、[illegible]かはまこ」

「ア、ヽ〳〵、[illegible]さんのお[illegible]つれ、ありがたい〳〵」

[illegible]〳〵[illegible]、[illegible]せ[illegible]、[illegible]の絲を一掛[illegible]つて來さつし」

[illegible]大[illegible]」

ある人[illegible]この[illegible]川[illegible]景色にて、[illegible]に對へて問く、[illegible]の枕の序

[illegible]とあるは、[illegible]の榮華を[illegible]と書いたる文

句なり。此[illegible]の繁榮を見[illegible]爲、書いたりしことはほんの[illegible]、[illegible]小[illegible]は[illegible]

八人の[illegible]に[illegible]、[illegible]と[illegible]ることと[illegible]、[illegible]上下大小

[illegible]、日本[illegible]、[illegible]、うろ〳〵[illegible]取[illegible]見たまへば、ま

[illegible]、[illegible]ば、[illegible]、[illegible]は日本人に降

[illegible]に來[illegible]、[illegible]とのたまへば、[illegible]も七面

[illegible]、[illegible]、かたはしの切つて切り散らす。[illegible]、お眼[illegible]

ひ出づるを、何思ひけん掻きつかみ、己が玉を小脇にかいこみ、日本さして急ぎ行く

龍王の年代記に曰く、龍王八大龍神の御眼をひき出づる、恰も吹矢の的の如し、

鯉の先祖、小田原町河岸の如し。

面向不背のまくは瓜、こんなどうみやくでは、親玉の腹を立つも、無理ではなし。

今は河童も日本人となり、淡海公の臣下となりて、金輪五郎今国に習ひて、かつぱ六郎後国と召されける。御目見えのお手土産に、龍王の目玉を龍眼肉とこじつけ、おなまぐさは龍宮のかぶり物。さて何よりの一品は、己が掻出しお姿にさし上げる。面向不背の玉のかほ、玉の初春とし玉の、第一番とご聞えたり、志度の海士人、今は御寮となり、三人の御子をまうけける。

面向不背御年玉　終

亀山人家妖

明誠堂喜三二作
北尾重政画

自序

咄の趣にかくといふ事はあれど、序文を書いていたゞいたのしは、爰に絵草紙問屋[illegible]重三郎、絵草紙作者喜三二がもと八年に来り、未の春の新版青本を頼む
『例年[illegible]頼み[illegible]随分春の内[illegible]、書かんと思へば直に出来る』
などと大うぬをならべる。
『当春[illegible]大福帳に、[illegible]評判[illegible]御座りまして、有り難う御座ります』
[illegible]、[illegible]をいふ
[illegible]
[illegible]

亀山人[illegible]

の外題披露の時節になれば、せめて外題にでも意はなくもう二貫あること

「外の事ではとうに趣向、段々出来上りました。これまで化物の御作は御座りませぬ、なんぞ化物によいのは御座りますまいか。この喜三二に是非お頼み申し上げまする。」

「化物で一ツ案じて見たいもの。先づ外題ばかり出して置かうか。」

「外題をかく所をあけて置きました。」

「是れは真の見ずてんだ。」

喜三二は、化物の趣向にさまざま工夫をこらし、心で心と相談しながらとかく宗匠なし

亀山人家妖

喜三二が心の友に、亀山人を始め、狂歌連の手柄岡持、細見の序をかく明誠堂など寄り合ひ、化物の相談する。

「はやりの怪乱しよくなどで、案じはあるまいか。」

「しよせん真の化物をかいてはあやまる。」

「何かありさうなものさ。」

「岡持が明誠堂か、喜三二が亀山人かと、聞くもきまぐれさ。」

喜三二思ひ付きたる化物二人あらはれ出でたる所、ねつから面白くも何ともなし。

ム一本足一ッ眼の化物、七十の歯の化物、口は耳まで裂けた化物

「作者をなとうたはれて下さい、余り智慧がねえ。」

「御前様そんな事では行くまい、車がゝりで無くてはなるまい」といふた。

「わたくしは此の頃まで、罪がゝって居りやした。」

「此奴も行かぬ。早く消えろ〳〵。」

扨三ッ目化物の王は、こまり果たる折節、見越入道は日々の思案にて、もはや一千五百歳ぐらゐの古狸に、写本を渡すべしと手詰になり困りける時、何処ともなく一人の入道来りて、

三ッ目「わたしは、お前さんの前に控えて御座る面白の化物で、日頃もの化物で言ふは本の事で、今は日本中に野暮な化物はなけれど、昔し化物といふもの無しといふ、作者を化物と見なそうに野暮な二つ三つを、とんと受取りませぬ。お前に実説を三つ目なれども申しやすと、

「成程、いつに面白い、こんどの今夜は大手の手柄だよ。」

「私が化物で結に咋も、つひに化けた事はみぬけれど、ソレ向うから化て来やすから、ここへ来て失してみなさい。」といふ。

さて三ッ目は相応にうかつはしけれども、化物と聞きておそろしくなりける心のままに、すぐに、

あたり闇黒になりて、亀山の化物は行方しれず成つたかならぬか、闇黒にては見えわからず、尤も喜三二が姿も見えずなりにけり。

喜三二目を開きて見れば、忽ちぱつ／＼と明るくなりけり。今まではは目をふさぎて居たるゆゑ、闇黒に見えたりとおぼえしなり。されば化すも化さるるも皆人の心にありて、馬鹿にするも馬鹿にさるるも同じ道理なりと悟りて、それより化物雙紙をつゞりて、初春の笑ひにそなふ。

『先づ上之巻はまぎらかしてしまつたさ。うれしや／＼。』

と云ふ事を述べて、是れより化物雙紙の初まり左様、としかいふ

時に丙午の年九月整　　喜三二

こゝに手柄の岡持と云ふ者あり、同じ狂歌の連中に酒上熟寝、眞栗斧太、混川清人など集まり、人の行かぬ所に手前はある事なれば、おいてけ堀へ狩りに行つて見んと云ひける。

『おいてけ堀をこはがるは、強い白癡な事だ。』

「化が出たら生捕るなどもよからう。」

「ハテもし置いてけと云ふなら置いてくる分の事さ。高のしれたものだ。」

四人の若衆、おいて川端に一列になつて釣る處に、おびたゞしく釣れたを上げて悦ぶ時、向うの藪陰より、「置いてけ／＼、その手前の鬮持を置いてけ。」と云ふに、皆々おそれをなす。
鬮持は人なものの鬮持の[illegible]と三、手前の[illegible]して逃げんとするを、つれの三人出で、「手前の鬮持を置いていけといふ」なれば、[illegible]とて、[illegible]鬮持を[illegible]にて[illegible]付け、
釣りし魚をばてんぐに持ちて三人とも逃げて歸る。
「アイ置いてまゐります。」
「己は先へ逃げるぞ。」
「釣人はやく來給へ。うつちやつて置いて、逃げたく／＼。」
「[illegible]てはおるまい、[illegible]一散に逃げた、[illegible]なかつた[illegible]
い、[illegible]後へ手が廻かねえ。」
かくて向うの藪ぞ[illegible]して出で來たるは、化物の謂ひ主かと見れば、[illegible]
に、立ち出でて笑ふ。
「[illegible]は[illegible]、[illegible]で釣つて[illegible]でも[illegible]
けたえ。」

「おや、飛んだ帶をしまへてあいすみません。」
「あんまり昔など云ふまい。遊びの昔が出ては、困りやまする。」
「今日は、客人の猿へ花魁のお伴をして、歸りで御座ります。」
「これは好成樣、どうで御座ります。」
それより岡持は、留山と連れだち升菫屋へ來り、無性にしやれる。
「友達のうんつく奴等が、己を置いてけぼりにし居つたが、己が幸になつた。」
留山はおいてけ堀にて、岡持に膽を潰させ、ちと氣の毒になりければ、是れをうめる心にて、無性にちよく〳〵らふ云ひつゝかけのあしける。
升人、おいてけ堀の事を聞いてをかしがり、噺を聞きに來る。
岡持、留山がおよ〳〵らにうつゝをぬかし、留山が姿吉原の中にあるか、昔より今に至るまで、唐にも日本にもあるまい女はあるまじと思ふ心より、外の女郎はけしからぬ醜體に見ゆる。
島浦口大きく見ゆる。濱岸目鼻口顔から餘りて見ゆる。瀬澤小さく見ゆる。
升花頭まんまるに見ゆる。升人大きく見ゆる。留川あご長く見ゆる。
岡持いよ〳〵心まよひ、己が男ぶりのよきゆゑ、留山に惚れられたるなるべしと思ひ、鏡に向ひて

見れば、大通の美男と見ゆる故、いよ／＼うぬと思ふ。
鏡を見たて、錦山が狂言でない所がおかしい、
『さて／＼己が内の鏡は、とんだわるく見えるいけない鏡だ。』
升人もすこぶる手者な故、團持がうぬになりたるを見て、よきなぐさみなりとて、思ひ入れ書いて見せければ、また是れにも少々こゝろ動きて、段々身體が小さくなるやうに見え、後には小さ過ぎるやうになる。
『好成さん、アイサほんでおつすよ。』
「己も色男の中へ入れてくれる氣か。』
團持大うね」になりたるが、西澤を始め皆々をかしがり、忘れたる體に狂言を書きければ、漸うその氣になりて忘れた高慢をいふ、
『此方へお向きなんし。』
「ちよつと耳をお出しなんし。」
なぞとお前方は其の耳にうたまくる
「好きさん一寸マア見なんし。からきし私等にやア物を言ひなんせんよ。」

「おまへ方は何が面白さうだね。」

「いつそ[illegible]」

初人、留山、障子の外よりすき見をして、をかしがる。

「しんの色男の氣取りだから、いいねエ。」

岡持、あまたの女郎にかこまれたれば、始めおやしき形に見えし女郎、たちまち様子かはり、

濱田の鼻小さくなる。白河口小さくなる。耳、横顔長くなる。末花長くなる。

留川が短くなる。升風頬細く目ぱち〳〵となる。藤澤せい高くなる。

升人せいひくくなる。

岡持、大色男氣取りにて飛んだ熱を吹く故、皆々にくがる。

「寂人つたら思ひ人を惡く云つて邪魔にさう。」

「最早とうに寂人はなされました。」

「房菊さん、寂人はおかつさい、うつちやつて置いて、來て酒でも飲みなさいな。また來てもいつと惡く、

いいえんし。」

「たしかに惚れられた氣でおつすよ。」

「みんなに惚れられた気取りは、[illegible]蟲がいいでおつすおやおつさんだ」

「あれで親父に、眞に惚れる人もありんせうかね。」

「あれでも、ほんの色男だと思つてゐいすか」

「あいさ、まあさうも思ひいすのさ。」

「まつと[illegible]を來て、[illegible]へよましに」

[illegible]に其人のたるよりて、屏風の外にて散々に譏られしを聞きすまし、我が身にひきあがつて、今まで色男と思ひしも一度に年のよりたる心地、もとは釣られし恋ひに事なれば、浦島太子の様なれい、[illegible]の[illegible]由人、大事な[illegible]ん所も、ハテかはつた事になれば[illegible]

かくては傾城の顔が、さしづめ鬼の顔に見える所なれども、それを悪く云はれても、また贔屓な心

「やつぱりまいた見[illegible]、手前勝手なるべし。

今まで悪く云ひし[illegible]、[illegible]一言に[illegible]。

「今のをみんな聞かしつたさうだよ。どうせうね。」

「[illegible]事をまつせんに」

此の所にて家の化物をお目にかけますと、魂を吹き出し、[illegible]持つて曰く、

「すなはち化物と申すも、みな心より發る事にて、心たゞしき時は化物にも遇はず、皆この心の迷ひでござる。さらば飛ばぬうちに、呑込んで仕舞ひませう。」

龜山人家妖　終

悦贔屓蝦夷押領

恋川春町作
北尾政美畫

大言

夫れ草双紙の作に六義あり。一に曰く趣向、二に曰く意氣、三に曰く出來、四に曰く働き、五に曰く拵ぎ、六に曰く鑿い、はゆる是なり。予四五年以來、草双紙の作を爲して既に之を愛に辭め、南の本に丁寧の二此の六義を備りて、大極上を論引ます、思付きの纜を作りとウ〻く

天明八戊申年正月佳日

壽山人戀川春町

抑も鎌倉の御所に於ては、御兄弟の位牌を掌中不和に六ヶ敷の、奥州秀衡が館へ下り給ひしとこれぞ、古は御兄弟不和と云ふ事はなし。頼朝に差置かるゝ時は、御兄弟の事ある大名なるにはならず、少

悦贔屓蝦夷押領

なくば四五十萬石も進ぜられねばならず、かかる御儉約の御時節に[illegible]と、[illegible]の秩父が案じにて、御中不和の分にして、秀衡が館へ入れ申したるなり。行く〳〵は、秀衡が奥州五十四郡と共に、[illegible]してやらうと云ふ狂言なりとぞ。

義經公は萬事存じの名將にて、鎌倉の樣子も秀衡が心腹も、よく御存じなれども矢張[illegible]にて、一ツはいにかかれて居給ふ。

秀衡もさる親父にて、此のもくろみを承知ゆゑ、表向を美しく、愛想づかし無しにのがれんと、蝦夷追討の事を進め申す。

如何さま[illegible]色高直の時節、義經御一人ならず、龜井、片岡、伊勢、駿河、武藏坊、常陸坊、屈竟の奴等に食ひたてられては、食客にはしかねる筈なり。

「鎌倉の御怒り強く、近々討手を差し下さる由に候へば、一[illegible]蝦夷の島へ[illegible]、彼の島を討伐り從へ然るべう存じ奉ります。兼て斯くあらんと存じ、持佛堂の下から蝦夷まで[illegible]穴をこしらへて置きました。」

「委細承知の助、早々に打立たん、用意々々」

「此兵は何よりの用意に、何でも蝦夷迄で、大井をこしらへて來よう。」

房の衣一の如く、義経公は藤井、片岡、伊勢、駿河、武蔵坊、常陸坊を従へ、拝借当山の岩穴よ
り、この[illegible]の種にぞゆく〳〵と立ち出したる所、忽ち蝦夷が岩辺に出でたり。是にて蝦夷八ニカサシ
テヘ、高島鵬雲と云ふ人の手捕り、案内者としたきと、
藤井六郎、蝦夷人を手捕る

『をつとせい動くな。此の[illegible]口は松前點で、蝦夷へは[illegible]』

「よし〳〵、[illegible]、[illegible]、此の無念をはらしてくれよう」

「藤井殿々々、蝦夷の[illegible]も川の[illegible]ことは、[illegible]のひ[illegible]はしと[illegible]たこと」

[illegible]は山をねらふとして、[illegible]のために[illegible]ていたい』

と[illegible]義経主従、[illegible]を[illegible]にし、[illegible]へ[illegible]、[illegible]と迄六
[illegible]、[illegible]の[illegible]といふ[illegible]一此の[illegible]、[illegible]へ[illegible]と[illegible]へる
され[illegible]義経は天狗の弟子の[illegible]、鞍馬の僧正坊[illegible]はし給へり[illegible]給ふの[illegible]、[illegible]なく義経主
従、[illegible]の[illegible]の如く、[illegible]の[illegible]給ふ。

「[illegible]、[illegible]の[illegible]いたしたい[illegible]」

[illegible]の[illegible]は[illegible]を[illegible]、[illegible]と[illegible]、[illegible]、よ[illegible]

『梅が枝ならば三百両にやる所だが、むらさき下濃もはげする色だから、値にはなるまいのをつとせい。』

團觀はおほきにあきれる。

『人の瀧登りは始めて見る。妙々々アハヽヽヽヽヽ。』

北國の瀧をのぼり、奥蝦夷の地に至り給ひし所、實に不毛の地にして、人跡絶えし宿るべき所もなければ、荒海より昆布を持ち來りて、かりに陣家をこしらへ、一夜を明し給ふ。

奥蝦夷は誠に北の果てゆゑ寒氣強く、六月土用の内ばかり少しあたゝかなる故、四季一度に持ち込んで、其の景色いふばかりなし。たゞ食物のないには困ると云ふ。

『此方のうは寒中なり、こちらの方は土用中、あつくぬるくの鹿くさくと云ふ所だ。』

昆布を火燵蒲團にして、片端から茶受けにする。

『くわし昆布ほどに味くない。』

『蝦夷と云ふ所は飛んだ所だ。半身は暑くて土用かと思へば、半身は寒くて寒中の様だ。是れがほんの半季はなはだしいと云ふのだ。』

蝦夷の地は五穀拂底なるに、奥蝦夷は別して是れなし。たゞ有るものとては昆布數の子魚ばかりなり。義經秀衡が館より用意ありし兵糧も少なき故、魚をとりて兵糧の足しにし給ふ内に、別して鯡を

とり、焼鮒にしてたくはへ、又米をとぐたび、おびたゞしく白水をかこひ置き給ふ。

「焼鮒は味いやつだが、白水は何になる事だか知らぬ。よく洗濯にかゝさんがほしがる奴だ。」

「毎日々々鮒を焼くにもあき果てた。ふなをやくなら春日山、これも川のちがひとて。」

「亀井殿のほふらくは、きついものだ。」

義經公は焼鮒白水を、オンテイフッテエコしうれん大王の城へ押し寄せ給ひし所に、大王かずの子を以て数十丈に石垣をつき建て、昆布あらめの藻を干し固めてさかもぎに引き、用心きびしき所を、かねてたくはへ置かれし白水を雲土によせて、味噌煎を以てはじきかければ、忽ち柔かになりける所を、あとより醤油をにじきかけて殘らず食ひつくし、「得たりやおう」と攻め入り給ふ。

「白水は何になるかと思つたら、なるほど親方の智恵は格別だ。」

「イヨ玉やと、ほめてくれろ。」

蝦夷ゝ攻め落し合戦に及びたる所に、彼の蟹甲の陣道具の樣に、蝦夷人は蟹殻を數枚重ねてきたゞ是れを具足にして着たりければ、射れども通らず、義經の軍兵あぐみ果てたるばかりなり。其のとき義經少しも騒がず、「無瑕の幽靈から見ればお茶の子なり。」と、蟹を置きたる焼鮒を取り出し、醤油に浸して大鍋にて煮出し、柄杓をもつて蝦夷人にあびせければ、忽ちやはらかになり

敗軍する所を、亀井片岡伊勢駿河、「得たりやおう。」と矢さけびして、箸をもつてはさみ切り、上戸は酒の肴、下戸は[illegible]の花にとて、皆[illegible]にそしたりけり。

「こつちの大將、海尊働く。」

「四ツ谷[illegible]、だら/\とお茶の水、おしよせ御出で、よう/\と」

「向ふも[illegible]箸打ち、[illegible]切り、鋸で挽く[illegible]」

「ア、ふるい/\。ふるしくてならぬ。」

昆布[illegible]のやうになり、箸ではさみ切られて敗軍し、残らず降参しけるに

[illegible]大將は、[illegible]容顔美麗なれば、義經公も[illegible]主になり給へ」と[illegible]ければ、下地はすきなり御意はよし、吉日をえらび婚姻をとり、昆布のふすまの内に、[illegible]の契りを結び給ふ。

[illegible]武藏坊を見立て、[illegible]婦のかたらひをなし給ふ。

世に[illegible]はたつた一度切でありきめたと云ふはきつい[illegible]

義經公の御前に、亀井片岡伊勢駿河も、びろ/\した[illegible]たちと、それ相應にきまりけり。

「見事の夜着布團は厚くて重たい、あらあの鹿の子に染めさせてやらう。」
「のんで上げよう、す、おはないじやアねえ、おびえじやないか」
「一體、重盛たら安徳の御下だが、安鶴山ではたかの比丘尼を買ふこゝろだ」
哀興坊藤坊すれのみならず、淺草大王の詣となり、淺草一國を手下に給ふ事、ひとへに佛將が儀を捨させとて、法眼に數多の御詑を下し置かれ、あまつさへ靈非出離佛陀の應訴說に俗を任け給ひ、出頭がありなく、其の家來從者にも、いさゝかの事、聞しくい、ひとへにいふ兩人を御前まで呼び出され、此の二人も、出家に何たる者に及ぶ、ない、とて、此の上御隱居なれしく相續の體を、に便を渡され、昆布、の御の、下し置かれる。
「伊達の三郎に、若手にて見識、れし、こと、蝦夷地にて珠の上か宜しき評判なり」
「蝦夷人のもの、しも結構な御取立て、各々ふた御沙汰に預りそのふたなす、家來ともまでに集物下しおかれ、莫加至極」
などと團觀そらをがみの、ちよくくらをいふ。
「こゝのうちには、私ども、昆布家業に仰せ付けられ、先づは有り難山のこんぶゞでござる」
團觀が家來兩人、さほてんのまゝで召し出さるゝ。

團觀は、義經の御旨に叶ひしを幸ひに思ひ、大義をはからんと、蝦夷中の美なるものをえらんで獻上し、日夜淫酒を勸めまゐらせ、其の上に己がもくろみを勸め申す。

「團觀一ッ飲んで山々、己は女と酒さへあれば構はぬ。其の案じも至極よからう。手前の存じよう、しさいに働け〳〵。」

「とかく人世の樂しみは色と酒で御座ります」これには日本で金銀、蝦夷では昆布數の子で御座ります。この昆布數の子を澤山お藏へ入れますには、先づ日本より荒布相良布ごまめを澤山取り寄せ、昆布の代りにあらめ、數の子のかはりにごまめ八疋相渡しまして、それを通用致させ、昆布數の子引きかへ定座を申し付け、其の上に蝦夷中の海昆布、數の子の總ざらひ、お倉に付けられましたら、宜しう御座りませう。」

「話し坊海尊が芝居ばなしも面白いが、蝦夷人にはわかるまい。ほんの話し坊主に聞き下手だ。」

常陸坊海尊は、ゆく末仙人になる程の者なれば、折々稽古ながら日本へ飛行して渡り、吉原堺町その外の珍らしい事を見て來て、義經の御前へ罷り出でて話す故、蝦夷中で話し坊主といつて、あすこへも爰へも引つぱられる。

團觀は、義經公に美なる物を數多御寵愛の御側に差し上げ、淫酒に溺らせ、傀儡人に遠ざかり給

ふやうにしかけ、兼てより心をかけまゐらせたる傀儡夫人を、折を見て口説きけることそ不徳義なる。義經公物のひまより此の體を御覽じ、いよ〳〵團觀が狂詐を見すかし給ふ。

『コウ〳〵濱村屋に音羽屋、ありがてえ。』

「いふもうし武藏ぼう、武藏あぶれでは師直めくから、直ぐどきに致します。』

傀儡夫人は團觀にいちやつかれ、大のこまりにて持給ふ一生ある者と云ひ、主人に對し不届」など

と威しても、團觀あつくなつて聞き入れず。

昆布かきの子引替定座をたて、義經公の御威勢を以て申しふらしける故、あらめ相良布ござるを取替へるはいやなから、蝦夷中のもの目を引きも切らず昆布かきの子を持ち來り、引替へてもらふ。

『此の昆布は少し切れか御座りますが、何とおまけにはなりますまいか。昆布まけの煮こゞりといふ所さ。」

「そんなやつでも、一俵持つて來て八俵になる所は、先づ得なやうだ。」

車力「そんなとくなのやつとこな。』

そもそも蝦夷國は、五穀のみならず織物の高いこと當てなし。蝦夷にしきといふて有れども、是れも北京より渡りて國の主ばかり着し、其の外は當てならず。依つて皆々昆布を身にまとひけるを、こそ

の爲には格好が悪い」とて此の度、蝦夷錦を始め、昆布にかはりじま或は小紋等の仕出しをなして、殊のほか見ごとなる事なり。

蝦夷や日本の通ひと、噂を出されし故、えぞには八百八町を開き、殊の外にぎはふ

「是れはまつひでは御座りませぬ。ほんに昆布のやうで御座ります。子供よ一寸お茶をあげな。」

「京傳の小紋さいの様な小紋はないかの。」

「是れは明照小紋と申しまして、殊の外はやります。」

「権門がたへ進物にするのだから、高くてもよい色合のよい昆布を見せやれ。それは上州のまがひあらめではないかの。」

蝦夷も八百八町の外に、海邊の昆布の茂りたる所を切り開き、日本の吉原になぞらへ、新葦原と云ふ女郎屋を取立て、義經の軍法より出でて、町を五十五町町とわり付け、大門口を模門口と名付けたるは、強い出來合の詩を詠むやうなり。

蝦夷始まりてなき事なれども、殊の外繁昌にて、客のたゆる事なし。されども金銀かつてなく、かはりに昆布かずの子を使ふ所なれば、有徳なる蝦夷人は、昆布かずの子を四ッ手駕にてかつぎ込み、全盛かつくす。

『[illegible]、おもしろいのは[illegible]があつて[illegible]中将の[illegible]といふ所だ。』

「[illegible]も[illegible]でかの、今夜は[illegible]にせう。」

「見ろ、一ヶ卿来臨、有り難山の鳶が原。義経公はさしあひだ。」

[illegible]家来、ユンチェンクワ、クラミンテエル両人も、蝦夷中の諸人の用ゐるに依つて大の昆布を[illegible]

す、日本にあつて[illegible]、然し昆布[illegible]、あらゆる[illegible]

[illegible]者共[illegible]は、昆布から[illegible]心物を受け[illegible]、結句[illegible]取[illegible]替[illegible]

[illegible]の事なり。

「向く、[illegible]ので、何分宜しく御取持[illegible]おかれますやう、、、、、、」

「隨分承知々々。外なら決してなりにくい事さ。」

[illegible]義経の御用[illegible]、昆布[illegible]

[illegible]四百五十六貫[illegible]

[illegible]、十分[illegible]義経の御蔵へ[illegible]手前[illegible]御蔵[illegible]持[illegible]

[illegible]、お腹へ[illegible]、味い[illegible]

「申上[illegible]昆布[illegible]此の内にある[illegible]」

「車を引きの屋のどらやきは、氣なしか」

「昔ならば、鶴の味噌吸に四方のあか、一ッぱい飲みかけ山といふ宿だ」

團觀は蝦夷中の昆布かずの子を引上げ、十分の一を義經の御藏へつめ、殘りは皆せしめうるし故、何不自由なく、我が居屋敷を善つくし美つくして、普請をし、義經公を御招待申しける。

これ義經主從を酒を以て強ひつぶし、殘らず皆ごろしにして、己が蝦夷の大王となり、日頃心をかけし傀儡夫人を女房にせんとのたくみなり。

義經公は其の位の計畧はじめよりの御存じにて、團觀をわざと取立て出頭させ、蝦夷中の昆布かずの子を殘らず取上げさせて、而うして後に、團觀が屋敷へ御入りあるべきよし、仰せ出されける。

團觀一世のはれと、山海の珍昆布をつくし、義經公を御招待申しける。

義經御變寄特酒を以て、しうれん大王を始め殘らずこちらから強ひつぶして、前後も知らぬ内に、昆布にてこしらへたる宮殿樓閣衣類まではぎて、殘らずきざみ昆布とし、かずの子の石垣は倉につめて、さしも結構をつくして造り立てたる蝦夷を、元の島國にし給ふ。

しうれん大王はじめ、其の外蝦夷人、反つて義經の計策にてしひ潰され、前後も知らず醉ひ臥し、丸はだかにされる。

「夫人や、團觀といふ奴は手頭のやうな頭で、其方を口說くとはいやな奴だ　ヤンヤヤンジンハイ、ひめいもんだ。」

「二十三夜には、此の昆布へあぶらけを入れよう。」

「動、これで昆布が一把、一萬出來たぞ。まつとせい出して刻み給へ。こんぶ大日九代の後胤はどうだざうだ。」

丹波與作小唄にもなぞと、ヤンヤヤン寢言をぬかす。

そんな寢言は畫きやすがいゝ、業東寺の寢言だ。」

「平の知盛よりは、盥の雨ものは、草雙紙の作者だかまだ。」

「作者仲間で浮名につ、こいらが高點だ。」

義經さまは、まづいゝてんとこしらへたる、昆布かさの子を強につめ數萬俵にし、鞍馬の僧正坊の力をかり、伊勢夫人そのほか美なるもの、龜井片岡伊勢駿河武藏坊常陸坊もろともに、雲に打乗り飛びゆき給ふ。

「自郎の大黑を見るやうだが、俵と雲の上はのりが心が柔かでよい。俵くもが女をを………らしい地口だらう。おさらばく。

「入舟がしたと思つて、直段が少しだれよう。」

「此度もあらはれたから、ぜんざいはよしにしよう。汝元来つまりの如し、行きたい所へうつ走れ。クワツ。」

是は[illegible]、其の[illegible]大目をさましたる時、日本[illegible]、是[illegible][illegible]たる[illegible]なれば、あまり[illegible]かりなり。

「是れが誠の[illegible]の夢の枕だ。夏かと思へば雪も降りて、四季[illegible]は目の前にて、亀井片岡伊勢駿河武蔵坊弁慶海尊も忽ちに飛び去れば、面白くも何ともない、[illegible]不思議やすやす」

「扨ては[illegible]のやうだ。」

義経公主従[illegible]に[illegible]、[illegible]と思ひしに、[illegible]昆布かずの子[illegible]、目[illegible]

本鎌倉の館へ帰り給ひしなり。

元来頼朝公と御中不和といふは、始めのからふに云ふ通り表向ばかりにてはなく、頼朝公にも殊の外お[illegible]にて、夜の昆布かずの子を浅草の市に出し売らせければ、莫大の[illegible]けにされて、栄え栄ゆる鎌倉山、さかえる御代ぞ目出たけれ。

「馬だく〳〵、今年の市にやすいものは昆布とかずの子だ。」

「あけて〳〵」

「能登守さま〳〵」と言ふ女、[illegible]

怪異[illegible]押繪（終）

[illegible]

復讐後祭祀

山東京傳作
北尾政演畫

頃は元禄年中の頃かとよ、遠州濱田の城主なにがし殿家中に、簡開井横藏と云ふものあり。つねに短氣なる者なりしが、同家中横井與太右衛門と、いさゝかの口論したるを遺恨に思ひ、或夜忍び入りひそかに害し、立ち退きけるを不敵なる。

横藏は、與太右衛門を討ち逃げのびしが、よく／＼思ふに、昔より人を害したるものは助かりしためしなければ、いづれ遅かれ早かれ終に討たれんと取つて返し、かれが悴要太郎に討たるゝ。横井與太右衛門が悴要太郎は、即時に父の仇を討ちしこと武運強く、ひとつには孝心の致す所、ひとへに佛神の加護なりと、太守御喜びありて、首尾よく家督相續を仰せつけられ、お盃を下されけるこそ有り難き。

コレ作者の大べら棒め、今時こんなまじめの、仇討の趣向が見られる者か、とはおれが／＼の細工

はりう〳〵、仕上げを御覧じろ。

是れにて先づ、まつと仇討の始終は済んだれども、要太郎はつく〴〵思ふに、昔よりの仇討の本を見るに、主君の仇を討つには野に伏し山に伏し、身を粉に砕き、或は日を暗夜に送り、無念をこらへ〳〵忍び、貧をいとはず、憂れたる目にもあひ、悲しき目をもして、仇を討つ事、忠孝にはあれども、我は父を討たれし即時に仇の方より名のり出でて、なんの手間隙もいらず、いはば造作もなく仇を討ちし故、どうも孝の道うすし。後にするも前にするも同じ道理なれ。是れよりそれだけ苦労艱難をせんと思ひ立ちけるぞ、どうか理窟らしき事どもなり。

「ハテさうぢやなあ。だれぞうしろで、つけを打つてくれればいい。」

要太郎は心におもふ仔細を、主君へまうし上げ御暇を願ひければ、太守なにがしの御同心、役者にて、「これは成程そのほうが申す所理に當れり。前へするも後へするも同じ道理なり。」とて、ことに心づいたり、「さて〳〵その方は孝心なるものぞ、われはよき家来を持ちたり。」とて、甚だ賞美ありて、御家の重宝岸井の刀と小濱井の差しぞへを下されける。これ太守もさる者にて、仇討の古実を失ひたまはぬ所なり。

「ねがひの通り申しつけて遣はす。」

「首尾よく苦勞仕りまして、目出たく歸參仕りませう。」

「暇を願つて、苦勞をしに浪人するとはもの好きな男だ。己なら其のひまには、丁子屋か扇屋へでも行つて、しやれるものを。」

慶太郎は、心のまゝに御暇を願ひ下し、ごぜんの首尾残るかたなく、拝領の大小を帶し、金三百十兩を懐中し、いづくを當にしとも無く、立ち出でる。其の樣に遠方へ行く氣でもなければ、まづ懐あひせて蔵屋敷にて出かけた。併し無分別は無きものなり。

「國持たぬ身は、あゝまゝになる世の中かやァ。これで旅行きまた、もの言ふものならば言分はない。眼ある身のうかゝましや。他所の便の無いのと、旅にはさみしいよ、女郎の情のないのとは、さてくはり合ひぬけのしたものだ。己も度々こりたものだよ。」

かくて慶太郎は、さつとした一家親類にいつきあひもなくありけれども、但し一人、乳母の所なぞに忍びける者、ことに貧乏な乳母なりと心付き、乳母の所を訪ね、かくくの次第なりと語りければ、「それは御尤なる御難儀でござりまする。旦那さまへの義理には、すゐぶん御勝手なされませ。」と申します。乳母も同じく役者にして、姿が舞に似はせうでやいな。

「此のやうに、見苦しうは御座りますが、お心置きなく、いつまでもお泊りなされて、御本望をお遂げし

遊ばせ。」

「それはうれしい、よきにたのむ。」

要太郎はよく／＼艱難苦勞なる主人に氣をつけして居たりしが、乳母が娘がお由とて、美しき生まれにて今年十五歳なりけるを、まづ此の娘おれが色事でなければ仇討めかぬと、あるとき無理にくどきけるが、娘は生れつき放逃けあるきて、相談はかのきし出來ぬなり。

要「これさ野暮な子だぞ。してまへに桂川の淨瑠璃を聞かせてえなア。」

由「そのやうに毎日、せゝりあきると言ひつけ申すぞ。」

要「こゝでから私がのぞいて居ぬと、仇討の草雙紙めかぬて……」

要太郎は門口にて六部を見かけ、ほんまの仇討なら、手がゝりになりさうな修行者だ、親の敵と名のれ、と云ひてえやうだと、未だ晝時分だに「修行者お宿申さう。」と云へば、六部は「それは有り難いが、今から泊つてはまじやくにあひませぬ。それ許りではなく、六部の日高にとまつたも、つまらぬものさ。」

要「はてさう云はずとひらに泊らつせえ。とまり錢をこちらから出さう。その錫杖の中には大方槍が仕込んであるだらうの。これ／＼貴樣の笈の上は、井筒女之助があたまと云ふものだ。」

「こんなまでに宿を貸したがる人もないもんだ。薄氣味の悪い。そして鷄が旅をとめるのは、法度では御座らぬか。」

要太郎は毎日すゑ膳で飯を喰ひ、朝寝はしたい程して、座敷に居るより楽なれば、こんな事ではなかなか孝行にはならず、どうぞ苦勞をする手がゝりもありさうな者と思ひ、旅は憂いものと諺にもいへば、旅をして見たしと[illegible]江の島鎌倉と志し、路用もたんとは持たず、馬にも乗らず、ある時は野宿もし、少しはつらいめをしたが、其のころ東海道に横行する護摩の灰の張本、いなばの權と云ふ悪者、或る日の茶屋にて要太郎に落ち合ひ、要太郎がのろさうな所へつけ込み、盗人を取逃にて、「盗人なり。」と言ひかけて、さんざん打擲する。要太郎は此奴大盗人なりと思ひしが、いやいや此の無念をこらふるが卽ち孝行なりと、歯をくひしばつて堪へて、金子十兩出して詫び入る。[illegible]しよいてがゝりに成りさうな悪人、其のかたき討ならば、十兩でも安いものと思ふ。

「大盗人め。かうだぞ〱。」

「かう[illegible]無念を堪ふる時は、さぞと孝行であらうか〱。」感心が又くゝつたま、こんな時であらう。」

「あの侍は[illegible]、[illegible]へせいのよい人だ。」

栄太郎は旅に、、夜蕎くいて、吾身して顔をしのぎ、又ながさみにもなりし恐、こんな事で妨な訳く[illegible]

[illegible]、[illegible]物は[illegible]、酢、鯉に胡椒、鮒に甘草、河豚に煤など、食合の物をこしらへ、[illegible]。

「鮒に甘草左に我が子とは、島物語にある文句だ。」

「そりやアそうと[illegible]、腹がすいて中がすくやア[illegible]——とは鷺娘の句だ。」

栄太郎様が夜食、蕎麦[illegible]、いけしやアノ[illegible]、それだ〳〵としてるればせん方ない、それでは痩せ衰へて病気のかてんと、毎日〳〵薬を飲み、薬も時にかけ湯をつかはず、とかく湯にはいらぬ風は一向に無い。

「大ぶやせたねへ。是れでは誰が見ても病人と見える。これでさかやきがのびると妙だ。」

「ア、毒な薬を飲まつしやりませ。」

栄太郎は顔にれと、風かもんだ有ッて、風でも引いたかして頭痛がして熱が出でければ、これはよくしたものと、食ひ物は[illegible]食にて過し居たりければ、段々やせて、どうか本の病気になりさうなれば、乳母はひそかに案じ、鉢にて人参を買ふ代に娘を売らねば、栄太郎様の御心に叶ふまいと、孔雀長屋の女衒をたのみ、娘を五十両に売りければ、栄太郎が所持の用金に合はせ、金ばかりま

なし申訳なっ。[illegible]郎は[illegible]しくもなけれど、[illegible]しげなる[illegible]を上げて[illegible]く「[illegible]んで、真に[illegible]な二[illegible]は
うない人へ[illegible]大分敵討めいて来たわえ。」
『この乳母や、まうあきらめますとも、[illegible]泣いて[illegible]。』
「これも皆御主人のため忠義ぢやもの、もう〳〵泣くまい〳〵。」
「悲しう御座りまうすわ。」
「これも判人ぢや〳〵。[illegible]な人だと思ふまいぞ。商賣なれば是非もない」
「[illegible]水の[illegible]の流れの身の習ひ、禿から[illegible]廓に住めば、唯[illegible]、追付[illegible]
よし花魁に為ると、竹村の主が[illegible]。」
榮太郎は[illegible]娘の[illegible]けれど、[illegible]余程[illegible]、[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
これも榮太郎は、いよ〳〵敵討の[illegible]尺八を習ひ、[illegible]

つして花街へ入りこみ、丁字やのいさ山と云ふ女郎になじむ。

「せきのや、のぞかれたまんたよ、さうしてたに一寸きてくれしと云うてきやつ。」

其の頃丁字やのいさ山と云ふは、容色よく心だてもやさしく、全盛日々にまさりければ、要太郎が心に思ふは、この女郎こそまさかの時は、助太刀をたのみても、後へは引かぬ女郎なるべしと思ひ、乳母の目を忍び夜ごと日ごとに通ひ、餘ほど心安くなりければ、心の中を打明けて頼む。

「それがし誠は親の敵をつけねらふ者の忰、此の人高い吉原へ来たも敵にめぐりあはん爲、そなたも誠の心あらば、ともぐ\力をそへてくれ。必ず他言せまいぞ。」

「私しも常々、何ひのある身だと云ひなんしたから、わつちや山師かと思ひんした。わつちやァ助太刀をやらは、つへたとして見た事がおざんせん。わつちが出來ればようおざんすが、いつそつらいよう。」

いさ山は要太郎が敵討なりと云ふ話を聞き、大いに驚き、こんな客人をうかうか呼んだら、とんだ事が出來ようと心付き、わざとあいそづかしを云うてつき出しけるが、要太郎は寐耳へ水、つき出されて見た所が、ちやうど少しの間に所持の金子は皆になり、いまは乳母の所へ歸るも面目なく、久しい願ひにてたうとう非人となり、此の時始めて誠のつらい事を身に覺え、餓ゑに勞れければせんかた

なく、主人より賜はりし大小を質代なさんと、古金買ひに見せければ、大小で百三十二文に買はんと
いひける故、今までは抜いても見ぬ大小を、つく〴〵見ればなまくら故、きもをつぶす。

「是れが古金買ひさへ、御目違ひでござらう。私も腹からの非人でもなく、沙汰はない事、親の敵をつけ狙ふまねをして居ればこそ、此の様に身もやつせ、この大小も主人より拝領せし、御家の重宝青江下坂でござれ、二ツ胴にしきうで砂までずつぱり切れます。それから御覧じて、ねうちなさりまし。」

「一ツに御家の重宝だ、道理でさかさまにすると、随了にしかならぬ。」

栄太郎は今はなほさらに悲しく、憂き艱難をしすぎて真につらくなり、飢ゑて死なんよりはいつそ身を投げんと思ふ折、行列ゞしく大名の御乗物きたり、戸を開かせ出で給ふを見れば、濱松の御主人ゆゑ赤面する。

「あらしや如何に栄太郎、汝がたはけなる案じにて、暇をこひける故、心にかからはず暇をつかはせしが、今この時思ひ当りつらん。其の時与へし大小の銘を倒に読んで見よ、今はこひしきとよめり、昔の武士にぞ乞食しからん。又なまくらを与へしも、本の仇討でなければ、大小の役にたたずともよき故なり。其の乳母の所に居るよしを聞きし故、ひそかに乳母を呼び申しつけ置きし故、雑を食らは

人となりし時、他の者と取りかへ置きしものなら、神奈川の方より、乳母が娘を買ひ取りしげにんと思ひしも、皆まはし者なり。娘お山は奥の傍使ひとして置きたり」

と、始終語り聞かせば、一はお山は更して花嫁姿にて立ち出づる。

「しかしこれに気がつかで、狂人のまねして、大中を走れしばすなはち狂人なり、孝行のためなれば、今までのそれはさもあるべし、その如くに家来とすべし。又お山も、あがたはりの道具に使はれしも深きえんなれば、今より妻として乳母を引取りはごくむべし」

と、残る方なき御はからひにて、かかる才智の主君より下さるゝ妻なれば、才はさいはひとおもふと、さいわくしにて妻にする。

「兎角萬事ゆきすぎると此の通り。」

明くる朝は、主人のなさけにて元の武士に立ち帰り、父母太右衛門と伯備前の亡霊を霊に祭り、主人へ暇乞ひ、舞坂下へ二三十間四面に竹矢来をゆひ、白木にて目出たく婚姻の高砂を謡ひ、白装束にて祭禮を行ふ。今まで鳥太郎かつくしたるなさけに、みな彼の禁忌のふ今の世までも、是れを権の祭禮と言ひ傳へる

「父のまつり覚えたか」

「しうとの祭おぼえたか。」

「なるほど後の祭といふものは、見るにはりあひの無いものだ。」

検使の役人さまはない、警固の役人も[illegible]つゞる。

さても其の日に首尾よく祭禮終り、おやまが白装束を着に要[illegible]と[illegible]、[illegible]

云ふも久しい奴よと云ふが、やつぱり久しい奴さ。まん燈の造り[illegible]、[illegible]の[illegible]の役にたつ[illegible]

如才のなき世の中なればなり。

「[illegible]、[illegible]」[illegible]

復讐後祭祀 終

仁田四郎富士之人穴見物

山東京傳作
北尾政演畫

東海道道中雙六富士川之邊に曰く、富士之白酒名物云々、いま我が本町、京橋の傳が賣り弘むる名酒は、似たものにあらぬ仁田四郎酒、富士の名物にして、精にあかく、風味は素より甘からねど、世人の口に好しもきにあらず、もし下戸上戸有つて是れを呑めば、其の味ひはしんぬべし。山東唐洲こゝに記す。

東鑑を見るに、建仁のころ、鎌倉將軍家の臣に仁田四郎忠常とて、五月のかぶと人形にて皆さま御存じの、武勇たくましき人なり。せいは六尺有餘の大の男なれ、背骨も一寸では足りぬゆゑに、仁田四郎と名乗りけるが、由緒舊家に其の心をのだね、まさかの時には、君の御馬前にていさぎよく打死せんと、太平の御代に住むを歯痒くおもひ暮しければ、もとより天性の普通にして、こゝでも

動かぬ大極上々黒吉の大野暮にてぞありける。されば女などは、閉いだ眼で見ることも嫌ひにて、色氣とては微塵もなし。この通りの草雙紙によくある形にて、鎌倉の將軍頼家公は通なる事を好ませ給へば、付き從ふ大小名、われ劣らじと大通を行ひける中に、仁田四郎のみ大の野暮にて、粋なお話のお相手にもならざれば、頼家公彼が野暮にて一生を暮さんことを不便に思召し、如何やうにもして大通にして遣りたきと、御評議まちまちなり。

「眞劍で足を切つて見せねば、當世も賣れぬ世の中に、あの樣な野暮では世が渡られませぬ」

「南瓜をか生搗きな粉で食べる世の中に、さりとは野暮な男でござります」

「何でもかでもそのやうな事をいふと、重忠がやつて見たがり、名にし負ふ石部金吉を「柔軟にしてお目に懸けん」と請負ふ。

畠山重忠、仁田四郎が宅へ上使に來り、申し渡しけるは、

「昔より、富士のひと穴に妖怪すむと言ひ傳へけれども、この穴へ這入りしものは再び出づるものなければ、如何なる變化の住むことなるか、今に知る人なし。貴殿は世に聞えたる武勇の人なれば、この穴を見屆け來るもの、貴殿ならではなし。依つて、ひろき鎌倉の大小名のうちにて貴殿を選人として、此の役に仰せ付けらるゝ將軍の上意の旨、心得召され。」

と、なじやうになでごかにして、仁田が氣に持つて來いな事ばかり述べける。

「上使の趣、委細承知仕つてござる。要は端近、奥の一間でイザ一獻、召上げられて下されませう。」

「貴殿の御挨拶は、鸚鵡石の素讀を致さるゝやうだ。」

仁田四郎は、かね〴〵武帝の願はれざるを殘念に思ひ居たる折ふし、この度の仰せを受け、もし穴にて怪物に出であはゞ、生捕にして手前の器を見せんずと、家來どもは麓の町に控へさせ、唯一人、富士の人穴へ這入る

仁田四郎が家來、さんだんの五郎、

「モシ旦那、この穴へお這入り成されますと、京よし原へ拔けます。道中雙六で見て置きました。」

仁田四郎の家來の名、これの五郎にもあらず、鸚鵡の聲色に奇麗なるの名なる、いかにしても馬鹿らしき名なり。

さて又、仁田四郎は人穴へ這入り見れば、闇も金路にして黑白もわかず。然れ在村に火を附けて、ふり立て〳〵行くほどに、上よりは冷きしづく落ちかゝり、さも物凄き有樣なり。

仁田四郎、文武兩道の不敵さなれども、悲しきかな、當時の世事にうとく、たゞ穴のお先まつ暗にて、高わからぬ上すものではないが、とんと無茶なり

仁田四郎は、道の二三十町も行くと覺えけれども、向うに何といふ當てもなく、一向まつ暗にてわからざれば、松火をつぎたし／＼行きければ、遙か向うに黒き衣物着て、色の白き人顯はれしゆゑ、此奴化物ならんと思ふ、

『魔性のものか、化生のものか、正體をあらはせ』

『此處は、お前の樣な野暮の來る處ぢやァねえ。歸んなせえ／＼。そして變な姿だ、賄政樣の槍の鞘見る樣なものを穿いてゐるの』

月の夜も、いとあたばかり暗路かな、と言ひてえところなり。

彼の男いひけるは、

『如何に仁田四郎殿、貴樣は主人の仰せを受けて、この人穴を見とゞけに來たらうが、その野暮ではいくら松火を點しても、お先眞暗でこの穴はわかるまい。吾に從ひ給はゞ、案内して見すべし。』

といへば、仁田は忠臣無二の武士ゆゑ、如何にもして見屆けかへり、君の仰せを無にせまじと、かの男に從ひ、まづ江戸ッ子の尻の穴から見はじむ。

『これはひと穴のうら、江戸子の尻の穴と申すのおやこ。なんと廣いものであらう。これも夜分の景と參りますれば、つらりつと火が燈ります。松火は私が持つてやらう。火葬の佛の引導を渡すやうな

ものだの。」

「さても嬉い穴ぢゃ。」

江戸子の地獄の穴を覗きて見れば、生上田の袷を質に入れて、一本で二分の初鰹魚を買ふ。又千両の角屋敷を賣り拂つて、呼びだし晝三を身受けする體、ありありと見える。仁田これを見て、誠に江戸子の地獄の穴の廣き處を感じ、今まで己が吝嗇した事をあきらめ、今までのお先眞暗餘程明るくなる。

「これこれ、さしたる物でもなき一寸やらう。七十五日生き延びれば、一分でも安いものさ」

「一寸鎌倉のつきいをでござります。見なせえ、いやのたれで進上やす」

「お前の分は五百両でさつぱりかの、都合で千五百両受取りつしやれ」そんなら町田根岸の家へ引きとりませう。

「お女子を受取るからは、生涯で御世話いたしますれば、早くお渡し申したい。殘り年の給文もつぎ判で取りましたら、お前様の處へ参られますれば、私しは丑の質でござります。」

それより、仁田四郎はかの男と連れだち、地獄の穴を見る。こゝに盛大な杭のうち一本消しければも、隨分あかるく見ゆる。

「私は只今まで、丸の内の達のお邸に、御婚禮つきで奉公致して居りましたが、ついその邸様

がお道楽なすつたから、富へ下つた處が、叔父さんが慰みが過ぎて、著物も悉皆無くして仕舞ひ、何うも仕方がなさに、此の樣な恥かしい事を致します」
「それはマア、嘸氣の毒な事エシタ。功徳の爲に、一ツ角はずむべいチヤ。」
「見なさい、あの女がもと木更津のてらくじやく長屋の久左郎が判で、向兩國にゐたが、買ひだらひの何か詐りして、その上に胴巻の付きさへが悪いといふ、伏見町のこつはうへ鞍替して居た處が、ちつと面付きがおつだから、ほとけ店へまた鞍替へしたが、地獄が割がいいとつて、昨日から此處へ出やすが、あの切口上で髪の風などは、よつぽりがものだね。」
「私はまた、あの女のいふ通りかと思つて、今まで涙が出た。」
それより又餘程行きければ、客の穴といふありて、厭らしき事ども多し。是れより次第に明るくなり、此處にまた松火一本消す。
『ごらうじろ、あの武士が女郎を倒して遊ぶ氣さ。今流行るする仲間さ。』
「なるほど心得ぬ形だ、女郎も不承知と見える。」
「なんと今夜は、二朱都合して上げる氣はなかやま富士か」
「おめへも餘り、毎晩店へ来なさんな、若衆がやかましい。そして此の頃はそんな都合もやアねえ、

ござ付たまで使つて仕舞つた、いゝおもしだらう」

「穴に都合がわりい。サアこいつは始まらねえ、どんなら嘗うもあらうか。」

　またかと下こゝきに来たのの、ふとこゝぎキ

　まづ其の次の穴には、女郎の穴といふがあり、手ごはき事多し、ここに仁田がく〳〵と聞ろ〳〵なり、彼九三本の松を捕しけれども少しも障ることなく、誠に明るき道となる。

『こゝとうしいせえ、和てう〳〵斯入、きんかたほゝつきを落しいした」

「これ〳〵が、こんな己惚を言つてよこしいした。」

「おはぐろを付けて仕舞つたら、なんと下卑蔵をしいせう」

　この男が案内にて、仁田四郎は人穴囲ろ〳〵なり、今更野暮にて暮せしことを残念におもひ悔みければ、彼の男、いよ〳〵仁田を大通に仕立てんと、髪を結ひ直させ、粋な衣裳を着せ更へければ、とんだ色男となる。

『彼を向いて見せな、粋者の丈を観ながら遠からず、娘々のなければは信の程だろい。隅川へ真つてやりやせう。』

それより両人同道にて、吉原の花の穴を見物する。仁田四郎は、この景色を見て、はじめて野暮を

ぶす。

「アレ向うから來るのが玉屋の小紫、松葉屋の瀬川、そのあとの振袖が花扇サ。そのあとが鳰照サ。私は女郎のけざみといふものだ。向うの茶屋の二階に客を待つて居るのが、丁子屋の雛鶴に、鶴やの菅原だ。田町のかたばみや勘兵衞が縫つた衣裳だ。」

女「長崎屋にふせんさんと、曉雨さんが居さつしやるから、宜しく申して來や。早くよ。」

「湊屋にゐなんすは、確からいがさんざんすよ。」

「菊園さん、半四郎近江屋にくらさんがゐなんしたよ。」

かの男は、仁田四郎に呼びだし晝三を買はせければ、始めて五つ蒲團のうへで、喜見城の樂しみを極めけるが、はや烏の聲と共に、茶屋の男「ハイお迎へでござります。」といふ。別れを惜しみ、何日までもこの穴に、居續けを仕たく思ふ折から、また彼の男來り「今こそ汝通の道をあきらめたり。止まる時止まらざるは通の道にあらず、最早少しも早くこのぬけ穴を通り拔けて、此のよし主君頼家公へ申し上ぐべし。あな賢く。」とぞ申しける。

仁田はひと穴のぬけ穴を通りぬけ、外へ出でければ、初めて夢の覺めたるこゝちしける。この人穴を通りぬけしより、通を指してとほりものとは申すなり。又道樂をすることを、穴這入りをすると云

ふる、是れよりの譬へなり。家來は皆ひと穴へ這入らず、里に待ちて居たるゆゑ、矢張野暮なれば、今に野暮の事を里とは申すなり。

昔より此の穴へ入りしもの、再び出づる者なし。是れ其の止まる所を知らぬゆゑなり。

「ホンノひとあな心とはぬしの事だ。」

仁田は彼岸すぎの蛇を見るやうに、穴からぶら／＼出懸ける。

「なンと見違へたか。是れから重ばうがとこへいきの、鎌倉の宿六に、ふんと話があるよ。」

家來三だんの九郎、

「これはお旦那、怪しからぬお姿とはおなりなされた。そのお髮の風は、お直しなされて然るべう存じ奉ります。」

「我が君には變心遊ばしたさうな。」

四郎「そんな野暮は言ひつこなしさ。」

重忠が工夫にて、大野暮ときこえし仁田四郎を大通となしければ、賴家公、「どうでも重さん傑ぢやもの。」と感心し給ひ、御加增を下されける。

またひと穴のうちにて案内したる男は、駿河一丁町にて名高き、大通酒樂といふものなり。重忠

と懇意のゆゑ、此度の狂言に頼まれ、地獄と見えしも、吉原の女郎と見えしも、客と見えしも、みな一丁町の女郎揚屋なり、此の時ひと穴へ吉原をうつせしより、富士の麓に原吉原の地名殘りける。

「駿河の聚樂とは聞き及んだ名だ。錦繪にまで出た男だ」

「忠常さま、唯今までは失禮いたしました。初松魚と見えたも誠は鹽松魚さ」

仁田は君の御仁心を有り難く思ふ。

『もう何處へ行つても、ふられる氣遣ひはござりませぬ。』

「東土其の昔は日中の臭人であつた。是れからチト荻江のめりやすでも習ふがいい。我が君の門太郎が名殘なぞは、吉原の藤吉等が恐れてゐるよ。」

ここに仁田四郎忠常は、今は通家となり、孟子に樂しんで飽くことなき、これを暴といふの分限をあきらめ、ぼうは乃ちべらぼうのぼうなりと悟り、遊びのうへの足る事を知り、昔は富士の御狩のとき猪に乘りしが、今は猪牙船にのみ乘る身となり、粋な春をぞ迎へける。

仁田四郎富士之人穴見物・終

天下一面鏡梅鉢

唐来参和作
松長喜畫

自序

抑天照皇大神の御神徳、中にも中々はかりの跡も見えず、終年に治まる國の御功なり。昔十も、百濟唐土の十五代の雙紙となれ、玉の春を壽くのみ

上之巻　末白川の浪風も治まれ静く豊年の國民

中之巻　天下泰平を並ぐ行はる、文武の両道

下之巻　月額青き聖代も有りがたい日本の風俗

人皇六十代、醍醐天皇と申し奉るは、聖徳いみじき君にましく〳〵、御年十三歳にて正月の御位をうけさせたまへば、右大臣菅原道眞公、御師範として萬機の政事を補佐し、仁の道を民にほどこし給

へば、いやましに治まる天が下、異國までも其の德に靡かぬ草木も無く、えんぎの聖代とは此の帝をさして申し奉るもことわりなり。

すべらぎの、御代榮えんと吾妻なる、みちのく山に云ふに及ばず、其のほか佐渡の金山燒け出したかげろうしたが、諸國へ金銀降ること三日三夜にして、諸人よろこぶこと大方ならず。

『直に灰を吹き分けて、極印まで打つて有る金が降るとは、ハテナァ。』

「坂は照る〳〵、鈴鹿は曇る、佐渡の金山かねが降る。」

「チト降りが小粒になつた。」

「せい出して拾やな。」

「金こい〳〵よ。」

仁政の君出で給ひしを、天も感納まし〳〵けるか、國々五穀豐かにして、女に餘りの布あり男に餘ンの粟あり、とは此の時なるべし。

百姓『少しづゝは、未進をしても苦しうない。檢見には及ばぬ。』

百姓「八束穗と申すが十分の出來でござりますが、今年は八束穗どころか、とつかまらぬ程な出來で御座ります。」

「もつと御取高増して納めませう。来年分も前納致しませう。」

「畔の落穂でも、百姓の暮し程は澤山でござります。」

「母様さんまゝくれんだい。」

「わやくを言ふと、御役人様にしばらせるぞ。」

家に錠、蔵に錠前などは、薬にしたくてもなく、錠まはりければ、さしかゝる目出たき御代に戸をたてるでもあるまい、要らぬものだ」と一人が打ち壊すと、家並に、「これはもつとも」と、一つ／＼に我が家々の戸を打ちこはす。實にとつてもの御代とは、此の時をや申すべき。

「世の中萬作が續くから、暮しに大儀な事はないぞ、嬉し／＼。」

「靜かに戸をこはしませうぞ。天狗のやうに働くやつだ。」

「委細かまはず、戸をたゝきこはせ／＼。」

「有り難い世の中だ。」

「其方の手では、どうもこはされぬ。」

此の頃の諸人の體は、着物はつゞれの錦に花簪を引つ挿して、時節の面桶を持つて步く程、世の中豐かなり。其のくせ本名も何もなき乞食なり。

『昔は此の小屋へ、富が来たと大騒ぎで[illegible]なさつたもんだが、今は馬[illegible]なくてもいゝ』
「今日は花の吉日南鐐二文につき、食禄の幸に鐚を一枚宛つて金にしよう」
桃林に牛を放ち、華山に馬を放つ例になぞらへ、品川へ牛馬を放ち給ふ
されば新宿には馬が多く、高輪には牛が多いと云ふことになり
『牛は牛づれ、馬は馬づれにして、放せ／＼。』
「此の御趣向はねつから迄えませぬ。」
また人の心も自然に素直になり、往還も互に譲りあひ、辞儀を仕合つて一人も途中に立ちふさがるもなく
り、一向道はかのゆかぬ事もなけれ。
『ヤ、これはしたり、殿様の御通りだ。車を片脇へよけませうか』
「片寄つてやまつて通るから、コレ／＼車引、よけるに及ばぬ。」
「ホウ／＼片づくめえ／＼。」
「マアおまへから通りなせえ。」
「イエ／＼、マア／＼おめへ御通りなせえ。」
安きに居て危きを忘れざるは、いにしへの道なりと、菅家もつぱら武芸を好み給ひ、[illegible]

あらけれは、細事角力の格式にならひ、晴天十日の間、寺地或は宮地にて興行ある。

「東西太刀二本、森田勘太夫へ下さる。此の次は苫崎島太郎と小野川右衛門の仕合でござります。」

吉原の穿鑿、武芸をもつぱらとすれば、後の落し噺にある通り、大かた茶屋があつかふて、直にた

まだすきで身がまへをする。

「花魁、長刀の師匠さんがお出でなんした。」

「此の子にせはしねえ、待たせ申しておきやんな。」

女郎がたえうしを扱くから、たゝみ槍かと思へば、手裏剣の稽古なり。文學はやらねれば、唐宋

まで古今集一冊をかゝへ、手習にてで記臆してゐる。

「[illegible]をならし、[illegible]を習ふ者は[illegible]を見すてておく。」

「此の子はさうではおつせんな。」

「おい、手習の草紙を作つて遣はすから、其の子や新造を貰つて来やれ。」

[illegible]の申事や前後[illegible]、ただ素面で書いた狂言はさういふ當世と云ふ時代にて、蕎麦一番目

四世目市川團十郎、八世にて海老蔵、劇場に、故俳と呼ぶ。中村傳四郎[illegible]

狂言作者で、[illegible]、[illegible]の[illegible]ある、其の事を[illegible]と云ふ[illegible]に、

上より鳳凰舞ひ下るを見て怪しみ、李門郎仲蔵を、實は陽虎なりと見あらはし、壁の中に秘め置きし竹で論を奪ひ返し、司馬相如切りかけんとするを取つて投げ、少正卯が首を打ちおとす。トヽト石に上下を着せたるやうな狂言なり。

自身番も毎日張るに及ばず、五日々々の風の吹く日ばかり火の用心をまはる。然し道にすたれる物をさへ拾はぬ世の中、をり／＼金銀の捨てものある。

『此の金には困る、捨ててしめへてえものだ。金に重みが数々御座る。』

「捨物ださうだ。隣町まで送つてやれ／＼。」

怪しいと見ると、跡をつけて木戸々々で、拍子木で送る。

雨も十日目々々々と極りければ、紺屋も言譯にこまり、下駄傘屋はちと不承知なり。

『今日雨の降るは知れた事だに、戸ささぬ代なれば戸はたてられず、あやまるぞ。』

「降り込んでもいい。明日おきに疊がへだ。金はまんとある、困る事はねえ。雪隠の戸ささぬはいつも難儀だ。」

昔きりんと云へる輕業師ありし由、それは人間、是れは正眞正銘の麒麟の見世物出でて、はやることと、見物山の如し。

「此の世の中に何で譃をつくものだ。看板にいつはりなしだ。札を買つて〳〵。」
「是れが聖人の西に狩りして得給ひし、獸で御座ります。體の火焰で煙草を吸ひ付けて見せませう。」
「これを取るには、聖人のこわいろをつかひますのか。」
「鳳凰は竹の實を食ふさうだが、これは何を食ひますの。」
此の頃の人は、萬事に苦勞と云ふが無ければ、みな長命にて、人間一生百五十年ぐらゐの相場になり、百三十で誕生を祝ひ、それより、七五三の祝ひもだん〳〵する。
「おばゝ樣、美しいべゝをめして御機嫌だね。」
「早くあんよなさい。唐辛子を買つてあげよう。」
吉原の張付や、神道のしきしより外に、見た事もなき鳳凰と云ふ鳥出でければ、鳳凰茶屋出來る。
「鳳凰を御覽じて、お休みなされまし。」
かゝる目出たき日本國なれば、君を敬ひ菅家の聖德をしたひて、朝鮮琉球は云ふに及ばず、大唐天竺、其の外萬國の異形の國々まで、貢物をとゝのへ來朝すること、開帳のお迎への如し。
「彼が女人島だ。ぜげんの目に付くだらう。」
「母樣、あの小人島を一匹くんねえ。」

「アレ／＼、大人國が向うから見える。」

書畫「萬國人來朝行列の次第。」

右大臣菅原道眞公は、天滿大自在天神とあがめ、宮柱ふとしく建てて年々の御祭禮、諫鼓苔ふかうして、とりおどろかぬ酉の年の新板、何も面白い案じもなければ、こんな事にてまじくなつて筆をとめぬ。

天下一面鏡梅鉢　終

孔子縞于時藍染

山東京傳作
北尾政演畫

鳳凰時を作らねば、きぬ〴〵の愁へもなく、麒麟人を吠えねば、夜道する邪魔にもならず。鳳も出よ麟も出よと、呼びつけるが武藏坊、辨慶さんの力まかせ、鯨鯢も動かぬ、君が代の、五節句八百屋に史記にうたはれ、三六は入面先生の會日おやかな、胡椒があつて、出みましたとは、此通家のお宿にうそもなく、聖代の時いたれるかな。

山東京傳述

「中人以下不可以語上」とは、聖人さへ匙投ともかの川崎の如く、ふみだしに時であるので絵ならぬ。

とは、宜なるかな。上を學ぶ下々までよき風を寫し、悪しき俗をかへて芋賣の孝行、大工の忠義、酒屋の御用も朋友のまじはりを厚くし、切店をたゝりて「ヤーイハッツケ野郎。」と、口から子の曰はくを讀めば、四海みな兄弟の如くもつはらとして、物貰ひ非人に至るまで禮を好む。

さて「左傳に匹夫罪なし、玉を抱いて罪ありと有れば、此方共のやうな、仕合な者は御座らぬ。」

且「時に先生、かゝ物は斯くの如きか昔夜を捨てずとは、物日を切りかけられた客の事かね。」

且「私どもも昔はそんな事も御座りました。」

且「魯の西の狩に麟を得たりとあれば、孔子も痳病に病ましやつたと見えます。」

且「六臣の註の、文選の拂ひ物が御座るが、お求めなされぬか。」

且「不佞は淺草無宿で御座る。」

且「足下は昨夜、はきだめの中に御やすみなされたか。」

こゝに、通丁すぢに有徳なる町人ありしが、不義にして富み且たつときは、我に於て浮める雲の如しと悟り、仁徳の最上は金銀を施すよりはなしと思ひ、たくはへの金銀を、惜氣もなく人にくれんと思へども、又先の人も「富貴天にあり、天理にかなはぬ金銀は受けられぬ。」と、誰一人貰つてくれる者なければ、ほとんど困り、町内番人はどうか慾の深さうな親父と思ひ、先づ百兩ばかり施さん

と尋ねられける。

『ここある人、近頃無心の事のおやかに、見かけて頼む。己を助けると思つて、どうぞ此の金を貰つてくれぬか』

「論語にも、其の老いたるに及んでは戒むること得るにありと申せば、道に違つた金は、御安い御用なやかに受けられませぬ。」

「ハテ困つたものだ、東生ではなかつた、四百四病の患ひよりも、富み難つらいものはないぞ。」

列子に、さいを以て人に別つ、是れを道と云へるの語を思ひ、頼東買も女郎に引かれて遊ぶを色男なりとし、女郎は旅人の客などぞと見ると、忽ちより花に付いていてかけのあし、兎角大金をおつけたがる、油断ならぬ口舌の中なり。無心の文の文句に曰く、又そやしあしたり。其こなた事も色々と仕合がお御禁みトコおかし、其の中へ此の程も挑撥しの客にあがり、纔の財布に入れて五十両、薄暗の下へおしつけられたなし。それより段々と都合が宜しき事のみにて、鋤何さへも異眼様より是非々々百両ほかに受取つてかひくれ候やうに申し、兎角おつけたがれ共、ゝやうやう遣手しおに受合はせ、盆前にて上申しつこと々。主様へは申し上げたりと存じ申ひしが、何卒々々盆前には御都合遊ばし、せめて七十両ばかりのもの御つかひ下されかし、どうぞどうぞお頼み申し上げ存じ上ます。

上人先生がおやまる事はない。どうも己は此の頃は都合がよくてならぬものを、酒を買にやって尻を切られるやうなものだ」

金「そんならば、丹後へ申つけておかれたさうすばなりますまい。何れまたこちらから事さましょ」

かくて世の中の人、正しきを以てつくらんとすれば、人として慎むべきは慾の皮なり。其の慾も大くは金銀より起る所なれば、金銀ほどけがらはしきものはなしと、随分金銀を忘るまいとすれば、銭三貫はまたつとく、聖人ほどいやしめられ、中にも女郎買ひに身をうちこみ、多くの金銀をすてつけられたる息子手合は金の捨場に困り、座頭などに金をやる。其の証文に曰く、

やりすて申す金子証文之事

一金拾両　但し文字小判なり

右の金子やり捨て申す所実正なり。引取りの儀は来る何月何日までに急と受取り申すべく候。利息は毎月金一分づつ、無相違受取り申すべく候。後日の為証文如件

月　日　遣主

受人

当左様なら、十両乾度御用だてまするぞ」

且然し貸す時の地藏顔、受取る時の閻魔面、と申す事も御座るからな。」

「左きはら通り受取る節、両の互いとは申しますまい。」

若き手合は、女郎買ひにて貸しい金銀をしまひ込み、親の厄介にかけるは不孝の至りなり。五刑の罪は不孝より大いなるはなしと、孝經にもあるものをとたゞし、せめては罪を減ずるための爲に家督を讓り、大切をしまつて勘當を受け、立退かんと願へば、親は又、あやまつて改むるに憚る事なかしと、一向に不承知なり。

「どうぞ御勘當なされて下さりませ。七生がならずば、一所住でもよう御座ります。」

「己が身代は、有ぬ無い事には、一年に二百や三百は手輕く喰て込む身上なれば、迚もしまひの金をおつけられても、惜しくはないぞ。妹背にも、人の家をとりて、位牌に此まゐると云ふを知らぬか。勘當する事はならぬぞよ。」

「聖賢は一言以て貸と爲さ、一言以て實とすと云ふ文言を守り、だん〳〵世の中にて金銀を貯ふるも、中にも肝要なる明察じて日く、一錢味噌やらくと金が遣けると云へば、さらば中さ味噌を貯へ、」

と、大火鉢にて燒きかける。

「どうも己が道理はなかなかくこなれば、竹輪とぢいふがた人とあるをいれりう。」

日なし借りと云ふもの出來、裏店などの錢を借りて歩き、返す極め時に受取らぬと、大屋へとゞける。

「おまへはお家主で御座りますか、別の事でも御座りませぬが、お店の孫助殿に三貫文かり受けまして、毎月二七の日に二百文づゝ返す約束で御座りますが、兎角醉のこんにやくのと云つて受取りませぬ、よく申し付けて下さりませ。」

「なるほど聞きとゞけました。きつと申し付けませう。然し醉のこんにやくのと云ふ筈で御座る。あの孫助は下馬へ出る、味い物屋で御座るから。」

「もしへ大家さんえ、此の裏の子供衆が、ぶち込むものもあらうに、私どもの店へ小判をぶち込みやしたア、わつちが家おやアものいゝあえだから、いつそ氣にかけて居りやす。何卒お叱りなはつて下はりやし。馬鹿々々しい。」

太物屋も、福神の名を家名に付けては縁起が悪いとて、尾張町の惠比壽屋も貧乏神屋と名をかへ、隨分地合の悪い代物を大高賣にしければ、殊の外はやり、買手山の如く市をなしけり。

作者曰「手拭の高賣、三十八匁々々々々。」

「おきやあがれ、矢張無益委記の型だと云ひつこなし。作者もそれは承知さ。」

「もう五匁高く買つて下さい。此の木綿は地合がとんとござらぬから。」

「ナニ二十六匁なら随分高う御座ります、此の様に見えても、とつと最う二三度お召しなさると、直に破れます代物でござります、是れより高くは上げられませぬ。古語にも千金の裘あつて千金のねいなし、と申します。」

されば、堺町の福山も損山と改名し、深川の八幡も、富が岡を改め貧が岡ととなへ、人々遣手と云ふ名をうらやみにける。

君子はあらそふ所なしと云へば、博奕勝負事は決してもせで遊べねども、中にもいすきな者は、嘘つこにてめくりを始めても、互に勝を人にゆづり禮儀を重しする故、一番のおくりに鳥が鳴き、眠い目をして面白くもなんともなし。

「拙者がひよつと八をうつたらば二、赤藏が出來ますから、平に八をおふれなされ。」

「イヤ、それでは貴公様のお為に悪く、殊に大引で御座れば、ふみますと八が上つて、此方へ祝儀が出來ます。此の儀は御用捨なされ。」

「イヤサ、それでは拙者の志が無になります。」

中にも別して[illegible]人は、所々へ施行の蕎麦店を出し、無代にてゆききの人にふるまふ。或日折

介懐りもの蓮葉なこばい食ひしが、代もやらずにふるまはれるは餘り道に執けた事と思ひ、人の見ぬ間に錢五十文膳の上に置いて逃げだしたが、是れをかのぎんが見付け後より急ぎ追ひかけてひきもどし、此のやうな陰德のある人を只おいては、此方の道がかけると、無理やりな彼の折助を大勢よつて、寄りこぶしで頭を、思入れさすつてつき放す。

「何でも、禮をつくして返すがいいぞ。」

「ゆるして下さい。そんな陰德のある者では御座ない。拜みます。」

「左樣に卑下なさる程、なほたつとくなる。」

「お怪我のないやうに御さすり申さう。」

「昨日も、向宿道の藏いやぶりが切つて、千兩箱を提げて、其の上壁のつくろひ代に、金十兩置いて行つたといふ事だ。大方この人かも知れねえ。」

列女傳に、陰德ある者は陽にこれが報ゆと聞き、陰德を施さんと、兩國あるひは山下の廣小路なぞには巾着切らが徘徊して、うつかりひよんとして居る油斷を見すまし、袂へ胴亂や紙入をおし込まる、用心すべし。

「是れから山下へ出て、やつこが莊子の講釋でも聞かう。」

「先ツ今日も[illegible]陰徳をほどこした。」

絹なるはいやし。むしろいやしけれど當世を盡す通人は、粗服を伊達として、上總木綿の着物に、地あらき麻の羽織などを好む。

[illegible]「向うの新道に、うつかり通ると金をふんづけてならぬ。いま〳〵しい。」

「あれも新道の通人だらうな。[illegible]」

芝居などは、百廿二文づゝ札錢をやつて見物を入るれば、たつこき人は切りおとしへ這入り、いやしき者は棧敷で見る。狂言のまはりも、舞段の貧乏をとりくみ、「明六ツの鐘を合圖に、[illegible]の金を[illegible]」と、團十郎が臺詞をやんや〳〵とうれしがり、[illegible]の面に[illegible]貧乏の[illegible]入れながら、手をはなしく歸るが口惜しいわい[illegible]、見物その氣取りをはなれぬ。

[illegible]

[illegible]一郎が[illegible]はしくも、何ともないナア。」

[illegible]

[illegible]」

「東西々々、やかましいわえ。」

大恩寺前なぞは物騒になり、夜更になると追剝がれと云ふ者出でて、往来の人を待ち受けとつ捕まへて、己は先づはだかになり、衣服大小金銀をくゝしつけて逃げる。

「追ひはがれと云ふ者は、扨々張合ひのない者だ。斯うした所がべちやゝねえ、中半の崩れか、驅込み訴訟に行くやうだ。」

「金銀はまうし受けませうが、せめて衣服大小は御免なされまし、悲しや〳〵まうし〳〵。」

剝ガレ「褌は堪忍してやらう。おさらば〳〵。」

「己がなりは、手習子が咎められたやうだ。」

「[illegible]かゝす、寒い〳〵。斯うしては見たが、さぞ貴様はあつたかだらう。うらやましい〳〵。」

斯くて世の中の人、聖賢の道を學び、至德要道ありて、自ら君子の德至れば、いさくさのなき御代となり、天明地察と云うて、地も其の德をかんじ、五穀作りもせぬ野山に生えて、穗に穗が咲き實りければ、百姓もおき所に手こずり、爲方なくほら長左衛門樣へ出で、「三年があひだ、御年貢を一倍ましにお取上げ下され。」と願ふ。

「打ちつゞきました豐年で、何を申すも置所に難儀いたします。」

「餘り地神が通り者すぎて、困つたものだ。」

「お酢へおすんだら、兩國の麒麟の見世物を見ませう。」

「お年若おやぢ、有り難い殿様おやぢ。」

ほら長左衛門様も、仁徳の厚き人のある早速聞屆け給ひ、お救はれ米を取りあげ給ふぞ、有り難き。天も又その徳を感じ、御料間違ひにて空より金をふらせ給ひ、初手の内は茲に三兩かしこに五兩づゝ、ふるの事なりしが、だんだん大降りとなり、今やまあらしに山吹の花ふき散らす如くにて、人々大きに難儀する。

「是れは何でも大變で御座ります、天上で無間の鐘を撞くさうな。」

「紀文大盡が年越の趣向と云ふもんだ。」

「金の降る夜はナア、一しほゆかし。」

「三味線の手は人の知る所なれば、畧すとするかね。

「飛んだ惡い天氣だ。もうあがりさうなものだの。」

斯くて高き山深き海、谷も川も家居も、米と金にてうづみけれども、天道人を殺さずのたとへの通り、世界の人金銀の中をかき分けて漸うからき命を助かり、黒極上々吉飛切りの、目出たき御世こそ

ありがたき。

「金はわきものとはよく云つたものだ。かう涌かれてはあやまる〳〵。」

「上州の灰とはよくいつた、違ひない。」

「目出たいにも程がある。こんなに目出たい事もないものだ。馬鹿々々しい。」

「そりや目出たい〳〵。金の子が出たであらう。親もあれば子ももぐる。」

孔子縞于時藍染　終

地獄一面照子浄頗梨

山東京傳作

北尾政演畫

口上

東西々々、是れより世上の御子様方へ、ちよつと口上の申し上げます。年々古めかしき草双紙の趣向御覧に入れまする所、御子様利発宜しく遊ばされ下され、如何様なる有り難き、何がなと工夫しましたる趣向も無く、不図存じ付き、昔小野篁地獄へ往来致されし故事を種に作、御覧に入れまする。筆と硯は一体の品、面白くないが勝ちに御座りませうか、殊に御子様方の御目覚しの数くれかで御座りませぬ。大人様方は御目を御覧下されまして、兎角見苦しい事には無く、耳をとつて鼻をかむやうな咄しのみにて、作の拙なる處は、幾重にも御子様たちの御笑ひ草で御座ります。其のため口上左様に、

寛政二庚戌年　　山東京傳述

小野篁傳

篁ハ岑守ノ長男、補ス參議ニ、故ニ曰フ野相公ト。事ヘテ父母ニ至ッテ孝ナリ。身ノ長六尺二寸、博識能書。輒チ往キ還ス冥府ニ（八雲抄六）破軍星ノ化身矣（事蹟ハ文德實錄一二〇二ナリ）

往時小野篁と申しけるは、博學秀才世に著く、殊に仁德の甚しきを、地獄の主人閻魔大王聞き給ひ、殊の外ゆかしく思はれて、俱生神を使者に遣はし迎へければ、篁冥途見物も事異りて面白からんと承引し給ふ。

「地獄と聞いてはチト氣がないが、昔の中洲と思へば濟むから行くべしだ。己は又盧生のおッ冠せかと思つた。」

「抑是れは楚國の帝の勅使にもあらず、餘りぞつとせぬ地獄の事ゆゑ、一王や二王ではお聞き濟みがあるまいと存じ、十王ながら揃つて參りましたが、跡の八王は戸外に待たせて置きました。」

斯くて篁は、如何さま地獄の見物も、近年の新手なるべしと、朝夷もどきに一百三十六地獄を巡らんと、鬼瓦の南鐐たつた一片の路銀にて、江の島鎌倉へ行くきどり。中抜草履位の事にて、何の仕度も無く、十王に誘はれ、死出の旅ではない、生出の旅に赴き給ふ。此の事を罪人等聞き及び、篁の仁徳を慕ひて、みな／＼六道の辻まで逆へに出る。

『是迄で聞いたとは違つて、なか／＼よい景色だや。これも死んで行くのだら気があるまいが、生きて行くのは大分気散じだ。』

「此の天気では、三途の川の川留めの案じも御座りませぬ。おひるはおばアが所に致しませう。」

「道中は御不自由だらうと存じ、ほんの粗末ごしらへで御座ります。」

「手前達の御世話、笑止千万のまねと云ふものだなう。」

死出の東路は一里塚、閻浮の十丁ばかり。是れを越して行けば、だん／＼冥途に近づく。

篁は程なく地獄に至り、閻魔王にも対面し、色々饗応に預り給ひけるが、或日閻魔は昼飯を食後にとて高座に上り給ひしが、篁はとんだ剽軽者の其の跡へ直り、瑠璃燈を風鈴などとして、閻魔中の身振声色を真似て、罪人を極めつける所をして、皆を笑はせ給ふ。

「一体鬼といふ者は、角が二本づつでありさうな筈の所、一本は野暮だとかいつて、一本の角下もあるなく

けな。」

「篁さまは大分、閻魔樣馴れて御出でなさる。」

「通人樣のお閻魔はどうだ。」

それより、篁は地獄中の責道具を見物し給ひ、色々惡口をいひ給ふ。

「其の鐵の棒は幾月利が食つた。思へばこんな物をよく汝等はまけて置いたナァ。飛んだ強い奴等だぞ。それ火の車を見ろ。いつ持つたまゝか知れぬ。そして今にこはれさうだ。時平が乘る車ぢやァあるめえし。大釜の中には蜘蛛の巣がかゝつて居る。これはもう賃餅のへつつひに外ならぬぞ。業の秤も折れて居るし、淨頗梨の鏡も曇り切つて居るわ。めりやす新無間に、胸の鏡のかき曇りとは聞いたが、こんな曇つた鏡は、釣鐘建立の寄進にも付かれねえわ。」

名にし負ふ劍の山を見給ふに、昔は見懸ばかりで、炭搔庖刀同然の鈍刀ばかり植ゑてありしが、是れも其のころ閻魔王甚だ世話を燒き給ひ、友切丸、刃の太刀、痣丸、正宗、國行、長船等の切物を集め、殘らず植ゑ替へ給へば、篁こは怪しからぬ價値があると感じ給ふ。

「此の山を娑婆の道具屋に見せたいな。」

「これは青江下坂で御座ります。二ツ胴にひき腕、よつく切れます。それから御覽じませ。」

「是れじようだんするな。あぶねえわ。」

その頃娑婆にても、諸人悪を擯け善に勸むる者ばかりなりければ、男女ども地獄へ落ちる者少なく、極樂への往生しける故、極樂も大きに繁昌して、東門口などにても新町の末に、新規に鐵砲浄土出來、三日月お仙菩薩などいふ、評判の菩薩出來る。

「爰の長家の三日月おせん、背にちらりと見たばかり、これから、伏見町河岸の浄土をそゝらう。」

「もし〳〵佛さん、是れさ寄つて行きなよ。一服飲んで行きなよ。」

篁畜生道を見物し給ふ。畜生道にては常に隙行く駒に乗せて責め、又は善悪の的を懸け、又は光陰の矢を射らせて、責める所なり。

「此処は馬ばかりにいいが爪が平たい。だから石場は乗れねえ。」

「私や娑婆のめくり場で、馬をなごくふんだゆゑ今此のすがたさ、恐れるね。」

「はッ〳〵〳〵。」

篁はそれより又、其の次なる修羅道を見物し給ふ。修羅道といふ所は、あけくれ斬つたりはつたり許りして、富藥賣の樣な所なり。而して無性に汗臭き地獄なり。色氣の無い地獄と思ふべし。

「己はめんほうだから、めんほうはかけないよ。」

あんなほられいいれからさき上品な浄落ならいなねが、生きやさうだや。修羅道でやが聞いてあきれる。臨終ぎら四十生で三々々とやりすぎた、おまへさんの生で受けたのもいいのでござい、〱。ままへとざいます、おお、さてく、わたしのござい〱。徳分がいゝ〱たゝきやつたら、いつか一度は上手にならうござ」

「何といい加減にたゝき合つたら、恋をはうして丁字屋か、扇屋とまでしやれようぢやァねえか。命か続かねえ」

「エ、面白い、諸事をつけれが最中にありさうなさ」

扨は実父暗闇地獄といふを見物し給ふ。暗闇地獄といふは、無学文盲なる罪人をやつて責め給ふ所なり。未だ一向な暗盲の罪人は、先づ浄瑠璃本ぐらゐを読ませ、少し覚つて来ると貝原の教訓本、実語教、今川状の類を読ませ、それから些と薄明るい所へ出し、もはや四書五経十三経二十一史、其の外詩文集或は子の類、又は陰隲録、迪吉録の類、当世流行る心学の早道へ行くもあり。だん〱高き所があるつうになると、真如の月の如く明るい所へ出る。此の地獄の責めは、至つて辛抱の出来兼ねる責めなれども、甚だ有り難き地獄なり。

「闇黒地獄の責めはつらいぞ〱。ア、よめぬ若草ふみすてられねえだ」

「私は忠臣藏をよみやす。おめへの讀むのは八文字屋物か。」

「頭つから讀めねえ。女郎の文さへ女房に讀んで貰つた俺だから、そのはずの池だ。」

「モシ此の字は何とよむね。」

「さればこそ大事の事をお尋ねなされ。此讀れへもと知られえ。」

「左氏傳なかでとうといふ所は、天上河陽の間、そして獲麟たそうな。面白い所はここらへ界、又は夾谷の會ここで御座るぞ。」

「先生こそが、ほんの世の博覽で御座らう。」

「今まで闇黒地獄に居つたが、くやしう御座る。」

「足下は此の頃出た四書餘師を御覽じたか。憾むらくは間に合ひ過ぎますの。」

「高論頂けよう御座る。」

又それよりも餓鬼道へ趣き給ひ、見物するに、餓鬼道といふは、常に腹が減るばかりか、火が燃える樣に思つて居れども、さにあらず。湯といふ事も無く、色々のものが燃えて、まざ〳〵目の前にありながら、心に任せぬが餓鬼道の苦患なり。

「初がつをのすし身をくふとすると、これも火が出て口をおなじくする。」

「今まで酢の蒟蒻のと怒つた報いかァ、是非もねえ。どうするもんだ。」

「ア、是れを見ると、小びんからも火が出る／＼。己は素袷で居るから困る／＼。ア、素袷の悪い時はかうしたものか。此様な事なら、いつそ受けねばよかつた。」

其の頃、極楽の瑠璃世界歌舞の菩薩、地獄にも知邊ありて来り給ひしが、罪人手合いまだ菩薩を知らぬ故、地獄に見慣れぬ美しさに、煩悩起りて大惚に惚れ、色々と口説く。

斯くて篁は苛目と思ひ給ひしが、よほど地獄に逗留し給ひければ、定めて婆婆の様子も、流行せし事あらんと思召し、見る目嗅ぐ鼻は能く婆婆の事を日々知るもの故、呼び寄せて聞き給ふ。

「此の顔見世も三年は居なりかの。大和屋もさうであらう。」

「手前達が頭は大分いい香ひがする。百介が所の枸杞油と見える。然し頭ばかり本多でも、手がなくてはさえぬ。」

「奥山の金時が、きつい評判で御座ります。」

篁は、見る目嗅ぐ鼻に婆婆の流行を聞き給ひしが、何うでも遠くから見たり嗅いだりすることゆゑ、詳しくは知れ難く、依つて幸ひ此の度、婆婆から大通の罪人二人来りければ、此等を呼び寄せ、出来立てほや／＼の珍説を聞き給ふ。

「さて〳〵早、吉原なども大分よい女郎が出ました。先づ小紫、唐琴、雛鶴、丁山、春身受で御座ります。過ぎし頃は、仲の町へ菊を植ゑて大分にぎやかさ。」

「我等は、娑婆の事と來ては大の不通なれば、只うつぶいて何にも云はずさ。」

「丁字屋の薫、名山、大文字屋の背鶴、黛なども惜しい事をした。みんな冥途へ鞍がへして、帳が消えた。」

「葛西太郎も冥途へ來たと見えて、黑鐵の帳が消えて居る。かはゆい事をした。」

又その頃極樂にては、阿彌陀如來を始め、諸佛菩薩大通になり給ひて、百味の飲食もたか〴〵甘露ばい、煮花の茶漬としやれ給ひ、金色の肌も眞鍮箔、銅箔に御着替へ給ひ、阿彌陀も錢だけ光り給ひければ、無垢世界を改めて滅金世界と呼ぶ。

天人手合も、そろ〳〵眉毛をおとして素人天人となり、それ〴〵にかたづく。

「己をば、銅はよくに置きかへてくれやれ。眞鍮箔の佛は、菖蒲刀の縁頭と云ふ光だから恐れる。」

「此のほりものの所へは、二三べん置かずば消えますまい。」

「白毫は、赤銅ではほくろと間違ひますから、四分一にでもなされませ。」

斯くて篁は一百三十六地獄を、殘る隈なく見物して、暫時逗留せしが、今は漫に故郷懐かしく、

閻王に暇を乞ひ給へば、閻王も篁の徳を感じ、深く名残を惜しみけれどもせん方なく、土産に數の寶を贈りければ、篁曰く「楚國には以て寶とせず。唯善を以て寶とす。」とひねり給ふ處へ三教の祖師出現し給ひ、釋迦は味ひ甘き酢を樽に入れて御持たせなされ、孔子は今汝が音を知るとあつて、又、大神宮の八幡のをろちで造つた清き潔き積入れ御持參なされて賜はる。篁、この三つの賜物にて、我は只樽酒を汁のみに判じ給ひ、快く人間界へ歸り給ふぞ有り難き。

「孔子た所は釋迦のしれた代物のやうだが、これでも雨か下の神物だ。」

「我々は棄て、汝が博識秀才の仁徳の大いなるを感じ　三人一座で是れまであらはれ出でたるなり。」

「扨々お名ごり惜しい。」

「私等もサ、何卒歸したくねえよ、いつそ雨でも降ればいいと云つちやア　きぬ〴〵に女郎が手を取るやうだ。」

左大辨從三位朝臣篁は、程なく娑婆に歸り給ひ、地獄の有樣を熟と思ひ出し、一首の歌を詠み給ふ。今歌字盡に出でたる歌是れなり。

巳　己　已

すでにおゐおのれは下にゐたかたの身けみななにりつちで庭はく

切落へは向か敷

或人問ふ何ぞ無益の著作を成すや。余が曰く、夫れ彌陀を念じて佛にならんと欲する者あり。諸行を捨て地獄に通はんと思ふ者あり。悉皆一個の癖たり。余嘗て戯作をなすも一癖なり。諸善を以て善とし惡を惡とす。故に閻羅の廳を以て余が舌を拔かんといふとも、余是れを恐れず。聞く者これを唯々と云つて退く。

京傳自誌

地獄一面照子淨頗梨　終

照子淨頗梨終

願解而下紐散拜壽仁王參

芝全交作
北尾政美畫

仁王尊文壽略縁起

抑佛法守護の仁王尊といつぱ、辱くも大佛錢の、一文にして二文と別れ、仁王と現じ三文の金網に住んで、終に四文谷の五文ぜんとならせ給ふ。故に六文の光岸寺を供し、七文の御備へを供じ、八文のかたより八日を縁日とし、九文龍が如く裸にてつつ立ち給ふ。十文の草鞋十一文の足袋にても、御足に小さきとの御戯言。依而十二文の御足を御捻りとなし、賽錢に擲つて、信心怠らざる事等と云々。

とうゐやうせんをあげさつせいませう

すつと酉いとしのおふんでも正月

芝全交坊執事

抑も人皇三十代欽明天皇の御宇、始めて我が朝に佛法渡りけるが、未だ極樂世界今の世の如く、金銀瑠璃玻璃の宮殿樓閣、硨磲瑪瑙の臺所、琥珀の竈、珊瑚の摺子木、金の飯炊菩薩八百人、銀の茶坊主自來七百人、珊瑚樹の生酔毎日千人づゝ、佛法僧とぶう〳〵を云ふなぞと、みたけやうな味い事ではなく、漸う中淵の地獄の跡へ、北方の極樂引越し、普請もそこ〳〵假宅にてありけるが、又その頃都に運慶、湛慶、安阿彌とて、名譽の佛師ありけるが、佛法の繁昌にならん事を當にして、種々の佛を刻み隠居して、方々へ佛の奉公人を住ませ、金まうけしけるが、或時運慶が案じにて、あつと魂消るやうな佛を刻んで見ようと、不圖仁王を二體刻む。今婢文作に立ち給ふは、則ち此の仁王像なり。

「お前さん女郎で、から魂を見せると妙だけれど、己もから彫られて見れば、仙石屋と云ふ身だ。」

運慶仁王を二體刻み、魂を入れて極樂へ目見得をさせけるが、世の噂と違ひ、其の丈六尺有餘の大男、其の上いかつがましく、どうやら俠客さうな佛、此の高い米をたんと食はれさうな事と、ここと目見得もじやみけるが、運慶も今更この二人をかついでは來ばかりも叶はず、一たん入れた魂を取り戻し、木佛にするも骨折損と、色々なちよ〳〵らを云つてすませたり。

その時彌陀曰はく「如何様盗人の用心にはよからう。」と、唐門の門番にこじ付けて、番に付けらる

る。今の世に、仁王は一寺の御門番に立ち給ふ、この因縁なり。

彌陀のお傍をさらず、觀音勢至は左右お傍のやうな者なり。觀音の脇立菩薩、心で拜んでのおかいな上の御誓願、三尊の無駄の講釋、みな有る謂れと申しやす。

『こちらが三尊で、其方が運慶なら、彌陀の本願四十八枚の骨牌にかなふと、博奕通方のべ給ふに

「己身の彌陀、唯心の淨土とは、貴方の事だ。もしおそれ入りやした」

仁王の目見得は、筆を達の氣どりにて、獨鈷にて汗をのごふ。

仁王、鎌倉の東門の番人となり給ふが、給金安ければ小遣などに困り給ひ、仕方に草鞋を作りて知得にし給ひける。今も仁王へ草鞋を納める此のいはれなり。然し兎角不器用に大きく作り給ふ故、あまり賣れる方ではなし。

是れまでは門の泥のやかましく、佛にも羅漢にも、夜遊びに抜けるなどはならぬ事なりしが、仁王門番となりてより、門は夜お番を仰せ付けらるれば、ここに諸佛我も〳〵と夜遊びに出かけ給ひしより、是れ二人しておう〳〵と受合ふものを、仁王をさして佛たちの名をつけ給ふ。其の前までは、一佛中間反助菩薩と申しける。

上手な夜は、頭の光る羅漢たちがございのも、是れで十六人だ。十六羅漢一座と見えた」

王「親方、この龍と蜂の子を、明日の朝まで預つて下さい。」

地藏藥師なぞも、こそり／＼と出かけ給ふ。

『羅漢の耳こすりも、よくある奴だぜ。』

「己が一分出しては、萬更尊者と云ふ羅漢だが、よし／＼。」

「はくしろの錢を、二百はすみはどうだ、きつからう。何のやくしにも立たぬ洒落だ。」

「仁王だから、二百も有り難え。」

仁王の二尊はだん／＼立身したまひ、今は門番の頭役をつとめ、東門のわきの長屋をもらひ、一人つゝ非番當番、替りあひて勤め給ふが、茲に又、羅漢たちと心安くする藝者滅元腎虛太夫、三昧緋彈婆藏などゝいへる腎虛したる男二人、おえご、肥吉とて、どぶつに肥つた女藝者二人、仁王のなんでも願ひ聞きたまふと聞き、男二人は、「腎虛をおなほし下され。」と願ひ、また女藝者は、えごくして取廻し惡しく、其の上立臼へ菰を卷いたやうだと、根つから客人が御座らす、どうぞ痩せますやうにとの願ひに、仁王も迷惑したまひ、色々斷りを云ひたまへども、百度參りをなし、紙をかんで吹付け口說きける故、せう事なしに先づうんと云ひたまふ。

『腎虛することでもねえす。隱居していい風だ。紙を嚙んで吹付けは御免だ。そして誰かくさい口が

あるぞ。己が鼻へはぶん／＼と仁王様だ。」
「肥吉さん、私等はころげて行く方が早からうよ。」
「腎虚と食滞は己が持病だ。なほればいゝが。」
仁王様いろ／＼相談し給ひ、先ず肥つた者に、七日断食をさせ給へば痩せ衰へ、細り者の布腹と成り、腎虚した者に、水をむしやうに飲ませ給へば、たかぶる火を消し腎の臓へ水がたまり、忽ち快気しける。又鰻の蒲焼は腎の薬といへども、それより馬の精分、なか／＼鰻よりは十割増と、腎虚の者に補ひのため、馬の蒲焼を食はせ給ふ。今も仁王に参る者、頭へ一本づゝ馬の蒲焼をさすは、このいはれなり。
「風はよくなつたが、お飯を食はせぬか、ふら／＼するやうだ。」
「あれほど大きな尻が何処へ行つたらう、妙だの。」
「馬の蒲焼は温めてたへます。是れが真のむまことだ。」
さても仁王様は、腎虚の療治と、どぶつの女を痩せさせたるお手際、實に活薬師の如くの評判なれば、又こゝに鼻の落ちたる女郎二人、是れを聞き傳へ、何卒元のやうに鼻を付けさせ給へとの願がけ、仁王また案じを付け給ひ、是れも七日の断食をさせ、糝粉にて鼻をこしらへ付け給へば、腹

の中なるひだる蟲、なんぞ食ひたい／＼と思ふ所へ、新粉の鼻を押し付け給へば、何かは以てたまるべき、ひだるい蟲の一念にて、新粉の鼻は喰ひ付きけり。

誠に仁王の頓智の程、感ぜぬ者こそなかりけり。

「全體そこじの元の鼻は、團子鼻かのぞき鼻か、己がこんな事をしてはやり出しては、手前たちが鼻ッ張だと云ふだらう。」

「團子鼻は月見のわけで落ちんした。其の替り總花でおつした。」

「アー鼻がほしいなア。こいらも苦界に有る所でおつすねえ、花魁。」

仁王尊だん／＼はやり出し給ひ、今は御門へも盤臺を入れ、御兩人にて、願がけの療治もつぱらとなされけるが、かなつんぼうのもの願ひに來りければ、三ツ目錐を左の耳の穴へ入れ、右の耳の方にて磁石を遣ひ給へば、忽ち左右の耳へ通りぬけ、常の如く聞えるぞ有り難き。

「最う聞えよう、耳つとほーー。」

「それや聞えませぬ、あいたさん。錐の通るせゐか、きり／＼と申します。」

又三年越足腰たたず、中氣にてわづらひける者を、女房つれ來り願ひければ、是れも仁王の御案じにて、手足と首へ絲をつけつり人形となし給ひ、自由自在を働かせ、女房に渡し給ふ。

『先づまちや〱。なか〱面白い。どうやらやるが惜しくなつたやうだ。」

「おかげで亭主が、ぐなりしやなりとなられました。』

有徳の町人にて、腹の瘦せたるもの來り、食持の腹の瘦せたは見苦しう御座れば、ふくれますやうにとの願ひ、是れも仁王の御工夫にて、白豆をしたゝか食はせ、例の竹の筒の水をむしやうに飲ませ給へば、腹の中にて豆がふやけ、腹の張ること奇妙なれ。

『いたゞく水は竹筒はづ、お療治は當てずつぽうらしい。」

「それ譃ではあるまい。是れが譃なら己が豆鐵砲だ。』

又四五年このかた、一向歩かれぬ病人二三人、駕かけに來りければ、是れも又お案じにて、足の裏へ蜆貝を田にて履の付け、團扇にてあふぎ立て給へば、ひよい〱あるくぞ不思議なる。

『蜆踊がしようまうぢやえ、どうだ〱。」

「合點だ。とんでもえ、かつたり、とんでもえ、かつたり。てや此奴は意氣だわえ。』

同所に下目のつぶれたる者來りければ、先づ頭を打ちこはしてこはれ口より目の玉を入れ、やさしい目とこはい目と、ひつくりかへるやうにこしらへ、尻の穴へ鯨竹をとほし、むきざしにて自由になるやうにして渡し給ふ。頭のこはれ目に、大黒頭巾をかぶせて見苦しければ、一鍋の頭巾を平常かぶせて置

け。」とのたまふ。
「かみさん見さつし。そりやべつかつこう――何と面白からう。」
「それ舌がべろり。又ひつこむ。それべろり。ハア是れだけ仁王様のおまけと見える。」
又じッになる女の子、是れまで唖にて物を云はざりしが、仁王のお案じにて、鸚鵡、九官を黒焼にして、例のお水にて七日飲ませ給へば、口を開く事、錢獨樂がはだしのやうになり、願ほどきに参りけるが、其の時仁王の尊體より、光明を放し給ふぞ有り難き。
女房「あのね、向うのをばさんも仁王様へ行きたいさうだが、岸縞の着物も利が二百食つて居るし、小使にも一本も入るから行かれねえとさ。そして日なしも三口あると。今月大屋さんへやらぬと、今では此の様に口をききますから、ちと困ります。」
「此の光は後光のさすのではない。此の子が餘りしやべるから、面から火が出るのだ。」
仁王尊の御療治日々繁昌したまひ、今は貴賤羣集し、老若男女たふとみて御門前に市をなし、御籠りの人々ばかりもおびたゞしき事なりければ、今は銘々に御療治なさるも御面倒なりと、御夢想の療治としたまひ、御籠りの夢枕に立ちいろ／＼御託をあけ給ふ。
剝身を計る如く、大きなる網杓子を持ち給ひ、大勢の病難をすくひ取り給ふ。依つて參詣の者「金

網陀ン佛。」と申すもあり、「網妙法蓮華經。」と申すもあり、是れはおかまひなし。いまも仁王は鼠の如く、金網の中に安置すべしとの御告げなり。此のねずみと申すは鼠にあらず、御籠りの者を、寐ずに見て居たまふと云ふ事なり。然し網をかじり給ふ事はなし。

「此の隙からふれよう。善哉々々。此の樣に各ふれては面倒だ。其の鄰おなじく、同じく、又爰も同じく、奇特なるかな汝等、さこ人を馬鹿の網身と思はうが、深いあさりは汲みて知れ、今まで飲ませし竹の水、しぼり上げたる網杓子、ます〳〵計る籠りの者、病もさつぱり中棒の、あつき惡魔もかいつりみ、西の海へ蛤となすは仁王の御誓ひ、眞かい謔かいどうかいのと、めつぼふかいな疑ひを、起すまいぞの貝盡し、それはさうだが籠りの者、そりや蹈みぬいた風ひくな、女も男も氣を付けろ。此方はむき身のたくせんと、こゝうやまつて申す。」

何の役にも立たぬせりふをのたまふ。

「飲んだ水を、よく絞らぬと療治がならぬ。是れで水を絞つて十六人日だ。こつちのますでは損だわえ。」

「こもりこい山椒食はしよ。御堂の脇で水飲ましよ。」

などと地口の寢ごとをいふ。

『私やアお水を飲んだせゐか、水臭くなりました。』

などと愛でも寝言をいふ。

『これ靜かにさつし。夢がかち合つてならぬ。』

扨も仁王尊は、其の内如何のわけにてや、極樂淨土より俾文谷の一寺へ渡り給ふ。則ち佛法守護の爲に、山門に立たせ給ひ、今も此の佛へ祈誓をかけ、諸願成就如意滿足、かなはざると云ふ事なし。佛在世には、御兩尊諸事萬事よく、おう〳〵と飲込み給ふに依り、仁王尊と佛名をつぎ給ふ。今の世にてハア、ウン〳〵と、御兩尊とも飲込み給ふに依り、アウンの仁王と申すぞ有り難き。最一ツまけて目出たけれ。

『みな願ひの通り飲込んだ。ア、ア、。』

『己も合點だ。ウン〳〵〳〵。』

願解而下紐哉　拜壽仁王參　終

大極上請合賣心學早染草

山東京傳作
北尾政美畫

畫草紙の理窟臭きを嫌ふといへども、今其の理窟臭きを以て一トつの趣向となし、三冊に述べて幼童に授く。もし其の理を得る事あらば、天竺の親分も方便を懐にして退き、魯國の親仁も天命を袖にして去るべし。しからば我が國の姉子なれども、清くいさぎよしとし給はん哉。

京傳述

人間に魂と云ふものあり。如何なる物ぞと云ふに、男の魂は剣なるべし。又[illegible]小松の[illegible]官が云へる分を聞けば、女の魂は鏡にきはまり、又[illegible]の魂は赤銅に赤き[illegible]をさしたる輩も、とつてん[illegible]大事に箱へのけて置くがよし。剣と鏡なりと云ふは皆たとへなり。又年代記の畫を見るに、魂を知る事として、

木九からに火三ツの山に土一ツ七ツは金と五水りやうあれ

とあれども、是れはこじつけなり。心より外は無き物なり。是れを生ける時は精氣と云ひ、死す時は魂魄と云ふ。又心神とも云うて人間の大切なるは是れに過ぐる物なし。其の魂と云ふ物、何處より來るぞと思へば、天より授かるなり。

そもく天上に、天帝と申す尊き神おはしまして、常に茶椀のやうな物へ、椋の實の皮のやうな物を水にてとき、竹の管をひたして、魂を吹き出し給ふ、其の理方子供の弄ぶ石鹸の如し。吹き出し給ふ時は、悉皆く圓く、全き魂なれども、妄念妄想の風に吹かれて、中にはいびつになり或は三角四角になつて、飛び行くもあるなり。

『己が體には畫書も困るだらう。今日のなりは日本に限るのだ。外の國へは沙汰なしく。』

『評判々々々々。』

爰に江戸日本橋の傍に、目前屋理兵衛と云ふ有德なる商人ありけるが、妻妊娠りて當る十月目と云ふに出産して、玉の如くの男子をまうけければ、家内祝詞を述べてさゞめきける。

稚き時は白き絲のともく、如何やうにも染るものなりとは宜なるかな。理兵衛が倅出生すると等しく、彼のいびつなる惡魂、皮肉へ分け入らんとする所を、天帝あらはれ出で給ひ、惡魂が手をねぢ

上げ給ひ、全く圓きよき魂を入れ給ふ。是れ親理兵衛が常に一心のをさめよき故、天帝惠みを垂れ給ふなり。されども凡夫の目には、少しも見えざるこそあさましけれ。

『爰かまはずと行け。』

「ハ、ア。」

「チョン／＼／＼。」と、拍子幕と云ふ所なり。

理兵衛は、倅を理太郎と呼び育てしが、よき魂日々つきそひ守り居ければ、成長に從ひ、利發にて行儀よく、其の上器用にて外々の子供とは事かはりければ、兩親、掌中の玉の如くいとほしみ育てけるにぞ、三ッ子の魂、百まで末頼もしく見えにけり。

『是れは見事だ、己が子ながら後世恐るべしだ。餘り不思議だが、誰ぞに書いて貰ひはせぬか。』

「ほんに、御器用なお子様で御座ります。」

「お師匠さんが、これからは國づくしを書いてやる、といひなさつたよ。」

「坊はお父様やお母様が大事だ、穴一や寶引はしねえもんだねえ。」

魂うしろに髭をなでて居る。

魂『ちつと、さうもござるめえ。』

かの悪魂、理太郎が身體へはひらんとせしを、天帝にケチをつけられてより身の置き所なく、間應の身體もあらば這入らんと思へども、當時は儒佛神の尊き道頻りに行はれて、人みな悪き心を持たねば、立ち入るべき所もなく、宙にぶら／＼して居たりけるが、折もあらば理太郎が身體の、よき魂を亡きものにして、我々長く、理太郎が皮肉の中を住家にせんと工みける。悪魂仲間寄合をする。

「斯うならんだ所は、今、丁半でも始まるやうだ。數珠を忘れた百萬遍の場もある。」

「此の頃は心學とやらがはやるから、己が住居をするやうな、不埒者の少ないには困る。」

己々が不所存より、身を果したる者の悪魂ども、中有に迷つて居る。

今は早理太郎十六歳となりければ、元服をさせけるに、生れつきもよく美い男となり、執行の商賣向あらまし預けてさせければ、かたの如く、律義者の朝も早く起き、夜遣も遲く寢ねて、隨分萬事に心をくばり、儉約をもととして、親に孝をつくし家來にあはれみをかけ、十露盤を常に放さず、内外を守りければ、其の近邊に評判の子息となりけり。

「額は拔かねがよい。人がらが悪いぞや。」

「ハイ／＼。」

「よくお似合ひなされました。」

人の寐たる時は、魂が遊びに出ると云ふ事ちがひなし。理太郎十八の年、ある日黄昏に疲れてうたゝ寐しける。かの魂、日々惡き魂を近付けまじと、守り居る事ゆゑ、嬉しくたびれて、理太郎がうたゝ寐を幸ひ、そこらへ遊びに出でしが、例の惡魂はよき折節と仲間を語らひ來り、よき魂を縛り置きあとの身體へはひりける。

善「エヽ、殘念な。」

惡魂「よい氣味〳〵。」

理太郎は其の日晝寐さめて、今日は淺草觀音へ參詣せんと志し、觀音へ詣り歸らんとせしが、ついふと思ふやう、われ今までは吉原と云ふ所、ふり向いて見る氣もなかりしが、素見はさして錢もいらぬ事なれば、一度は見ても苦しかるまじと思ひ、淨き土手の方へさしかゝりける。是れ惡き魂の皮肉に分け入りし故なり。

善「イヤ〳〵行かうとは惡いことか。家で案じるであらうが。然し、こゝまで來たから一寸見て行かうか。たゞし歸らうか。」

と[illegible]つゝ、土手を行きつ戻りつする、これ惡魂の所爲なり。

善「コレ〳〵、[illegible]事を云ひつ[illegible]。我等諸事の[illegible]。」おと吉原の意氣な所を見

な。サア〳〵、早くきなこもち〳〵。」

[illegible]「己は追ひはぎに遇つた宿引といふ身だ。」

惡魂「ウ、〳〵〳〵しめたぞ〳〵、ウ、〳〵〳〵そこだぇ〳〵。己が身は人間の車を引くやうだ。」

理太郎は惡き魂にいざなはれ、吉原へ來り、素見物にて歸らんと思ひしが、中の町の夕景色を見てより、いよ〳〵惡魂に氣を奪はれ、とある茶屋を賴み、三浦屋のあやしのと云ふ女郎を上げて遊びけるが、忽ち魂天井へ飛んで歸る事を忘れ、更に正氣はなかりけり。

魂宙に飛んでをどりを踊る。

[illegible]「そこでせい。」

「よい〳〵。」

「アリヤ〳〵。」

[illegible]「ア、いい香ひがする。をかもとの少女香と云ふにほひだ。」

[illegible]「酒にあかさぬ夜半もなし。これが高じた物狂ひ。」

[illegible]「ア、面白い〳〵。こんな面白い事を、今まで知らずに居たが殘念〳〵。」

年久しく、理太郎が身體を住家として、忠義をつくしたるよき魂、此の度不慮に惡魂が僞にい

ましめられ、理太郎が身の上如何と案じけれども、誰あつていましめを解いて呉れる者もなければ、一人気をあせる。

此のところ忠五郎が伊三郎が猿轡のありやすあつて然るべし。

[illegible]「己は矢口の兵庫が女房、信仰記の雲霧と云ふものだぞ。」

悪魂は背から縮りくたびれて、女郎の懐中へ這入り、やう／＼蘇へるとひとしく、理太郎は漸くと家のことが気にかゝり、己はどうして爰へは来た事ぞ、たゞごとならぬ気にはなつた事ぞと、夢の醒めたる心地して、何も言はずなお帰らんとせしが、此のさわぎに悪魂、目をさましして、帰してはならじと早速理太郎が身體へ飛び込みければ、また心持ち遂に居續けと極めし所へ、かのよき魂いましめの縄をやう／＼引き切り、一さんに馳け来り、手をとつて連れ帰らんとする、悪魂は帰すまいと引きとめる。

理太郎左へ引かるゝ時は、「あゝいつそ居續けしやう。」と思ひ、右へ引張られる時は、「イヤ／＼早く帰らう。」と思うて、廊下を行きつ戻りつ思案區々なり。

善「井戸がへと云ふ身だ、コレ屁をひらつしやんな。」

○「ヨイサア／＼／＼／＼。」と縄を引く。

「お歸りなんすとも、居なんすとも、しなんしへ。馬鹿らしいよ」

魂の姿は、凡夫の目には一向見えぬ故、茶屋の男は、けしからぬ身ぶりをする客人だと思ふ。

理太郎は元の如く、よき魂、又這入りける故、この間の女郎買ひの事は夢のやうな心にて、思ひ出すも嫌らはしく、帳合ばかりして居たりしが、彼のあやしの所から、魂膽の文來りしを何心なく開きければ、又惡魂此のふみの中へ這入り來り取りつく。

女郎「初會からおふみの參ると申す事は、神代にもない事で御座ります。」

よき魂、ふみを見せじと氣をもむ。

理太郎惡念きざしければ、此の時を得て惡魂、よき魂を切り殺し、日頃の念をたちける。

惡「覺悟ひろげ。」

善「むねん〳〵。」

理太郎は、あやしのが手を盡したる魂膽の文を見しより、又々心まよひ、己が身上で一年に三百や四百の金つかうたとて、さのみ痛みにもならぬ事。千年萬年生きる身ではなし。死ねば錢六文より外は入らぬものを、今までは無やくの儉約をした事ぞ、何ぞ燭を秉つて遊ばざると、古詩を以て手前勝手な例に引き、惡念は頻りにきざしける。

悪魂ども、遂に理太郎が皮肉へかけ入り、よき魂の女房、二人の男子を追ひ出しければ、三人手を引きあひつゝ、年久しく住みなれし身體を立ち退くこそ憐れなり。

悪魂「われ等にて追ひ出す。」

悪魂「きり〳〵たつて、うせやァがれエ、」

善魂「今に思ひ知らせん。」

「かゝさまいなう。」

「かなしや〳〵。」

是れより理太郎大ぜいの者になり、内に日夜詰めかける。

次郎も、理太郎が餘り長い居るのを嫌がつて、言葉をかけます。

理太郎が番頭、迎ひに來て奥山もござで、理窟をいふ。

番「左様に御料簡のない、おまへ様ではなかりしが、天魔の見入れか是非もねえ。」

次「コレ〳〵そんな野暮をいふな、どんな事があつても、歸る事はいやだのすしだ。」

番「旦那にお父様お母様が、お案じなんすだらうねえ。私やァどうも歸し申したくねえが、どうしたもんだらう。」

理「是れからは己が世界だ。」

理太郎はだん／＼悪魂ふえて、女郎買ひの上に大酒を飲んであばれ、博奕を打ち騙りをなし、親にも不孝に當りければ、遂に勘當の身となり、今は身の置き所さへなきやうになりて、あまつさへ或夜親の家の土藏の尻を切る。

悪魂ども多く集まり、付きまとつて色々悪事をなすゝむる、恐ろしき事なり。「つゝしむべし／＼。」

犬「山科の隱家おやァねえが、昔の旦那今の泥、吠えねば私が役目がかける、ワン／＼／＼／＼。」

理「ぶちよ己だわ、吠えるな／＼。荒神さまのほえるな／＼は、どうだ。」

理太郎は遂に宿なしとなり、尚更悪魂増長して、今は盗賊となり、人家離れし所へ出て、追ひはぎを致しけるこそうたてけれ。

然るに又爰に博識秀齋、仁徳の世にいちじるき、道理先生と聞えたる貴き人おはしけるが、或夜講釋より歸りがけ、此の所にて盗賊に出遇ひ、かねて手に覺えあれば早速引捕へ、不便の事に思ひたまひ、いかにも教訓して善心に導かんと、其の罪をゆるし、同道して宿所へ歸り給ふ。

悪魂ども、己等がわざにて今この身にして仕舞ひながら、皆々指さしてどつと笑ひけるぞ、憎らしき。

「憎い奴の。」

爰に又よき魂の女房二人の倅は、如何にもして親の仇を討たんとつけねらへど、悪魂は多く荷擔人あるゆゑ力に及ばず、無念の月日を送りしが、本心に歸りし時を得て、なんなく本望を遂げければ、其の外の悪魂は皆々逃げ失せけるぞ心地よき。

善「親の仇くわんねんしろ。」

善「夫の仇、勝負々々。」

善「おもひ知つたか。」

理太郎は、道理先生に命を助けられし上、儒佛神のたふとき道を聞き、いまは先非を悔い本心にたち返る。

半「人間萬事大切なるは一心なり。みな己が心より出て己が身を苦しむる、その心は即ちたましひぢや。爰の道理を、とくと合點せねばならぬ。」

理「道理のないは私一人、可愛と云うてくれのかねも、物前の金も今はもうけがらはしや〳〵。」

上「此のついでに、此の本の作者をもきかねばならぬ。大分不埒な奴ぢや。」

道理先生、ことごとく教訓して後、目前屋の兩親に勘當の詫をし給ひければ、兩親も大いに悦び早

遠呼び返しければ、理太郎これより道をあきらめ、親に孝をつくし眷屬を憐み、大君子となり家富み榮えける。是れみな道理先生の仁德なりと、世に云ひもてはやしける

かのよき魂の夫婦兩人は、親の跡目をつぎ、長く理太郎が身體を住居として肚をもはごくみ、怠らず守りけり。是れより魂居すわつて、再び立つことなし。

大極上請合賣　心學早染草　終

京傳憂世之醉醒

山東京傳作

龜毛畫

自序

老子曰く、信言美ならず、美男傷にならず。然るに草雙紙に、理窟臭きが故に貴からず、茶なるを以て貴しとし、女郎買では、色男なるが故に貴からず、黄金を以て貴しとす。是れに於て當世なり云々。

戊申春

山東京傳述

むかしむかしの頃かとよ、江戸の京橋の邊に京傳と云ふものあり。何と云ふ藝當もなく、浮世を雲水の如くうかうかと暮しけるが、今年二十七の若盛り、女郎なれば年の明ける年なれど、是れぞと云ふ事もなく、只茫々と月日を送りけるが、女郎を買ひたいには金がなし、地色をしたいには男が惡し、

あけくれ心にまかせぬ事をはかなく思ひ、たま／＼人間に生まれ、かく世に捨てられることの口惜しく、あはれ金もうんとあり男もよくば、かうしてあゝしてと、及ばぬ事とは知りながらさま／＼な望みを思ひ、心をおぎなひ暮しける。

『顔回は肱を曲げて枕とす、樂しみ其の内にありと云つたが、これでも足る事を知らば、蒲團なけとこり柏木の、きみにも劣らぬ負けをしみだが。』

京傳ある日つれ／＼のあまり、眞崎の邊をぶら／＼とあるきけるが、にはかに日暮れ掛りけるまゝに、急ぎ宿へ立ち歸らんとせしが、此方のかたにて、ヒウドロ／＼と云ふ音するとひとしく、怪しの異人忽然としてあらはるゝ。

『錢さい／＼、我はこれ四文錢一本や、南鐐一片と云ふ下卑な所ではなく、ぶつつけの一角仙人とは我が事なり。汝仙人じみた所あるにより、今仙通を授くるなり。此の丸藥は仙通丸と云ふ藥なり。是れを飲めば忽ち仙道を得ること神の如し。其の上には何事も自由自在にて、是れをかうして見たいと思ふ時、たつたり／＼と手を三ツ打つと、どんな願ひにても叶ふなり。なか／＼芥子之助ぐらゐの及ぶ所にあらず。』

と、うぬを云ひ／＼授けたまふ。

『山賣の反魂丹では御座りませぬか、餘り口上すぎます、長崎に仙人の御座なる事を今まで承りませなんだ。そして繪にかいたは見ましたが、此の御仙人樣に始めて御目にかゝります。ハイ／＼。』

「よくあるやつだから、必ず夢か草雙紙だらうと思ふた、決して草雙紙ではないぞ。」

京傳は、かのかの仙人に仙藥を授かり、宿へ歸りて飲みければ、なるほど心持はつきりとして、如何にも仙通を得たる心持のするむしやうに嬉しく、兼て下戸なりければ、さらばとて試みに、日頃のぞみ居たる菓子をちとしてみらんと、教への如くなつたり／＼と、手びやうしを打つとひとしく、色々の菓子あらはるゝ。先、其の菓子の色々は、桔梗屋の[illegible]、鹽瀬の饅頭愛嬌卷、鈴木の小倉野、西王母、鳥飼のかせいた、九重饅頭、大島のさゞれ石、金澤の名鳥[illegible]、竹村の最中の月、茗荷屋の濱千鳥、虎屋のきんとん、海老屋の京土産、松印の翁糖の類、江戸に名高き珍味の菓子、うづたかくあらはれ出ければ、京傳は其の不果に仙通の妙をかんずる。

『貧僧の重ね齋とは此の事だ、何から食はうか。いつそ氣がもめる。』

京傳菓子の手ぎはを見て、此奴は面白い、さらばちと黒裝をつくらんと、又なつたり／＼と手びやうしを打てば、いろ／＼當世風の品をあらはるゝ。[illegible]なしの[illegible]、上田本八丈の[illegible]縞、唐[illegible]の黑けんぼう、黑[illegible]、黑[illegible]、花色[illegible]のはつち、[illegible]の帶、黑ちりめんの風呂敷頭巾、よせ切[illegible]

の縞絆、越川仕入の煙草入紙入、住吉屋の櫻箸、花扇の書いた扇、殘る所なくあらはるれば、京傳いふいと呆れて何にもいはず、だまりの天神様なり。

『やれ〳〵い仙人様こ　あなたの仙通、イヤモ一言も御座りませぬ。かんしん股をくゞります。へいこうへいがくののほりと來て居ります。あんまりの事で、どうも日うつりがしてなりませぬ。大佛だなんと悪い洒落だなう。しやれも、仙術でちと意氣にしたいものだ。しやれての後の御料簡さ。』

先づ服裝も、ひつこぬきの當世風に出來たれば、日頃からうらやましく思ひ居たる、女郎買ひをして見んと思ひ、吉原は後へ廻して、深川土橋あたりからしやれて見んと、又候なつたり〳〵と手拍子を打つと、程なく縁側の側まで川となり、いづくともなく、猪牙を早めて來り『サアめしませ。』と云へば京傳此度は、呆れがとんぼ返りをなして、其のまゝ舟に飛びのりければ、いつさんに漕ぎ行く。

『サア〳〵早くめしませ、遅いといい玉がなくなりやす、今からは恰度亥刻あきだ　汐時はいい。』

程なく深川土橋へつき、新尾花屋へ上り、名ある妓女をあげ遊びければ、日頃の思ひを此の時はらしける。ちと座敷が寂しいと思ひ、又なつたり〳〵と手を打つと、忽ち幇間はやり藝者來りて、神慮をすゞしめる。

『小吉は今はなんといつて出るの。八幡やの千蝶も呼んでくれ。』

美しいのなら、お勝さんのあたりがよからう。」

「旦那のおしやれはきついもの〳〵。」

「コレ餘り旦那々々と云ふな。今までは雪駄直しより外、旦那と云はれた事がねえ。」

深川にても、二三日居續けして遊びつくし、もと家へ歸らんと思ひ、なつたり〳〵と手を打つとひとしく、二階まで猪牙舟をつけ、ひらりと乘ると忽ち家の前へつく、仙衞は奇妙なものなり。それより、もう一つと氣をかへて品川で遊ばんと思ひ、こなつたり〳〵と云ふと、芝の初音屋から駕籠を持ち來り、緣側から乘ると、又急いでかつぎ出す。

「旦那降りまして、おわるう御座ります。」

「駕の中のわに濡れてゐる、と云ふきどりで降るもいいのさ。コレ己は頭が痛いから、しづかにやつてくれや。駕の急ぐは野暮なものだ。年季者が背泊に行くやうで惡い。はてさて仙衞と云ふものはこはいものだ。癪だの痛癪だのと、迎な病をおぼえた。」

程なくがきつい好きだが、また程なく品川にいたり、大松坂の其朝、新松坂のうら、か、村田の松田、角町の萬屋、其外名あるおやれをあげ、爰にても又全盛の遊びをして二三日居續けをしけれども、網一ツ其の入用を拂へと云ふものもなく、心おきなく日頃の望みをかなへける。

「穴の稻荷がきついはやりだ。おつつけ江戸からも参りが御座りませう。村田のお熊さんが正一位を取つて上げられましたで、爰ではやり手の事をまかないと申しますぞ。」

「總助と榮藏と、高輪の稻本をよびにやつて下せえ。」

兵衛は品川にゐつゞけて、今日はちと芝居と出かけんと思ひ、「なつたり／＼」と云へば、忽ち堺町より運べの人きたり、棧敷もよくにとつのへありて、茶屋からは種々の食物をはこび、何不足なく、見物する。ふと棧敷に花を飾られと思へば、美しき江戸藝者、名ある色子まで來りけるこそ、不思議ともなんとも云はん方なし

「大坂の中の芝居で、團枝が七化、中車が啞の腹切が大當りで、雛助が一世一代がおされると申します。」

「あれ、あの向うの三軒つゞきの御屋敷は、たしかに赤坂の御屋敷だ。どれも美しいものだ。衣裳づけも野暮でねえ。あれを見ては、御屋敷もまんざらでねえの。」

それよりも京傳は、大きにのりが來て、今日は相撲、あすは向島、あさつては萩寺、其のあくる日は吉原に居つゞけと、日頃かうしたいあゝしたいと思ひし程のこと、皆しつくしける。是れ皆仙術のとく、近年の奇怪といふべし。

京傳つく〴〵思ふに、今まで日頃の望み一ツとして叶はざる事なし。是れからはちと家で樂しむためよき妾を求めんと、又なつたり〳〵と手を打つより早く、大年増、中年増、振袖と三人まで、美しい奴が髣髴としてあらはるゝ。

「扨々どれもこれも美しいものだ。いづれ菖蒲と引きぞわづらふだ。喜瀬川花扇常盤津花紫と云ふ調合のお藥、早く一服用ゐて見度いものだ。」

京傳は大人氣なく、振袖にきはめければ、後の二人は忽ち消えてなくなる、さて〳〵仙術は重寶なるものなり。それより、かの振袖と日夜しけりくさり、今夜は鈴木の鰻、あすは結城の中房、明後日はのろまの玉子、やのあさつてはあり難山の寒鳥、鴨のいり鳥くるま海老、火燵やぐらにひざ枕、アリヤ〳〵〳〵やつとせ、と云ふ程の目が出る。

榮耀の餅の皮とはよく云つたもの、京傳はや昔の不自由な時の事を忘れ、今までした事は榮耀に似たれど、みな金づくで出來る事なれば、是れからちと金づくで出來ぬ事をしてみんと思ひ、一日觀音の奥山をぶらつきしに、大名の姫君と見えて大ぜい女中を連れ給ひ、梨子地蒔繪の乘物をおろし、内より出で給ふを見るに、十八ばかりにて、春の花もかすみの袖をおほうて恥ぢ、秋の月も雲の尻をはしをつて逃ぐべき風情、京傳肝もでんぐり返り、これこそ金づくで出來ぬ事と思ひ、忽ちなつたり

なつたりと手拍子を打つと、かの姫君まねき給ふ故そばへ行きしに、たれ咎むる者もなく、乘物のうちへ這入り戸をたてて忍びぬ。

『ちとおひろひ遊ばせ。』

「御前芥子之助と申すを御覽あそばせ

京「ア、路考杜若に萬菊をこばいづけにしたやうな代物おやゝ。トはし取りたいナ。」

京傳は仙術にて、なり難き思ひも協ひ、乘物よりおりんと立ち出づる所を、作守角太夫「それ狼藉者。」と大勢にていましめ、屋敷へ引かれんと危き所へ、旦那寺の和尚來り「これは我が檀方の者なり。」とて樣々詫事して、其のかはい、人々の見る前にて京傳を坊主にする。こはいかにと思ふ內、一陣の風ふき來り、姫も家老も供廻りも和尚も消え失せて、ありし觀音の奥山と思ひしは、いつぞや仙術を授かりし眞崎にて、身には筵や紙合羽の破れを着て居たりければ、始終狐の所爲たる事を、始めて知る。

『どうして見ても、是れは夢か、草雙紙に違ひないわえ。』

京傳は呆然として我が家へ歸り、頭を撫でて居たりけるが、知らぬ男四五人「かけ取りに來りし」といふに、かき出しを見れば、江戸中の名物と思ひしは、中橋のはらぶとに大木戸の牡丹餅の類、通

仕立の道具とおもひしは、酒むしろに紙合羽のやぶれ、十九文見世のはりかへの煙管、深川土橋と思ひしは、芝三田の安見世、芝居と思ひしは下谷の乞食芝居、妾と思ひしは吉田町の夜鷹なり。諸入用總高〆て三十貫文、今日までの約束なれば、受取らんとひしめく、

「そんなら仙人と思つたも、やつはり狐であつたか。仙通丸と云うた薬も鼻くそでゞもあつたらう。

さて〳〵〳〵〳〵。」

「おまへはぜんてえ、氣がふれて御座るのか。」

「おまへのたしかな印形を持つて御座つた故に、貸し申したのさ。」

京傳は二度びつくり、狐の仕業を憎み、化すならば錢の入らぬやうに化してはくれいで、[illegible]々なさけなき畜生めと怒れども、せんかたなく、掛取りは是非に受取らんと云ふ。みな狐の業にて、たしかに京傳が印形を持ち行き、かけにした事ゆゑ、云譯たちがたく、と云つて三十貫文と云ふくめんは出來ず。漸うかけ取りをなだめて少しの家財をかたにやり、此の場の難儀をのがるゝ。あとは褌一ツ、いくら考へてもつまらぬものなり。

「斯う云ふ所で、川舟の棹長に一ツよませたい。」

「目くやむな〳〵。ほんまの遊びをさせると、そんな事ぢやアない。安物でしまつたは贔屓分だ。」

京傳つら〳〵思ひ廻らしけるに、むべなるかな、我天理にかなはざる及びなき望みを思ひし妄念をしりぞけんと、狐のばかせしは我がための大師なり。はらぶと餅も美食と思ひ、夜鷹も美人と思はば足る事をしるべしだ。アヽ迷うたり〳〵と忽ち悟道して、長く清貧をもてあそび、一箇の隱者となりて、心ゆたかなる春を迎へけるとなん。

京傳憂世之醉醒　終

壬生狂言
唐本讀言

直讀見臺秋

芝全交作

柳郊畫

序

如何是祖師。西來意、達磨大師は九年無言で、其れ弘勢佛法を悟らしむ。作麼生壬生の狂言。此奴も默つて人を度すや、こゝを以て狂言別傳、風流文盲、以心傳心、何所參つた此所參つた。諸の權兵衛さん茶を參つた、おやまが息子に伊勢參つた、御手が重るなら銚子と悟れと爾云ふ。

亥初春　題芝全交

抑壬生狂言といつぱ、どうか斷う申した所は、古流に分りさうな事なれど、一體此の世界は鐘と太鼓ばかりにて物を云はぬがたてなれば、爰に何と云ふ人が、いつの時代かなんだか、一向默つて居るから知れねども、大名らしい上面のよささうな人、家來らしい者を大勢呼びよせ、何だか寶物の名

剣とも云ふやうな仕方をして、高麗蔵と云ふやうな色男に預ける。其の中に半左郎と云ふ様な撫付けの人、己に預けさうな物だと云ふやうな面をして居る。どうか謀反でも巧みさうな人なり。傍に築地の善孝を見るやうな人、是れもどうか此の人と一緒のやうなりと、先づ人物の上へ札を付けて置く。馬鹿々々しい。各々に札を付けたは、品川へ遊びに行つた草履のやうだと、云ひはしないが思つて居る。

若衆己ばかりなぜ札を付けぬと思へど、無言つて居る。

それから色男は宝物を預り、帰る折から、何処からか美しい十七八な娘が来て、色男を口説くやうな仕方をすると、男は、志は忝いが、どうもっ、とか何とか云ふやうな仕方。それから娘は死にます、と云ふやうな身振をすると、それから何かあつちへベッタリ、こつちへベッタリ、引つついたり吸ひついたり、徳平が膏薬のやうだ。

どうも是れも無言つて居るから知れねども、たしかに是れは色事と見えたり。ちよつと見てもやるもんぢやァねえ、御覧じろ。

吸付け煙草のつけさしを見るやうで、拝んで飲みこんで居る。

うれしいなうを口の中でとなへて居る。

推量の通りに違ひなく、此のなで付けの人悪い奴と見えて、此のいちやつきの内、刀を竹光のやうな物とすりかへて、色男を罪に落す仕打

案するに、此の娘に惚れて居て、くどけども承知せず、そこで憎さの意趣なり、なんだかもみこみにするやうすだ。だんまりのぐつとしめだと、心の中でしやれる。

其の後四五日もたつての事か、但し一年も過ぎての事か、是れも默つてするから譯は知らねど、彼の撫付けの人と、此の人の俳組と見える人と連れ立ち色男の家へ來て、預りの刀を改めると云ふ樣な事をすると、何だ替玉の竹光だから、色男は言譯がないと狼狽へ廻る傍に、此の色男の父樣と見えて、年頃五十許りな爺樣、なんだか息子が不埒だと云ふ樣な顏をして、頭を振らかし叱るやうな身振、敵役の方には、其の言譯はァノ〳〵、何とだェ、こなどと云ふ事を面でばかりして居るから、へたな幇間の類ひ、さうして間に身顫ひばかりして居るから、皆が盃でもなかつた樣に見えるもをかしい敵役の方はいゝ氣味だと云ふ面をして、ひがめたりしかめたり、按摩をとらせる樣な面なり、扨うちすると、親父は息子に腹を切れと云ふやうな仕方があると、敵役はうれしさうな面付、さうすると息子と色事をした娘が來て、此の難儀は私故、私を殺してと云ふ仕打があると、さつき居た實らしい人が來て、此處をすてゝは紛失の刀は誰が詮議すると、助けるやうな仕方があると、敵役といふ

こんな云ふやうな事や何やかや、爰はごた付いて、一向書き取られず、いゝ加減に見てやりつこさい。親父は息子を勘當ぢやと云ふ身にて、扇にてはつちく打擲する。さぞ痛からうが痛いとも云はず、かゆいとも云はず、たゞ泣くばかり。誓願寺の坊様ぢやァあるめえし。

それから娘と息子の衣類大小までぬいで追ひ拂へと云ふ樣な仕方があると、棒突が出て追ひ立てるやうな事がある。さうすると實らしい人がそれ合點かと云ふやうな身振、二人は志忝いと拜む身振、そばから棒で追ひ出す、兎角何らかも無言でするから、爰は何の事はない、つんぼうがたゝき放した見物にいつた如し。

棒突ほどの血の涙、おちてしやうねとなり給へと心で思ふ。扨勘當の段もすむと、何だか皆うなづき合つて奥へ這入る。跡に總髪のむねき者が一人殘りて、何か行ひのやうな事をすると、鼠が四五疋出る。さうするとどろくで井戸の中からおそろしい坊主が出て、又例のだまり合ひの仕方、又井戸へよつと這入ると、此奴は何の事だかなほく知れず。

藪から棒でさへ知れねえから、井戸から坊主ぢやァ知れねえ筈だ。

だまり武士や家中武士と、根性が惡ければ、地口まで惡いのを胸に思つて居る。

如何に無言だとつて鼠までチウとも云はず。

扨もそれより色男夫婦の者は、何か旅装束にて、刀の詮議ながら落ちて行くと云ふやうな所にて、向うから豆腐賣りが來懸りて、互に顔を見合はせて膽を潰した様子、如何様色男が家來とも云ふ様な仕方があると、彼のなで付けが廻し者と見えて、二三人來て喧嘩を仕かけ、女を引立てて行かんといふ様子、豆腐屋は夫婦が難儀を救はんと、此の所立になり、面白さうな事なれど、何を云ふにも無言つてするから、廣小路の喧嘩を遠目頭で見るが如し。

「それなぶられたけ豆腐だ」

「それ見ろ天神棒を持つて油揚の方を食らつた、默り坊では、見得坊、テレ坊、つんぼうが芝居を見るやうだ。さつとのほうにはなほ分るまいと、ホ、うやまつて申す。」

と豆腐屋いかんせりふを氣でくつて無言つて居る。

扨此の日の卷の始めにおいてあつた大名の様な人、どう云ふ譯か知らねども、吉原の傾城に打込み廊夜通ひ給ふが、つきあいの侍には佞人らしい奴もあり。是れには深い譯のありさうな事なれど、じれつたい譯わからねども、どうもせう事がなし。爰の様子で見た時は、此の本もどうか先代萩を見る様だが、此の傾城も三浦屋の高尾でもあらうか、是れも默つて居るから知れぬ。何にしてもこんな無言ばうな女郎を買つては、面白くもありさうもないもんだ。

『いい地口が一ツあるが、どうも云はれねえ。』

「はて其處が伊達食ふ蟲もすき〲だ。」

と云ひさうにしたが云はず。

或時彼の大名の樣な人吉原より歸りがけと見えて、關取とも云ふべき者をつれ、四ツ手駕にのり歸り給ふ折から、惡者と見えて二三人來かゝり、無體に喧嘩をしかけるやうな事があると、角力取は投げたりはふつたりする。殿樣も刀をぬきて切つたり張つたりする。どうしても是れは此の殿樣が賴兼公で角力取が細川か雷か。さうして見れば、彌先代萩臭いことと受合ひ。然しだまつてするから、若し違つたかも知れず、それでも先代萩くさし。こんな事をいつまでもいつて居ては、四日市でくさやの乾魚を買ふやうだ。

番太郎時廻りに出でけるが、時の鐘までがむごん〱となりて、何時か知れず、闇雲にくらはせておく。

『そりや、ぬいた〱ときでくつて逃げる。』

殿樣も關取も難なく人を切りちらし、其の近所に豆腐やありけるが、ずつと這入つて水をくれろと云ふ樣な仕方、ぬき身を取つて居給ふ故、豆腐やの家で膽を潰した仕方。それから角力取は血刀を洗

ふ仕方。夫婦は恐々世話をする樣子。それから此の禮にはいた下駄をやらうと云ふ仕方。亭主は飛んだ物をくれたと腹を立ちし趣。爰は仕方々々がたんとありて肩が張りてかかれず。依つて下略す。

水をしほるから、あさりのぬき身と、すでに云ふ所。あぶない事〳〵。

『番頭是れでいくら貸すと云ふ身だと、殿樣も思召して御座る。』

『無言つてふるへてばかり居ては、どうか小便でもつまつた樣で、人樣へ對して氣の毒とばかりいはぬいはぬ。』

殿樣のくれた下駄を馬鹿々々しいと言ふやうな面をして投り出して置きけるが、どうしたか大釜の下へくばつて、ぶす〳〵ふすぼる。其のかをり蘭麝の如し。引き出し見れば伽羅の下駄。さすれば賴兼公と夫婦は悟つた樣子なれども、無言つて居るから是れも知れず。若し賴兼でなければ豆腐やのより子で伜でもある奴か、色男をかくまつたも此の豆腐屋と思へど、たしかな事は知れず。

『サア御覽じろ、伽羅の下駄が出たから先代萩に違ひなし。其の證據は此の香ひをかいで御覽じろ。

草雙紙だから、すきがへしの香ひが致します。』

こんな御下駄が伽羅にもあろか。』と、何處からか不意とこんな事をいふ。

此の狂言はどう見ても先代萩に違ひなさそうなれば、さしづめ此の撫付けは仁木彈正。さう見れば

此の男とうなづき合ひする奴は皆悪者にて、頼兼公の家を押領せんとの工みと見えたり。是れだから
だまり〳〵して居る奴にめつたに油断なさるな

此の所二人にて三時ばかり頷き合つて居れども、何か分らず。きつとした張子の虎の如し。

それより頼兼公と見えし人、大方是れが高尾であらう、何でも傾城を受出した様子にて舟にのせ、三ツ股とも云ふやうな所にてさけ切りにし給ふこそ、憐れな様にも見えれど、無言つて居るから知れず。先代萩なれば大概知れたものなれど、りちぎに申さねば知れませぬ。

『あんかうのつるし切りは七ツ道具が出れども、傾城のさげ切は鳶烏が出るばかり。あとは出ず。』

高尾心に南無阿彌陀とか南無妙法とか思つて居ようが、宗旨が知れぬからかかれず。

又或時鼠が四五疋座敷をかけ廻ると、縁の下から強さうな男せり出しと云ふ見得にて出で、何か無性に睨み廻すと、さつき井戸から出た坊主と、もう一人根性の悪さうな奴が来て、とつたと云ふ見得にてかゝると、二人を投げてぐつとにらむ。是れはたしかに荒獅子男之助か、さうでなければ手負猪子家の助の類ひ。其の證據には鼻息があらい。

爰に御座るお若衆は、たしかに頼兼公の若君鶴若殿、そばに居る女中は局政岡とは思へども、たしかな事は云はれず。

此の所は評定の幕とは見ゆれど、それなれば先代萩では一番面白いひつこぬきの所なれど、例の無言で思入ればかりして居るから、面白くもへんてつもなし。なんぼ無言つてする狂言でも、向うで分らねえかして、いつもの評定より大きに手間が取れる。

『エヘン。』

「エヘン。」

「エヘン。」

「エヘン。」

「エヘン。」

せきばらひはすれども、外の事は一向に知れず。

此の所は宮尾の亡魂の所とみゆる故、芝居ですれば出語の幕にて、所作のある場なれど、何を云ふにもそこが壬生狂言、だまつて鐘と太鼓ばかりたゝいて踊るから、大名のおたすけ踊の如し

出語のかはりに鐘太鼓の出たとき、つゐの麻上下を着た所は葛西念仏の年始にあるくやうなり。

常磐津鐘太鼓、出語ッたり

『シャツテン〳〵。』

「シヤツテンノヽ。」

「出語の氣になつて首をふつてしたゝくから、いい。」と何處からかいふ。

先づ此の壬生狂言も鉦と太鼓でたゝきにして打出しと見えれば、此の本は是れ限り。又此の鰐口を打つ僧は高尾の幕に出たれば土手の道哲でもあらうか。但し土手のどうしん坊か。開いた口へ餅とは春の雜煮にて、鰐口に鉦とは春の金まうけ、胃の腑に落ちた亥の年の新板と、ホ、敬つて白す。

壬生狂言 唐本寢言 直讀見臺萩 終

世上洒落見繪圖

山東京傳作
菊亭畫

序

洒落難矣。黄山谷云、茂叔胸中洒落、如光風霽月。此洒落乎。當世之洒落非洒落。猶廳下扁螺房。堂上猫兒之洒落乎、悉皆失本意。目行過面、及觸頭於前實及也、於數洒落難矣。

山東京傳識于菊亭

風鈴の音で夜蕎麦賣を知り、笛の音で按摩と知るは昔のこと、今は人さし指をまげて見せると、質を置く事と覺るは、なる程しやれた世の中だ。爰に繪草紙の作者京傳と云ふ者、例の無益の事に案じ入つて、睡の袖に包まれたる折節、草庵の前の洒落見繪圖々々々々々と呼んで通りければ、京傳はた

と手を打ち、「ハヽつら／＼おもんみれば、世の中の人心、かうでもないあゝでもないと、おしやうにしやれ／＼してゐた所の、末は如何なる物になるやらん。」と、獨りつぶやきしが、即ち一ツの趣向となりければ、「うれしやさらばかかんこと」て、筆おつとつて寄りかゝり、既に作意をつゞりけりと、それはさうだ道成寺、これはさやなきだ‥、笑止せ。

「親父も洒落れば息子も洒落る。娘も洒落れば乳母も洒落る。しやれて／＼洒落見繪繪々々々々々。」

「おんあほきやア、バエろしやのうあかもだら。」木魚の音に曰く、「ポクポク／＼／＼、タポ／＼／＼、く／＼、タコ／＼、ひたこ、おがつたら煮てくはう。」

古諺にも天地一番の戯場というて、芝居と云ふ物は、もと勸善懲惡の器なるを、いつしか大いにしやれて來て、見物も理窟のある狂言よりは、目先の面白い狂言をよろこび、樂屋落を嬉しがる樣になりければ、段々しやれ／＼して今は早、狂言は一向にやめにしてしまひ、舞臺で役者の内をそのまま、正寫しにして見せければ、大入にて羽目をはづす。

本舞臺三間のおひだ、市川團十郎内のかゝり。團十郎素顔平常著のこしらへにて、俳諧の點をして居る。眞實の女房お龜、奥より出でて、此のマアえびは何して居る事ぞと、案じる科。トヽ、「どりや縫物にでもかゝらうか。」と云ふをきつかけに、揚幕の内にて、「若旦那お歸り。」と呼ばはり、海老藏素

顔にて、よそ行きのこしらへにて、升五郎に手を引かれ、押上の妙見まゐりのかへりの氣取りにて出づれば、見物がわッと云うて鳴りやます。

『此の次の幕は濱村屋の内だそうな。日待で役者が呼ばれて居る所だとさ。』

今時は開帳なども、信心で詣る者は少なく、やれ水茶屋によい娘が出るの、取持ちに役者が出るのと云ふ評判を聞き、それを見に參詣する事なれば、ひつきやう本尊はあつがひなしにて、無くてもすむものと、是等も大洒落にしやれして來て、本尊はかたからやめにし、正面に美しい娘と色男を立たせ置き、又靈寶はまだるい〳〵と云うてこれもやめにし、又愛敬の守や運の守　位はまだな事と、女郎買ひに行く〳〵と初會からほれられて、あつちから身上りをして呼ぶ守や、富を付けると一の富二の富、つきとめまで一人でせしめる守や、百兩の仕度金で嫁に行き、御妾に住んで御世嗣を産む守を出しければ、老若男女貴賤羣集して參詣する。なんとマァしやれた世の中にあらずや。昔なら男や女のお開帳物を拜みに、親子つれでは遠慮なれど、そこがしやれた世の中、ぐつと平氣なものなり。

『こゝらに落た所で金を拾ふ守も、これから出ます。』

業平や昔男の噺くずも、鬼が娘様を啣へて來るなどは古けれども、葺屋町の河岸で蝙蝠の輕業、近年の洒落と思ひの外、そんな事ではなく、見世物なども段々しやれて來て、鸚鵡が三芝居の役者の

聲色を遣ひ、九官鳥が座から荻江の長唄をうたふ見世物が出る。なんとマア此の上のしやれやうがあらうか。

[illegible]「序に出まするが市川高麗蔵錦升でござります。宵に降つたる雨上り、澤邊の芦のざれ〳〵と。」

九官「ふけてきぬたのなァ、音さへゆかし。」

「チッチリトン〳〵。」

「己はこつはりこんな藝は持たぬから、日待の晩にも隅の方にてれて居る。ア、鳥にだも如かざるべけんやだ。」

さる御寺の和尚、毎日々々地蔵菩薩の本堂建立勸化に出でしが、本堂のたしにはせず、自が鼻の下の建立にばかりつかふ故、本尊の地蔵尊思ひ給ふは、かう云ふ事では末々つまらぬ。此の上はおいらを出さずに己が自身に出ようと、忝くも地蔵尊自ら勸化に出で給ふ。されば今は佛も人に助けらるゝ世の中、飛んだしやれたものなり。

地蔵様も我が口から、地蔵菩薩本堂建立とも云ひにくし、又だまして歩いては人が知らぬ故、據なく、「私の建立〳〵。」はありがてえね。

昔なら、悠う石の地蔵様が出あるいては、やれ有り難いのへちまのと俗物がさわぐ場なれど、しや

れた世の中ゆゑ平気にて、橋本町どうぜんに思つて居る。

『今までうか〳〵、おいらを出して無益費にされたのは、一生のおちうそんだ。』

狐なぞも大洒落にしやれて来て、狐の方から罠をかけて猟人を釣る、これ等はどうか嘘らしいけれど、深川の壬生狂言や、髪結床の障子にも出て、尤もたしかなる事なり。

かるがゆゑに今は騒ぎの三味線にも、「狐が浮かそ、こん〳〵ちき〳〵こんちきち。」とは云はず、「猟人浮かそ。かり人ちき〳〵かりちきち。」と、手重くはやす。

狐、罠へ銭をつけて猟人を釣る。

『二百文とは此奴ありがたい山下で鉄砲がはなせるわえ。』と、猟人に似合つた洒落をいふナア、かうもあらうか。見渡せば〳〵と小銭をこきまぜて二百ぞ春の二朱きなりけり。』

『毎日、さア〳〵猟人の洒落と云ふものは、聞いて居られぬものだ。』

狐は、だん〳〵しやれて来て、生男子を化すは面白からず、とても化すなら、よい女郎を化して遊ぶ方がましと色男に化け、女郎買ひにくる。女郎も又その上を大洒落にしやれて、狐印と云ふこと承知で客にする。

『もしえ、そんな遠慮しなさんな。主はこん〳〵だと云ふ事は、私もとうに承知で居んすけれど、は

「お狐さんでも何でも、客人に二色はおつせん。又この床花におくんなんした金も、定めて木の葉でおつせうか、木の葉でも何でも金の通用さへすればようおすヽ。主に全體仕義だよ。やつぱり白ばけに來なんした」と云へば、さすがの四ツ足も大きにへこみ、洒落には上手の有るものと感心する。

此の客の書紙へ、よみの殿さんと名書して置くなどは、しやれたものなり。

「此の引出へ、わつちが駒下駄を入れておいたが、おつせんよ」

「今時の人間の容業は、甘い酢ではいきんせん。これだから内所でもやつぱり、主達のやうな客人をうれしがりんす。コレあの子や、此の金の木の葉にならぬ内早く質屋へ持つて行つて、先度の襦袢と質を受けてきや。おつと氣をきかせや。遅くなると木の葉になるぞよ。先で木の葉になつた分にやァ、かまやァしねえ」

昔は鳶が油揚をさらふとて、酒屋の御用の手を引きかきしものなるが、かかる大洒落の世の中なれば、今は鳶もしやれて來て、そんなさもしい事はせず、魚賣の手前から、三貫四貫する初鰹を高い錢出して買ひ、雲の上にて飲みかける。其の鰹の頭を人間がさらつて喰ひは、どうだ。

折節、鳥さし來つて是れを見つけしが、寒鳶なら錢にもなるが、夏の鳶は五文にもならぬと目はかけざりしが、鳶がよそ見をして居る所を見すまし、そばにある貧乏樽をちよいと差して、おつとる。

「己が身は軽業師のすゝはきと云ふものだ。餅で搗が、ちよいとととまつて居るからよからう。」

「芝の山の、しりきり鳶も呼びにやればいい。」

「しかし酒を買つて尻切鳶は、ちとけんとくが悪いの。」

「竿の先へすゝと云ふは聞いたが、竿の先へ酒は珍しい。」

さる程に我儘にしやれて来て、二三月時分から、お花見にたゝもせぬはうふりが出て人を喰ひ、また麓になるまではもとの山の事の内から、初鰹にして賣る新店が出來る。

山のいきの蒲焼見世へ、俯に喰はせでもゐが、坊様はいくたりも喰ひにくる。これ鰻のかけ富をつける心意氣といふ事か。或は男が血の道の薬を飲み、下戸が水羊羹を喰らひ、此奴はしやれたらうとうれしがる。

『これは中橋のまきや薬か。』、血の道の薬は蚤にきえやすい。

「水羊羹は意氣なものだ、諸事この事だ。うまい〳〵。」是れで上戸がやうな下戸と餅を喰ふ上戸と、ちやうど人の合ふたらう。

「あの姿の上へ付上げるますまい。」

昔は酉の坊主の黒装束、目ばかり頭巾こそと云ふ、甲斐々々しき出立ちなりしが、今はしやれて、おん

ちんばしよりに京草履、店者のしくじりしが虎屋の五種香賣りに出たやうな體なり。

昔は犬も泥坊を見ると、矢鱈無性に吠えしものなるが、是れも段々しやれて來て頭からは吠えず。

犬曰く『コー泥州、今夜は燒飯いくつだ。」

泥坊「五ツばかりでまけてくりやれ。」

犬曰く「飛んだ事を。おのしは氣が違つたさうだぜ。己も此の町内おやァ相應に吠えて、番太郎にもたてられる犬だ。おのしも又どこ無宿何小僧と名の通つた泥州だ。そんな茶かしを云はずと、もつと出さつしく。」

泥棒「何卒是れでふしようして吠きやんでくりやれ。」

犬曰く「なんでも十五よこさねえと、直にワンだぞ。それよしか、ワンくくく。」

泥棒「コレサ頭、さう吠えてくれちやァわりイ。貴樣の先祖は桃太郎に黍團子を一ツ貰つて、鬼ケ島まで供をした。それから見れば在ッでも高いものだ。ちつと古いが、『俺は燒飯やる氣ぢやけれどサイサイ。おめへ犬の性で吠えなさる。犬の子サイく。猫の子サイく。』」

「桀が狗吠レ堯」といへば、人を吠えるが己が役だ、所を吠えぬから、ひねるだらう。」

と此の犬なかくこしやくなり。

雷神なども、しやれて来て、人間がやかましからうと随分少さくなり、たまノ＼落つこちた時は、其の近所へ義理をのべて天上する。

「ホ、雷神殿か、御苦労で御座る。いやはや今の夕立で、暑さを取りかへしました。」

雷神曰「雷神奴で御座ります、只今はおやかましう御座りましたらう。御留守ではお留守さうに御座ります。憚りながらおついでに、雷神奴が御挨拶に参つたとおつしやつて下さりませ。」と、なかノ＼律義なものなり。

かくて京傳はかの、世の中のしやれて来た草雙紙を中の巻までかき、末の工夫をして居る所へ、草の門を叩く者あり。京傳聞き付けて、

「ハ、蔦屋のあるじではないか。草雙紙の作の催促なら、まだ漸う中まで出来て下の巻が出来ぬぞや。」といへば、

「イヤサノ＼其の様な者ではない。我は去年も汝が筆にかかれたる天帝なり。爰開けよ。」と宣ふ。

「僧は叩く月下の門。おうノ＼と云へど、たゝくや狸の門。其の様な風流な者ではあるまい。悪くしたら掛取かも知れぬ。」

天帝のたまふは、「爰は差詰、汝が夢の内にあらはるゝ場所なれど、かかる洒落の世の中に、そんな

古い世間と出かけては、凡夫等にまじつたんと思はれるも残念故、白化に来りしなり、さて汝このごろ世の中のしやれたる草双紙を作る事を知つてゐる故、洒落のとゞの詰りを見せんため来りしなり。早く己と同道にあゆべし。又見物が夢だと思つては悪いから、ねむさうならとくと能く目を覚して歩びやれ。」と天帝おどけまじりにのたまふ。

天帝は京傳を同道して、いづくともなく行きけるが、ある海の端のやうなる所へ出て、そこらを見れば、土にもあらず、石にもあらず、木にもあらず、如何にも朽ちたる一ト塊づゝになりたる物いくつもあり。

天帝のたまふは、「是れがみな洒落の高じた者なり。此の一ト塊づゝになつた者が武士、百姓、職人、商人、儒者、佛者、神道者、醫者、俳諧師、藝者、幇間その他色々の人のしやれたのなり。中でも一ばんよくしやれて居るのが通人と女郎のしやれたのなり。何とそれとは見えまい。かうでも無いあゝでもないと、段々洒落をなして、遂にはこんな分らぬものになる。今時の洒落はしやれてえしやれてえで、皆ゆきなりだから本意を失つて、此のやうに始めの形をなくして仕舞ふ、無上に洒落だしやれだと思つて、元を忘れるやからが多いから斯様だ。何と珍らしい者を見たらう」とのたまふ。

一「是れを插樒の珍物茶屋か、兩國の其の開帳へ出したら、どうで御座りませう。頭と金澤の蛇木と云ふもんだ、次郎どんの色と、太郎どんの色と、みんなしやれてしまつた。」

通人と女郎のしやれたのは、こんなつまらぬなりになりても、矢張洒落を云つて居る。

『世の中の野暮奴らは、かういふひねつたなりは知るまい。』

一「こんな意氣なありの流行る事を知りませんのさ。」

譬へば、海にある貝殻のしやれる樣な物で、始めは赤螺や蛤の貝でも、かうでもないかうでもないと云ふ內にもまれ、波に打たれて、遂には何だか分らぬ形になつて、がら／＼一文／＼に賣たらす。人の事ばかりでも無い。草雙紙などもあまりしやれると本意を失ふ。汝はしやれると思へど、其れ見ろとて天帝の天眼の鏡にて見せ給へば、京傳が身も段々しやれて來て、遂に朽木のやうになる。

京傳曰く『人の事ばかり日くじり立てて、己はしやれぬ／＼と思つて居たが、これは堪らぬ。もう半分しやれかゝつた。誰ぞとめてくれ／＼。』

天帝曰く『己もとめてやりたいが、己がにもどうも仕方がない。洒落ての後の御料簡さ。』

京傳『これはどうだ彦郷と、悪い洒落を云つたが、又半分しやれて來た。洒落が高じて物狂ひと云ふたが、みんなしやれてしまつた。』

天帝「過ぎたるは及ばざるが如しと古語のとほり、味噌の味噌臭きこそ悪けれど、武士は武士臭く、町人は町人臭きがよい。しやれ過ぎると皆さうだぞ。」

天帝つら／＼思ひ給ふは、是れはつまらぬ者ぢや。何でも此のしやれた手合を元の通りの人間にせずばなるまいと、造化の神を集めて御相談の所へ、大千世界の切幕から、しばらく／＼と聲をかけてゆるぎ出でしは、柹の衣に鶴菱の袈裟をかけて、水晶の大數珠をつまぐりて、まだ草雙紙へは初舞臺の彌勒菩薩なり。「しやれた手合を、元の如くにするは我等が受取り。サア／＼我等に渡し給へ。」とのたまふ。

天帝「己が相談の場所へ、暫く／＼と聲をかける奴は、普天の下率土の内におそらくはない筈だ。マア何奴だェ、――。」

京傳こんなつまらぬ態になつても、氣ばかりはやつはり強く、同じやうに「何奴だェ、」といふ。

『當時繁昌、北郭青樓、意氣發行天地てんつんの、すががきに浮れ出でたる大通佛、大千世界の花道のこなたに安置したまへば、一チ番待つてくれの鐘、盆前の金、勤めの金、打ちに打つたるどらねう鉢、遠からん者は音にも聞け、近くはよつて彌勒菩薩の御せりふ、誰も根つから嬉しがらねば、是れを今に彌勒洒落損と申し奉る。」

「我が誰とか思ふ、姓は慈、名は彌勒、字は阿逸多、見しつて下せえ。ア、つがもねえ。」

かくて天帝は、「世の中を彌勒佛に渡すは、まだとも億萬年も後の事、人間の風俗ばかりは直してくりやれ。」と頼み給へば、彌勒佛請合ひ給ひ、彼のしやれた手合を集め、雛の古いのをこそぐる樣に彩色ふしてほし、衣裳をきせかへた人間は、即ち青輪の通り、少しも洒落のなき世の中となり、若やぐ樣に都合しやれず、やつぱり古風に目出たし、

此の時隅田川の渡守も、かけ烏帽子をきて時めかしたり。

世上洒落見繪圖　終

京鹿の子娘鯲汁

芝全交作
歌川豐國畫

序

三世相應の古事付に曰く、男御山伏の木性女鐘の金性、子は千人有つて常に口說事多し、大いに凶なり。是れ全く金剋默而鑑みるに、女の前生は踊子にて、今生に鯲となり、男の前生は鐘にて、今世山の芋の代りに山伏となる。女は豆千粒、男は男根千本持つて、根性の悪い奴に生まる。其の騷動左の如しと云ふ。

題芝全交

扨も大昔、米が百に三合した時分、眞の事か知らねども、先づは譃の事と思へば丈夫。兩國柳橋のへんに、眞那古の莊司といへる、金などの口入をする浪人あり。身上はよけれども、一人も子を持

たまふ。其の上常々思ひけるは、兩國邊は場所がらにて、女藝者はいくたりあつても、金まうけの出來る所と、無性に女の子がほしくなり、ある時雑司ヶ谷の鬼子母神へ、一七日が間參籠して、女の子を授け給へと祈りければ、不思議や鬼子母神夢中にあらはれ給ひ、色々ごたくを上げ給ふ。

女「コロ〳〵コウ〳〵。腹のへつた時のいびき、格別勢ひがなし。」

男「ゴロ〳〵ゴウ〳〵。こほろぎに濁りをうつたやうないびきだ。」

米の高いをさいはひ、七日の間斷食とは、中々すきのない奴だ。

『善哉々々もすさまじいが、皮切なしに食らはせよう。よつく聞け。手前も知つて居るであらう、己は子を千人生んだ者だが、此の節百に三合の米を食ひたてられ、なんぼ神でも佛でも、しやりの工面に手こずるなり、汝幸福に、女の子をたんとほしがるに依つて、己が方の女の子を有りたけ與へん。それで己も厄介の口へらしだ。南無人間大明神、かみの方から賴む〳〵。捨てる神あれば助ける人間あるだ。』

とありやこりやに告げ給ふ。

それより莊司が女房ほどなく懷妊しけるが、常の女のはらみたる如く、さして腹の大きいと云ふ事もなかりしが、當る臨月生みける所に生むほどに〳〵、ほん〳〵〳〵とてんから花火の出る如く、女

の子ばかり一時に千人生む。一人生むのさへむつかしいに千人生むとは、是れはたしか譃だとおほしめさうが、其處が神慮のきどく、產も常よりは輕く、いけしやァ／＼まじ／＼として居るは妙なこつてござえす。赤子なかノ＼千人はかかれ申さず候につき、あらまし御目にかけ候。

『まちなノ＼。つき合ひを知らねえ子だ。一所に出よう。おぎやァノ＼／＼。』

「是れで七百十六人目だ、大概にして出をとめたい。海仁草ばかりも二兩がのであればいいが。」

產婆「どれもよいお子だが、此のお子にばかり頭に當りがある。鬼子母神樣の石榴にあやかつたのであらう。ア、肩が張つた。手間でも入れたい。』

さても光陰矢の如く、莊司が娘千人ながら、今は二八の色盛りとなりしが、其の頃踊のはやるを幸ひ、千人の女の子殘らず踊子に仕込み、をどり子の問屋になりて、大きに金まうけをする。

『アノ子が九百七十五人目の血の餘りか、取りわけ不便おぢや。此の頃よく子供がなくなるさうで心づかひおぢや。爰に二十人ゐますが、あと九百八十人は何處へ行きました。』

「今五百人は小便にまゐりました。雪隱か開帳場のやうに込みますから、急には歸りますまい。二百人は今日は舟へ參りました、百八十人は昨夜氣でふせつて居ります。後百人はあそびにでも行つたさうさ。いひわけをする度に、勘定にまご付いてならねえ。』

「五百二十番目のおちよさん、口がかゝつて来たよ。どうか呉服屋で傘を貸すやうだね。」
「かうならんで居る所は今戸でつちの姉さまをこしらへたやうだ。」
又其の頃十七八歳の山伏ばかり千人、どこへ参るのか知らねども、毎年荘司が宅を定宿として泊りけるが、娘どもの十二三な時分から年々とまり、千人の娘に千人の山伏、残らず出来合つて居たりしが、又此の春もとまり、今年は是非連れて逃げんと約束せしゆゑ、大勢をせたげる。山伏の千人一座大もてにもてる。其のさま入込みの湯屋の如し。
先づ姉娘の清姫と言ひ交せしは、千人講中の講親にて、白川の安珍、其の次は宇治川の先珍、それから新川の船珍、樋川の掛珍、取川の駄賃、張川の提珍、杉川のセツ珍とまではおぼえたれども、どうか山伏の名も雪隠きりでとまりさうなれば、後は略す。
娘の名は清姫ぎりで、あとはごたついておぼえず。
『サアどうしなさる。』
「サアどうしなさる。」
「サアどうしなさる。」
「サアどうしなさる。」

「サアどうしなさる。」
「サアどうしなさる。」
「サアどうしなさる。」
「サアどうしなさる。」
「サアどうしなさる。」

千人の山伏、しよせん女を連れて逃げては始まらすと、莊司が宅を夜逃にする。山伏同音に、

「さんげ／＼、六根莊司が娘の婚禮、うるさいこんだに、ホウイ／＼」

と逃げる。

「己が逃げる頭を見さつし。慈姑が籠からころげ出るやうだ。」

「ナア逃げるとつて、はした錢を五十程忘れてきた。エヽまゝよ。」

實に法印矢の如し。是れ光陰矢の如しと云ふ地口にて、早く逃げるまじなひなり。扨も千人の山伏、千人の娘共を捨てて世迷に隅田川をさして逃げければ、欺されしこそくやしきとて、千人づれにて追驅けゆく。

「べちやくちやわや／＼」

「べちやくちやわや〳〵。」

「べちやくちやわや〳〵。」

「靜かに行きな、ころぶといけねえによ。」

「さうさねえ、落付く先は大てい分つて居るから。」

「オヤ〳〵かんざしを落した、うまらねえなう。」

大勢にて申す事わかり申さず、此の如くに御座候。

千人の山伏は、やう〳〵隅田川を越えて逃げけるが、後より千人の踊子追驅け來ると聞えければ、其の頃隅田川のほとりに道城寺と云ふ寺のありて、折節鐘の供養あり。女禁制なるを幸ひ、山伏どもはかくまひ貰ひける所に、踊子共は是れを聞き付け千人にて來り、「鐘の供養を拜ませてくれよ。」とせがむ所へ、女乞食か米を貰ひに來た如く、わや〳〵云つてやかましくてならず。

「拜ませてくださんやしよ。大勢で御座りやす。」

「まだあとから五百人參ります。今道で小川を致して居ります。」

「なに鐘の供養が拜みたい。此奴鐘の供養や十兩にかへる、出入ぢやアねえや。」

「さつきも小便に往つたと書いてあつた。よくでる小便だ。みんな小便組ではないか知らん。」

大勢の踊子、たうとう坊主みかきのかし、「其のかはりに踊りやせう。」と云ふ事にて、供養の庭へどろどろと押し込み、千人一時に京鹿の子を踊りける故、同宿ども大きにうかれる。

「袖がそこらぢうへつかへ廻つて、踊られるものぢやァねえ。」

「門跡様のおどう突きのやうだ。」

「前のかたで唄ふ鐘に恨みは、後の方へねッからし渡らねえとの。」

「此の人數へ無盡か、萬人講をすゝめるこつたわえ。」

坊主どもは踊子にうかされ、とろ／＼となむれば、好き隙ごとて千人の踊子ども、龍頭に手をかけ飛ぶぞと見えしが、引つかついでそ、ぐわん／＼／＼／＼／＼と鐘が下りると、お定まりの通り和尚様に知らせる。それから亂ちき騒ぎをやつて、祈りければ、鐘はたちまち湯となつて流るゝ所を、今度はどうしたわざうはいかず、茶となつて流るゝ。

千人の娘も鬼子母神の申子なれば、鬼になるはお家のものと思ひの外、數萬の蛇となるぞ不思議なり。

「いかに辛い世の中でも、蛇になるとは、餘りきみしい奴だ。」

「此の鐘一ッへ、どうして千人這入つたらう。是れだから、小袋と娘には油斷がならぬ。」

「千人踊つたらさうぐしくて、寢られぬ筈だが。」
「鰌になつた、茶になつた、なまぐさ坊主だ、ばさらんだ。」
鰌曰く「私ゃァどぢやう骨にこたへやした。」
「鰌がものを云ふ奴さ、けしらねえ。」
さても千人の踊子は鰌となり、鐘は忽ち茶となりて流れける故、千人の山伏も茶にされたか茶にしたのか、何處へか消えてなくなりける。是れ實に莊司が慾の深さにまよひて、鬼子母神へ無理なる祈誓をかけし故、佛のいましめと知られければ、莊司今は一念發起して罪障消滅のため、娘の鰌となりたるを幸ひ、柳橋へどぢやう汁の店を出しければ、柳橋どぢやうとて大きに繁昌する。今の世にどぢやう汁の看板を、柳橋どぢやうとかくべきを柳葉どぜうと書くは、しやれてかくのなり。又鰌汁の事ををどり子汁と云ふも、この因縁なり。いはれを聞けば、面白くも何ともなし。
「娘が鰌になつたのは、格別骨が柔かだらう。」
「雀海中に入つて蛤となり、娘鐘中に入つて鰌となるとは、本草にごぜえやした。」
と、文盲な知つた風をいふ。
扨もすかさぬ世の中、をどり子の鰌汁、大きに錢まうけをしたると聞いて、山伏の茶になりたる

も、なんぞ案じがあらうと思ひ、今世上ではやれば兩國の河岸へ、山伏御茶漬と云ふ茶漬店を出し、大きにはやり繁昌する。是れも世上で、山伏御茶漬とかくべきを山吹御茶漬とかくは、山伏と山吹の地口なり。どう見ても、しやれた世の中、されどもまうかる山吹色、初春の福茶も山吹、草雙紙の表紙も山吹、三山吹に金つもれと、よくどうしく、ほゝ敬白

又茶漬一膳につき十二文ときはまりしは、お山伏に、十二銅のお初穂を上げる心なり。

京鹿の子娘鯰汁 終

二十日餘四十兩盡用而二分狂言

大榮山人（曲亭馬琴）作
歌川豐國畫

昔の句に、ものいへば唇寒し秋の風、とは實に爾り。彼の坊太郎も、啞となつて父の仇を報い、庚申の猿も、口をふさぎて災の門を守り、舌切雀も、舌を切られて一生をあやまたず。玉子作りの不言も、明る導の方便とすといへば、人をだまりの天神樣を、宿のたまへかし。

京傳門人　大榮山人誌

茲に頭巾坊馬琴といふ者あり。世は桑の杖の折れ安きを歎ひ、風の身は竹齋に似たるかなと、行脚の志夢中にして、芭蕉庵の舊跡を慕ひ、深川の八幡へ參詣して、園女櫻も今は名のみと、昔を思ひ、古蹟此所を尋ね歩行き、參佛道を祈らんと拜殿に通夜しけるに、不思議なるかな、其の夜の夢に

丑三とおぼしき頃、拜殿の繪馬おのれとぬけ出で、其の中にも彼の繪馬思ふやう、此の儘にてそこらをぶらつかば、忽ち山師の手に渡りて、兩國あたりの葭簀張に生恥をさらさんと、お家の術を行ひ、顏の猿と尾の巳を取つて壬生の小猿といふ盜賊となる。鴛鴦の繪馬も、人間の中へ鳥が出ては反りがあふまいと、過ぎし頃菊之丞が演し鴛鴦の狂言を思ひ出して、十六七のまんざらでなきやつと化し、其のほか皆おもひ／＼にぬけ出でる。繪馬はおのが樣々に拔け出でけれども、元が繪の拔け出でしなれば、もの言はず、側に黑衣を著たるもの付きそひ居て、それ／＼に譯をいふ。此の者何處より來りしや、先づ今の分では分らず。

さて鴛鴦の繪馬はどうでも、性が水鳥ゆゑ、水邊でなければ住付かれず、洲崎へ來り汐を汲んでくらせしが、十郎の繪馬はちと張つて見んとこゝへ來て、鴛鴦にいちや付く。

「須磨の浦邊で汐くむよりも、汐くみ三年柿八年。」

と鴛鴦がしやれれば、十郎も又、

「そんな地口は桶とり／＼。」

などと又しやれる。

座頭の繪馬は、二人連にて京都を志し登りけるが、六郷の渡をわたる時、壬生の小猿は、彼等が

懐中の金をせしめ汁にせんと付け來り、甘々と金を奪ひとり、二人の座頭を川の中へぶち込み立ち去らんとせしが、座頭が持つて來たる吸筒を見付け、先づ息付に一杯用ゐんと、河原に一人大杯を傾け、したゝかにあふつてたわいなく寐入る。

小猿は、定九郎と八平次のひあはひといふ身にて威す。

「ヤ、是れは金では御座りません。中食の握飯と反魂丹、金と思ふはおまへのあんぽんたんだ。」

「二人の事をめくらといふが、おまへも金に目があるめえ。」

「此の同行はもう來さうなものだ。斯ういうてはどうか、初名代の客がいひさうだ。」

馬琴は、最早勘平か逸平が出さうなものと、目もはなさず守り居たりしが、暫くあつて何處ともなく、ドンと鐵砲の音がせしゆゑ、扨は勘平が出端なるべしと思ひの外、いの字の紋付きたる長上下の侍立ち出でければ、いの字の紋ゆゑ和泉三郎だらうと見て居れば、猪の早太忠澄、猪を取りにがせし故打留めんと出でけるが、猪は人に化したるゆゑ若し人違ひではわるいと、空鐵砲で容子を見る

小猿は空鐵砲の音に目をさまし、酒の醉ひもさめ果てければ、早々に其所を立ち退きける。

猪の早太は小猿の跡をしたひしが、途中の事ゆゑ苧環もなければ、鼻紙を出して紙丁をより〳〵慕ひ行く。

曾我十郎は[illegible]と深くかたらひ、此には人目も多しとて、地藏堂の後に忍び居る所を、壬生の小猿は小陰より此の容子を見て、[illegible]をぶつてやらんと思ひ、透を窺ひ鴛を口說きしが、心に隨はざりける其のまゝ後手にいましめ、猿轡をはめる。小猿がはめたるゆゑ、猿轡とはいふなるべし。

鴛はいましめを解かんとすれども解かれず、信仰記の雪姫を思ひ出し、足にて鼠を畫けば、忽ち四五匹の鼠現はれ繩を食ひ切る。

「斯うしばられては、むしやうにふむより外の事は出來ない」

荒獅子男之助の繪馬は、二番目まで出でざりしが、鼠の有樣を見て丁度いい宿所と思ひ、さも強さうに鼠をあやしむ。

鴛はやう〳〵縛めを逃れ、十郎を尋ねしが、地藏堂にも居らざりしかば大きに驚き、そこかこゝよと尋ね或寺へ來かゝれば、小猿と猫の早太は坊主の役まはりにて、鴛を入れじとさゝへしが、鴛の携へし酒に氣を奪はれて、うち〳〵入れる。

爰はどうか道成寺のやうなれば、舞をまはずば眠るまいと羯鼓をうつて舞ひければ、小猿も少しほろ醉ひ機嫌で、炮烙を羯鼓に擬へ舞ひけるが、あまりたゝいて叩き破る。是れを世に猿智慧とは申すなり。不思議や今まであありつる女忽ち化しやうの姿を現はし、龍頭に手をかけ飛ぶよと見えしが、

小袋も共に紐を担いで失せにけり。猪の早太は大きに驚き、紐を引き上ぐれば、屍は鳥の姿となり、
小袋に鵺の形を現はし、互にあらそひ立ちたりけり。

『かはいい男を淺草におき、もんぢのさはりに成つたわいナア。』

猪の早太は気の早太なりしが、流う気を聞くんで、鵺を見あらはす。

馬琴は、實に絵馬のぬけ出でたるかと怪しみ見て居たりしが、みたてし最早化けを露はさんと面を取れば、是れはどうぢや、みんな馬琴の友達にて、常々馬琴が口の利き過ぎを憎み、今宵酒に酔ひたるを幸ひ、「狂言の道具を借りて欺くらかせし趣向なり。口をきいてはそれと知れる故、付髭色を用ゐたるなり」と、笑へ出でられども、二人の座頭らくはせものと思召せ。馬琴が聲を聞き知らぬ故、黒衣を着て付髭色をさしは、即て作者の大宗山人、厚皮の面人といふものなり。

『ええ何と一ぱいやかれたわい、それにしても筋の分らぬ狂言だ。』

馬琴は友達に囃されて、[illegible]何の筋も分らぬ假初狂言とは言ひながら、十郎鳥に曲の鵺、猪の早太が気の短さ、荒獅子が勇気、六條の破れ安さ、皆勸善懲惡[illegible]しての誡め。既に[illegible]の狂言も、口は禍の門といふ俚諺の通り、一寸の舌を以ては五尺の身を失ふ[illegible]、さうぢや、一生無用の舌を動かすまじ、是れもやつぱり八幡宮の御告げなりと、いよいよ[illegible]

をもてあそびけり。

二十日餘四十雨　盡用而二分狂言　終

盧生夢魂其前日

山東京傳作
北尾重政畫

序

に出まするは市川の團十郎でござい

雨の降る夜はナア、一しほゆかし。何と云はつせえます。草雙紙の趣向に夢が古いと云はツしやるのか。これサア、こな様のお尤もなれど、しかし古きを尋ねて新しく書きかふるが、即ち趣向の新しきと云ふもの。古いと云はツしやるこな様が夢か、新しいといふ私が夢か。浮世が夢か、夢が浮世か。嗚呼莊子ぢやナア。チヤンチヤント爾云ふ。

ときのの見ひと
ふす亥の牀
正月二日夜

山東京傳述

昔唐土蜀の國のかたほとりに、盧生といふ者ありしが、身貧しくして心の欲する所にまかせず、女郎を買ひたいには金がなし、地色をしたいには男が惡し、味い物食ひたいにも錢がなく、何も樂しみがなき故に、常々日本より新渡の草雙紙を求め、是れを讀みて氣を晴らし暮しけるが、先年出版したる草雙紙金々先生榮華の夢、見得一炊夢など云ふ本を見て、せめて此の本の樣に、夢にでも榮華を極めたきものと、はかなき事を望み、是れよりかた時も起きて居る事をつひえと定めて、榮華の夢を見ん事をのみ待ちて暮しける。

「金々先生の夢も、蘆の屋清太郎が夢もさて／＼面白い。全體日本は夢の多い所かして、草雙紙の趣向は兎角夢が度々だ。」

「とても眞實に榮華をする事は思ひもよらぬから、兎角この上は夢の事だ。」

爰に又、天上と人間界との中二階に、夢茶羅國と云ふ世界あり、此の國には多くの夢住みて、色々樣々の夢を案じて、人間に見せる事を商賣とするなり。この國のお頭を夢魂道人と申し奉る。その夢の形と云ふものはどうしたもんだと云ふに、男かと思へば女の如く、若いかと思へば白髮も生え、唐人かと思へば日本人の如く、何處と云つてつかまへ所のなきものなり。

夜は云ふに及ばず、晝寢にもちよびとした夢を見せねばならぬ故、夢ほどいそがしきものはなく、

夢魂道人毎日々々案じに頭をわらす。なか／＼茶番を案じる位の事ではなし、

一　京の夢大阪の夢一式道具
一　地獄極樂のゆめ一式道具
一　富見徳のゆめ一式道具
一　邯鄲枕のゆめ一式道具
一　曲亭御夢枕の雑等
御受合ひ仕り候

定
夢道具人形
衣裳入れ雑藏
の内へ無用の
者堅不可入。
月　日

「此の頃は、太閤界の日本などは學問がはやつて、君子が多いと云ふから、もちつと暇になりさうな
ものだに、通人に夢なし、君子に夢なしと云ふから」

「兎角安あげの夢を、案じようと思ふから骨が折れる。」

「此の節は格合の衣裳持には、大分下りつたように御座ります。」

夢魂道人、色々様々の夢を案じて、下細工の夢手合に申しつけ、夢の道具や人形を拵へさせる。其
ついでにかしこ、[illegible]の如し

『此の松は、唐土呉の丁固とやら、てれめんでいことやらが、腹の上へ生えさせる夢だけな。何とひやうひやくな夢ぢやァねえか。したが蒙求とやらを讀んだ奴でなければ、此奴は分るまいと云はしつた。』

莊子に見せる蝶々の夢は、手前でこしらへるまでもないと云つて、てふ／＼賣の手前から、そのやとまつたと云ふ奴を買つて用ゐる。

『此の二筋の矢は、源の賴光に夢中に授ける水破兵破とやら、曲馬評判とやらいふ矢だとさ。

「是れと云ふ字は日の下の人と云ふきどりだけな。是れは眞柴久吉に見せる道具になるけな。』

唐土の玄宗皇帝に見せる鐘馗の夢と、矢根五郎に見せる祐成の夢は、針金細工のきればりにて、吉原の燈籠の如し。

『小僧よ、賣藥屋へ行つて、水にかはを三本と緑靑と丹を、三十二文買つてこい。』

「これ／＼、そいらが出來たら後の仕事に掛つて貰はう。後に神のお告げと佛の夢枕と詫文が二口ある。お告げの文句は、此の書付の通りだ。始めの善哉々々と、仕舞のゆめ／＼疑ふ事勿れと云ふ文句を、隨分耳立つやうに云つて貰ひたい。先づびんつら結うたる童子の人形を拵へたがいい。

「全體この夢枕の詫文は、夢ともなく現とも無くと云ふ誂へだから、この細工は手こずり物だ。』

勢のある人に見せる夢は、高い所からつき落される夢なれば、やつはり、操人形の理方にてこしらへるなり。是れも念の入る、あつらへ向の夢は、竹田の機關の理方にて、ぜんまい仕掛にするなり。毛も由は張りぬきなり。

寢小便をたれる時の夢は、人形の尻の穴へ水鐵砲をしかけるなり。故に小便をする夢を見る時と云ふと、得てしぶつて出兼ねるものなり。是れは水鐵砲の工合の惡い時と知るべし。又、糞をたれる時の夢も同じ事なり。竹の筒へ味噌をつめて突き出す。矢張心太の理か。

「かう水鐵砲の工合がよくては、よき蒲團はたまらぬ〳〵。此の夢を見る奴は足りつよききへ、灸がものであるわ。」

「此奴、ここいらでたんと賣る香較に至極だ。」

「此の節聞けば、神田邊のさる學者が、兼ねから孔子の氣どりで、我未だ夢にだも周公を見ず、などと高くとまつて居るさうだ、此奴に周公旦の夢を見せて、膽を潰させようと思ふ。また吉原のさる好婦が、いつそ惚れて居る色男にあひたがつて、せめて夢にでも見てえと古歌の通り、いとこの手戀しき時は烏羽玉の夜の衣をかへしてぞ寐ると、昨夜も襟を裏がへしに着て寐たさうだ、かはいさうに。是れにも色男の夢を見せてやらう。」

「左様なら、此の二色の道具立にかゝりませう。」

程なく道具出来上り、彼の儒者と、女郎の所へ夢を見せに行く。なんの事はない、竹田の屋敷行といふものなり。

此のかついで行く栄螺の尻子玉のやうな物が、夢の道具第一のものなり。上の夢の時は針がねでこしらへ、白ねりの布にて張り、又は絹綿をうすく張る、下の夢の時は竹でまげ、吉野紙で張るなり。又夢の形は結んだやうな物ゆゑ、歌にもゆめを結ぶとよみ来れり、夢手合は、あんまり早飲込みをして道具の合印を間違へ、女郎に周公旦の夢を見せる。案ずるに、心にもなく根つから仕つから、思ひもつかぬ飛んだ夢を見る事あるものなり。それは皆此の様に、夢手合のまちがへた時のゆめと見えたり。

『ヒウ引ドロン〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵。』

「モシイお爺さんえ、主の表徳は周公旦と申しますかえ、煉薬のやうな名でおさんすねえ。」

「己は唐土、文王の子武王のおとゝで、大聖人と云はれたもんだ。」

「何と云ひなんす。主は貧乏の子無性者のおとゝで、大變人だとかえ。」

女郎、唐人をゆめに見せられ、大の不承知なり。

學者は、色男と曲輪を驅落して、中田圃で心中と出かける夢を見る。これ等はからつきり、夢判じに判じさせても分るまい、作者にも分らぬ。

上るり「いつぞや史記の素讀の夜、お醫者さんがた學者しゆう、多くの中でこなさんのこと」

此のする餘りこじつけたれば略す。

「己はそもじの、其の目くさりの髭むしや〳〵と云ふ、おゝむさい所に惚れた。何と茶人であらう。それだから着物も茶みたんだ」

「足下にまかせゝした不佞が身を、そんなに疑ひなさるなら、むしろこの胸わつて見せたうおす。愚案するに、私より主の心意氣がいまだつまびらかならずでおますよ」

女郎と儒者と、ぬたにしたやうないやみをいふ。

此の内手明で居た夢、なんの所詮もなく、彼の學者の内の飯炊に、金を拾ふ夢を見せる。

「是れは金ぢやさうな。うれしや〳〵、何でも運の開き目だ。」

「さうでついでだから、我にもおまけに氣のもめる夢を見せてやらう。それうれしいか〳〵。うんつくだ、夢とは知らず無性に嬉しがる奴さ。爰まで御座れ甘酒しんじよ。獅子の洞入り洞返り、七介まつたりとつたり、此奴なか〳〵面白え。」

「さて〳〵此の金はかはつた金だ、無性に宙をとぶ　金丸か睾丸か知らん。ア、じれつてえ。どうもつかまらねえ。」

と一人言をいひ〳〵、しまひにはじれ込み、思へば此の金うらめしやとて、両方の手をかけ取るよと見えしが、己が睾丸をしつかり握り、冷汗を流して目がさめる。

無魂道人ゆふ手合をきめる。

『手前たちはマア、女郎に周公旦の夢を見せ、學者に色男の夢を見せるといふやうな、氣のきかねえ事があるものか、夢を商賣にして居るやうでもねえ。ちつと身に染みたがいい。』

夢人足手合の辨當には、牡丹餅をこしらへて持たせて出すなり。かるが故に、夢に牡丹餅といふこと始まつたり。

『コレ私がのはみんな小豆で悪い。』

「其の黄粉と取りかへてくれる氣はねえか。べんたうはどうだエ、。」

周禮の春官に曰く、日月星辰を以て六夢の吉凶を占ふと。謂ゆる六夢は一に正夢、二に靈夢、三に思夢、四に寤夢、五に喜夢、六に懼夢これなり。

其の外数多き夢の中に、猥りがましき夢を見する奴は、死罪に行ふなり。然れども夢といふ奴が、

刃物で切つても切れぬ物ゆゑ、貘と云ふ獣物を飼つて置き、左様の罪人は是れに食はせて成道するなり。是れを思へば貘は夢を食ふこと違ひなし。

吉原で、ばくらしうありんすと云ふも、是れより出たる言葉なり。

縄を切ると貘は一散に駈け出し、忽ち夢を食らふ。

「風吹には、火の用心の悪い獣だぞ。」

「綱をおいて貘の縄を切つては、不動明王が気の違つたやうだ。」

「くもでかくなは、十文字に切らつしやい。」

へご砂子曰く「貘は夢を食らつて、人間界大日本武蔵国江戸通り油町のへん〳〵、其のかすをはき出す故に、其の所を馬喰町と云ふ。」

画人「貘に食はれると云ふ餘り智慧がねえ。ア、ゆめえましい。」

某曰く「とが人のふところに、二朱銀が二ツ三ツあるさうだ、出してくんなせえ。歯がたまらねえ。」

「人、夢になれ〳〵と云ふ場だが、こつちが夢だからよんどころなく、人になれ〳〵。」

正月二日の夜は、初夢と云うて夢の世界の大ものの日なり。寶舟を敷いて寐た程の者には、それ相應の夢を見せてやらねばならず、一富士二鷹三茄子はお仕著どほり、春の初めの春駒なんぞは云ふに及

ばす、富の見徳には、呉服屋の番傘、人に切らるゝ夢は逆夢というて、身に金の這入る事あり。色々、さまざまの夢を仕組んで、いく組も／＼出る其のいそがしさ、年越の晩の大神樂、松の内の大黒舞の如くなり。中には、三人吉三人語、もやひの夢もあるなり。

みぐ／＼、夢を見届けもせぬに、拍子木を打ち鄰へ引いて行く。祭祀の所望のごとし。それだから初夢はうろ覺えなものなり。

「ちよぶ／＼／＼／＼／＼」

「とひよ〳〵〳〵。」

「鷹を使ふは、とびよ／＼と云ふから張合ひがあるが、茄子を使ふは無言つて居るから、張合ひがない。茄子をつかふは、留守をつかふよりつらい役だ。」

「此の夢などは、賣買にしても直打のある夢だ。二日たつてから話せばいいか。」

但し、一富士二鷹三茄子の道具も、さう／＼は間に合はぬゆゑ、一筑波二葛三庵茄子、などと云ふこじつけの夢もあり。こいらを見る者は、氣のもめる詮索なり。

「己は大神樂だと、はさみ箱かつぎといふ、てれた役だ。」

「サア己はとなりの家へ行かう。」

「ヒウ引ドロン〈〈〈。」

夢魂道人、支配下の夢を呼びあつめ、申しわたす。

「此の度唐土、蜀の國のかたはらに住む盧生と云ふ者が、栄華の夢を見たがる由、見せてやらねばなるまい。然しこれは稽古の夢だから、一ト通りでは面白ない。五十年許りの事を取詰めねばならぬ。今度は、人形ではむしやくに合はぬから、歌舞伎にするつもりだ。皆役を取つて稽古にかゝつたがよい。」

「二十日餘りに四十兩の上を行き、一ト晩に五十年と來ては、道具衣裳に餘程かゝる。よい金主をつけずば、この夢はたゝけまい。」

「それは大騒ぎの、ふどうで御座ります。」

そもそも盧生が夢の狂言の筋といつぱ、邯鄲の謠にある通り、楚國の使臣の輿を以て迎へに來り、帝の位を盧生にゆづる、庭には金銀の砂をならべ、東には三十餘丈に白銀の山を築かせて、黄金の日輪を出し、西には黄金の山をつかせて白銀の月輪を出し、天のこんりやうがいの盃でのませて、長[illegible]の四季の景色を一時に見せたと、今時の見物、そんな野暮な事では栄耀とも栄華とも思ふまじと、夢魂道人これを新狂言に書きかへ、楚國の使を北國の使にして、吉原の栄華を見せる心算なり。

『此の鬘はよくうつた。』

「小道具の方は、あらかた揃ひました。」

「私にはまだ、せりふの書抜きが渡りませぬ。」

程なく道具建衣裳等も出來、稽古もかたまりければ、先づ夢の總ざらひをする。

夢魂道人臺帳をひかへて、忘れたせりふをつけてやる。

『皆とちらぬやうにしやれ』

「みんなが中々、器用で御座ります。」

夢の正面二三尺の開黑幕にて、松の立木あり、うすどろにて幕が明くと、夢の若い衆大勢四ツ手かごをかついで出で來り、色々捨てぜりふ思入れあつて、とゞ盧生得心してかごに乘る。「若い衆、乘物やれ。」といふをきつかけに、行列三重になり、いづくともなく消え失せると、後の黑幕ばつたりと落ち、下座すがゝき通り、神樂になほして、夢の正面曲輪の道具にかはる。

『角力の行司と盧生は、團扇が看板だ。』

夢の内の立者、盧生の役をつとめる。盧生膽を潰す思入れ、色々仕打あり。

「如何に申すべき事の候。楚國の使にあらぬ北國のふみ使、是れまで參りたり。是非をばいかではか

るべき。御身色男の御瑞相こそましますらめ、通子屋の稲妻と申す花魁、御身を見ぬ戀におこがれ給ふにより、御迎へのため參りたり。はや／＼四手駕にめさるべし。」

道具替れば、實にも妙なる花の曲輪、金銀の砂子を蒔いたる唐紙をおし開き、名ある色たち立ち出でて、盧生にしなだれかゝると、後は狹江流の唄になる。盧生は五文もいたますしてかかる樂しみをする事、日頃の望みに百倍したる心地する。

此の處、岸詰東の方には三十餘丈の山に、黄金の日輪をいだし、西の方には三十餘丈の山に、白銀の月輪を出す場なれど、ぐつとしやれて、東の方よりは三十四匁になる、黄金をほしがる撥鬢の幇間を出されたり。また西の方よりは、三十四兩に賣られた禿が、白銀の湯爐で煮た煮花を出されたり。丈夫の藥を、抗瀣の杯とやらで飲ませるも面白からずと、鯛の味噌吸を花魁の笄のはしで食はせる。

「なんとうまからう。己も食ひたい。たんと上れ。」

「盧生さん、ようお出でなんした。」

「モシ旦那え、どうでござす。」

と夢の幇間だけ、洒落もいやみなり。

盧生うつゝなく八百本程ひなく寝、大いびき〳〵。

夢魂道人思はずほゝゑむ。

「さておあけの、やれ〳〵、早く此の夢を見せたい。さぞこの盧生が見たら、さぞ嬉しがるだらう。」

其の夜の節は、中の町八月の景色、夜かと思へば夜見世のあかり、此の里ばかりの昼の如く、冬がさしたる桜の花かんざしを見て春かと思へば、暑い間は絽の羽織を着て夏の如く、菊を植ゑて秋かと思へば、八朔の白無垢揃ひは雪の降りたる如く、四季折々は目の前にて、夜昼となき楽しみの、栄耀にも栄華にも、實に此の上やあるべき。

「己がなりは、助六の紛失した意休と云ふもんであらう。甲斐の信玄のきどりもあらうか。人にいはれぬ前に、いつて置かう。」

「さらば二色にほめてやりませう。江戸風のきつい物、上方風のえらいもんぢや。やつちや〳〵、なんときようか。」

夢魂道人「これ程に皆が骨を折るに、かんじんの盧生奴が寝返りもせずして、此の夢を忘れねばよいが。」

盧生おもはず吉原に居つゞけして、つひに五十年目の大晦日となり、猫が棚からばつたりと擂鉢をおとした音におどろき起き上り、傍にありあふ鏡を取つて見れば、白髪の姿となる。此のところはぞ

うか、俊寛と浦島太郎と三條清にしたやうな狂言なり。是れはどうだと蘭が宙返りをして、今まで寐て居た通子屋の稻鶴をひき起して聞けば、こは如何に、はや〳〵苦界十年を五度すはつた五代目の稻鶴なりと聞き、二親は五十年の夢に逢ひなしと、また鐵眼がでんがへり返る時へ、禿太夫其立ち出でて、

「ナント盧生さん、よまひの夢が今ぞあんしたかえ」

と云ひをきつかけに、東頭夢魂道人立ち出で、

「まづ此の夢は是れ限り、ドン〳〵〳〵。」

と打出し、さて拍子もひ出來ぬ、すつぱりうまく行つた故、夢ども皆々手打して悦び、いよ〳〵明晩見せへしとて、明日の夜を待ち居たりける。

「何でも明日の晩は、一層の煮える音をきつかけに、打出すやうにしやれ」

「是れより盧生が夢始まり、其のたあ口上左樣、チヨン〳〵〳〵、ドロンドロン〳〵〳〵〳〵

ヒユードロ〳〵」

扨ていよ〳〵明日の晩となれば、夢ども早く狂言をしたがり、眞の盧生が、ふだん〳〵寐付きもせぬ内から、夜が明ける。

ト、これ〳〵、なにやかにとりまぎれて忘れて居た。モシ、つかねえこつたが、日出たし〳〵。

日出たし。

盧生夢魂其前日　終

浮世操九面十面

芝全交作
歌川豊國畫

抑壬生の地藏尊と申すは、忝くも六道の能化にして、佛道の道外なり。狂言綺語は三分つ女郎の緣なりと、上は中三に附合ひ、下夜發と交はる則は、鼻闕地藏と現じ、地色の擶の文章節地藏、日切の地藏の兼言は子安地藏の子を産ませ、因果地藏で白木屋の丈八を濟度し給ふ。是れ皆煩惱卽ち菩提なり。柳は綠、花は紅の春の夜、何れか菩薩の導きならん。人をして此の連葉の擔ひはせ給へば、實に息災延命地藏、富貴繁昌たらしめん事疑ふ可からずと而云ふ。

去んぬる頃京都より壬生狂言といへる物、江戸深川八幡の地內へ下り興行しけるに、はやる事にはやる程に、それより淺草芝神明、はしぐうらくまで、何處へ出しても大當り、さてここにお江戸の繁昌、壬生をうんとこさ儲けしが、盛衰は世のならひ、此の頃では[illegible]も壬生のやうないは

ず、これはいかぬとある天竺の横町へ出しければ、江戸に劣らぬ大繁昌貴賤羣集する。

「しやつてん〳〵、しやつてん〳〵、かうでもあるまえす。久しいもんだ。」

「どうも天竺は雲がちら〳〵して見にくいぞ。」

扨も天竺の壬生狂言、はやる程に〳〵、今は天竺中が老若男女のこらず壬生の世界となりけるが、爰に西宮の三郎兵衛と云ふ町人あり。常に恵比寿の面を被て、家内仲よく人愛よく、商賣上手にかせぎ、魚商賣にて金銀を釣り上げる様にまうけしが、又番頭に黒兵衛とて此の家の白鼠と呼ばれしより思ひ付いて、是れは大黒の面を被て同じやうなる福の神、米の事が巧者にて、親方にすゝめ米商賣をさせけるが、又是れにも大まうけをし、今は商賣もやめ、萬兩分限の金貸となりて、いよ〳〵繁昌する。又總領を甚六と云ひしが、是れは殊の外面長な鼻の下の長い面を被て、ぶら〳〵遊んではつかり暮す。是れ親父が餘り人相のよい面故、笑つて白い歯を度々見せし故なり。此の面の名をすねかじりの面といふ。丁稚猿松は青いのろまの面を被て居る。色は青いけれども病身でもなし。其のくせ強健で買食ひばかりしたがる。

「先づ此の暮にも取れます金が、東方朔兵衛どのが九千両、浦島太郎兵衛殿が八千両、三浦大介百六両、是れも旦那の御器量と、西の宮へさらり〳〵、おやこかりは払へませう親子。」

「なんぼ西の宮でも、そんなもんはいやだ。とく／＼にしたい。」

年も早だん／＼つまり、暮の二十日過ぎとなりければ、西の宮の家は金銀のとりやりで、人の出入おびたゞしく、中に金をかりる人は、地蔵の面をかぶつて来、又ひどく催促において金をかへしに来る人は、閻魔の面をかぶつて不埒なる云ふもあり。是れ借りる時の地蔵顔、返す時の閻魔顔とは此の時より云ひはじめけると、昔の古いせりふなり。

「借の河原の金積、一つ／＼と、命に返を致すつもりで。」

「私は又賽の河原の川端領東と聞きましたハ、、、、、」

催促の手代東助は、おたいせなからい男にて、平常地蔵の面を被つて貸金を取りたてる、又借りのあるものが元利に来たには、又金を貸し、あれあと世の中の事を云ふ時は、地蔵の面を被らず閻魔の面もかぶらず、素面にて来る者あり。これが鉄面皮面を被るもと云ふは此の時よりの事なり。

「ねどりの利を取すまいとは餘りきたない人だ。それは乞食の閻魔と云ふもんだ。」

「主は閻魔にあやまる附で、閻魔が鬼にあやまるも金箱だ。」

「面を被つて借りましたが、是れがほんの面目ないので御座る。」

「鉄面の沙汰と云ふは今日まで當つた。」

「西の宮のおゑ様は常々喧しく、其のくせ吝嗇のねつこにて、一日臺所へ出て奉公人を叱りちらし、がや／＼と小言ばかり云つて居るが、是れは又平常山の神の面を被て、時々あたけまはりて居る。

「己ら旦那ら歯が悪いから、飯をやはらかに炊け／＼と云ひ付けるに、めんえう強く炊き居る。井戸端にて来くわふりも、飯の心が炊きにくいと、鷺娘と云ふお經に解いてある、わいらは何と心得て居る。」

此の時山の神杓子を持つて大きにあたける故、今の世に十二神樂の山の神は杓子を持つて騒ぐ。

下女のお龜は年中面をふくらかして、ぶり／＼した面を被つて居る。是れお多福の面の不人相なやうな面にて、是れをふくれ顔の面といふ。

「イ、こは、おめえさんの事ぢやァござりません。是れはお飯さんの事さ。」

「河豚が横飛びをしたやうな顔だ。」

とかみさま古風なあくたいをつく。

又質物の彦兵衛と云ふ親父は、金體ぶつ／＼口小言を云ふがくせにて、餘り主人の事を陰で悪く云ひし罰が當り、口がまがりし故、是れは汐吹の面を被つて居る。

「いめ／＼しいはつらふけば、、ァだ。」

口の曲つたおかめの悪態先づこんなものか。
酉の宵の息子甚六は、年始などに出る時は、いつもの長い面は家にしまつて置いて、己こそ金持だ金貸だと云はねばかりの飛んだ大面な面を被つて、肩で風を切つてあるく。何の事はない張子の大頭があるくやうなもの。是れより金持の事を大頭と云ふ。
向うから、息子に借りのある奴が来りしが、俄に座頭の面をかぶり、見ないふりをして行く。
「あの人にあつてはかなひません。めく盲目には何も御用はおことわりだ。」
扨持日屋の守は、あんなしの酒を飲んだか、真赤な顔の閻狛の面を被つて行く。とうかぶう／＼でよいへうなり。
又た西の宮へ朝々出入りし、おはい／＼をいつては、間には金なぞを借りる茶業羅屋取兵衛と云ふ者あり、此奴は常にお軽薄らしいそら笑ひをした恵比寿の面を被り居たりしが、或る所にお訟の面を被た、働いてござるが、顔はお多福でも、持参金が千両に田屋敷が一ヶ所付きますが、若旦那のお嫁御にお貰ひなさらぬか。」と無性に勧める。
酉の宮の内儀は、いつも山の神の面なれど、今日は仲人にあふ故、高砂のばゞ様のやうな柔和な面をつけ、ホヽヽヽ／＼と愛想ひはすれど、やつぱり内心は山の神でけつかる、ほんに憎らしい。

『土産がよくても、お多福ではどうであらうか。息子に話して見て下され。』
茶樂羅屋取兵衛は直に息子の部屋へしかけ、嫁の事をむしやうに味く話しければ、甚六は面長な面のくせに慾の深いものにて、お多福でも何でも、金が一ト箱に家屋敷が付くとは有り難い。」と、貰ふ氣になる。
『なにさおめへ、女房は家のかためでござえす。容色には頓著なしさ。そいつは貰ひたいね。』
取兵衛は甚六が慾心にて貰ひたいと云ふを幸ひ、最早しめたりと虚空に仲人口のお輕薄をいふ。
『其の思召しでは直に出來やす。一ツうつて置きやせう。おめへさんのやうな通で、御發明で、男がよくて、いや、もう恐れ入りやした。』
「何さおめへ、何さおめへ／＼。」
息子は彌嫁を貰ふ氣になりければ、お多福でも何でも惚れられなければ面白くないと、まだ相談も出來ぬ内に、毎日々々面をすり磨きをしければ、地體が面の事故、餘り磨いて所々はげるゆゑ、胡粉で彩色をする。うぬが面の皮を己がてにむいて困る。
『餘り磨いたらはげた。素人細工にいけばいいが、頬のはげた所はゑくぼにして見べい。」
「ばう／＼まゆに薄化粧と云ふが、己がのはてんでこまひに有る胡粉だ。」

甚六が常に、猿松と云ふ息子ありしが、此奴は兄貴の甚六よりは賢い方なれど、猿がしこく猿智慧にて、平常猿の面を被つて、「己が兄貴も餘程己惚なべら棒だ」などと、兄貴をぐつとさげて居る。

『どう見ても己が兄貴はべら棒だ。如何に持参がよいとつて、外聞の悪い。そんなお多福が女房に持たれるものか。慾の深い人だ。よしにするのがよからう。』

と例の猿智慧の意見を云ひければ、全體平常兄弟なかが悪き故、甚六と猿松と兄弟喧嘩をする。惣領の甚六はいつでも顔の長い面なれど、猿松と喧嘩する時は犬の面と取替へる。是れより仲の悪い者を犬と猿と云ふつもりだらうが、其の手は喰はず。

『これ見やアがれ、恵比壽に山の神に犬と猿だ。是れが眞の何の事だか分らねえ。なんの事だえ〳〵なんの事だえ〳〵』

兄貴が云ふ所、至極尤も、なる程何の事か分らず。

『なんの事だとは何のこつた。』

「お主たちは其處へ並ぶと、犬と猿だ。是れで雉が來て見やれ、桃太郎だ」

「三郎隔つてさるまなこ、是れはこれ、さぶろくさつてさるまなこ、と云ふ題目おや。己が云ふ事を無言つて聞かねえ。」

「おめへまでそんな無理な地口をおつしやる。それがどうして聞かれるものか」

西の宮の嫁相談、甚六は弟猿松と喧嘩をする程の事なれば、何でも逢引きにも貰はねばたゝぬと、結納もやり、近々婚禮をする筈なれば、追々嫁の荷物を送る。荷持の雇はれ出合は、お定まりの通り二百文づゝ、半紙にくる／＼と卷きの、上へごまめをちよびと付けた奴を、名々懐中へたくし込み、あしなしの酒をたらふく飲んで、殘らず猩々の面を被り、いゝ機嫌にて足元はよろ／＼で歸る。

「又あとから長持が十五棹くるとよ。此の嫁も餘りながもちはしまい。」

などと、飛んださし合ひをいふ。

「おきやアがれ。わん／＼もすさまじい。二百持つてるらア、ほんの事だが。」

「己は宰領だけに三百とつた。宰領三百さはり三百と云つては、こいつあることつたね。」

「足元はよろ／＼ぢやアねえ。今に喉元がげろ／＼だ。」

甚六が婚禮日をえらみ、首尾よくとゝのひけるが、丸綿を取り色直し牀入りとなつて見た所が、千両に町屋敷一ヶ所ではまだ高いもんだぐらゐの大お多福、慾にかゝつて貰つて見たが、是れ程の代物ではあるまいと思つたと手こずる。

「いつか／＼と待ちましたが、こんな悦しい事は御座んせぬ。」

「ナァあやまらせるは、太神楽の二番目、神主さんと云ふせりふだ。面白くもお多福もねえ。こんな古い地口でも云はねえけりやア、紛れやうがねえ。」

西の宮の御連は、今夜の様な目出たい事はないこと、いつもの恵比寿の山の神の面はしまひ、今夜は夫婦共に高砂の面を被り、「あひに相生の松の婚禮、こんな目出たい事はない、目出たい／＼」とばつかり云つて悦ぶ。始終斯う味くいけばいいが、合點行かず。

嫁の三日はあとはよく云つたもの、お多福でも顔に似合はぬ氣立がよいので、すなはだのと誉めけるが、此の頃はそろ／＼嫁をいびり出して、姑の山の神殿は三途川の婆様の面を被りかへていびる。

「人の頼む事をしてくれねえ尻の重い人だ。大きな棚ツちりだから、尻の重いも尤もだ。」

嫁のお福も根生のつん曲つた者にて、何ごと云ふと、持参金と云へば屋敷をかけなしの鼻にかけてふくれる。

「亭主と両屋敷だから、それで重いのさ。アイ重いのさ。」

三番の甚六は意にはまり、女房を持つては見たれども、根生悪のお多福、ぐつと嫌になり、女郎買ひを始め、吉原の若衆にて、手有屋の千手と云ふ女郎を買ひけるが、此の傾城も是んだ手の有る事千手觀音の如くにて、不断觀音の面をかけ、一度買つたるとも最早からは、尻の毛まで抜き上げられ、さかれ

たる木にもと二花を咲かせようとの御誓願、恐れ入つたる女郎なり。

甚六は金のある馬鹿息子と見られしより、何でも惚れたふりにて金を使はせるがいいと、一ぱいに掻きのめしける故、甚六は斯うも惚れられるものか、己ほどの色男はあるまいと高慢がきざし、天狗の面を被つてしやれる。つかみたがる手許りたんと有る女郎なれども、凡夫の目には一本も見えず、左行の二本に見える。

甚六は千手が手のあるにはまり、今は夜晝の差別なく通ひ詰にしければ、千手もこんな馬鹿な客に手のある觀音の面とはきつい無駄なり。化し取りにとれば、いくらも金の取れる客と、狐の面をかぶり替へ、化し取りに金を取る。甚六今は天狗の面は何處へやら、無性に鼻毛ののびたよだれ三尺六、流れる面をかぶつて通ふ。

『此の頃は根つから客人がこん／＼でおッすから、都合が悪うおす。』

「客がこん／＼では、ないしようがきやん／＼だらう。道理で己が金を酉の町にすらァ。」

「ぬしの顔は千住から出る燈のやうでおッす。」

狐女郎の化し取りに取つた金を、地廻りの色男の面を被つて、狐を化して此方へ取る、色の手管のわなにかゝり、間に引きみんたんをされる。

『今夜は出来ぬ、工面が悪い。チンチリツルノ\ツルノ\ツ。』
「潰ぶなノ\、二朱でもいいぞ。」
甚六十日ばかり打続けたれし、狐女郎に化され、金をしたゝか取られて、しをノ\とした面を被て、宅へ帰れば、親父が恵比寿の面は何處へやら飛んで、真黒な面を被て、「白癡面め、ぐうたら棒野郎奴。」の八百も云つて、真黒になつて腹を立つ。嫁のお福は、是れもお多福の面はなくなつて、角の生えた般若の面、姑やら小言やら、おあへも真にマァ馬鹿々々しい。と八百程云ひける故、親父が小言と都合千六百とぞなりにける。お袋の山の神殿も、子には大きに甘い人で、「やれ気の毒やノ\。」と、今日は何と思つてか、鼠の面を被て騒がれる。
『おあへもノ\、ほんにノ\ノ\ノ\、是れを八百いふも五體のこつちやアねえ。』
「相場にかまはず、七生までの勘當おやツ。こゝな上総木のほんほんち野郎め。」
「古風な事だが、ちいとも無理は御座んせん。」
御贔屓はこれ見たかと云はればかりに、高慢づらの鼻高く、團十郎の暫顔の面を被て、あゝつがもねえ。あつとさうも御座るめえ。」と力んで居る。
『どれや親父殿のかはりに、一番しあてやるべいか。何れも様それから御覧じませ。』

甚六が大枚の金を阿房づかひに遣ひなくして、懐のお金も使ひ果して、遂には勘當の身の上となり、今は貧乏神の面をかぶり、乞食となるさうだてな。

甚六に金を遣はせた太鼓末社ども、残らずせゝら笑つたやうな面を被て、高見へ上り見物しながら笑つて居る。

『何れも、甚六がさまを御覧じたか、錢のある時はおまへさま、お持參樣、錢のない時はおこも樣、お乞食樣だ。』

「いやはや恐れいりやした。」

「昔は大通、今はめんつう。祖尊は普通だ。二ッ合はせてめんふうつうだ。どうか今はやる帯のやうだ。己が斯うなつたら、唾もはきかけねえさうだが、眞當に吐きかけられてはきたない。」

西の宮は扨おき、今は天竺中の人の心が残らず壬生の面の如くとなりければ、地藏尊さん〳〵然と雲中よりあらはれ給ひ、

『如何に衆生の者よつく聞け。それ人間は貪瞋痴の三毒に困しめられ、晝夜此のまよひを免れることあたはず、慾にふけつては泥棒の面を被り、腹を立てては鬼の面を着て喧嘩をし、愚に成つては女房子に鼻毛を延ばした面を見せ、其の外借りる時の己が面、なす時の閻魔の面、燒餅やきは般若の面、

小言を聞いて頰のふくれた顏、是れをかぞへたてれば日が暮れるから、是れぎりにして山をとある
が、人間萬事此の顏の如く、一切の衆生此の顏を被らぬやうに、天道より受け得たる正直正當の
素顏にて世を渡るこそ、人の人たる道なれ、斯くの如くして富貴繁昌息災延命諸願成就せずと云
ふ事なし。我正生狂言と云ふ事を始めしも、衆生に此のよろひをはらさせんが爲なり。努々疑ふ事
なかれ。ア、口が酢くなつた。いい加減にしてひつこまう。」

とあれ／＼／＼、これ／＼／＼。明日は早うござります。どあれ／＼四十八夜の世話をやき付
けた癖で、ついこんな事を云つた。

両の言を宙の天空中、道義堂の教化にて殘らず素顏となり、安樂世界に目出たく／＼暮す。

「己」「氣のいいもんだけれど、それでも己が顏を三度撫でて見や、熱くならあ。人と云ふものは斯う
したもんだ。」

「久しい物だが、ありがたや／＼。」

「殊に狂言綺語も、讃佛乘のえんではないが、どうか斯う云ふと、富士太郎の淨瑠璃のやうなれど、さ
うではない。此の正生の顏を世のおきにして、子供衆の手遊びとせしも、諸人を導かん爲の神の慈悲
なり。又ある人相者が此の顏さうを見て云はれますには、それ人間を貧相、福相、壽相、色々さまざ

まちな人相がござれども、天より受け得たる人相は是非もなし。喰ひた相、飲みた相、ほし相、ひつたくり相、あい相、しは相、取り相、逃げ相、中に別してつゝしむべきは泥坊し相。是等の面相は、人人の心から拵へる相なれば、謹むべし、恐るべしと、春の日に長々と話されたるぞ目出たき。

浮世操九面十面　終

長物語
後編
白髭明神御渡申

芝全交作

北尾重政畫

序

白髭大明神御託宣に曰く、賽ひ日を人神楽を奏し、お亀女郎が嬉べたた出すとも、呼の薄きに髭を貯させ、路考が呼顔を出すなら、伊久が白き髭と雖も、根から忽轉、額角に尾の毛まで拔るべし。況んや金銀の山を積んで、高樓の髭を撫ではゞ、率頭末社の神等神集まり給ひ、何度か御髭の塵を取らさらん。若し茶屋に借りでもあらば、拂ひ給へ清めて給ふと、芝全交おそれみおそれみも申す。

寛政癸丑正月

昔も昔八百年ばかり後の事なりしが、それも去年の草雙紙、鼻の下長物語の法性寺入道前關白大

政大臣の弟御樣と云ふ事にて、爰に髭の内臣毛内臣樣と申すは美男にておはしけるが、如何の事にや一本もお髭のない御方にて、其の頃もつぱらきん／＼の髭なでとて、髭を撫でて高慢を云ふ事はやりけるが、髭の内臣樣はいたはしや、お撫でなさるお髭もなく、誰あつてお髭の塵を取るものも無ければ、此の事をなげかせ給ひ、白髭大明神へ髭の祈誓をかけたまへば、明神、お年寄なれど、御自身にえつちらおつちらと出でさせ給ひ、「ア、うんとこな」と階段を下り給ひて、

「善哉々々、髭のお望み承知致した。されど我が髭を受取るには、唇にこよりをはさみ、白髭大明神の髭を御渡し申すと頤をつん出した時、貴公の唇に其のこよりをはさみ、たちかにうゑちよりましたと、ちと物云ひはをかしいけれど、斯う云つて受取らねばならず、是れ並大體の事かいな。そこで先づ此のこよりの輪にしたを鼻から耳へ引つかけ、是れを手を付けずはづしならひ、其の上には髭をお渡し申さん。」

と有り難き神託ある。

「おめへの鼻は餘程大きな鼻だ。ちとうら山しいの木だ。」

「あいさ左樣さ、何おめへ。」

こより忍ぶと約束あればと、神前にて法樂をさゝげ歌ひ給ふ。大きな道樂者なり。

忝くも髭の内大臣、耳から鼻へこよりを引つかけ、まじめになつて下向ある。

それより髭の内大臣様は、白髭の神託にまかせ、耳から鼻へかけ給ふこよりを晝夜を分たず外しならひ給へども、どうしても外れ兼ね、お顔を彼方へしかめ、此方へしかめ、喉へ餅でも詰つたやうにびくつき給ふにぞ、痛はしや御近習の侍衆、これも旦那様の御相伴に、こよりのはづし習ひを仰せつけらるゝ。

「如何に近習の者共よつく聞け。汝等隨分出精を致して、是れをはづし覺えたならば、其の傳授を麿に授けよ。其のかはりに其方ら、耳から鼻で苦勞せしに依つて、耳を取つて鼻をかむやうな淺草紙を一結づゝはずみ侍り候ひをはんぬ。」

「御意には鼻耳ごんせ吉野紙でありさうなものだが、淺草紙は妙だ。」

「くやしい。どうかしたらいきさうな物だが、強い物だ。鼻の先が赤くなつた。」

「其方共がはづす顔に、なぜだか乳と馬鹿氣て見える。麿がのはさうはあるまいな。」

「拙者などは耳が大きう御座るに、鼻が高う御座る。そこで人様より一倍辛勞致す。」

「いえ、貴君のは御利口に見えます。」

髭の内府様はたうとうこよりをはづし習ひ給ひし故、早速白髭明神へ其の由申し上げたまへば、神

ら「恐れ入りやしたこ」と、感應ましたまひ、即ち神主南川黒人を使として、白髭大明神のことはりの御髭をうや／＼しく、唇をひつくり返しておつはさみ、御玄關へぞ来りける。

『たのんませう』白髭大明神の髭をお渡し申します。」

と頭をつき出し目をきよろ／＼していひければ、取次ぎの侍先づ一人出で受取りにかゝりしが、顔を見ると如何樣をかしくてもあるさうで、ぐつと吹き出し、笑つてばつかり居て受取り得ず。それから「誰出ろ」「彼出ろ」と、かはり／＼四五人も出れども、どれもをかしいか、又是れも笑つてばつかり居る。何のをかしくも變哲も無い事だが、なぜをかしいか、是れ程合點の行かぬ事は無し。

「おほ／＼おほゝ。」

「あは／＼あはゝ。」

「えへ／＼えへゝ。」

どれも萬遍なくはりあはせて笑ふ。

『なぜお笑ひなさる。何のをかしくもない事を、ぶしつけ千萬と云ふのは武士の事、是れは神主つけ千萬だ。」

白髭明神の御髭をかしくて、誰々も受取られず、それより神主黒人をお座敷へ通し、隨分と笑ひ嗤

い者定りノ＼に受取つて見れども、どれも笑つて許り居て埒が明かず、實に為方がつきて、御家中の内にても随一番の無人相、笑つて損でもした者に受取らせるがよからう。」と、御吟味ありけるが、爰に奥家老にて、不人相太夫と云へる者、おくら半紙の安賣りではないが、大極上無類飛切の不人相御家老にて、譜續く者もなき佛頂面、明日十五日には此の男が禮に行くと、向うの内で氣落をする程な顔な面にてありけるが、彼が先祖は人相よし太夫と云ふ者にて、名譽の笑ひ早き者、楠正成泣男をかゝへられた時、笑ひ男にて往き、戰場にて度々頤が外れて手柄せしが、其ののち鼻紙入へ金を三兩入れ、淺草の奥山にて、どおやうか講釋を立聞きして家の笑ひを出し、げら／＼笑つて居る内に、懐中の内をぬかれ、笑つて大きに損をせし故、此のかゞつと不人相面となり、以來ぶつてもはたいても笑はせず、子孫に之れを傳へ、楠正行のつらの字を貰ひ、代々不人相太夫馬鹿面と名のり、きつとした由緒の有る不人相の家柄なれば、此の度の白談の受取役に仰せ付けらるゝ。

『成程おのしが面をつくんゝと見るに、天晴いまノ＼しい面だ、頼もしいノ＼。』

主「有難う存じ奉ります。私ふぜいのしかみ面、首尾よく受取りまして、安々と御手に入れます。では御華の爲、御顔にはさんで差し上げましよう。」

共「御家柄とは申しながら、悪い面をお持ちなされ、かかる時のお大事に御間に合せまする。」

神「たのんましよう」

相「どうれ。」

相「何己が笑つてつまる物か。神主を一番閉口させてやらう。シイー笑ひますまい。何のをかしくも無い事を。サアお渡しなさい。東西々々。」

神「白髭大明神髭をお渡し申す。」

相「ちとお待ちなさい。とくと唇を濡らしませう。」

神「こへはおやうでござやる。早くお受けなよんなさい。ア、しちやがはゝやねえ。」

相「ふゝゝゝゝゝ、はゝゝゝゝゝ、あは〳〵〳〵、エヘ〳〵〳〵。此奴はあやまる。あはあはあは。」相太夫六十になつて始めてわらふ。

見物酒をかくして飲むやうに、唐紙の間へ顔をかくし、ぐびり〳〵と笑つて居る。

「嗜しくは薬罐を被れ。」と仰せ付けられ、御自身お釜の前に連れ行き給ひ、かくの如く計らひ給ふ。

『己それでも薬罐ましいか。是れ地口はかう云ふ物だ。』

「成程貴君方のお地口は又別なもんだ。」

此の騒ぎに御料理人、にお髭の内臣毛内臣、御尻の用心毛用心にとつい洒落を云ひければ、又是れが

お前にむつて、

「おのれ憎いやつ、聞きも混へてるなく猿の事なれば、洒落をいふはすきなれど、洒落をいふ場所もあらうに、聞も耳で氣をもんで居る所へ、そんなよくも無い洒落をいふっ二と、是れも大のお叱りなりき。

鯱花屋兵衞、白浪を受取るばかりを、とうとうさへから負けなし白刃に受合ひ、とかく不人情なに意休が引受りける故、目頭に十割ましの憎い面にて、何でも白刃しめこの爺ことと、背は草履の洒落をいふて、尋取りに出る。

「たのんますっ」

「どうれ」

「白浪丈助殿の釦をお渡し申す。サアどうだ、これは詫が聞かぬ是れはどうだ」

「サア お渡しなさい。」

「お出入の斷れの。如何様貴様は餘程不人情な男だ、サアわたさう」

意「ぷゝゝゝゝ、へゝゝゝゝ、あはゝゝゝゝ、あはゝゝぷう。」

「……まだな、吹き出して寒えで唾がはねた。」

「是れはどうだ、皆が顔をつばきだらけにした。ヘイきたなく〳〵」

惣兵衛此の御用はしめたと思ひの外の大失敗、今は爲方つきて、兎角人と云ふ者は女には脆いものだから、是れは女に受取らせるがよからう。」と評議して、奥方の女中のうち、おふぐと云つて古今獨歩の不人相、河豚が横飛びして、又其の上あくびをして嚔をしたやうな顔にて、元より笑つた事のないのを云ひ立てて、御奉公に住むとは、眞に不思議な御縁でお抱へになりしは、奥方茶の湯でもお好きかどうだか、そこは知らねども、それこそ屈強の受取り手ならんと、白髭の役を申し付ける。

神「たのんませう。」

ぷ「どうれ。」

神「白髭大明神、髭を御渡し申す。」

侍「イヤだいぶあんばいがよささうだわえ。」

神「吹き出して唾は御免だ。おめへのつばきは取分け氣がねえ。其の脣のびつくりあんばいでは、隨分いかう。」

お女中河豚の横飛殿こそ丈夫にしめようと思ひしが、是れも笑ひ出しける故、今度は誰かと評議とりどり。こゝに唐土殷の紂王の寵者妲妃が鰯を煮た鍋ぐらゐの事にて、さつきと云ひし、女中ありしが、成程妲妃が由緒ほどあつて、容色は飛んだ美しけれど、どんな事があつても笑はず。是れこそ實

に唐より渡つてきつとした不人相。此の役こそ此の者が受くる所と、お出しなされたに、どうした事か、是れも笑ひ出し、臍の緒を切つてより此の方の大笑ひ、つひに笑ひ付けない者の笑ひし故、頤がはづれて大騒ぎをやる。

『獅子に目鼻と違ひ、ざつきに目鼻のあるは美しいこと。』

「ほんの是れがおこしもとのふらつきだ。」

「頤がはづれてなくつてはならぬ。あるか〱。」

「頤は御座りますとも、是れより申し上げます。頤のかきがね取れたものは、雪隠のかきがねはづすが大事と申して、なんで御座つてなんで御座る。」

と醫者様うろたへて飛んだ事をいふ。

『ヤ、どうぞう。お臍の緒が切れた、ヤレ音がしやんす。みり〱〱。』

「おへそおかまひやるなと云ふけれど、是れはかまはずには居られまい。」

白髭の受取渡し、どのやうな者を出しても受取られず、「此の上はとても此方の笑はぬやうには出来ぬ。是れからは神主を笑はせる事を工面し、少しにても滑稽としたら、髭の落ちるは知れたこと、其の時早くひつたくるより外あるまじ。」と、相談きはまりしに、毛内臣殿の奥方をおけんけんのけんつ

うの前様と申して、是れも美しい御容色なりしが、御生付は随分美しけれど、大のけんとしたお顔なり。日頃内臣殿御髭の無いを共々なげき、其の上主様の御けんけんつうと名を取り給ふ程お髪のうすき故、是れも祈りの爲、彼のけんとしたるお顔なれば、御目付のぴんとして、常々女中を尻目でおにらみなされしと、折々しくじつた者もあれば、蔭の方では餘程あかるいお方なれば、殿様のお心痛めを見かね給ひ、ついで神主と睨めくらを始め、お髭を取りて差上げんとて、神主黒人を奥へ召し給ひて、にらめくらこそ始まりけれ。

「白うとさなれたと斯うにらみ合つた身は、中の悪い百人一首を見るやうだの。」

「蟬丸が唇頤を出す。拙者も唇頤を出す。」

と神主此の面をして氣の強い洒落をいふ。

「成程奥は餘程いい白眼だ。此の前奥に白眼られたおやおが平日と云ふ鳥になつたと云ふが、眞の事を知らぬ。」

流石の奥様もたうとうお吹き出し遊ばし、お負けなされけるが、爰に又お下屋敷の藪あづかり筍子の番人をつとめ居たりしお足輕、笹藪ねめ平と云ひしは、役目の通り大のやぶにらみにて、泥坊でも這入りし時は、白眼んで詐り落ちを取る奴にて、神主と白眼めくらを仰せ付けられ、役人立合ひの上

にて花やかに白眼みあふ。

「にんく、鎌田縫殿との勢はどうだ。」

「二キ、己に此日をば六へと誰か申し付けた。早う白眼みませい。」

「そんな無理な言日を六つこ笑はこようと思つてゝ、そんなら己」といはう、其方は足輕ではない、日輕だの。由良の助きどりは如何に〳〵。」

足輕ね今年二日程か、つて睨み合ひしが、是れもたうとう吹き出して神主に負かされ、最早白眼めくれに用ひ者もなく、是れがためはどんな事でもして、神主を笑はせさへすれば、是は此方の勝と、其の頭名に高き道化の随一團吉八を呼びて、神主とかけ合はせけるが、吉八も秘術をつくし、晝夜か、りてやつて見れども、いけしやァ〳〵、まじ〳〵として、につこりともせず餘程しぶとい坊なり。

神「ねつからをかしくねえの、もうそれでよしかの。」

團「吉八殿御苦勞千萬、ふつゝとお休みなさい。」と、「しも是れではいけませぬ。」

團吉八が手際でも、中々神主につこりともさせず、是非なきことでも笑はせねばならぬ。」と、今度は山中の眞盛をお寶へ呼んで、神主に見物させる。何でも是れで笑へて呉そうな事をさせたと、吉備子もには目もくれず、神主は頭をさげながら、つひに眠氣を付けて居る。

豆「どうか己を小論ででもするやうに、皆が己に氣を付けて居る奴さ。」
豆藏つひにこんな所を呼ばれた事がなければ、大道の氣になつて、笊を差し大きに叱られる。
神「神は非禮を受け給はず、己が呼んだ豆藏ではない、如何程笊をつき付けても、一錢も入れる事はまかりならぬ。」
其「これ豆藏、失禮千萬、なぜ笊を廻す、今日の價は後刻きつと下さる。己はいつも此方どもが見て居ると、笊を廻すと皆逃げる目高のやうだ。」と嘲弄しなるが、今日のはさうでないぞ。なぜならば己が錢の出ない事だから、爰をよく推量せい。たはけ面め。」
さうだが、豆藏を呼んで笑はせようは、ちとこてきな方なり。
豆「へイ／＼かしこまりました。」
神「何のこつた。此方より其方がをかしい。」
豆藏を呼んで見せても、神主はいけまじ／＼として笑はず。いつその事、今度は殿樣をはじめ、御家來の者かはり／＼に、それ／＼氣根一ぱい色々に顏ををかしくして見せたなら、笑ひさうなものだと、色々と工夫をして、顏をさま／＼にして見せる。
『誰だか知らぬが、此の案じをした人は飛んだ智慧のありさうな、馬鹿々々しい發明な人だ、

「べろ〳〵べい引。」

「へい〳〵〳〵。」

「もゝんぐわ引。」

「ふう〳〵。」

男「こなたも利口さうなお顔だ、出來の悪い五百羅漢のやうだ、まだ〳〵そんな事ではいかんぬしいかんぬし。」

男「それ〳〵、顔も一番やつて見んさんべいのべい引。」

髭の内臣様御論はしやな、お髭の欲しいばつかりに、つひにしつけもなさらぬお顔をなさる。

男「どの様に顔をなかくして見ても、いけまじ〳〵、しやぐ〳〵、つゝんつんと笑はねえ奴さ。」

と、髭の内臣様大きにおかんしやくを起し給ひ、「何でも今度は奥の女中共におしやうにこそぐらせて笑はすべし、是れで笑はぬといふ事はないゝ」と、大勢よつてこそぐらせけれども、妾に不思議な事は、どのやうにこそぐりても笑はず。此の神主何者の子か知らねが、何でも親には似ぬ子と見えたり。ただし鬼子かもとなんぞの子か、どうも知れず。

女中「そりや一萬石、そりや二萬石、エ、憎らしい。」

「ここで〳〵」
「ここで〳〵」
輕忽やァなんのお手だ。いくらでもくすぐんなさい。なんど平氣だの」
なふ「これから頤をこそぐんなよ。それから足の裏〳〵。それから脇の下〳〵」
何のいらざるお世話をやく。
『それでも笑はねえか。エ、じれつてえ。』
大勢よつてこそぐつてさへ笑はぬ神主、實に此の上は為方なく、髭の内臣毛内臣樣にもさめ〴〵と歎かせ給ひ、よく〳〵我には髭を授からぬ因縁であらんと、御家來ともたし〳〵としておはしけるが、髭の内臣樣ふと思召し出し給ひ、さうじて人と云ふ者は、如何なる不人相佛頂面な者にでも、此方から金を出して、是れを只遣らうと云ふ時は、如何なる者でもにつこりとせぬ事はなし。されどあれ程に笑ひがたき者なれば、めつたには笑ふまいと思へども、先づこゝろみに金を百兩出し、是れをお初穗に進上致さん。一ツ笑つてくれ給へ。と頼んで見るべしと、彼の百兩を出しければ、面川黑人大きに膽を潰し、
『何、此のお金をわたしに下さるかえ。そりやァ眞の事かえ。氣が違ひはなさらぬか。』

と笑ふ程に〳〵、一度にどつと大笑ひをしける故、髭も何もうち忘れ、とうに落してしまひけるが、直に髭を拾ひあげて、毛内臣様の御手に入ることを目出たけれど

「こりやおまへ、お金かえ。あはゝゝゝゝゝゝ。是れを私に下さるのかえ。エヘ、、、、、、、、。此の事さ。何髭もなにもいるものか。まあ、、、、、、、。」

「やれ〳〵大きに骨を折らせた。」

神主ほんたうのをかしい所はとうに笑つてしまひ、お禮の爲御輕薄わらひをする。

「こりやおまへ、お金かえオホ、、、、、、、、、。」

「是れを私に下さるとかえ。アハ、、、、、、、、、

「エヘ、、、、、、、あは〳〵〳〵〳〵。エヘ〳〵〳〵〳〵。」

斯くの如く惠方に向つて笑はれし。神主と見えけるは、實は惠比壽三郎殿にて、白髭の明神と仰せ合はされ、笑ふ門には福來るといはれて、世上に福を與へ、元旦、初春の初笑ひ、福茶を上る其の時の茶の間の趣向になされける、神の惠みぞ有り難き。

長物語後編　白髭明神御渡事　終

榮花夢後日話　金々先生造花夢

山東京傳作
北尾重政畫

自叙

李紳憫農詩曰く、鋤禾日當午、汗滴禾下土、誰知盤中飱、粒々皆辛苦と。宜なる哉、盤中の飱とは一膳の水漬の飯といふ事なり。米一粒布一寸といふとも、何ぞ徒りに用ゐんや。其の恩徳は山よりも高し、況んや衣食器財家室、人間一生日用の萬物を製し出す事、幾萬人の辛苦を食ひけん、筆の盡しがたし。依是僕、李紳が詩に感ずるの餘り、三巻の稗史小説を作り、其の大意を約して一序と云ふ而已。

寛政六甲寅孟春

山東京傳題

昔々、赤本元年、山の花の年の頃、金々先生と云ふ者あり。其の身貧にして人の富貴をうら

やましく思ひ、明暮この事をのみくやみ居たりしが、盧生もどきの榮華の夢を見てより、浮世は夢の如しとさとい、それも夢これも夢、寐ては夢起きては夢、明けては夢、暮れては夢、牡丹餅を見てア夢ぢやナァ、茄子の香の物を見てはァ、夢ぢやナァと、何もかも夢にして仕舞ひ、あまり物をさとり過ぎて、これぞと云ふ商賣も渡世もせず、浮世を間屋の盤臺の如く見なして、たゞ明暮ぶらくらり暮しけるが、ある時茶漬を一膳してやらんと、手づから煮花をしかけ、其の茶の出來るうち、とろとろとやらかしける。

傳へ聞く、近松門左衛門淨瑠璃作者の名人なれども、ねごとの文句には困りしとかや。我等も寐言の文句には大困り、只いびきの音、コヲ〳〵〳〵、口なめずりムニャ〳〵〳〵。此の外に若し寐言の文句御案じ御座候はば、御知らせ下さるべく候、早速書き入れ申し候。

小人閑居して不善をなし、貧人閑居して手錢をなすとは、正に是れ此の事ならん。

金々先生の夢の見やう、あめ細工の鶯のしつぽの如し。

『爰までお出で甘酒しんじよ。』

「おまへのお姿は、唐子の胴へ練供養の稚兒の首をすげたやうだ。」

「そちが鼻は、南京おこしの出來そこないと來て居る。」

金々先生夢のうちに、一人の童子に誘はれ何處とも分かぬ深山に來り、と見てあれば、四季の草花咲きみだれ、異香四方に薫じければ、又榮華の夢の二番目では、ちとうつとしいごと思ふ折から、一人の仙人現はれ金々先生に示して曰く、汝さきに榮華の夢を見てより、浮世の事は皆夢なりと悟り、是れと云ふ世渡の業をせず、是れ大の意氣過ぎにて、悟らぬ時には劣るなり。何ほど悟つても食を食はねば生きて居られず。すでに古語にも、恆の産なきは恆の心なしといへり、吉田兼好も自ら筵を織りて世渡とせしなり。先づ暫く此の山に逗留すべし。」と、仙人長口上の中、金々先生はひだるくてどうもならず、「どうぞお茶漬をさら／＼」とやらかしてから、お示しを受けましたう御座ります。」とぞ申しける。

「扨はあなたは、お仙人さまで御座りますか。私はまた賣藥店の唐人形かと存じました。是れはたしつに夢で御座りませう。なぜと申すに、あなたのお顔がぶしつけながら、牡丹餅の樣だからさ、アハ、、く／＼く／＼く／＼。かならずお氣にさへられますな。」

「我れに仙人にのぞみたるよし、何ぞ食物をあたふべきなれど、仙人は霞をくらひ、霞や霧を飲んで食物とする故、人間に食はする物なし、暫く待て、おしつけ茶漬をふるまふべし。」

と、扨々仙人は氣の長き者なり、金々先生が腹のかげん、思ひやられてあはれなり。

『木や霧をのむとおつしやれば、どうか手品つかひのやうだ。』
斯くこれの仙人のお頭、おほくの木葉仙人に申しつけ、金々先生に食はする茶漬飯の仕度をする。
泥棒を見つけて、縄をなふよりも、ちつと「じれつてえヨウ。」と申す次第なり。
杣の仙人山へ入り茶漬の膳にこしらへる木を切り出す。
仙人のお頭、金々先生を同道して此のていを見せる。
『己が商賣に野郎の啄木鳥と來て居る。』
「まだ飯と茶をしかける、水をくむ井戸側になる木と、釣瓶と手桶になる木と、香の物を切る組板、釜の蓋と竈の側、庖丁の柄になる木、附木になる木まで切らねばならぬ。」
木挽の仙人、樵夫の仙人が切り出せし大木をひきわり、板にして膳をこしらへ、仙人に渡す。
炭燒の仙人茶漬の煮花を煮る炭をこしらへんと、中にてあらッぽき枝をあつめる。
樵夫の仙人、茶漬の飯を炊く薪をあつめる。
『ひだるいも、通りぬけるとよい物かして、どうかこらへよくなりました。』
木地屋の仙人、茶漬の膳の下地をこしらへて、ぬし屋の仙人にわたす。ぬし屋の仙人、漆屋の仙人より漆を買ひ取りて、かの膳を春慶に塗る。これにもまだ春慶下地の梔子を、山から取つて出す仙人

ミあり、ぬし屋の仙人の使ふはけをこしらへる仙人もあり、其の先々を委しくさがせば、幾萬人の辛苦か数へつくしがたし。

うるしやの仙人は、茶漬の膳へ塗る漆をこしらへる。是れも山からうるしを取り来り、うるし屋の仙人の手へ渡るまでには、多くの仙人の手にかゝる事なり。其の辛苦述べつくしがたし。

「ハツヽト盲目仙人杖のかたへ是れで今日も五度尻をつゝかれる。うるしやは白澤と平目魚がうらやましい、背中に目があるから。」

盲目仙人得て、うるしやの尻をつゝつく物なり。

「早く仕事をしまつて、熱燗を一ッせしめうるしと出かけたい。」

箸屋の仙人、茶漬飯を食ふ箸をこしらへる。此の箸屋の仙人、伊達中箸の如く短き氣にて、かくはしの細んだ事にも腹を立て、ひつきり箸の夫婦喧嘩、雜煮箸の太印などゝ、人をはさふばしの如く追ひ使ひ、杉箸の上げ下しに八釜しき仙人なり。

塗ばしの女仙人、中にはつかもなく上代物あり。これ等も不用の人にあらず。かやうな美しき仙女かれなに見とれて、通りすがりにも此の様な骨を折る。職人の目を喜ばせ給ふ。

陶器屋の仙人、茶漬の茶碗と、香の物の鉢と、手鹽皿と、茶を煮る土瓶をこしらへる。是れも土で

しらへから薬の下地、びいどろを粉にして薬をかける、其の辛苦云ふに言葉なし。

金々先生、小さい子が竈へ薩摩芋をくべて置いたやうに、早く／＼とついて居てさがな。

「ハテかうひもじくては、茶碗もへちまも要る物か、早く頼む／＼。腹の皮がびいどろのポコポンの尻を見るやうに、へこ／＼するわな。」

「さて／＼人間と云ふ者は氣の短いものだ。もう二三百年たつたら、茶漬を食ふやうにならう。もうつとこたへさつせえ。」

丁稚の仙人お茶をくむ。

「茶腹も一時だ。お茶を上げれ。」

鍛冶屋の仙人は、金々先生に食はする茶漬の菜の香の物を切る庖丁、或は火箸、銚釐の鐶などをこしらへる。是れも金山から鐵を掘り出し、鍛冶屋の仙人の手へ渡るまでの辛苦をいはば、如何ばかりなるか、測り知り難し。

鍛冶屋の丁稚仙人は、早く仕舞つて屋臺店をそゝり、眞鍮の薩摩芋、鉛の葡萄に赤銅の蜜柑、鐵のどら燒をしてやられと、それ／＼の望みは仙人も人間も同じ事なり。

釜屋の仙人は、茶漬の飯を炊く釜をこしらへる。

「釜ゑがおきれば光なしだ。せい出して働かう、アハヽ、〳〵〳〵。」
「何のをかしくもねえに、是れが眞のお釜の前でわらふのだ」
百姓の仙人は、茶漬飯の菜になる香の物の大根の種を蒔く。此の種を蒔くまでにも畠をうなひ肥料をかけ、大根になるまでの辛苦は、更にたとへ難し。
「種から大根を取らやァ〳〵。なむあみだんのうし、人間に聞かればいいが。」
又茶つみの仙女は、茶漬の煮花になる茶をつむ。是れも茶になるまでの辛苦、いか許りか知れず。
「茶つみの女中に見とれつゝ、思はず茶の木にだきついた。そさうな人さんだやゝ。チンツチヤンチヤンとなとと、茶つみの好ぶうぜんに浮く、
「早くこつちへきせん法師、我が庵は都の茶つみ庵ご住で、ようらさ〳〵と思の聞かぬ子だぞ。じれつてえごよウ。」
「おさかさん、見物の散つた豆蔵が見へるやうに、箱を持つてなごさ〳〵しなさんな。」
人々生活に食はすべき料理の道具、先づ大抵揃ひはすれども、未だ第一の米がなければ、百姓の仙人まづ田へ種をおろす、是れ米を作る幕明の序開きなり。
「田のたねまきに潮ざつ頃に、百姓が河東節でもあるまい。」

仙人の親方、金々先生をともなひ、此の體を見せる。

『あれが貴様に食はせる茶漬の飯になるのだ。』

「最早私も、おまへ方の氣の長さには、あきれ返つて腹がへりどほしで、もう平氣で御座ります。然し、まだひもじい氣のせいかして、私が目にはお前の衣が、木の葉煎餅のやうに見えます。」

仙人の親方には、魚樂が紋のやうな印をつけて置かねば、只の仙人と間違ふやつさ。

それより女房仙人、嫁仙人、婆仙人、うちまじり、田を植ゑる。是れまでの辛苦、なか〳〵筆紙に述べがたし。

或俳師が句に、早少女の夜を揃うていびき哉と云へるも晝のくたびれし樣見えて、實に其の辛苦思ひやらるゝなり。

百姓の仙人、稻を植ゑつけだん〳〵育つに從ひ、天ぢよくにても雷神、風の神、十日の雨、五日の風で、稻に實を入れんと骨を折る。これ皆金々先生に食はする只一膳の茶漬飯の爲に、天までが大さわぎ。其の辛苦また如何ならんや。

雷神の女房ほどせはしき者はなし。綿入物をしかけて稻妻を光らせる。是れを思へば、人間の女房が榮耀食ひしたり、火燵に首ツきりはひつて居たりするは、あつぶてなり。

風「最早そろ〳〵秋の風を吹かせよう、したが人間が、目には左樣と見えねども、風の音にぞ驚かれぬるなどと、初松魚の身代りに沈めて置いた、袷の事を思ひ出すであらう。」

雪「是れで丁度五十かくんだ。どうだの、ちつとしめりが行き渡つたかナ。」

雪「私が身ぶりは、俊寛のおやすと來て居やす。」

雷「太鼓に續いてふいた〳〵。」

地の下は濕氣が多いから、朔日、十五日、二十八日には蒼朮をたくなり。それだから地神たちは、朔日十五日の禮にも、十さうじゆつの御祝儀申し上げますといふ。

天がおくでばかり骨を折るかと思へば、地の下にても地神といふ者ありて、多くの手下の地神をあつめ、稻に花を咲かせたり實をいらせたりする、機關の絲を引きたまふ。

此の所、竹田の芝居の緣の下の如し。何處ぞのだるまの地口のやうだ。

『さア早稻の絲から先へ引きやれ。』

是れ又、金々先生に食はする茶漬飯の爲に、かく辛苦をし給ふなり。さればかかる天地の恩をあだに思ふ者は、目前に罰も當る筈なり。

神の惠みにて稻に實いりければ、百姓の仙人これを刈り取りて、もみを臼で挽いたり、からさを

で打つたり、何やかやして、漸う米になる。是れまでの辛苦如何ばかりならんや、能く／＼考へ思ふべきなり。

金々先生、在所へ行つたやうに此の體を見て、出來秋の實いりをほめる。

田舍育ちの仙女、錫むねの黄楊の櫛に銀ながしのかんざし、手織木綿の柳に蹴鞠、ぐつとはずんだ出立ちと見える。

「からさを打つはいいが、ものまへにぶさを打たぬやうに、精を出したがよいぞや。」

潮くみの仙女は、彼の茶漬飯の菜になる、香の物をつける潮をくむ。

此の潮くみと云ふものは、踊や狂言で見ては松風村雨などと、至極樂さうに見ゆれども、正寫しの潮くみは殊のほか骨の折れるものにて、鹽になるまではなまやさしき事にあらず、その辛苦あはれむべし。

「むかしは村雨だの松風だのとて、駄菓子屋の代物を見るやうな聞いたふうな名をつけて、高慢な顔したと聞いたが、なんとしてこちとらがやうな、美しい潮くみがあるものか。今どき行平さんがゐさんしよなら、あつちから居膳で御座んせう。」などと潮くみだけ、つがもなく鹽屋をいふ。

百姓の仙人、辛苦して香の物にする大根を作り、潮くみの仙女鹽をこしらへて渡しければ、糠屋

の仙人譲を賣りに來り、樽買の仙人樽を賣りに來りければ、何もかも揃ひして漬物屋の仙人、かの大根を澤庵につける。是れ皆金々先生に食はする茶漬の飯の爲なり。香の物ばかりも大抵や、大方の辛苦にはあらず。

搗屋の仙人、茶漬飯になる米を搗く、是れも搗屋の晝飯の菜になる秋刀魚の干物から、道を聞かれた時、汗をふく手拭まで、それ〴〵に入用の品を造り出すこと、其の先々に數へ盡し難し。

『あふないて搗屋さんまをぶつゝ喰ひ、とは、川柳の名句であつた。』

桶屋の仙人、井戸側をこしらへる。是れは飯を炊いたり茶を炊たりする水の用意にて、別に井戸を掘るつもりなり。其の木の餘りにて手桶、米かし桶などをこしらへる。

仙人のお頭帳面につけて、一々種數を揃へる。

まだ香の物を切るまな板と米上げざる、火吹竹と火打箱が出來ない。薪と炭は大抵出來上りだなどと、顔見世前の芝居の如く、大さわぎなり。

『ひよつといせるか。私が目には石屋の鐵槌が薩摩芋のやうに見えるやつさ。』

左官屋の仙人、竈をぬる。

『竈の上塗は、鉢の上塗をするとおり、ましだの歯入でござる。』

團扇屋の仙人、しちりんの下をあふぐ澀團扇をこしらへる。是れも藪より竹を切りいだして骨となし、紙をすきて團扇に張り、山より澀を取り來りて上にひく。團扇ばかりも其の先々を思へば、幾萬人の手にかゝる事やら知れぬなり。

斯くて、金々先生に食はする茶漬の道具だて、あらまし出來上りけれども、未だ飯を炊き煮花を煮る肝腎の水がなし。それゆゑ仙人のお頭、井戸掘の仙人に云ひつけ、急に井戸を掘らせる。是れも井戸掘足代から、鋤鍬の類の道具をこしらへ、其の辛苦幾萬人の骨折か、其の先々は數へつくし難し。

女仙人、井戸を掘るを見に來る。是れは何の爲に見に來るか氣が知れず。したが一體この本に女がすけなき故、畫組の愛敬に見に來たと見ゆる。

龍宮にては、此の度井戸を掘ると聞き、水を授けんと龍王自ら立ち出でて、多くのうろくづに其の用意を申しつける。是れ又金々先生一人の爲に、龍宮までの骨折のべがたし。

龍王の水を授ける所、龍の冠が反吐をはくやうなり。

諺に水は方圓の器に從ふと申すことあり、方圓の器物はさしづめほらの貝なり。それゆゑ龍宮でも、水を授ける手傳ひは、ほらの貝が勤めるなり。

鳥「こんだの茶漬飯の菜が、ひもので無くて仕合、さうだと己ら、かうしては居られねえ。」

さて何もかも出来あがりければ、飯炊の仙女、下女の仙人、丁稚の仙人集まりて来かゝり、飯を炊き、香の物を切り、茶を煎じ、膳立をし、さま〴〵辛苦する。

扨この飯炊の仙女、下女の仙人、丁稚の仙人などと云ふ者は、至極辛苦する者なり。下女だの丁稚だのとて、別に生まるゝ者にあらず、その身貧乏に生まれし故、かかる辛苦の奉公もするなり。これ皆もしあはせさへよければ、新内ではないが、御新造さんの奥様のと、人に敬ひかしづかれ、上見ぬ鷲で暮すけれど、マレ三介の、ヤレおさんの、ヤレ長松のと安くされるは、其の身々々の拙き果報のふと思ひ、いかなる三界に住むも、慎み働ふべき事なり。

金々先生『これ長松仙人、茶のはうじやうが悪いぞ、合點か。それ、おさん仙人、早く釜の下の薪を引け、これはいそ〳〵、世話の焼ける事だ。』

此の時また、かまどの御荒神様も、男女仙人の働きを見るやうに、采配を持ち臺所を守りたまふ。

『皆のもの早く〳〵、申しつけ、三尺下つてたかねぶりと云ふから、ちと髯を剃がう。』

斯くて漸う一膳の茶漬飯出来上りければ、仙人のお頭、是れを金々先生に食はする。

金々先生は此の茶漬飯をこしらへる多くの人の苦勞を、目前に見たる事なれば、膳にすわりてつく〴〵思ひけるは、いつかな茶漬飯一膳、たつた一粒の物といへども、容易に人の手にかゝりけるか

數へつくし難し。ましていはんや、美をつくした料理なんどは、幾億萬人の辛苦なるか、はかり知るべからず。是れを思へば、家を造り著物を著、人間一生入用の品々は、皆これいく萬人の辛苦を積めるか。然る時は紙一枚、箸一ぜんも、我が物にあらず、皆天地より惠み給ふ所なり。米一粒も遊んで居てくらふは、勿體無い事なり。ア、さうぢやナァと感心の餘り、膝の上へ白き涙をこぼしければ、お給仕の童子が目付けて、「もし飯粒がこぼれました」「も、いい〳〵。

『如何に金々先生、汝なまもの知りにして、定まる渡世もせず、あたゝかに著あくまで食らひ、千萬人の辛苦を費して、ぶらついて居たるは、大きなるあやまりなり。浮世はいほあひもちだ。これで茶漬飯を食ふやうに、さら〳〵と悟りが開けたであらう』

「只今までは、茶漬飯などは何の氣もつかずに、ふしやう〳〵にたべましたが、だん〳〵多くの人の辛勞する所を見ましては、喉へつかへてたべられませぬ。今まで榮耀食ひに食好み致したは大きなあやまり。ひもじい時にまづい物なしと申すが、よいたとへで御座ります』

と思ひしは夢にて、あたりを見れば、漸う煮花が煮えたちければ、手をはたと打つて、

『ア、奇なるかな妙で御座えす。盧生は粟飯炊ぐうちに五十年の夢を見、我は煮花の出來るうち千萬人の辛苦を知れり。われ浮世を夢と思ひなして、只うか〳〵と暮したるが、今日より心を改め天地

へ恩を報ずるため、一ッの渡世を始めん。」

と、是れより無上にかせぎければ、四五年たゝぬ内百萬兩の分限となり、後は夢にあらぬほんまの榮華の身となりけるぞ、おあつらへ通り切りの日出たし／＼。

「ア、久しぶりで、草雙紙のしまひが夢だ。」

榮華夢後日噺 金々先生造花夢 終

天道浮世出星操

式亭三馬作
歌川豐國畫

所謂四季の四番續きな十二幕の月ときり、春の朝の序開より大三十日の大詰まで、喜怒哀樂のひきもきらず、大千世界の本舞臺、子故の闇の黒幕あれば、生死流轉の早替り、四季折々の演文附、因縁因果の運り道具、其の前生の樂屋をさがし、以て三卷の稗史となし、まだ初舞臺の御目見得に、[illegible]う幼筆の操狂言、青本好きの御子様方の御意にも叶はば、作者は愚か版元まで、こひねがはくはイ、ウしかけエ引。

寅のはつ春　　式亭主人

隱元禪師の曰く、「世界は大戲場の如し。」とは宜なるかな。天地一帶芝居にかたどり、諸事天帝の案じにて、もろ／＼の星を下界へ天下らせ、天が下の御賜物を操りの如くつかはせ給ひ、卽ち此の星の

頭取を皆様御存じの金銀星にて、此の兩人をよび出し、其の外諸々の雷神、風の神、稲妻、雨雪に至るまでよびよせ給ひ、年中の役割定めを仰せわたさるゝ。

雷「おいらは平常雷神々々と安くされるが、夕立の時にやァ鼻たかしまの硯石、南都いへんずみな境界だらう。」

稲「なんはわしがごろ〳〵云つても、時々己が光らぬとどつと落ちがこねえす。」

[illegible]「風の神のそばに居るは、氣のせえかぞく〳〵してならねえ。」

星「地震の役當は今年は休ませましたから。鹿島へ鳥を使者にたてました。去年の役割は恐れるね。」

星「己ら一人、何も云ふ事を知らねえから、只うつむいてだんまりのふさぎの蟲さ。」

人間は云ふに及ばず、鳥類禽獸に至るまで、のこらず魂と云ふ物あり。是れ如何なる所より出づると云ふに、皆天道より授かるなり。其の外五輪五體に至るまで、天道のくりまはしにて、生死流轉を樣々に役當をかけたまふ。彼の魂は生性によりて種々あり。其の歌に

木九からに火三ッの山に土一ッ七ッ金とぞ五水りやうあれ

かくの如く年代記にあれども、それは昔の事、今時はこんななまぬるい事でなく、ぐつとはしよりの一ッヅ、と極め給ひ、卽ちお月樣の手細工は因果の車にて、因緣の絲を取り給ひ、是れを以て主從

三世、親子は一世、夫婦は二世と縁の絲すぢをつけ給ふ。其の急がしき事、彌生前の人形屋の如し。

男「己が此の樣に骨を折つても、身體髮膚父母に受けなどと皆親々におちを取られる。」

「胡粉が足らずば、てんたう蟲を取りにやつたがいい。」

男「けふは雲切のしねえせゐでおすか、いつそ目へ霞がたなびいてなりません。」

星「わアい〳〵、笑つてやれ。お月樣にそんな言葉があるもんだ。」

「斯うならべておいて、人魂三ツ々々々々と云へばいい。」

「一寸の蟲に五分の魂と云ふから、六部の魂は三分あるだんべい。」

性を受けたる魂は正札が付いてからはけてある。

男「おとなりの魂殿、かやう致したなりは魂の質物か、酉の町のみやげの芋と見えますな。」

魂「さやう〳〵。」

頃に盜人家に晝と闇への如く、爰に七曜星と九曜の間に部屋住みの星ありて、其の名を二八星と呼び、まだ部屋住みの風來育ち、是れぞ誠の天竺浪人、榮耀榮華に日を暮し、終には惡友達の仲間入りとなりければ、朱に交はれば惡人の惡星共に、誑され、更にたわいの無き折節、忠臣の家來星なりければ親しく思ひ、樣々に諫めはすれども、諫言耳に酒機嫌にまかせ、反りて憤り甚しく、よき星あまた

断当しければ、あとに残りし悪星共、こゝぞ得手に帆柱、しやつきりしやんと断うもつて、有頂てんてん足の雉、おひけの塵をひなつた案じ、更に生根はなかりけり。

「八人そろつて断当だから、八断当子なほしはどうだ。」

「旅は道づれ世はわつちと云ふから、つれだつて浪人しやせう。」

「これは悲ししにほたん／＼と涙がこぼれ梅だ。」

「己が親玉の君子顔も腹の皮だ。君子の悪いのはふんしのわるい猿におとりだ。」

「そつちの端からずつとたらんだ頭は、とんと座頭の川渡りあやめ団子ときて居る。」

「君子に三つの楽しみありとはよく云つた。色と慾の間に居て、熱燗であふッきりはまんざらでねえやつさ。」

「君の刺身の智恵袋、上あんばいの腹わたを洗つたしゆかうの趣味噌、すみそのきかぬ馬鹿書斉子、大根おろしのからいめみて、からしあへの涙がこぼれようが。だがよ／＼。」

斯くて二八星は遂に変はる噺の如く、奸侫邪智の悪星が為に、終には悪道へ引き込まれ、いよ／＼悪業増長し、これより下界へおし下り、我があく法を弘め、天帝をおしこめんと、比叡山の風の神を以て比叡下しの魔風を吹かせ、我も／＼と前後を争ひ、てんやわんやのさきがちと、皆々下界へ飛びお

される。

「本町の天帝をなきものにし、天帝の位を取らん事なんど、心の中にありやす、竹村の上おんはい、うましうまし。」

「べらやアねえ、華島をどりが夕立にあつたやうだ。評判〳〵々々。」

「どつこい、三助侍つたり〳〵。風の腹入の腹下し、のみかけ山の鐘道さん、そこらで三助侍つたり侍つたり。風々々々ぶう〳〵〳〵〳〵〳〵。」

「先の先生、あんまり早いぜえ。」

「早い〳〵はおそいの裏よはどうだ。」

「あしがおそいはせんだい河岸よ。」

慾の皮にほころびなければ、よき心は衰へ、悪心弥盛んになりければ、猶天帝の御宝如意宝珠を奪ひ取らんと、十五夜の折柄よきさいはひと、忍びの名人夜盗星を以て、まんまと首尾よく手に入れけり。既に十六星が悪の星ぞおそろしき、

「日の出る気はい、〳〵しはあかし。」

「時に明まするや、月読左衛門でござい、」

「まんまとしてこました。これさへ我が手に入るからは、ありがた山吹色をしよしめ汁と来たわ。」

「十五夜の晩の望かけ盗人とはやさうが、だんないだんない。大願成就忝なますで、おさらばおさらば。」

人の慎むべきは酒なりと教への如く、一名を狂薬と云ふなれば、至つて悪き物これにしく物なし。爰に十六星が手下に酒星と云ふ者ありけるが、手始めによき働きせんと、ある折助を堪忍星が使つて居るを逐ひのけ、かの折助をつかひければ、忽ち心がはりして、得手物のあおつきりをたゝみかけて大めれんと成り、通りがゝりの座頭につき當り、むしやうに太平の巻舌を上げ、大いざを起す。

「コレエ途方もねえ。盲目の癖につき當りやァがる。目を明いて歩きやァがれえ。」餘りあきれて腹がへりま大根太印な座頭だ。」

酒星「此の男の匂ひ、がうせい恐るべしな匂ひだ。何でも鬼殺しか物はある。」

「己が笛ではないが、そんな事は知らねえピイ、、、、だ。扨々あんまへんちきな男だ。」

多くの金を貸し、其の利を以て世を渡る慾心まんまんたる者には、今まで金銀星がつかつて居たるを、慾星これを追ひのけて入りかはりければ、忽ち身上左まへとなり、金銀星のつかはぬことなれば、慾にばかりなりて、借金と云ふ物を始めてこしらへ、二進も三進も行かず、六々三十六な事は無いなどと七々四十九ふうをし、見一むしやうに大てこずりをする。

「紺屋ではないが、明後日の朝六ッの鐘を合圖にきつとお渡し申すから、先づこれまではチャンと云ふ所をお頼み申します。」

「今日金をすまさねば、此のびく市が耳では無いが、きかぬ〳〵。サアびく市とも云つて見やれ。」

「我等が脚半の皮脚半を、こん〳〵こゞめの粉微塵にしたせんぎだ。たとひ口を錢獨樂ははだしと云ひ廻しても、さうとら屋の藤右衛門、拙者親方へいひ分けが立たぬ〳〵。」

此の節内證の火の車より借金の火が降る。されども凡夫の目には見えず。

内證の火の車より、なんそんの屁の車で至つて臭い。

中とみのはらひぢやァねえ、かけとりの拂ひだ。然しお初穂をかけうりにしてはあはぬ。

緋道者おかまじめに曰く「五節何々々々には八百屋萬屋のかけとり共かけ集めに集まり給ひ、耳に諸のごたくを聞いて、心に樣々のやりくりをし、明日の明後日のと譃言のものまへに於て、うそれみ〳〵を申す事の由を、あそこもたふし爰もたふし、たふしたの二ッの御耳を振りたつて、聞しめせと申すウ、、、、、、。」

人の心にすき間なければ、よき星をおしのけて惡星のつかふ事かなはず。

孔子の道をわきまへ、すこぶる儒道の心がけある者には、五常、信實、正直、堪忍などと云ふれき

れきのよき星たち、常々ゆるさず使へば、惡星共是れを見れども使ふ事ならず。此奴には一番大へこみにへこんで居る。

『昨日會讀いたした荀子勸學の編のよもぎの所は、大戴禮史記の世家などにも御座る。然しいづれも講釋にたがひは御座らぬ。」

「これを上げましたら夫木抄に致しませう。」

「足下は八尾板の史記のしんこくを御覧なされたか。しはんなども大分よう御座る。」

「不佞は先頃青物町の書林で詩經集註の再刻を求めました。」

「此の本は大分闕落があつて、讀めぬ若草つみ捨てられてだ。」

「これさ、無駄をのたまふな。先生はねぼけさつしやらぬから耳が早い。」

「昨日麴町の先生で毛詩谷風の所を受けたまはつた。中々うけたまはり事で御座る。」

惡星「ろんごとは首をふつてかたる事かの。」

同「さればさ、こッとらは論語よまずの論語知らずだから、かたくて歯にあふのぢやァねえ。」

女郎の誠と玉子の四角は無いと雖も、玉子燒にすれば四角も三角もあれども、傾城に實少なし。これよき幸ひと誠の星がつかひ、おもいれ誠をつきて客人をだまし、取りたる金をばすぐに地色の方へ

吸ひ取られ、又慾の星に浮氣星、色星は勿論様々ありとあらゆる悪星ども、亭主遣手若い者に至るまで、よき星をおしのけて使へば、よき星はたまらずして殘らずお拂箱とされ、お由の主は己一人と悪星のはゞかる事ぞ面にくし。

「此の頃はおやぢが日主をくじりの筋だから、どうもあんくが悪い。」

「聞きなんし、聞のあさき裏をかきのめして、是れ〳〵しこためんした。是れを持つていつて小使にしなんし。いつそ嬉しいなう。」

「成程あの女郎は手のある奴だぞ。千手觀音はだしよるのだ。然しおへねえ烏丸だす。」

「あのこぢら、背に雁首さつん出しあされて、今に來やり申さねえ。身共には寢道具の番ならさせるだんべい。おへねえのしよろまだアむし。」

若い者何にも云はず、たゞ「ハイ〳〵御尤も〳〵」とばかり合はせて居る。

「三日月お仙ぢやァあんめえし、背におらりと見たばかりで、何處へ巣を張りやァがつたか、今に顔出しもしねえ。餘り人をかぐつよろにしめやァがらア。太々しいあんな女に馬鹿にされるのとは違はァね。ほんのこつたアつがもねえ。」

女の髮すおをまれる事には大象もよく繋がれ、女のはける足駄にて造りし笛には秋の鹿もよく集る

とは、げにうがちなるかな。兎角迷ふは人心、色里につかはれて有頂天のてんぐゝるまに登りつめたるしまひには、兩親の久離を切られ、かねてなじみの女郎の方へふり込めば、飛鳥川の秋風にて、ところてんの如くにつき出され、傷方つきての薦被となり果てれば、天道の憎しみつよく、卽ちおやのばちを雨霰の如くにいかけ給ふ。恐るべし〳〵。

「アノ女郎は全盛ごさかんで居くさるが、多くの金を吸ひ取られたは皆あいつ故だ。ふんばり女のじやく女郎とはあいつが事だ。チエ、殘念やとくやしんぼうを云つても、緣の下のむぐら持ちで泣えぬ泣えぬ。」

「あれ〳〵、客人が菰を著て歩きなんす。一寸お見なんし。氣の毒でおつすね。」

とは表向の言葉なるべし。

色里「己にそやされこんな體になられたとは、此の息子の事だ。しめたぞ〳〵。」

勘當しても母親の心は中有に迷ひ、息子のえんの綠にぶらさがり、爰まで付いてくる。

天道曰く「此の樣につるされても、後でうすどころを打上げてくれぬから、ちと張合ひがない。」

此の息子一ときり遊びたい心があれども、堪忍果がつかふ故堪忍して居る。

よき心を持ちたる者は、たとひ貧乏をするとき、家業に精を出せば、天道にかなひ、あても無き金

銭を拾ひ六せすれども、悪しき心の者は足の下に踏みたるも知らず、泥の中へはひるとは、皆悪星の
つかふ故なり。

善玉「一番悪星奴にてんじやうを見せつけてやらう。それ早く拾ひごんべとしたがいい。」

「鶴の財布にあるからは、確か二五十両、久しぶりの御対面、ア有り難い。南無妙法蓮陀佛。南無三
宅九郎になつた。」

悪星「てんやわやにして、あいつをこつちへ取り上げ要アとしてしまうんだ。」

「それに此奴は金が[illegible]だ。」

此坊根性の有るものをば、忽ち悪星どもがつかふ故、彌狼藉し、かりにも盗みよこしま我慢非義非道なることを云ふ一騎当千の悪星ども、てんでに我も〳〵とつかふ。されども天帝の憎しみ重くして、上より天の網をかけ給へば、いつか一度はこの網にかけられて、命を失ふ悪るべし〳〵。

「悪星「首尾は上々でござります。早く来なムショ入道としなせえ。」

「此奴水ものの投げ入れときて、太印なやつらだ。思入れ吠えさせてやらう。」

犬曰「赤も斑も早く来て吠えさつし。家の前のやせ犬だと云はれねえやうに思入れわん〳〵と云つて
やりな。気のきかねえもんだぜ。わん〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵。」

姑に從はぬ嫁、親の云ふ事を聞かぬ娘なども、皆惡星のする事にて、酒星不義不孝の星共皆ついて是れをつかふ。

『斯う云つちやァなんな事だが、竈馬やくさ〳〵草の生えさうな屋體骨へ、持參金の二百も持つて來るお孃さんだから、ちつとお髭なでだァ。いけツてえそうな、姑が怖くつて、此のよ世界に居られるもんか。御大層な話だが、キヤッと云ふから水道育ちの女だによ。日に五升やそこらのちびり酒を飲んだつて、四ッ谷鳶張り返しぢやァあんめえし、口嘴をとんがらかしても、白癡が釣をするやうにびく〳〵するのぢやァねえ　惡くうなりを上げるが最後、面の皮の千枚張へ絲目を付けてたちぐらみをさせるよ。』

などと、己が首に絲目のあるは知らず、凡夫の淺ましきものなり。

姑『あんな奴は實に御座りませぬ。ほんに〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵、扨も〳〵〳〵〳〵、ほんに〳〵〳〵、いくら云つても同じ事だ。ァ、口がくたびれた。』

父母居ます時は遠く遊ばずの諺はあれども、是れを用ゐる者少なく、或は一人息子のほんそうに育てあげたるは、一寸遊びも居續けとなり、兩親の案じる事をも知らず。偶々家へ歸れば二日醉にしこつけられ、又父母に苦勞をかけて、母親は持前の癪をおこせば、親父はぐつと熱くなりて、小言八

百を云へば、どこで風が吹くかしらぬ。ぬに此の事を慎までるんや。

「若旦那の小間物店はさきん〳〵な物がある。珍物茶屋の様だ。然し犬より外に買手はあるめえ。」

善二「安の家は、へるやみ、閻黒地獄のやうだ。これ雨龍も子故の闇によつほど迷ひやしたな。」

善玉「陽龍の養金を子から無理はねえ。」

善玉「子故の闇がまつくらで、さつぱり分らねえ。因縁の縁約のこんがらかる様にしなせえ。」

善悲善男の心ある者には、よき星多く集まりてつかふ故、なほ〳〵身上のきたる、金銀も山の如く蔵々に満ち、番頭手代に至るまで忠義、信實、誠なことゝいふよき星ばかりつかふ故に悪星の這入るべきすきま無く、茲には呆れて居る。

善玉「茲の家は堅いから、無駄な書入れはなしさ。さぞ夜影が喜ぶだらうねえ。」

悪玉本主に先満し、よき星の邪魔をなし、多く困窮に落し入れければ、心憎き事に思ひ、是れより雨なりさかひとなりける。されどもよき星のかは勇み強く、たゞ〳〵あたる事あたはず。是れより悪星だん〳〵と光を失ふ。

悪玉「こゝさと都庄なや。せきこそたはふ〳〵な目にあつた。」

照星「爰を早くにげの道鏡とするがいい。」

善星「此奴くろざやの年明で、よわいのねと來て居る。」

慾星「ア、痛い〳〵。頭がひしけ鏡臺とめりやす、まつぴら御免なつの蟲の飛んだ目にあつた。何と御免のいつたあやまりやうか。どうだ〳〵。」

善星曰く「どつこいしめたの森ときたぞ。逃すな〳〵。」

扨も十六星が惡逆天帝の御耳に入りければ、大いに逆鱗まし〳〵、急ぎ破軍星を以て階下にひつたて來り、いち〳〵御聞きたゞしありけるに、惡星に進められての出來心なるよし白狀しければ、多くの惡星を引捕へ、因果の車へつみつけ、扨十六星をば心の辛棒へかけ、肝心要石を以て體の油を取り給へば、不思議や體の中より十五の星とび出し、いづくともなく飛び去りければ、これよりもとの善星となりて、天帝の御前さらずの出來星にて、末世に殘る一ツ星、此の因縁と知られたり。

『天道を知らずして、不孝つひに冥利を得ざること、今川心を改める。サア〳〵〳〵天道は何とだエエ。」

「二八十六で文つけられてと云ふ文句はあるが、二八道樂でふみつけられては己が始めてだ。」

「油を取られるのは、エレキテルで火を取られるよりつらうおつすよ。」

「やつがれが案じはどうでござえす。おそろかん明であらう。」

「だまつて引くも餘り手がねえから、因果ァこゝだァ／＼／＼／＼。なんと一生の出來だらう。」

それより天帝は惡星共を因果の車へ乘せて、雲間より下界へ追ひ下し、殘らず石ころとなし給ふ。世の人お星樣が石ころになると云ふ事うそでなし。されどもほんたうに當てにもしたまふな。

「何でも六段目の切りには見しらせてこまさうと思つたに、てんとまるつてよい黍團子、日本一言もあるまいがや。」

「汝等は天道を恐れざるにあらた。」

「こんなめに遇はうとは、ねつからさつぱり知らなんだ。非道ばかにした。」

「ヱヽ、悲しや、雲から下が石つころになつて逃げられねえ。野郎の松浦佐用姫と來たわ。」

「おや／＼恐れたなりになつたぞ。」

「慾星が強慾はねつからさつぱり知らなんだ。何と此の地口がきこえるか。」

「聞えるとも／＼。さて／＼惡い地口だ。」

「これさ、手前はつきえへを知らねえといふもんだ。一所に逃げてくれねえか。何處での娘に斷う云はれると姉だ[illegible]。」

扨も天帝のお捌きにて惡星の根をたやし、よき星ばかりになし給ひければ、世上一統皆正直實銘の

者ばかりになり、誠に風も枝を鳴らさずして、戸ざさぬ御代と目出たき春の御なぐさみ、新板ものの仲間入りとはなしぬ。

「なぜかくさめが出ると思つたら、いつの間にか己が噂を書きをつた。」

天道浮世出星操　終

怪談筆始

十遍舎一九畫作

序

怪力亂心を語らずと雖も、太平に武を忘れざる強い者の親玉に、剝ぎ取られたる化の皮、譃の皮をつぎたして、棒ほどにする針の先、尾に尾をつけてわいやわやつと、縫つたは何ぞ、お子樣がたへお年玉の巾着を縫ひあげたと爾云ふ。

辰の初春　十遍舎一九誌

昔を以て新しとする化物の趣向、みな樣御存じの取用来事、思ひのまゝに化物どもをいためさらし、此の後は決して人間に仇は致すまじきと、各より連印の證文を取り、其の上故郷へよき話の種とわがまゝ八百を言つて、見越方に逗留しければ、皆々入れかはりたちかはり、お髭の塵をとりたゝに

もてなす。

「先生も此の世界はあらまし御覽じたが、化物の芝居へはまだお連れ申さぬから、明日は此のお禮で出かけませう。」

「おかせ、すつこ此方へ出さつせえ、たばこが無いと酒が飲めぬ。」

「旦那へはまだ上げたい物がある。」と、かの唐人料理はきつい物さ。」

公平は、西の海に長逗留して色々な見物しけるが、まだ化物の芝居を見ぬ故、是れも故郷への土産と大勢にいざなはれ、丑三ごろより出かける。

「公平なんどと云ふからは、牛蒡の化物だらうと思つたら、人間ださうな。」

「アノ人は化物とは見えぬが、たゞし見えぬ所に化物らしい所があるかしらぬ。」

「旦那もし、向うから來る振袖を御覽じませ。あなた方の御國にも、あんな代物は澤山ございますまい。」

「もうやぐら太鼓の音がする。」

「今年は蔦屋の化物雙紙が飛んだ評判だ。」

公平は程なく芝居に至り見れば、此の世界でも忠臣藏は流行と見えて、與一兵衞の役に縞の財布、

定九郎は傘の化物、手負猪には何も化けるものが無いと見えて、石橋の牡丹の花が猪になつて一散に飛び来ると、切幕の内より鐵砲の音がすると、扨は勘平かと思へば、やつぱり鐵砲の化けたのが斧を著て出る。

合方は日本にかはらず、チ、チン〳〵、テ、、、テン〳〵。

猪と獅子この間違へはそこが化物、これらは此の内でも大當りなり。

與一兵衛「これはなんでは御座りませぬ、縞の財布に化けたので御座ります。」

定九郎「おきやアがれ、己が蛇の目の黒い目で白眼んで置いた、金があるやうだ五十兩ぐらゐか、命に助けてやらうから、首ばかり置いて行きやァがれ。」

「もしこゝに、紅葉の化けたのは猿丸であるか。ハ、、、〳〵、、〳〵、〳〵、馬〳〵なことには、さう申しました。」

道具方も皆化物ゆゑ、引道具などの時は手を引き合つて歩くゆゑ、道具の加減が違ふと云ふ事もなく、さりとは重寶な事なり。

石燈籠「鳥居は先へ行つて居るのか。」

「まだ己らが出ないうちに、仕度されを打ちやすがる、乗つた番くるこさせた。」

見越入道は、心安き役者の部屋へ、公平をともなひ來り、樂屋の樣子など委しく見せて、皆々へも引合はせる。

『ちくらの沖では、平家方の幽靈が集まつて、素人芝居かはやるさうだ。』

「イヨしかけと己をたゝきにはめるさ。」

公「此の次はなんだの。」

立役「是れから猫と杓子の道行で、天狗の立てしが面白う御座りやす。」

女形「コレ、だれぞ表方へ行つて紅と紙を取つて來や。見越さんおゆるしよ。いつそ今日はなぜか、ばけにくくてなりやせん。」

化物の世界にも、吉原のやうなる草原と云ふ郭あり。公平は見越にいざなはれ、芝居歸りより直に草原へとうかれ行く。

人足『お客人、駕はどうだ。コレ底の拔けたやつを、二三ちやうこしらへて貰はう。』

化共「前かたは駕にも足がついて、自身が手に乘せて、歩きやしたが、それでは駕かき手合が上つたりだから、今は籠の化けることは法度になりやした。」

女郎屋の屋根には、用水桶に藁帚の化物が居て、浮氣手合を、ふつたおしやうに招いて居る。

「さあ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵。」
「駕かきの先棒に提灯は聞えたが、釣鐘の後棒とはこじつけたの。」
ヤッサイコレハサノ〳〵と、見越入道うしろから首を出して、駕の両肩を助ける。
「駕籠とやらが見たらば、首の骨が強いと云つてはあるだらう。」
「なにかんしき事あり、化物仲間にては、目が一ッあるが二ッあるか、鼻が曲つてあるか、口が上がつてゐるか、兎角無風な顔をよい容色だと思つて居る故、公平を見て、
「すゝ〳〵嬢のまんざらな人が来た。」
と云つて人造子供の笑ひものとなる。
見越入道がはからひにて、公平はまはらやのあやし野と云ふ花魁をあげがひしに、此の君近ぶ方なき全盛にて、強勇の公平と聞き、少しりきみの筋にてふり付ける。
「幕の内でも取りにつかはしませうか。」
「いよ〳〵〳〵と云ふ音がしたから、花魁が来たかと思つた。」
「二ッ目上りなされませ。」
「公平様にお噂ながらきゝまして、此の世界はいかなる御座りますから、何卒首しゝお頼み申し

緑 亭 新 作

たがいいと、内證からもいひつけやした。」

「おめへ方もよく思つてもみなんし。如何に公平さんだとつて、あんなに太平樂を云ひなんすな、そばに聞いて居ると餘り智慧がねへぢやァおつせんか。なんぼ私らがやうな女郎でも、いきはりの無いもんだと、傍輩衆に思はれるも馬鹿らしうおつすよ。そしてあんなに目許なら口許なら、何處に一ッも云分のない不景氣な男でおつさァ、私やァしみ〴〵好きんせんよ。好かねへぞヨウ。」

「御前より外に、あの客人へ出す女郎衆があるもんか。今宵ばかりだから、どうぞ〳〵と云つておくんなんし。」

公平は、女郎にふられたるををかしく思ひ、退屈の餘り廊下をぶらついて歩き、座敷々々の話を聞いてをかしく、又内所の方をのぞき見れば、女衒とおぼしき化物が幽靈を連れ來りて、何かひそ〳〵相談をする。

女衒、鬼幽靈をちよろまかして、來り相談する。

「かう云つちやァ惡いが、此のおむすも鼻でも倒に付いて居るか、口でも耳まできけてあるとか云ふ代物だと、又大分話せるけれど、何を云つても三十二相揃つて居ると云ふもんだから、ねうちは無いと思はつしやい。」

「此の作者、おまへにばかり口をきかせて、己はだんまり／＼、大事ないにしなつた。」
作「せめて色でも黒いと七難をあらはすけれど、其のくせ雪の肌だから十年きつて五十兩は、あんまりうまくもねえ奴さ。」
「オヤ／＼、あの人の顔は何ともない顔だよ。不景氣な。」
至「何だ己が國で見た、鬼坊主にそのまゝだ。」
な「私や、あしのやうな、目の一ツある片輪なおかたにあひんすとは、冥加に叶つたのでおすよ。」
至「己もおめへの樣な、じゝむさな女郎衆にまだ、お當つたは、大きな仕合者さ。」
た「なしやア是れかね、外の女郎衆に惚れつきなんすと、人間に化けてとりつきやすよ。」
公平は、化物仲間にとつてはやされてつけ上り、ふと慾心をおこして、何卒面白き化物を二三人もらつて故郷へ連れ歸り、見世物にでも出したらば、大金のつかみ取りと心にうなづき、まて國許へ歸らんと見越へねんごろに暇乞ひして、
「何卒手下の化物の内二三人、貰ひたいもんだなう。」
と所望すれば、見越も手ごめしたる事なれば、いやともいはれず、さりながら化物でも頭と頼まるゝ程あつて、外の化物を公平へやりては世間の聞えも惡しと、我が子の三ツ目と一ツ目を公平にくれてや

るつもりにて、泣く〳〵其の由を云ひ聞かせ、得心させて別れを惜しむ。
「何卒来年の厄ばらひのたよりに戻つたがいい。」
「今度から云ふ事を聞くから堪忍してくんなせえ。己ア金平さんの所へ行く事はいやだ〳〵。」
「父様母様のお顔の見納めだ。悲しや〳〵、何卒私ばかりやつて、弟は内に置いて下さりまし。」
「かう云ふ所を近松余七に書かせたい。ここの切と云ふ場だ。」
「お荷物は背負へ積みました。お静かにお仕度なされませ。」
「だん〳〵世話になりました。ちとあの方へ来さしつたら、必ず訪ねて貰ひませう。」
公平は二人の子供をもらひ、つゞらへ入れて先へやり、其の身は大勢に送られ、故郷へ帰りける。化物ども、心の内には胸くそ悪く思へども、表向は何げなきおはなむけと行列をたて、西の宿より箱根まで送り、それからこつちへは来ぬとの事なり。
「餘り拍子にのつて首を振つたら、頭痛がして来た。」
「手代来ねえか。ちつと首を引つこめて休みてえ物だ。」
「己が首はべちやアねえ、まなし指と云ふもんだ。」
「コレ同役、ちつと此方を向かつせえ。鳥毛どうし話をしながら行かう。」

「イヤノ＼話をすると、ヨイヤサコレハサが云はれねえ。」
「金平様のお通りだ、さきのけ／＼さきのけろ。」
金平は二人の子供を宝の如く、臨時の古網にふかせ葛籠へ入れて戻り、何でも金をまうけんと、直にそれ相に續りをつけて開帳なしけるが、手付けまでせしめて葛籠の蓋を開けて見ると、不思議やかげろふの如く消え失せたり。

扨こそ一旦はまゐりしと思はれつるをしが、いや／＼よく思へば我が慾心より事起り、見越親子が此金平、化物までへ仲間の義理をたて、外の者に我が子を見かへてよこしたる心底、神前の誠にや、昔の西の海に二人ともに立ち歸りしと見えたり。道すがらも我が身ながら恥かしき次第なり。」と先非をくやみ、是れより化物をいぢめる事をやめにして、おとなしく目出たき春を迎へける。

怪談筆始（終）

十返舎一九

作者根元江戸錦

櫻川慈悲成作
歌川豐國畫

序

十まい[illegible]金のかはり[illegible]紙[illegible]して
ひつじの春の[illegible]金にせん

蒼　陽

今は昔足利御時代に、大[illegible]御建立ありけるが、大[illegible]彫刻[illegible]ずに、[illegible]下絵
[illegible]元信に仰せ付けられ、其の[illegible]左甚五郎[illegible]、両人有[illegible]
仕舞[illegible]
早々元信下絵をつけければ、甚五郎[illegible]、両人にて様々手をつくし細工しければ、[illegible]の内よ
[illegible]に魂入りて、[illegible]向にしてもらひたいの、尻尾をぐるりときりゝとこ

じ〳〵と巻きたい、前足はぐいと思入れつんだして欲しいのと、龍は細工の内やかましい程のごみを云ふ。「實に名人兩人の事故かく有らんと存じ候

甚五郎「私がいふ時は何でも古法眼様、花やかに御彩色を御願ひ申します。」

元信「龍だまつて居ろ。己がえいやうにしてやるわ。」

あきれ「此の龍は色々の望みを云ふの。先生が御心まかせにして置けばいいに。」

甚五郎「何でもよ、念をせんごと望むなら此の節だ。のぼれ〳〵。」

甚五郎が細工にて、龍はあら木に漸う出來上りければ、龍はひとり出で飯ごしらへをして、甚五郎が所の彫刻にこそついて居る故、世間では甚五郎が所の居さふ龍は、よく働く居さふ龍だが、鼻が大きいが思ひやられた、爪が長いが鱗まで直せばよいにと、兎角世間の者が噂するゆゑ、甚五郎も何卒早く仕上げてしまひたいと、せいを出しける。

「此の雲を七ッ彫つて、此の岩を征ッけると上りだ。それまでは飯の世話をしてくれろ。」

「一龍年もおまへの所の居さふ龍さ、他方へいつても龍のむきは知らず、龍に立たぬからと暇でも出されて、又龍人者となつてはなりません。」

あらまし彫り上りければ、龍は段々しやれ者となり、其邊をそゝり歩きければ、次第々々に出來上

る事や出来んなれども、同じく龍の真似なんぞしてそこら歩き、なんでも見てはへんな顔をするゆゑ、見る人お
それ〳〵此の評判よければ、甚左衛門吉法眼、龍に度々意見しけれども、龍も雲も岩も思はれぬ面白く思ひ
て、甚五郎が目を忍び、こそり〳〵とぶらつきに出でける。
「おや〳〵龍に角が出たよ。早く逃げな〳〵。」
「是はたまらぬ。あの爪を見たか〳〵。何の事はない、鳶口のやうだ。」
「こちらの龍ですへ、こはいことはなし蛇ののたくだ。」
「日本一龍や、土弓でも引くべい。」
「甚。雲山、おのしが顔は、ふだんから唐の芋のふかしたてのやうだ。」
甚左衛門は、わたりの龍のぶらつきに出て人を驚かす故、今は意見のしやうもなく、吉法眼と相談して此
の龍を早くこれからは上げ、天竺へかけ出しまうが良いと心得、元信が方へ来り此の事を頼みける。
吉「龍にはわれもかうも致されませぬ。何分彩色して下されませ。」
元「そんなら明日より彩色してしまひませう。貴様らもこれで安心のかたまりだ。」
元信翌日龍にはるかに、数多の彩色に塗り入れ、そこらおちうを掛け歩きし故、早速彩色かけてし
まはんと尋ねけれども、龍も雲も岩もいづくへか行きて見えざる故、占ひを頼み見しとおほせしける。

雲曰く「何でも東西南北の方を探して下さい。」

甚五「どうぞ足どめをして下さい。」

足どめの祈禱にや、漸う龍もさがしあたりければ、甚五郎古法眼は雲や霧をもとらまへ、我が家へ引きずりかへりけり。

甚曰く「龍けんしんして下され。此のとらまつたなりを御覧じませ。」

雲曰く「やみくもに逃げようと思たに、くもなくとらまつた。雲がつぶれる。」

甚「おのれはどこに居をつた。大きに氣ばかりもませたな。」

龍曰く「ハイ／＼、私は、役の行者樣の腰かけになつて居りました。」

甚五郎欄間をとり仕立てければ、古法眼元信、筆を以てうんけんの彩色手をつくしければ、龍はあら木でさへも飛びあるきたがるに、事も見事に、彩色しければ、人間でさへよい著物を著ると出歩きたがるもの、龍見事に彩色され、どうも出たくてならず足をもぐ／＼するを、甚五郎逃げられてはならじと鑿を以て打ちとめけるが、まだ足をもぐ／＼する。

龍の曰く「己が體はとんだ美しくなつた。五月の青龍刀と來てゐる。」

雲の曰く「此のうんけんで、ちとしやれかけてえわエ。」

岩の曰く「己も此の様に美しくなつた時、ちと出あるきたい。」

古法眼の彩色に見事になれば、たちまち甚五郎がとめてもとまらず、かすがひ釘をそつと放して、

「皆こい〳〵。」と、うんげん彩色の雲脚を伴ひ、いづくともなく逃げ行きけり。

甚五郎、元の二體雙の欄間の龍、今逃げられてはならじとて、あとを慕うてゆく。

龍の曰く「此の様になりが美しくなつては、内にばかり居られるものか、兎角出てあるく事だ。氣が晴れていいなう。」

南無三龍とりにがした。

「龍やい〳〵。雲やい〳〵。岩やい〳〵。よい〳〵わい〳〵。」

かの龍は思ひのまゝに飛びあるきければ、今は體も足もつかれはてて、よろ〳〵と富士の裾野へさしかゝりて、頭向になつて倒れければ、富士のいたゞきより出だいだら法師、此の龍の有様を見て、「是れはよき織物とならんこと」と、其の時此の龍のかたちを色絲にて唐人に織らせ、御多葉粉入、はな紙入に致されしより、蝦夷錦といふ物始まりけり。されば實しいうそであらう。

「是れはいい龍だ。爪を五ツ爪にして、三度提の多葉粉入をこしらへたい。」

蝦夷錦の始まりも案じて、花咲く春の新く草紙にまじめに成つて、作者權現江戸錦に示し、噺の

様な噺を、さあ〳〵御覧と、目出たくし。

作者根元江戸錦　終

竈將軍勘略之巻

時太郎可候(葛飾北斎)畫作

西の國百萬石の大守、名を富士盡明胸と云ふ大將ありて、生質とりしめなく、日夜奢りに長じ、好淫亂酒に耽り、食は山に盡し海に漁捕り、榮耀に餘り、近習の者に云ひつけて餅の皮をむかせ、石を抱いて深き淵にのぞみ、薄氷をふませ、牡に馬を乗りかけさせて、其の危きを樂しみける。

次第に奢りを極め、金銀を湯水の如く使ひ、横に車を押させ、臺所にめつぽふを舞はさせ、家中の面面、土用布子に寒帷子にて相詰めける。此の時百の口を十六文抜いて通用させんと評議する。

臺所奉行小使丁太一年と云ふ者、忽ち變心して此の山を悪取の城へ内通せんと、二一天作が方へ一[illegible]うし遣る。

[illegible]東[illegible]大將小鍋燗守[illegible]、目頭鹽胸が[illegible]を憎みければ、丁太が内通時にとつて吉相と大いに喜び、一いで〳〵せきばんに押し詰め、一責に取立てんに落城は此の時を過すべからずと、焼味[illegible]、[illegible]少將有兼の方へ後詰を頼み、[illegible]父[illegible]の[illegible]取て使と

して、諸國へ軍勢催促にぞ出されける。

『慾の川深きときは算盤橋を架け、空鐵砲を放さばじやうがの幕を張らせ、流るゝ質には利息をとらせ、八ヶ月限りに落城させん。兩人急げ／＼』

斥候の兵者、傍の方るから天下をうかゞふ。

麥麹少將有兼この由を聞き給ひ、其の要害を堅固にせんと、利分の石垣高く、慾の空濠深く、其の身は三重の火燒櫓に登り、凍えたる武者には辻番に屆ませ、無鐵砲に鼻藥を買ひ、五分でもすいたる處なければ、今は心安しと糟糠院の貧窮阿闍利を召され、貧乏神に祈りて盂蘭盆と正月と一同に祭り、此の時困窮九年を改め、勘略元年と稱へける。

糟糠院貧窮阿闍利、盆と正月の祈りをせんとたんせいをこらす。「禱けは損だ馬鹿者だ。其方はうんつく高いもの、勝つたら何處でも價がさがつた、ほん／＼／＼は正月ばかり」と祈る。

廣胸のたんじふの櫓見ゆる。

すは一大事と聞くよりも、先づ一番に冷田勘平朝起、吝嗇坊慾心は安達が原に陣をとる。練米黨の飯櫃に大玉杓子の指物、冷飯太郎寢安と名乘り、尺長寄を切つて落し、手の窪の口々を塞ぎける。闇屁空太郎胸張は鳩胸を通りかね、下ッぱらにぞこたへたり。

手鼻助兵衛折好は鼻水橋に引返す。抜手綿太郎行末は天徳寺を固めつゝ、鼻の流れに下馬の轡を濡らしつゝ、利息を固め、陰嚢の越中太褌はいしこし山に陣を張り、一丈大番庫鑿也と名乗り、紙水不請と書いたる二布の大旗眞先に押し立て、厚紙の軸を見きりにとり、總雪隠の裏門口を塞ぎけり。

廣胸の諸富等、さんだんの茶力茂木を引き、立てごかしにせんと待ちかけたり。

爭取勢の先陣居渡五左衛門古金と名乗り、胃皮面の皮財布萬歯に背負ひなし、纏持籠の指物九尺二間の天秤棒元手詰りにかい込み、寄せ来る敵を度量にかけて見倒さんと稼ぐに追ひ付く貧乏人、何太宿六助力奪目、鉢智補乞、太郎兵衛歩行、食也不食也の面々、爪に火燈す黄昏時二稼ぎや稼ぎこと々飯の箸を置くべき隙もなく、燥りに燥つて押し寄する。屑波五左衛門古金、標原の先陣たる。

「浪宅が古着の褻れ次第、目にもの見せん」

懸取勢おし寄すると聞きしかば、廣胸の陣中大きに騒動して、實大將日比間正道方、錢屋小路に陣を構へ、幕をきつて留守をつかひ、居喰不仕と書いたる看板眞先に押し立て、當時要らざる浴衣の肩を一重にたゝし、一拂ひに追つ拂はんと議せられける。

上下[illegible]、觀世縒十文字にとつて打ちかけ、上下したる上帯引き締め先陣に進んで、立てきらんとこ進みけり。

『たとへ黄金の山に登り素鐵砲を放すとも、さうは淀の皮の陣構を蓄し、鴨の川を渡さば下馬の流るゝを待つて、よりよりに引き倒すべし。』

御臺所の住み給ひし勝手口と云ふ者は、少し要害はかなはしくも見えざれば、此處へひたひたと押し寄せ、大庭に鉄炮の玉藥強く彈き立て、とりはたりければ、俄の難澁上を下へとさわぎける。日頃御臺の傍に仕へける壽江の姉妹は、鏡山に陣を張り、大前の鬢指をまはせ、これに手弦を張り、鎬を削り、櫛笥手箱の面々、同じ小枕に討死せんと働く。

壽江の姉妹、手當り次第手道具を投付け防がんと雖も、つひに沓波左右衛門がために見倒され、はかばかしき軍もなく、おしまひく。

御臺所は思はぬ難儀に遭ひ給ひ、幼稚きときに從ひし乳母日柄介も散々になりければ、かかる時ひきうつと云はれんも口惜しく、小褄かいがいしく自ら手鍋を提げて、思はずも肌薄にて落ち行き給ふ。乳人巻代は御臺の御供まうし、手にたつものを打ち殺し、寄せ來る憲取を内拂ひに拂ひ、やうやう一方を切り拔け、我が古郷へ御供する。

『是れからは其方一人がたよりぞや。』

「浮き沈みも世の習ひ。今夜は天徳寺へ志し、反古張りの辻番で夜をお明しなされませ。」

曲輪がみけん山の要害、いづれも落城する。

寄手は搦手より亂入して、雑兵急に取り立つれば、何かはもつてたまるべき。質は流れて柳原の軒をふるけ、家財は積んで道具屋の軒に曝されたり。されば今まで要害と頼んだる金銀の山も、何時しか借錢の淵となつて、浮世を渡る言葉の橋も中絶えて、まゝの川の船出さへ艪櫂も廻らぬ折柄、弓張一人とつて返すを見てあれば、日陰町に取つて、大汗になつて駈け來り、事の難儀を告げける。

往生寺の寂滅法師、やけのかん八踏み止まつて働くといへども、みな／＼借錢の淵に押し落され、浮む瀬さらに見えざりけり。掛取勢毒矢を射かける事火の降るが如し。寂滅は當の違ひし大槌にて、敲き付けんとあせる。濟方かくと見るより、きかぬ木の楯を築き、内所の幕を張り、人を踏臺にして下知をなす。斯かる所へ[illegible]、[illegible]の[illegible]耳元に響き、ごとう三八日爲の一六、新手を切り替へ押し寄すれば、さしも押し強に固めし備へも大崩れにくづれ、終に落城とぞ知られける。此の時に方つて、心弱き者は踏んで踏み付けられ、[illegible]れたるものの數を知らず。

「サア／＼かなはぬ場所、御腹をお切りなされまし。」

御家來共も前に落ち給ひ、皆々拔けつ潛りつして防ぐと雖も、日に餘る[illegible]に皆々討死しける。斯くてはと[illegible]、[illegible]の櫓に登り、工面才覺の[illegible]を以て此の[illegible]を切拔けんと、後

陣に拵へし利合分一金高、同じく分二濟銀、同じく分當内濟、兄弟三人の強者に誉を傳へ、其の身は僅かの家内を從へ、心細くもとつたか見たかの由聞ふり遣らずの森を忘れ、鬢を極めて逼塞する、此の所は七轉八起と云へる難所にて、下り坂には捨てる神の社あつて、節句前には後の祭とて寂しき祭禮あり。昔人よい／＼と見れば待遠く、上り坂には助ける神の社ありて、物前といへども爰に御神輿を据ゑ、一期の大はらひ滞りなく、賑しき祭禮なり。此の坂を次第に上れば、漸くに本街道に出でて、おくにの松抜を垂れ色を變へず、萬代不易の城郭あり。闕子鳥ときよ／＼と鳴く。廣胸は此の難所を志しけるぞ、けなげなり。

斯くて搦手の合戦ひどく、はや落城の由聞えければ、大手の大將白壁大藏太夫貴居に一まづ時節を待つて然るべしと、急ぎ表間口を引き拂つて小使の雑兵端錢藏に申し付け、表反りなる松板に一首の歌を遺し、家内密かに引取りける。

當分の内商賣を相休み、まづ此の裏にまかりあり候。

かくとも知らず懸取勢、屈強の弓張を選み出し、口先を揃へて責め働かんと、紺絣紬の風呂敷鞘首にまとひ、白き皮のはつちをはき、石割と名付けたる太く逞しき雪駄に跨り、或は京談國言葉、思ひ思ひに鬨の聲を上げて押し寄せしが、分散裏住が計略にかゝり、百貫の代に編笠傾け、大倒れに

倒れて、はふ〳〵の體にて退きける。

斯くて廣胸の御臺覺悟前、乳人儘代が介抱にて、危き場所を遁れ出で、貧樂寺の片ほとりに忍び暮し居給ひしを、屑波五左衛門が組下のもの是れを見出し、覺悟前を討取りにせんと大勢付け込みければ、乳人儘代、女ながらもいろ〳〵働きけれどもかなはずして、終に身の皮を剝がれけるこそ、果敢なけれ。

「身の皮はおろか、顏の皮を剝かれても何とも思はぬ、此の苦しみも覺悟前樣のお爲めぢや」

「まゝよまゝのかは。」と歌ひし唱歌もこれなるべし。

儘代は覺悟前を戸棚へ匿し置き、身の皮をむかれ、其の上身を切賣りにして、お主へ忠義を盡す。

爰に、日頃廣胸に愛せられたる野幇間組の張本、世中承知之助呑据と云ふ不敵の土手者あり、廣胸が落城のよしを傳へ聞き、言ひ甲斐なきことに思ひ、太鼓を以て軍勢を集め、一番槍手を以て惡取勢を踏み倒さんと、羊羹色の布具胸かぎりに著し、同じけの頭巾目深く、さやなりと名付くる一刀をさし、[illegible]いたりし年増に、鞍がへさせてぶくりと乘り出し、裸體百貫目の大砲小筒にかゝへ込み、時に[illegible]たりしが、[illegible]切れざる物前を、辛抱させんと勇みに勇みかける。

「[illegible]、[illegible]永代かけるやァ遠からぬ、急げ若共、後でお茶漬たべるのだ。」

ぞ、私が太鼓の役目、併し此の太鼓も親の罰あたりでなければ、ほんの音は出ませぬ。兎角するいふ物かの世の中で御座りまする。」

馬ぞ、平気にて、ひゝん〳〵と冷笑うて居る。滅多に手綱のゆるされぬ奴なり。

野幇間の面々は素肌川を越え、七面堂の後なる太ッぱらに討つて出で、中にも呑揃の先陣滅多矢太郎と云ふ暴健者、あてなしの鎧に身を固め、腕切と名付けたる大刀を佩き、食客の栃面棒火の車の如く打振り、懸取勢の眞中へ會釋もなく駈け入れば、お先に從ふ投げやりの面々、やりばなしに踏み倒し踏み倒し、爰を先途と働きける。借錢に槍を用ゐるは、永くつゞかけもりにするといふ心なり。勝ち誇つたる懸取勢、思ひもよらぬ横合より、滅多矢太郎に借りたてられ、其の上投げやりにやり流され、一足も溜まらず大倒れに倒されけるぞ、心地よき。又しても〳〵、にやりくやりて突き出されゝ一向はかやりのせぬ、思ひやりのない事だ。中にも手厚き懸取は、おかま返しにとつて返し、搦めて取らんと思へども、皆々始めの手綱に恐れ、夜の明けるを待ちて、各引きとりける。

懸取勢大いに敗軍して、始めは廣胸を大將の懐子と侮り、十分に責めはたりしも、呑揃が手強き手綱に懲り、一まづ息をつがんと、呑掛山に屯する。

諸軍勢退屈の折を伺ひ、廣胸の草履取志賀内と云ふ者、下僕ながら忠義の者にて、女房お鶴と云ひ

合はせ商人となり、又は辻君となりて身すぎとする間に出て、密かに敵の陣中を窺ひ、風雨の案をひき起さんとする。

吞鷲がおつ倒したる掛取帳、すこし吞掛山に息を休むる折から、鬨を咄と作り、藤棟の下垂に白皮のぼつた、石割の兵鼓を置き、吉田番手代の後藤田馬之助常盛を大将と名乗り、直なる時に黄金の鼓を打、張物うはの空の上へつなぎ、差し引きもしてこそ勘定したり。

家に相道の事なれば、みな〳〵大いに敗亡して土に頭を掘り込み、受取の印形まで取られければ、既に降参の旗もひける。やう〳〵はれて時が渡り、懐中の出来次第にて呼める。

金は商売の往に付けて、一人も残らず出陣の旗を揃へ、家内より之を施もしければ、嘗ての新かし、ある日を以て、日面坊と名高坊の中へ山の神の手段を加へ、三宝荒神と申じ給ひ、「互に軍は左分をなさしめば、此の後遺恨あるまじ」と、両方へ細々と示し給ふ。

「共に良師となることは無用、寄せて複数を業し、此方の仲に思が不当にして、異国の強者にあるすぎる、とを頼みて衛にて、聞くとも負ることはなく、世が共に無すのない身の上となるべし。取財は此、本の清実に、財り人の富は是非に楽しむべしと」

一廣胸は、其の成りに出で、富んで奢らずること肝要なれ。三箇の

形を二度拜もして、上面の違は尚要心すべし。仕損つた後にて南無三寶といふとも、何の益かあらん。

合點かく。」

香　代

不調法なる戲作仕り差し上げ申し候、是れにて御間に合ひ候はば、何卒御覽の上御出板可被下候。初めての儀に御座候へば、あしき所は曲亭馬琴先生へ御直し被下候やう、此の段よろしく奉願候。又々當年評判すこしも宜しく御座候へば、來春より出精仕り御覽に入れ可申候。右申し上げ度早々不具。

十月十日

蔦屋

重三郎様

竈將軍勘界之卷 終

貧福蜻蛉返

十遍舎一九画作

やんまつる蜻蛉島の此ころは、商賣に蜻蛉日向無く稼ぐ時は、忽ち蜻蛉の目玉の如く、大いなる身代となるべし。若し一心蜻蛉返りをせば、終に借金の淵の川とんぼうから、果かく飯の赤蜻蛉、作者鶴毛の先に蜻蛉を止らせて、動かぬ所を、貧福の蜻蛉返りとやらかすのみ。

文政十二己丑孟春

十遍舎一九誌

鬼は外福は内と、何處の家でも節分の豆撒、此處に貧家の權八といふ貧窮者、一人ぐらしなる世間並に一合ばかりの豆を煎りて、「鬼は外へ、福は内へ。」と、大聲にてまき散らす。門の戸をぐわらりと開けて、何とも知れぬ異形の者、すつと這入る。權八驚きながら、恟を見れば、角が生えて虎の皮の褌をしては、是れこそ鬼といふ者ならん「彼の様な、鬼はそとへ。」と言ひけるに、何故内へ這入つ

たことと言へば、彼の鬼が打笑ひ、ハヽヽヽ、己れ常の鬼だと思ふか、己はあまのじやくだ。おれが一體は外へ／＼といふ故、其處で意地惡く內へ這入つたのだ、といふ。あまのじやく鬼は色々と權八の內へ上り、何處でも鬼は外と言つたから、是れからもう此處の家は動かれぬ、と横柄な言ふ引籠り出して了つた、と何をしてやる。權八呆れ果てて居たりしが、何でも此奴は意地の惡い奴だから、よしよし仕方がある、と、あまのじやく鬼の前へ手をつき、扨々貴郎があまの邪鬼樣で御座りますか。世間にも鬼神と申せば神樣と同じ事なれど、些と御願ひが御座ります。私は何うした因果やら金が澤山で置き所に困ります。金満貧乏が好きなれども、どうも金が溜り傑ねます。貧道近所の手前遊んでも居られず、せう事なしに商賣に出ると、つひ儲けて歸りますには困ります。何卒これから商賣が不景氣になりますやうに、そして損をして金の減りますやうに、御守りなされて下さりませ、と、あまの邪鬼に平頼みに頼みける。

「戸をあけてくれや。鬼の這入るのは、かけ取りの來るのよりはましであらう」

「其あれが眞の生きた鬼だ。頭からがり／＼とやらかされぬうち、逃げたいのみの諸白々々」

「ヤツチヤこれはさ。

權八が商賣は紙屑買ひなり。何卒商賣に損をして、貧乏になる樣に守つて下されと、あまの邪鬼

を積みし事なれば、其處があまの邪推にて、「どつこい左樣は所の支。貧乏にしてくれろとの積みだから、意地惡く物を持になれる樣に、守つて遣らう」といふ心意氣は、あまの邪推の持前なり。其の所爲として此の頃は、權八が家に何を買つて來ると其の品の中に、既に持つた物があり。ある時に小判の包みを夜具の間に納めて隱して居る處、何程高く買つて來ても損をするといふ事は無く、一文なしの權八夫婦をば、人も出來て、面目がおつ…になりける。

「此の頃はまことに目がまはると思うてたら、道理こそ此樣なものが這入つて居た。是れは妙でござ(ぜ)すのひものだ。あまの邪推がおこはにすりかへたれば、己が一生の出來であつた。」

權八又あまの前に申しけるは、「貴郎の御蔭で、漸々貧乏にならずまでは御座りませうが、何うも捗々しくは參りませぬ。此方は何も氣違ひの荒い女房を持ちたる御蔭で御座ります。それも親許へ此方から足前のいくらかを、貧乏しの方から遣はしたい者で御座ります。仕度金は幾何でも遣はしませうから、何卒身上の爲になりますやう、女房を持たう御座ります。此の願ひの叶ふやうに御守り下され。」といへば、あまの邪推、「心得た」と口には言へども、其處を意地惡く守りける驗にや、權八が出入りのさる所の口利で、醜の嫁と來て一に權八、其方も此の頃は女房を世話する樣子だから、己が妾を此方の女房に遣つてやる。其代りに支度金は附けて遣る、田地を買つて一番えてあるから、

「俺に五百俵宛米が來るが、是れからそれも此方の所へ遣らう。そして彼が小遣食扶持も、當分此方から仕送りませうから、こりやうんと飲込んで貰はにやならねえ。」と、甘い話に權八はぞく／＼する。あまの邪鬼權八が頗る意地惡く、金のついて來る女房を持たせ、親許へも仕送りがしたいといふ望みだから、そこで彼方から米を寄越す親許を授け、身しやうのためにならぬ女が持ちたいといふ所へ、恐ろしくあぢけ無い利勘な女房を持たせたから、さぞ又權八が困るだらうと、あまの邪鬼は心に可笑しがる。

「貴君のおかげで女房は持ちましたが、どうもまだ金がへりませぬ。子供が出來ると又ものが遣ひますから、何卒錢のいらぬやうに病身な子がほしう御座ります。隨分惡事災難の來るやうにお守り下さりませ。」

「よし／＼、のみこんだ／＼。」

「それも早く死んではなりませぬから、何時までもひこ／＼患つてばかり。そして疱瘡も重く、同じくは目の潰れた方が猶善う御座ります。何でも身代を皆入揚げる位の病身な子の、出來ますやうにお守り下さいませ。」と、あまの邪鬼へ賴めば、軈て小僧が出來た。所が途方も無く達者で蟲氣も無く、風邪一つひいた事が無し、勿論疱瘡も痲疹も、遊びながら何の事も無く、して仕舞ひければ、夫婦の

喜び顏を爲し

權八あまり邪慾一文申しけるは「色々致せども目に見える程どれも減りませぬから、ぐつと張り込んで、思ふさま散財して見せう。それについて家來も入用、抱へねばなりませぬから、何れ氣の利いた者で、金を能く遣つて下さる、わたくしの手代が望みで御座いまする。肝心の番頭の處分しようの無い、不埒者がよう御座りますゆゑ、さして番頭は當番で、一文も儉約にします。何卒左樣な者を抱へ置きまする樣に御守り下されたく」と三匠[?]へ言ひ、早速承知の樣子であるが、權八して通つたところに當人で居る所、外から奉公人の事をいつて來る番頭は、他の國境[?]にて、萬事この人世話を燒く事に好きなればとも、内では大勢人も使ふ身分の、とかく番頭手代がこの隱居に世話をやかせます。隱居とかく世話好きなればこそ、結句内では自由に世話も燒かれぬから、幸ひ權八が隱居と聞いて、この隱居を奉公に抱へて下されよと頼み其の身の世話を爲賃に、何方から給金を出しても奉公が仕たいとの望み、手代も、幸ひ何の息子樣で始終のため奉公させたいから、從つて下さる、仕着せ給金も無かる通りにします。左樣の頼みにて、其の僻みな實體な手合を、一文入らずに抱へる。

權八は大精[?]無類な二つの目論見を出して、又金が段々增え、番頭手代まで給金入らずに、而も皆實體に成つた手合にて、人が金を儲けて來てかけければ、ますます人にも金を貸し、兼而[?]の御用をも聞く

やうになる。又々あまの邪鬼へ願ひければ、「金が減る樣にと矢鱈人に貸しますが、どうも借りた先から利足を添へて屹と戾してなりませぬ。隨分確かでない、不埒さうな人を見込んで貸しますが、何うも返します。まさか國土の寶を唯うちやるも勿體ないと存じて、くれる心で貸して遣るので御座りますから、何卒借りた先から返しませぬ樣に、御守り下され。」と願へば、あまの邪鬼は又金の返る樣に守るゆゑ、貸したる金に一向滯るといふ事はなく、次第に金が金を産む身代とはなりにける、

鬼「宿六が金がふえるので困つて居るわえ。ハ、、、、、、。」

貧「あまの邪鬼樣、これ程にお頼み申すに、斯う金がふえては、零落でもせねばなりませぬ。」

鬼「貧乏にしてくれろと云つたから、思ひ入れ金持にして、手こずらしてやるのだ。」

權八は天の邪鬼をおこはに懸けて、段々身代よくなり、最早追ひ出しても善い時分なりと、亭主天の邪鬼へ殊の外馳走して、「扨々是れまで段々お頼み申した事が一つも利きませず、次第に金が殖えまする何ぞの報いでがな御座りませう。貴郎はなぜ私が願ひの通りにいかぬを氣の毒だと思召して、ひよつと又何處ぞへ御出で下されては、いよ／＼私心細う御座ります。何卒何時までも私方に御出で下さりませ、是れは私が一生の御願ひ。貴郎をばもう、何處へも遣ります事では御座りませぬ。千年も萬年も是非此處に御出で下されこと願へば、天の邪鬼心の內で、「よし／＼居ろと言はれては、

最早る〻程が薄くなつた。明日は早々、すい／＼のすいとこへとやりまして、夫々を叶かして遣りませう。」

『それから三年の間にも、彼は神中に因つと、申しますつもりで御座ります。』

「御子神龍を頂しますから、何處へも行きこたへして御座ります。ふ」

「もう一しう真似は格別、のゝしかみさんにたには云はれるから、もう何處へも行きは途中である、何日までも愛に居るのさ。なうかみさん。』

夫の前後に、何時までも内のことに出ておく、無様に面白くなの、足をりにし、していた貴君かすゝしかと云うまで任せ、食ひ酒し、気の毒に思いけるにや、こまん一と喜気をして何處とも無く出で行きけり。

『あれ御主の大ものを無様に出て行くなう、大なゝしかつれない御だと、うんで居よう、家の様な。」

「ホヽ一く、御に見合はれとしをさしい、貴君。何か新報させして行つたか、如り起請て付つ……お殿もに

ハ、、、、、。アハ、、、、。ハ、、、、。」

「ま、、、、」

春香書林

權八跡にて大笑ひして喜び、然し此の樣になりしも、天の邪鬼の御陰なりとて、其の姿を書かせて掛地に拵へ、お玉が池の先生に賛をして貰ひ、床の間に懸けて年中貧乏を祈りければ、次第々々に幸福よく、何億萬といふ金持となり、行末長く榮えける。めでたし〱。

貧乏に守らせたまへ天の邪鬼
富貴になるはさても迷惑　　千秋庵

貧福蜻蛉返　終

昔男生得 這奇的見勢物語

山東京傳作
北尾重政畫

序

唐山の觀物場は日本の見世物と同じなり。遊暑録話に[illegible]眼戯あり、左[illegible]組に以[illegible]あり、卧已國の熊女、徒然草の[illegible]娘、ともによき見世物なり。遼東の豕の[illegible]、世間見ずのたとへに引かれ、高時が犬の酒方は亡國の兆となる。看板にいつはりなしといへども、外面は菩薩内心は夜叉、いつはり多きは人心なり。見物の視る所、口上の指さす處、善悪邪正、都て是れ天地間の見世物にして、父親の因果は子に報い、兒子の慾は親父がぬぐふ。皆さん左様ぢや。[illegible]た報いなりけんや。京都にては四條河原、大坂にては道頓堀、伊勢は古市の[illegible]、[illegible]にいたるまで、擇出されて見物衆評、細工の機關心の苦しみ、作者の筆の一本竹、[illegible]してまた我の輕業[illegible]。且つ下回の分解を聽け。

這奇的見勢物語

寛政十三辛酉春

山東京傳誌

むかし男ありけり、奈良の京に住みて、春日屋鹿平といふ。此の人諸國を廻りて、異類異形種々雑多の見世物を買ひ出し、これを見世物にして、金を儲ける事が得手ものなりけるが、ある時つらつら思ふに、世の中の人の心は我が渡世にする見世物の如く、看板付は立派に見えても心の内へ入りて見れば、皆愛想の盡きる人心なり。もし人の心が目に見ゆるものならば、滿足なはすけなく、多分片は者ならん。是れ一ツの目の付け處なりと思ひ付きぬ。

「人の心のさまざまなる、怜悧あり馬鹿あり、善あり悪あり、鬼あり佛あり。佛あれば衆生あり。衆生あれば山姥もあり。山姥もあれば公時もあり。公時もあれば熊女もあり。斯くいつてはとめどがない。」

へび娘の見世物

此のへび娘は、丹波國篠打郡某木村に住む、狸の角兵衛といふ猟人の娘なり。

この執動き諸よの蛇を使ひ習ひ、手習や縫物を教へしも、むらむらと蛇にかき遣ひておぼえす。容色は十人並にすぐれたれど、とても親の手にはおはぬ奴なれば、罪障消滅し懺悔のたよるやうにと三ツ輪の慈悲にて、千手観音に出しけるが、ますます蛇をつかひ、時間をも過して、そろそろ稲留つかふ故、遂に一年と勤めず暇を貰ひ、其のうち酒肴の女房となり、甚だ貧乏に暮しけり。油を賣る男達なつもふなと夫婦になりしには、貧乏になる者なり。これ等古ぼんのいい見世物にて、奥山の上に蛇をつかひて見せる者の、よう覚あるなり。

「おまへは油を賣る、妾は蛇をつかふ、其の腹いで米櫃がからになりかけた、お鍋が一文ないから、此の丸絎をまげて、鍋へ入れるつもりさ。」

「そんなに苦にするな。まるぐけつらき証あれば、炊いてうれしき飯もありよ。」

「已は又、おんなの蛇かと思つて、ごつくりしたの目待のだ。」

女のちから持の見世物

女の黒髪によれる綱には、大象も繋ぐといふ。女ほど男に對して力の強き者はなし。頭のかたおけ闘をかたげ、世の見物に萬歳をかたおけるは、みな女の力なり。又ぞろぞろあれば、思はれ

りちからにあらず、皆色慾の力が出す所なり。おそるべし〳〵。

高尾は、大八車に積んたる身受の大金を、何の苦もなく差し上げて、二階の階子をのぼる。

「すがゞきの三味線に合はせて、太夫階子に差しかゝります。よいぞて〳〵。」

「此の持参金を鼻にかけたいが、鼻が低くてかける所がない。」

持参金を澤山持つて来た嫁、茶盤で蠟燭の燈を消す、これ等は皆前藝なり。

亭主の鼻毛を見ぬいた女房は、大酒を飲んで、酒樽のやうな亭主を小指の先であしらふ。おそろしき力なり。

「よいさて〳〵、己がかゝアをどつと譽めたり。」

からわたり名鳥の見世物

「猩々隠居」猩々隠居といふは、顔が猿子の如く赤く、足は千鳥のやうにひよろ付き、声の通らぬ鳥にて、何ぞといふと、息子の銭金を取つてかう〳〵と鳴く。

「己が息子はけちな奴で、碌な酒は飲ませぬ。岩田のへでなくては飲めぬ〳〵。」

「おいらんだ渡り金鶏鳥」おいらんだ渡り金鶏鳥は、金をかたむくる鳥と讀みて、一度啼く時は直に

金財布をかたむくるなり、至つて毛色美しく、頭に鼈甲の簪などさか何本もあり、胸には鴬の一つなぎ刀をかくし、晦日に月の出る時四角な玉子を生む。恐れつゝしみて近づけまじき鳥なり。

「なまけいんきよ」なまけいんきよといふは、少しも後生心なく、經よむ鳥や數珠かけ鳩を嘲笑ひ、只榮耀食ひに息子の錢をへらし、小言ばかりいふ鳥なれば、なまけいんきよと名づく。

「てしやくし」てしやくしは、ぐいのみ、あふつきり、やけさけなど云ふ樣々の名あり、遂には酒の爲に癪を發して人の厄介となる。一生羽をのばし高飛びをする事の出來ぬ鳥なり

「日待夜鳥」日待夜鳥は、鸚鵡の如く、よく人の聲色を眞似、又は三味線歌じやうるりを語ると云へども、今時の目はしかたにて、鶏の毛はかわくれるとなり

「此の間は風邪で、聲をたいそうに潰しました」

くま女の見世物

亭主が女房に毎日では、必ず家の内まにもめたり。亭主の心を見ぬきたる女房は、自ら心おこり、熊の皮の樣な天鵞絨の帶をしめ、月の輪の樣な櫛をさし、穴熊の樣に火燵に宿つて居り通人にて、我がまゝばかり云つて居る。此の樣な女ほど熊の膽のやうに、にがつく物なり。

女房に睫毛をよまるゝやうな亭主と、嘘のない荒熊のやうな女房と、ものまへにとちめん棒を引きかふ世の不養なのへら棒引と申すなり。

「節ん棒ではあるまいし、其の様にしやぶるな」

小判娘の見世物

金が敵の世の中とは定九郎が金言、金ならたつた三百兩と、梅が枝は深山きうにいふ。これぞ智慧才覺でもいかぬものは金銀の上面にて、つかふは安くまうけるは難し。難しも欲しがるはなれば、父母の為身を亡ぼす事も多し。兎角不義の財を貪るべからず、ア、金がほしくもなんともないわや。

小判娘と申すは、小大島の大黑から千鍾を取るやうなぜいの低い娘なれど、體中に持参金の小判がはり付けてある故、亭主を尻にしき、金で面をはる。金の威光の強きを知るべし。

「金にうらみはかずかず御座る。亭主の面を張る時は、七兩二分と響くなり。」

「お多福も亭主の目には、顔が小判のやうに見える」

かるわざの見世物

輕業の一本綱を渡るもあぶなく思へども、人の世の中を渡るは、それよりも猶あぶなきものなり。少しでも世渡りに[illegible]見をすると、商賣元手の綱をふみ外し、商賣の[illegible]の昔をふみぬき、[illegible]の淵へはまる事目前なり。何でも世渡りは細き川を渡る心になり、少しも油斷せず大事に思ふべし。

人間一生の輕業にいろ〳〵の名あり。

夜中の一ばい酒、よそゆかの白髭おどし、[illegible]大事の[illegible]見の綱、[illegible]の[illegible]入の[illegible]へし、[illegible]像の悪い大の字、むごひすの金渡り。

これ等ある[illegible]を[illegible]て、つゝしむべき輕業なり。

『人の世渡りするを餘所目に見れば、あぶなく見えるが、我が身の事には氣が付かぬ。アゝうか〳〵しては居られぬ〳〵。」

「犬などは四足で渡る故なほ危し。」

「あれまア[illegible]、ほい〳〵〳〵。」

「北の[illegible]まより[illegible]すれば、[illegible]方にあがはね、おぜん〳〵〳〵、でん〳〵〳〵〳〵〳〵。

靈梅よしおこん引こ」

大酒くらひ懸多きが破財布身代大がらくり

「夫れ最初先づお目にかけまするが、親代々の持丸長者の店の體、土藏造りの立派にて、軒には燕が巣を營み、表向は繁昌に見えまするが、帳場には番頭が居眠をして、手代小者は腕おしや相撲取をして遊びます。さて内證へ這入つて見たる所、はるか向うに並べたる金藏錢藏米藏か、皆からつぽうな所にお目がとまりますれば、次は中三買ひのみならし道樂息子、千疊敷の座敷にて遊びの體、數多の燭臺きらほしの如くかゞやき、太鼓末社そばからおだてしかけますれば、道樂息子うつゝをぬかし、至極面白さうに見えますが、是れも大晦日の夜分の體とかはりますれば、懸取の提灯にずらりつと火がとぼります。錢の掛けはおかはりく。」

是れを名づけて大酒食ひ、懸多おほきがやぶれ財布、身代大がらくりと名づく

註に人の心の絲のひきやうで、機關よりも猶かはり安きは人の身代なり。油斷すべからず。

「なる程看板付は立派な店だが、内證をのぞいて見れば大きなからくりだこ」

家業八人げい

牡丹餅は棚にありといへども、棚から落ちた牡丹餅はあるはひなし。富貴天にありといへども、たまほで居ては天にある富貴も来らず。果報は寝て待てといへども、橋の上に寝て居る乞食つかぶりに果報の来たためしなし。朝は早起、晝はおあきなひお茶菓子、晩がたはともし油、夜更は夜業しつぼく、なきと、一人でも八人藝の稽古にかせぐ時は、その様に貧乏な人も直に金持になる。かせぐべし〳〵。

「土佐上下の外郎売、半は頭取を乗る非引、河東浅流の豊後節、新内若竹十丈眼、ものやまの手伎、義太夫や浄瑠璃七段、大鋸でんでん囃子大用ありませぬか、八人藝の安売々々」

「さて〳〵珍らしい商人だ。」

「成程よくかせぐ。習くに習ひつい習ふたら、習ひに習ひつく家業大したんだ」

猿の狂言の見世物

猿の狂言を見て笑ひ興ずれど、猿のおもて人の、喜怒哀楽に身をつかひ、昔のいとなみの事しき狂言を見たならば、又笑ふべし。猿の人真似は猶格、古猿の尻はえへりかいない。牛夢塩いすあつけれた

どと、やゝともすれば猿を安くすれども、見ざる聞かざる言はざるなどと云つて、猿の方にはかへつてをしいほしいの慾の皮、喜怒哀樂の苦しみなく、夢我夢中にて暮す故に、人間よりははるかにましなるべし。

「人間は己に三本毛が多いと云ふが、扨々おかしなものだ。己が仲間ではたゞより外に喧嘩などをした事は無いが、夫婦喧嘩をして我と我が世帯道具をぶちこはすとは、本によい見世物だ

「もし隣の伯母さん、おまへ門口へ、人間をおかしてお出でなさつたか。」

「亭主めが人間まなこをして、かゝァを白眼めるやつさ。」

「人間の狂言はおさましいものだ。」

「これも猿公や。公が羽織は、人間のかく亂といふ色あひだの。」

達磨をとこの見世物

達磨大師は九年があひだ面壁し、尻の腐るほど坐禪して、やう／＼悟りを開き給ふ。

人の諸藝を學ぶも其の通り、氣を長くせねば上手にはならず。合點か／＼。

「達磨さんがた藝者しう、多くの中で、此の一つさとられぬ物は金と女だ。お手が鳴つたら銚子と悟

り、片手ならして一生を惜みがいいさ」
「門松は冥土の旅の一里塚、うか／＼すると此の通りだ。御用心／＼。」

おんばの國からいけどつた鼻あらしの見世物

おんば國の浜から生捕つたはなあらしといふは、顔は彌勒天の如く、總身は葦鹿の如く、いびきは嵐の如く、背には得手をかつぎ、腹中には悪い算用といふ象になり、頭は觀寐坊といふ鵬に化ける。尻は重くて石臼の如く、歯はふら／＼して虎齒のごとし。是れ主人の恩を知らず、骨ばかり惜しんで不勤めをする奉公人根性といふ、人間の皮をかぶつた獣物なり。
遂には主人のばちにて、亭主に身の皮をはがれて、つき出されたる。
「おんばどんのいけどりはうはゞみの眞似だ。どりや水といたゞいてやらう」

とんだれいはうの見世物

あたまは白髪のごとく、身はおもおもの日蓮宗者。極楽のかたの内に、罪の地獄の罪人を串にさし、是
御仏の下に、曲げふんでの火の熊手に置くも、地獄は地獄に違ひなし。神佛を信心するも、一心の置

ずなければ、利益なし。鰯の頭も信心から、飛んだれいはうの飛魚の三尊佛も、一心の實があれば利益なき事なし。何事も皆一心の實が大事なり。

「迷へば腐つた繩も蛇と見え、悟れば小判も煎餅と見える。皆是れ心の仕業なり。したが小判を煎餅とはどうも思はれねえ。」

よし陀鳥の見世物

此の鳥は、總身眞黒にて顔ばかり白く、常には石の様な蒟蒻のおでんを食らひ、あつかんを好むといふ。山海經博物誌にも、未だ載せざる名鳥なり。

「陀鳥で一ッ地口を云ひたいが、さて／＼出ないわ／＼。正月の三ッある時考へませうなどと言つて、ちやかして置くのさ。」

「はてさて美しいの、忠臣講釋の十太郎が女房と來て居る。」

鬼むすめの見世物

昔から鬼となり蛇となるは皆女なり。男の、鬼や蛇になりたるためしなし。されば女の第一つゝし

むべきは、悋気嫉妬なり。女は心の狭きものにて疑ひの深きもののゆゑ、わづかの事にも胸に修羅を燃し、心の鬼が身をせめて、生きながら焦熱地獄へ落つるなり。おそるべし〳〵。

「東西〳〵、お目通りにひかへましたる鬼、容色は十人にすぐれましたれど、悋気深きむくいに依り、心の鬼となり、蠑螺のやうな角が生え、西瓜の種のやうな歯をむき出し、舌は梅酒の大根の如く、背中には般若の様な悪影の若を生じ、気は鬼立つて廂らみこしの様に御座ります。夜な〳〵やけ酒を飲み、二十四の子を取つてくらひます。大酒にては大蛇でお目にかけました。評判々々。」

「おそろしや〳〵、いい男前だ。さうのほせては、前代未聞の鼻血の種だ。」

「三日の太一文の三里紅顔、ものを食はせずにはならない。」

「とつちは十面明は、此方はえゝ面皮だ。」

「なうらめしや。もゝんぐわあ。」

「此奴は赤本の書入だ。」

ちんぷつの見世物

「あんまり大蛸、やんやん鹿と言ふは、頭は切禿にて総身は六道の鯛の如く、白酒を飲み草餅を取つて

食らふ。泣く聲はこぼれ／＼といふ。

「いへの鼠」家の鼠といふは、頭の毛は百日かづらの如く、顔に青き筋あり。其の家に生じて其の家を亡ぼさんと計む毒鼠なり。此の鼠あら獅子といふ獅子に出で合ふ時は、忽ち化けの皮をはがるゝなり。遂には一味のなかまにきらはれに命を失ひて、悪事の尻尾をあらはし、地獄おとしにかばねをさらす事、皆毒悪のむくいなり。」

「むすこの油」息子の油は親父に取らるゝなり。此の油は何に付けても度々取るが薬なり。取りやうは針の這入つた牡丹餅を食はせ、眞綿で首をしめ、意見でおどし、お談義でつきこなし、おり／＼と油を取るべし。

「あの阿房奴、大川屋の伊吾をつゝしみならうぞ。」

「餘り油を取られて頭がふらそこ、ふらつく／＼。」

「小判のぬけがら」夕霧が文は伊左衛門が小判のぬけがらなり。たとひ富士の山を張りぬくとも、ぬけがらとなりては益なし。これ等は別して、若い人によき戒めの見世物なり。

「六足の駕」四ツあしの火燵よく足をあたゝめ、三足の五徳よく土瓶を載せるとは、博物誌にも見えたるが、六足の駕とははてめづらしいナア。

人の心の見世物

看板付表向は満足にうまれ付きても、心の片は者が多し。人の心が目に見ゆる物ならば、よき見世ものなるべし。親の生みつけたる體の片ははゞやべむからず。心の片は者は我が手になほされる者なれば、心を付けてなほすべし。

看板にいつはりなしと云へども、いつはり多きは人の心なり。看板付は立派に見えても、心の内へ這入つて見ればあいその盡きるが多し。人の善悪は看板付見かけのよし悪しによらず。看板付をあてにはせず、心はゆるしがたし。

心は髪より細く、その心持がこまやかければ、世の中を自由に渡る事ありけれ。心の心持さへ宜しければ、たとひ容貌の不細工なる[illegible]心安く渡るべし。

心と云ふものは何にまかせても、兎角動きたがる物なれば、心をよく落付くやうにすべしと、物に譬へ[illegible]賢き人の心は、曲物のやうに常に心は[illegible]落ち[illegible]べし。

「人の心は品によりて悪しくはなりやすし。油斷すべからず」

「一寸足の心は[illegible]退く事なし。一生立ちすくみの心なり。」

「兩頭の心は心が二ツありて、一ツは東へ行かうとする、一ツは西へ行かうとして、あれこれと心定まらず。これ心の片はものなり」。

「顏かたちは人にて、四ツあしの心もあり。」

「下品一等のかれらひ、心にひずみの無い所へ、お氣を付けられませう引。どつと譽めたり〳〵。」

作者の見世物

「看板つきがあてにならぬといふついでに、お目にかける見世物あり。此の作者の看板付は、沈金彫の蒔枕にもたれ、花色木綿の襟に這入つた、茶表紙の本をひねくつて、文人くさく見ゆれども、心の内へ這入つて見れば、そろ盤ぱち〳〵にて、大の俗物なり。

「康頼が寶物集にも書き落した寶はそろばん玉なりや。卞和が玉にもまさつて、商人の家には是れに越す寶はないと。名玉々々。」

昔男生得這奇的見勢物語　終

敵討蚤取眼

曲亭馬琴作
北尾重政畫

序

東西々々、むさうはござりますれど、是れより御披露仕ります。去年わたくしども寄り合ひ、ふつゝかな[illegible]物御覧に入れましたる所、御意に叶ひ、當年も[illegible]、作の後編を御望みに付き、[illegible]あへず古人[illegible]に載せたる[illegible]蚤の[illegible]十七句のこゝろを、其の儘十五丁に綴[illegible]、[illegible]もなく、[illegible]、[illegible]なら[illegible]蚤の[illegible]たると[illegible]の蚤[illegible]、[illegible]に御潰しなく、ヤレソレ飛んだよいのみと、[illegible]、[illegible]上げ奉ります。其の鬪の半丁さやう。

寛政辛酉稗史
一販四種之一

著作堂馬琴述

[illegible]

發端　蟲しらみ窓の螢にかたるなり　其角

作者馬琴、戯にしらみ蟊記と云ふ稗史を著はしたる處に、幸ひにして頗る評判よく、今年も味をしめて、其の後編を案じ居たるに、頃は卯月の初めつ方、風暖かき宵の間に、庵の扉を叩く者あり。誰そや來臨か茶話蟲かと、立ち出でて見れば虱なり。馬琴もぞつとせしが、折角來たものを潰されもせず、恐々内へ入れて樣子を聞けば、虱の曰く、「今日日柄もよければ蚤と入れ替りますれば、鳥渡お近づきの爲連れて參りました。以來私同然にお目掛けられて下さりまし」と、酒屋の若者が得意談のやうな口上を聞くもをかしく、忽ち趣向が胸へ浮んで、直に虱の後編を書きかゝる。

第一回　蚤につく狐はなれて虱かな　白雉

木槿の花も既に青葉の夏木立となり、奉公人も居馴染む頃、雁は常磐國へと旅立ち、燕と入れ替るなり。これ等は詩にも作り歌にも詠めど、虱と蚤の入れ替りは古事古歌にも聞き及ばねど、虱は寒氣を好むものゆゑ北の方へ歸るに違ひはなく、蚤も燕と同じやうに、軒のつまに巣は食はねど着物の襟から腰を食ふ。歸る虱に來る蚤は、切れた天德寺と紙帳を背負ひ、着物のまちの眞中で行き逢ふあり

樣、何公人の出替りの如くなれど、蚤と虱は出入[illegible]、[illegible]相應な身體にありつく。

「蚤は足が遅い故、道中に日數がかゝりまする。さうして此[illegible]御寛[illegible]天徳寺へ納まりまし、千手觀音のお體[illegible]だ。」

蚤「今日は日[illegible]よいと見えて[illegible]もたれました。蝿は山の手、蚊は本所へ落付いたさうで御座る。そして虱どのは、皮ばかりにおやつれなされて、とんともうお見違へ申しました。」

第二回　富士の山蚤が茶臼の覆ひかな　[illegible]を

小町[illegible]、蚤の夫婦のやうだと云ふ[illegible]に違ひなく、蚤の亭主は[illegible]、女房は甚だ大きし。尤も體の大きいだけ力も有ると見えて、毎朝寢床の[illegible]を見れば、蚤の女房が亭主を負つて飛び歩く、若し人間にかう云ふ圖な女房があらば、忽ち[illegible]太を蹈み拔くこと疑ひなし。

「己がかゝしゆ[illegible]體の大きいだけ力も強勢だ。然し此のづぶてえ出尻にしかゝちやア、[illegible]れるこつ。」

第三回　よそにさへ願ひ絶えぬや金の蚤　[illegible]

[illegible]、[illegible]よりも、もそつと堅い武士あり。[illegible]は父母の

賜なれば、少しにても身のうちへ疵を付けるは、大きなる不孝なりと云ふ聖人の教訓を守り、常々人に語りけるは、『武士たるもの蚤蚊に苦しめられ、身體に疵を付けらるゝ事、不孝の上の恥辱なり。然ればこそ忠臣藏の彌五郎が、石碑成就するまでは、蚤にも食はせぬ此の身體。』と云ひしこそ、よき武士の龜鑑なり。』と、常に蚤を防ぐこと仇を防ぐが如く、家内の者に吩咐け、蚤一疋取つたる者には錢百文あたへ、百疋取れば一分づゝ與へしゆゑ、今も金一分を百匹と云ふとかや。或日竈の前の三助、薪部屋の隅にて彼の蚤の女房を生捕り、忽ち褒美の錢百にありつき、夜鷹四杯の奢りと出かける。

『俵藤太が百足を射たる計略にならひ、人さし指へ唾を付けて何の苦も無く生捕りました。』

「出來した〳〵。當座の褒美にそれ百はずむわ。何とぼうふりを取りに歩くよりは、割がよからう。」

「ひねられても潰されても直樣生返る事を知つて居やす。然し向うの火入がちと氣障だわいなう。」

第四回　きられたる夢はまことか蚤の跡　其角

蚤の夫は眼五郎が爲に、女房を失ひけることを無念に思ひ、何卒此の憾みを報はんと、ある時眼五郎が晝寐をしたるを伺ひ、二の腕より肩頭かけ、肋より尻瘤までしたゝかに喰ひて、身體を鹿の子の如く刺しければ、さすが寐坊の眼五郎も忽ちに眼を覺し、寢筵を上けて尋ぬれど、行方は更に知れざ

りけり。

「蚤取眼左衛門とも有らう者が、斯う見くびられて喰はれちやア、もう料簡がならねえわえ。ヤア、かう云ふ内もかゆくてこたへられねえ。」

「サア取つて見やれく。此奴はなかく鬼渡しより、面白狸のきんつば焼きだわえ。」

第五回　景清もあきれし蚤のゆく方かな　子　鷹

斯くて蚤取眼左衛門も、身うちを蜂の巣の如く蚤に刺され、痒さ骨髄に徹し、足ずりをして苦しみ居たる處へ、下部の三介おくれて此に駆け来り此の體を見て、共に蚤の行方を尋ねれど無念がりたる。

「エ、放したりく、今一足早くんば、斯くまで蚤には喰はせまいものを。」

「何を云ふにも其の手では、撲くより外は御座りませぬ。」

第六回　業盛の晩鐘また蚤の聲　清　洲

扨ても蚤取眼左衛門は、昔にも似ずしたゝか蚤に喰はれ、あまつさへ数百の蚤を取り逃し、今は武士道も立たぬとて、いよいよ最期の願ひを申しければ、殿にも其の志のけなげなるを感じ給ひ、首尾よ

く御褒めなされ、御褒美として塗盆一枚、蠅取蜘一疋、蚤取薬百袋下され、首尾のよい處から御前を退るぞ馬鹿らしき。

「われとは同じ蚤の手飼の頃から喰はれ、夜々々寝すに居ればとし、蚤取眼の黒い中は、親指の爪へ血を付けずには歸りませぬ」

「早く蚤を取りおほせ、歸參の日をのみ待つて居るぞや」

「蚤の飼料のはなかけには、殿にも大きにお困りなされたが、至極安上りで、是れのみ心よい仕合で御座る」

「蚤は早く水の中へお放しなされ、お渡し申す中だん〳〵落ちさうに成つて、もちあつかひます。」

第七回　客ぶりに見送る蚤の行方かな　蓼太

斯くて眼五郎、殿様のお暇たまはりければ、一家中の面々名殘を惜しみ、思ひ〳〵にはなむけして別れの杯を汲み交し、みな〳〵一日路迄になつて立ち歸れば、眼五郎も玄關まで客を送りて、互に暇乞の口上最中、客の裾から、ふて〳〵と喰ひ肥りたる蚤一疋、飛び出して疊のへりを傳ひ行く故、眼五郎當の敵遁さじと、心は矢竹に逸れども、さすが客の前を憚り、不躾らしく取られもせず、審の

山へ入りながら、手を空しく見渡しけり。

『御亭主は、猫若が鼠のおさかなをまふみて、御覧じるが、もし押てもドりはせぬか知らぬ』

「そんな事も御座りませぬが、もしつと承りたさに、とは申すものの、心の中では早く歸つて

寝ればいい、我の蚤を取つてやらうと思つて居る

蚤口惜しくば指でも差して見ろ。コレ客の前だぞよ〳〵。」

第八回　蚤に似て押へし蟲の哀れなり　百　里

眼太郎は客の歸るを待ちかね、蟲を下に寝さはなし、蚤の行方を尋ねけるに、やう〳〵臺所の米櫃の前にて出會せ、其の頭へと飛び掛り、襟髪つかと取つて押へ、起しも立てず捻り殺せば、もろくも息は絶えにけり。猶も生まれ替り生まれ代りして大人の中へ打ち込まんと、死骸を引き上げよく〳〵見れば、コハ無残や蚤にはあらで米蟲なり。眼太郎はつと驚き、「藥よ水よ」とあせれども、はや蟲の音も通はねば、今さら詮方なし」と嘆き、塵取にて送りけり。

「コハ、是れ〳〵、己が蚤だと思ひ、ぬかつた。のみ込みの悪い手合せに」

「ねらひ叶ひはたが、押へたりと云つたやら、一寸でも遁くものか。汝はねらわるるなら跳ねて見

ろ。ふさ〴〵しい。」

第九回　投金やもろこし船に波と蚤　　朝叟

敵と思ひ込んだるより、忽ちにらみし蚤取眼五郎に、罪なき蟲を殺し陰徳を損ひしこと、後悔さらに止む時なく、是れと云ふも、米櫃の掃除を怠りしあやまちなれば、せめて米蟲が菩提の爲にとて、米櫃の底を拂ひ、蟲になりかゝつたる米を殘らず手のうちに出し、後懇に弔ひけるより、今も手のうちに出す米は、蟲になりかゝつたる米から先へ出してしまふこと、此の因縁か何だか知らず。

「米蟲と知つたなら、何の殺さう手にかけう。する事なす事いすかの横紙、ハテ味の無い世のひね米ぢやなァ。」

第十回　蚤一つ貞女に帶を解かせけり　　不知作者

此の時、蚤は猫の腹の下に隱れ居たりけるを、それとも知らず眼五郎は、蚤の行方を尋ねんと隨分濕氣深き所を心的に、何所ともなく立ち出でければ、蚤は留守を附込み、眼五郎が女房を夜晝となくいぢりければ、日頃貞女の聞えある大の堅藏女なれども、餘り苦しさのまゝ、今は是非なく、直に行水

な道やに行く、
「貝を閉たにまゐえすなどと甘い事を云つても、見きつしに己は通つてやつて彼の通つた」

第十一回　鶴頭に蚤の飛びつく日和かな　　好　春

眼を瞑る女房は、丞一世にいるものか、終に下帯を解き、姉弟に尽せる男の謂はしむるが、下僕の三作折節家根の葺をなしゐたるが、此の體を見て忽ち通を失ひ、引窓から真逆様におつこち、終に腰の骨をぶち挫きしに、田舎者の女房も生捕りたる思いなるべし。
「田舎ものと謂ひ込み頭、其ではないて、此時の日見得下おつたかと思つてました」
「實の事なれば、告も其へたのもとと云ふ、通を失ふと云ふ事は、余程苦しいと見えた」

第十二回　夏衣いまだ頭をとり盡さず　　ほ　さ　ふ

これは信用佳談は、身に緒をもして不具となり、連中の五郎兵衛、自ら嗤をくれて其顔とやつし、
思に敵をはらしも、いふ勘在郎が身に百姓の行方生の五郎を、己前には平民に及ぼせり、夢と平人と

なり、野暮無気楽さを取得にして、蚤の行方を探す身には、着類もさすが切れ布子、汗と垢との臭味にや、棲まれる蚤はたまらねど、只管頭に責められて、腹も背中もぼり〳〵と、搔けば破れる数ヶ所の手疵、無慙とこそは言ふも余りあり。

「斯うして一晩、きやつが下帯に敷寝、まつくさきます。さしあたら御覧じろ。」

第十二回　おそろしや丹波丹後の蚤の宿　大西半隠

天徳寺蒲団と頭も顔を縮め、蚊帳あつしといへども接足して、僧か胡麻塩にも、蚤の隠れ家はなかりけん、蚤は物置の古畳を抱き込み、「暫くかくまひくれよ」と頼みければ、元来物置の切れ畳は、毎年幾敷の畳にばかり表替へされることを無念に思ひけるゆゑ、忽ち蚤の肩を持ちて、早々とかくまひける。今も古畳に多くの蚤の居ることも、此の理窟なるべし。

「私もこなさんを隠まふからは、一畳けんめいだ。野郎は安くつても、琉球まで通つた男でえす。」

「兎角おまへの切れた床を、お礼蚤申すより外は御座りませぬ。」

「今宵までのおまふ、蚤介々々。」

第十四回　古家や壁に潜まる雨の蛩　　江戸 [illegible] 文

神夏三伏の暑き日に、蛩の行方を尋ねあぐみ、流石の蛩取眼左衛門も今は詮方なく、暫く借る家へ立歸り相變らず住れしが、夏の日のことなれば、夕立雨を突く如く降り來り、何時しか雨戸も締切られたれども、古疊二三疊敷るばかりに濡れければ、是れは所詮役に立たぬ疊なりとて、三助に言附け臺所へ揚げさせけるに、蛩の様子にや、彼の蛩は古疊に隠れしのだれ、今は自由に身動きならず、せめて壁の表へ這ひ出て、穴の裏へ隠れんとする處を、眼左衛門[illegible]へ行きし歸りに見出され、棚の下で彼の有様となる。

「アヽラ怪しやと云ひは云つたが跡が出ねえ。」

「是じやアほんとうに、蛩に化けてやちやアつまらねえから、いつそせりふ無しに無言の立廻りで、つらまへようわえ。」

斯う云ふ心は、いつしか蛩取眼左[illegible]と見えて、[illegible]をはだけ、[illegible]

蛩こそ[illegible]

[illegible]

第十五回

蚤飛ぶや指にはたらく御曹司　三州　白雪

塗師にはまるや蚤の運の末　大津　尚白

さる程に、蚤取眼左郎はこたびの一心にて、やう〳〵と目指す敵の蚤一匹を、古暦の表にてつらまへければ、此の上は作法の如く敵討あるべしとて、十間四方に矢来を結ひ廻し、矢来の外には蚤の這ひ出る所もなく見物の諸集を立たせ、殿よりも検視の役を立てられければ、眼左郎は随分と身軽に出立ち、君より賜はつたる取持と塗盆を左右にたばさみ、矢来の真中へ歩み出で、彼の蚤を捨へりはなし蚤をさゝえんと突掛くれば、蚤はさこそれよじとかい潜り、飛鳥の如く飛び廻り、眼左郎が瘦臑へしがみ付かんと来る所を、得たりや応と引つ外し、蚤取薬の目潰しにて塗盆の中へ討ち落し、親指の爪を以て発矢と潰す音高く、矢来の外まで聲を上げ、一段と取つたり潰したりことと、感ずるものはなかりけり。

斯う蚤の曲が上手に成つちやア、馬鹿囃子の潮吹にも出られさうなものだ。

右に述べたるおとなしごとは、痴人夢を語るに似たりと雖も、鶏を裂くに牛の刀を用ゐざることは、其の用の過ぎたるを嫌ふが故なり　總て己に對應せざるものを相手にするは、匹夫の勇にして甚だ卑し。若し勇ありて智なき時は、心の儘の蚤取眼も、却つて見えぬことの多ければこそ、寔の蚤は

取ることなかなし。名利は犬の背の蚤の如く、逐ひ得る事あれども、煩惱は頭の上の蠅の如く、拂へどもまた來る。凡人皆かくの如し。爰の道理を辨へて、理想一つを守るべく、子々孫々までめでたし。

敵討蟹眼 卷

黄表紙集

大尾

昭和二年六月十五日印刷
昭和二年六月十八日發行

（非賣品）

近代日本文學大系

第十二卷

編輯兼發行者　東京市麴町區内幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社

右代表者　東京市麴町區内幸町一丁目六番地
野中次郎

印刷者　東京市本所區番場町四番地
井上源之丞

印刷所　東京市本所區番場町四番地
凸版印刷株式會社本所分工場

發行所　東京市麴町區内幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社

電話銀座　七八三番
二一八八番
三六八六番

振替東京五二二九八番

